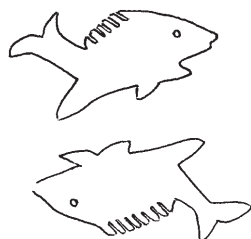


(財)大阪府文化財センター調査報告書 第184集

茨木市

玉櫛遺跡Ⅲ

大阪府営茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書



2008年12月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第184集

茨木市

玉櫛遺跡Ⅲ

大阪府営茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

茨木市に所在する玉櫛遺跡は、淀川右岸の三島平野西部に立地する遺跡です。西側に東奈良遺跡が展開しているのをはじめ、北側の北摂山地南麓には紫金山古墳、太田茶白山古墳等の古墳が築かれており、数多くの文化財に恵まれた地域と言えるでしょう。

玉櫛遺跡は、府営住宅の建て替えに伴い、1990年度に大阪府教育委員会が実施した試掘調査により、発見されました。その後、大阪府教育委員会が2次（1991・1992年度）、財団法人大阪府文化財調査研究センター（現財団法人大阪府文化財センター）が4次（1995・1997・2000・2001年度）の発掘調査を行ってきました。その結果、古墳時代の集落跡、平安時代中期の条里型水田、平安時代後期～室町時代の集落跡等が検出され、その成果は概要報告書、調査報告書の刊行により、一般に公開されています。

本書で報告するのは、2006年度に実施した、大阪府営茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査の成果です。大阪府教育委員会が発掘調査を開始してから第7次の調査にあたり、これまでの各遺構面の調査成果に新たな知見を加えることができました。

特に、古墳時代の木製鞍が出土したことは、この地の開発が本格的に始まったと考えられる当該期の遺跡の性格を考えるうえで大変重要であり、貴重な資料が加わったといえます。また、既往の調査ですでに多大な成果があがっている中世についても、遺跡北東部においてはじめて、大規模な溝群とともに掘立柱建物群、井戸群といった集落の中核を構成する遺構群を確認することができました。これにより、玉櫛遺跡に展開する中世集落をより広い範囲で捉えることが可能となりました。

最後になりましたが、調査に際し、大阪府教育委員会、大阪府住宅まちづくり部、茨木市教育委員会、地元自治会をはじめ、皆様にご援助いただきましたことに感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの文化財調査に一層のご理解とご協力をお願いする次第です。

2008年12月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府茨木市に所在する玉櫛遺跡（たまくしいせき）の発掘調査報告書である。今回の調査区は玉櫛2丁目に位置し、調査名は玉櫛遺跡06-1である。
2. 現地調査は、府営茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う玉櫛遺跡発掘調査として、大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課から財団法人大阪府文化財センターが平成18年4月1日～平成19年3月30日の間委託を受け、平成18年4月14日～平成19年2月28日に実施した。整理作業は、府営茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う玉櫛遺跡遺物整理として、平成19年4月2日～平成20年3月31日、及び府営茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う遺物整理（その2）として、平成20年9月16日～12月26日の間委託を受けて実施し、平成20年12月26日、本書刊行をもって完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

平成18年度 調査部長赤木克視、中部調査事務所長小野久隆、調査第一係長松岡良憲、班長宮崎泰史、技師信田真美世、専門調査員赤松佳奈 調整課長田中和弘

平成19年度 調査部長赤木克視、中部調査事務所長小野久隆、調査係長松岡良憲、主査片山彰一〔写真〕、技師信田真美世、専門調査員赤松佳奈 調整課長田中和弘

平成20年度 調査部長赤木克視、中部調査事務所長兼調査係長寺川史郎 調整課長田中和弘
4. 調査にあたり、茨木市教育委員会、地元自治会、下記の方々をはじめとする各機関、諸氏にご指導ご協力を賜った。深く感謝いたします。

赤田昌倫（京都工芸繊維大学大学院）、神谷正弘（高石市教育委員会）、佐久間盛行・鳥井健价（玉櫛住宅連合自治会）、積山 洋（大阪歴史博物館）、千賀 久（奈良県立橿原考古学研究所）、中島恒次郎（太宰府市教育委員会）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、西田善一（茨木市文化財愛護会）、森村健一（堺市教育委員会）、免山 篤（茨木市文化財保護審議委員）
5. 石器、石製品等の石材鑑定・分析は、京都教育大学名誉教授 井本伸廣氏に依頼した。
6. 木材、木製品の樹種同定、種実同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 木製品、金属製品、動物遺存体は、当センター山口誠治、岩立美香、橋本俊範が保存処理を行っている。
8. 本書の執筆分担は、「第3章調査成果 第3節第2項1. 450溝」の短刀について、「同 2. 464井戸」の遺構について、「同 第7節第2項2. 940土坑」の木製鞍について、「第5章総括 第1節第2・6項」の木製品についてが赤松、「第4章自然科学による同定 第1節木製品の樹種同定および種実同定」がパリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦・松元美由紀、「同 第2節動物遺存体」が宮崎、その他が信田である。なお、木製品については、全般的に赤松の観察に基づいている。また、石神幸子（石器、石製品、木製品）、岡本圭司・降矢哲男（輸入陶磁器）、駒井正明・島崎久恵（瓦ほか）、新海正博（金属製品、金属製品生産関係遺物）、福岡澄男・江浦 洋・森本 徹・吉田知史（古墳時代土器）、三好孝一（短刀ほか）、向井 妙をはじめとする当センター職員の協力を得た。
9. 本書の編集は、信田、赤松が行った。
10. 本調査に関わる写真、実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、すべてm単位である。
2. 遺構図の座標は、玉櫛遺跡が世界測地系移行以前から継続して調査が行われている遺跡であることを鑑み、日本測地系（改正前）で表記した。国土座標に則った平面直角座標系、第Ⅵ座標系に準拠し、表記はすべてm単位である。
3. 遺構図に付した方位は、すべて座標北である。
4. 調査は、財団法人大阪府文化財センター 2003 『遺跡調査基本マニュアル [暫定版]』に準拠して行った。地区割の第Ⅰ・Ⅱ区画は、J 6-13である。
5. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、種類に関係なく通し番号を付した。ただし、複数の遺構の集合体である掘立柱建物と柱列、ピット列には、別途に番号を設定した。
7. 遺構実測図の詳細は以下の通りである。
 - ・縮尺は、各図のスケールに明記している。建物、柱列は原則1/60（大形のもの等は1/80、1/100）、井戸は1/20、1/40である。
 - ・断面位置は、「—」または「L」によってその位置を示した。
8. 遺物実測図・拓本の詳細は以下の通りである。
 - ・縮尺は、各図のスケールに明記している。土器、土製品、瓦、木製品、石製品、金属製品生産関係遺物が1/3、石器（敲き石以外）、金属製品が1/2、銭貨が1/1である。ただし、金属製品のうち釘は1/1、土器、木製品のうち大形のもの1/6とした。
 - ・各遺物実測図の右下に、その種類を示している。略称は、回-回転台土師器、黒A-黒色土器A類、瓦-瓦器・瓦質土器、須-須恵器、緑釉-緑釉陶器、灰釉-灰釉陶器、常滑-常滑焼、瀬戸-瀬戸焼、備前-備前焼、唐津-唐津焼、輪陶-輸入陶器、漆-漆器である。土器で無記入のものは、土師器または弥生土器である。
 - ・土器・陶磁器実測図の直線は、実線が強い稜線、1箇所を開けた線が調整の境界、2箇所を開けた線が調整の単位の境界または弱い稜線を表現している。
 - ・木製品の木取りは、断面図内に木目を模式的に図示することにより表現している。
 - ・漆器碗・皿の実測図は、赤色の部分を色刷り（赤色）で表現している。
 - ・番号は、実測図掲載順の通し番号である。図版にのみ掲載しているものは、実測図の最終番号に続く番号を付した。
9. 掲載遺物一覧表の法量は、（ ）を付したものは復元値、〈 〉を付したものは残存値である。
10. 「第3章 調査成果」の各遺構の項における遺物についての記述は、掲載遺物に限らず、出土した遺物すべてを対象としたものである。
11. 写真図版の縮尺は統一していない。
12. 遺物の時期を決定する際に使用した参考文献は、「第2章 調査の経緯、経過と方法 第2項調査の方法」に記している。

目 次

序文

例言・凡例

目次

第1章 位置と環境	1
第1項 自然環境	2
第2項 歴史環境、既往の調査	2
第3項 遺跡の立地する地域	5
第2章 調査の経緯、経過と方法	
第1項 調査の経緯、経過	9
第2項 調査の方法	9
第3章 調査成果	
第1節 基本層序	11
第2節 第1～4面（第1～4層） - 中世末以降の耕作面 -	14
第3節 第5面（第5・6層） - 13世紀中葉～15世紀前葉の集落面 -	
第1項 層序と地形	20
第2項 遺構と遺物	
1. 大規模溝群	20
2. 西半	48
3. 東半	66
第4節 第7面（第7～9層） - 11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉の集落面 -	
第1項 層序と地形	97
第2項 遺構と遺物	97
第5節 第10面（第10層）	
第1項 層序と地形	127
第2項 遺構と遺物	127
第6節 第12面（第11・12層） - 10世紀後葉の水田面 -	
第1項 層序と地形	129
第2項 遺構と遺物	129
第7節 第15面（第15層） - 弥生時代前期～古代の遺構面 -	
第1項 層序と地形	132
第2項 遺構と遺物	
1. 弥生時代	132

2. 古墳時代～古代	135
第4章 自然科学による同定	
第1節 木製品の樹種同定および種実同定	159
第2節 動物遺存体	165
第5章 総括	
第1節 今回の調査(06-1地区)	
第1項 第1～4面 中世末以降の耕作面	167
第2項 第5面 13世紀中葉～15世紀前葉の集落面	167
第3項 第7面 11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉の集落面	171
第4項 第10面	172
第5項 第12面 10世紀後葉の水田面	172
第6項 第15面 弥生時代～古代の遺構面	172
第2節 玉櫛遺跡の調査	
第1項 縄紋時代	174
第2項 弥生時代	174
第3項 古墳時代～古代	174
第4項 10世紀後葉	175
第5項 11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉	176
第6項 13世紀中～後葉	176
第7項 14世紀前～中葉	177
第8項 14世紀後葉～15世紀前葉	178
第9項 15世紀以降	178

挿 図 目 次

図1 玉櫛遺跡の位置(1/300,000)	1	図11 第4層 出土遺物	18
図2 遺跡周辺地図(1/50,000)	3	図12 側溝等(第3～5層)出土遺物	19
図3 既往の調査区	9	図13 第5面 平面図	21
図4 地区割(第Ⅲ・Ⅳ区画)	10	図14 70溝上層 出土遺物(1)	22
図5 土層図(1)	12	図15 70溝上層 出土遺物(2)	23
図6 土層図(2)	13	図16 70溝 平面・断面図	23
図7 第3・4面 平面図	15	図17 70溝下層 出土遺物	24
図8 第1層 出土遺物	16	図18 107・450溝 平面・断面図	25
図9 第3層 出土遺物	16	図19 107溝上層 出土遺物(1)	26
図10 61井戸、63溝、69土坑 平面・ 断面図	17	図20 107溝上層 出土遺物(2)	27
		図21 107溝下層 出土遺物(1)	28

図22	107溝下層 出土遺物 (2) ……………	29	図60	第6層(西半)出土遺物 ……………	65
図23	450溝 平面図 ……………	30	図61	第5面東半 平面図 ……………	67
図24	450溝杭列等 立面図 ……………	31	図62	建物1、柱列4 平面・断面図 ……	68
図25	450溝上層 出土遺物 (1) ……………	32	図63	建物21 平面・断面図 ……………	69
図26	450溝上層 出土遺物 (2) ……………	33	図64	第5面東半柱穴(建物21含む) 平面・断面図 ……………	70
図27	450溝上層 出土遺物 (3) ……………	34	図65	建物1・21、76柱穴 出土遺物 ……	71
図28	450溝上層 出土遺物 (4) ……………	35	図66	103井戸 平面・断面・立面図 ……	72
図29	450溝上層 出土遺物 (5) ……………	36	図67	103井戸 出土遺物 ……………	73
図30	450溝下層 出土遺物 (1) ……………	37	図68	568井戸 平面・断面・立面図 ……	74
図31	450溝下層 出土遺物 (2) ……………	38	図69	568井戸 出土遺物 (1) ……………	75
図32	450溝下層 出土遺物 (3) ……………	39	図70	568井戸 出土遺物 (2) ……………	76
図33	450溝下層 出土遺物 (4) ……………	40	図71	584井戸 平面・断面図 ……………	77
図34	450溝下層 出土遺物 (5) ……………	41	図72	584・1096井戸 出土遺物 ……	78
図35	450溝最下層 出土遺物 ……………	42	図73	1096井戸 平面・断面図 ……	79
図36	465溝 平面・断面図 ……………	43	図74	529溝 断面図 ……………	80
図37	465溝上層 出土遺物 ……………	44	図75	529溝 出土遺物 ……………	80
図38	465溝下層 出土遺物 (1) ……………	45	図76	560溝 平面・断面図 ……………	81
図39	465溝下層 出土遺物 (2) ……………	46	図77	560溝 出土遺物 (1) ……………	82
図40	465溝最下層 出土遺物 ……………	47	図78	560溝 出土遺物 (2) ……………	83
図41	第5面西半 平面図 ……………	49	図79	560溝 出土遺物 (3) ……………	84
図42	建物10、柱列5 平面・断面図 ……	50	図80	560溝 出土遺物 (4) ……………	85
図43	建物11～13 平面・断面図 ……	51	図81	560溝 出土遺物 (5) ……………	86
図44	建物13 出土遺物 ……………	52	図82	560溝 出土遺物 (6) ……………	87
図45	建物14・15 平面・断面図 ……	53	図83	576溝 出土遺物 ……………	88
図46	建物16・17 平面・断面図 ……	55	図84	593ピット、1164土器集積 平面・断面図 ……………	89
図47	建物18、柱列6・7 平面・ 断面図 ……………	56	図85	593ピット 出土遺物 ……………	89
図48	第5面西半柱穴 断面図 ……………	57	図86	1164土器集積 出土遺物 ……	90
図49	464井戸 平面・断面・立面図 ……	58	図87	その他の溝(1137溝)出土遺物 ……	90
図50	165井戸 平面・断面図 ……………	59	図88	その他のピット(583ピット) 出土遺物 ……………	90
図51	165・464井戸 出土遺物 (1) ……	59	図89	第5層(東半・A地点)出土遺物 ……	91
図52	464井戸 出土遺物 (2) ……………	60	図90	第5層(東半・B地点) 出土遺物 (1) ……………	92
図53	518溝 平面・断面図 ……………	61	図91	第5層(東半・B地点) 出土遺物 (2) ……………	93
図54	518溝、389ピット、その他の遺構 出土遺物 ……………	61	図92	第5層(東半)出土遺物 (1) ……	94
図55	453ピット、221・348土坑 平面・断面図 ……………	62	図93	第5層(東半)出土遺物 (2) ……	95
図56	453ピット 出土遺物 ……………	63	図94	第6層(東半)出土遺物 ……	95
図57	221土坑 出土遺物 ……………	63	図95	側溝等(第1～5層)出土遺物 ……	96
図58	348土坑 出土遺物 ……………	64			
図59	第5層(西半)出土遺物 ……………	65			

図96	第7面 平面図	98	図126	第8層 出土遺物	126
図97	第7面東半 平面図	99	図127	798ピット 断面図	127
図98	建物2・5・6 平面・断面図	100	図128	800溝 出土遺物	127
図99	建物3・4、柱列2 平面・ 断面図	101	図129	第10層 出土遺物	127
図100	建物3柱穴 平面・断面図	102	図130	第10面 平面図	128
図101	建物7、柱列1・3 平面・ 断面図	103	図131	第12面 平面図	130
図102	建物7柱穴、柱列3柱穴、635ピット 平面・断面図	104	図132	第11層 出土遺物	131
図103	柱列3 出土遺物	104	図133	第15面 平面図	133
図104	建物8・19 平面・断面図	105	図134	946溝、1013・1015土坑 平面・断面図	134
図105	建物20 平面・断面図	106	図135	946溝、1013・1015土坑 出土遺物	135
図106	建物2・3・5・7・8・20 出土遺物	107	図136	建物9 平面・断面図	136
図107	第7面柱穴 平面・断面図(1)	109	図137	837・902~907溝、901土坑 断面図	137
図108	第7面柱穴 断面図(2)	110	図138	ピット列1~7 平面・断面図	138
図109	662・675・680・683・721・833・ 1108柱穴 出土遺物	111	図139	ピット列2、985ピット 出土遺物	139
図110	602~604・614・621・639・687・ 728・746・750溝、763ピット 断面図	112	図140	895・919・922・974・976・1025・ 1026・1035・1040・1088・1094・ 1095ピット、975・1023土坑 断面図	140
図111	602溝 出土遺物	113	図141	923土坑 平面・断面図	141
図112	604・614・693・715・750・1129・ その他の溝 出土遺物	115	図142	923土坑 出土遺物(1)	142
図113	692・693・715溝 平面・断面図	116	図143	923土坑 出土遺物(2)	143
図114	692溝 出土遺物	117	図144	926土坑 平面・断面図	143
図115	701ピット、691・720土坑、630・631・ 652土器集積 平面・断面図	119	図145	926・977・1023・その他の土坑 出土遺物	144
図116	701ピット 出土遺物	120	図146	938・939・944・977土坑 断面図	145
図117	720土坑 出土遺物	120	図147	939土坑 出土遺物	146
図118	630・631・652土器集積 出土遺物	120	図148	940土坑 平面・断面図	148
図119	831ピット 平面・断面図	121	図149	940土坑 出土遺物(1)	149
図120	831ピット 出土遺物	121	図150	940土坑 出土遺物(2)	150
図121	747落ち込み 出土遺物	122	図151	940土坑 出土遺物(3)	151
図122	建物3、その他のピット 出土遺物	123	図152	940土坑 出土遺物(4)	152
図123	攪乱 出土遺物	124	図153	940土坑 出土遺物(5)	153
図124	第7層(C地点) 出土遺物	124	図154	第12層 出土遺物	155
図125	第7層 出土遺物	125	図155	第15層 出土遺物(1)	156
			図156	第15層 出土遺物(2)	157
			図157	第15層 出土遺物(3)	158

表 目 次

表 1 柱、杭、礎板の樹種同定結果 …………… 160	表 4 木製品の遺構面別種類構成 …………… 163
表 2 木製品の樹種同定結果 …………… 161	表 5 種実同定結果 …………… 164
表 3 建築部材の種類構成 …………… 162	表 6 動物遺存体一覧表 …………… 165

写 真 目 次

写真 1 遺跡の立地する地域 …………… 7	写真 5 佐奈部神社拝殿前狛犬 (北東から) …………… 8
写真 2 弥勒堂 (南から) …………… 8	写真 6 佐和良義神社 (南西から) …………… 8
写真 3 弥勒堂内 釈迦涅槃図・ 弥勒菩薩像 …………… 8	写真 7 北川、北川橋から (南西から) …… 8
写真 4 佐奈部神社 (南から) …………… 8	

付 表 目 次

表 1 掲載遺物一覧表 (1)	表14 掲載遺物一覧表 (14)	表27 掲載遺物一覧表 (27)
表 2 掲載遺物一覧表 (2)	表15 掲載遺物一覧表 (15)	表28 掲載遺物一覧表 (28)
表 3 掲載遺物一覧表 (3)	表16 掲載遺物一覧表 (16)	表29 掲載遺物一覧表 (29)
表 4 掲載遺物一覧表 (4)	表17 掲載遺物一覧表 (17)	表30 掲載遺物一覧表 (30)
表 5 掲載遺物一覧表 (5)	表18 掲載遺物一覧表 (18)	表31 掲載遺物一覧表 (31)
表 6 掲載遺物一覧表 (6)	表19 掲載遺物一覧表 (19)	表32 掲載遺物一覧表 (32)
表 7 掲載遺物一覧表 (7)	表20 掲載遺物一覧表 (20)	表33 掲載遺物一覧表 (33)
表 8 掲載遺物一覧表 (8)	表21 掲載遺物一覧表 (21)	表34 掲載遺物一覧表 (34)
表 9 掲載遺物一覧表 (9)	表22 掲載遺物一覧表 (22)	表35 掲載遺物一覧表 (35)
表10 掲載遺物一覧表 (10)	表23 掲載遺物一覧表 (23)	表36 掲載遺物一覧表 (36)
表11 掲載遺物一覧表 (11)	表24 掲載遺物一覧表 (24)	表37 井戸枠計測表 (1)
表12 掲載遺物一覧表 (12)	表25 掲載遺物一覧表 (25)	表38 井戸枠計測表 (2)
表13 掲載遺物一覧表 (13)	表26 掲載遺物一覧表 (26)	

図 版 目 次

カラー図版 1 高麗青磁	図版 2 第 5 面 全景
カラー図版 2 輸入陶器 (1)	図版 3 第 5 面 大規模溝群 (1)
カラー図版 3 輸入陶器 (2)	図版 4 第 5 面 大規模溝群 (2)
カラー図版 4 漆器 (1)	図版 5 第 5 面 大規模溝群 (3)
カラー図版 5 漆器 (2)	図版 6 第 5 面西半 建物 (1)
カラー図版 6 鞍	図版 7 第 5 面西半 建物 (2)
図版 1 玉櫛遺跡周辺航空写真	図版 8 第 5 面西半 建物 (3)、柱列

- 図版9 第5面西半 井戸、ピット
 図版10 第5面東半 建物、柱穴
 図版11 第5面東半 井戸(1)
 図版12 第5面東半 井戸(2)
 図版13 第5面東半 溝、ピット
 図版14 第7面 全景
 図版15 第7面 建物(1)
 図版16 第7面 建物(2)
 図版17 第7面 建物(3)
 図版18 第7面 建物(4)、柱列(1)
 図版19 第7面 柱列(2)、柱穴
 図版20 第7面 溝(1)
 図版21 第7面 溝(2)
 図版22 第7面 溝(3)
 図版23 第7面 溝(4)、ピット、土器集積
 図版24 第12面 全景
 図版25 第12面 畦畔
 図版26 第15面 全景
 図版27 第15面 弥生時代溝、土坑
 図版28 第15面 建物
 図版29 第15面 ピット列、溝
 図版30 第15面 土坑(1)
 図版31 第15面 土坑(2)
 図版32 第15面 土坑(3)
 図版33 第15面 土坑(4)
 図版34 第5面大規模溝群 出土遺物(1)
 図版35 第5面大規模溝群 出土遺物(2)
 図版36 第5面大規模溝群 出土遺物(3)
 図版37 第5面大規模溝群 出土遺物(4)
 図版38 第5面大規模溝群 出土遺物(5)
 図版39 第5面大規模溝群 出土遺物(6)
 図版40 第5面大規模溝群 出土遺物(7)
 図版41 第5面大規模溝群 出土遺物(8)
 図版42 第5面大規模溝群 出土遺物(9)
 図版43 第5面大規模溝群 出土遺物(10)
 図版44 第5面大規模溝群 出土遺物(11)
 図版45 第5面大規模溝群 出土遺物(12)
 図版46 第5面大規模溝群 出土遺物(13)
 図版47 第5面大規模溝群 出土遺物(14)
 図版48 第5面大規模溝群 出土遺物(15)
 図版49 第5面大規模溝群 出土遺物(16)
 図版50 第5面大規模溝群 出土遺物(17)
 図版51 第5面大規模溝群 出土遺物(18)
 図版52 第5面大規模溝群 出土遺物(19)
 図版53 第5面西半 出土遺物(1)
 図版54 第5面西半 出土遺物(2)
 図版55 第5面西半 出土遺物(3)
 図版56 第5面西半 出土遺物(4)
 図版57 第5面西半 出土遺物(5)
 図版58 第5面東半 出土遺物(1)
 図版59 第5面東半 出土遺物(2)
 図版60 第5面東半 出土遺物(3)
 図版61 第5面東半 出土遺物(4)
 図版62 第5面東半 出土遺物(5)
 図版63 第5面東半 出土遺物(6)
 図版64 第5面東半 出土遺物(7)
 図版65 第5面東半 出土遺物(8)
 図版66 第5面東半 出土遺物(9)
 図版67 第5面東半 出土遺物(10)
 図版68 第7面 出土遺物(1)
 図版69 第7面 出土遺物(2)
 図版70 第7面 出土遺物(3)
 図版71 第7面 出土遺物(4)
 図版72 第7面 出土遺物(5)、第11層
 出土遺物
 図版73 第12層 出土遺物
 図版74 第15面 出土遺物(1)
 図版75 第15面 出土遺物(2)
 図版76 第15面 出土遺物(3)
 図版77 第15面 出土遺物(4)
 図版78 第15面 出土遺物(5)
 図版79 第15面 出土遺物(6)
 図版80 第15面 出土遺物(7)
 図版81 第15面 出土遺物(8)、第12・15層
 出土遺物
 図版82 動物遺存体

第1章 位置と環境

玉櫛遺跡は、大阪府の北東部、茨木市玉櫛1・2丁目、水尾3丁目に所在する。本書で報告する06-1調査区は、玉櫛2丁目に位置する。



図1 玉櫛遺跡の位置 (1/300,000)

第1項 自然環境

玉櫛遺跡は、大阪平野の北部、淀川右岸の三島平野に立地する。南西流する淀川から北西約3.0kmに位置し、現在の標高はT.P.6.5m前後である。

三島平野は、北は北摂山地、西は千里丘陵に限られている。北摂山地は、東は京都盆地、西は六甲山地、北は亀岡盆地にいたる、東西に長い山地である。地質学的にみると、丹波帯とよばれる古生代末から中生代前半に堆積した砂岩、泥岩、チャートなどから構成される部分と、白亜紀頃の花崗岩類（茨木複合花崗岩帯）で構成される部分からなる。山地の南縁には多数の丘陵が派生しており、先端部付近には低位・中位段丘堆積層が、丘陵基部側には大阪層群がみられる。

北摂山地から流れ出した河川は、合流しながら三島平野を南下し、淀川に注いでいる。安威川、芥川の2水系があり、平野西部に位置する玉櫛遺跡は安威川水系に立地する。遺跡の西側には茨木川、東に約1.4kmの地点には安威川が南流している。茨木川は佐保川と勝尾寺川が、安威川は東掛（とうげ）川、柏原川、下音羽川などが合流した河川である。現在、茨木川が安威川に合流している地点は遺跡以北であるが、これは1937年の河川改修で茨木川の大部分が埋め立てられた際の改変であり、以前は遺跡の南約3.0kmの地点で、南西に流れを変えた安威川に合流していた。

平野西部の遺跡周辺は、千里丘陵が控える西側の標高が高くなっており、天井川である茨木川の左岸は後背湿地となっていた。周辺地域では水害に備えて堤や縄手と呼ばれる堤防を築いていたが、1935年の2度の大洪水をはじめ、毎年のように茨木川、安威川、淀川が決壊し、甚大な被害を被ってきた。

第2項 歴史環境、既往の調査（既往の調査区 図3）

北摂山地南麓の低位段丘、中位段丘には、旧石器時代の遺跡が多数分布していることが明らかになっている。玉櫛遺跡周辺においても、高槻市郡家今城遺跡をはじめとする石器製作址が確認されている。

縄紋時代も、旧石器時代とほぼ同様の遺跡分布が想定され、茨木市耳原遺跡で晩期の甕棺墓、同徳大寺遺跡で晩期の竪穴住居が検出されている。南の沖積地においても茨木市東奈良遺跡・牟礼遺跡等で土器が出土しているが、この地域ではまだ縄紋時代の遺構の検出例が少なく、実態は明らかになっていない。玉櫛遺跡でも、3A地区で晩期の土器片が出土しているが、遺構は確認されていない。

弥生時代になると、丘陵地、沖積地ともに遺構が増加する。特に玉櫛遺跡の西側に隣接する東奈良遺跡、高槻市安満遺跡は、環濠を持つ、三島地域の拠点集落である。東奈良遺跡は、1971年に発見されて以来、発掘調査が重ねられてきた。弥生時代前期に環濠集落と方形周溝墓群が出現し、中期から後期にかけて拡大、集落は古墳時代まで続く。1973～74年の調査で出土した銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型、韃の羽口、1999年度の調査で中期中葉～後半の溝から出土した小銅鐸等、特筆すべき遺物が出土している。

玉櫛遺跡でこれまでに検出された最も古い遺構は、弥生時代のものである。3A地区で中期の水注が出土した溝が検出されていたが、今回の調査で前期の土坑を検出した。

古墳時代になると、丘陵地とその裾部に、前期から後期にわたって多くの古墳が築かれる。前期古墳には、茨木市紫金山古墳・將軍山古墳・安威0号墳・安威1号墳等がある。紫金山古墳、將軍山古墳は、全長100mを越す前方後円墳である。中期古墳には、全長226mの茨木市太田茶臼山古墳のほか、同総持寺古墳群等がある。後期古墳としては高槻市今城塚古墳が代表的なものであるほか、茨木市青松塚古墳・南塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳等がある。また、茨木市新屋古墳群・安威古墳群・長ヶ淵古墳群等の群集墳も築かれる。



図2 遺跡周辺地図 (1/50,000)

古墳時代の集落としては、平野部から丘陵上にかけて、茨木市東奈良遺跡・新庄遺跡・溝咋遺跡・郡遺跡・総持寺遺跡・宿久庄遺跡・福井遺跡・安威遺跡等がある。韓式系土器が、東奈良遺跡、溝咋遺跡、郡遺跡、安威遺跡等でみられ、特に安威遺跡では集落に伴ってまとまった量が出土している。

玉櫛遺跡では、古墳時代より開発がはじまる。F地区で検出された杭列が6世紀のものとされているほか、今回の調査区でも同時期の土坑等の遺構を検出した。8D地区と今回の調査区では掘立柱建物を検出しているが、8D地区の建物には7世紀初頭の年代が与えられている。また、6D地区と今回の調査区では、北西－南東方向のピット列と溝を検出している。

奈良時代以降、周辺地域で遺跡数が増す。茨木市内では総持寺遺跡、総持寺北遺跡、庄田遺跡、宿久庄西遺跡等で掘立柱建物等が検出されている。しかし、玉櫛遺跡では古代の遺物は散見されるものの、遺構では今回の調査区でこの時期に属するピットを検出しているのみである。

古代の行政区画では、玉櫛遺跡周辺は島下郡に属す。東の島上郡、西の島下郡、両郡の境界については、詳細が不明である。島上郡衙は高槻市川西町周辺に所在したことが明らかになっている。一方、島下郡衙は茨木市郡・郡山に推定されてはいるものの、確証は得られていない。『倭名類聚抄』には、島上郡に濃味、児屋、真上、服部、高上の5郷、島下郡に新野、宿人、安威、穂積の4郷が記載されている。茨木市史（1969）では、遺跡周辺は穂積郷に含まれるとされる。

北摂山地南麓沿いには山陽道が設置されていた。都と西国諸国を結ぶ幹線道路である。『続日本紀』によると摂津国内には和銅4（711）年、島上郡に大原駅、島下郡に殖村駅が置かれた。10世紀に編纂された『延喜式』には、草野、須磨、葦屋がみられ、前記2駅は廃止されたと考えられる。草野駅の位置は不明であるが、箕面市萱野・牧・牧落等が候補にあげられている。山陽道は、中世以後も西国街道として継承され現在にいたっている。島上郡衙跡では高槻市教育委員会の発掘調査により山陽道の遺構が西国街道に沿って検出されている。遺跡周辺では北方に約4.4kmの地点、太田茶臼山古墳の南側に西国街道が通っている。また、千里丘陵東麓には、難波京から北上し、山陽道に連結する三嶋路が通っていたと考えられている。都が長岡京、平安京に遷ると、その外港である山崎津、淀津を起点とする、淀川、三国川から瀬戸内海への水路が発展し、陸路の山陽道と併用されるようになった。これ以後、国司赴任、雑物貢上が水路に移り、山陽道の役割は縮小したといわれる。

三島地域では沖積地を中心に、条里地割が広く認められる。玉櫛遺跡周辺も開発の活発化する近年までは一面水田が広がっており、整然とした条里地割をみる事ができた。玉櫛遺跡では、10世紀の条里型水田が広範囲で検出されている。

天慶8（945）年、「志多羅神」と称する神の神輿を奉じた群衆が、西方から山城国に向かうという事件がおこった。7月25日河辺郡の方から数百人が3基の神輿を擁し、「捧幣撃鼓 歌舞羅列」して、豊島郡の方へ来、「道俗男女貴賤老少」が集まり、翌朝まで歌い舞ったのち、島下郡に向かった。29日には島上郡から岩清水八幡宮の対岸山崎郷にあらわれ、「郷々上下貴賤」が集まり、岩清水八幡宮へとわたった。道中その数が膨れ上がったといわれる群衆のなかに、山陽道に近い、遺跡周辺に住む者の姿があったことは、想像に難くない。『本朝世紀』天慶8年8月3日条は、その時人々が高唱していた「童謡」も伝えている。以下に、戸田芳実（1967）の読みを参考にしながら引用する。

「月は笠着る 八幡は種蒔く いざ我等は 荒田開かむ」「しだら打てと 神は宣まふ 打つ我等が 命千歳」「しだら米 早買はば 酒盛れば その酒 富める始めぞ」「しだら打てば 牛は湧ききぬ 鞍打ち敷け 米負はせむ」 反歌「朝より 蔭は蔭れど 雨やは降る 米こそ降れ」「富は揺み来ぬ 富

は鑢懸け 揺み来ぬ 宅儲けよ 煙儲けよ さて我等は 千年栄えて」

「志多羅」とは、拍子をうつ意。この事件については戸田氏の著書に詳しく、これを民衆運動とし、「富豪層を先頭にして中世が農村から確実に出発しはじめたことの宗教的表現」と述べている。「童謡」には、「富豪層の自信と決意、農村における自己の主導的役割の自覚と誇示が率直に表現されている」。氏のいう「富豪層」とは、9・10世紀の史料中に「富豪之輩」と記されているもので、「律令的公民の階層分解の中から、稲穀・銭貨・牛馬・用具・奴婢などの動産的富を蓄積しつつ上昇してきた大経営者であって、私墾田・私営田・私出挙・私交易など、律令体制と対立する新しい経済活動の中心的主体として活躍した地方の上層であった」。玉櫛遺跡では、10世紀に広範囲に条里型水田が展開する。上記の叙述は、遺跡や周辺地域を考える上で看過できないものと思われる。

玉櫛遺跡では11世紀後葉・12世紀前葉～15世紀前葉頃まで集落が展開する。周辺の中世集落には、箕面市粟生間谷遺跡等11世紀中・後葉に成立するもの、茨木市総持寺遺跡等12世紀中・後葉に成立するものがあるが、玉櫛遺跡では早い段階に集落が成立したといえる。いずれの遺跡でも集落に伴って土葬墓が検出されているのが特徴的である。玉櫛遺跡のように中世前期、後期を通して集落が検出されている遺跡は少なく、中世集落の変遷を考える上で重要な遺跡といえる。

玉櫛遺跡ではこれまでのところ15世紀後葉以降の集落遺構は確認されていない。15世紀までの集落が廃絶した後は、近年までみることができた条里型水田の広がる景観が形成されていったと思われる。

現在の周辺地域は、住宅、店舗等が建ち並ぶ景観である。

第3項 遺跡の立地する地域

1889年、水尾、内瀬、真砂、沢良宜浜、沢良宜西、沢良宜東の6村が合併して玉櫛村が成立した。村名は、北東約1.0kmにある式内溝咋神社の祭神の玉櫛媛命の名をとったと伝えられている。1948年に茨木市の一部になり玉櫛村はなくなったが、現在府営住宅の敷地に玉櫛という地名が残る。これは、その範囲が奈良、沢良宜東、水尾、内瀬、真砂の各大字にまたがる場所であったという理由による。

慶長10（1605）年撰津国絵図に「内瀬村 浄土寺 地下村 水尾村 小路村 真砂村」とあり、寛永－正保期（1624－48）の撰津国高帳には「水尾村〈小村四ツ有〉」とある。近世中期まで水尾、内瀬、真砂の3村を水尾村と称したが、郷的結合を残したまま3村に分村した。

水尾（みずお・みを・みずのお）は、総持寺散在所領取帳写（常称寺文書／新修茨木市史）文安2（1445）年正月17日請取分に、「壺反 定壺石壺斗 〈水尾 主原ノ〉新三郎」とみえるのが早い。弘長3（1263）年10月18日沢良宜四反田所当米并水尾大進房名田直銭請取状（勝尾寺文書／新修茨木市史）には、「水尾大進御房」がみえる。水尾村としては、外題に長享元（1487）年8月日の記載のある春日社撰州所々取帳（今西家文書／豊中市史）に、「一 〈水尾村 穂積村各月持之〉三旬御神供御白米事」とみえる。また「後法興院雜事要録」（陽明文庫／吹田市史）文明13（1481）年には「水尾村」の記載があり、複雑な領有関係があったことがわかる。鎮守は佐奈部（さなべ）神社で、ほかに素盞鳴尊神社、猿田彦神社、稲荷神社がある。浄土真宗本願寺派勝光寺は、もとは真言宗で行基の開基と伝える。

内瀬（ないぜ・ないじょ）と真砂（まさご・まなご）の鎮守も佐奈部神社である。内瀬の浄土真宗本願寺派養明山仏誓寺は、行基開基の真言宗寺院であったと伝える。真砂には浄土真宗本願寺派西方寺がある。

旧水尾村内にあったと伝えられる西方浄土（さいほうじょうど）寺は、紫雲山と号する真言宗寺院で、瑞光寺、浄楽寺、上免寺、心願寺、迦称寺、慶明寺等の子院があったという。天平9（737）年に行基が開いたとされ、明德年間（1390-94）本山高野山との間に確執が生じて衰退、天正年間（1573-92）織田信長の兵火で廃絶した。現在、水尾と内瀬の集落の間に存在する弥勒堂は、その跡に建てられたものといわれ、鎌倉時代の作と考えられる釈迦涅槃図、鎌倉時代あるいは南北朝期の作と考えられる十王図、木造弥勒菩薩像を安置、3村での管理が行われている。3村の住民は、釈迦涅槃図、十王図を、近年までは1年交替で各戸に預かり、守り続けてきた。毎年3月15日には涅槃会が行われる。

沢良宜（佐和良木、草和良宜）村は、寛治6（1092）年6月22日僧定尊田畠相博状案（東寺百合文書／平安遺文1308／新修茨木市史）に、「摂津国下郡中条佐和良木村」とあるのが初見である。また、弘長元（1261）年8月2日尼によしん田地譲状（勝尾寺文書／新修茨木市史）には、「ゆつりわたす、つのかに、しまのしものこほり、さわらきのむらのた一たん」、「維摩会先奏引付」（大乘院文書／吹田市史）所載の貞治5（1366）年9月2日の観応元年分維摩会御仏供祈物勘申状には、「不沽田・・・摂津国草和良宜村田捌町参段式佰陸拾歩」、「後法興院雜事要録」（陽明文庫／吹田市史）文明10（1478）年分には、「沢良宜村〈摂州〉〈四拾式石内廿貫文御祈所分 十石宮内卿入道給、相殘給主得分十二石〉」、戦国期頃と思われる年月日不詳摂州社領人給分等注文案（蜷川家文書）には、「春日社并興福寺領・・・沢良宜村・・・〈不知行〉」とみえ、複雑な領有関係であったことがわかる。

また、沢良宜（沢良木）荘は、建長5（1253）年10月21日の近衛家所領目録（陽明文庫／鎌倉遺文7631／新修茨木市史）に、「庄務本所進退所々・・・沢良宜〈公頼朝臣〉」とみえる。興福寺領としては、「興福寺年中行事」（大乘院文書／吹田市史）に永仁6（1298）年の奈良春日若宮祭の流鏝馬雑役を負擔した荘園として「〈沢良宜庄〉」がみえ、「略安宝集」所載の明德5（1394）年6月1日興福寺別会所下文（大乘院文書／吹田市史）に、弘長2（1262）年沙汰の寺領として「沢良宜庄」がみえる。

佐和良義神社は、式内社である。蓮花寺は、高野山真言宗で瑞光山と号し、行基の開基と伝える。安永3（1774）年の鐘銘に、応仁年間（1467-69）の兵火で堂宇が焼失とある。平安時代後期の十一面観音立像等を安置している。

真砂、沢良宜地区の南側にある北川井路（きたがわいじ）は、安威川と茨木川の合流地点で頻発する水害に対処するため、近世に掘削された排水路である。大水時に下流の神崎川の逆流を防ぐための門樋が設けられ、茨木川と安威川に挟まれた6村（水尾、内瀬、真砂、沢良宜浜、沢良宜東、沢良宜西）で構成する門樋組によって管理されていた。

主な参考文献

- 井本伸廣ほか 2005 『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅） 京都西南部地域の地質』 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター
- 茨木市史編纂委員会編 1969 『茨木市史』 茨木市
- 茨木市史編さん委員会編 2003 『新修 茨木市史』 第四巻史料編古代中世 茨木市
- 茨木市史編さん委員会編 2004 『新修 茨木市史』 第八巻史料編地理 茨木市
- 茨木市史編さん委員会編 2005 『新修 茨木市史』 第十巻別編民俗 茨木市
- 大阪府教育委員会 1993 『玉櫛遺跡発掘調査概要・I』
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998 『玉櫛遺跡』 財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第31集
- 財団法人大阪府文化財センター 2003 『玉櫛遺跡II』 財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第95集
- 大阪府教育委員会 1990 『西国・丹波街道』 歴史の道調査報告書 第6集



※1948年3月撮影 国土地理院所有 (M33-5-315) (上が北)

写真1 遺跡の立地する地域

戸田芳実 1967 『日本領主制成立史の研究』 岩波書店
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三編 1983 『角川日本地名大辞典 27 大阪府』 角川書店
平凡社地方資料センター編 1986 『日本歴史地名大系第二八巻 大阪府の地名』 平凡社
吹田市史編さん委員会 1976 『吹田市史』第4巻 吹田市
豊中市史編纂委員会 『豊中市史』史料編二 豊中市
茨木市 茨木市教育委員会 1988 『わがまち茨木-地名編-』
佐奈部農業資料館建設委員会 西田善一編 1994 『佐奈部農業資料館』開館記念パンフレット
1996 『弥勒堂』落慶パンフレット
西田善一 2007 「12 茨木のくらしと文化 堂の弥勒さん」『プリマベラ』Vol.238 茨木市農業協同組合



写真2 弥勒堂（南から）



写真3 弥勒堂内 釈迦涅槃図・弥勒菩薩像



写真4 佐奈部神社（南から）



写真5 佐奈部神社拝殿前狛犬（北東から）

「真砂村若中」文化十四(1817)年



写真6 佐和良義神社（南西から）

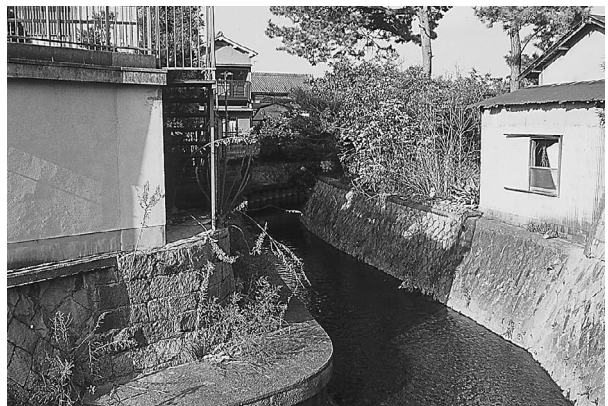


写真7 北川、北川橋から（南西から）

第2章 調査の経緯、経過と方法

第1項 調査の経緯、経過

玉櫛遺跡は、大阪府営茨木玉櫛住宅の建て替えにあたり、大阪府教育委員会が1990年度に試掘調査を実施し、新たに発見された遺跡である。その後、大阪府教育委員会が2次（1991・1992年度）、財団法人大阪府文化財調査研究センター（現財団法人大阪府文化財センター）が4次（1995・1997・2000・2001年度）の発掘調査を実施してきた。第7次にあたる今回の調査を含めると、26調査区、約12,400㎡となる。

今回の調査地は、遺跡北東部である。府営住宅整備に伴う道路拡幅のために調査を実施した、2001年度調査地東部の各調査区に近接する、住宅棟建設予定地である。調査区は1箇所、約930㎡である。大阪府住宅まちづくり部住宅整備課から、財団法人大阪府文化財センターが委託を受け、2006年度に現地調査事業を、2007年度に報告書作成事業を実施した。その間、2006年12月18日に現地公開を、2007年8月4～19日には大阪府立近つ飛鳥博物館で、木製鞍を中心とする出土遺物の展示を行った。

第2項 調査の方法

調査は、2003年度に導入された調査マニュアル（財団法人大阪府文化財センター 2003 『遺跡調査

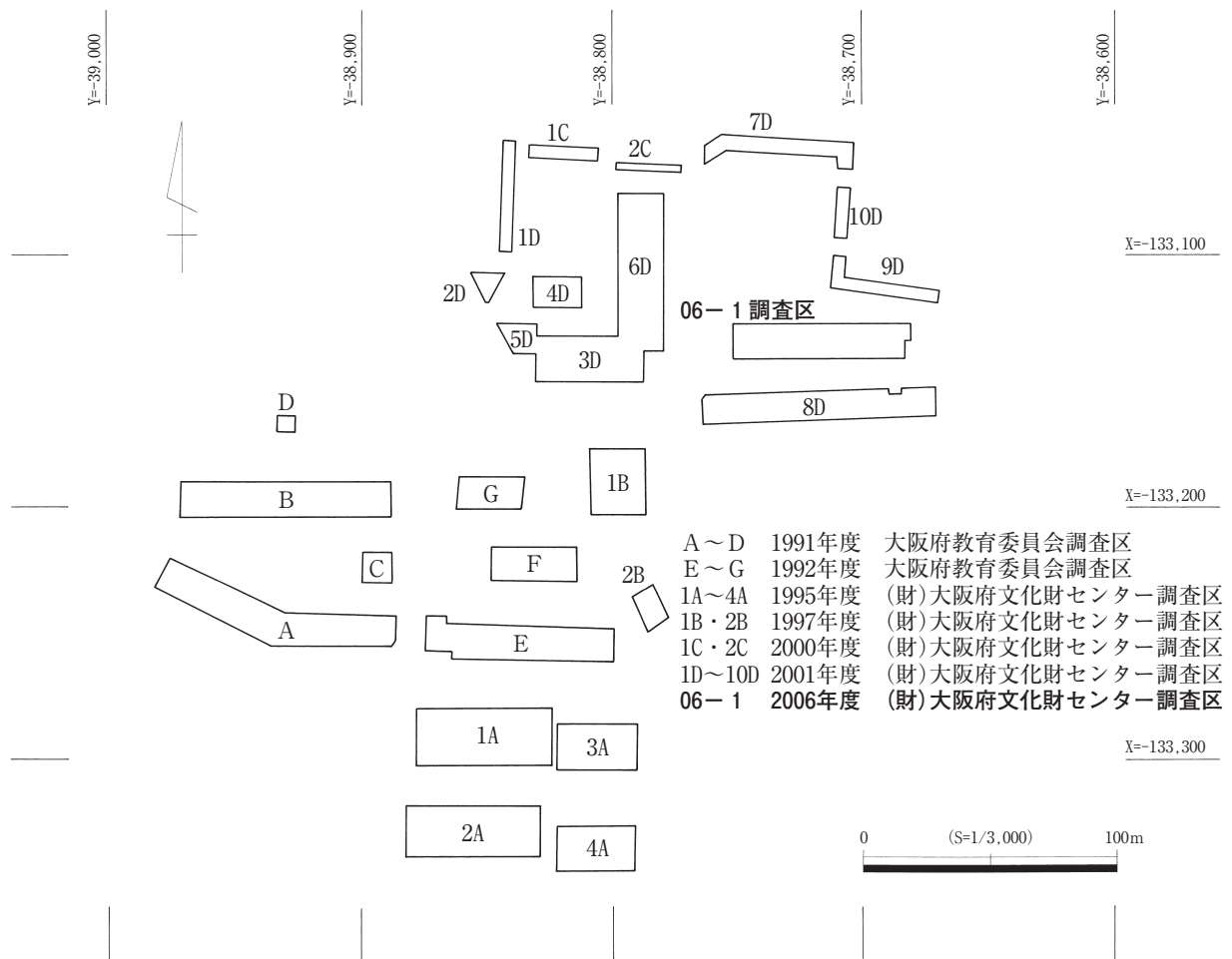


図3 既往の調査区

基本マニュアル』)に基づいて実施した。そのため、既往の調査と今回の調査では依拠するマニュアルが異なる。ただし、継続して調査が行われている遺跡であることを鑑み、座標系、地区割等は、従前から使用しているものに統一している。

機械掘削は、現代の盛土層、表土層を対象とした。

遺構面の平面図は、クレーンを使用した空中測量により、1/50で作成した。個別の遺構図、土層断面図は、空中測量と同一の測量成果を用い、実測した。測量法が改正され、2002年度より日本測地系から世界測地系へ移行したが、座標表記は従前の調査と同じ、日本測地系(改正前)とした。

遺物の取り上げ等に使用する地区割も、日本測地系(改正前)の座標軸を基準線とする、旧マニュアル(財団法人大阪文化財センター 1988 『遺跡調査基本マニュアル』)で設定されているものである。

写真撮影には、6×7カメラ(モノクロ・リバーサル)、35ミリカメラ(モノクロ・リバーサル)、デジタルカメラを使用した。

出土遺物はコンテナ190箱分である。注記は、調査区名「タマクシ2006-1」の後に登録番号である。

以下に、遺物の時期を決定する際に使用したものを中心に、参考文献をあげておく。

- 森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅱ-』 木耳社
 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』
 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
 小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究』 京都編集工房
 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
 太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』
 中野晴久 2005 「常滑・渥美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
 鋤柄俊夫 1999 「大阪府南部の瓦質土器生産」『中世村落と地域性の考古学的研究』 大巧社
 乗岡 実 2000 「中近世の備前焼播鉢の編年案」『第2回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会

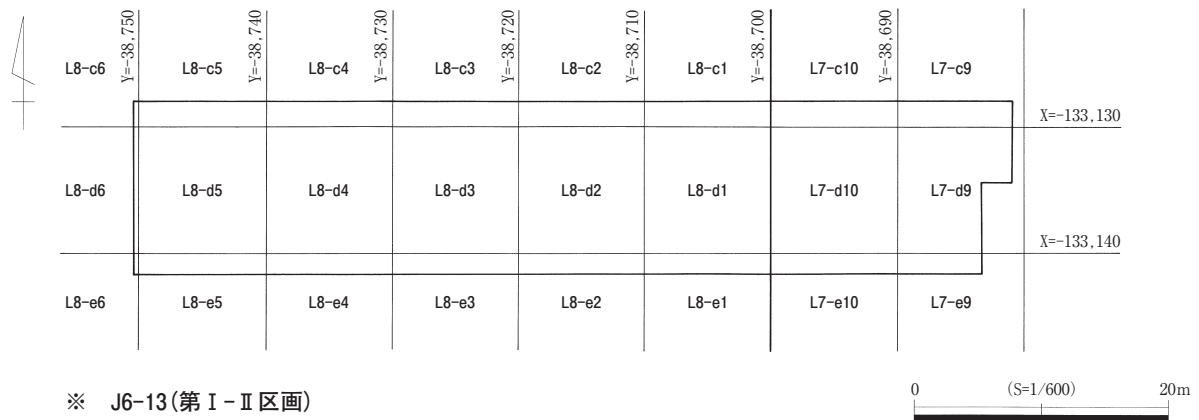


図4 地区割(第Ⅲ・Ⅳ区画)

第3章 調査成果

第1節 基本層序

機械掘削対象とした盛土層と旧表土層以下に、第1層から第15層の層準を確認した。遺構面の呼称は、その基盤となる層の名称を用いて表現（第○層上面は第○面）している。

旧表土層 府営住宅建設以前の作土層である。

第1層 近世の作土層である。

第2層 中世末の作土層である。調査区東半にのみ存在する。

第3層 中世末の作土層である。

第4層 局所的に存在する複数層（第4-1～3層と呼称）の総称である。各層が遺構面を形成していた表土層である可能性もあるが、すべて一連の整地土層であるとも考えられる。15世紀以降の層である。

第5層 原則として、調査区西半中央部に認められる細砂～粗砂の堆積層（層厚0.4m、第5b層と呼称）を母材としていと考えられる土壌化層である。西側を中心に第5層が堆積した結果、西側が高く、東側が低い地形が形成されたと思われる。広範囲に、整地土と考えられる層も存在し、第5b層堆積以降に造成が行われたと考えられる。第5面では、13世紀中葉～15世紀前葉の集落関連遺構群を検出した。

第6層 第5層ほど強く土壌化していないシルト層である。第5層とほぼ同時期の遺物を含む。

第7層 調査区東半で認められた、強く土壌化した灰色シルト層である。第7面では、11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉の集落関係遺構群を検出した。

第8層 第7層ほど強く土壌化していないシルト層である。第7層とほぼ同時期の遺物を含む。

第9層 調査区西部にのみ認められるシルト層である。第11層が東側により厚く堆積し、東側が高い地形が形成された後、西側を中心にシルト層が堆積し、ほぼ平坦な地形となったと考えられる。ほとんど遺物を含まない。

第10層 細砂～粗砂を主体とする、土壌化層である。ただし、土壌化の度合いは比較的弱い。第11層の土壌化した部分である可能性もある。

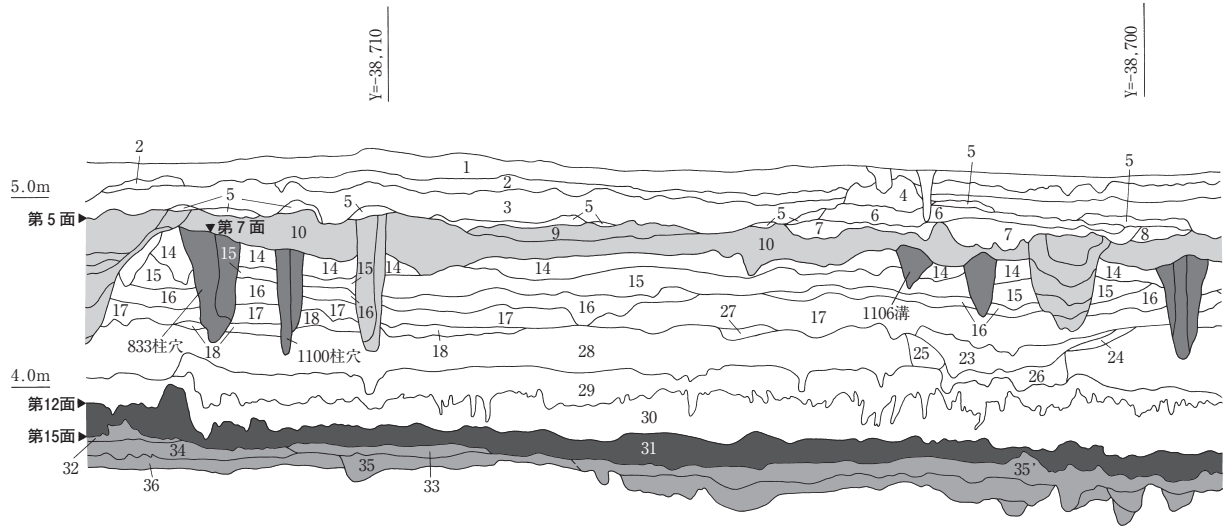
第11層 調査区東部で約1.2m、西部で約0.2mの厚みを持つ、洪水堆積層である。大部分が細砂～粗砂で、最下部は厚さ約0.2mのシルト層である。特に第11層が厚く堆積している調査区東部では、第11層が第12層、第15層を挟んでいる状況がみられる。10世紀後葉を中心とする時期の遺物を含む。

第12層 シルトの作土層である。ただし、直下の第15層が細砂～粗砂である箇所ではそのままき上げを多く含む。第12面では、畦畔を検出した。

第15層 第13・14層は欠番である。第15層は基盤層が土壌化したもので、箇所によりシルト層または細砂～粗砂層である。西が高く、東が低い地形である。第15面では、弥生時代～古代の遺構を検出した。

第15層以下 上部が第15層土壌化層の母材となるシルトまたは細砂～粗砂層、T.P.3.1m以下が粘土である。粘土層は、T.P.2.4mまで確認しており、有機物帯を縞状に含む。上層のシルト、細砂～粗砂層が堆積し、第15層の土壌が形成されるまでは、湿地状の環境であったと考えられる。遺物は出土していない。

第1節 基本層序



- | | |
|---|---|
| 1. 灰オリブ5Y6/2シルト(中砂～粗砂多く含む、シルトブロック含む)〈第1層〉 | 15. オリーブ灰2.5GY5/1シルト(粗砂含む)〈第8層〉 |
| 2. 灰黄2.5Y6/2シルト(極細砂～粗砂含む)〈第2層〉 | 16. オリーブ灰2.5GY5/1シルト(細砂、小礫非常に多く含む)〈第8層〉 |
| 3. 青灰5B5/1シルト(中砂～極粗砂多く含む)〈第3層〉 | 17. オリーブ灰5GY5/1細砂(粗砂、小礫含む)〈第10層〉 |
| 4. 黄灰2.5Y6/1シルト(細砂～粗砂含む)〈哇畔〉 | 18. 暗緑灰7.5GY4/1粗砂～小礫〈第10層〉 |
| 5. 黄灰2.5Y6/1粗砂～極粗砂〈第4-1層か〉 | 19. 灰5Y5/1シルトと粗砂の互層〈第11層〉 |
| 6. 褐灰7.5YR5/1細砂～極粗砂(小礫少し含む)〈第4-2層〉 | 20. 灰7.5Y5/1シルト～細砂〈第11層〉 |
| 7. 褐灰10YR5/1極細砂～中砂(粗砂、小礫含む)〈第4-3層〉 | 21. 灰7.5Y4/1シルト(下層に細砂ラミナ状に含む)〈第11層〉 |
| 8. 灰黄2.5Y6/2極細砂と極粗砂がブロック状に混じる | 22. 灰オリブ5Y5/2細砂(下層にシルトラミナ状に含む)〈第11層〉 |
| 9. 黄灰2.5Y5/1シルト(細砂、炭片含む、小礫少し含む)〈第5層〉 | 23. 灰7.5Y4/1シルト～細砂(ラミナあり)〈第11層〉 |
| 10. 褐灰10YR4/1細砂混シルト〈第5層〉 | 24. 灰オリブ5Y5/2粗砂～小礫(ラミナあり)〈第11層〉 |
| 11. 灰黄褐10YR4/2細砂～粗砂混シルト〈第5層〉 | 25. 灰黄2.5Y6/2粗砂混細砂(シルト小ブロック含む)〈第11層〉 |
| 12. 灰黄2.5Y6/2粗砂混シルト〈第6層〉 | 26. におい黄2.5Y6/3粗砂～小礫(シルト小ブロック含む)〈第11層〉 |
| 13. 黄灰2.5Y5/1粗砂混シルト(小礫含む)〈第7層〉 | 27. 灰黄2.5Y6/2細砂(ラミナあり)〈第11層〉 |
| 14. 灰黄2.5Y6/2シルト～極細砂(粗砂少し含む)〈第8層〉 | 28. 灰黄2.5Y6/2細砂～小礫(ラミナあり)〈第11層〉 |

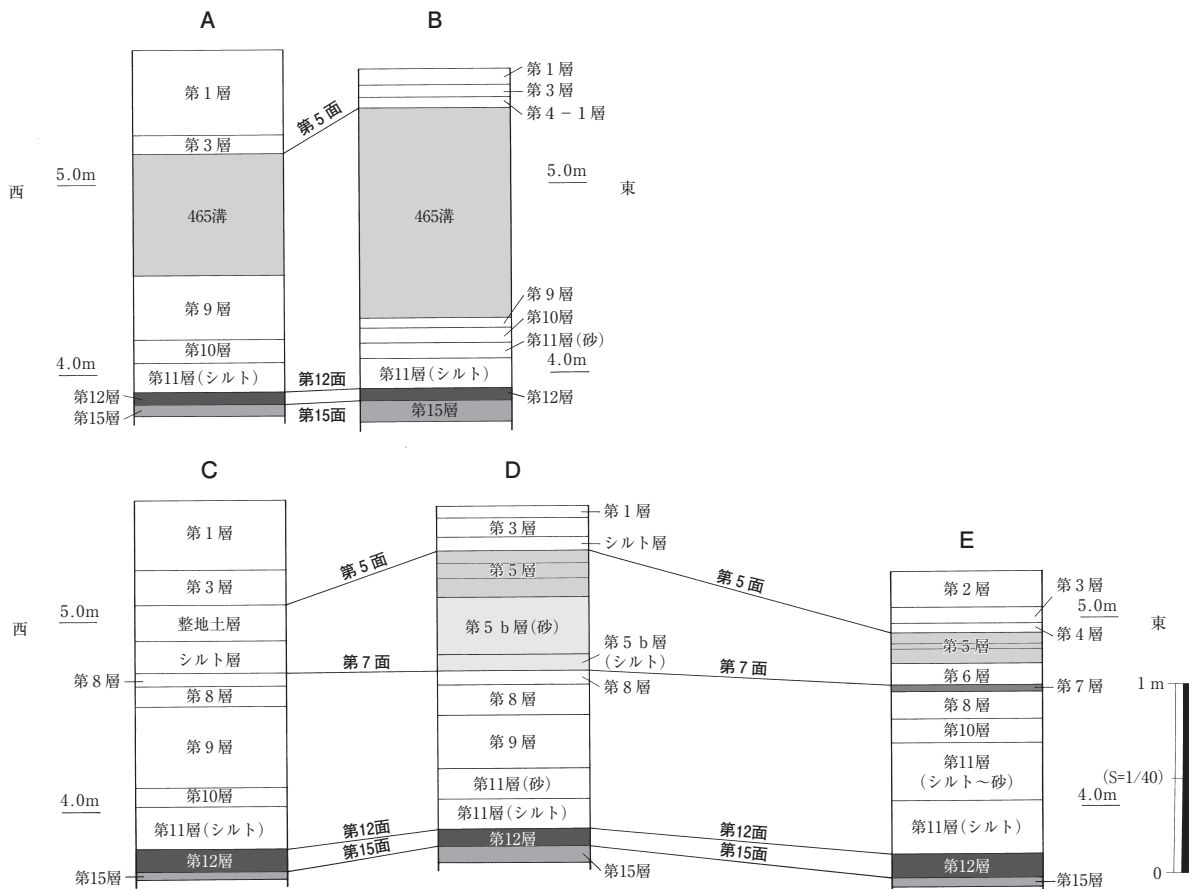
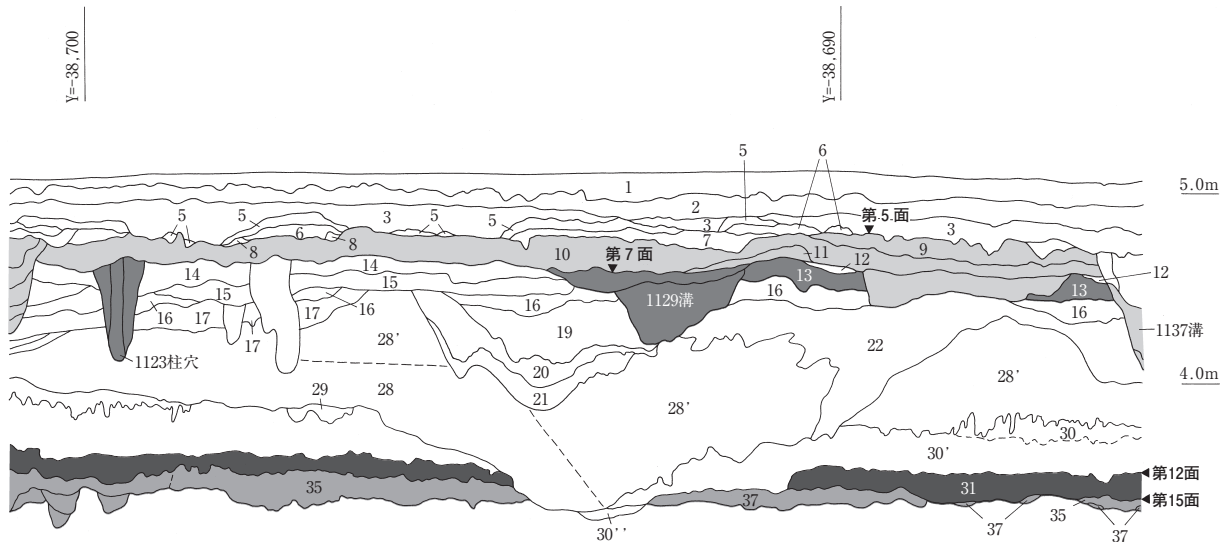


図5 土層図(1)



- 28' 灰黄2.5Y6/2細砂(上層は極細砂、下層は粗砂)〈第11層〉
 - 29. 黄灰2.5Y4/1極細砂～細砂(ラミナあり)〈第11層〉
 - 30. 青灰5B6/1粘土～シルト(細砂少し含む、第12層のまき上げ)〈第11層〉
 - 30' 30と同一層だが、第12層のまき上げ多く含む〈第11層〉
 - 30' 黒10YR2/1シルトと粗砂がブロック状に混じる
(第15層シルトと基盤層粗砂を第11層がまき上げている)〈第11層〉
 - 31. 灰褐5YR5/2粗砂混シルト〈第12層〉
 - 32. 褐灰7.5YR4/1粗砂混シルト(炭片含む)〈第15層〉
 - 33. 灰N4/0粗砂～小礫混シルト〈第15層〉
 - 34. 黒褐10YR3/1粗砂混シルト(炭片含む)〈第15層〉
 - 35. 黒10YR2/1細砂混シルト(シルトブロック含む)〈第15層〉
 - 35' 黒褐10YR3/1粗砂混シルト〈第15層〉
 - 36. 褐灰10YR4/1粗砂混シルト〈第15層〉
 - 37. 灰7.5Y4/1粗砂～小礫(シルト小ブロック含む)〈第15層〉
- ※土層番号のない層は遺構埋土

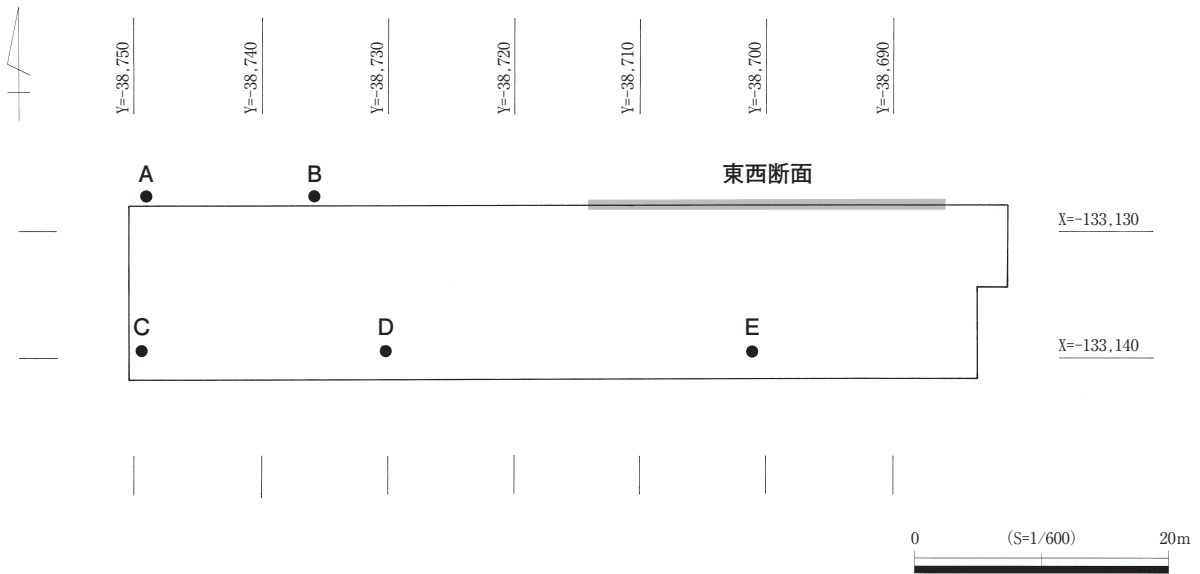
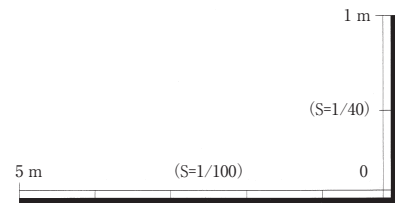


図6 土層図(2)

第2節 第1～4面（第1～4層） —中世末以降の耕作面—

第1面

旧表土層は、府営住宅建設以前の作土層と思われる。この下面である機械掘削終了面（第1面）で、この層の耕作に伴うものと思われる溝群を確認した。溝の方向は調査区東半では東西であるが、中央部分（Y=-38,717）には南北のものが認められた。

旧表土層直下の第1層は、作土層と思われる。これの下面（第2面）で、この層の耕作に伴うと思われる溝群を検出した。溝の方向は調査区東半で東西、中央部分と西半では南北である。第1層のレベルも中央部分（Y=-38,717）を境に西側が高くなっており、この部分に土地の境界が想定される。出土遺物から、近世の時期が与えられる。

第1層出土遺物（図8）

陶磁器、銭貨等が出土した。唐津焼椀（2）・皿（1）、染付細片、寛永通寶（3）等、近世のものである。

第2面

第1層を除去して検出した。ただし、第2層は調査区西半には存在しない。第3層が調査区中央部分（Y=-38,717）で段差となって東西でそのレベルを違えており、低い東半にのみ第2層が認められる。両層とも作土層と思われ、東側に第2層が堆積または客土された後も、西側では第3層が継続して機能していた可能性がある。主に東西方向の溝を検出した。中世末の耕作面と考えられる。

第2層出土遺物

詳細な時期がわかるものは出土していないが、近世のものが含まれていないため、中世末の時期が与えられる。

第3面（図7）

東半では第2層を、西半では第1層を除去して検出した。上述の通り、調査区中央部分（Y=-38,717）に段差が存在し、東西でそのレベルを違えている。調査区中央東寄りの部分（Y=-38,703.5）で南北方向の畦畔を確認した。また、畦畔西側で東西方向の浅い溝群を検出したが、この部分にのみ遺存する堆積層と思われる細砂の薄層で覆われており、第3面時の畝溝等であると思われる。中世末の耕作面と考えられる。

第3層出土遺物（図9 カラー図版1）

詳細な時期がわかるものは出土していないが、近世のものが含まれていないため、中世末の時期が与えられる。土師器皿（4）、高麗青磁（5）、政和通寶（6）等がある。

高麗青磁（5）は、外面に白黒の象嵌紋様を持つ小片である。象嵌紋様は、二重の円（復元径6.9cm）の中に花紋かと思われる紋様をおさめたものと、図式化された雲鶴紋の2種がみられる。象嵌部分にひび割れが認められるが、全体的に貫入はなく、胎土に黒（N2/0）色の粒を含む。内面は横ナデが施され、釉が流下している。内面の釉の状態等から、梅瓶等の肩部である可能性が考えられるが、遺存部分の復元径は20～25cm（梅瓶とすれば大形）で、同様の象嵌紋様が複数配置されていたと思われる。13～14世紀のものである。第5面の465溝から同一個体の可能性のある細片（197）が出土している。

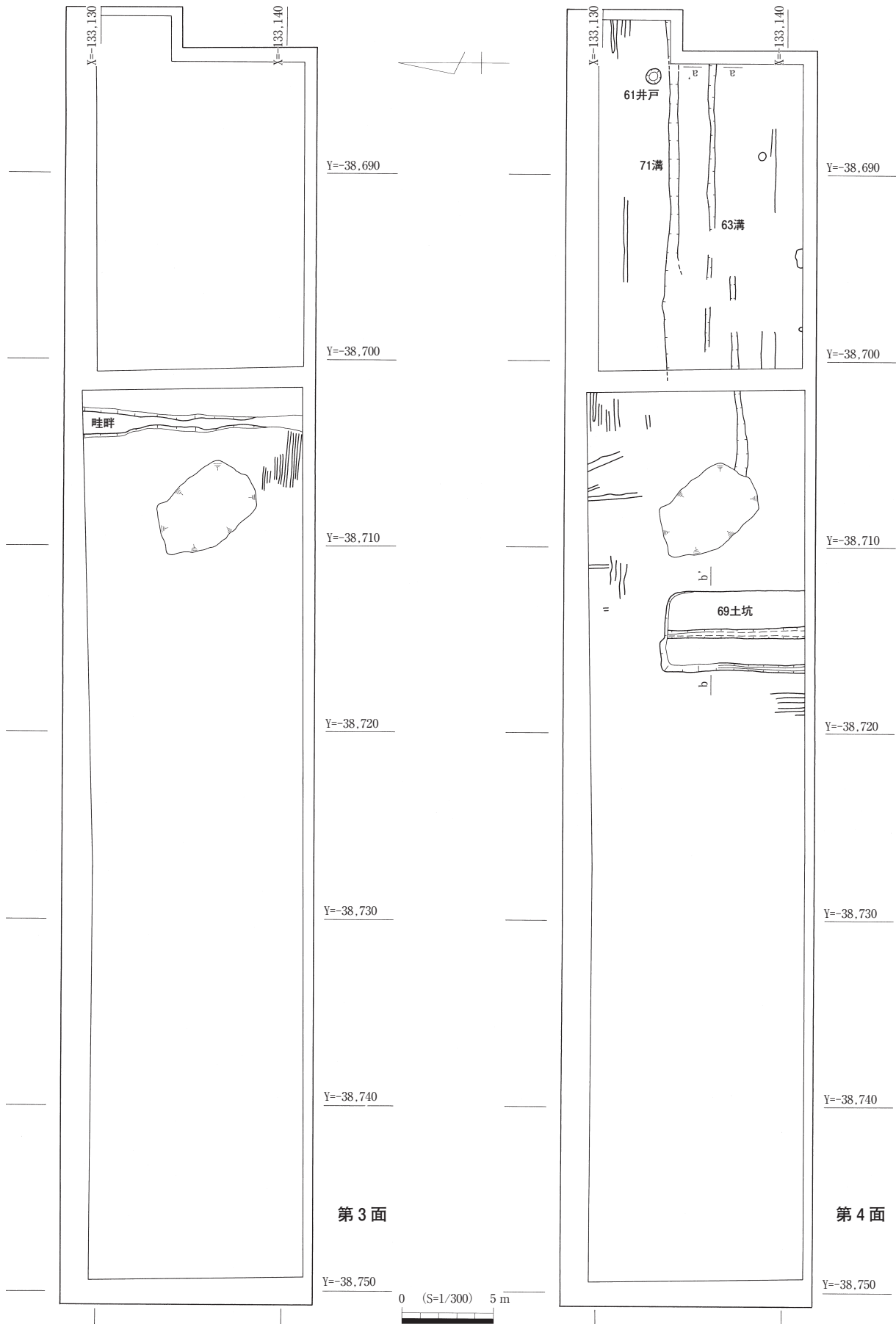


図7 第3・4面 平面図

第2節 第1～4面（第1～4層）

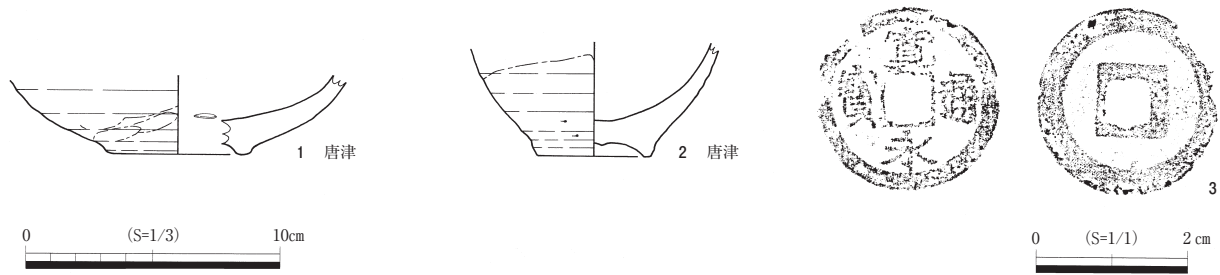


図8 第1層 出土遺物 (1/1=3)

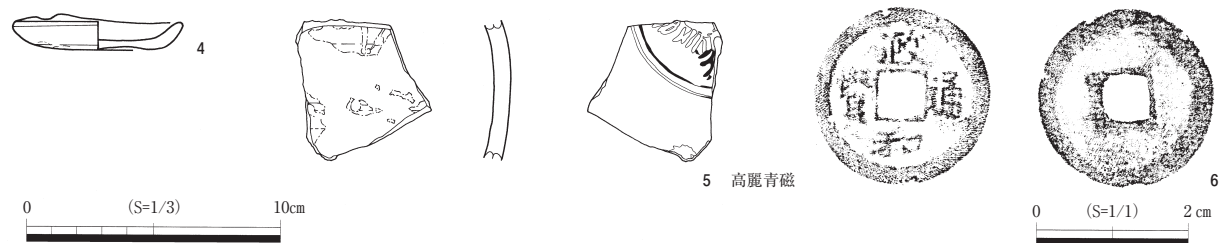


図9 第3層 出土遺物 (1/1=6)

第4面（図7）

第3層を除去して検出した。ただし、第4層は、第3層と第5層の間で確認した複数の層（第4-1～3層と呼称）を総称したものである。これらの層は層厚が数cm程度と非常に薄く、局所的に存在するのみであったため、第4層としてまとめて掘削を行った。各層が遺構面を形成していた表土層である可能性もあるが、すべて一連の整地土層であることも考えられる。これらの層の上面および下面で遺構を検出し、第4面とした。

第4面では、井戸、溝、土坑を検出した。調査区北東部の東西方向の浅い溝群は、耕作に伴うものと思われる。

61井戸（図10）

調査区北東部に位置する。平面径約0.8mの円形で、深さは約2.1mである。埋土は、上層から最下層までシルト主体のブロックで、人為的に埋め戻されたと考えられる。下部数十cmは第15面以下の粘土層に及んでおり、この粘土のブロックが埋土に多く含まれる。形状から井戸としたが、堆積層が全くみられないことから、掘削後すぐに埋め戻された可能性が高い。

遺物は、14世紀代の土師器皿、瓦器椀、須恵器甕、輸入陶器の小片が少量出土しているが、遺構の時期のものは不明である。

63・71溝（図7・10）

調査区東半に位置する東西方向の溝である。幅約0.4m、深さ約0.2mで、約2.0mの幅をあけて並行している。埋土は第4層シルト層である。

遺物は、13世紀～14世紀前半の土器小片が出土しているが、下層の第5層中に当該時期の遺物が多く含まれているため、これをまきあげたものと考えられる。71溝より備前焼甕が出土しており、これが溝の時期のものかと思われるが、小片のため詳細な時期は不明である。

69土坑 (図7・10)

調査区中央に位置する。平面形は南北7.7m以上、東西約4.4mの長方形で、深さは約0.1mである。中央に幅0.4~0.6m、土坑の底面より深さ約0.1mの、西辺に幅約0.4m、土坑の肩より深さ約0.1mの溝状の窪みがある。埋土は、シルトのブロックを含むが、細砂~極粗砂が主体である。中央と西辺の溝状の窪み部分もこの砂層で埋まっている。

遺物は、土師器小皿、瓦器、白磁碗、備前焼播鉢の小片が少量出土している。

第4層出土遺物 (図11 カラー図版2)

多くは、下層の第5層に由来すると思われるものである。土師器皿(7)、瓦器椀(9)、瓦質土器風炉か(18)、瀬戸焼折縁小皿(8)、備前焼甕(17)、輸入陶器壺(16・891・892)、白磁皿(10・11)、青磁碗(13~15)・盤(12)、石鍋再加工品(19)等がある。輸入陶器壺(16)は、外面に灰オリーブ(7.5Y 6/2)色の釉が施されており、胎土にオリーブ黒(5 Y 3/2)色の斑点がみられる。輸入陶器(891・892)は、壺等の小片である。(891)は浅黄(5 Y 7/3)色、(892)は外面に灰オリーブ(7.5Y 4/2)色の釉が施されており、ともに胎土に黒色の斑点がみられる。

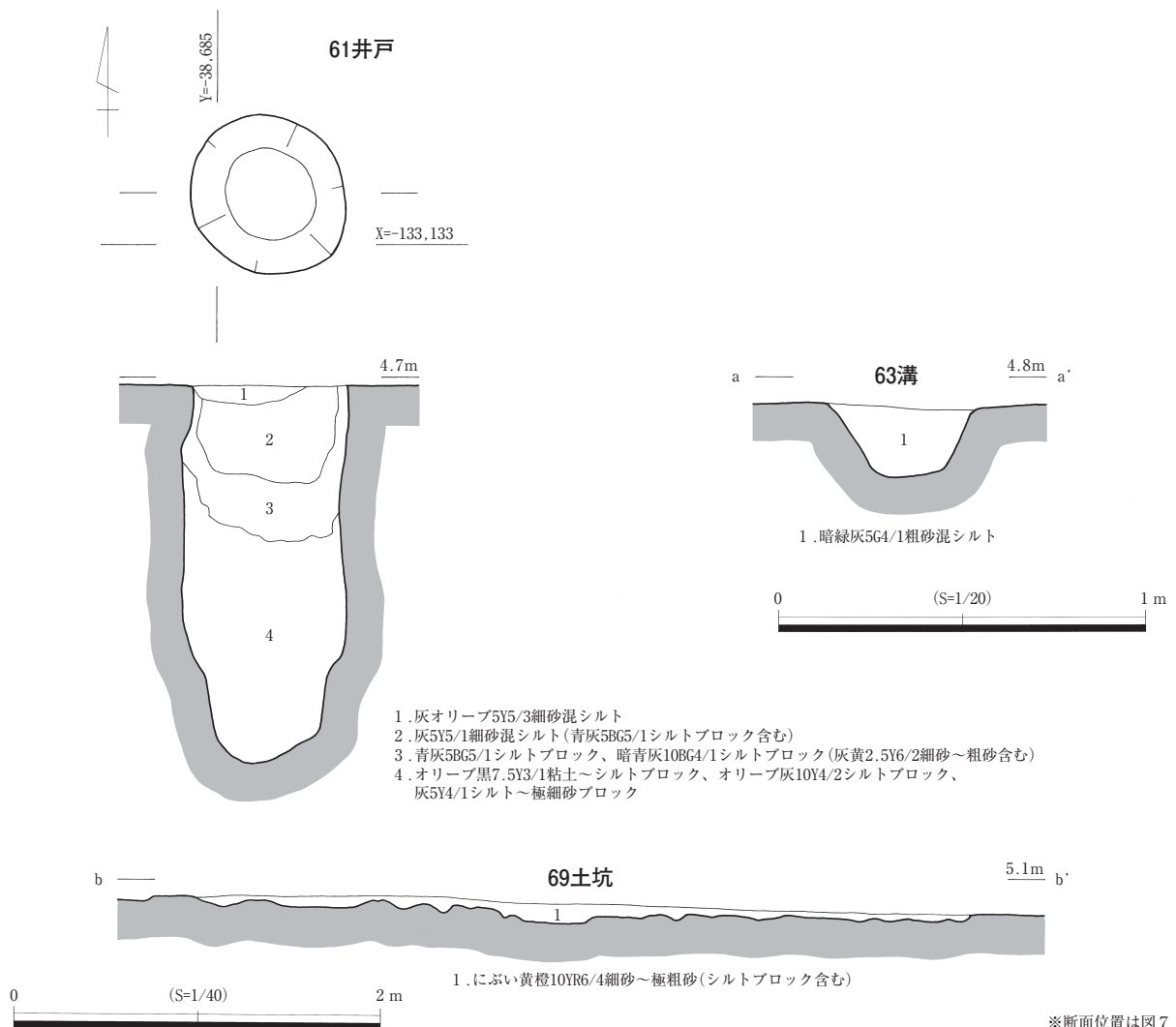


図10 61井戸、63溝、69土坑 平面・断面図

第2節 第1～4面（第1～4層）

側溝等出土遺物（図12）

側溝等からの出土で、詳細な帰属層が不明である出土遺物を図12に掲載した。小柄（20）、馬鋏歯（21）、天聖元寶（22）である。

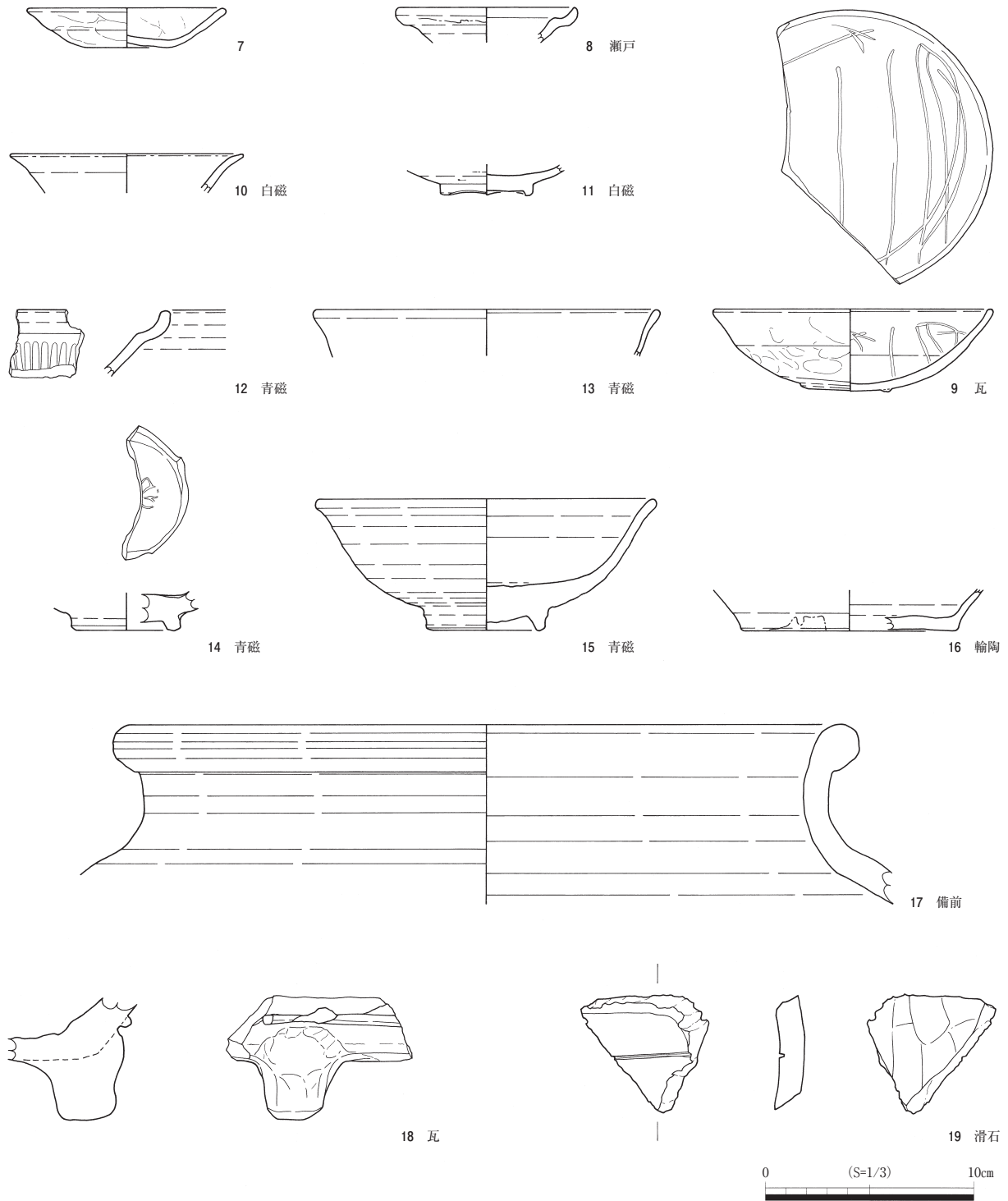


図11 第4層 出土遺物

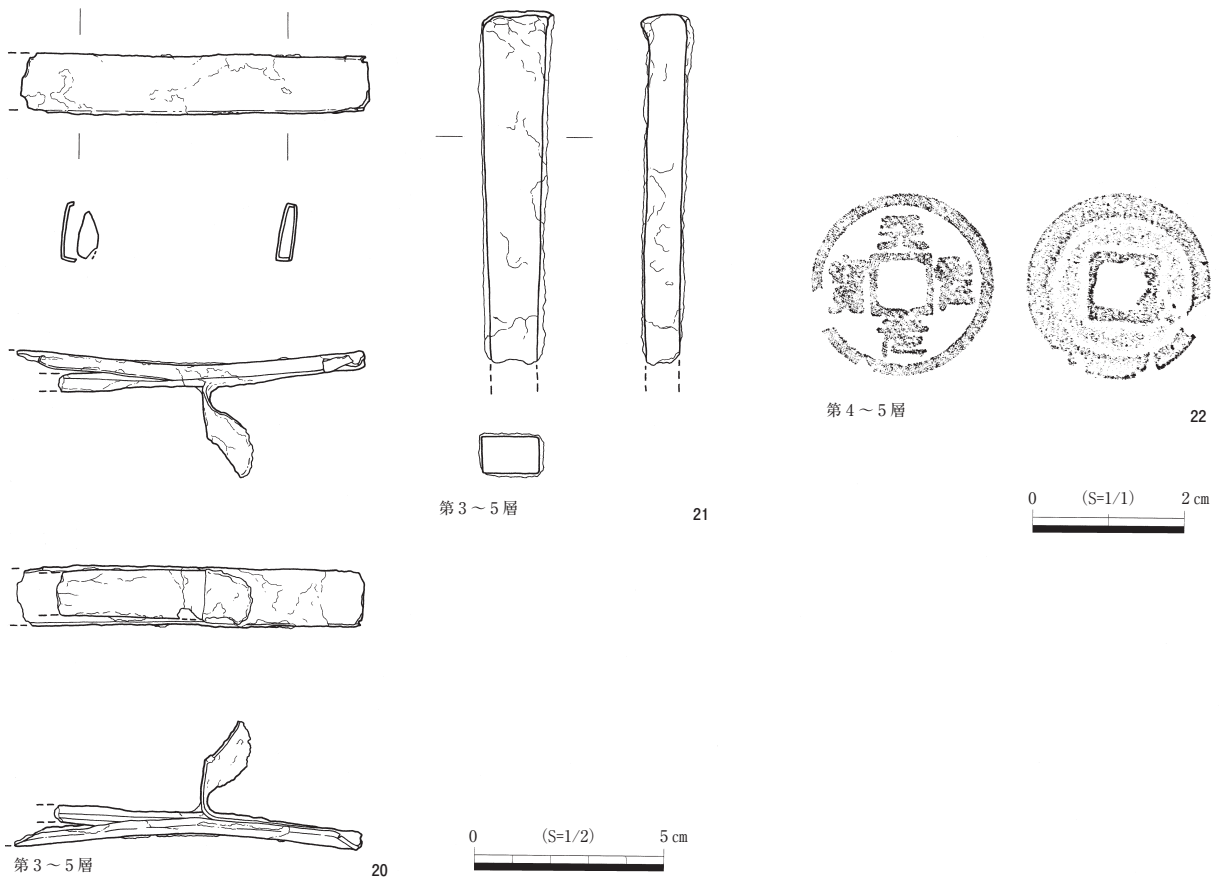


図12 側溝等（第3～5層）出土遺物（1/2=20・21 1/1=22）

第3節 第5面（第5・6層） —13世紀中葉～15世紀前葉の集落面—

第1項 層序と地形

第4層を除去して検出した、第5層上面が第5面である。原則として、調査区西半中央部に認められる細砂～粗砂の堆積層（層厚0.4m・第5b層と呼称）を母材としていると考えられる土壌化層を、第5層とした。この上面および層中、下面で遺構を多数検出した。

細砂～粗砂を多く含む土壌化層は、堆積層が遺存していない箇所も含め、調査区のほぼ全体で認められた。ただし、箇所毎に細分が可能で、ブロック土を含むこと、局所的に落ち込み状に認められること等から整地土と考えられる層が広範囲に存在する。第5b層堆積以降に造成が行われたと考えられる。

なお、第6層は、第5層ほど強く土壌化していないシルト層である。出土遺物から、第5層と時期的に連続する層と考えられる。

第5層上面の高さは、調査区西半でT.P.5.1～5.4m、東半で4.8～4.9mであり、西半が高く、東半が低くなっている。第5層堆積以前の地形は、第5層下面の高さが西半でT.P.4.7～4.8m、東半で4.6～4.8mであることから、調査区全域がほぼ同じ高さであったことが想定できる。第5b層は西半にのみ遺存していることから、西側を中心に第5層が堆積した結果、西側が高く、東側が低い、第5面の地形が形成されたと考えられる。

第2項 遺構と遺物

第5面では、東西方向、南北方向の大規模な溝群を検出し、調査区中央に位置する南北方向の溝（107・450溝）を境界として西半、東半で遺構面の様相が異なる。そのため、第5面の遺構と遺物の報告は、1. 大規模溝群、2. 西半、3. 東半に分割して記載することとする。

1. 大規模溝群（図13・41・61）

調査区中央部で南北方向の107・450溝を、北西部で東西方向の465溝を、北東部で東西方向の70溝を検出した。

70溝（図14～17 カラー図版2・3 図版3・4・34～36）

調査区北東部に位置する、東西方向の溝である。幅約3.5m、深さ0.6～0.7mで、検出長は約31.0mである。東寄りの部分で、上面幅約0.7m、下端幅約1.1mの土橋状の高まりを確認した。断面観察用のトレンチと位置が重なったため完全な形状で検出することができなかったが、上面の高さはT.P.4.3m、溝の底面からの高さは約0.2mである。底面のレベルは、西から東へと下がっている。埋土は、上層が細砂～粗砂混じりシルト、下層がシルトである。上層は埋め戻し土と思われるが、下層は滞水堆積である可能性がある。

遺物は、上層から、土師器皿（23～27）・鍋、瓦器椀（31）、瓦質土器羽釜（43・44）・火鉢（41）、須恵器椀（32・33）・鉢（35）・甕（34）、瀬戸焼直縁大皿（36）、常滑焼鉢（37）・壺か（38）・甕（39・40・221）、輸入陶器（890・895・896・899）、白磁皿・碗（28）、青磁碗（30）、青白磁合子蓋（29）、石鍋（42）等が出土している。瓦質土器火鉢（41）は、平面輪花形で、菊花紋のスタンプを有す。須恵器甕には、外面に格子目または平行条線タタキ、内面にナデを施すものがみられるが、（34）は体部外面に樹枝紋痕を有す。また、常滑焼甕片（221）が107溝、465溝出土のものと接合した。白磁皿には、口禿と、内面にヘラ描紋を有す小片がある。輸入陶器（890）は、波状沈線を有する壺と思われ、浅黄色

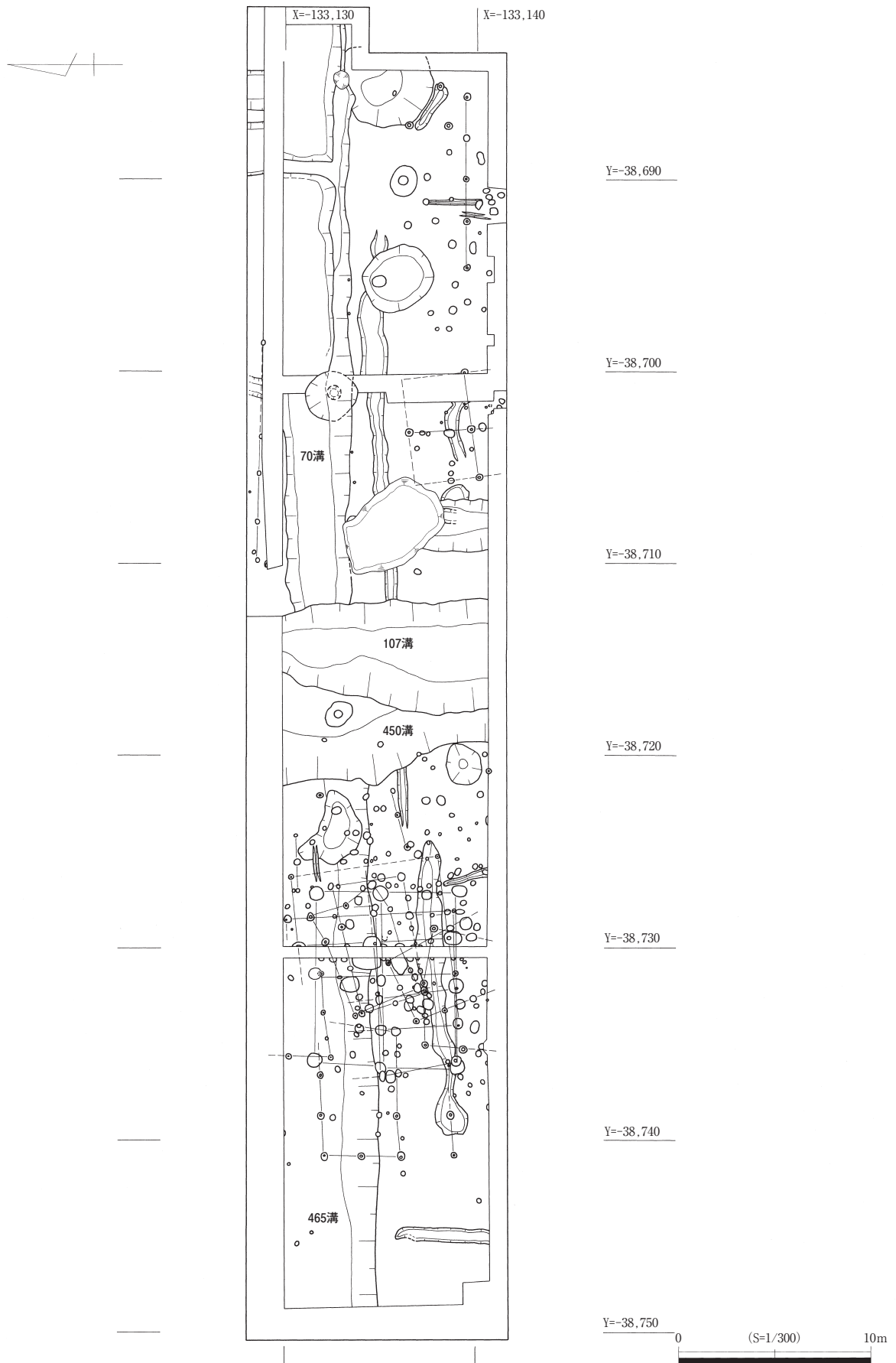


图13 第5面 平面图

第3節 第5面 (第5・6層)

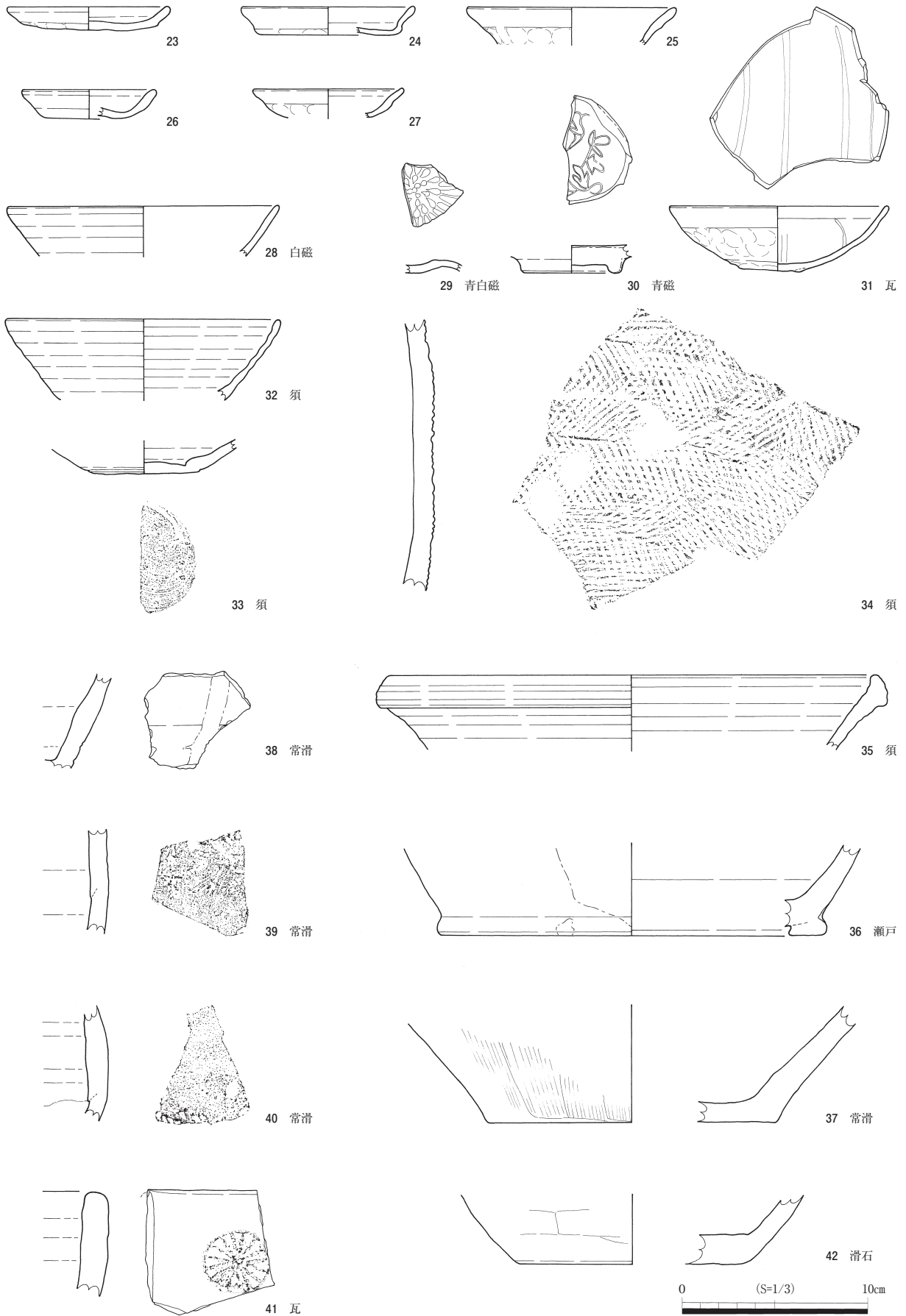


图14 70溝上層 出土遺物 (1)

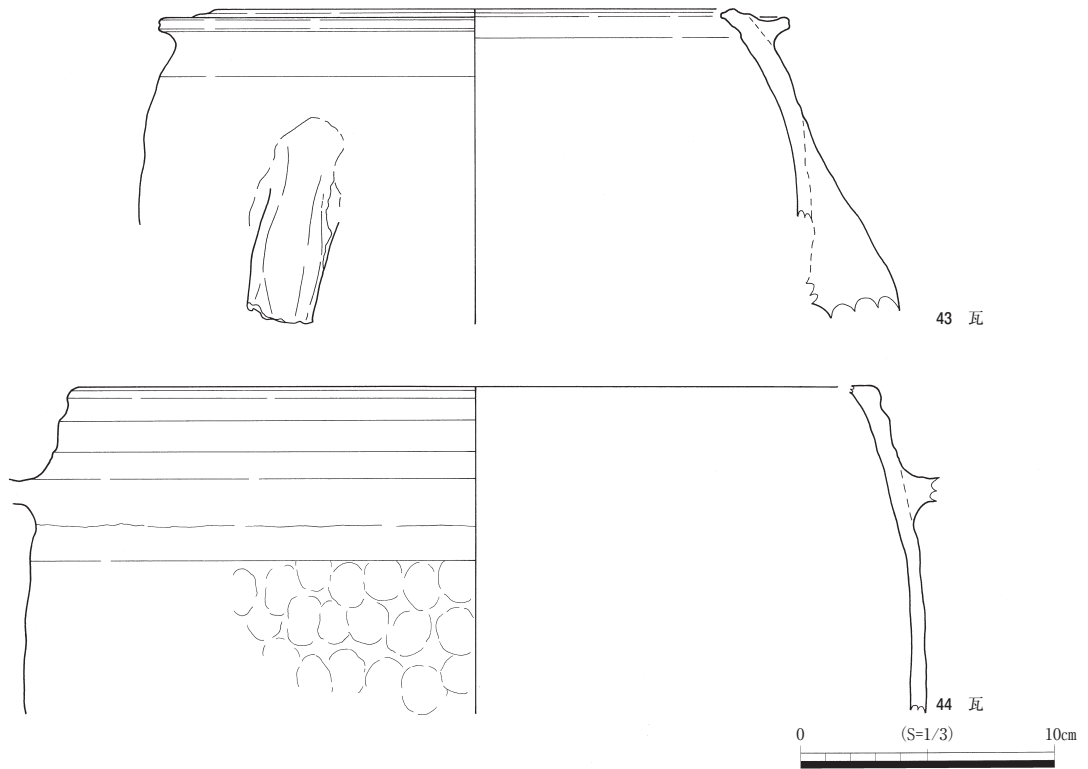


図15 70溝上層 出土遺物(2)

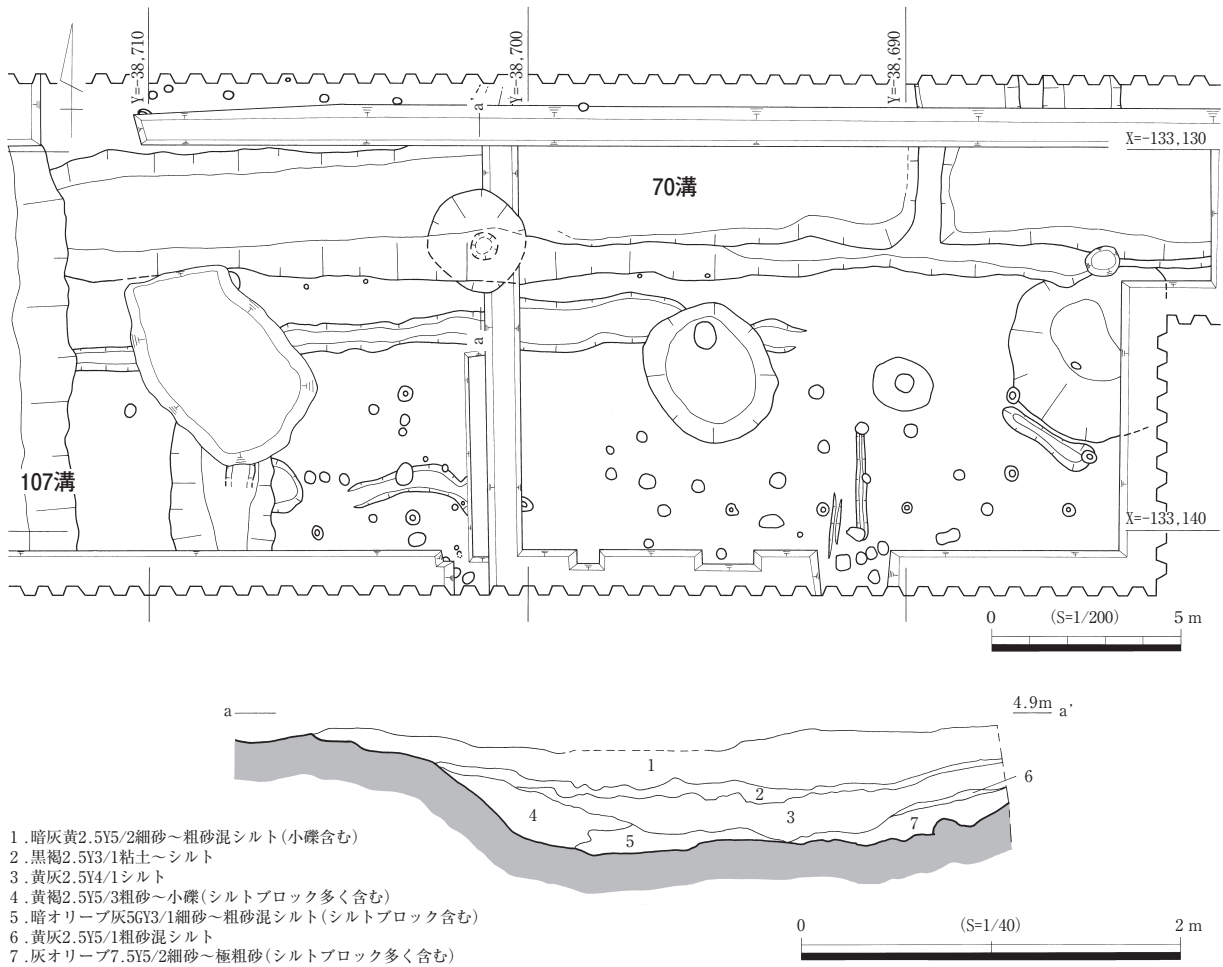


図16 70溝 平面・断面図

第3節 第5面（第5・6層）

の釉を施す。輸入陶器片（895・896）は、外面にのみ黒色または黒褐色の釉を施し、胎土に暗赤褐色の斑点がみられる。輸入陶器片（899）は、黒色釉を施すが内面は縞模様状で、胎土に暗赤褐色の斑点がみられる。450・465溝出土のものとは接合した。

下層からは、土師器皿（45～48）・竈（55）、黒色土器A類椀、瓦器椀（49）、須恵器皿（51）・鉢（52）・甕、瓦質土器羽釜・鍋（50）、常滑焼鉢（54）・甕、鎬蓮弁紋青磁碗（53）等が出土している。常滑焼鉢（54）は、107溝上層出土のものとは接合した。

出土遺物はコンテナ3箱分で大半は小片である。11～12世紀のものも含まれるが大半が13世紀後葉～14世紀前葉のものである。瓦器椀は、11～12世紀前葉のものは楠葉型、それ以降のものは和泉型である。南北溝である107溝に西側を切られている。1096井戸を切っている。

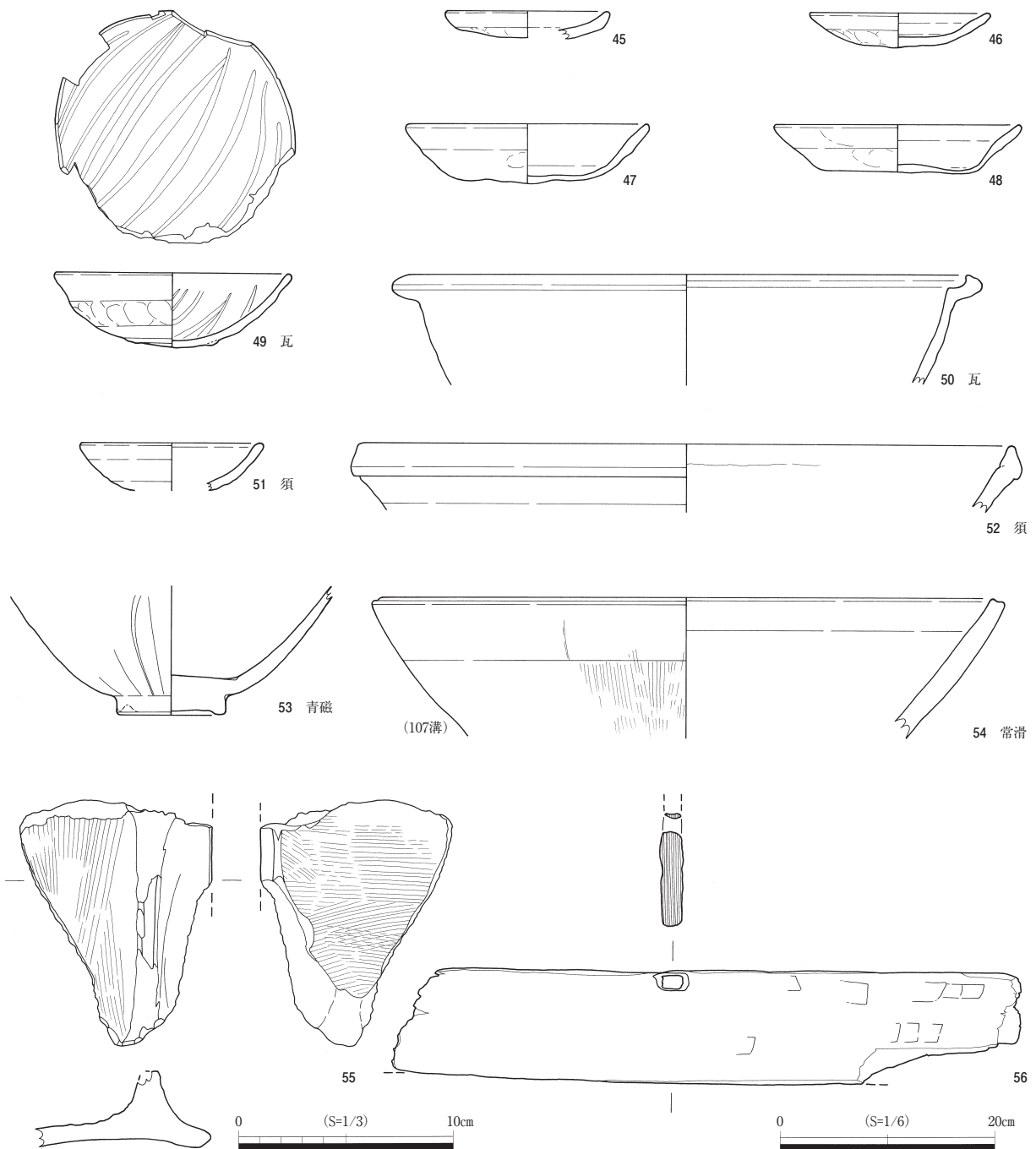
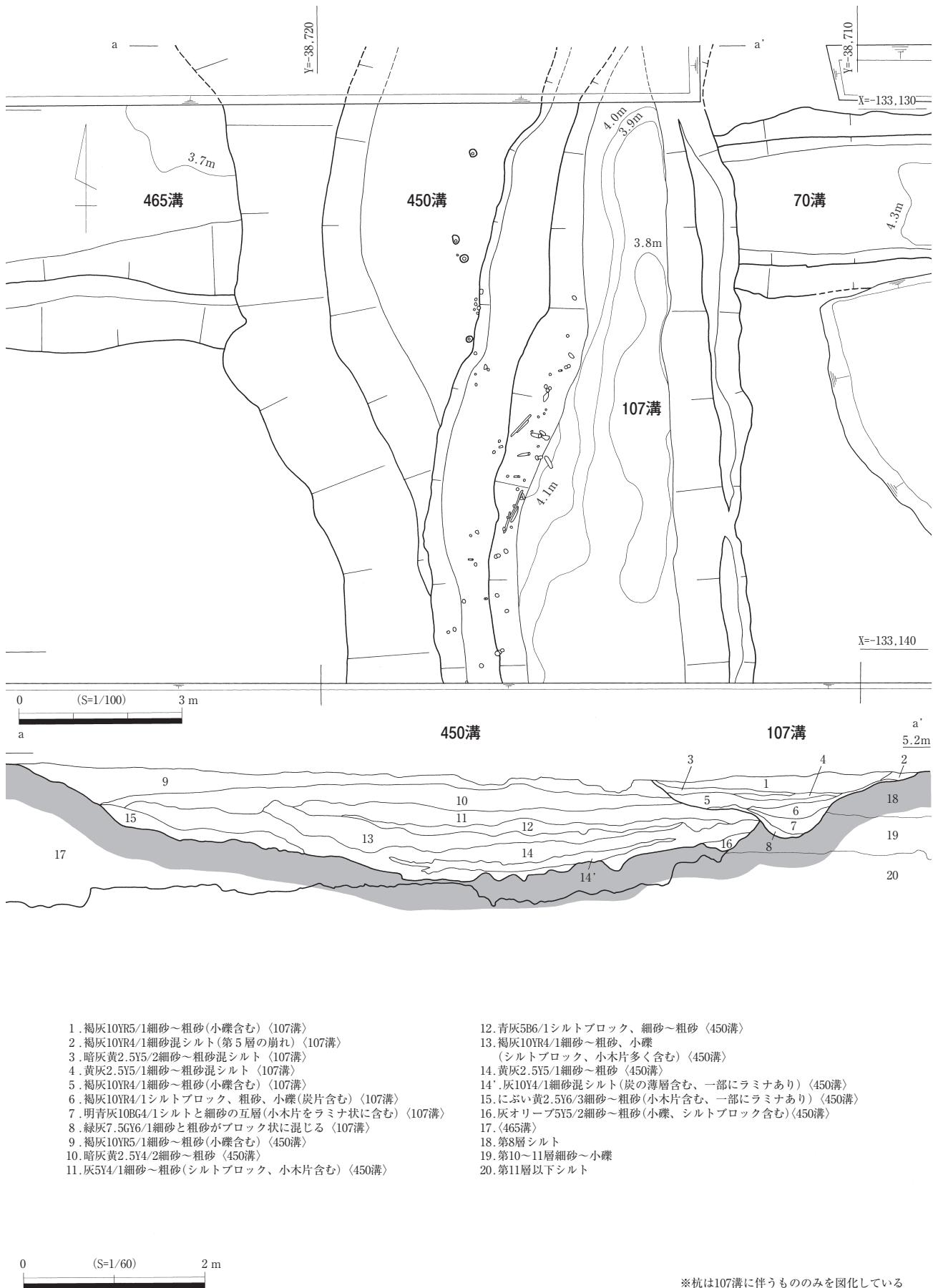


図17 70溝下層 出土遺物（1/6=56）



- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 褐灰10YR5/1細砂～粗砂(小礫含む)〈107溝〉 2. 褐灰10YR4/1細砂混シルト(第5層の崩れ)〈107溝〉 3. 暗灰黄2.5Y5/2細砂～粗砂混シルト〈107溝〉 4. 黄灰2.5Y5/1細砂～粗砂混シルト〈107溝〉 5. 褐灰10YR4/1細砂～粗砂(小礫含む)〈107溝〉 6. 褐灰10YR4/1シルトブロック、粗砂、小礫(炭片含む)〈107溝〉 7. 明青灰10BG4/1シルトと細砂の互層(小木片をラミナ状に含む)〈107溝〉 8. 緑灰7.5GY6/1細砂と粗砂がブロック状に混じる〈107溝〉 9. 褐灰10YR5/1細砂～粗砂(小礫含む)〈450溝〉 10. 暗灰黄2.5Y4/2細砂～粗砂〈450溝〉 11. 灰5Y4/1細砂～粗砂(シルトブロック、小木片含む)〈450溝〉 | <ul style="list-style-type: none"> 12. 青灰5B6/1シルトブロック、細砂～粗砂〈450溝〉 13. 褐灰10YR4/1細砂～粗砂、小礫
(シルトブロック、小木片多く含む)〈450溝〉 14. 黄灰2.5Y5/1細砂～粗砂〈450溝〉 14'. 灰10Y4/1細砂混シルト(炭の薄層含む、一部にラミナあり)〈450溝〉 15. にぶい黄2.5Y6/3細砂～粗砂(小木片含む、一部にラミナあり)〈450溝〉 16. 灰オリーブ5Y5/2細砂～粗砂(小礫、シルトブロック含む)〈450溝〉 17. 〈465溝〉 18. 第8層シルト 19. 第10～11層細砂～小礫 20. 第11層以下シルト |
|---|--|

※杭は107溝に伴うもののみを図化している

図18 107・450溝 平面・断面図

107溝（図18～22 カラー図版4 図版3・4・37～41）

調査区中央部に位置する、南北方向の溝である。幅3.0～5.8m、深さ0.7～1.0mで、検出長は約11.8mである。底面のレベルは、調査区北端でT.P.4.2m、南端でT.P.3.8mで、南に向かって下がる。埋土の上層は細砂～粗砂混じりシルトで埋め戻し土と思われるが、下層は木片をラミナ状に含むシルトと細砂の互砂で、水成堆積である。

西肩は2段落ちになっており、北半部の肩と下段の傾斜部分で杭列を検出した。下段の杭列には、杭に近接して竹等を検出した箇所があり、竹を横にして杭と組み合わせていた可能性がある。東肩とは異

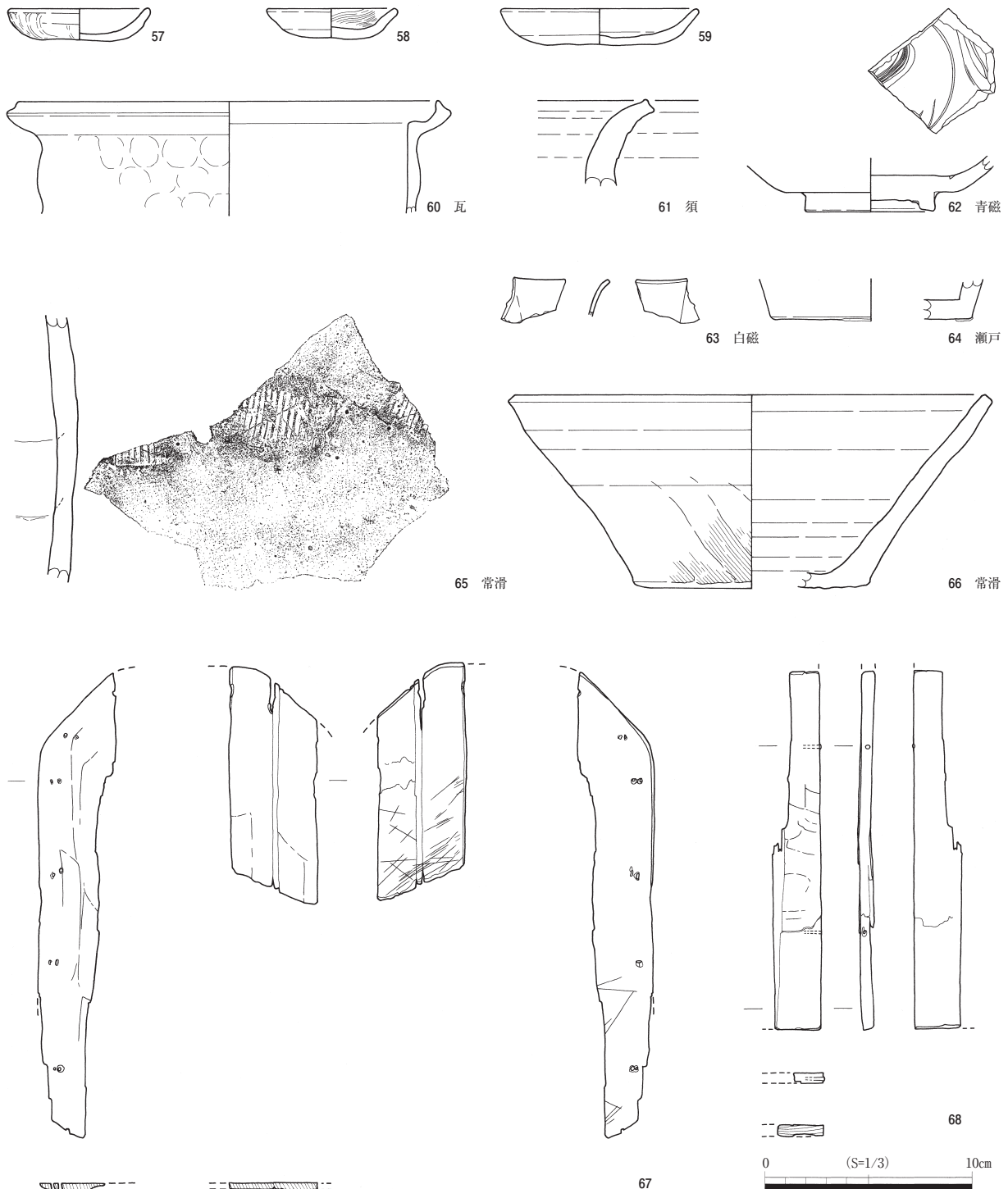


図19 107溝上層 出土遺物（1）

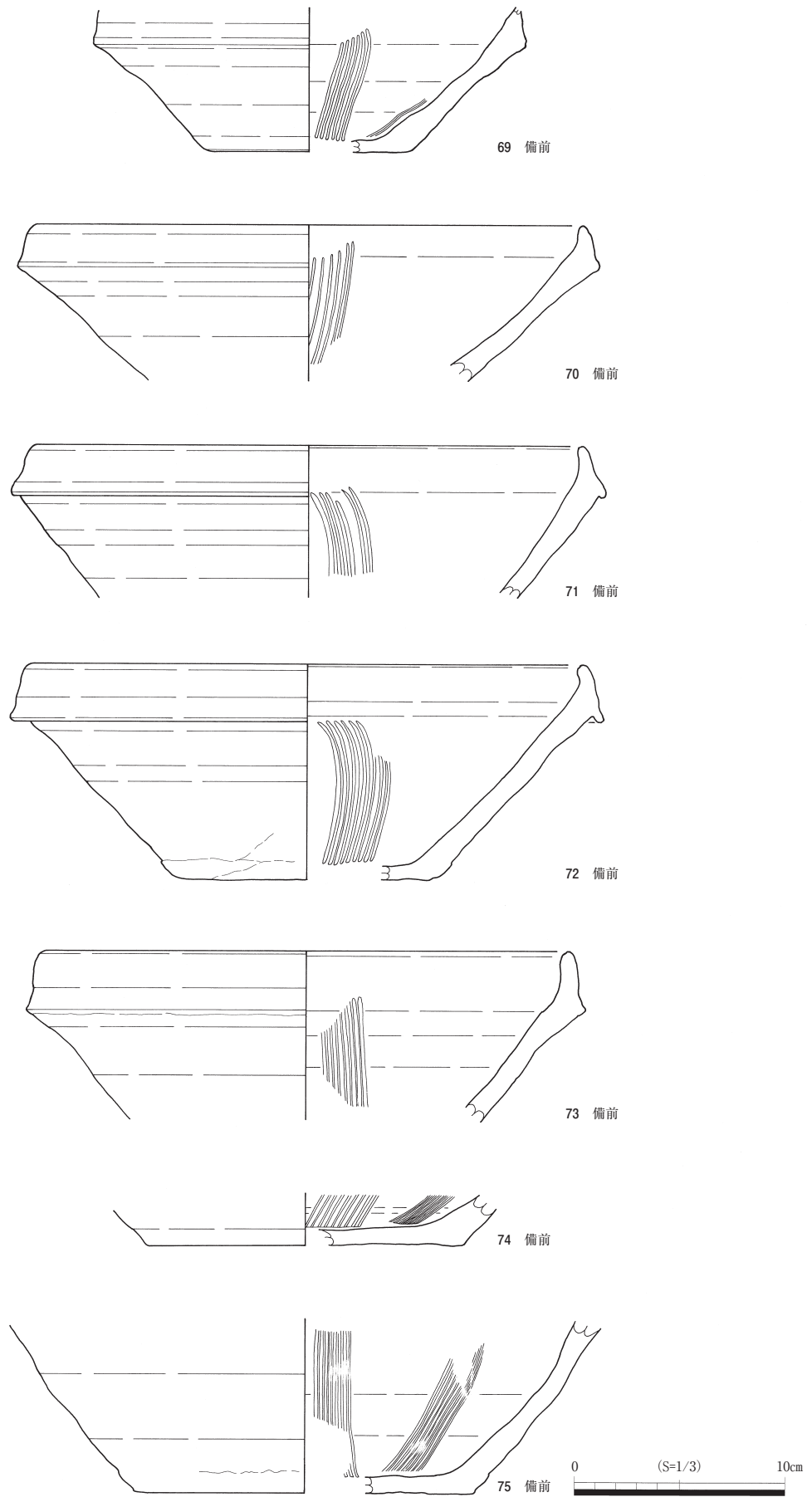


図20 107溝上層 出土遺物(2)

第3節 第5面 (第5・6層)

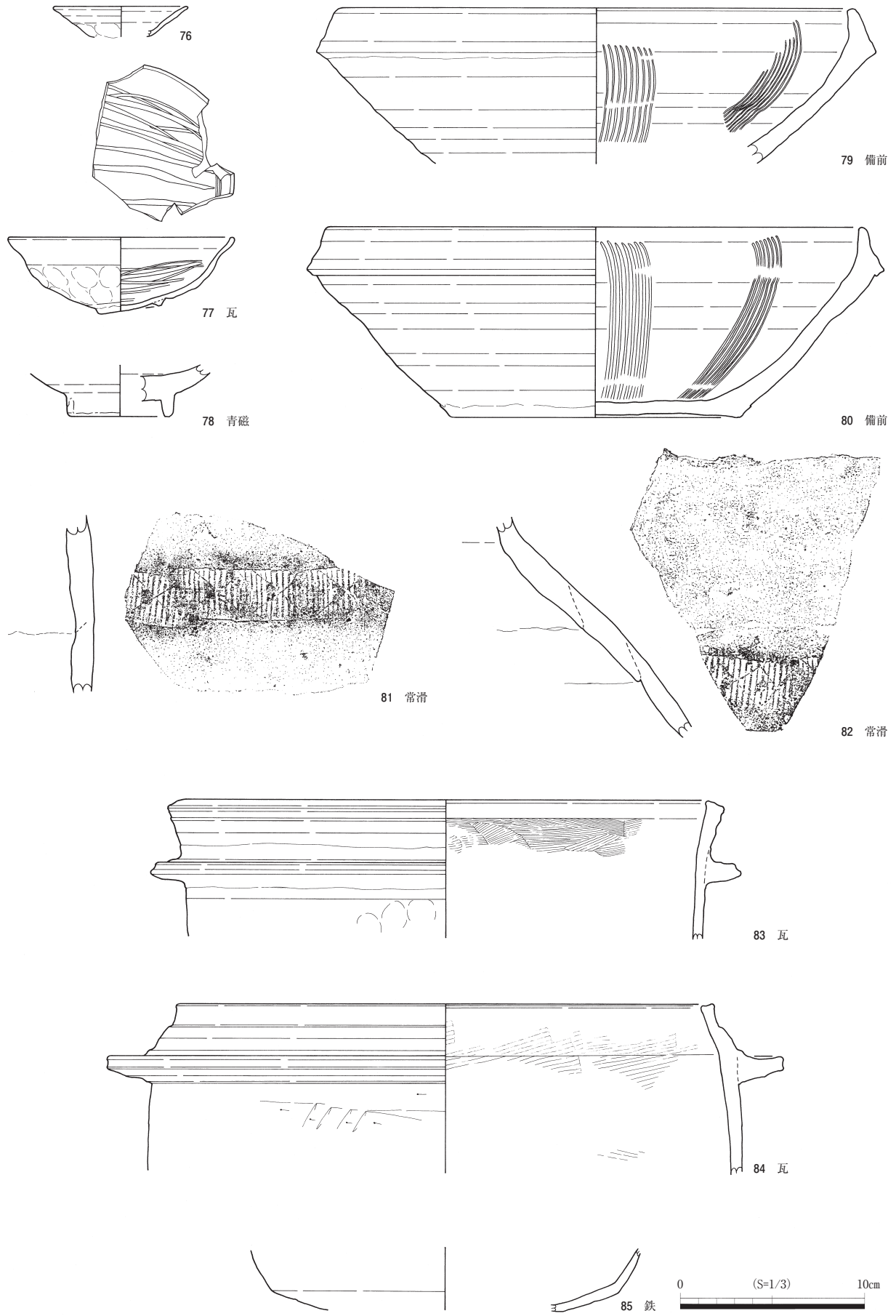


图21 107溝下層 出土遺物 (1)

なり、西肩は切り合い関係にある450溝の埋土であるため、土留めのために設けられたと考えられる。

遺物は、上層から、弥生～庄内期の甕底部（外面にタタキを施す）、土師器皿（57～59）、黒色土器A類碗、瓦器碗・皿、須恵器、瓦質土器羽釜・鍋（60）、須恵器鉢・甕（61）、瀬戸焼（64）、常滑焼鉢（66）・甕（65）、備前焼播鉢（69～75）・甕、白磁多角杯（63）・玉縁口縁碗、青磁碗（62）、平瓦、漆器片（900）、折敷（67）、指物か（68）、曲物等が出土している。

下層からは、土師器皿（76）、瓦器碗（77）、瓦質土器羽釜（83・84）、須恵器鉢、瀬戸焼灰釉瓶等片、常滑焼甕（81・82・221）、備前焼播鉢（79・80）・甕（222）、白磁口禿皿、青磁碗（78）、平瓦、漆器碗（87・88）、折敷（123）、木製品底板（86）、石器剥片（89）、鉄鍋（85）、焼土塊、モモ核等が出土している。常滑焼甕（221）は、70溝、465溝下層出土のものと、備前焼甕（222）は、450溝上層、465溝下層出土のものと、折敷（123）は、450溝上層出土のものと接合した。

出土遺物は、コンテナ3箱分で、多くは小片である。70溝と450溝を切っているため、これらの埋土中にあった遺物が相当数含まれていることが想定できる。備前焼播鉢、白磁多角杯等、15世紀前葉を中心とする時期のものがこの溝に伴うものと考えられる。

70溝と450溝を切っている。南に位置する既往の調査区、8D地区の第Ⅱ遺構面で検出されている溝80015は、この溝の続きであると思われる。

450溝（図18・23～35 カラー図版2・3・5 図版5・42～51・82）

調査区中央部に位置する、南北方向の溝である。東半部を107溝に切られているが、調査区北端で復元した幅は約8.5m、深さ約1.2m、検出長約11.8mである。

中央部分で、木杭に竹を編み込んだ東西方向の構造物を検出した。杭は、自然木の先端を簡単にカットしたものである。それに直径2cm程度の複数の竹を、杭毎に交差させて編み込んでいる。遺存状態の良いところでは、10本以上の竹が編み込まれていたことが確認できる。竹には、木の皮のほか、曲物片、折敷片（189）もからんでいたが、構築当初からその状態であったのか後にからまったのかは不明である。杭は全体的に南へ傾いており、北から水圧を受けていたと考えられる。杭先が溝底面以下に及んでいること、竹は溝底面より0.1～0.3mの高さにあること等から、溝があまり埋まっていない状態で機能していたものと思われる。

また、西肩は2段落ちになっているが、上段の傾斜部分に杭列を検出した。杭は大きく上部のものと下部のものにわけられる。上部の杭列は、自然木の先端を簡単にカットしたものが主であるが、一部に竹もあり、なかには先端をカットしていることが確認できるものもある。下部の杭列は、竹が主で、木

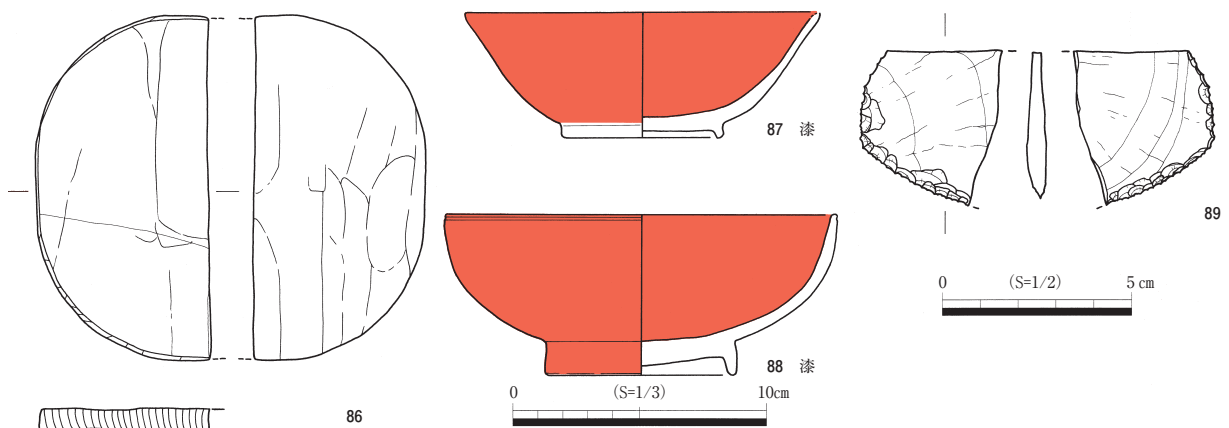


図22 107溝下層 出土遺物（2）（1/2=89）



图23 450溝 平面图

は自然木の先端をカットしたものである。

底面のレベルは、調査区北端でT.P.3.7m、南端でT.P.3.9mで、北が低い。しかし、北部には前述の木杭と竹による構造物があり、その周囲が低くなっているとみることできる。杭が南へ傾いていることから、水流は北から南であったと考えるのが自然であろう。とすると、前述の構造物の周囲で水が滞留する状態があったことも想定できる。埋土は、ブロックを多く含み、埋め戻し土であると考えられる。下層も木片、炭の薄層を含み、一部にラミナはみられるが、水成堆積ではないと思われる。

遺物は、上層から、土師器皿 (90~96)・鍋、瓦器椀 (97)、瓦質土器羽釜 (105~116)・甕 (117)、須恵器椀・鉢 (104)、灰釉陶器椀 (98)、山茶椀鉢 (103)、白磁碗 (102)、瀬戸焼平椀 (99)、常滑焼甕、備前焼甕 (222)、青磁碗 (101)、輸入陶器 (100・899)、平瓦 (119)、石鍋 (118)、漆器椀 (121・122)、折敷 (123・124)、篋 (125)、木製品底板か (126)、短刀 (120) 等が出土した。白磁碗 (102) は、底部外面に「上」の墨書を有す。輸入陶器 (100) は、外面に回転ナデ後回転ケズリを施しており、体部中位から下位と思われる。外面に釉が剥落した痕跡が認められる。胎土に黒色の斑点がみられる、大宰

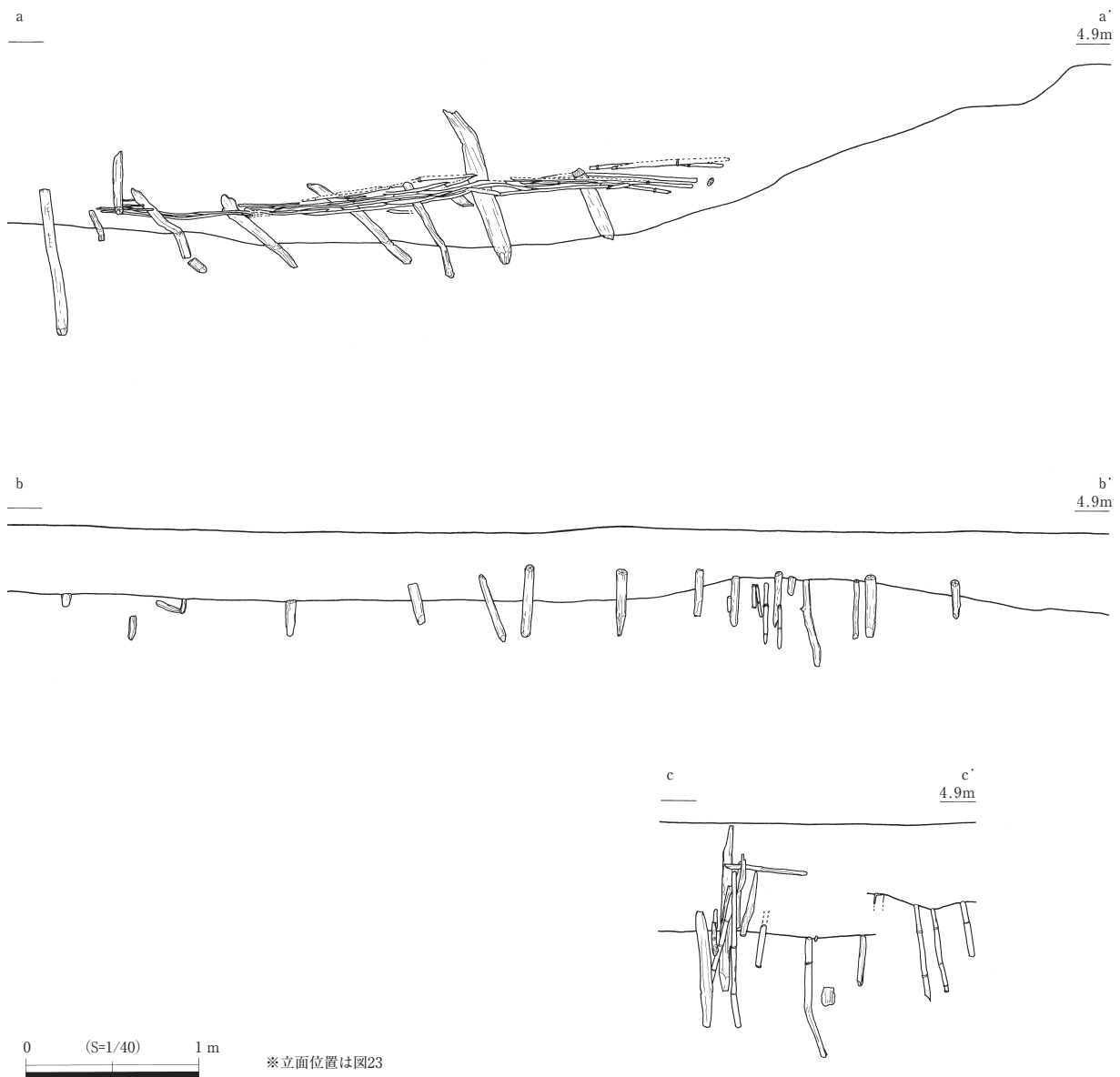


図24 450溝杭列等 立面図

第3節 第5面（第5・6層）

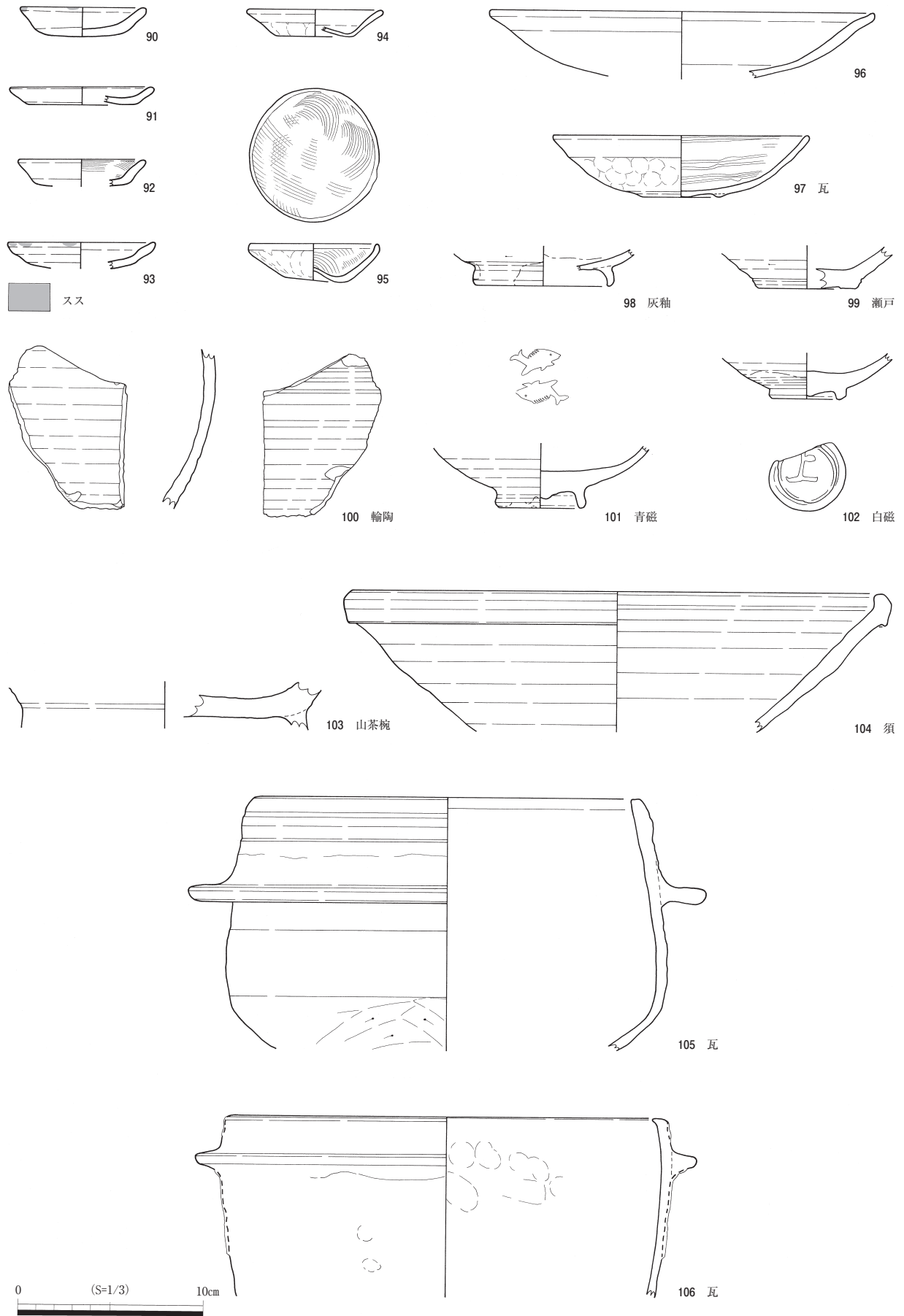


図25 450溝上層 出土遺物（1）

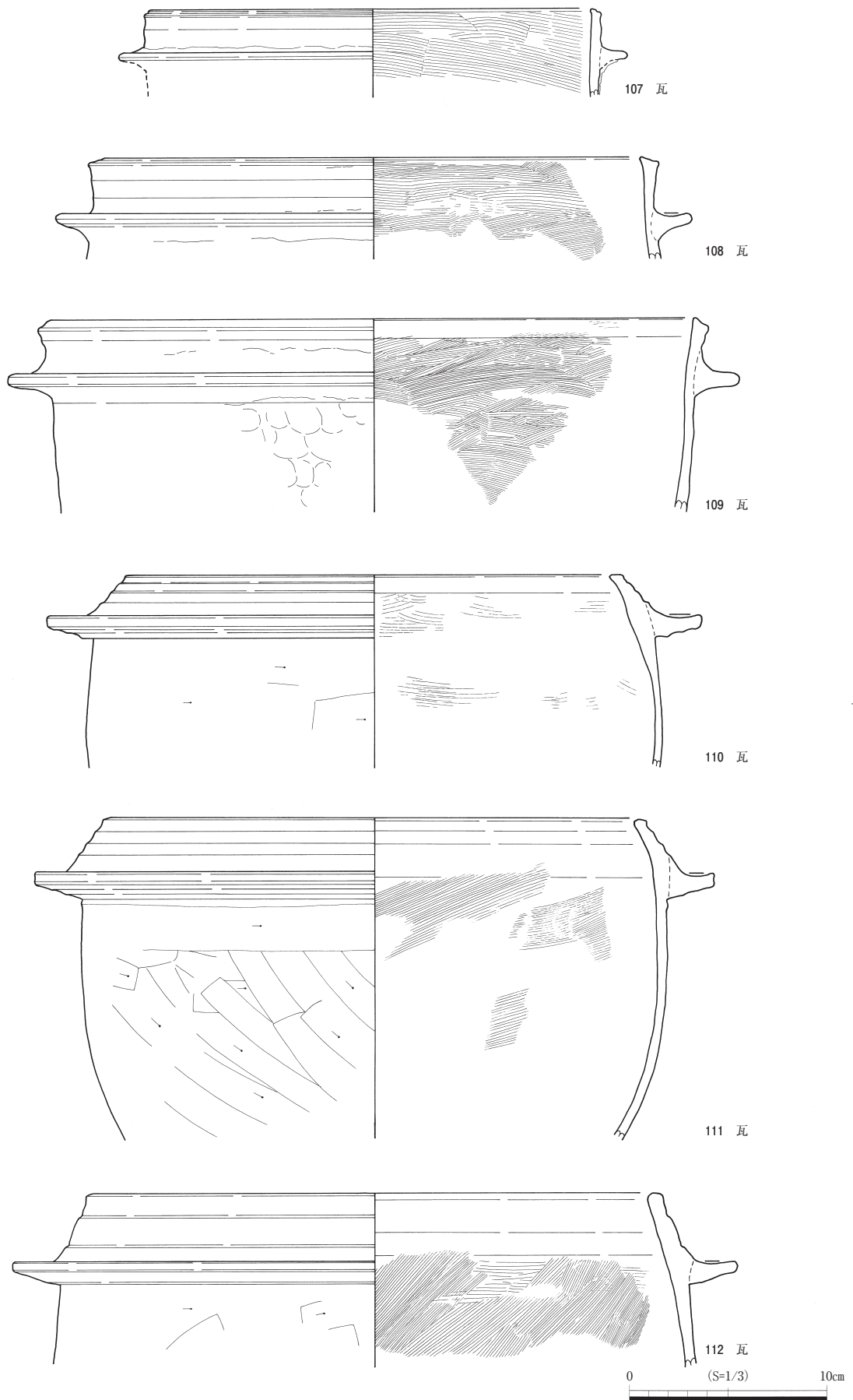


图26 450溝上層 出土遺物 (2)

第3節 第5面 (第5・6層)

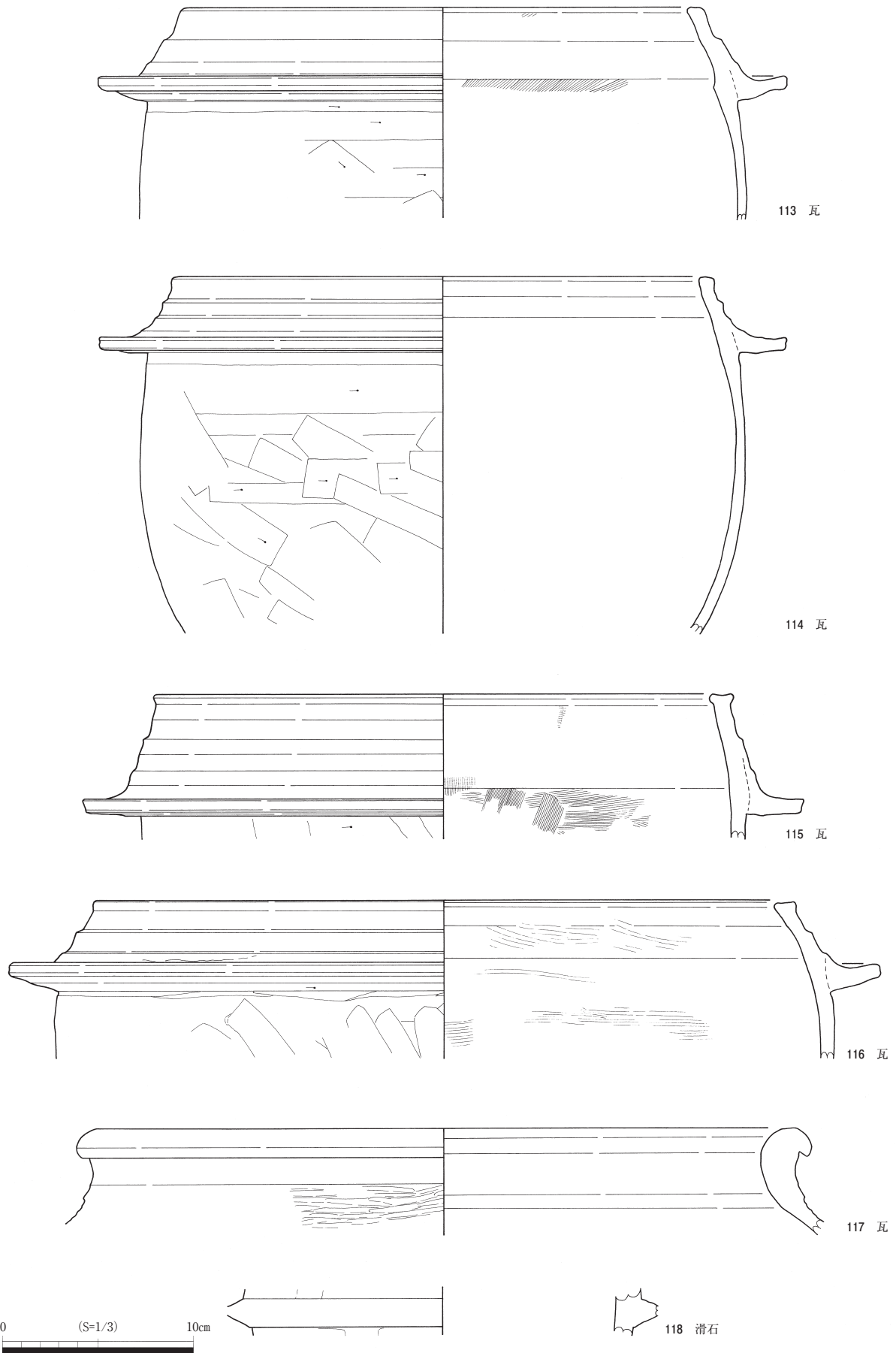


图27 450溝上層 出土遺物 (3)

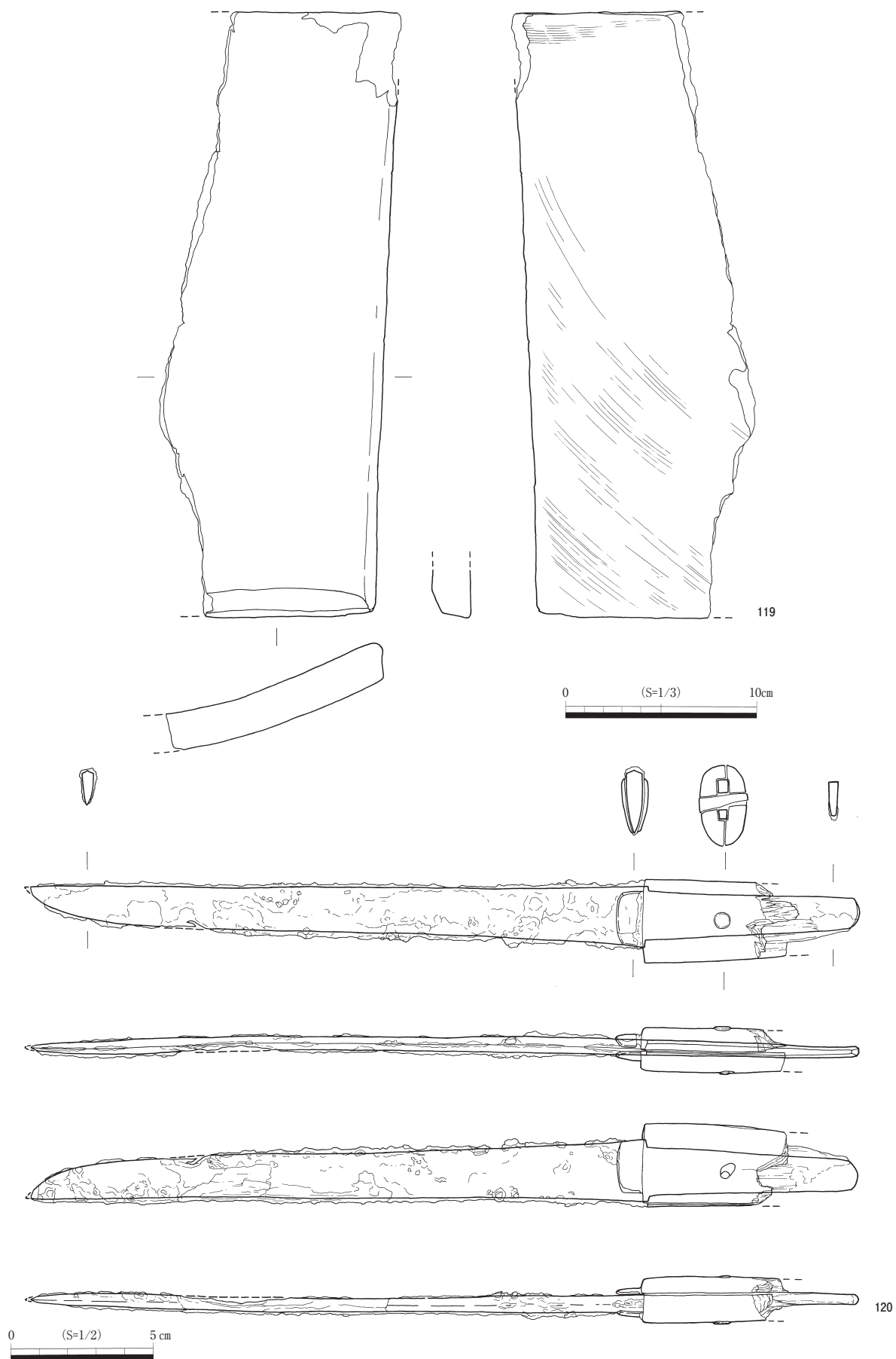


図28 450溝上層 出土遺物(4) (1/2=120)

第3節 第5面 (第5・6層)

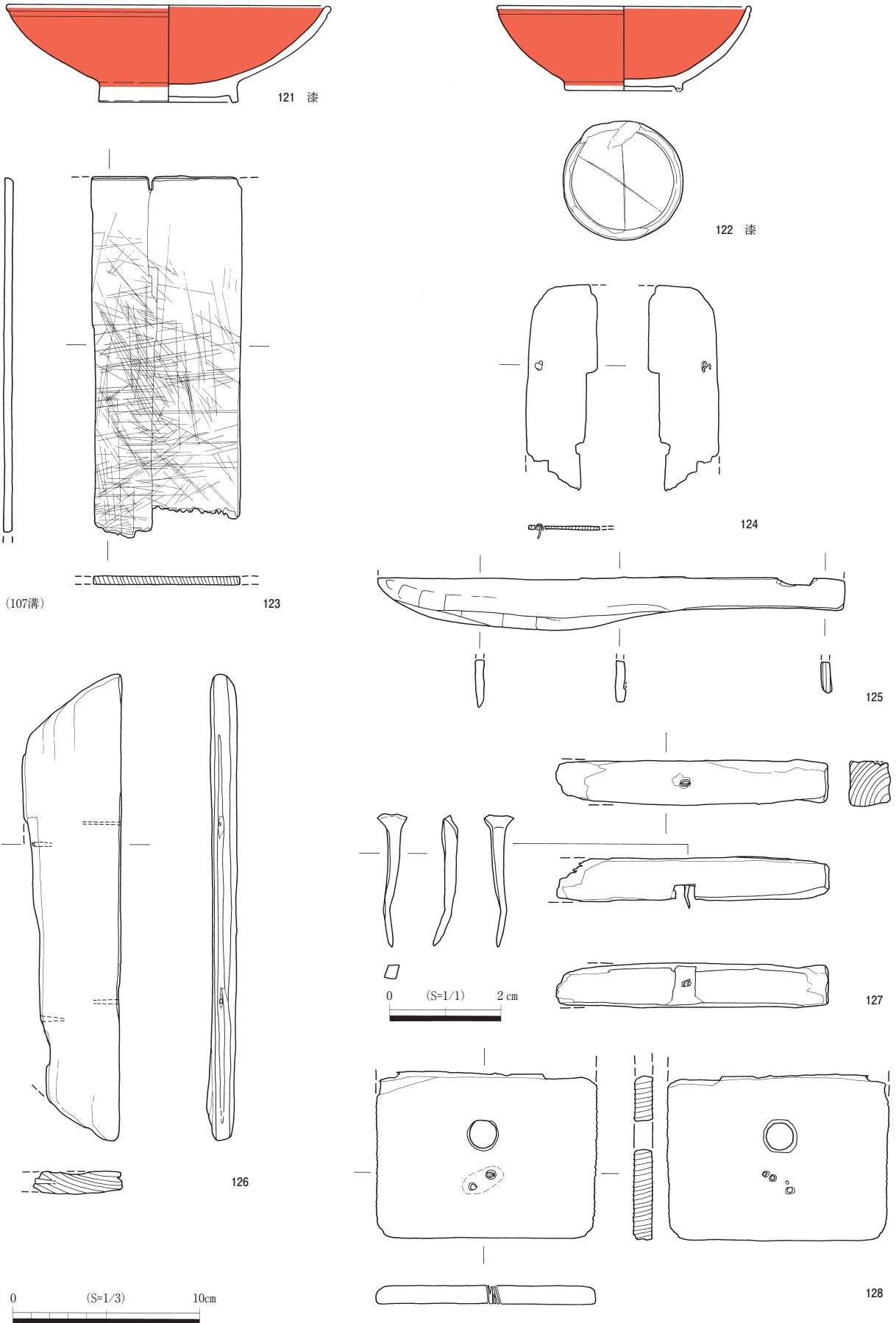


図29 450溝上層 出土遺物 (5) (1/1=127の釘)

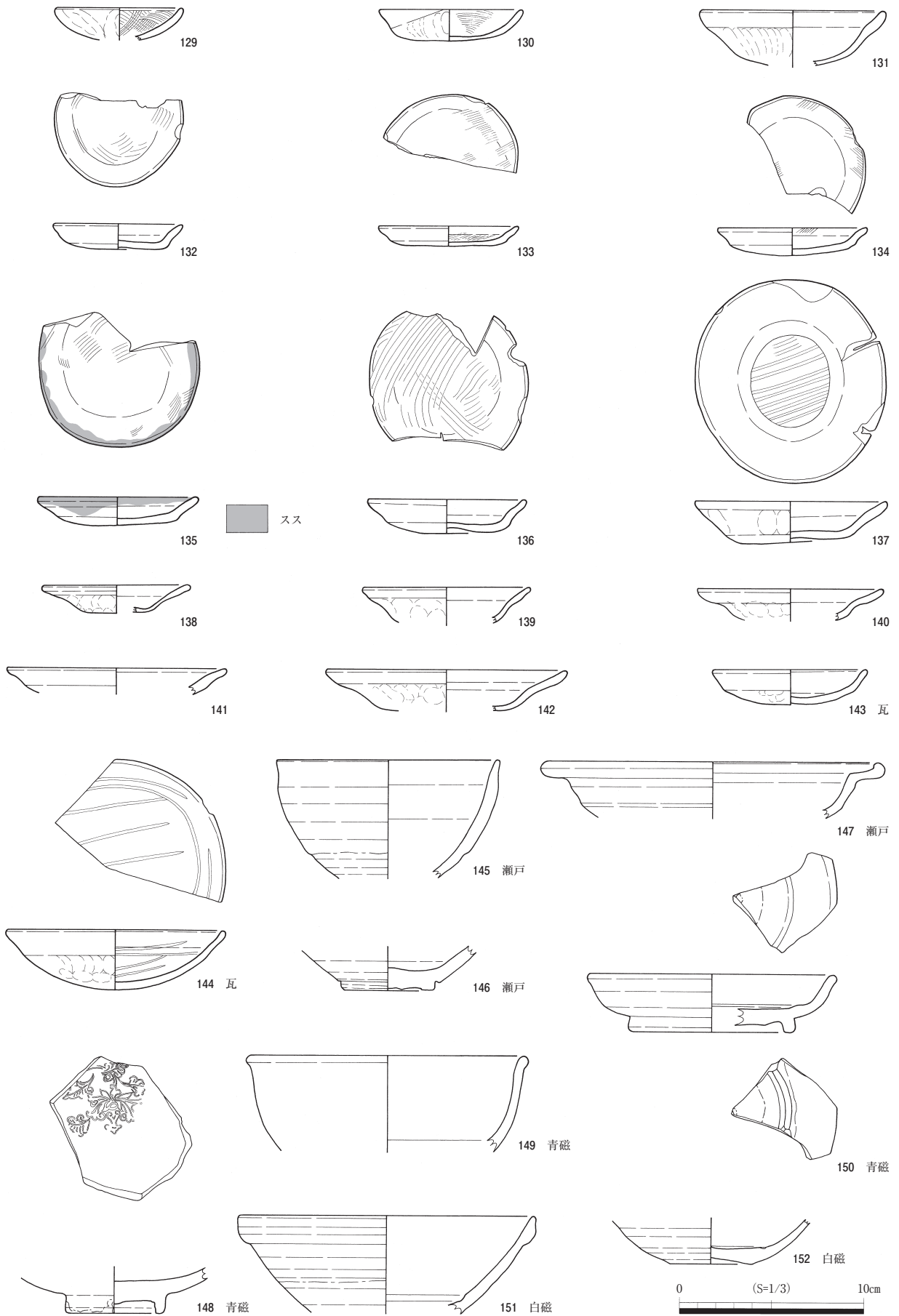


図30 450溝下層 出土遺物(1)

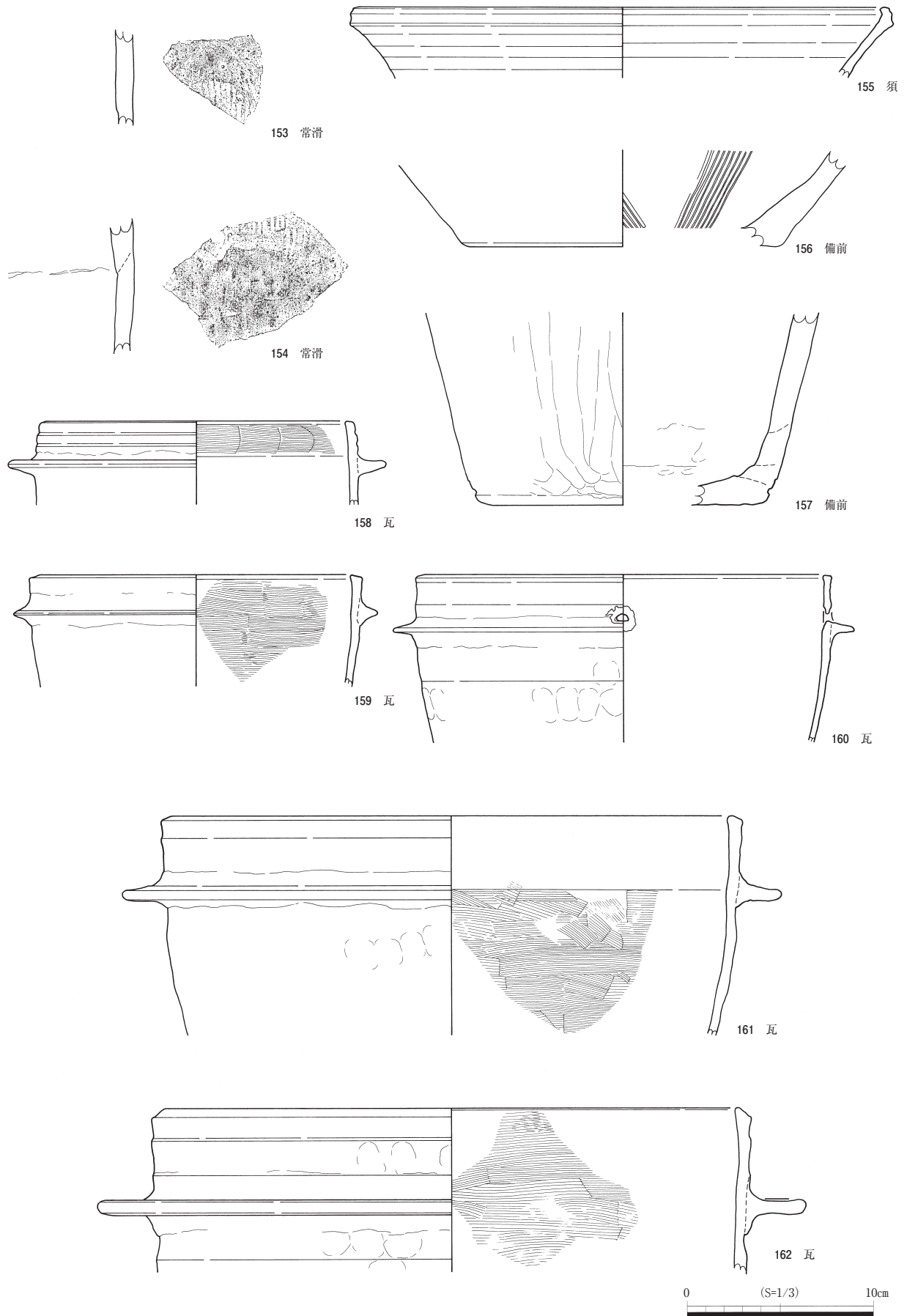


图31 450溝下層 出土遺物 (2)

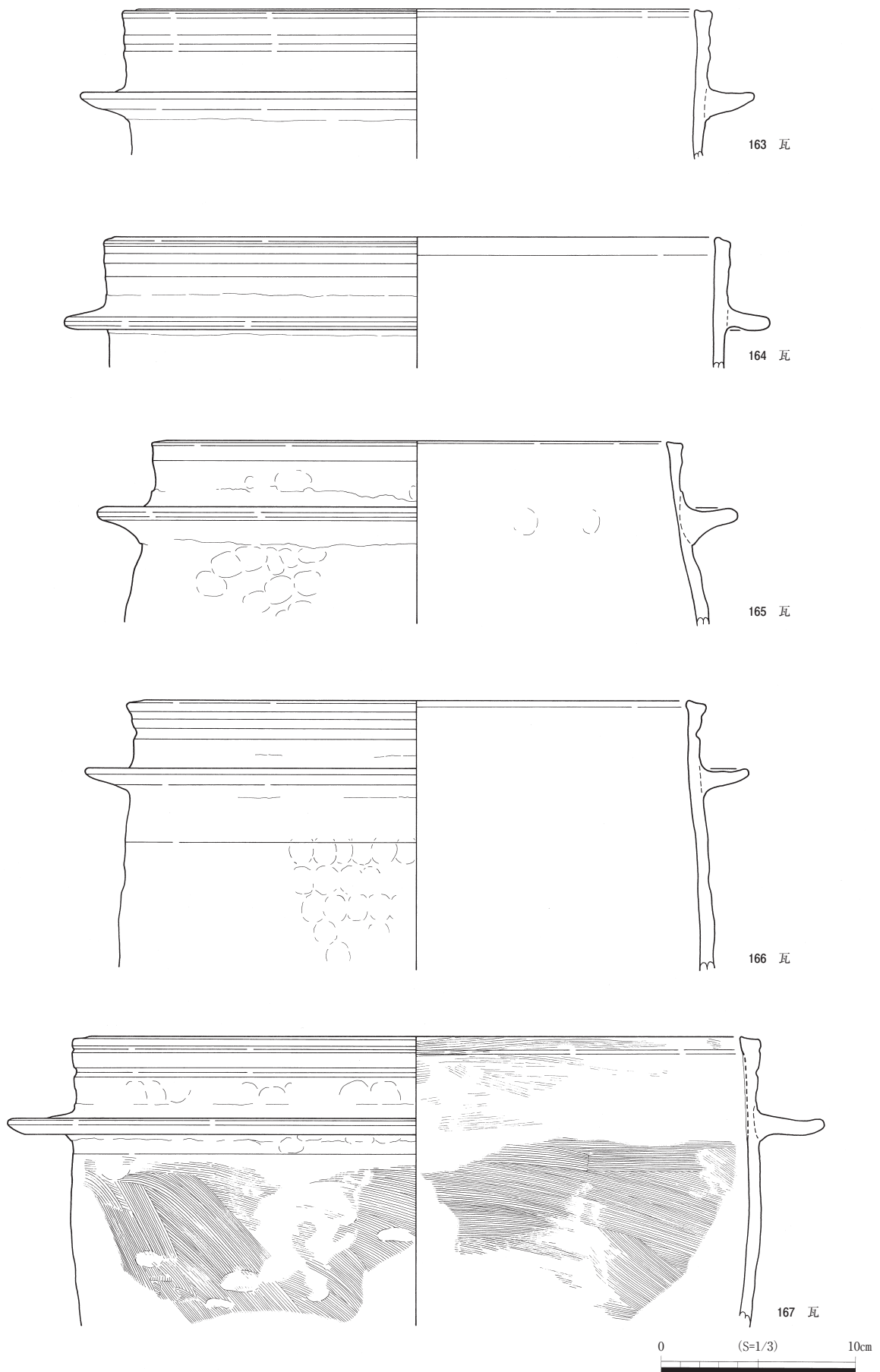


图32 450溝下層 出土遺物 (3)

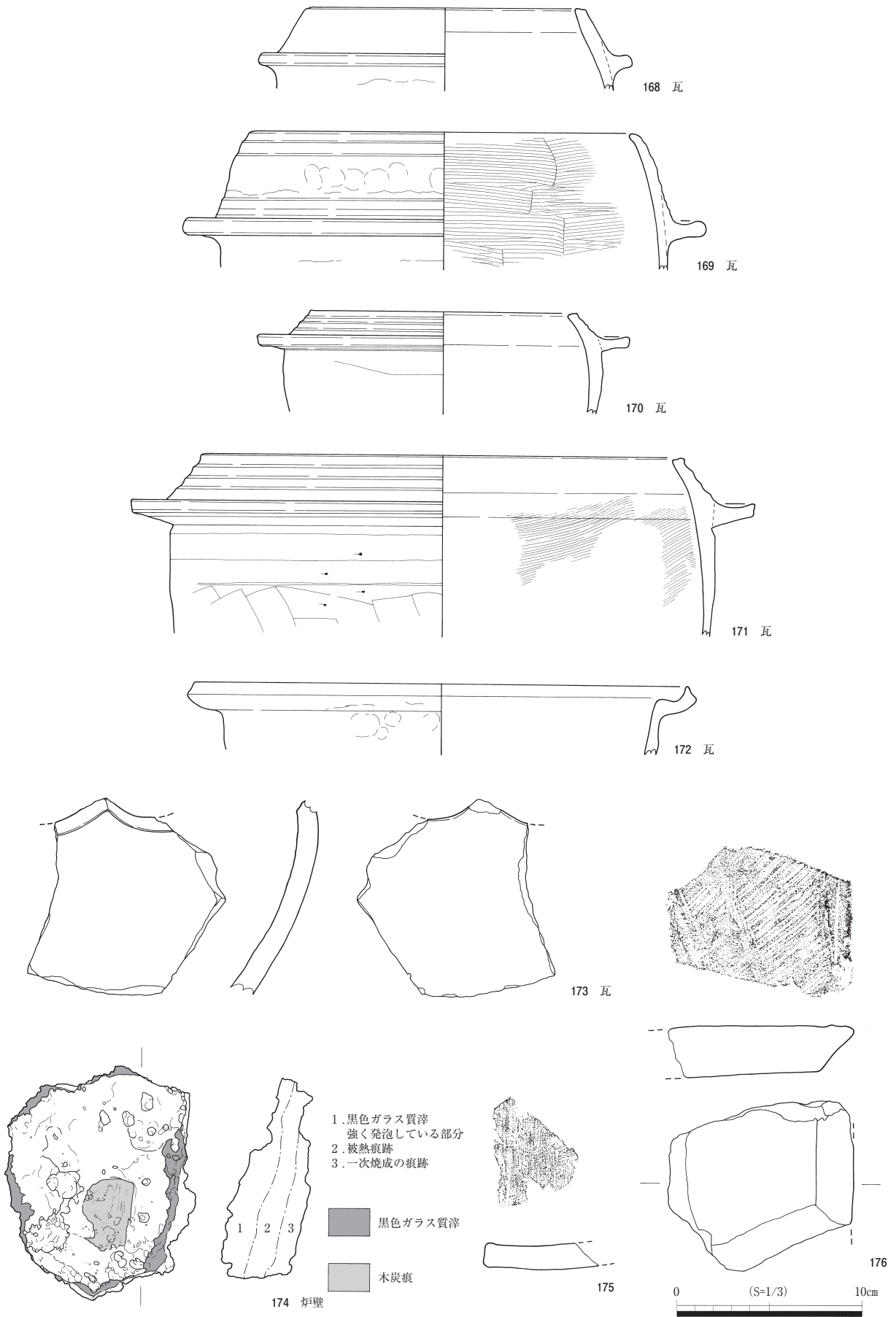


図33 450溝下層 出土遺物（4）

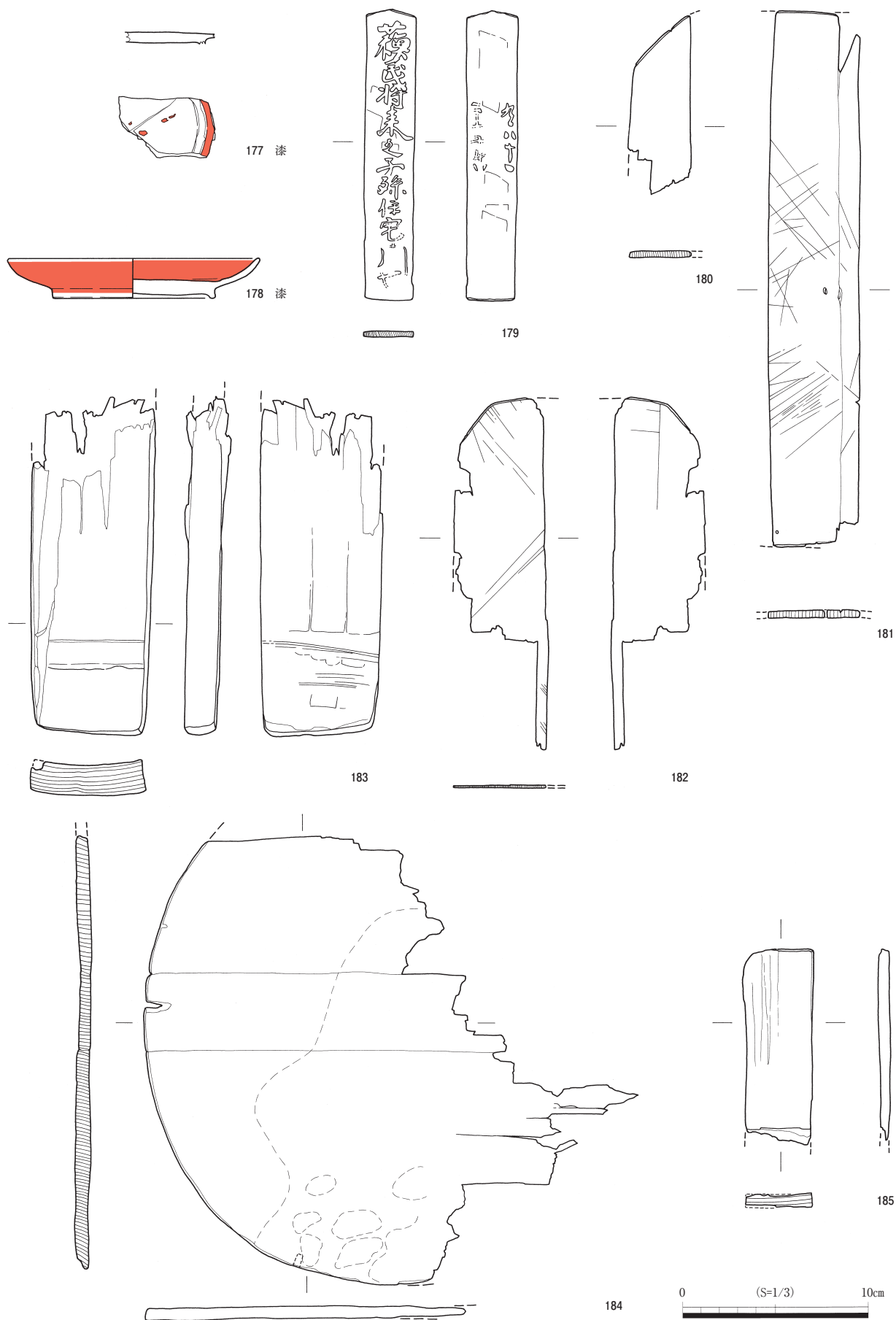


图34 450溝下層 出土遺物 (5)

府分類のB群である。短刀（120）は、刀身と柄の部分が出土した。刀身は鑄のない平造で、刃と逆側の断面形が山形になる庵棟である。X線写真により、折り返し鍛錬による筋が切先まで直線状に通る総柂目肌であることがわかる。大和伝（保昌流）の作風である。柄から2cm切先寄りの部分から刀身の幅が狭くなっており、研ぎ減りが認められる。茎の先端は丸く、栗尻である。木製の柄は、厚さの異なる2枚の板を合わせており、茎をおさめる抉り込みは厚い方にのみ穿つ。釦は、刃の位置に合わせて柄と一体づくりされており、漆を塗布する。備前焼甕（222）は、107溝と465溝出土のものと接合した。

下層からは、土師器皿（129～142）・煮炊具、黒色土器A類椀、瓦器椀（144）・皿（143）、瓦質土器羽釜（158～171・263）・鍋（172）・風炉（173）・甕、須恵器鉢（155）・甕、瀬戸焼平椀（146）・天目椀（145）・折縁中皿（147）、常滑焼甕（153・154）、備前焼播鉢（156）・壺（157）、白磁碗（151）・皿（152）、青磁碗（148・149）・皿（150）、輸入陶器（897・898）、平瓦（175・176）、炉壁（174）、漆器皿（177・178）、折敷（180～182）、桶側板（183）、呪符木筒（179）、牛骨（図版82-1・2）等が出土している。図化できなかったが、瓦質土器脚付羽釜のミニチュアが出土している。輸入陶器片（897）は、70溝出土の（896）と酷似している。輸入陶器片（898）は、黒色釉を施すが内面は縞模様状で、上層出土の（899）と同種である。呪符木筒（179）は、いわゆる「蘇民将来」札で、南に位置する既往の調査区、8D地区の第Ⅱ遺構面でも、この溝の続きと考えられる溝80147等から出土している。瓦質土

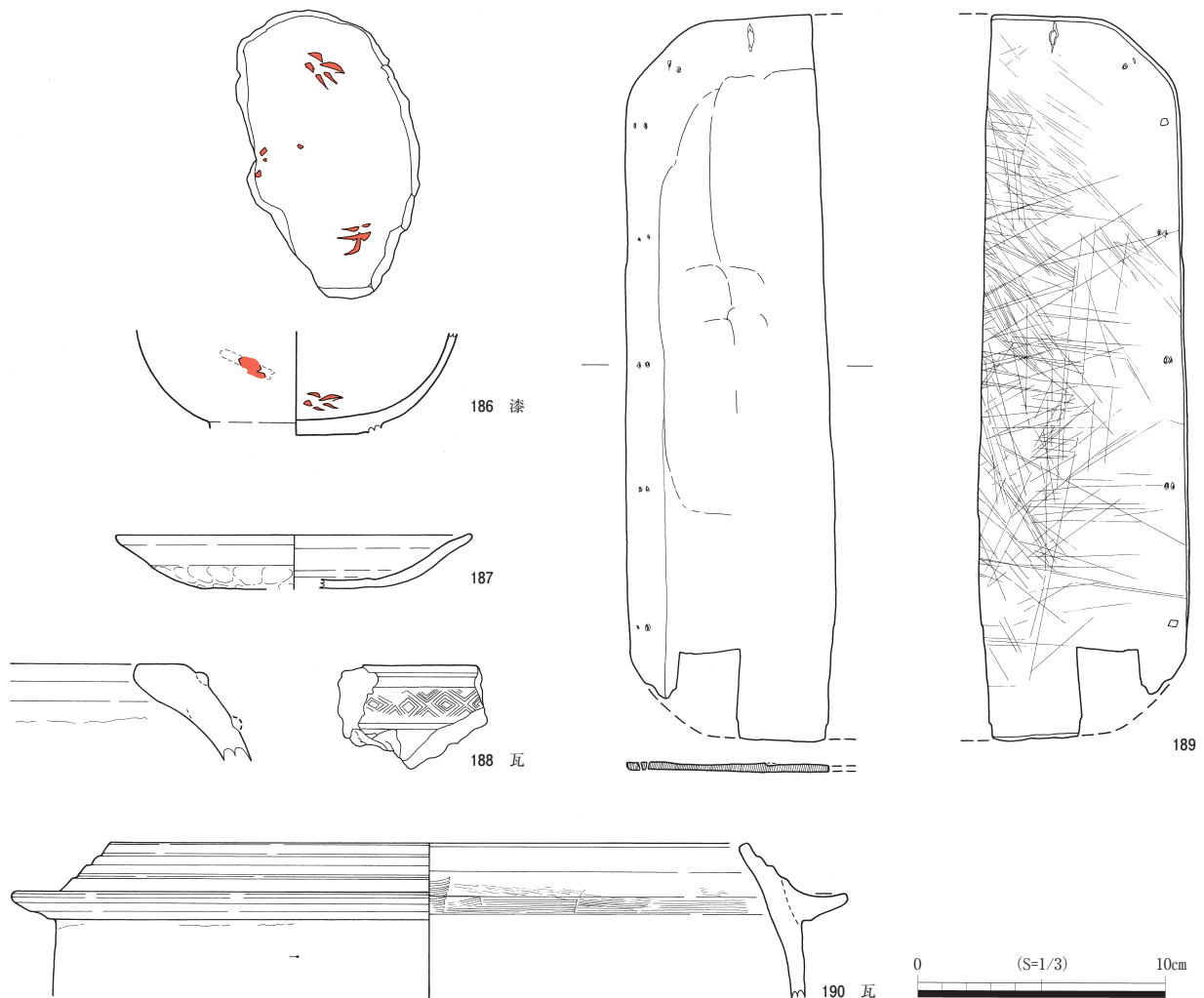
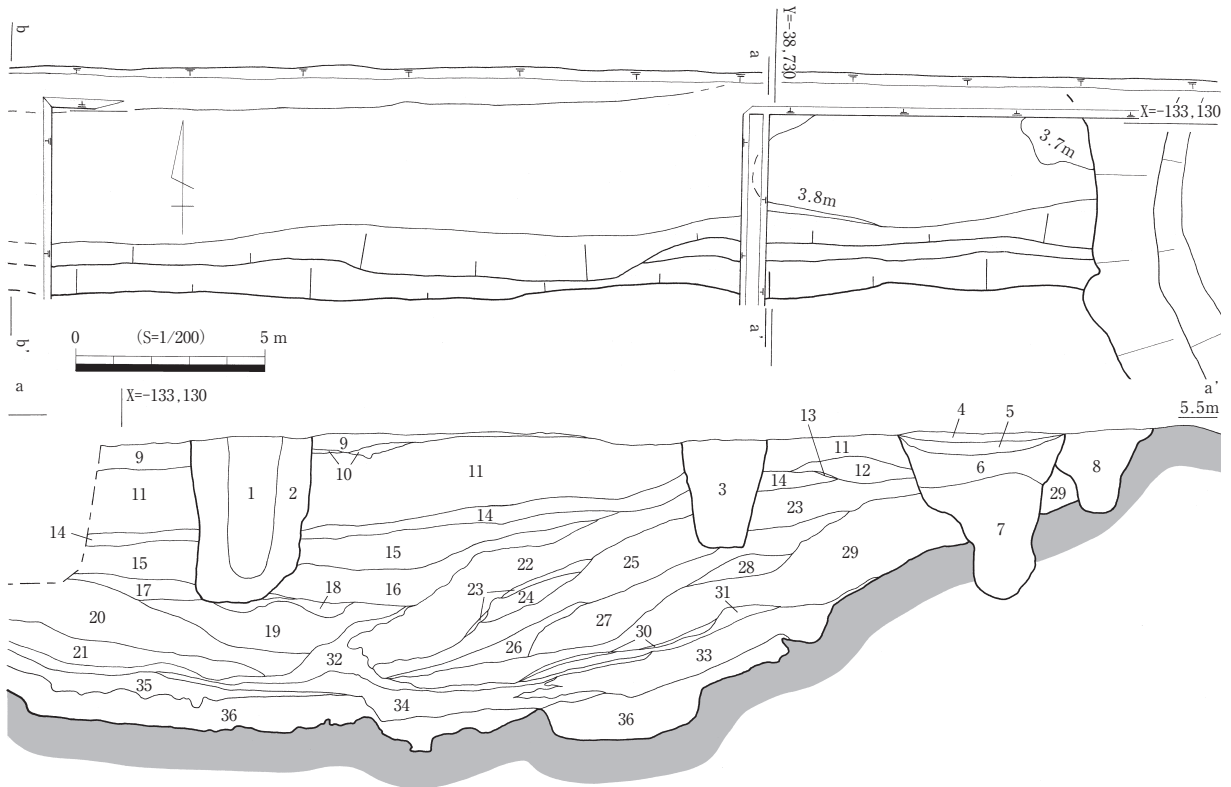
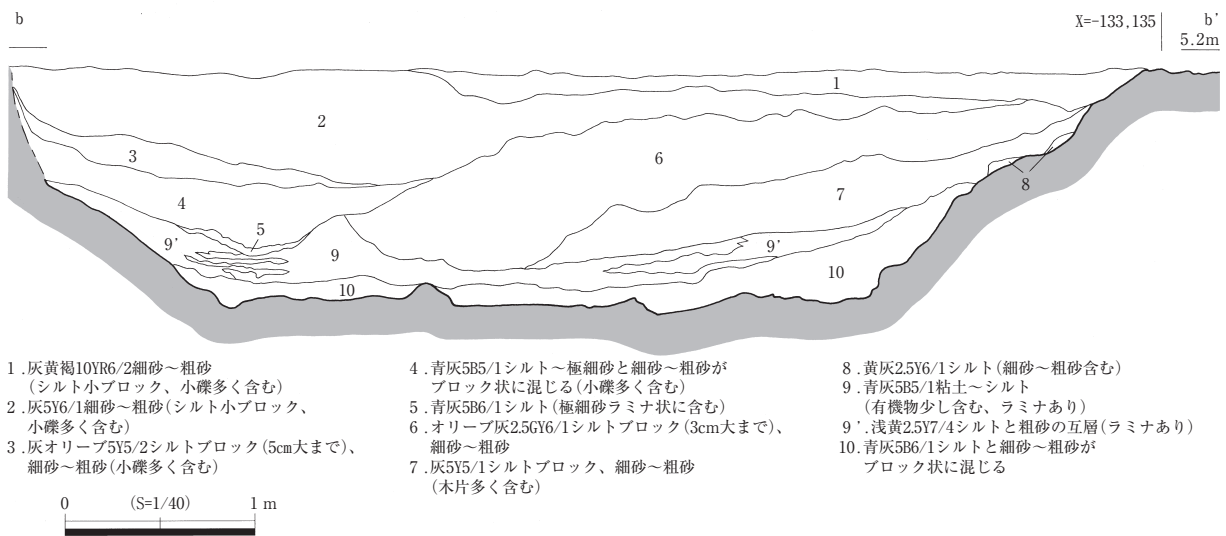


図35 450溝最下層 出土遺物



- | | | |
|---|---|---|
| <p>1. 褐灰10YR4/1細砂～粗砂混シルト(建物13-768柱穴)</p> <p>2. 灰黄褐10YR4/2細砂～粗砂混シルト(建物13-768柱穴)</p> <p>3. 灰黄褐10YR4/2細砂～粗砂混シルト(770ピット)</p> <p>4. におい黄褐10YR5/3細砂～粗砂混シルト(建物13-771柱穴)</p> <p>5. 灰黄褐10YR4/2細砂～粗砂混シルト(建物13-771柱穴)</p> <p>6. 灰黄褐10YR5/2細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)(建物13-771柱穴)</p> <p>7. 灰5Y4/1細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)(建物13-771柱穴)</p> <p>8. 黄灰2.5Y5/1細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)(772ピット)</p> <p>9. 灰黄褐10YR4/2細砂～粗砂混シルト(シルトブロック含む)</p> <p>10. 灰黄褐10YR6/2細砂～粗砂混シルト</p> <p>11. 灰黄褐10YR5/2細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> <p>12. 灰黄褐10YR4/2細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> | <p>13. 褐灰10YR5/1細砂</p> <p>14. におい黄褐10YR5/4細砂～極粗砂混シルト(シルトブロック含む)</p> <p>15. 暗灰黄2.5Y5/2細砂～粗砂混シルト(小礫含む)</p> <p>16. 暗灰黄2.5Y4/2細砂～粗砂混シルト(シルトブロック含む)</p> <p>17. 灰5Y4/1細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> <p>18. 暗灰黄2.5Y4/2細砂～粗砂(シルトブロック含む)</p> <p>19. 黄灰2.5Y4/1細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> <p>20. 暗灰黄2.5Y5/2細砂～粗砂(小礫、青灰5BG5/1粘土～シルトブロック含む)</p> <p>21. 暗灰黄2.5Y4/2粗砂～小礫(青灰5BG5/1粘土～シルトブロック含む)</p> <p>22. 黄褐2.5Y5/4細砂～粗砂混シルト(小礫、青灰5BG5/1粘土～シルトブロック含む)</p> <p>23. 暗灰黄2.5Y5/2細砂～粗砂(シルトブロック含む)</p> <p>24. 黄褐2.5Y5/3細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> | <p>25. におい黄褐10YR4/3細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> <p>26. におい黄2.5Y6/4細砂～粗砂(小礫含む)</p> <p>27. 暗灰黄2.5Y4/2細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> <p>28. 黄褐2.5Y5/3細砂～粗砂混シルト(小礫、シルトブロック含む)</p> <p>29. オリーブ褐2.5Y4/3細砂～粗砂混シルト</p> <p>30. 暗オリーブ灰2.5GY4/1粘土～シルト(粗砂含む)</p> <p>31. 暗灰黄2.5Y5/2細砂～粗砂</p> <p>32. 暗オリーブ灰2.5GY4/1粘土～シルト</p> <p>33. におい黄2.5Y6/3中砂～極粗砂(暗灰黄2.5Y4/2極細砂帯状に含む、シルトブロック含む)</p> <p>34. 灰7.5Y4/1粘土～シルト</p> <p>35. におい黄2.5Y6/3中砂～極粗砂(暗灰黄2.5Y4/2極細砂帯状に含む)</p> <p>36. 黄褐2.5Y5/3細砂～粗砂、褐灰10YR4/1粘土～シルトブロック(小礫含む)</p> |
|---|---|---|



- | | | |
|---|--|---|
| <p>1. 灰黄褐10YR6/2細砂～粗砂(シルト小ブロック、小礫多く含む)</p> <p>2. 灰5Y6/1細砂～粗砂(シルト小ブロック、小礫多く含む)</p> <p>3. 灰オリーブ5Y5/2シルトブロック(5cm最大で)、細砂～粗砂(小礫多く含む)</p> | <p>4. 青灰5B5/1シルト～極細砂と細砂～粗砂がブロック状に混じる(小礫多く含む)</p> <p>5. 青灰5B6/1シルト(極細砂ラミナ状に含む)</p> <p>6. オリーブ灰2.5GY6/1シルトブロック(3cm最大で)、細砂～粗砂</p> <p>7. 灰5Y5/1シルトブロック、細砂～粗砂(木片多く含む)</p> | <p>8. 黄灰2.5Y6/1シルト(細砂～粗砂含む)</p> <p>9. 青灰5B5/1粘土～シルト(有機物少し含む、ラミナあり)</p> <p>9'. 浅黄2.5Y7/4シルトと粗砂の互層(ラミナあり)</p> <p>10. 青灰5B6/1シルトと細砂～粗砂がブロック状に混じる</p> |
|---|--|---|

図36 465溝 平面・断面図

器羽釜（263）は、453ピット出土片と同一個体である。

最下層からは、土師器皿（187）・煮炊具、瓦器椀、瓦質土器羽釜（190）・火鉢または風炉（188）、須恵器甕、漆器椀（186）、折敷（189）、アカガシ亜属穀斗、ウメ核等が出土した。図化できないが前述の構造物部分から土師器へソ皿が出土している。

出土遺物は、コンテナ6箱分である。13世紀後葉のものもみられるが、おおよそ14世紀前葉を中心とする時期のものである。瓦質土器羽釜片が比較的多く出土したが、口縁部が直立するものと、内傾する口縁部に段を有し、鐙以下にケズリを施すもの等がみられる。瓦質土器甕は河内・和泉型で、須恵器甕には樹枝紋痕を持つものがみられる。

465溝を切り、107溝に切られている。

465溝（図36～40 カラー図版1～3 図版3・52・82）

調査区北西部に位置する、東西方向の溝である。幅6.0m以上、深さ約1.6mで、確認長は約35.2mである。底面のレベルは、西部ではT.P.3.8mでほぼ水平であるが、Y=-38,730ライン付近から東へ向かい、低くなる。埋土は、上層から下層まで細砂～粗砂にシルトブロックを含み、埋め戻し土と思われる。下層に一部粘土～シルト、有機物、粗砂等が互層になっている部分がみられるが、直下の最下層、直上層ともにブロック土であり、埋め戻し途中の一時的な流れ込みであると考えられる。

遺物は、上層から、土師器皿（191）、瓦器椀（192）、瓦質土器羽釜、須恵器鉢（196）、瀬戸焼天目椀（194）・折縁小皿（193）、常滑焼甕、高麗象嵌青磁（197）、輸入陶器（198・899）等が出土している。輸入陶器（899）は、黒色釉を施すが内面は縞模様状で、胎土に暗赤褐色の斑点がみられる。70溝、450溝出土片と接合した。高麗青磁片は、第3層出土のもの（5）と同一個体である可能性が高い。

下層からは、土師器皿（199～209）、瓦器椀（210）、瓦質土器羽釜（215～217）・火鉢または風炉（218）、須恵器椀・鉢（213・214）・甕（219）、山茶椀（212）、瀬戸焼片、常滑焼甕（220・221）、備前焼播鉢・甕（222）、輸入陶器鉢（211）、アカニシ等が出土している。常滑焼甕（221）は、70溝、107溝

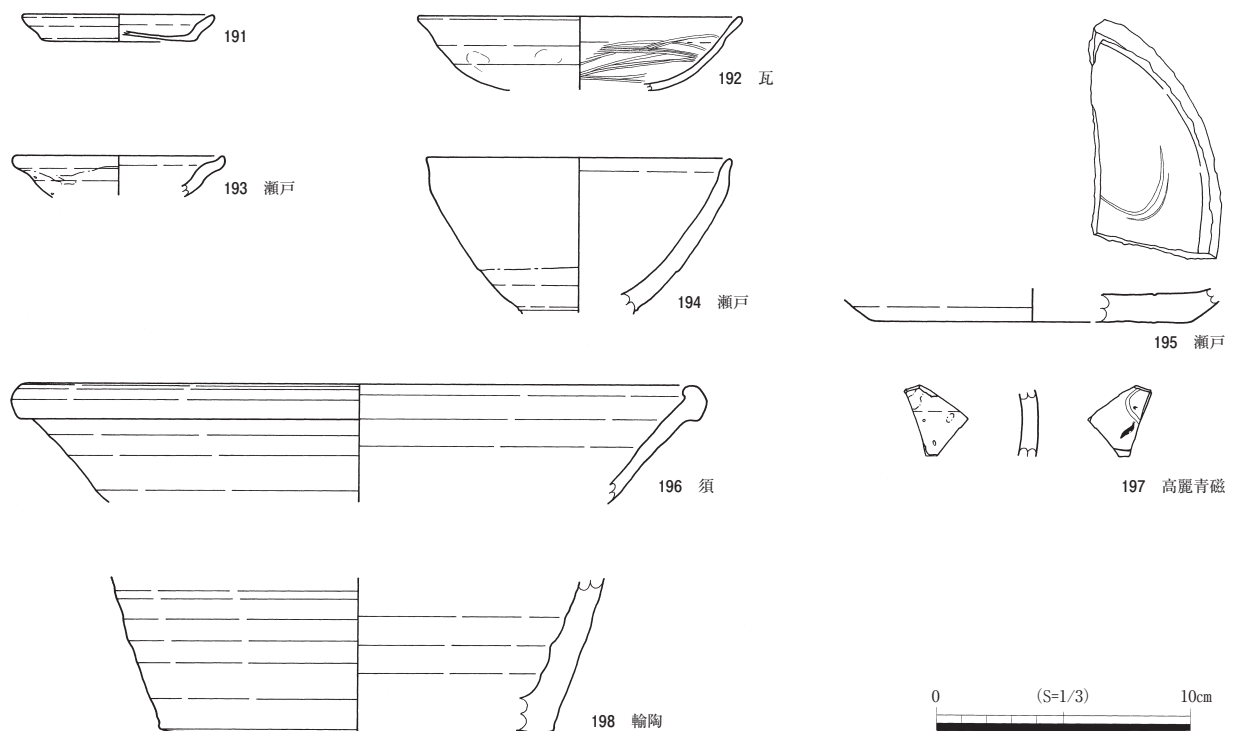


図37 465溝上層 出土遺物

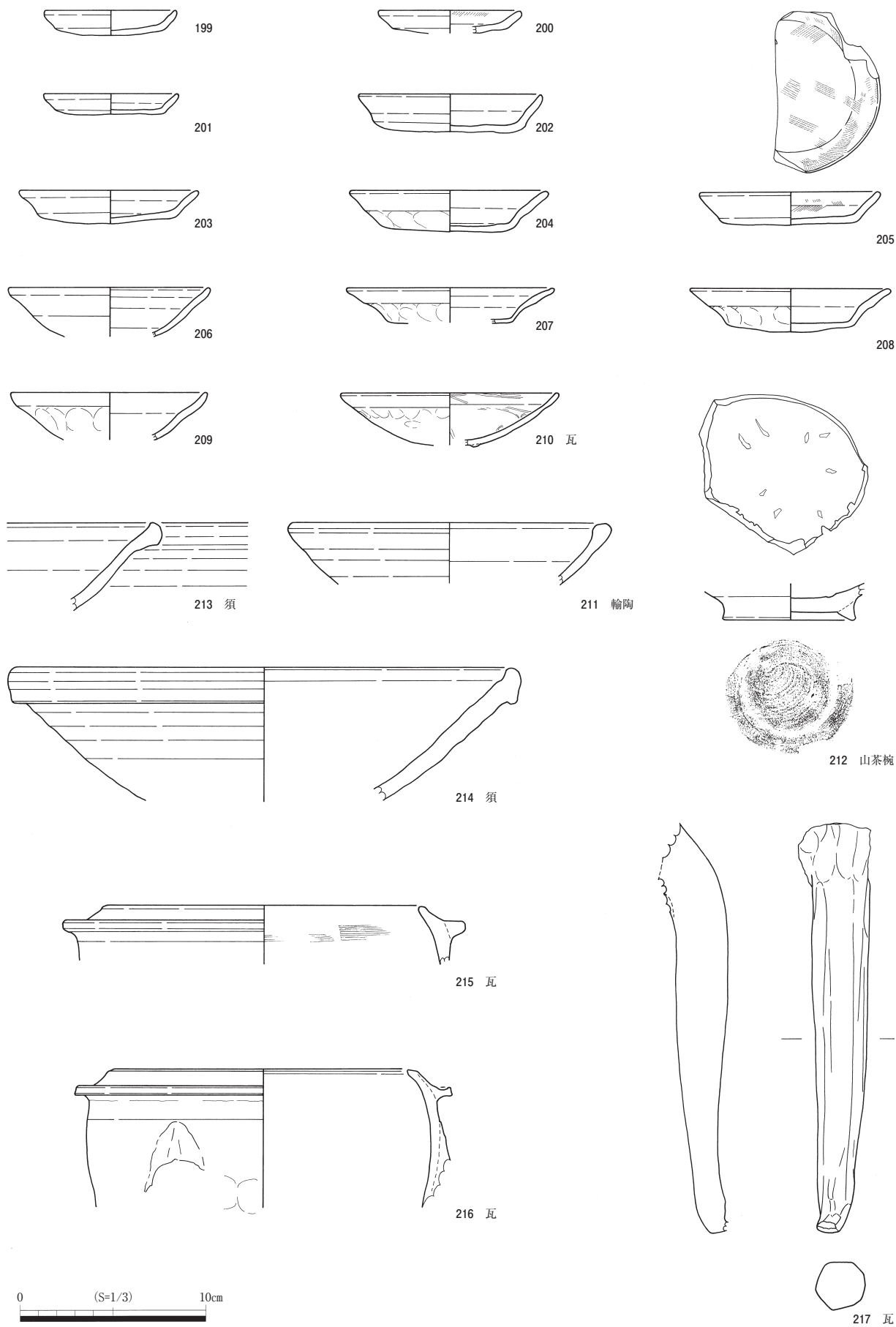


図38 465溝下層 出土遺物(1)

第3節 第5面（第5・6層）

下層出土のものと接合した。備前焼甕（222）は、107溝下層、450溝上層出土のものと接合した。輸入陶器鉢（211）は、内外面とも施釉されていない。

最下層からは、土師器皿（223～233）、黒色土器、瓦器椀、瓦質土器羽釜（237・238）・火鉢（236）、須恵器鉢（235）・甕、常滑焼、瀬戸焼、青磁碗（234）、輸入陶器、漆器椀、つちのこ（239）、馬歯（図版82-8）が出土している。漆器椀片は図化できないが、外面黒色、内面赤色である。

出土遺物は、コンテナ4箱分で、大半は小片である。古いものも含まれるが、14世紀前葉を中心とする時期のものである。

南北溝である450溝に東側を切られている。

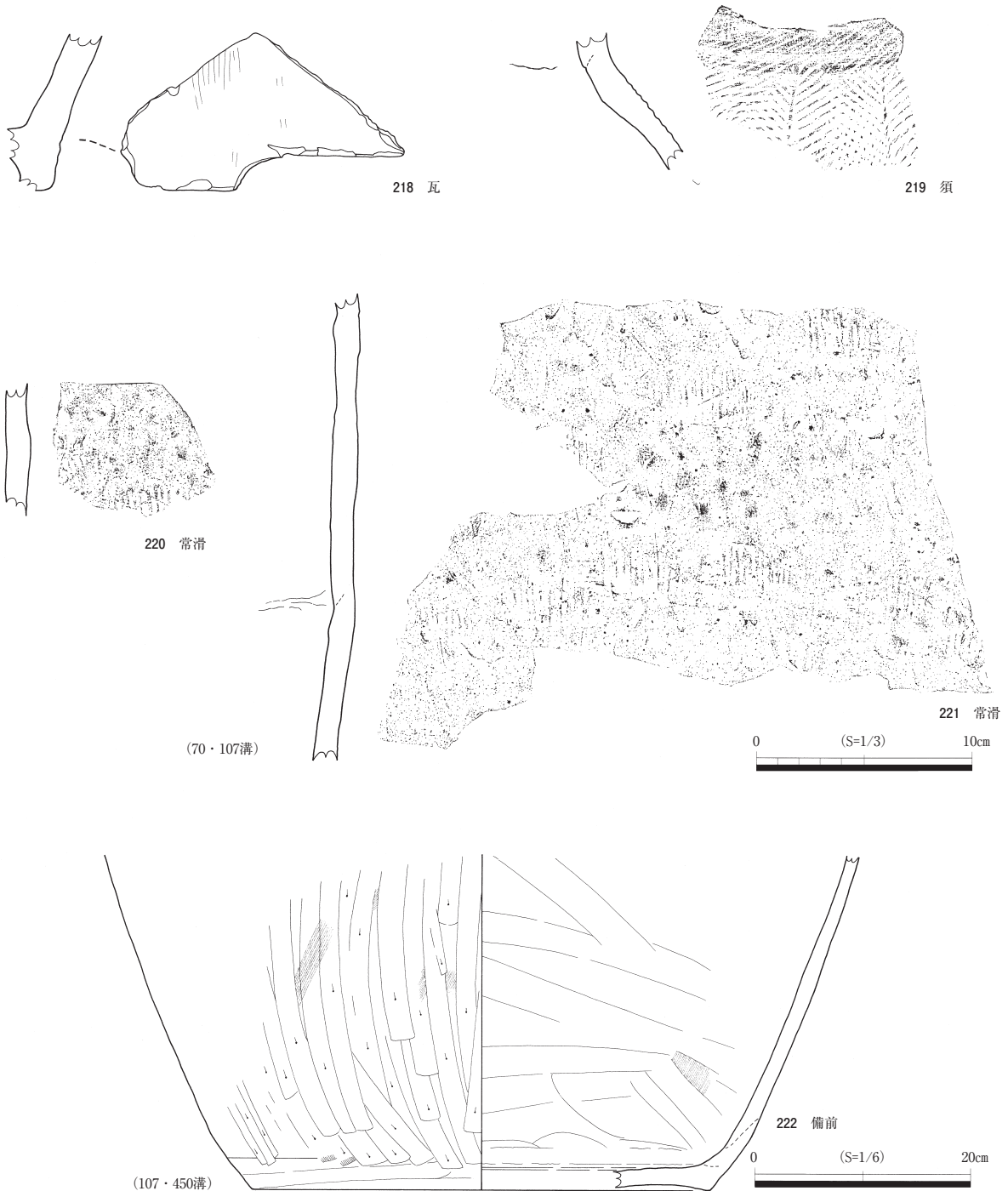


図39 465溝下層 出土遺物（2）（1/6=222）

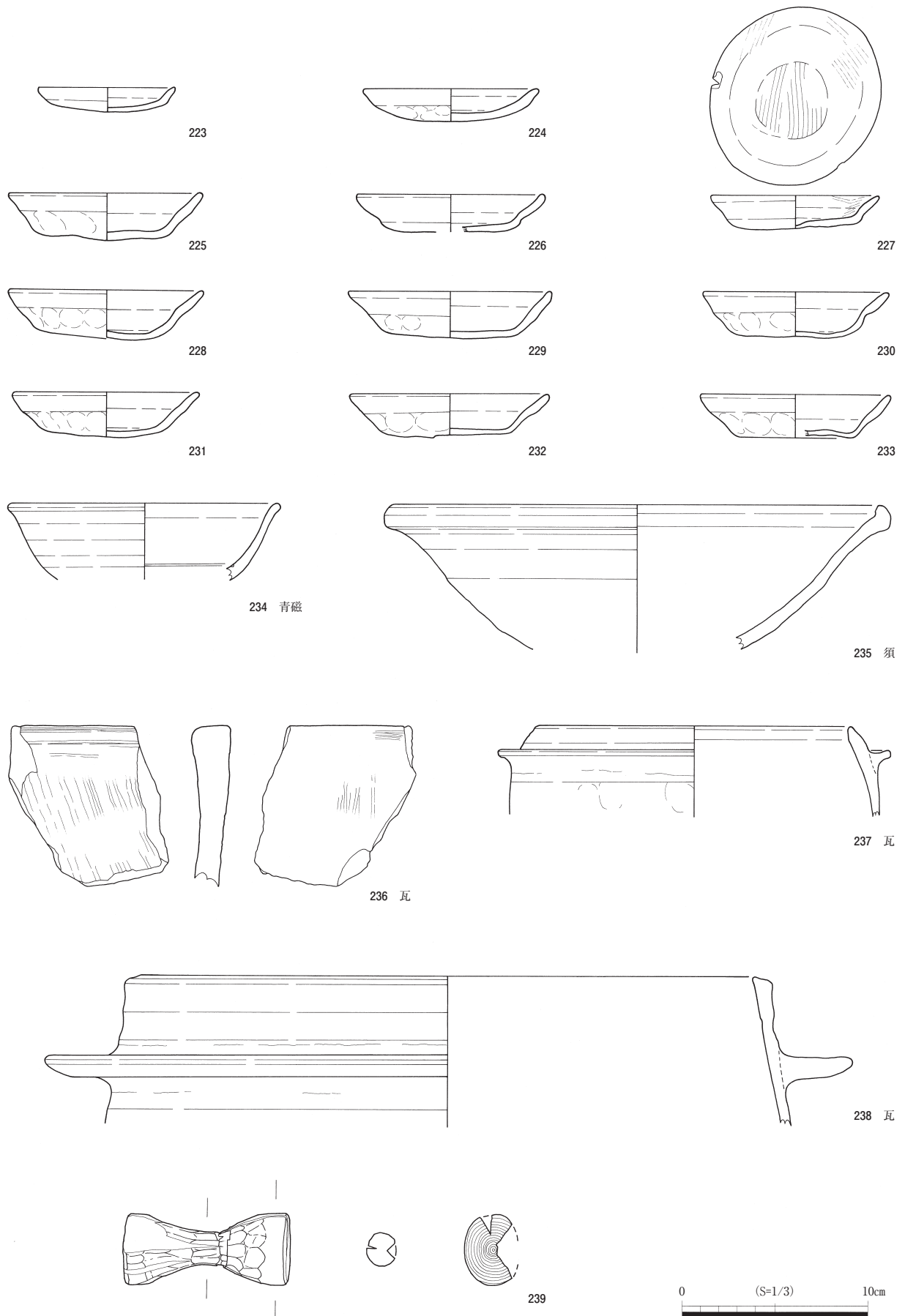


図40 465溝最下層 出土遺物

2. 西半（図41 図版2）

調査区中央部に位置する南北方向の溝、107・450溝以西を西半として報告する。柱穴を多数検出し、掘立柱建物等を復元した。前述した大規模溝群の埋土上でも多数の遺構を検出している。

以下、建物、柱列、柱穴、井戸、溝、ピット、土坑の順に記述する。

建物10〔256・317・434・480・485・488・489・520・521柱穴〕（図42 図版6）

中央部西寄りに位置する。東西3間×南北2間、約6.6m×約4.0m、面積約26.4㎡である。方位はN-3°-Wで、柱間は1.9~2.2mである。北半の柱穴は465溝埋土上で検出した。北東隅で柱穴を検出していないが、溝埋土上での遺構検出が困難であったことによる。柱根を残すものが多く、樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、256柱穴から土師器小皿・煮炊具、瓦器椀が、317・434・520柱穴からそれぞれ土師器皿、瓦器椀が出土している。すべて小片である。256柱穴出土の土師器小皿片は、体部上半から口縁部にかけて外反し、端部を若干上方へ向けておさめるもので、14世紀前葉を中心とする時期のものである。

南辺から南へ約2.8mの位置に、426・519柱穴があり、この建物と柱の並びが揃っている。建物の一部である可能性もあるが、南辺からの柱間が他に比べて広くなることから、別に柱列5とした。いずれにしても、同時期のものであることが想定できる。建物11~13・18、465溝と重複する。柱穴の切り合い関係がなく、建物の先後関係は不明である。465溝より新しい。

建物11〔212・257・286・369・380・449・451・461・495柱穴〕（図43 図版6）

中央部に位置する。東西2間×南北2間、約9.0m×約7.4m、面積約66.6㎡であるが、調査区外に続いている可能性もある。方位は、N-1°-Eである。柱間は東西方向で4.2~4.9m、南北方向北半で約3.4m、南半で約4.0mであり、東西列の柱の並びが揃っている。断面図に掲載できていないが380柱穴から柱根が出土しており、樹種同定結果を第4章に掲載している。柱痕は286柱穴にみられる。

遺物は、369柱穴から土師器皿、瓦器椀、380柱穴から瓦器椀、449柱穴から土師器皿、461柱穴から土師器皿、瓦器椀が出土している。すべて小片である。461柱穴出土の土師器皿小片は、14世紀代のものかと思われる。

建物10・12~18、465・518溝と重複する。380柱穴と、建物18の470柱穴が切り合うが、先後関係を確認できていない。449・461柱穴が、建物12の459・462柱穴にそれぞれ切られているため、建物12より古い。北辺の柱穴は465溝埋土上で検出したため、465溝より新しい。449柱穴が518溝を切っており、518溝より新しい。

建物12〔338・350・390・455・459・462・548柱穴〕（図43 図版7）

中央部に位置する。南北2間×東西2間、約8.8m×約8.4m、面積約73.9㎡であるが、調査区外に続いている可能性もある。方位はN-3°-W、柱間は南北方向で3.9~4.6m、東西方向南半で3.8~4.4mである。北半の柱穴は465溝埋土上で検出した。北西部分で柱穴を検出していないが、溝埋土上での遺構検出が困難であったことによる。柱根、柱痕を残すものがあり、樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、338・459柱穴から土師器皿、瓦質土器、350柱穴から瓦質土器、390柱穴から土師器皿、瓦質土器煮炊具、須恵器椀、455柱穴から土師器ヘソ皿が出土している。すべて小片である。

建物10・11・13~18、465・518溝と重複する。459・462柱穴が、建物11の449・461柱穴を切っており、建物11より新しい。465溝より新しい。459柱穴が518溝を切っており、518溝より新しい。

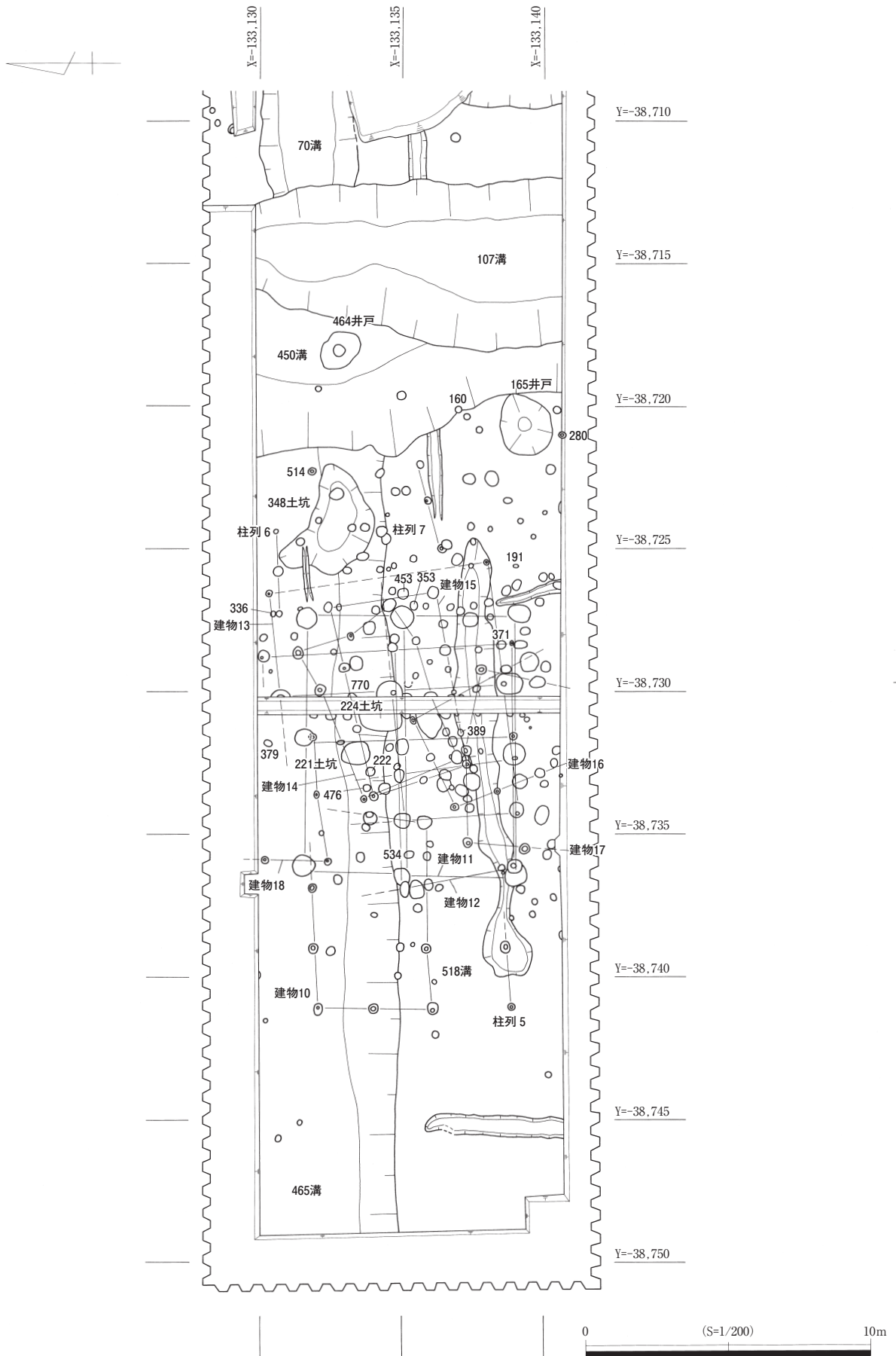


図41 第5面西半 平面図

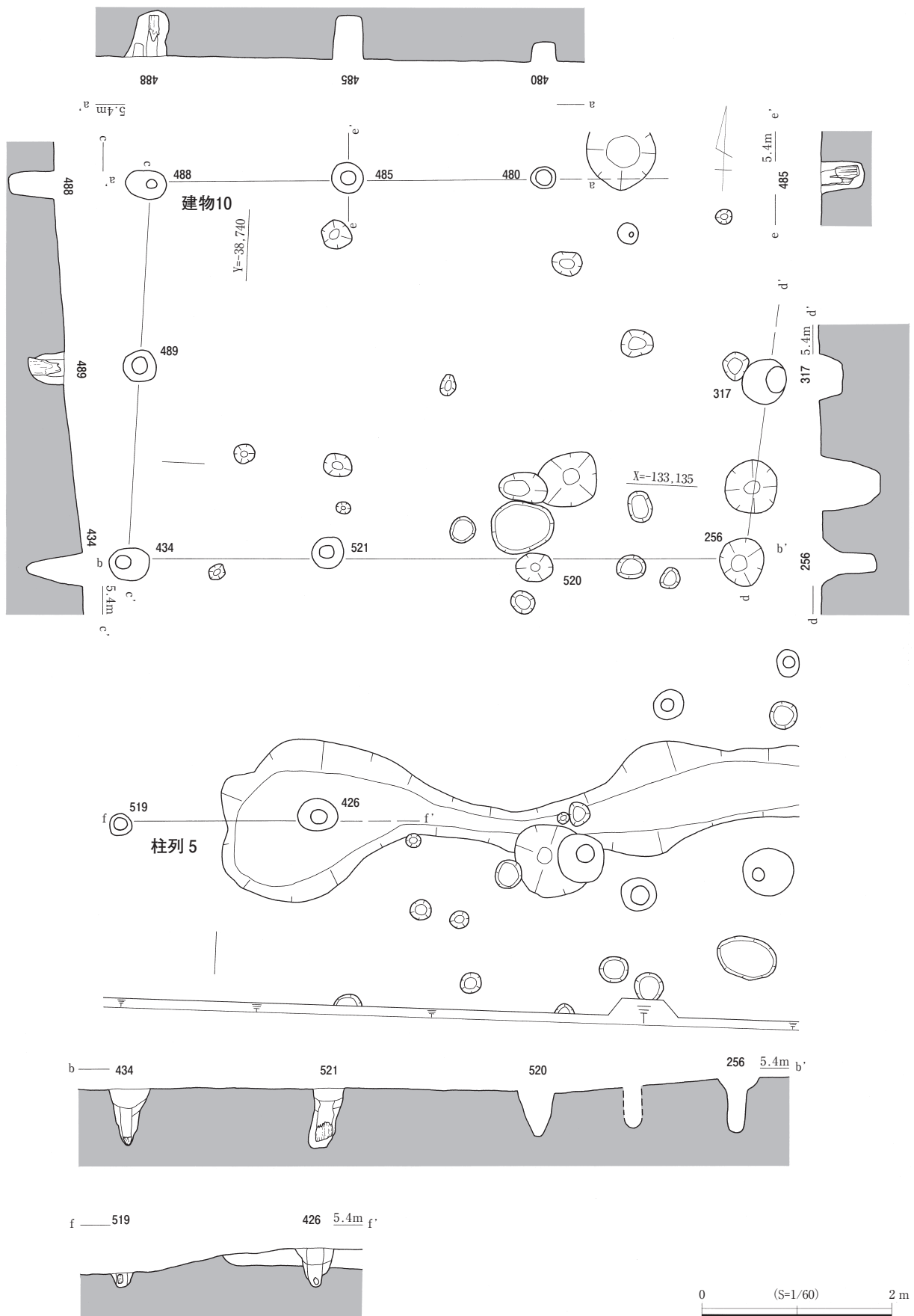


图42 建物10、柱列5 平面・断面图

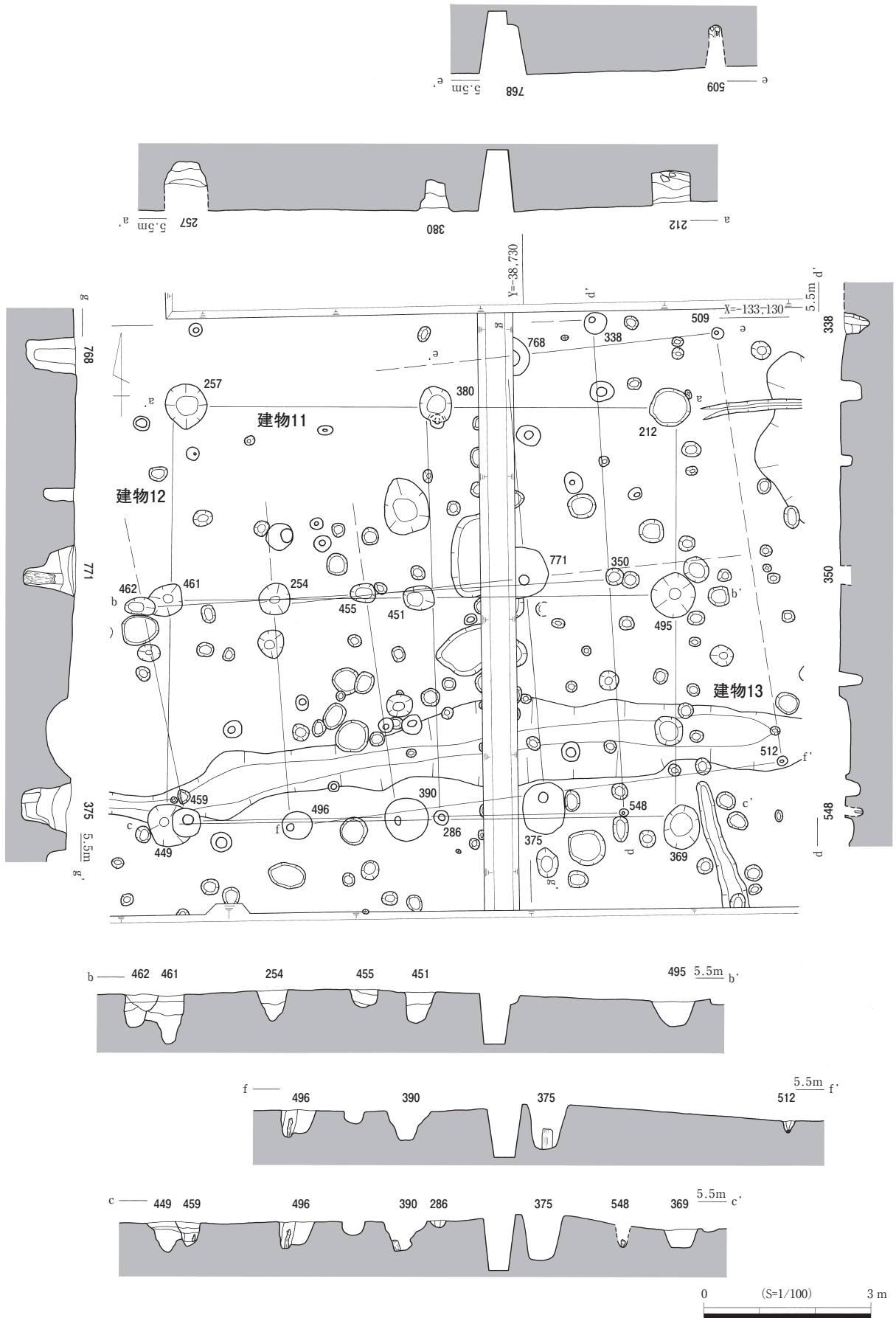


図43 建物11~13 平面・断面図

建物13〔254・375・496・509・512・768・771柱穴〕（図43・44 図版7・53）

中央部に位置する。東西2間×南北2間、約8.8m×約7.8m、面積約68.6㎡であるが、調査区外に続いている可能性もある。方位はN-6°-Wで、柱間は南北方向で3.9~4.0m、東西方向で3.7~4.5mである。北半の柱穴は465溝埋土上で検出した。北西隅と東辺中央で柱穴を検出していないが、溝埋土上での遺構検出が困難であったことによる。254柱穴以外の柱穴で柱根、柱痕（768柱穴のみ）を検出した。509柱穴では、柱根の下に根石（斑状花崗閃緑岩）が据えられていた。496柱穴に遺存していた柱根（240）は、東半の建物21の133柱穴、第7面の柱列3の674柱穴の礎板（312・537）と同種の材と思われる。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、254柱穴から土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜、須恵器鉢、瀬戸焼瓶等片、375柱穴から土師器皿・鍋、瓦器椀、509・768柱穴から土師器皿、771柱穴から土師器皿、瓦器椀が出土している。すべて小片である。254・375柱穴出土の土師器小皿は、体部上半から口縁部にかけて外反するもので、14世紀前葉を中心とする時期のものである。254柱穴出土の瓦質土器羽釜は、内傾する口縁部に段を有し、鏝以下にケズリを施す。

建物10~12・14~18、柱列6、465・518溝と重複する。柱穴の切り合い関係がなく、建物の先後関係

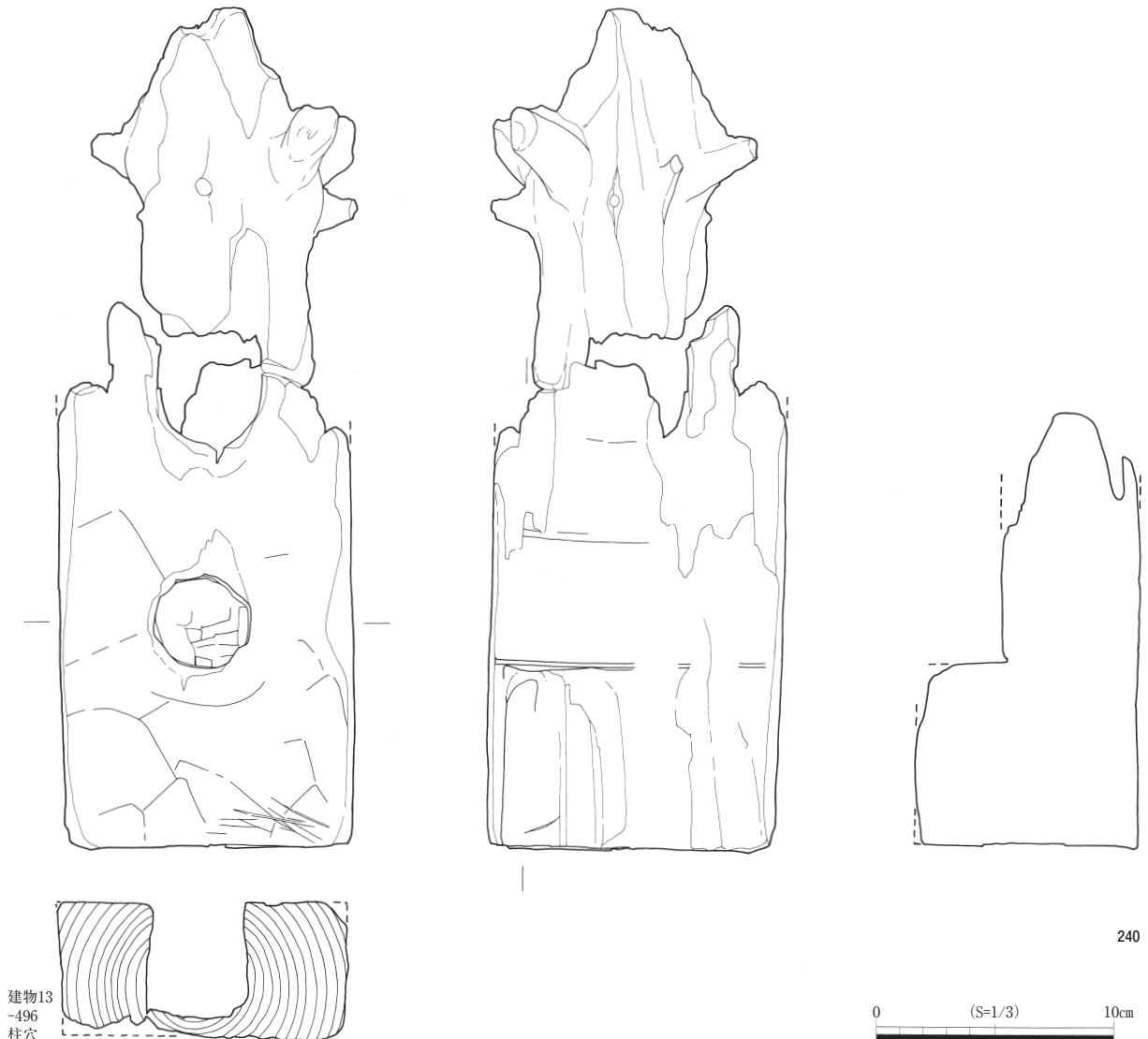


図44 建物13 出土遺物

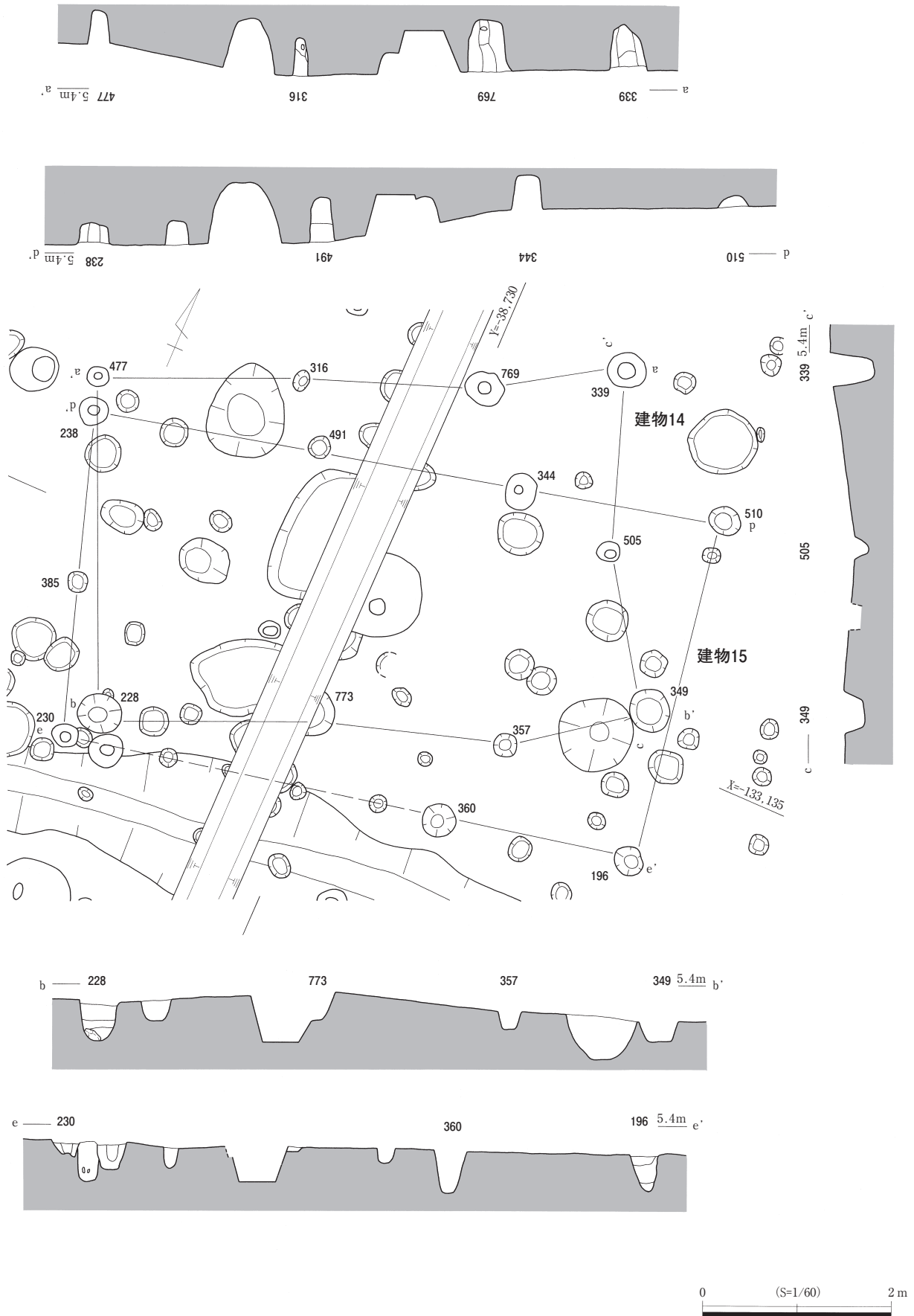


図45 建物14・15 平面・断面図

は不明である。465溝より新しい。512柱穴が518溝を切っており、518溝より新しい。

建物14〔228・316・339・349・357・477・505・769・773柱穴〕（図45 図版7）

中央部に位置する。東西3間×南北2間、約5.8m×約3.6m、面積約20.9㎡である。方位はN-23°-Wで、柱間は1.5~2.2mである。柱根、柱痕を残すものが多く、樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、228柱穴から土師器皿、316・339柱穴から土師器皿、瓦器椀、769柱穴から瓦器椀が出土している。すべて小片で、詳細な時期のわかるものはない。

建物11~13・15・16、465溝と重複する。柱穴の切り合い関係がなく、建物の先後関係は不明である。北半の柱穴は465溝埋土上で検出しており、465溝より新しい。

建物15〔196・230・238・344・360・385・491・510柱穴〕（図45 図版7）

中央部に位置する。東西3間×南北2間、約6.5m×約3.6m、面積約23.4㎡である。方位はN-13°-Wで、柱間は東西で2.1~2.4m、南北で1.7~1.8mである。柱根、柱痕を残すものがあり、樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、196・238・344柱穴から土師器皿、360柱穴から土師器皿、瓦器椀、491・510柱穴から瓦器椀が出土している。すべて小片で、詳細な時期のわかるものはない。

建物11~14・16・17、465溝と重複する。柱穴の切り合い関係がなく、建物の先後関係は不明である。北辺の柱穴は465溝埋土上で検出しており、465溝より新しい。

建物16〔226・244・247・250・466・538・774柱穴〕（図46 図版7）

中央部南寄りに位置する。南側の調査区外に続くと考えられ、南北2間以上×東西2間、3.7m以上×約3.6m、面積13.3㎡以上である。方位はN-23°-Wで、柱間は1.4~2.1mである。柱痕を残すものが多い。

遺物は、250・466柱穴から土師器皿、538・774柱穴から瓦器椀が出土している。すべて小片で詳細な時期のわかるものはない。

建物11~15・17、518溝と重複する。柱穴の切り合い関係がなく、建物の先後関係は不明である。247・774柱穴が518溝を切っており、518溝より新しい。

建物17〔229・263・264・282・376柱穴〕（図46 図版8）

中央部南寄りに位置する。南側の調査区外に続くと考えられ、南北1間以上×東西2間、2.1m以上×約6.0m、面積12.6㎡以上である。方位はN-7°-Eで、柱間は南北で約2.1m、東西で2.9~3.2mである。376柱穴以外、柱痕を残す。

遺物は、263・264柱穴から土師器皿、282柱穴から土師器皿、376柱穴から瓦器椀が出土している。すべて小片で、詳細な時期のわかるものはない。

建物11~13・15・16、518溝と重複し、建物14と近接する。柱穴の切り合い関係がなく、建物の先後関係は不明である。229・282柱穴が518溝を切っており、518溝より新しい。

建物18〔469・470・478・479柱穴〕（図47 図版8）

中央部北寄りに位置する。北側の調査区外に続くと考えられ、南北1間以上×東西2間、2.2m以上×約4.4m、9.7㎡以上である。柱穴はすべて465溝埋土上で検出した。溝埋土上での遺構検出は困難であったため、東側に続いている可能性も否定できない。方位は西辺が正方位で、柱間は2.0~2.4mである。すべての柱穴が柱痕を残しており、樹種同定の結果を第4章に掲載している。

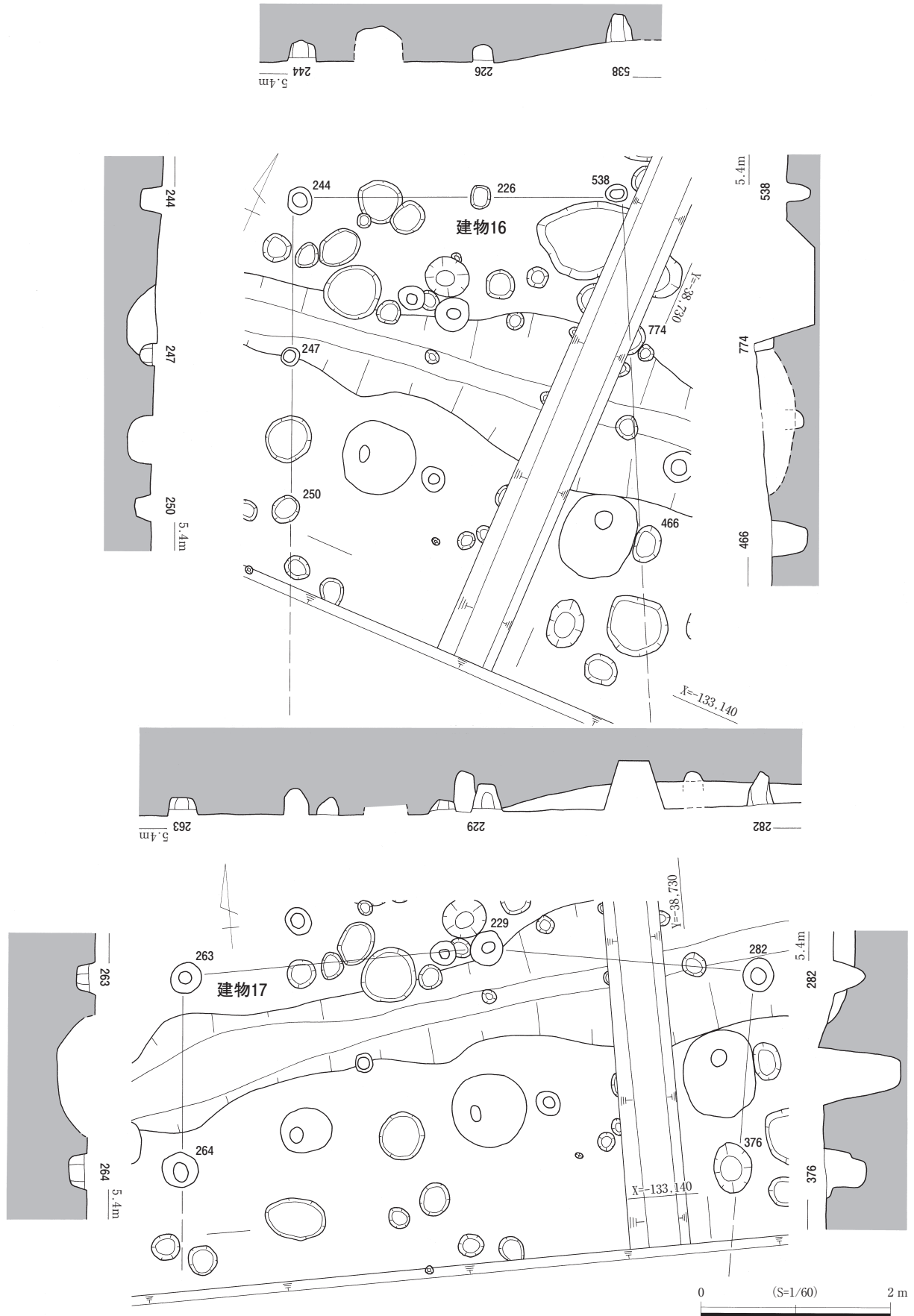


図46 建物16・17 平面・断面図

遺物は、478柱穴から土師器皿、瓦器椀、479柱穴から土師器皿が出土している。すべて小片であり、詳細な時期のわかるものはない。

建物10～13、465溝と重複する。465溝より新しい。

柱列5〔426・519柱穴〕（図42 図版8）

中央部西寄りに位置する。東西1間、約2.1mである。北へ約2.8mの位置に、建物10があり、これと柱の並びを揃えている。建物の一部である可能性もあるが、建物南辺からの柱間が他に比べて広くなることから、別に柱列とした。建物10と同時期の柵、塀等、南側の調査区外に続く想定すれば、建物である可能性もある。方位は、建物10と同じである。遺存していた柱根の樹種同定の結果を第4章に掲載している。遺物は、出土していない。426柱穴が518溝を切っており、溝より新しい。

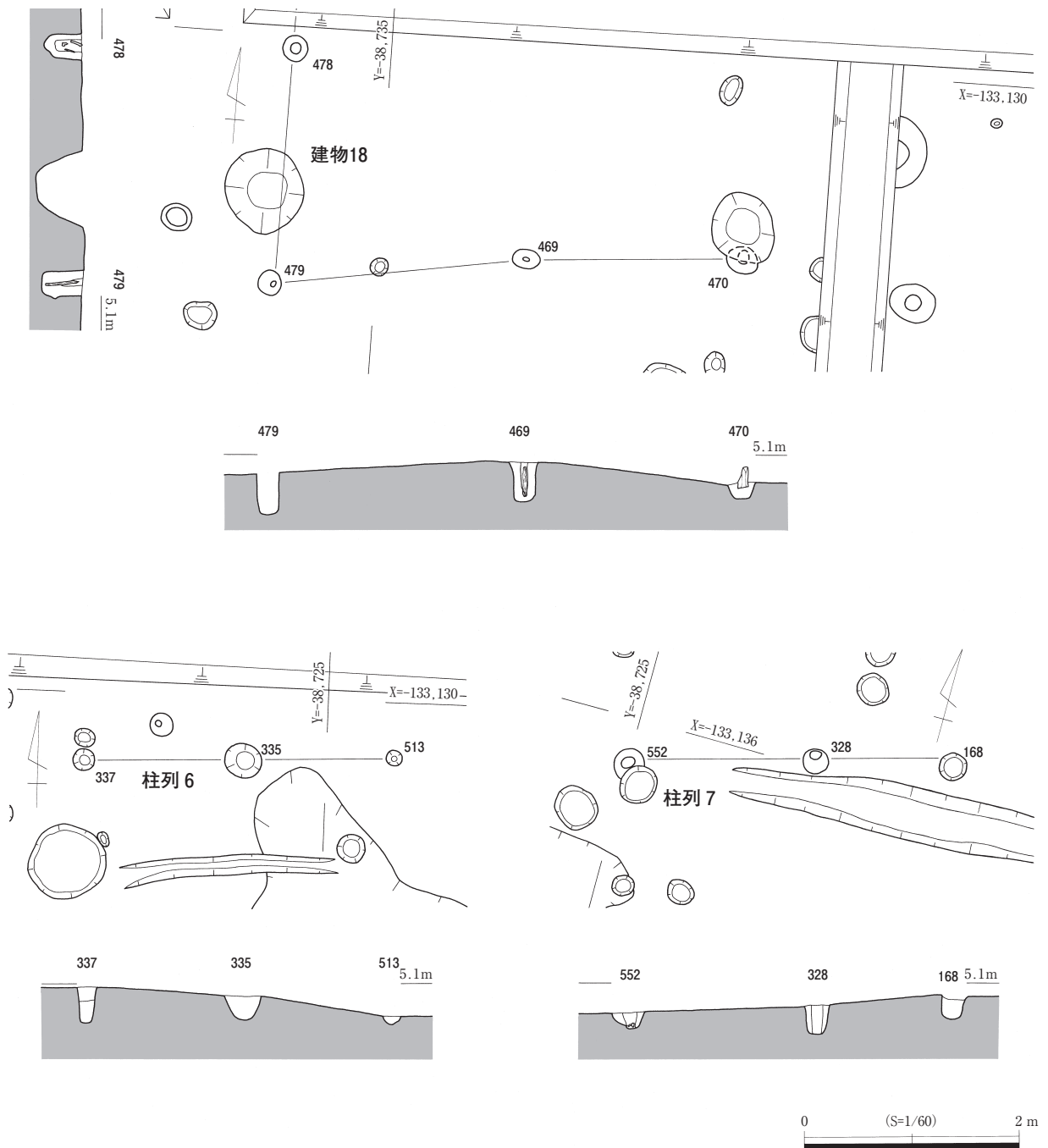


図47 建物18、柱列6・7 平面・断面図

柱列6〔335・337・513柱穴〕(図47 図版8)

中央部北東寄りに位置する。東西2間、約2.9mである。北側の調査区外に続くと想定すれば、建物である可能性もある。柱間は1.4~1.5mである。

遺物は、335柱穴から土師器皿、337柱穴から瓦器椀、513柱穴から土師器皿、瓦器椀が出土している。すべて小片であり、詳細な時期のわかるものはない。建物13と重複する。

柱列7〔168・328・552柱穴〕(図47)

東部に位置する。東西2間、約3.0mである。柱間は、1.3~1.7mである。328柱穴の柱根の樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、328柱穴から土師器皿が出土している。小片で詳細な時期は不明である。

280・353・476・514柱穴 (図41・48)

建物に復元できなかったが、280・353・476・514柱穴は、柱根、柱痕を残す。樹種同定の結果は第4章に掲載している。遺物は、280柱穴から土師器皿、瓦器椀が、353柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器椀、焼土塊が、476柱穴から瓦器椀が、514柱穴から土師器皿、瓦器椀、須恵器が出土している。すべて小片である。514柱穴出土の土師器小皿は、体部上半から口縁部にかけて外反するもので、14世紀前葉を中心とする時期のものである。

165井戸 (図50・51 図版9)

南東部に位置する、素掘りの井戸である。径1.8~2.2mの不整円形で、深さ約1.3mである。底面は、第12層シルト(水田作土)層に及んでいる。埋土は、下層までブロック土を含んでおり、埋め戻し土であると考えられる。

遺物は、土師器皿、黒色土器A類、瓦器椀(241)、瓦質土器羽釜脚、須恵器甕の小片が少量出土している。土師器小皿片、瓦器椀片に、13世紀後葉を中心とする時期のものがある。

464井戸 (図49・51・52 図版9・54)

東部に位置する、桶組みの井戸である。径1.3~1.8mの不整円形で、深さ約1.2mである。450溝調査中に検出した。断面で450溝埋土上面より約0.3m低いレベルから掘削されていることを確認しているが、平面形の大部分はそれより約0.5m低いレベルでしか検出できていない。そのため上部の構造が不明である。下部で桶を転用した枠を2段確認した。下段は径約40cmの桶が完存しているが、上段はタガの一部が残るのみで、抜き取られた可能性がある。下段桶の掘り方を埋める8層の上面で、枠の周囲に、径

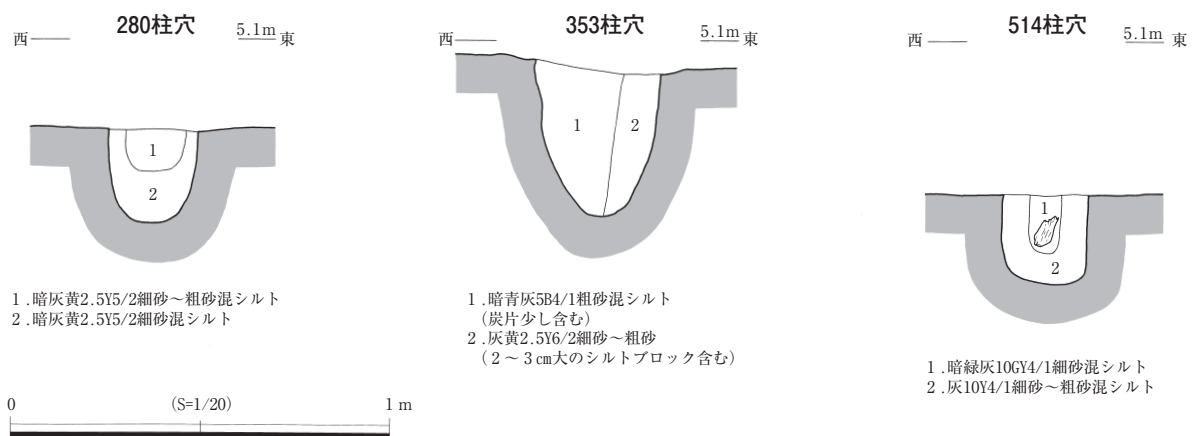


図48 第5面西半柱穴 断面図

第3節 第5面 (第5・6層)

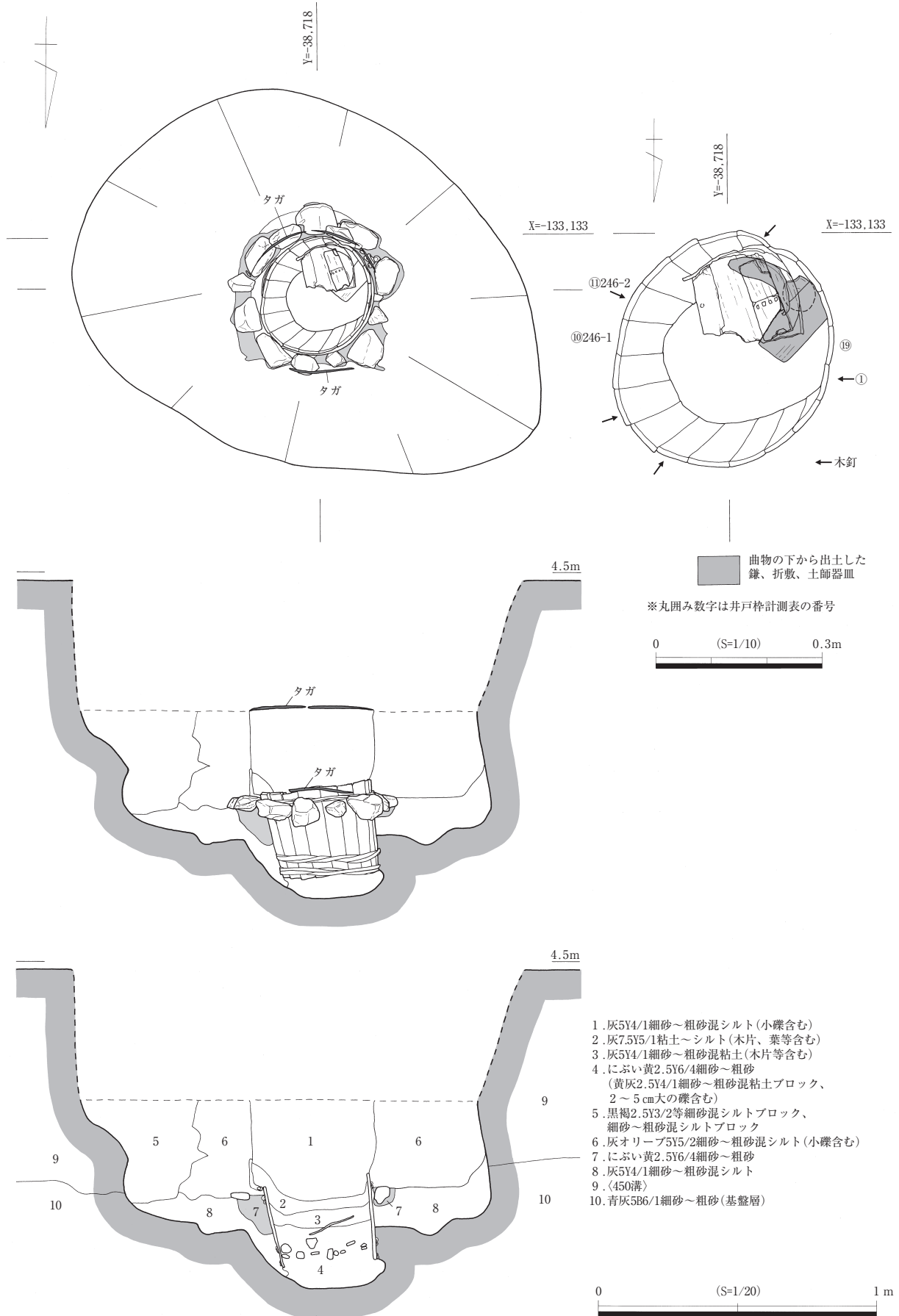


図49 464井戸 平面・断面・立面図

約0.6mの掘り方を伴う石敷きを検出した。石の上面は比較的平らで、ほぼレベルが揃っており、上段桶のタガと平面位置が一致することから、上段桶の基礎と考えられる。底面は、第15面以下の細砂層に及んでいる。なお、桶の下端から約1.0cmの位置には、5箇所到底板固定のための木釘がある。

遺物は、枠内4層から曲物片(245)、鎌(243)、折敷片(244)、土師器皿(242)が重なった状態で出土したほか、枠内から瓦質土器羽釜、掘り方から土師器皿、瓦器碗、瓦質土器の小片が出土した。また、出土層位は不明であるがほかに土師器煮炊具、瓦質土器甕、須恵器、国産陶器の小片がある。土師器皿(242)は、14世紀中～後葉のものである。瓦質土器甕は、頸部が肥厚し短く外反する河内・和泉

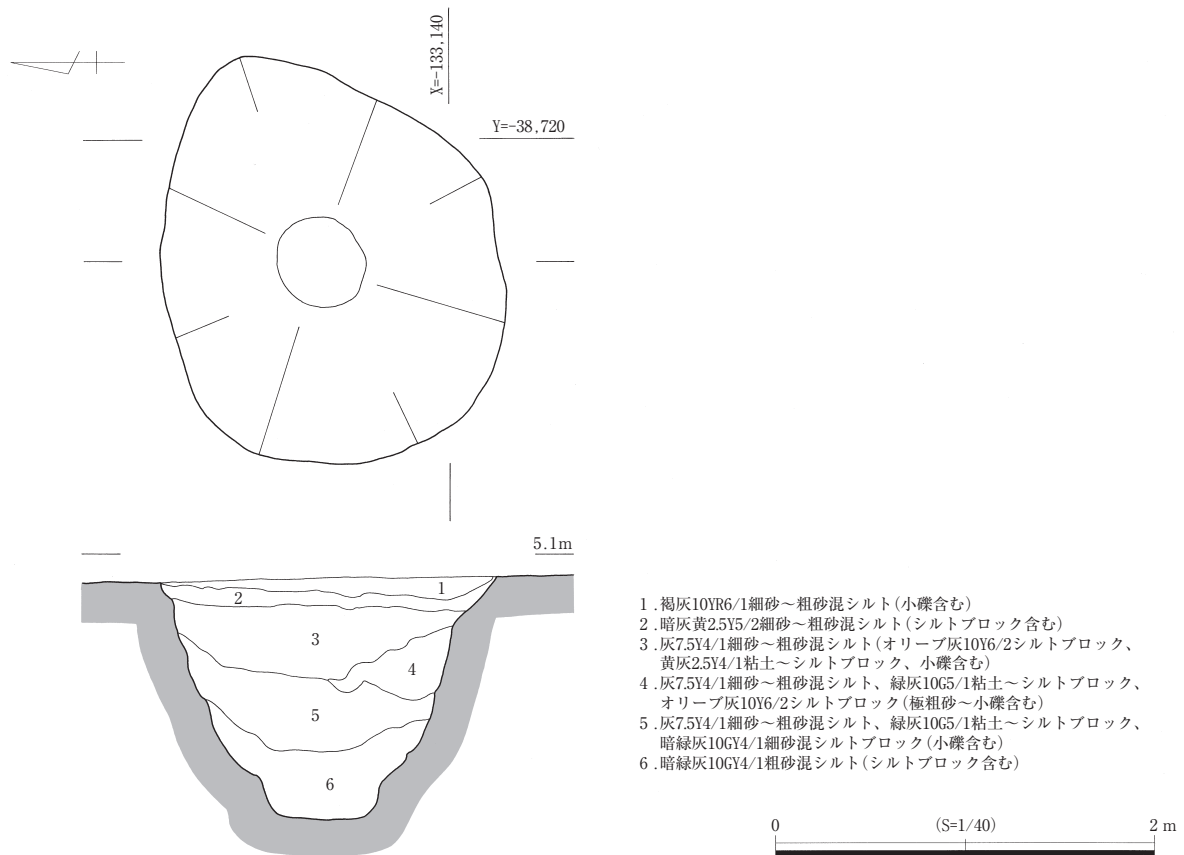


図50 165井戸 平面・断面図

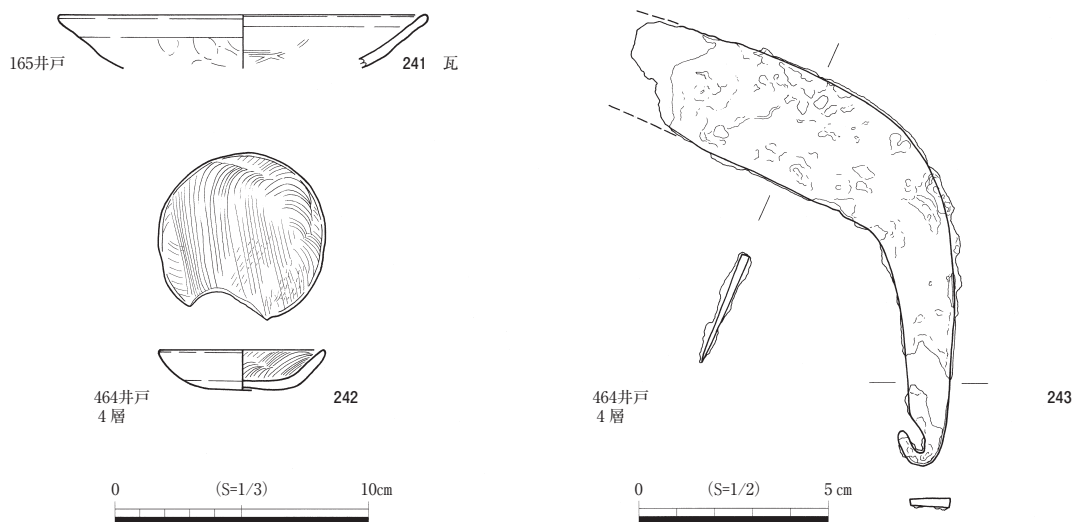


図51 165・464井戸 出土遺物(1) (1/2=243)

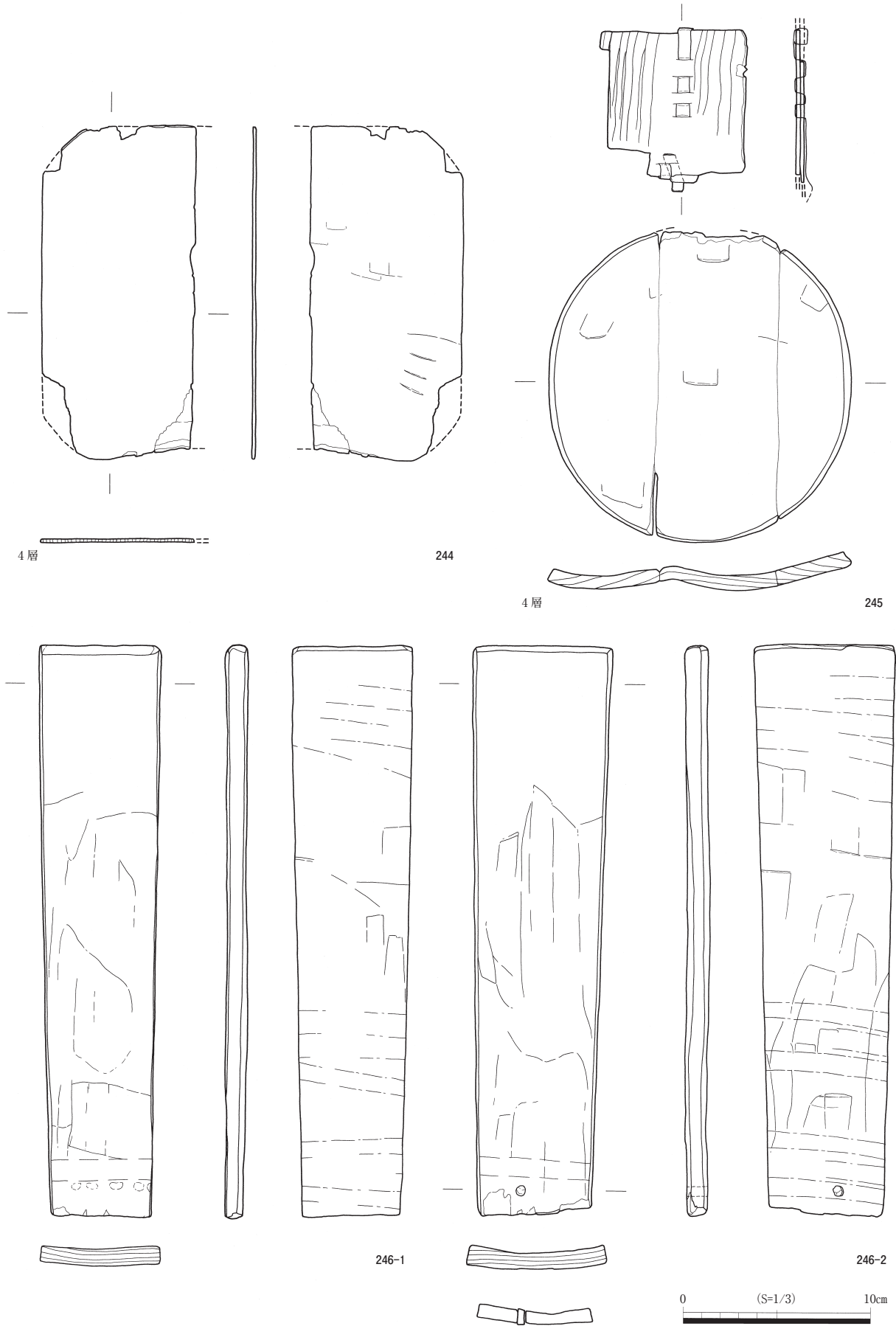


图52 464井戸 出土遺物 (2)

型で、14世紀後葉～15世紀中葉の時期が与えられる。

450溝より新しい。

518溝 (図53・54 図版55)

中央部南寄りに位置する、東西方向の溝である。幅0.4～1.7m、深さ約0.3mで、検出長は約15.4mである。埋土は砂混じりシルトで、水成堆積ではない。遺物は、土師器皿・煮炊具、瓦器椀、瓦質土器

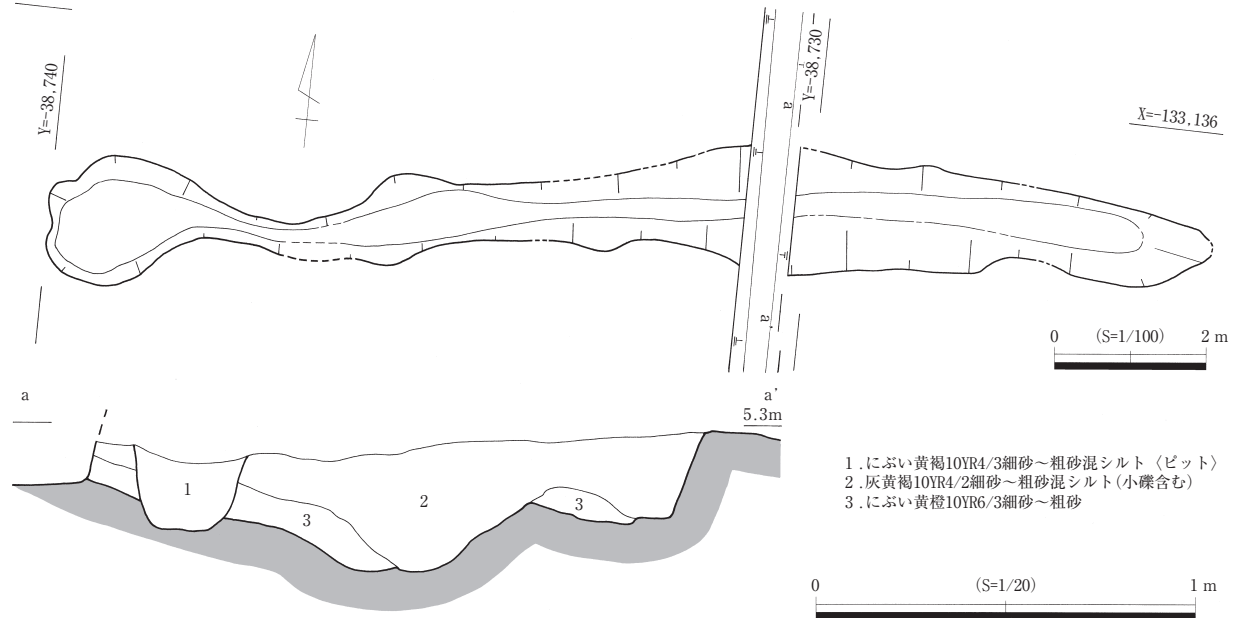


図53 518溝 平面・断面図

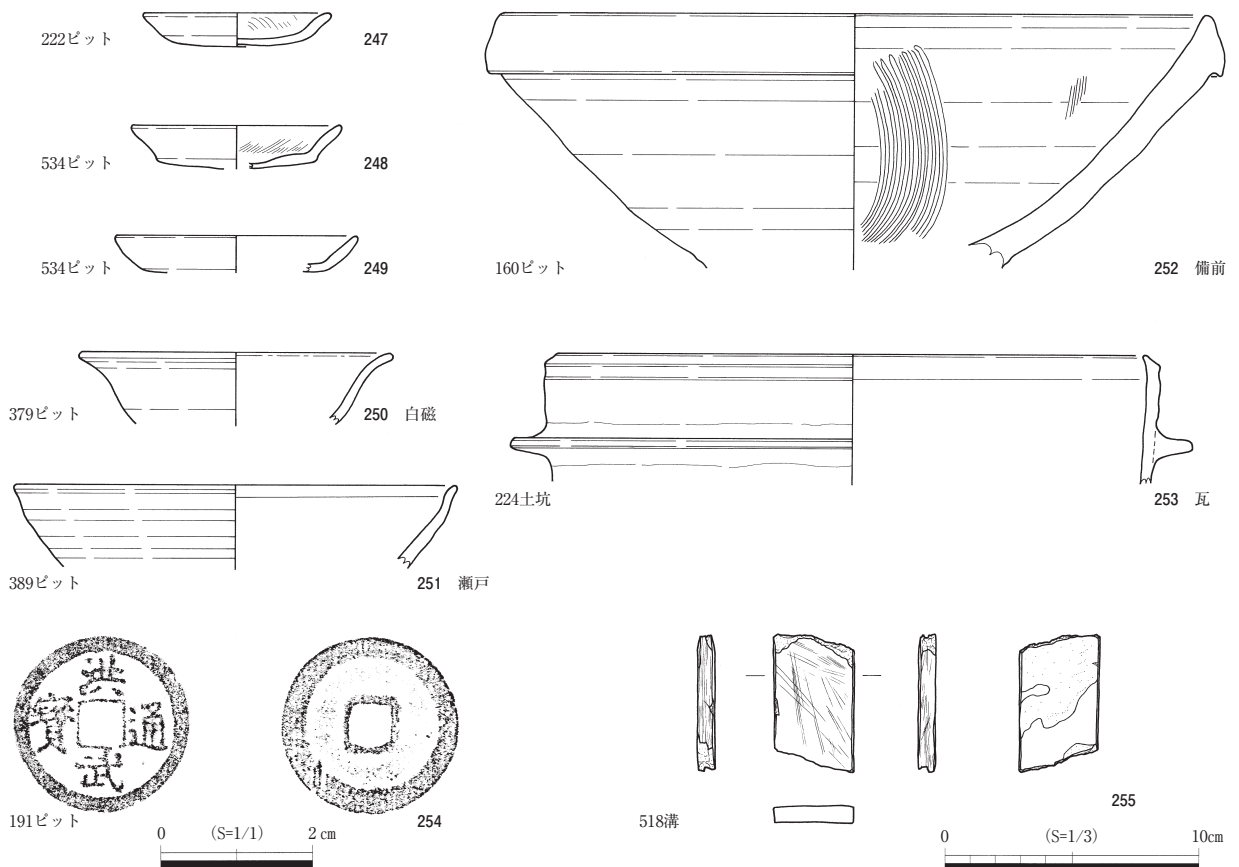


図54 518溝、389ピット、その他の遺構 出土遺物 (1/1=254)

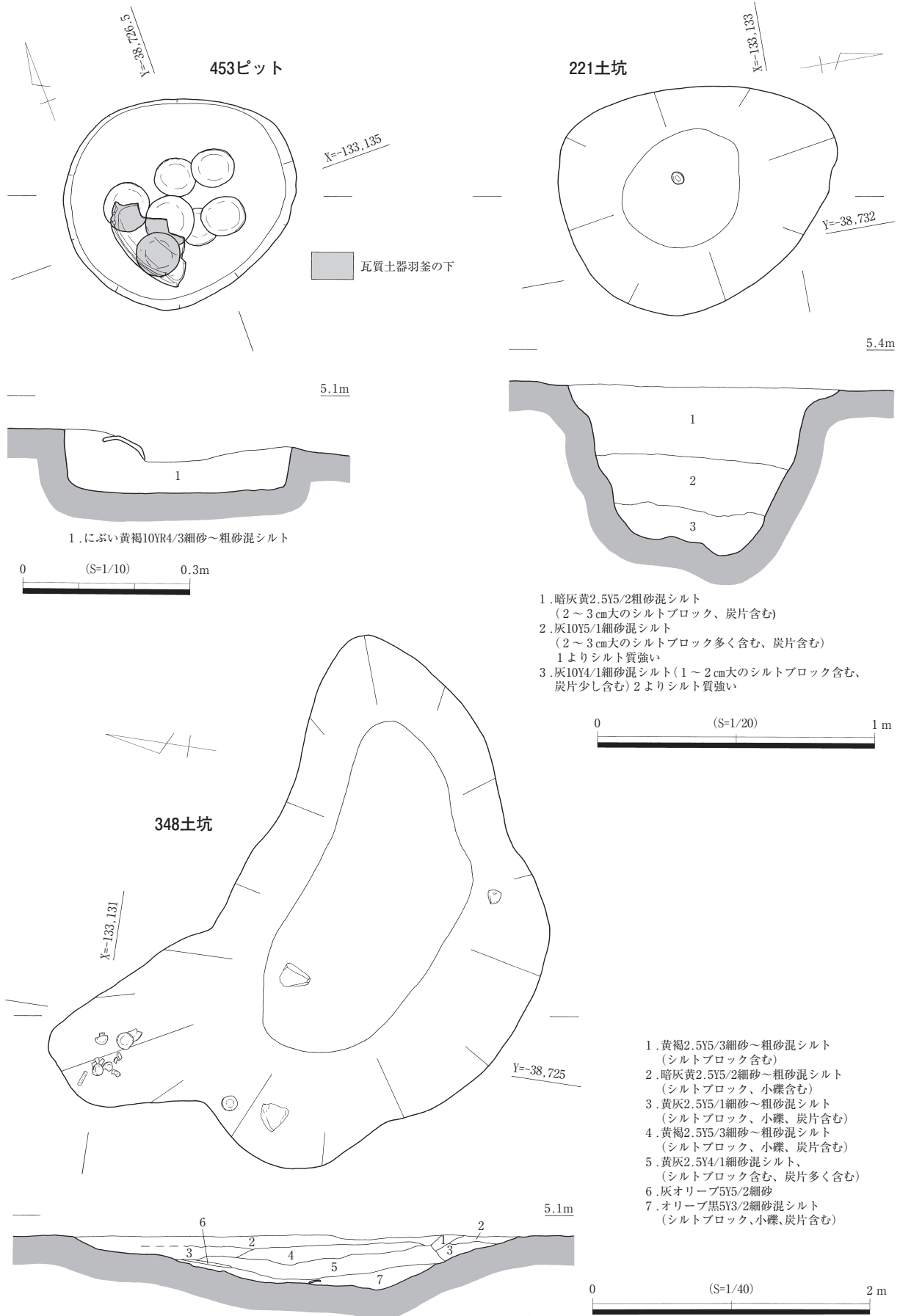


図55 453ピット、221・348土坑 平面・断面図

羽釜・受口状口縁鍋、須恵器東播系鉢、砥石（255）が出土している。すべて小片で少量であるため、詳細な時期は不明であるが、土師器小皿に、13～14世紀のものがある。

建物16の774柱穴をはじめ、多くの柱穴、ピットに切られている。西半の遺構の中では比較的古いものであると思われる。

371ピット（図41）

中央部南寄りに位置する。径約0.3m、深さ約0.3mで、14世紀中葉～15世紀中葉の土師器皿小片が出土している。

389ピット（図41・54 図版53）

中央部に位置する。径約0.2m、深さ約0.2mで、土師器皿小片、15世紀前葉頃の瀬戸焼平椀（251）が出土している。

453ピット（図55・56 図版9・57）

中央部に位置する。径約0.4mの円形で、深さ約0.1mである。完形の土師器皿（256～262）7枚と瓦質土器羽釜片（263）が出土した。

瓦質土器羽釜は、450溝下層出土のものと同一体である。鏝の2箇所（180°の位置）に焼成前穿孔があり、ススがつまっている。口縁部にも2箇所（鏝の孔から約1.0cmの位置）に焼成前穿孔がある。口縁部の孔は2箇所とも外面に突起を有す。突起はどちらも破損しているが、遺存状態の良い方では孔から横方向にのびる溝が確認できる。突起上部が破損しているため不明であるが、横方向の孔であった可能性もある。遺存状態の悪い方の突起は、原形をとどめない程破損している上にススが付着している。土師器皿は、14世紀前葉のものである。

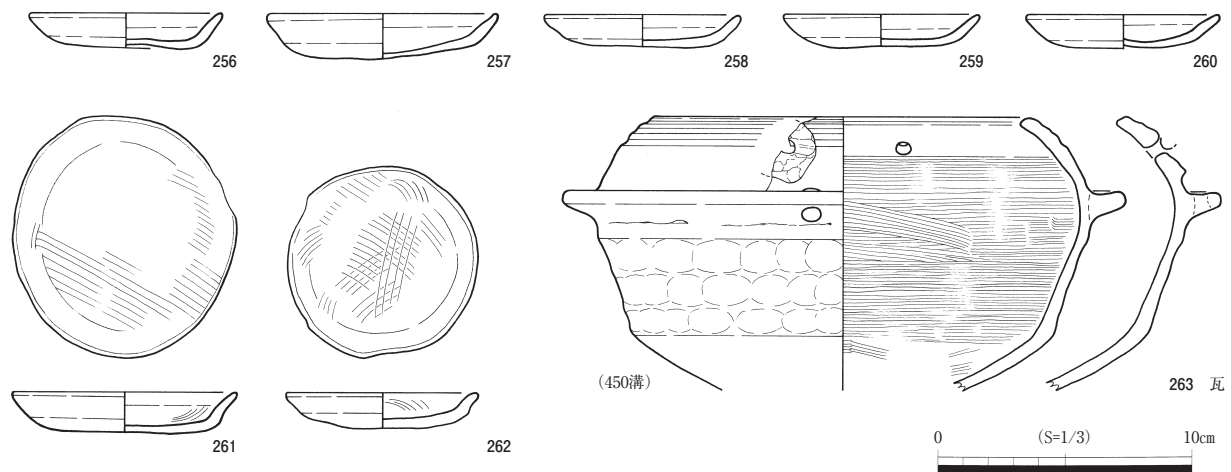


図56 453ピット 出土遺物

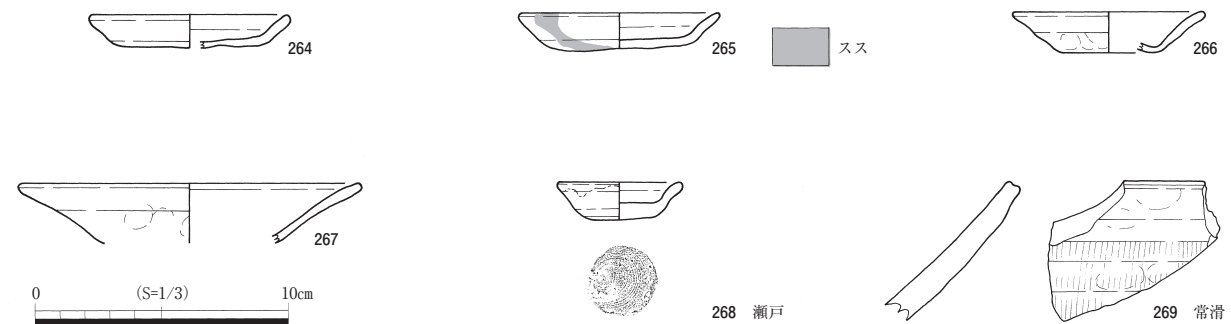


図57 221土坑 出土遺物

第3節 第5面 (第5・6層)

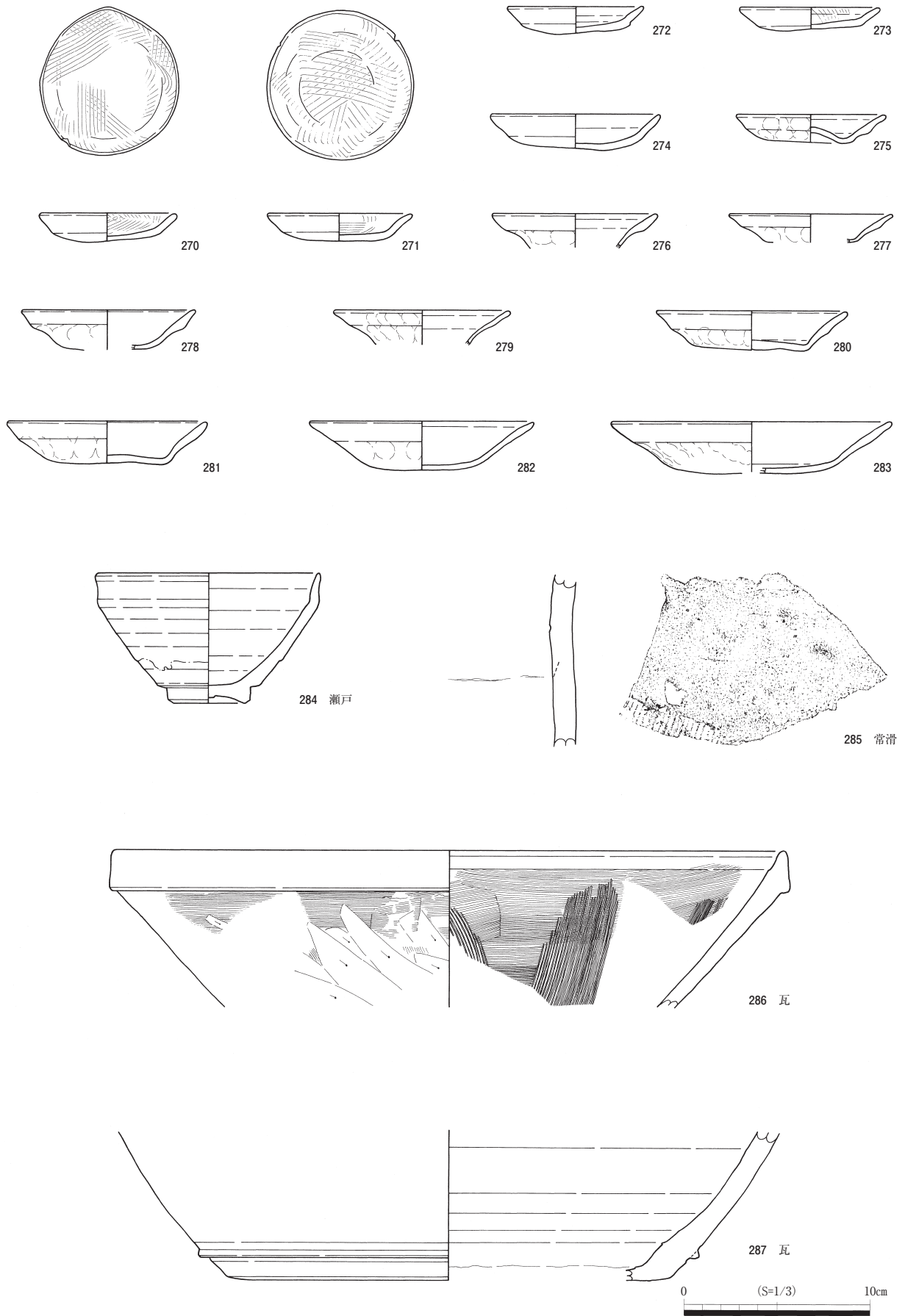


图58 348土坑 出土遺物

建物13・15と重複するが、先後関係は不明である。

221土坑 (図55・57 図版55)

中央部に位置する。径0.8～1.0mの不整円形で、深さ約0.6mである。

遺物は、土師器皿 (264～267)、瓦器椀、瓦質土器羽釜、須恵器甕、瀬戸焼豆皿 (268) ほか、常滑焼鉢 (269)、焼土塊が出土している。須恵器甕は、樹枝紋痕を有す。焼土塊は2～3cm大で、スサが認められる。土師器皿は、14世紀前葉のものである。建物11～15と重複するが、先後関係は不明である。

348土坑 (図55・58 図版55・56)

北東部に位置する。東西約3.9m、南北約3.7mの不定形で、深さ約0.4mである。

遺物は、土師器皿 (270～283)・煮炊具、瓦器椀、瓦質土器播鉢 (286)・風炉か (287)・羽釜、須恵器鉢、瀬戸焼天目椀 (284)・灰釉折縁皿、常滑焼甕 (285)、国産陶器 (備前焼か) 甕片、輸入陶器、結晶片岩が出土している。輸入陶器は70・107・450・465溝出土の (898・899) と酷似している。14世紀前葉までのものも含まれているが、14世紀後葉～15世紀前葉の時期が与えられる。

第5・6層出土遺物 (図59・60)

土師器皿 (288～295)、瓦器椀、瓦質土器受口状口縁鍋、須恵器鉢・壺 (301)、瀬戸焼天目椀・皿 (297・298)、備前焼播鉢、白磁碗・皿 (296)、青磁碗 (300)、砥石 (299) が出土している。

なお、第5 b層には、瓦器椀等、13世紀代の遺物が含まれている。

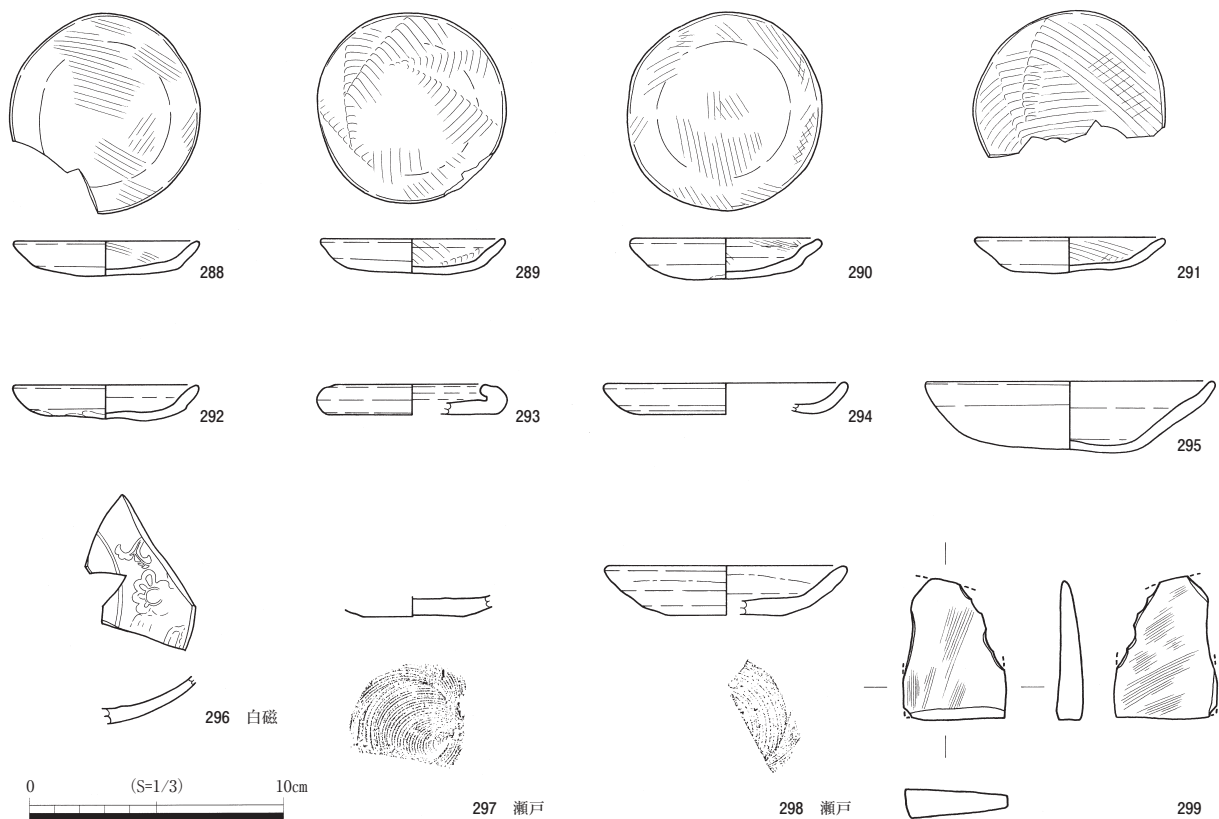


図59 第5層 (西半) 出土遺物

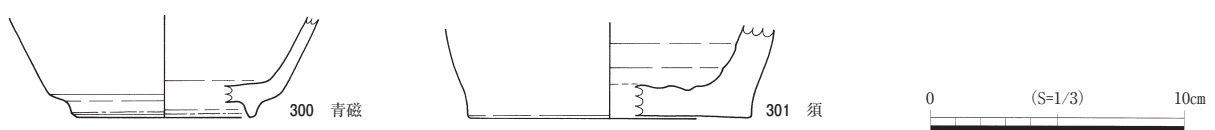


図60 第6層 (西半) 出土遺物

3. 東半（図61 図版2）

調査区中央に位置する南北方向の溝、107・450溝以東を東半として報告する。以下、建物、柱列、柱穴、井戸、溝、ピット、土器集積の順に報告する。

建物1〔77・81・91・98・554柱穴〕（図62・65 図版10・58）

南東部に位置する。東西4間以上、8.8m以上の柱列であるが、南側の調査区外に続くと想定し、建物とした。東側の調査区外に続いている可能性もある。方位は正方位で、柱間は2.1～2.4mである。柱痕を残すものが多く、91柱穴は根石（細粒砂岩）を持つ。柱痕部分に炭の小片を多く含む。

遺物は、77柱穴から土師器皿、瓦器椀、81柱穴から土師器皿・鍋、瓦器椀、91柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器椀、白磁皿（302）、98柱穴から土師器皿が出土している。すべて小片で、13～14世紀のものである。

建物21〔133・574・577・592柱穴〕（図63～65 図版10・58）

南西部に位置する。東西2間×南北1間、約5.5m×約3.3m、約18.2㎡であるが、南側の調査区外に続く可能性がある。方位はN-3°-Wで、柱間は2.6～3.3mである。柱痕を残し、133・574柱穴は礎板を持つ。すべての柱穴の柱痕部分に炭片が認められ、焼土塊、土器、木製品も含まれる。133柱穴の礎板（312）は、西半の建物13の496柱穴の柱根（240）、第7面の柱列3の674柱穴の礎板（537）と同種の材と思われる。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、133柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器椀（310）、須恵器甕、青磁碗、焼土塊、円形底板（311）、574柱穴から土師器皿（304）、瓦器椀、常滑焼三筋壺（308）、白磁碗（306）・皿（305）、青磁碗（307）、577柱穴から土師器皿、瓦器椀、須恵器鉢（309）、焼土塊、592柱穴から土師器皿、黒色土器A類、瓦器椀、白磁が出土している。すべて小片で、13～14世紀のものである。焼土塊は5cm大までのものがあり、スサが認められる。

柱列4〔1103・1107・1109・1111・1124柱穴〕（図62）

北西部に位置する。東西5間、約11.4mで、東側に続く可能性もある。柱間は、1.9～2.5mである。

遺物は、1103柱穴から土師器皿、瓦器椀、1109・1124柱穴から土師器皿、1111柱穴から土師器皿、須恵器、瓦器椀が出土している。すべて小片で、詳細な時期のわかるものはない。

73・76・78柱穴（図61・64・65 図版10）

建物に復元できなかったが、73・76・78柱穴は、柱痕を残す。遺物は、73・78柱穴から土師器皿、瓦器椀が、76柱穴から土師器皿、回転台土師器皿（303）、瓦器椀が出土している。すべて小片である。

103井戸（図66・67 カラー図版4 図版11・59 付表37）

中央部に位置する。径3.4～3.7mの不整形円で深さ約1.2mである。枠を掘り方北寄りに設置する。

枠の上部は、最長71cm、幅8～12cm、厚さ2～4cmの板材21枚（901～904他）を立て並べた、径0.6～0.7mの円形である。13枚の板材が下端部に孔を持つ。孔は、板材下端から4～7cmの位置にある。長さ6～9cm、幅4～6cmの台形状であるが、上辺から下方向へ、下辺から上方向へ抉るように両面から穿たれており、不整形である。鼻線であると考えられる。孔を持つ板材のうち6枚で、孔の外側に別板があてがわれているのを確認した。板材1には1枚をふたつ折りにした長さ約20cm、幅約5cmの板が、板材17には2枚の板があてられていたほか、板材2・3・18・19にも幅2～3cmの板があてがわれていた。

枠の下部は径約40cmの曲物（319）を転用している。竹籬を3重に編んで円形にした、桶のタガ状の

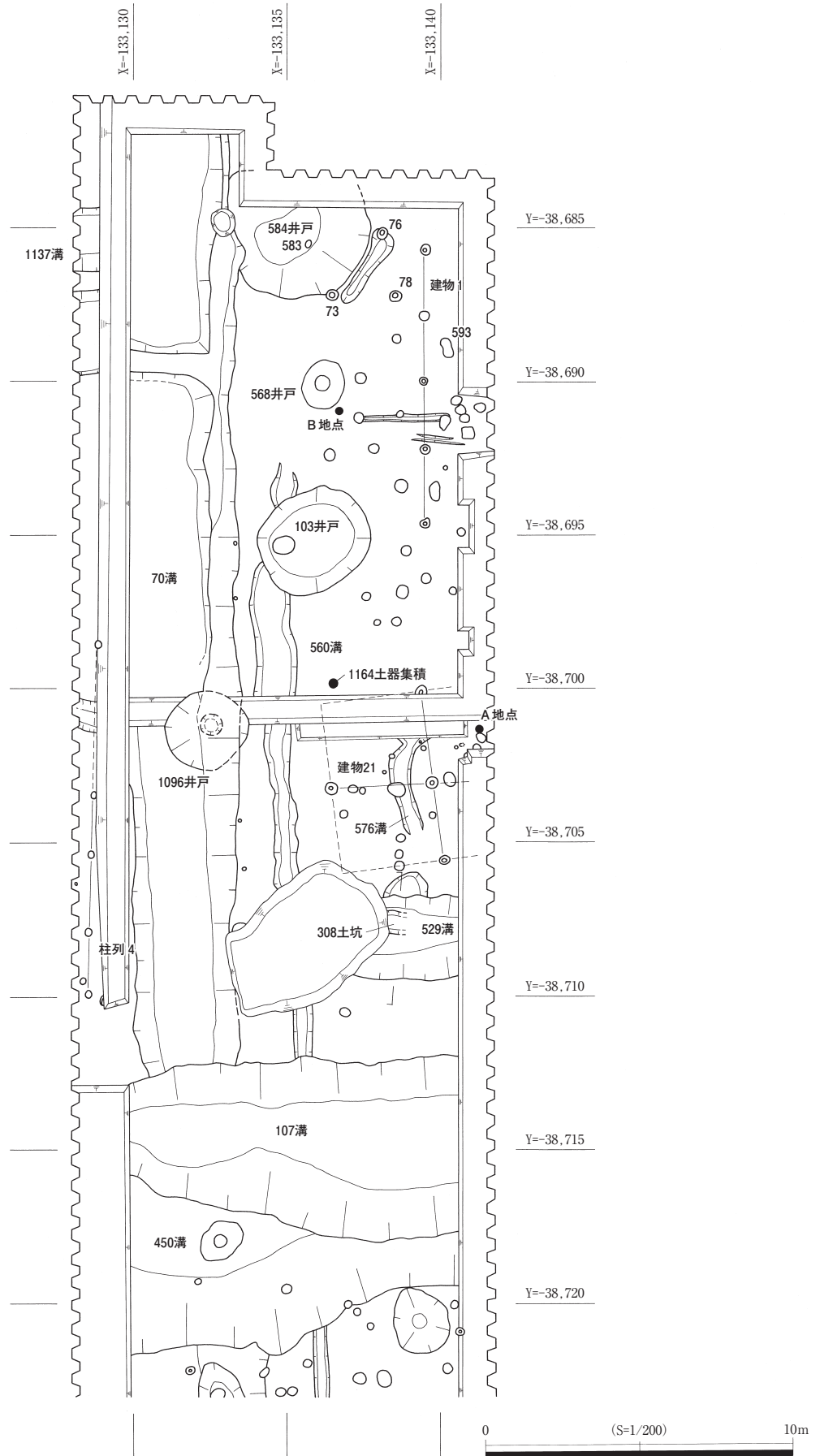


図61 第5面東半 平面図

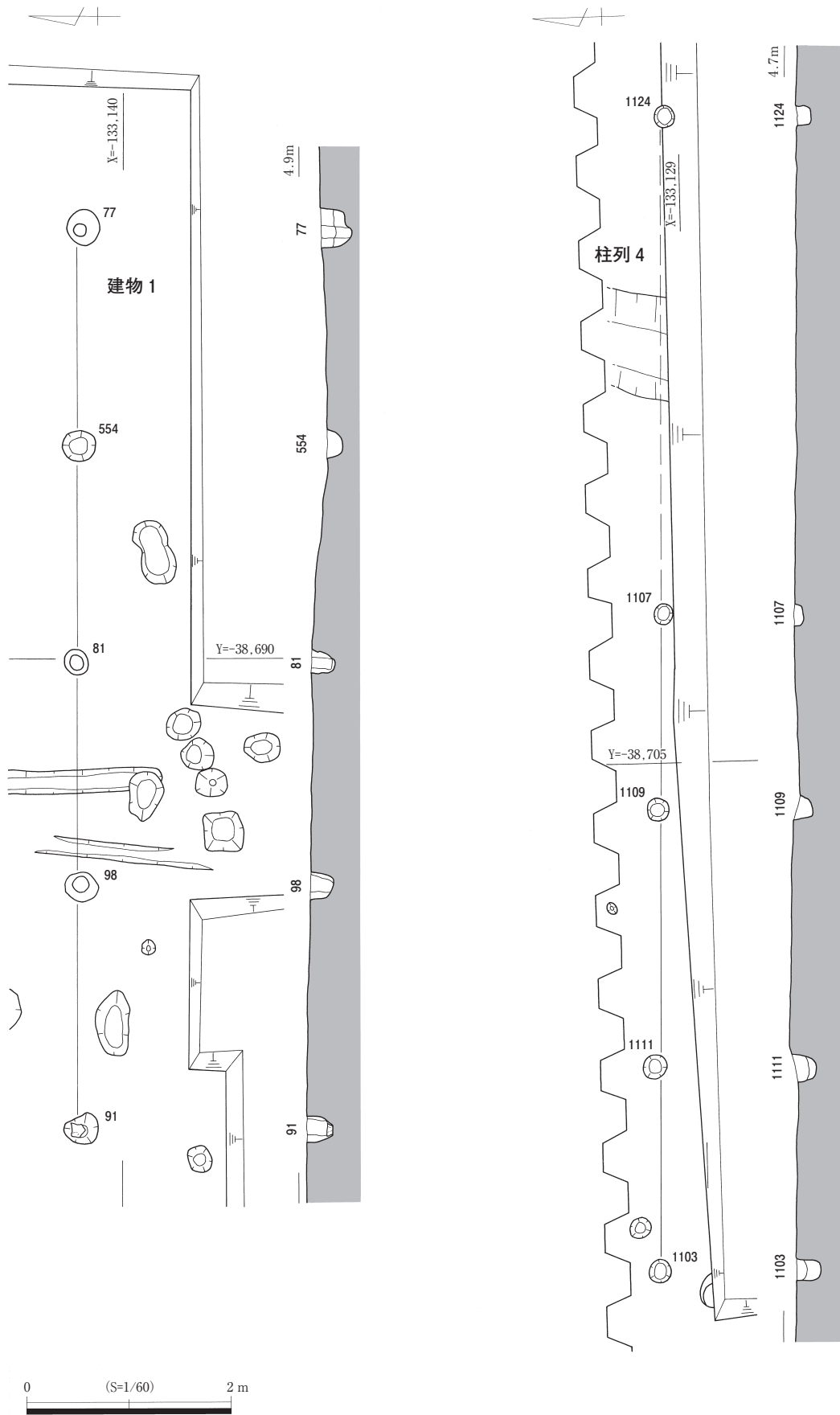


図62 建物1、柱列4 平面・断面図

ものを2組重ねた上に、天地を逆にした状態で据えている。竹籤と曲物の間には、3箇所土器片等をかませている。北と南西では、外面にススが付着している土師器煮炊具片、南東では土師器煮炊具片、漆器椀片(318)である。土師器煮炊具片は3箇所ものが接合する。また、枠内出土のものとも接合し、その破片の出土レベルが曲物下端であることから、曲物設置の際には竹籤上端、曲物下端までが埋められていた可能性がある。南東部分は、曲物が使用時より欠けていた部分である。

底面は、第11層洪水砂層に及んでいる。掘り方の埋土は、第11層起源と思われる細砂～粗砂、小礫にシルトブロックを含む。枠内の埋土は、枠上部の板組み部分では20cm大までの礫が含まれており、井戸を廃棄した際のものと思われる。枠の形状が北西部分でいびつになっているが、その部分に礫が比較的多く含まれていたことから、井戸廃棄時に生じたひずみである可能性が高い。小木片も含む。枠下部の曲物部分の埋土は、細砂～粗砂である。

遺物は、掘り方から土師器皿・煮炊具、瓦器椀、須恵器椀(316)、板組み枠内(1～6層)から土師器皿(313)・煮炊具、瓦器椀、常滑焼甕(317)、曲物枠内(7層)から土師器皿(314・315)・鍋、瓦器椀が出土している。また、出土層位は不明であるが、ほかに土師器鍋、瓦質土器羽釜脚、須恵器鉢・甕がある。井戸枠に使用されていた曲物(319)は、帯が1段のもので、側板、帯が欠損している箇所

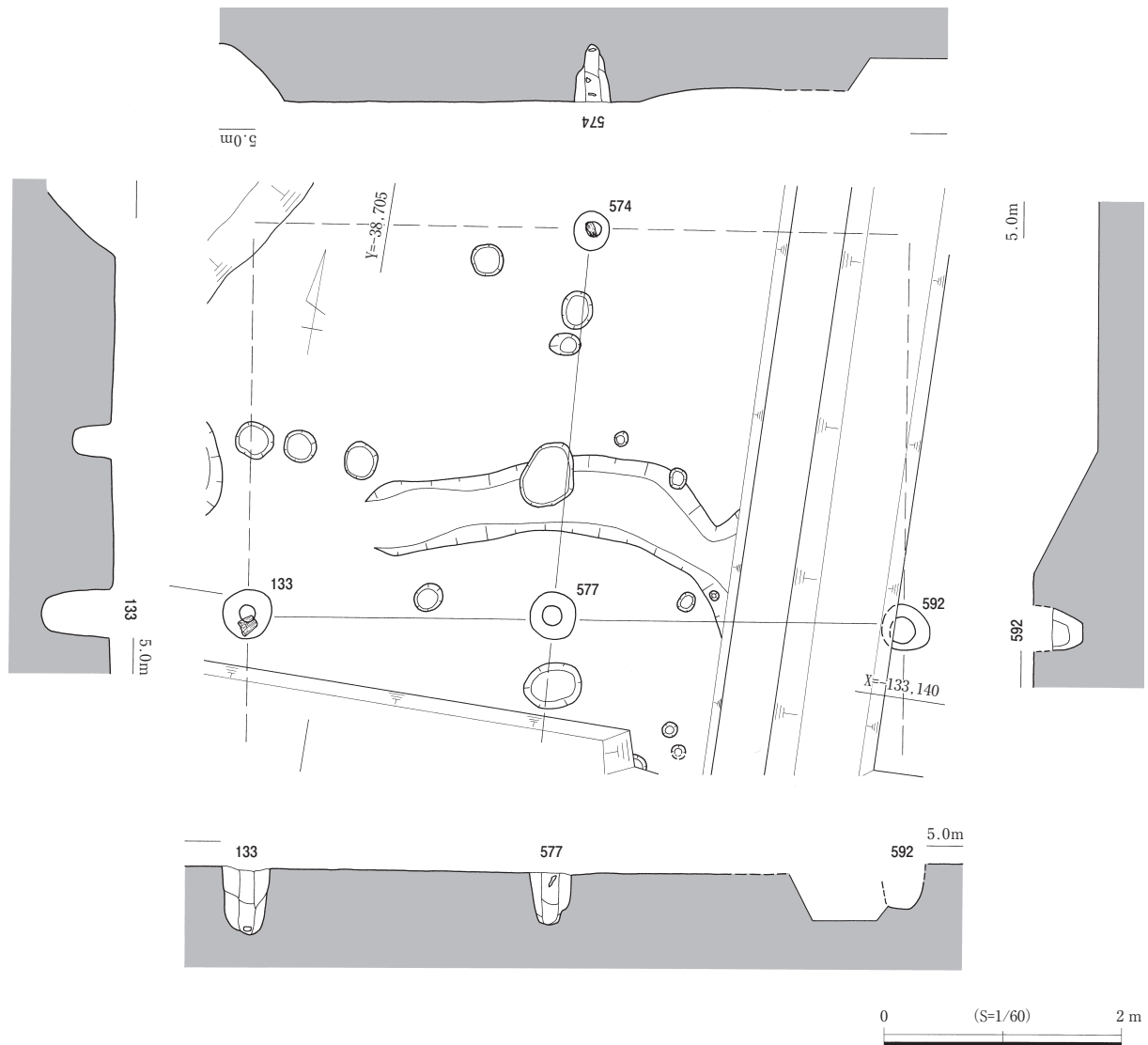


図63 建物21 平面・断面図

第3節 第5面（第5・6層）

の周囲に木釘がみられ、修復されたと考えられる。漆器椀（318）は、内外面黒色で、赤色の手描紋を持ち、底部外面が削り取られている。いずれも小片で少量であるため、詳細な時期は不明であるが、掘り方出土の瓦器椀に13世紀以降のものがみられるほか、枡内出土の土師器皿は13世紀～14世紀前葉のものである。

560溝を切っている。

568井戸（図68～70 図版12・60）

中央部東寄りに位置する、桶組みの井戸である。径1.4～1.6mの楕円形で、深さ約1.1mである。第5層除去後、第6層上面で検出した。

桶を転用した枡を2段確認したが、平面と断面（3層）で板のものかと思われる痕跡を確認しており、

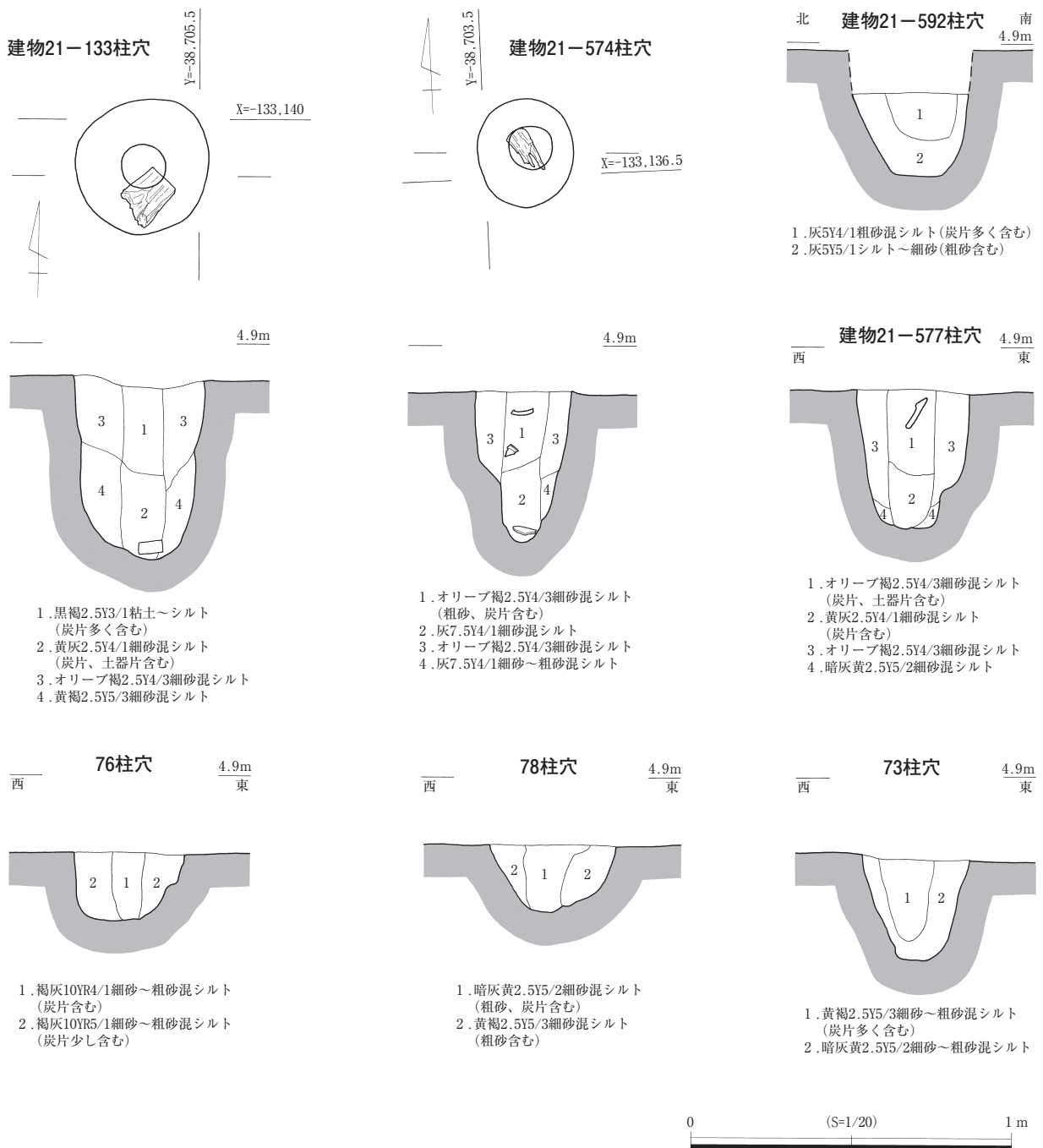


図64 第5面東半柱穴（建物21含む）平面・断面図

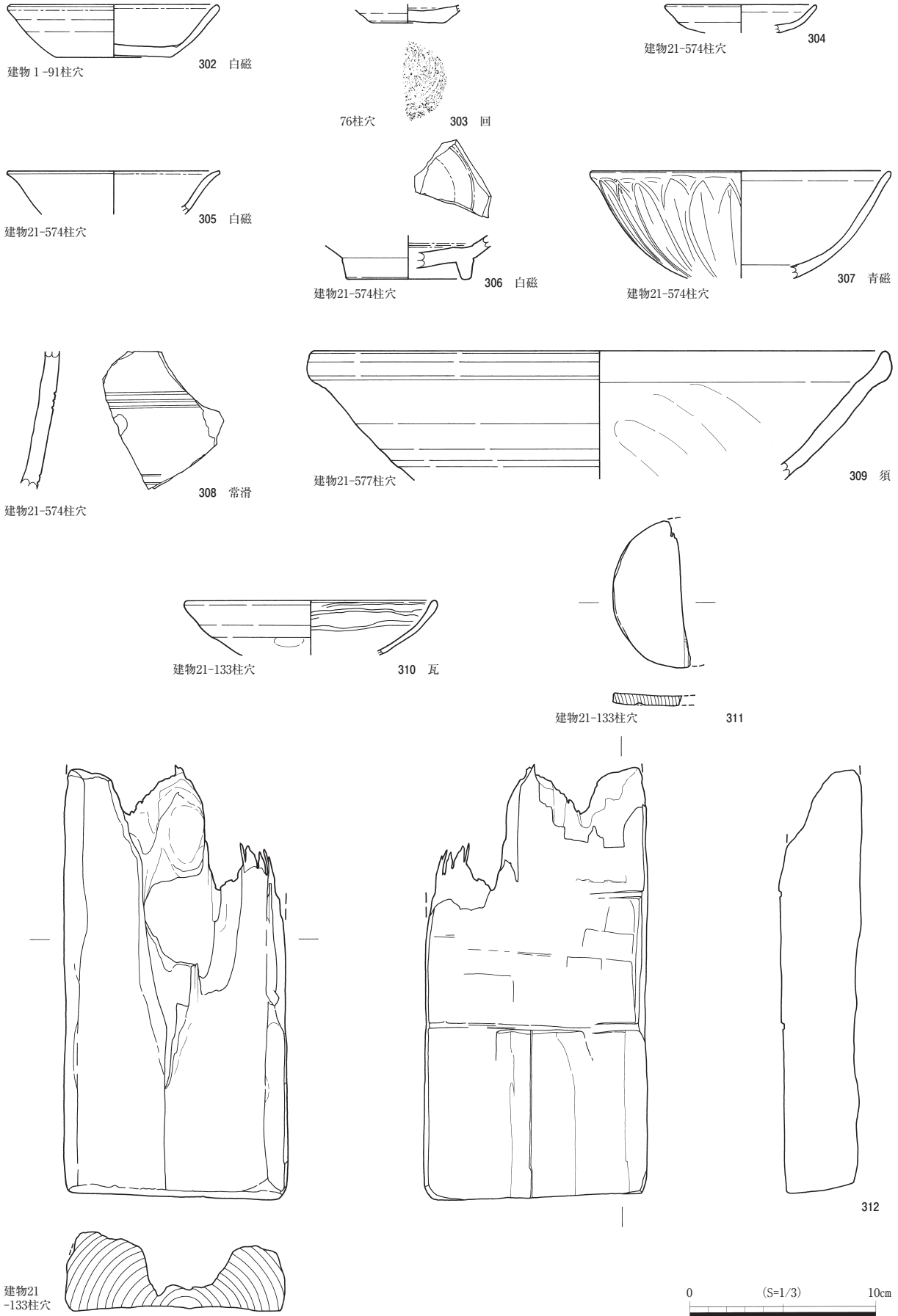
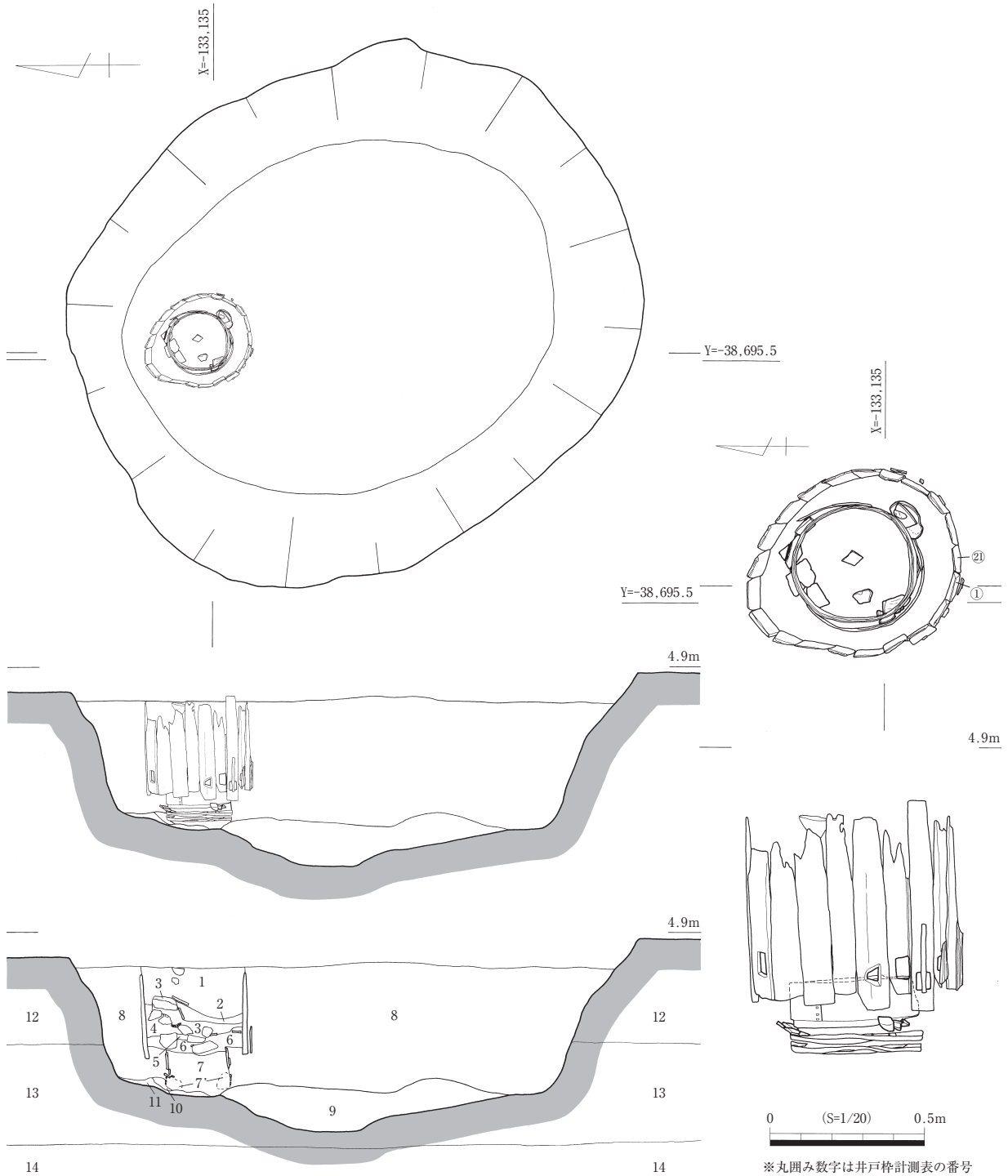


図65 建物1・21、76柱穴 出土遺物

第3節 第5面 (第5・6層)



1. 暗灰黄2.5Y4/2細砂混シルト(粗砂を带状に含む)
2. オリーブ褐2.5Y4/3粗砂混シルト
3. 暗緑灰7.5GY4/1細砂～粗砂混シルト(シルトブロック含む)
4. 黒褐2.5Y3/2細砂～粗砂混シルト(小礫含む)
5. 暗緑灰7.5GY4/1粘土～シルト
6. オリーブ黒5Y3/2細砂～粗砂混シルト
(暗オリーブ灰5GY4/1細砂～粗砂ブロック含む)
7. オリーブ灰2.5GY5/1細砂～粗砂
- 7'. にぶい黄2.5Y6/4細砂～粗砂
(2～5cm大の礫多く含む、シルトブロック含む)

8. にぶい黄2.5Y6/4細砂～粗砂
(小礫、細砂～粗砂混シルトブロック含む)
9. 灰7.5Y4/1細砂～粗砂
(3cm大の礫多く含む、粘土ブロック少し含む)
10. 灰10Y4/1粘土～シルト(細砂～粗砂多く含む)
11. 灰7.5Y6/1細砂～粗砂
12. 第6～8層シルト
13. 第10～11層細砂～粗砂、小礫
14. 第11層以下シルト

図66 103井戸 平面・断面・立面図

上部にもう1段、桶転用または板組みの枠があったと考えられる。2層中に板材が含まれているが、上部の枠に使用されていたものと思われる。桶は、下段が径40cm余、高さ約35cmで、タガを2条持ち、上段が径約45cm、高さ約44cmで、タガを4条持つ。

底面は、第11層洪水砂層以下の第11層シルト層に及んでいる。掘り方は下段の桶部分で小さくなっているが、その南西部分に丸太材と角材2本が打ち込まれていた。丸太材の先端は簡単にカットしてあり、井戸掘り方以下の第12～15層のシルトに及ぶ。角材の先端は加工されていないが、井戸底面と同じレベルの第11～12層シルト層に及ぶ。

遺物は、掘り方から土師器皿(321)・鍋、瓦器椀(322)、瓦質土器、須恵器鉢・甕、常滑焼、白磁碗

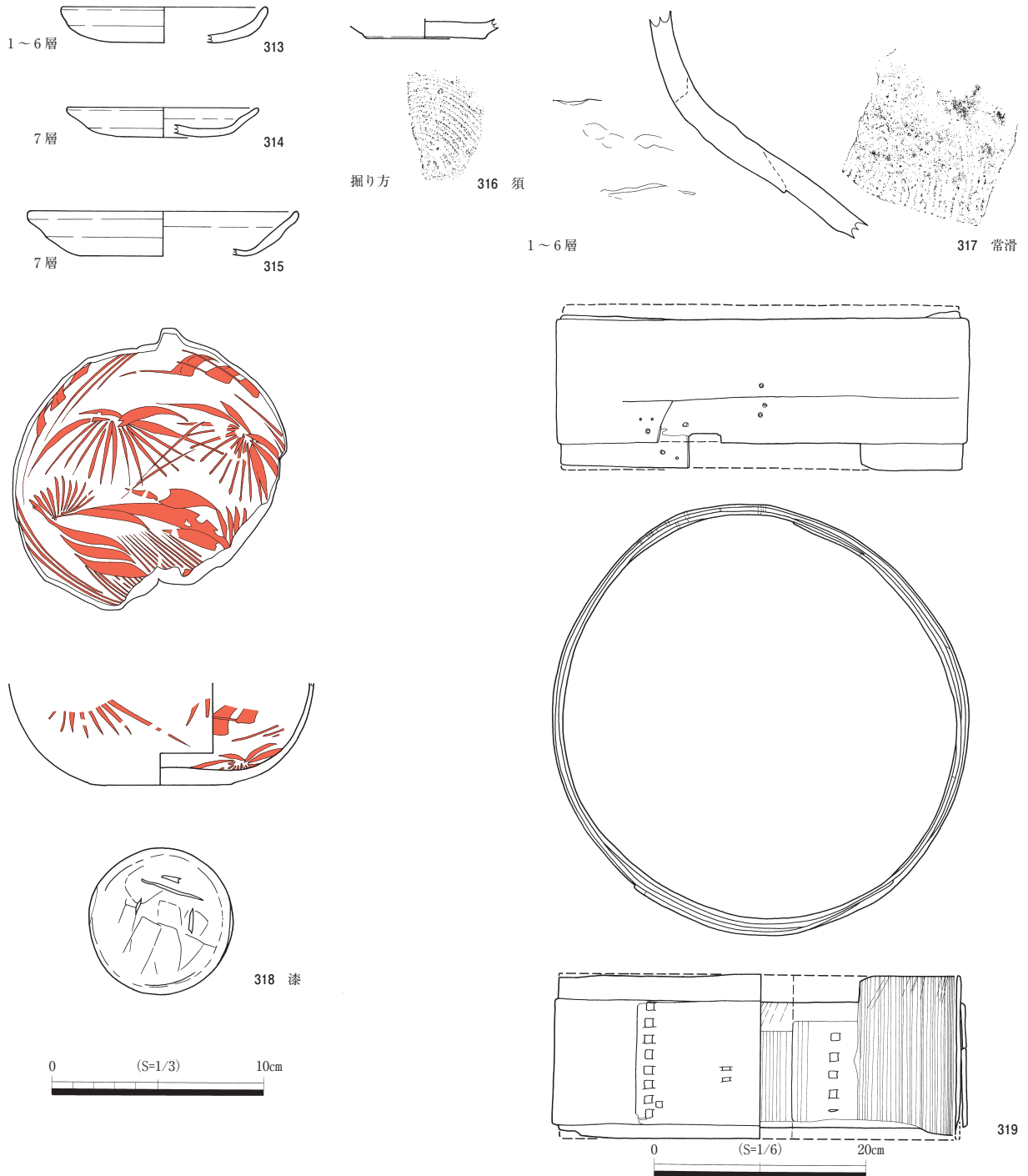


図67 103井戸 出土遺物 (1/6=319)

第3節 第5面 (第5・6層)

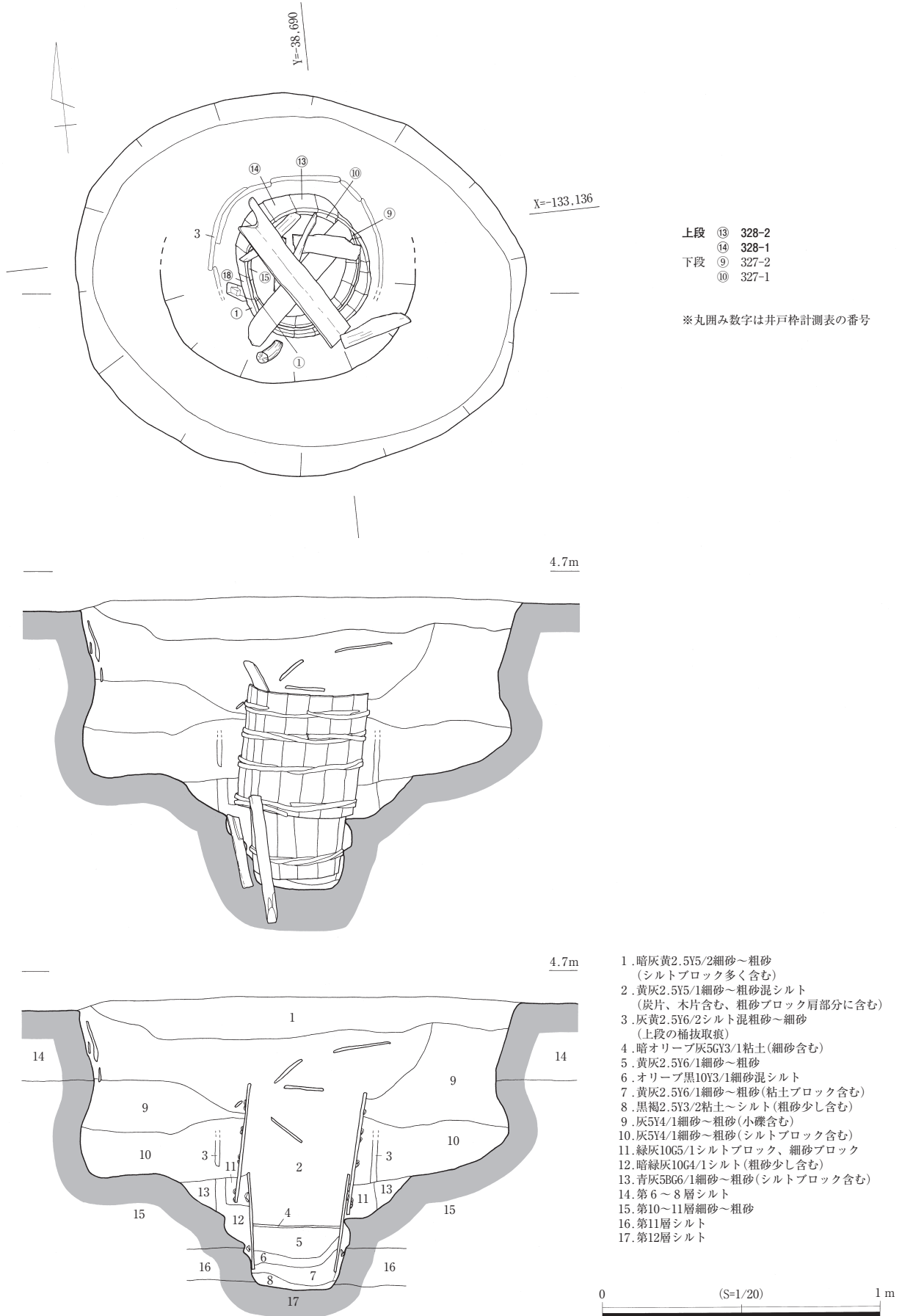


図68 568井戸 平面・断面・立面図

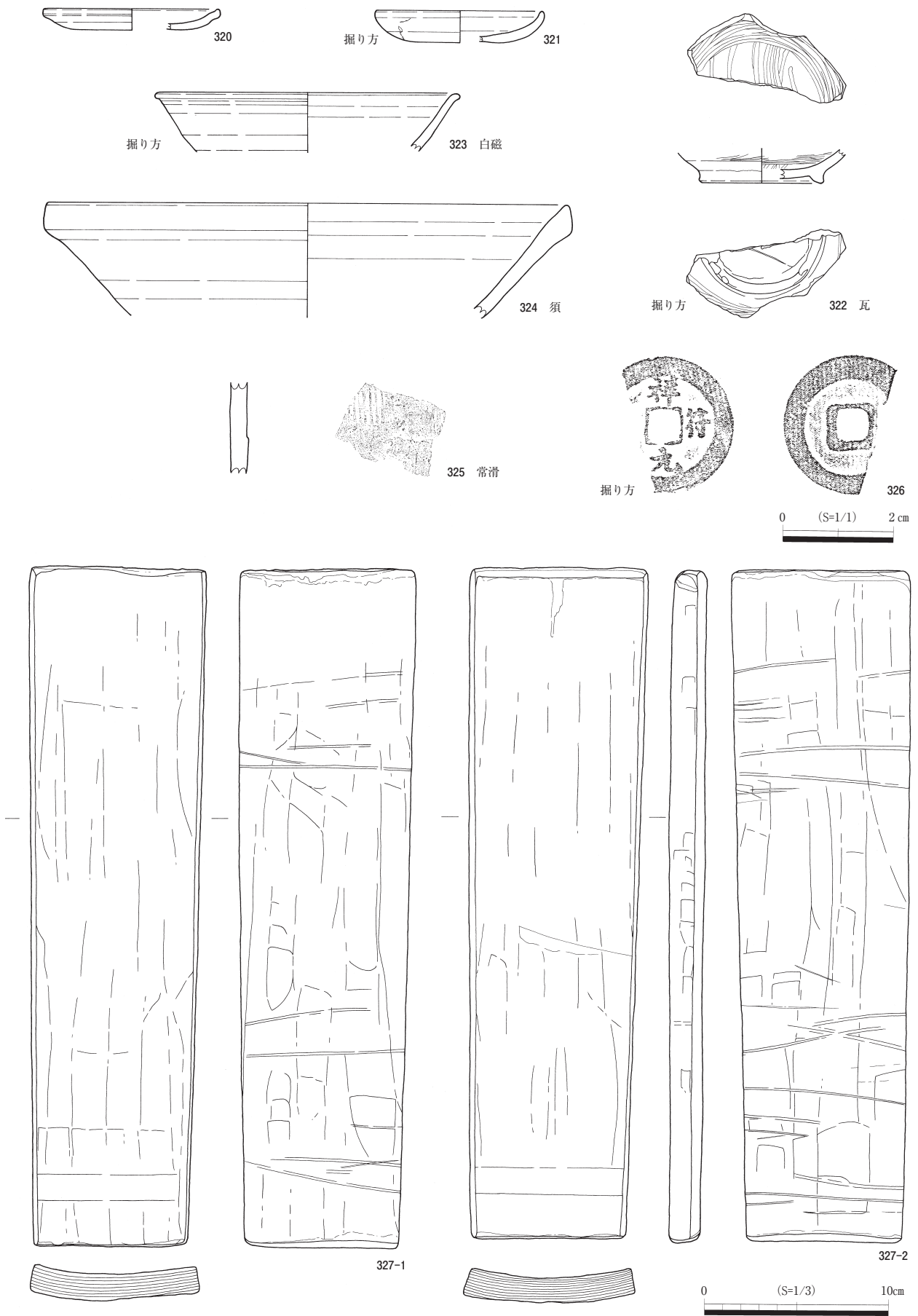


図69 568井戸 出土遺物 (1) (1/1=326)

(323)、祥符元寶 (326)、下段桶枠内から土師器皿、瓦器椀、イネ穎、イネ科・ソバ・タデ属果実、4層から編物が出土している。また、出土層位は不明であるが、ほかに瓦質土器甕・羽釜脚、常滑焼甕 (325)、青磁鎚蓮弁紋碗がある。いずれも小片である。古いものも含まれているが、おおよそ13世紀代のものである。

584井戸（図71・72 図版12・61）

東端に位置する。東端部分は調査区端と重なり検出できなかったが、南北約4.6mの不定形で、深さ約1.6mである。第5層除去後、第6層上面で検出した。底面は、第15層以下のシルト～細砂の互層部分に及んでいる。埋土にブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、上層から土師器羽釜 (329)、瓦器椀、瓦質土器、下層から土師器皿 (330～332)・煮炊具、瓦器椀 (334～336)、瓦質土器羽釜脚、須恵器椀 (333) が出土している。また、出土層位は不明であるが、ほかに瓦器皿、須恵器、常滑焼甕、木製底板 (337) がある。瓦器椀は和泉型が多い。13世紀代の

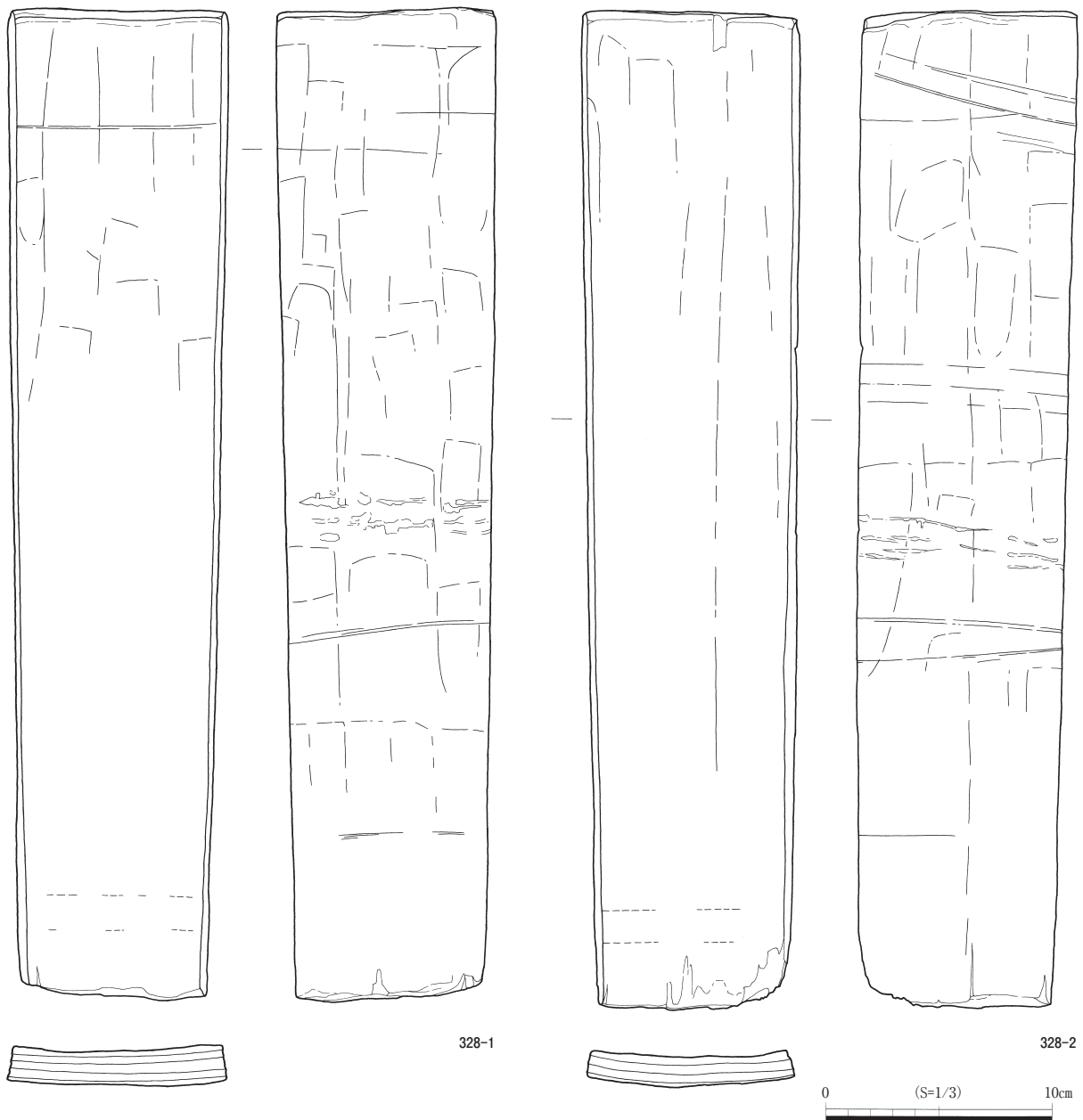
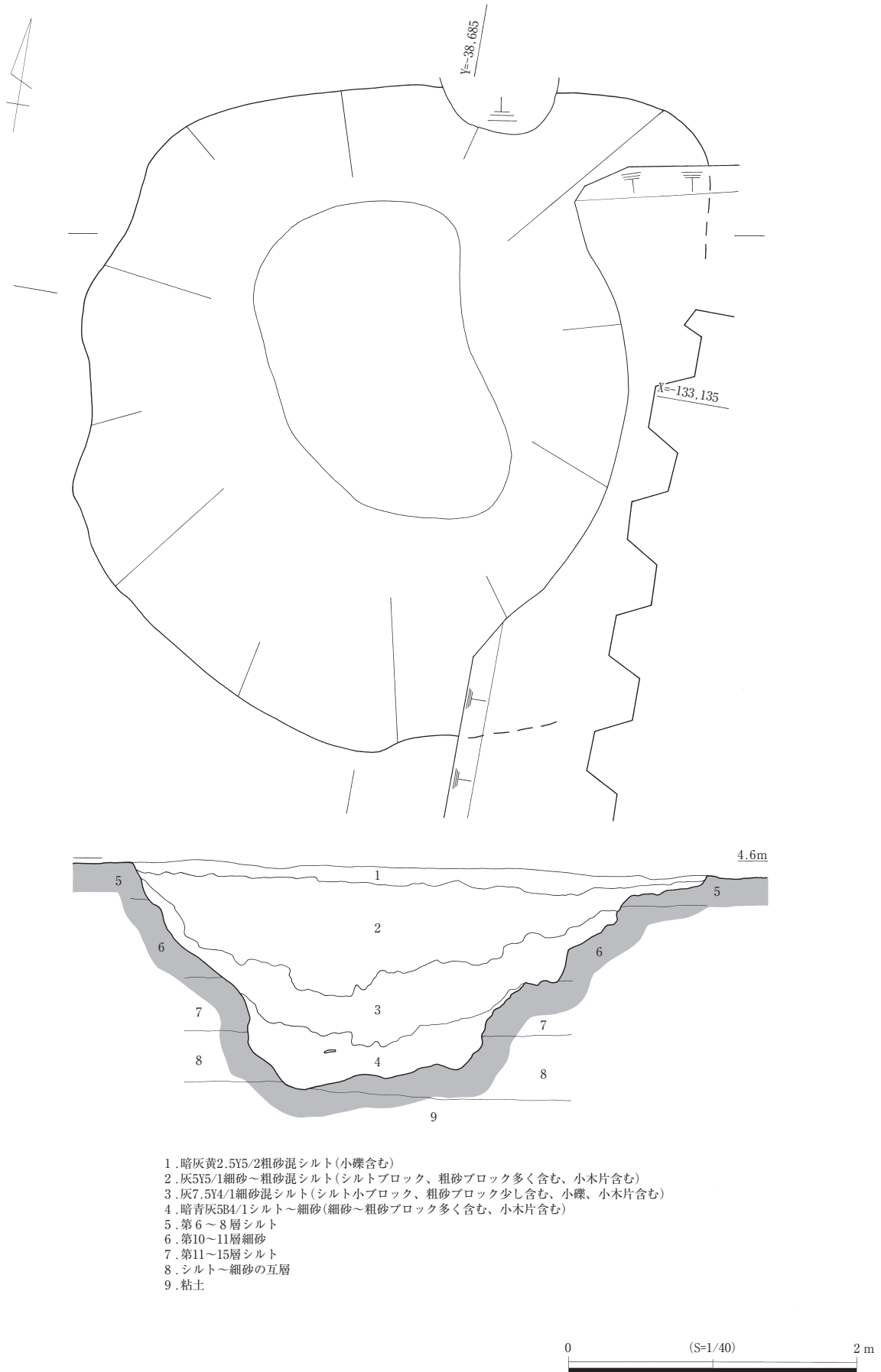


図70 584井戸 出土遺物 (2)



1. 暗灰黄2.5Y5/2粗砂混シルト(小礫含む)
2. 灰5Y5/1細砂～粗砂混シルト(シルトブロック、粗砂ブロック多く含む、小木片含む)
3. 灰7.5Y4/1細砂混シルト(シルト小ブロック、粗砂ブロック少し含む、小礫、小木片含む)
4. 暗青灰5B4/1シルト～細砂(細砂～粗砂ブロック多く含む、小木片含む)
5. 第6～8層シルト
6. 第10～11層細砂
7. 第11～15層シルト
8. シルト～細砂の互層
9. 粘土

図71 584井戸 平面・断面図

第3節 第5面（第5・6層）

ものである。

70溝に切られている。

1096井戸（図72・73 図版12・61）

中央部北西寄りに位置する、素掘りの井戸である。径2.4~2.7mの不整円形で、深さ約2.5mである。下層0.9m部分は、第15面以下の粘土~シルト層に及んでおり、径が0.7mと上部に比べて小さく、壁はほぼ垂直である。下層の埋土は、基盤層に酷似する、シルトを主体とするブロック土で、人為的に埋め戻されたものである。上層はラミナのみられる極細砂~粗砂で、自然堆積である可能性が高い。

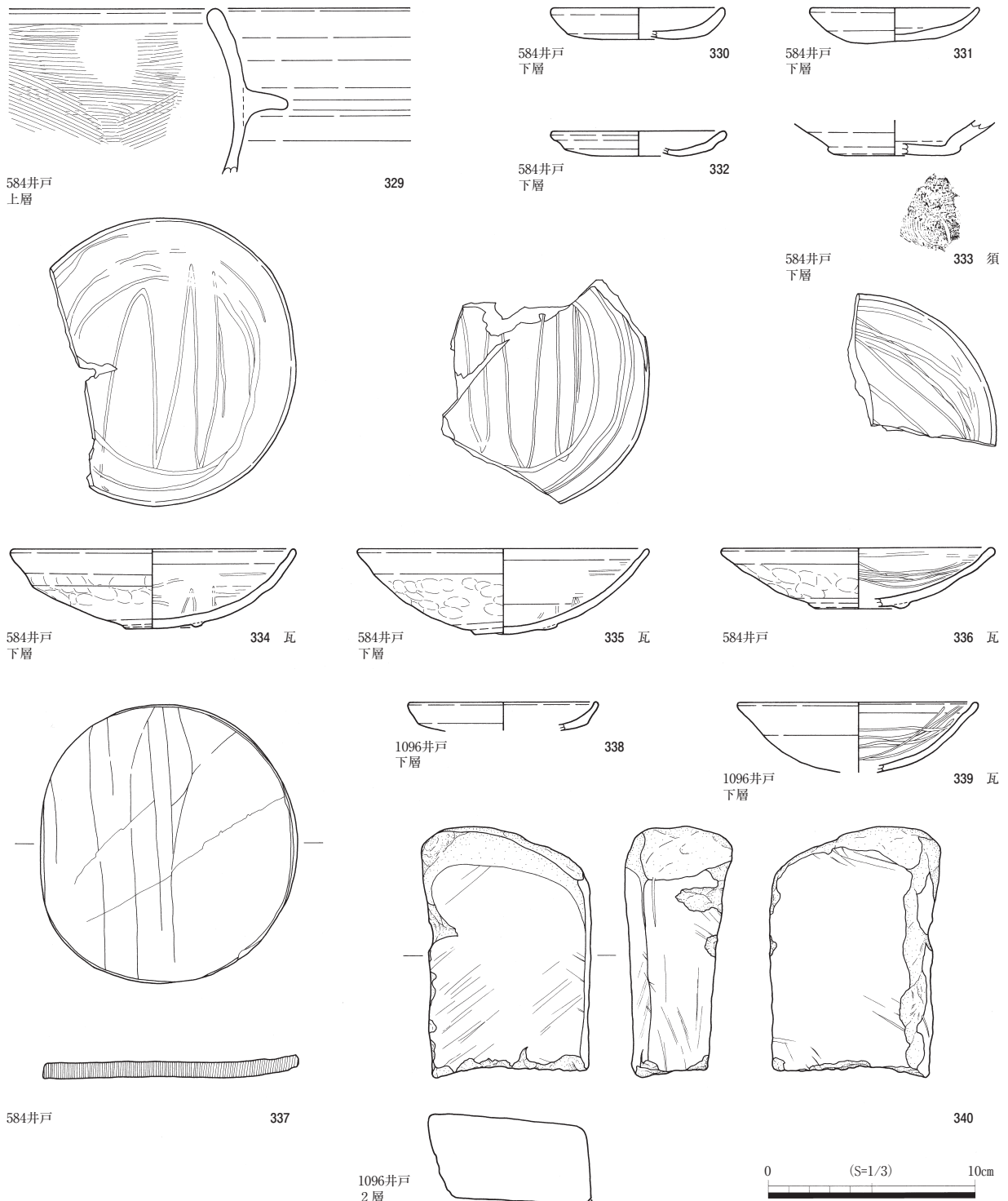


図72 584・1096井戸 出土遺物

遺物は、2層最下部から砥石(340)、下層から土師器皿(338)、瓦器椀(339)の小片2点が出土した。13世紀代以降のものである。

70溝に切られている。

529溝 (図61・74・75 図版13・62)

西部に位置する南北方向の溝である。幅約2.5m、深さ約0.5mで、検出長は約3.4mである。北は攪乱に切られており、南は調査区外に続く。攪乱のさらに北に位置する70溝に接続する可能性を考慮して精査を行い、70溝の位置までのびていなかったことを確認している。

遺物は、土師器皿・竈(345)、瓦器椀、須恵器鉢・甕、常滑焼甕(344)、瀬戸焼平椀(341)・天目椀(342)・瓶子か(343)、白磁碗が出土している。13世紀代のものも含むが、14世紀のものと思われる。308土坑に切られている。

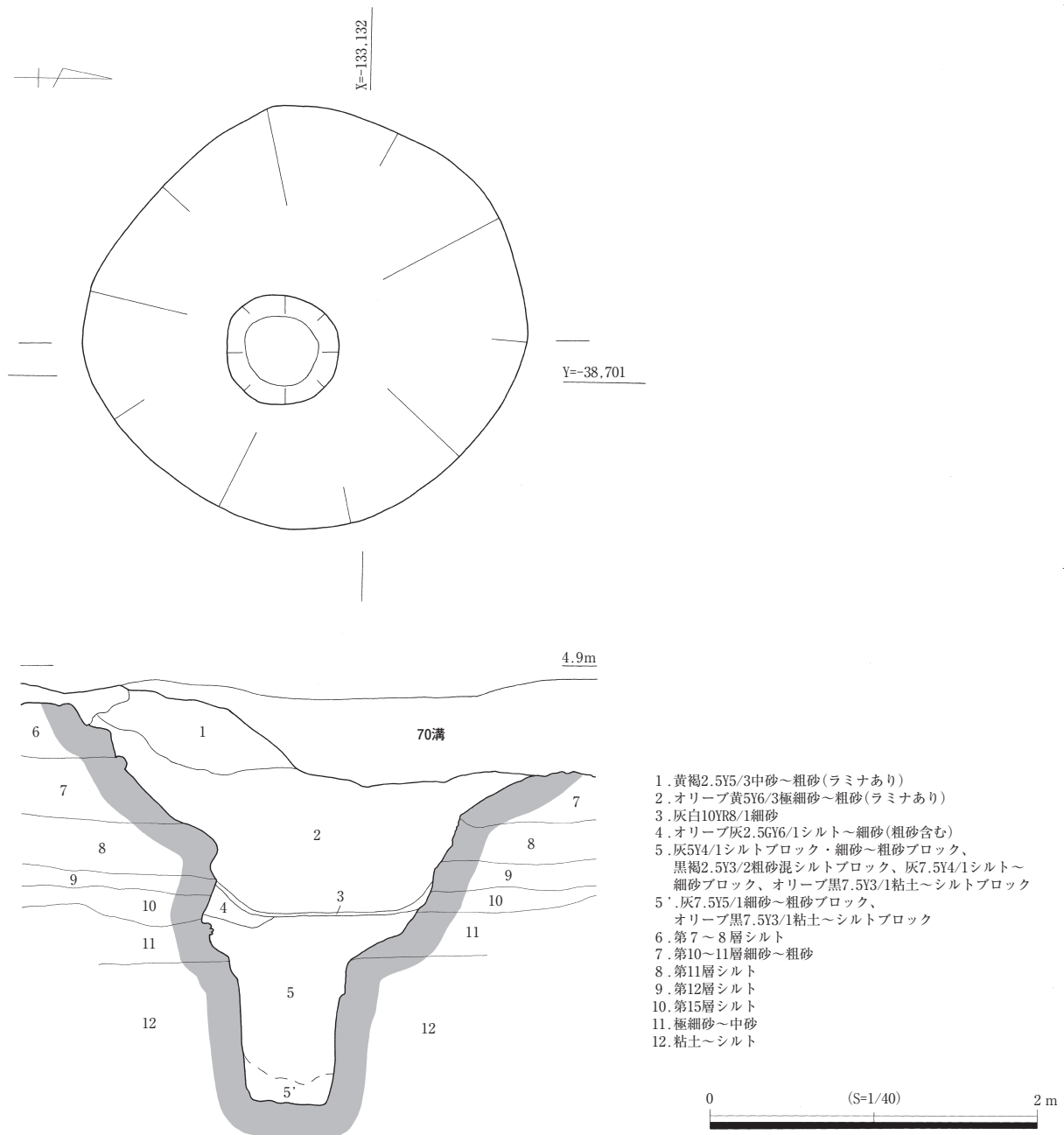


図73 1096井戸 平面・断面図

560溝（図61・76～82 図版13・64・65）

西部から中央部に位置する、東西方向の溝である。幅約1.3m、深さ約0.1mで、検出長は約20.0mである。直上の整地土と思われる層を第5層として除去し、第6層上面で検出した。埋土は、細砂～粗砂混じりシルトで、土器片を多く含む。

また、西半でこの溝の延長上に、同様な規模の溝を検出している。底面のレベルも合致しており、同一の溝である可能性がある。これも、第5層除去後に検出したものである。

遺物は、土師器皿（346～363）・鍋（399～404）、瓦器椀（365～386）・皿（364）、瓦質土器羽釜（387～398）、須恵器鉢・鉢（405～407）・甕（408・409）、白磁皿、瓦が出土している。瓦器椀は、多くが和泉型で、一部楠葉型が含まれている。（380・381・383・384）等、高台周縁に、ヘラ等の工具で破線状の沈線を施しているものがみられる。13世紀中～後葉のものと思われる。

576溝（図61・83 図版63）

中央部南西寄りに位置する、東西方向の溝である。幅約0.7m、深さ約0.1mで、検出長は約3.0mである。第5層除去後、第6層上面で検出した。

遺物は、土師器皿（410・411）・鍋、瓦器椀（414～418）・皿（412）、須恵器鉢（419）、瓦質土器羽釜脚（420）、白磁皿（413）が出土している。13世紀中～後葉のものと思われる。

593ピット（図84・85 図版13・66）

南東部に位置する。2個の円が結合したような平面形で、長さ約0.6m、幅約0.3m、深さ約0.4mである。第5層除去後、第6層上面で検出した。ほぼ完形の土師器皿が10枚出土している。いずれもほぼ

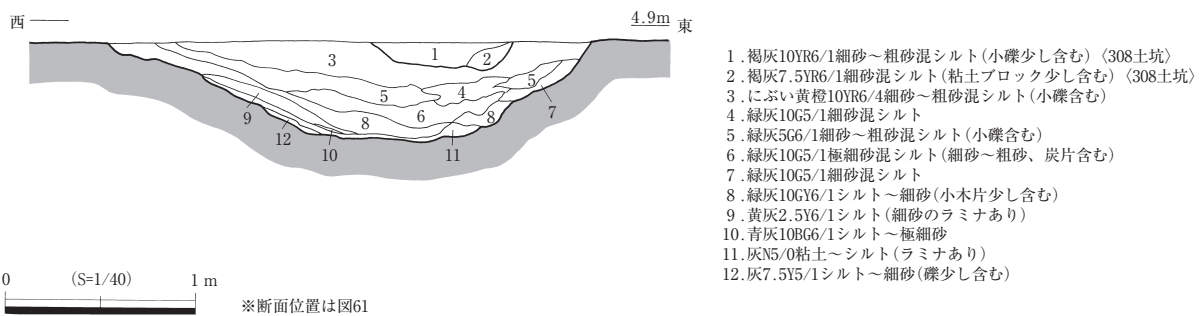


図74 529溝 断面図

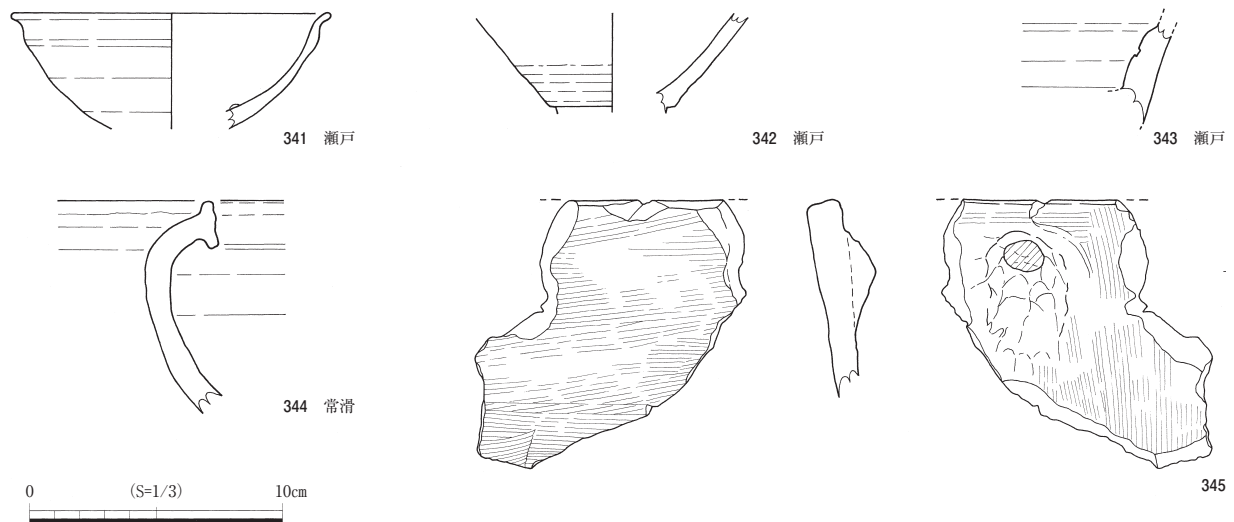


図75 529溝 出土遺物

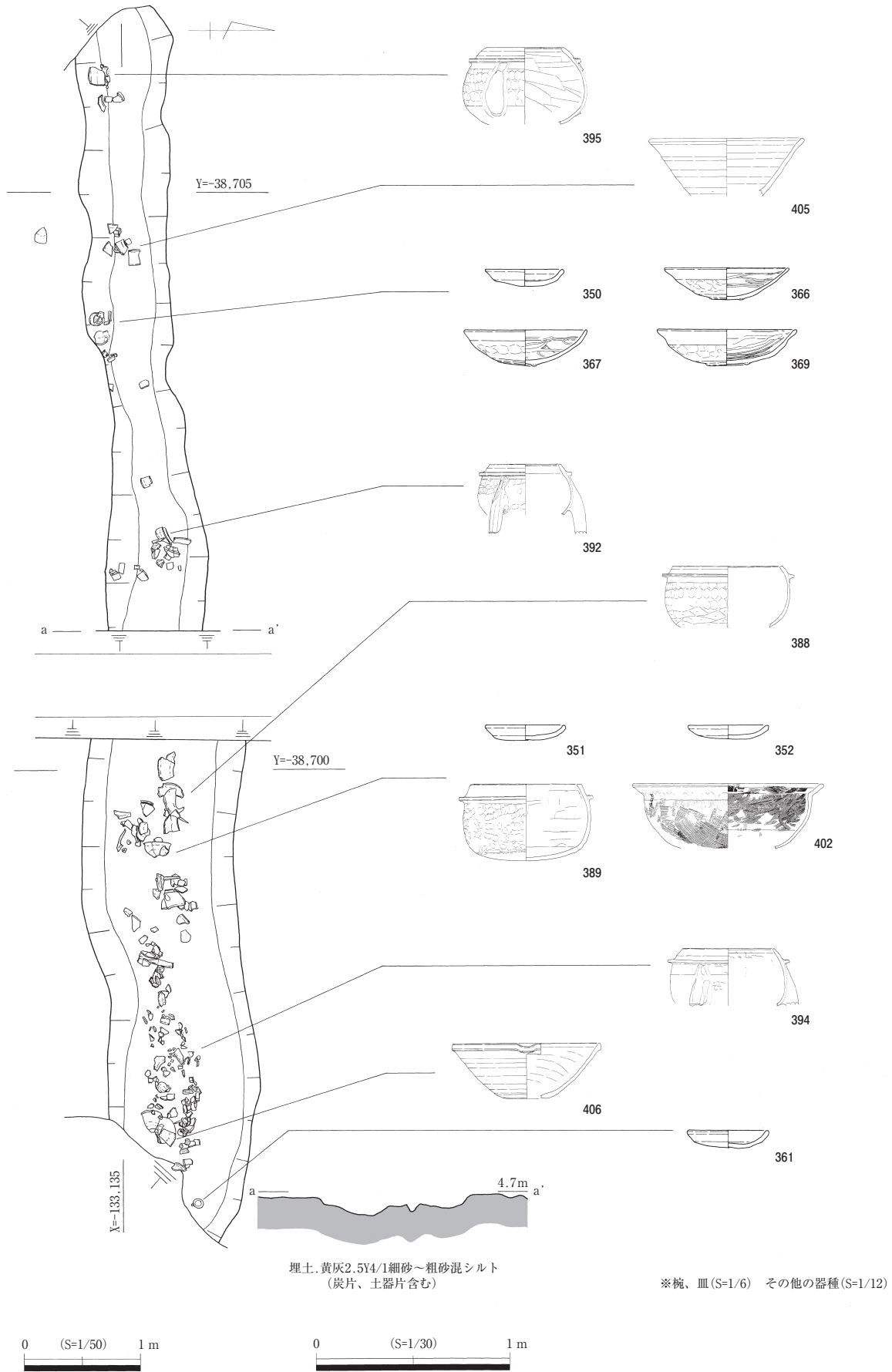


図76 560溝 平面・断面図

第3節 第5面 (第5・6層)

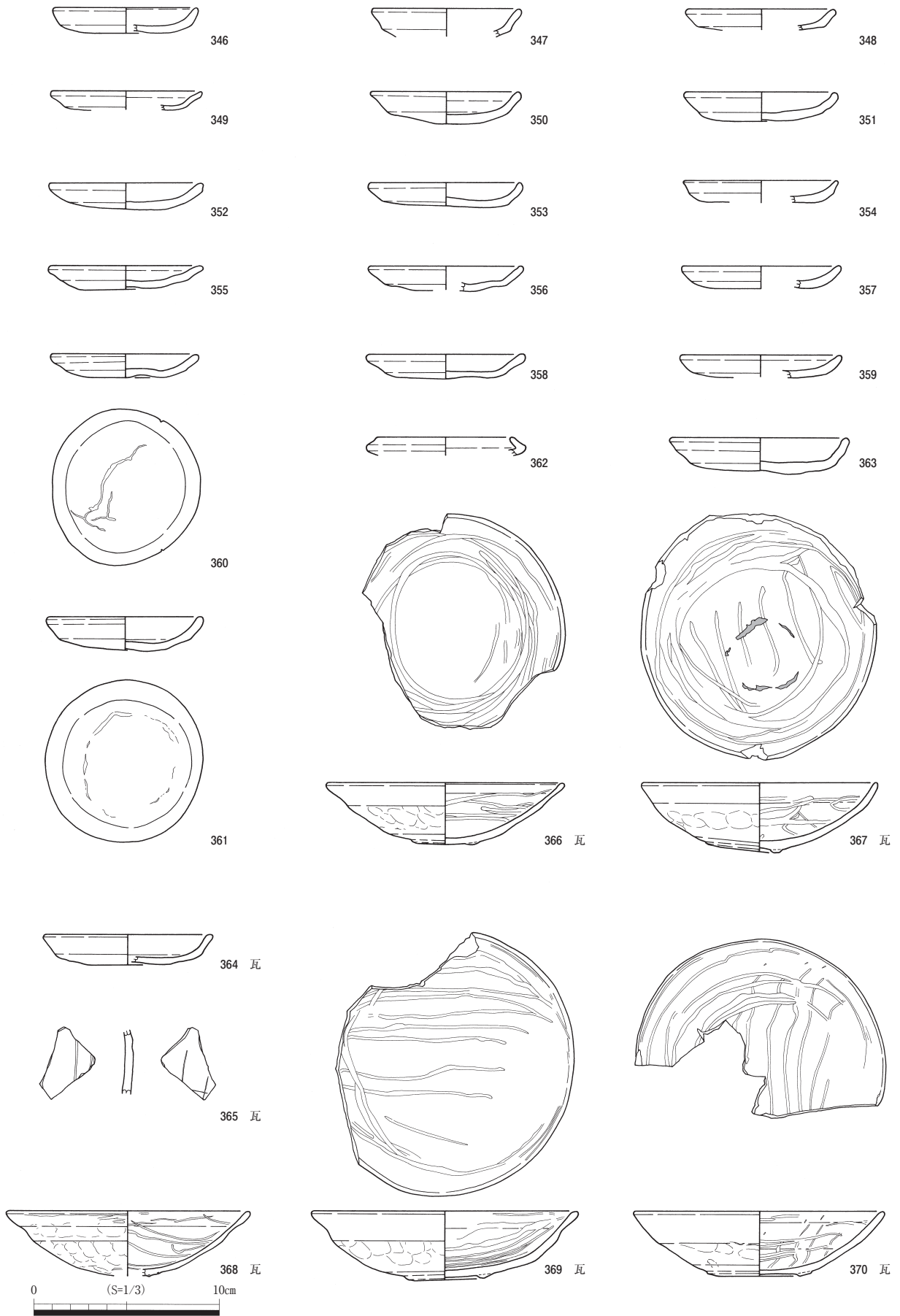


图77 560溝 出土遺物 (1)

同じレベルで中層に含まれており、正置の状態のもの4枚、伏せた状態のもの6枚である。

遺物は、土師器皿(421~430)のほかに、土師器煮炊具、瓦器碗の小片が少量出土している。13世紀中葉のものと思われる。

1164土器集積 (図84・86 カラー図版2 図版66)

中央部に位置する。第5層として調査を行った整地土と思われる層中には、多くの遺物が含まれており、特に集中していた部分を、土器集積とした。土師器皿・鍋、瓦器碗(432)・皿(431)、瓦質土器羽釜、須恵器鉢・甕、輸入陶器(893)、砥石(433)が出土している。輸入陶器(893)は、壺等の小片である。外面に灰オリーブ(7.5Y 4/2)色の釉が施され、胎土に黒色の斑点が認められる。13世紀代のものがみられる。

第5層出土遺物 (図89~93 図版66・67)

東半では、第5層から多くの遺物が出土した。特に、第5層として調査した整地土層中に多くの遺物が含まれていた。集中していた箇所2箇所について、A地点、B地点として報告する。

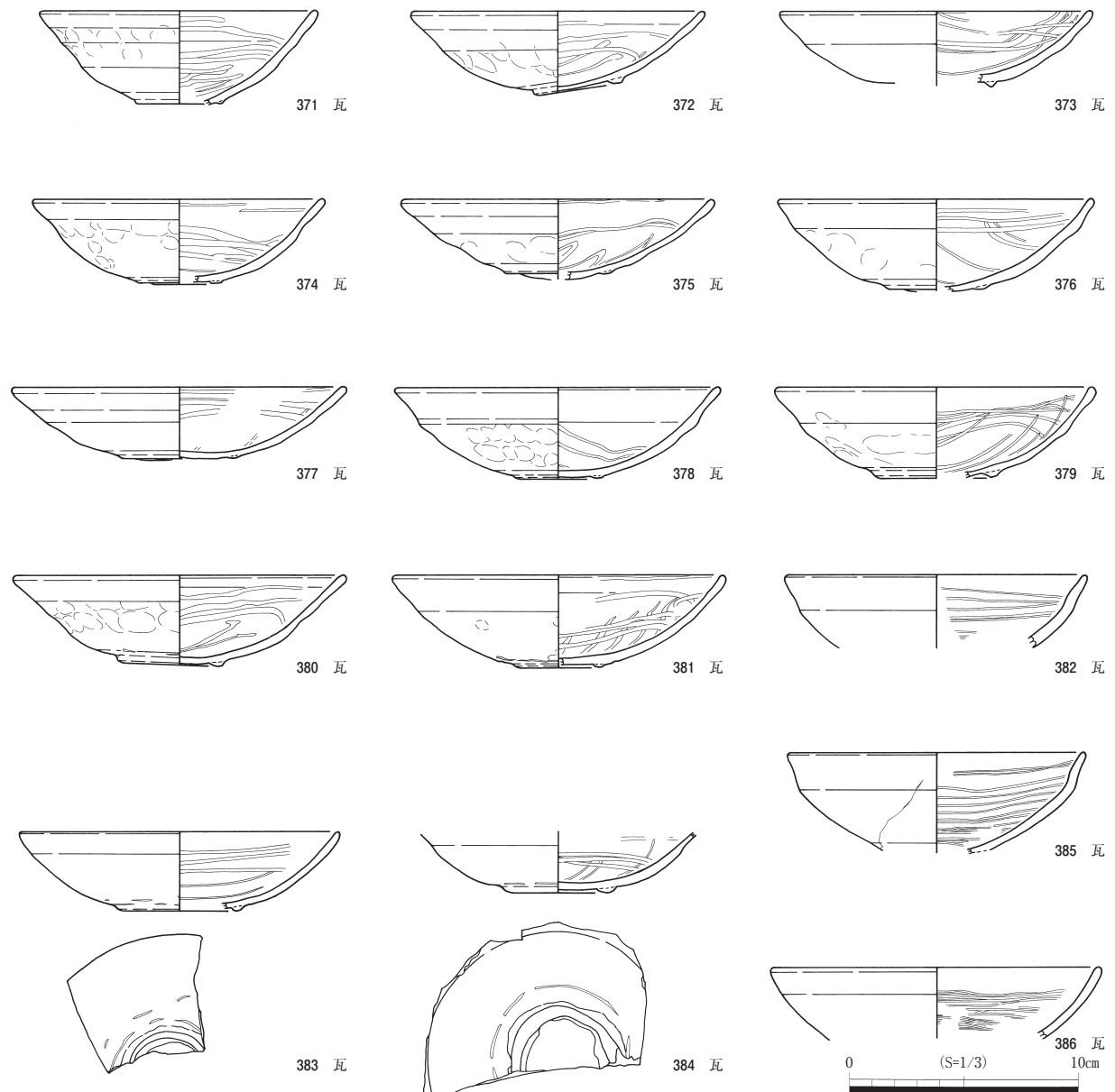


図78 560溝 出土遺物(2)

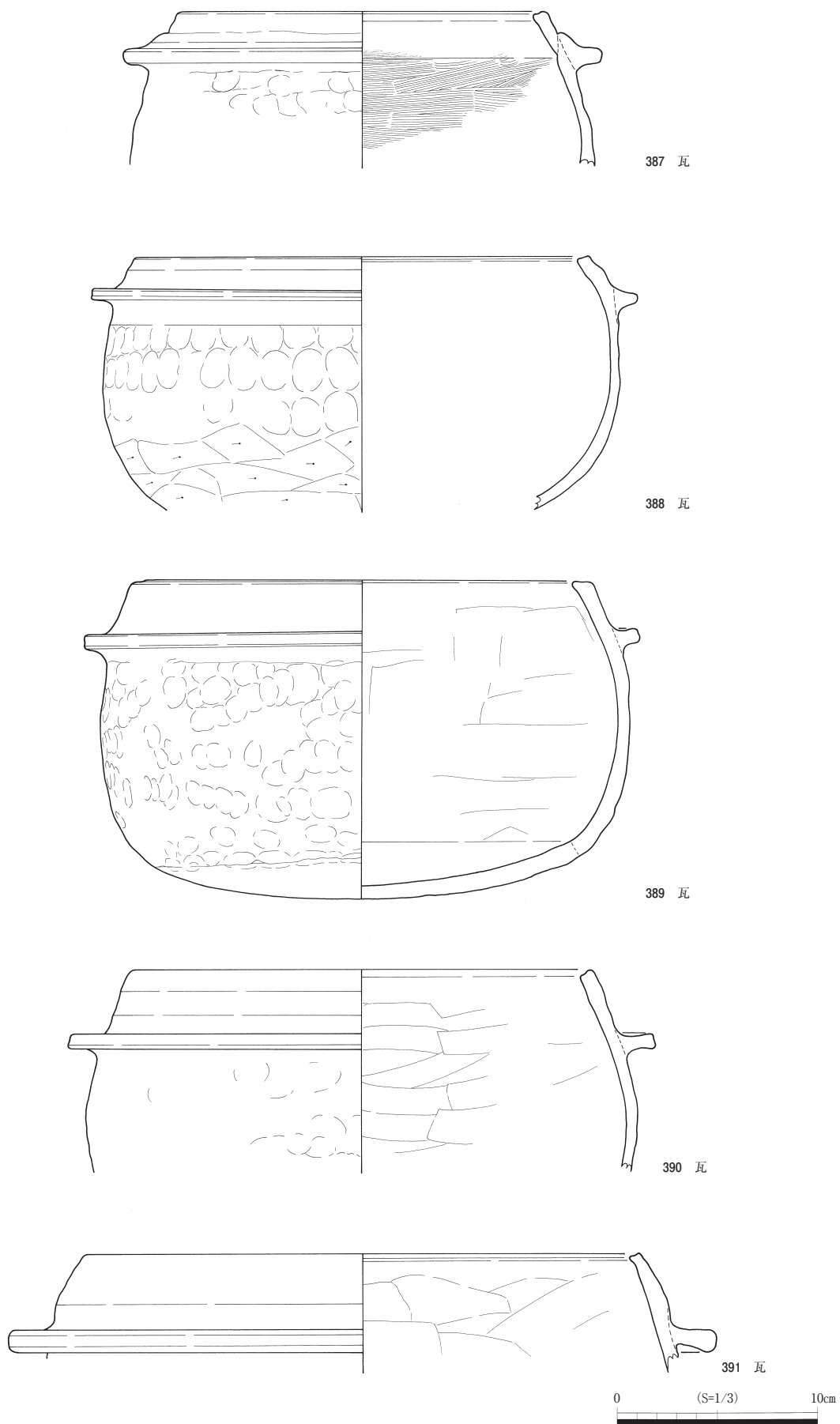


图79 560溝 出土遺物 (3)

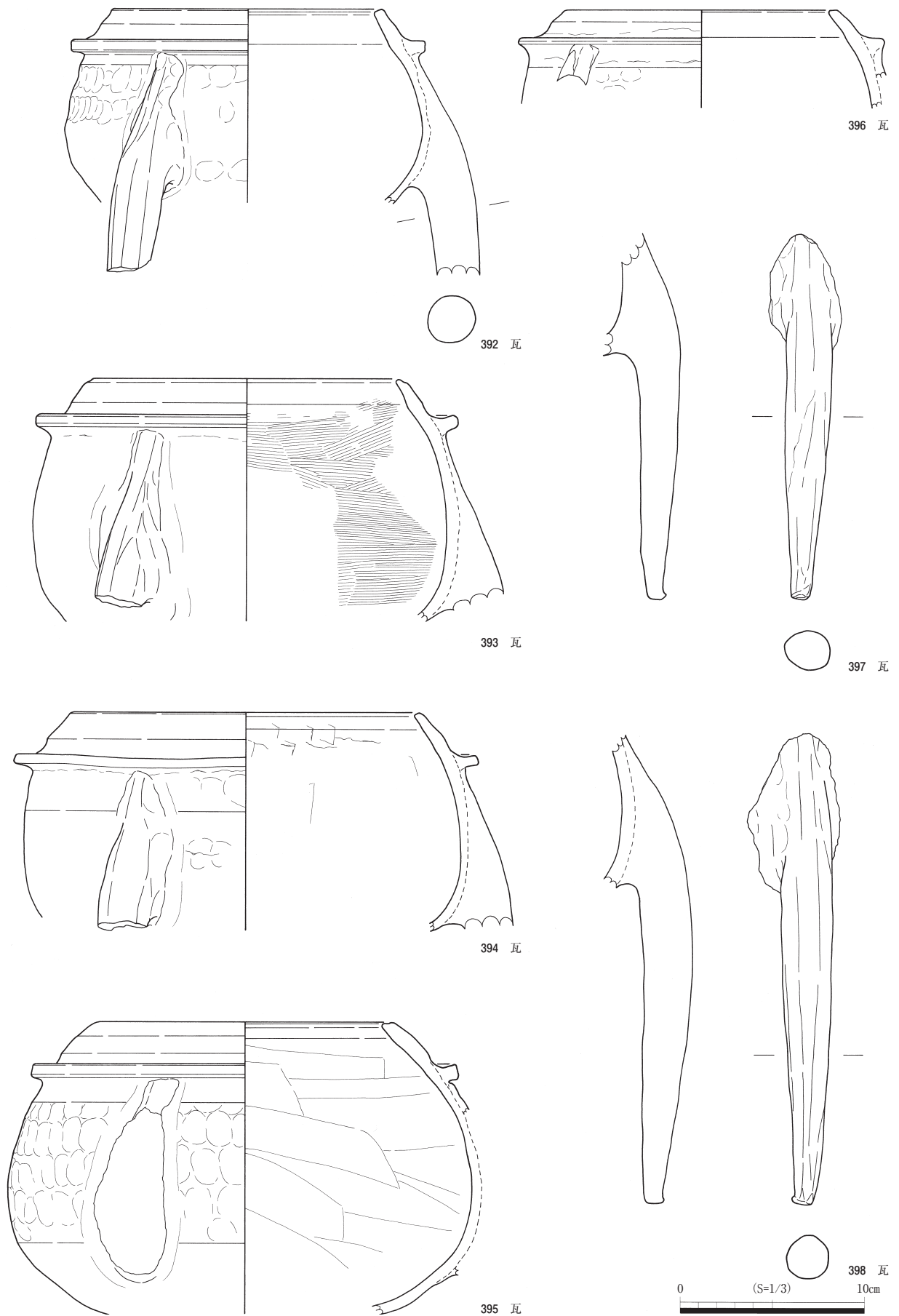


図80 560溝 出土遺物 (4)

第3節 第5面 (第5・6層)

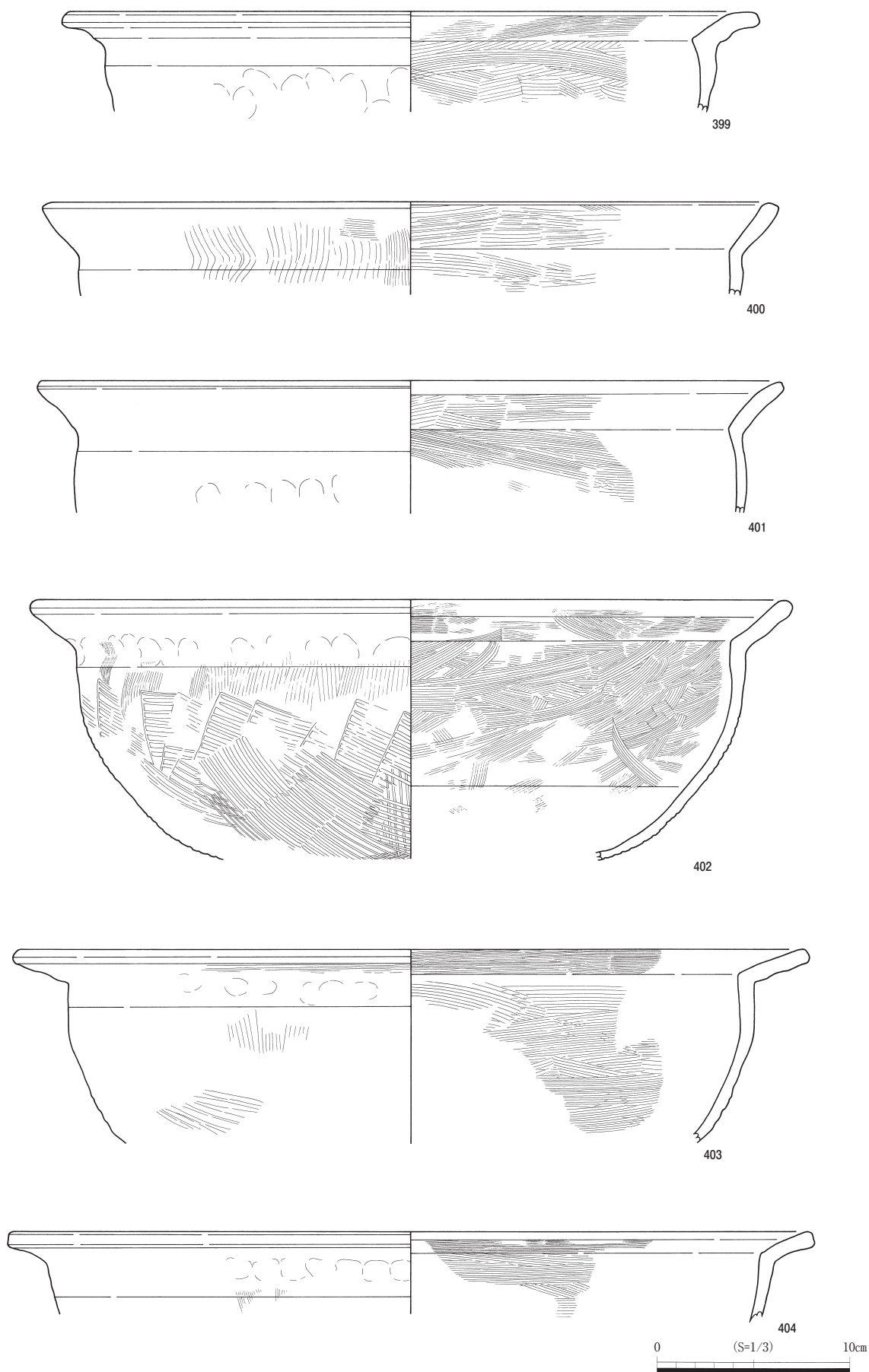


図81 560溝 出土遺物 (5)

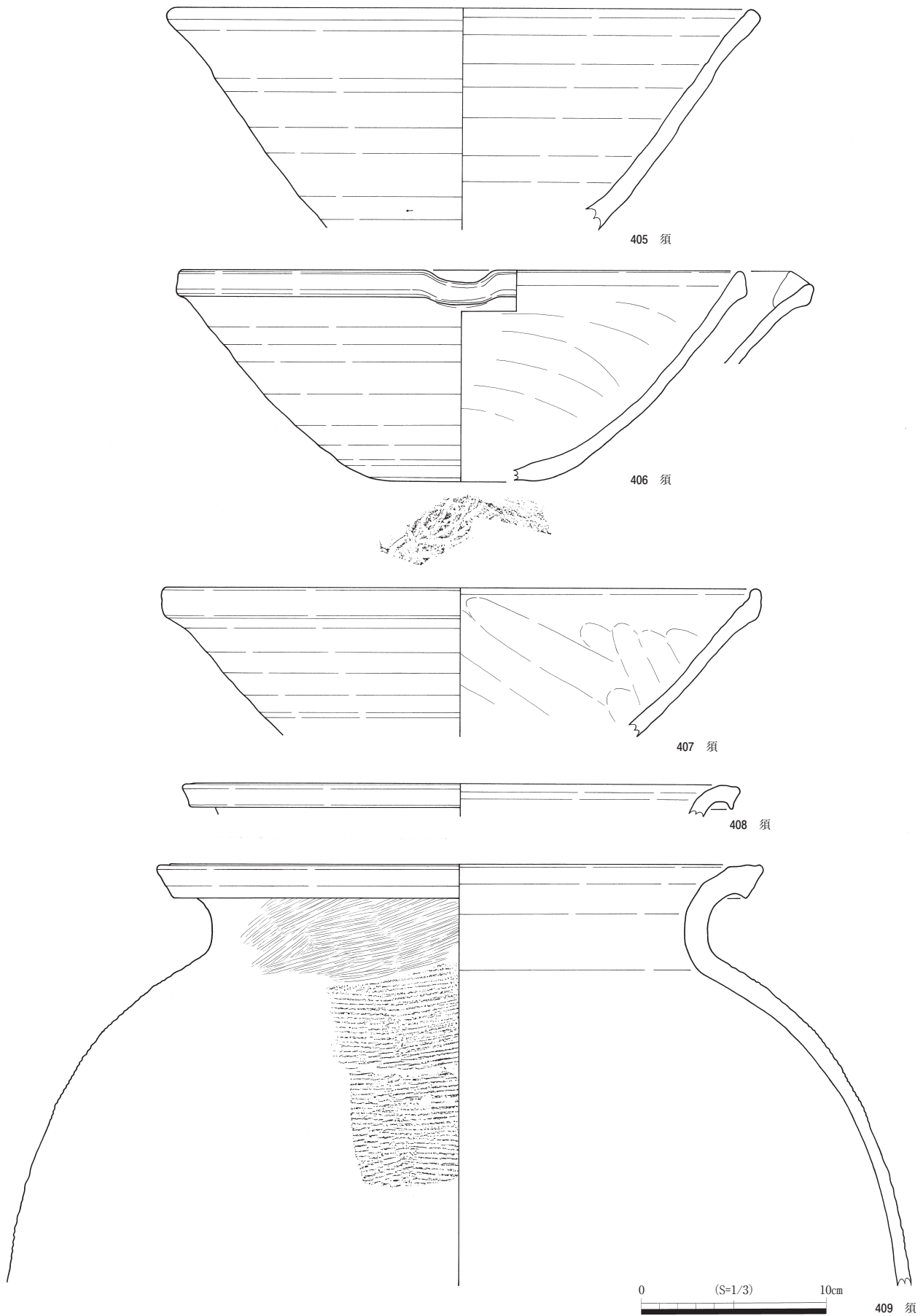


図82 560溝 出土遺物(6)

第3節 第5面（第5・6層）

A地点では、土師器皿・鍋（445）・羽釜（444）、瓦器椀、瓦質土器羽釜、須恵器鉢（441～443）、青磁碗、石鍋（446）、5cm大の焼土塊が出土している。土師器羽釜（444）は、同一個体の可能性の高い破片から、丸底で、内面に横方向のハケ目を密に施していることがわかる。体部外面にはハケ目をまばらに施すが、下部にはハケ目はみられず、ケズリを施したような痕跡を残す。

B地点では、土師器皿（447～471）・鍋、瓦器椀（476～483）・皿（472～475）、瓦質土器羽釜（496・497）・鍋（493）、須恵器鉢（494・495）、白磁皿（484・485）、青磁碗（487～492）・皿（486）、砥石（498）が出土している。

第5層からはほかに、土師器皿（499～506）・鍋・羽釜・竈、瓦器椀（507・508）・皿、瓦質土器羽釜

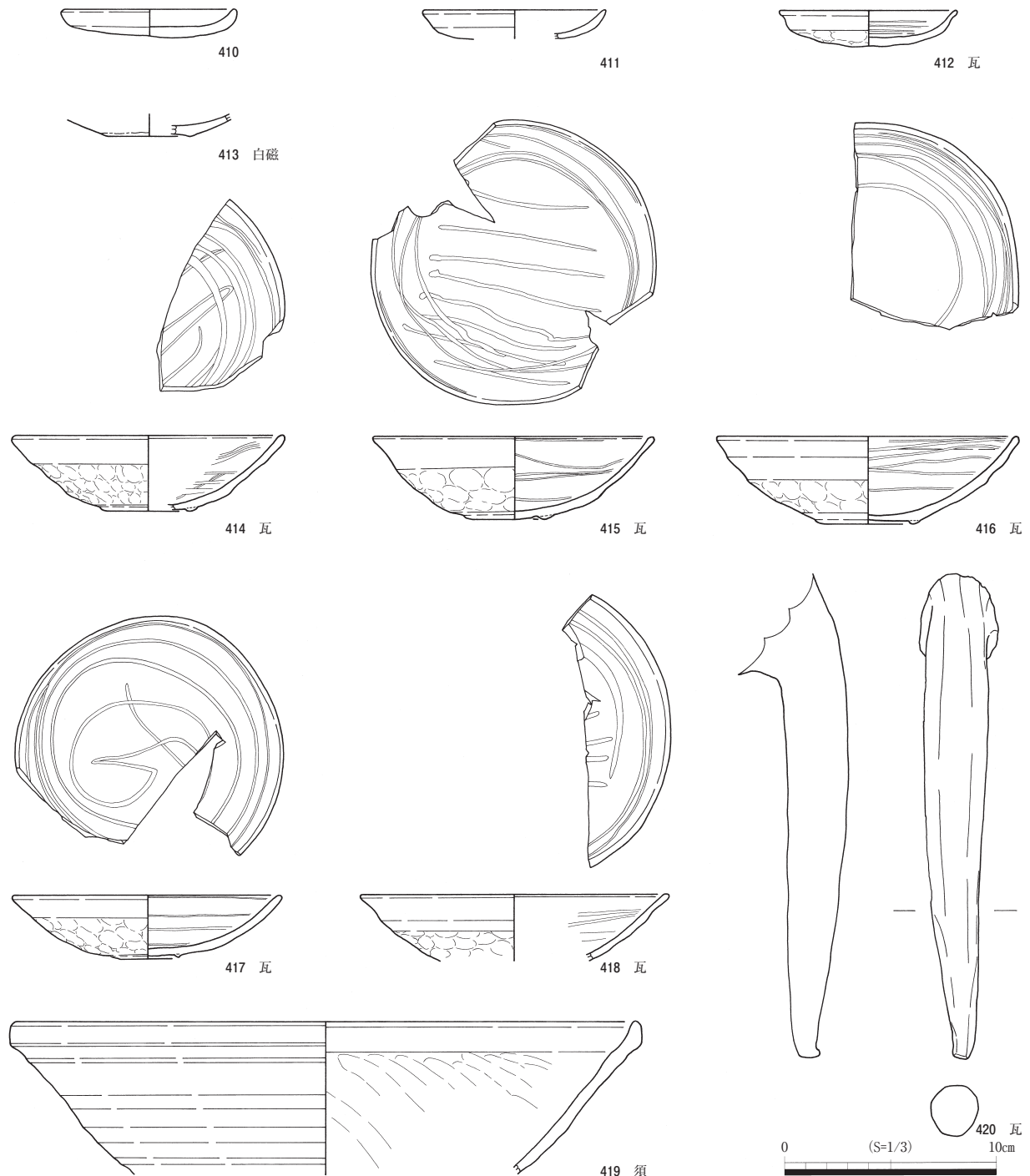


図83 576溝 出土遺物

(516)、須恵器碗 (512~514)・皿 (511)・鉢 (515)・甕 (517・518)、常滑焼鉢、備前焼挿鉢、白磁碗・皿、青磁碗・水注等把手 (510)、青白磁合子蓋 (509)、平瓦、鍛冶用轆羽口、硯 (519)、砥石 (520)、焼土塊が出土している。

第6層出土遺物 (図94 カラー図版2 図版67)

土師器皿 (521)・煮炊具、瓦器碗・皿、須恵器皿 (522)・鉢 (527)、白磁皿 (523~526)、青磁碗、輸入陶器 (894)、硯 (528) が出土している。輸入陶器 (894) は、壺等の小片である。外面に灰オリープ (5 Y 5 / 3) 色の釉が施され、胎土に黒色の斑点がみられる。

側溝等出土遺物 (図95 カラー図版2・3)

側溝等からの出土で、詳細な帰属層が不明である遺物を図95に掲載した。輸入陶器底部 (531) は、内面と体部外面に黒褐~灰褐 (7.5Y R 3 / 1 ~ 4 / 2) 色の釉が施され、胎土に暗赤褐 (2.5Y R 3

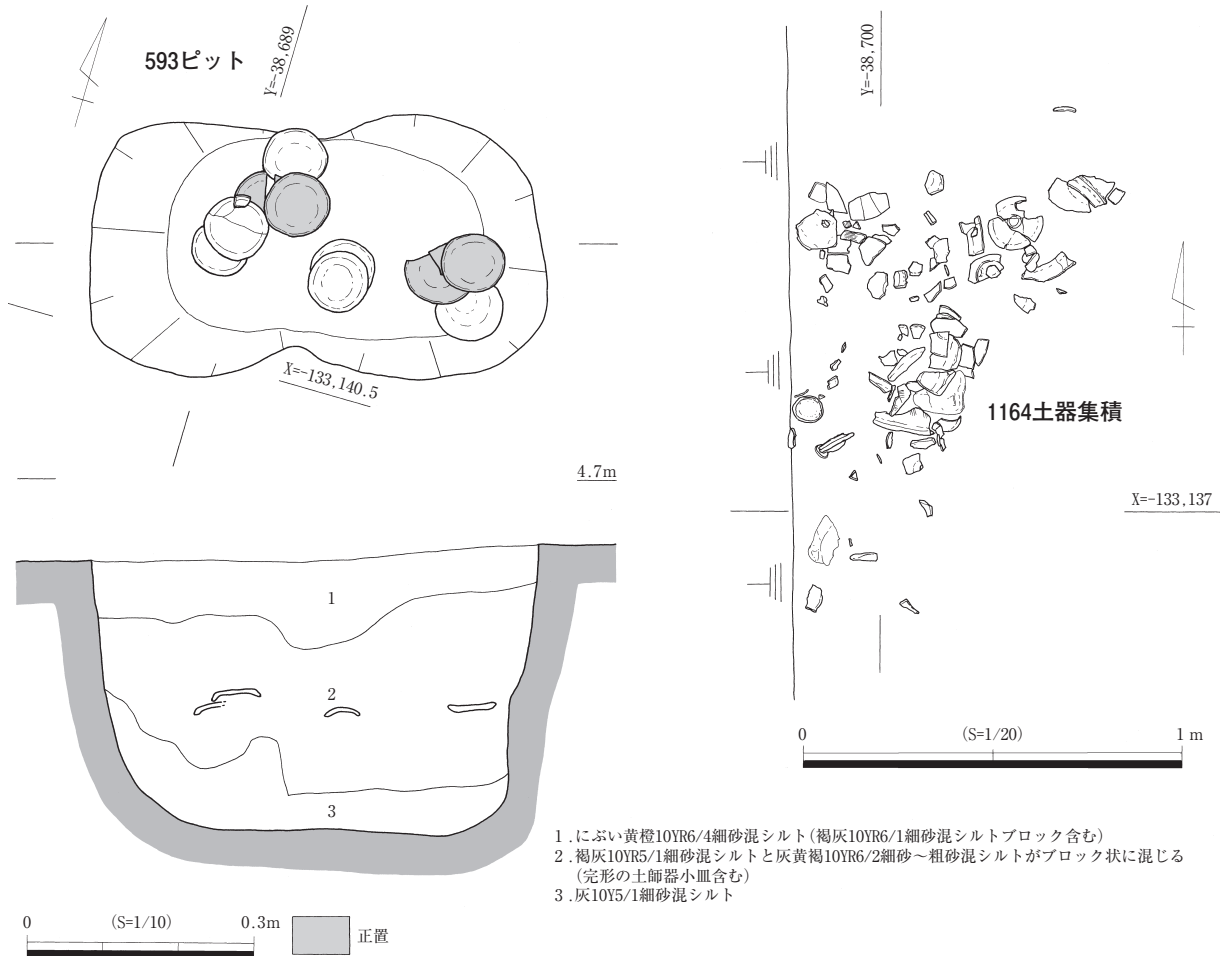


図84 593ピット、1164土器集積 平面・断面図

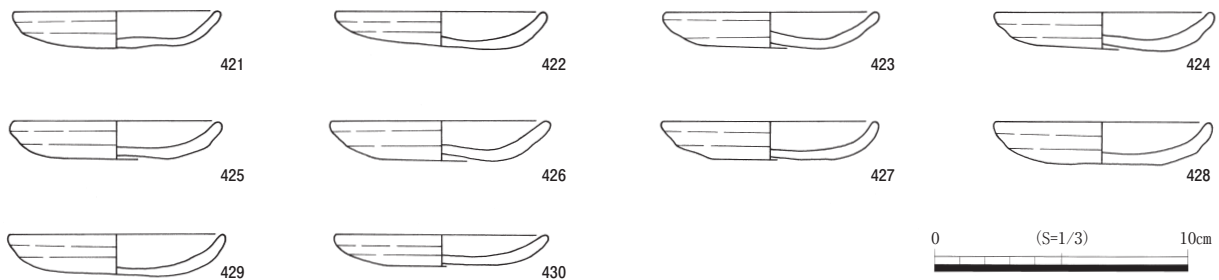


図85 593ピット 出土遺物

第3節 第5面（第5・6層）

/3) 色の斑点がみられる。輸入陶器壺（532）は、頸部と体部の屈曲部に段を有し、内外面に浅黄（5 Y 7/3）色の釉を施す。

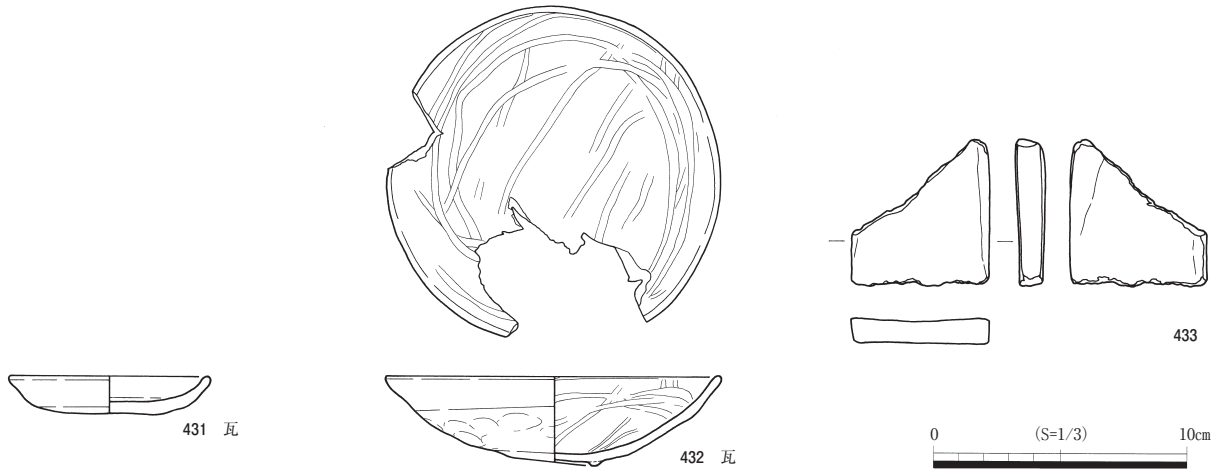


図86 1164土器集積 出土遺物

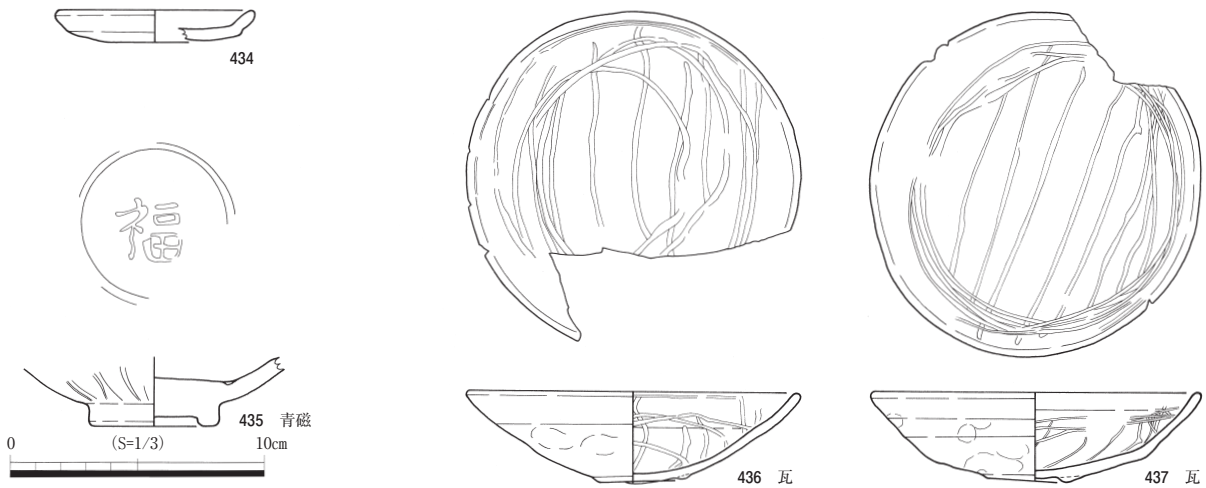


図87 その他の溝（1137溝） 出土遺物

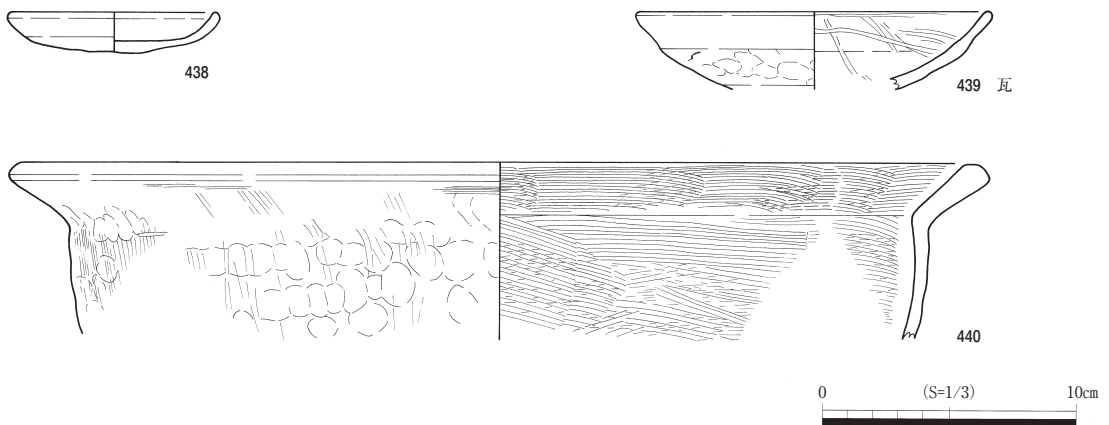


図88 その他のピット（583ピット） 出土遺物

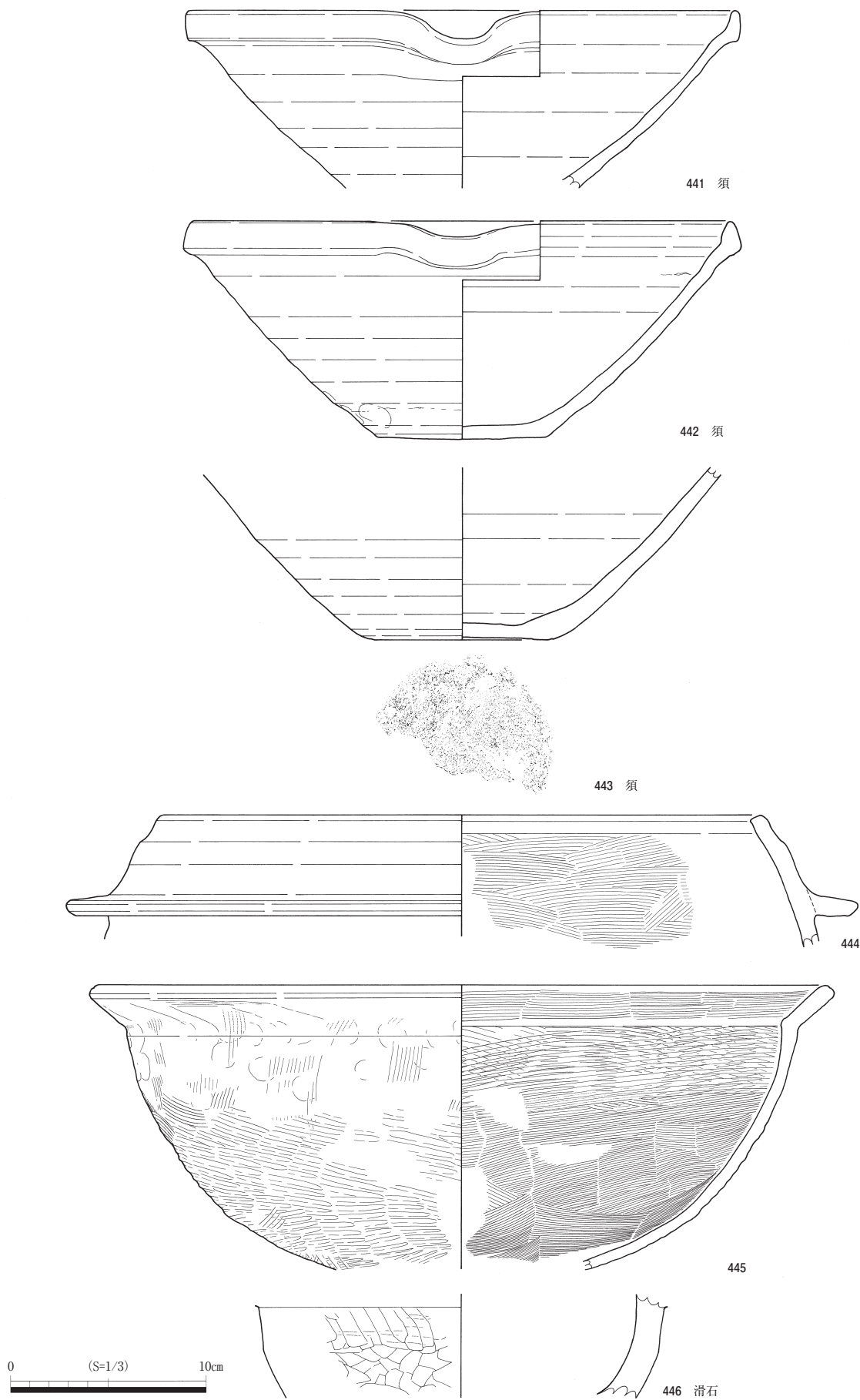


図89 第5層（東半・A地点）出土遺物

第3節 第5面 (第5・6層)

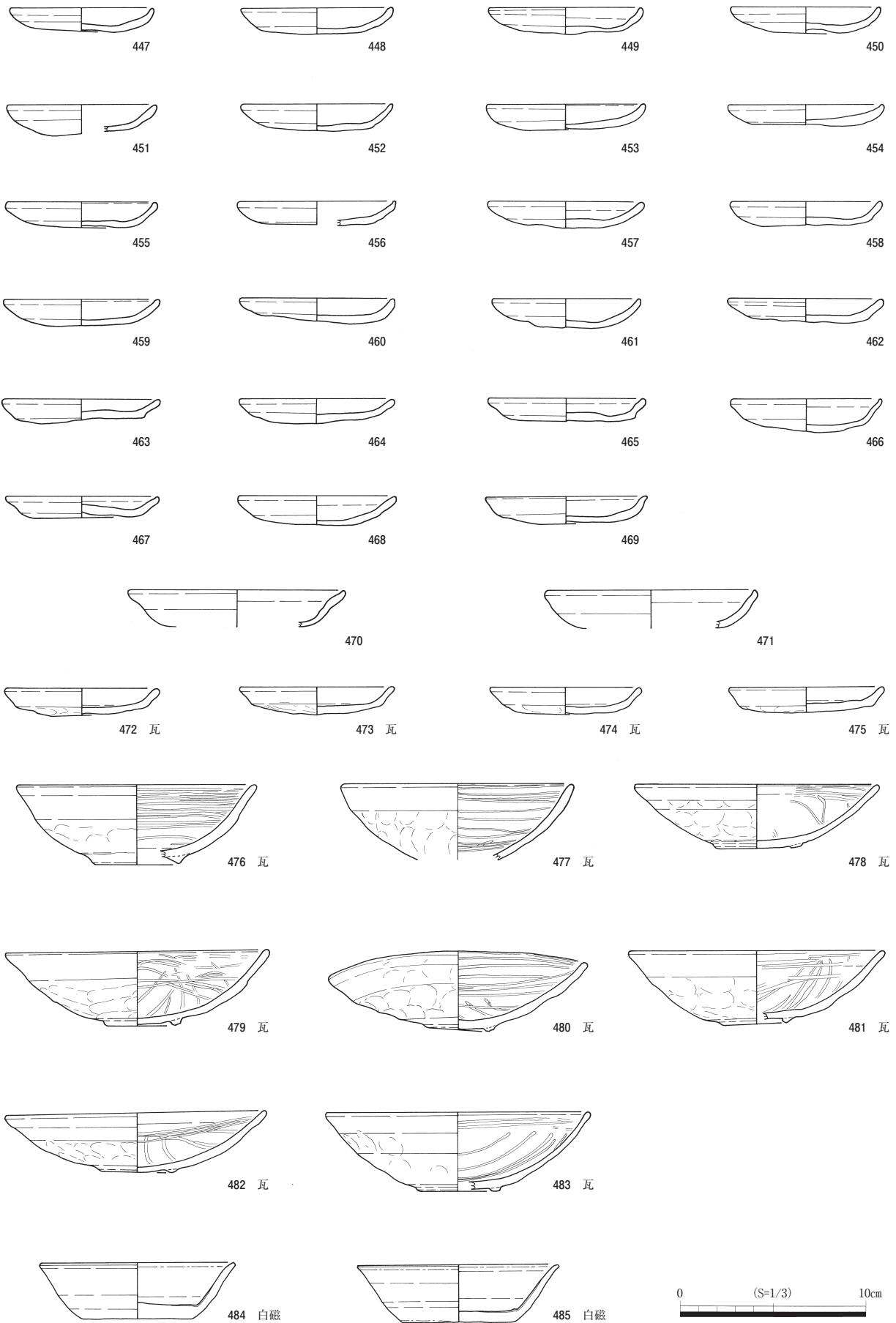


图90 第5層 (東半・B地点) 出土遺物 (1)

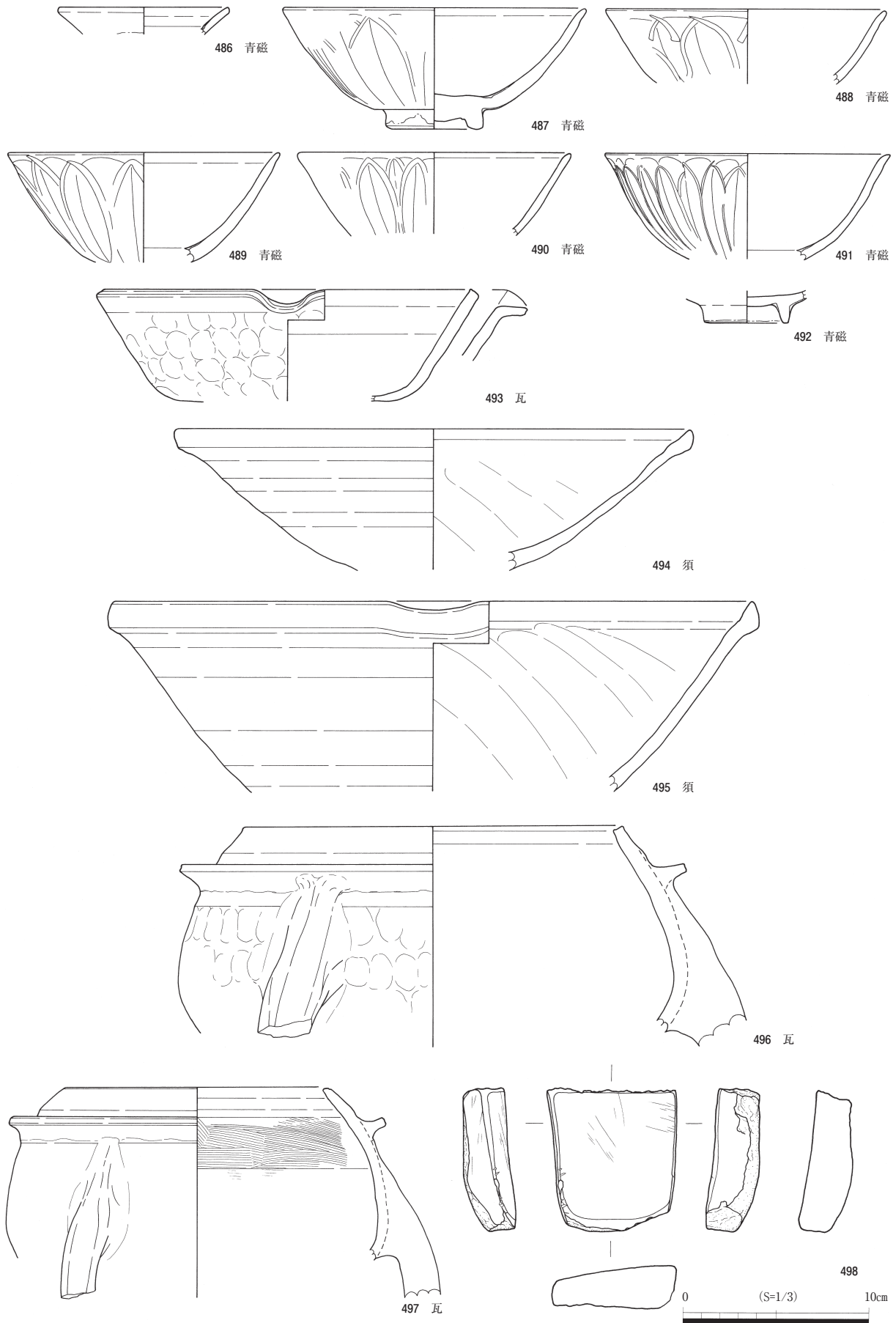


図91 第5層（東半・B地点）出土遺物（2）

第3節 第5面 (第5・6層)

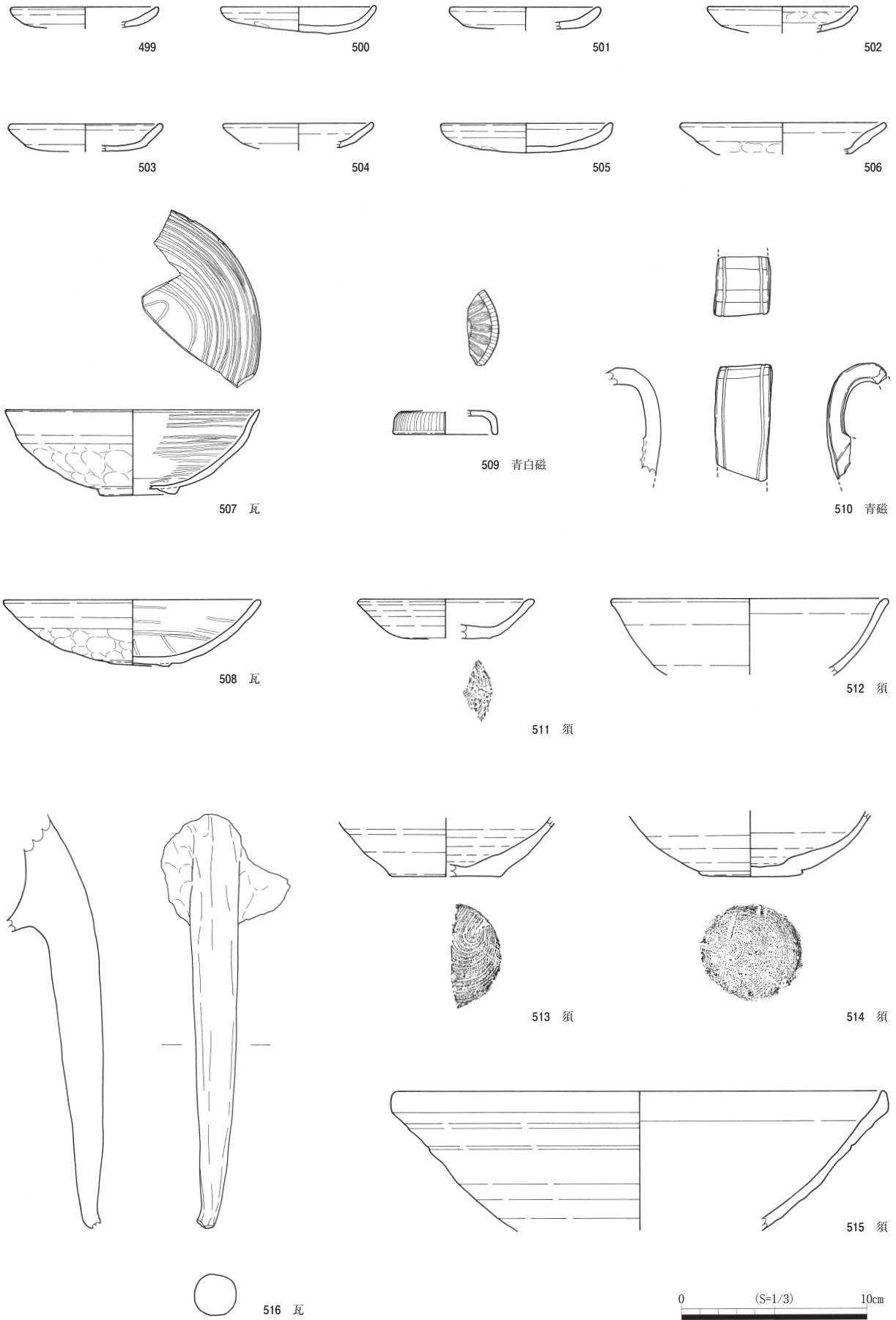


图92 第5層 (東半) 出土遺物 (1)

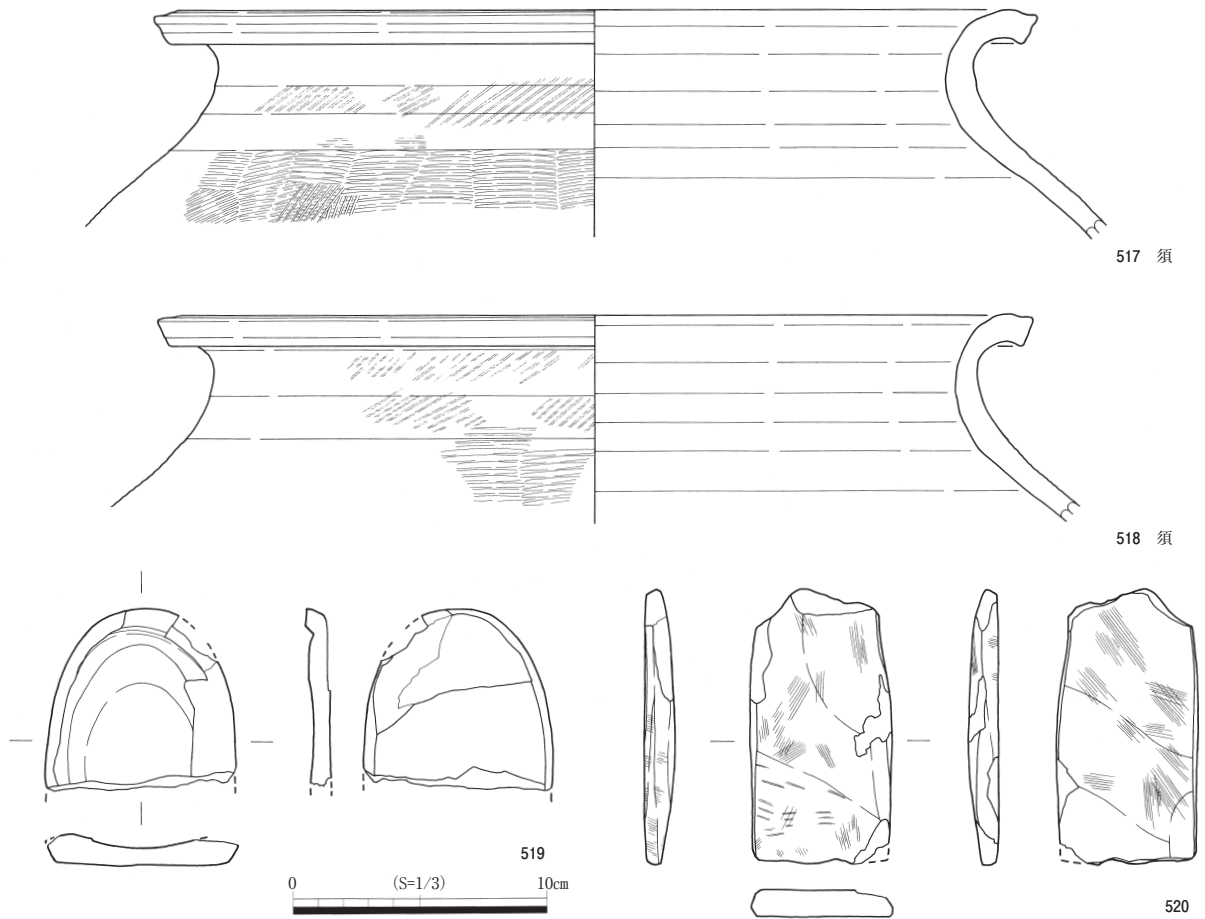


図93 第5層（東半）出土遺物（2）

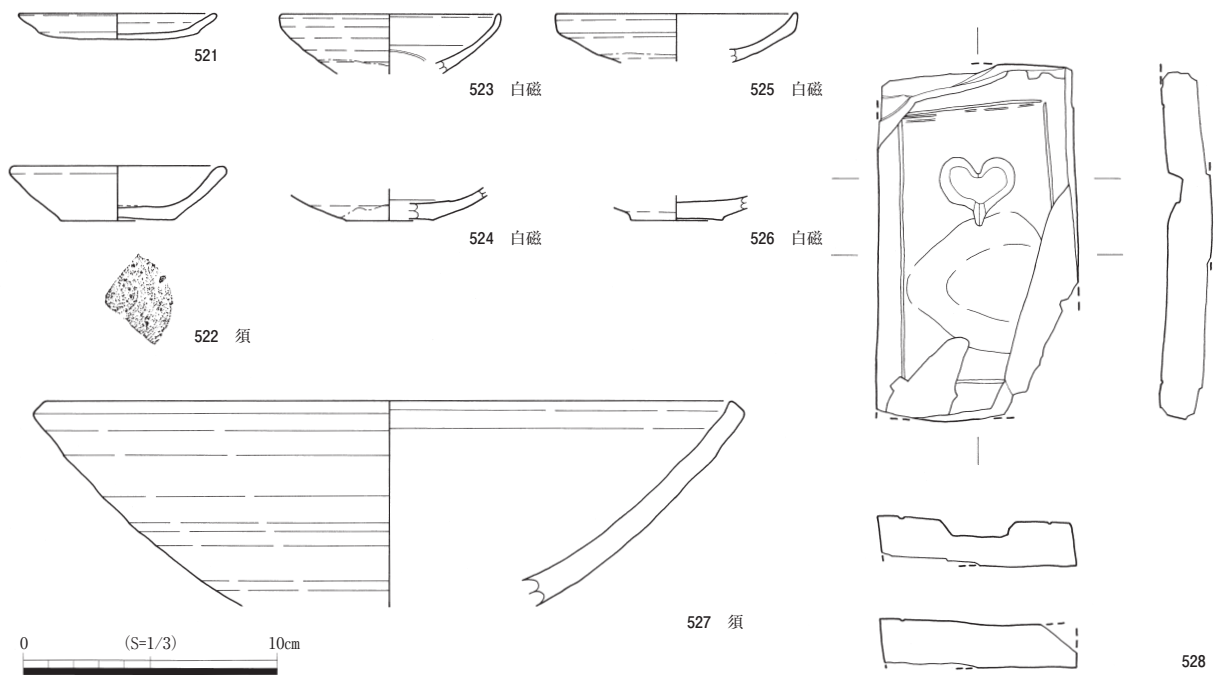


図94 第6層（東半）出土遺物

第3節 第5面 (第5・6層)

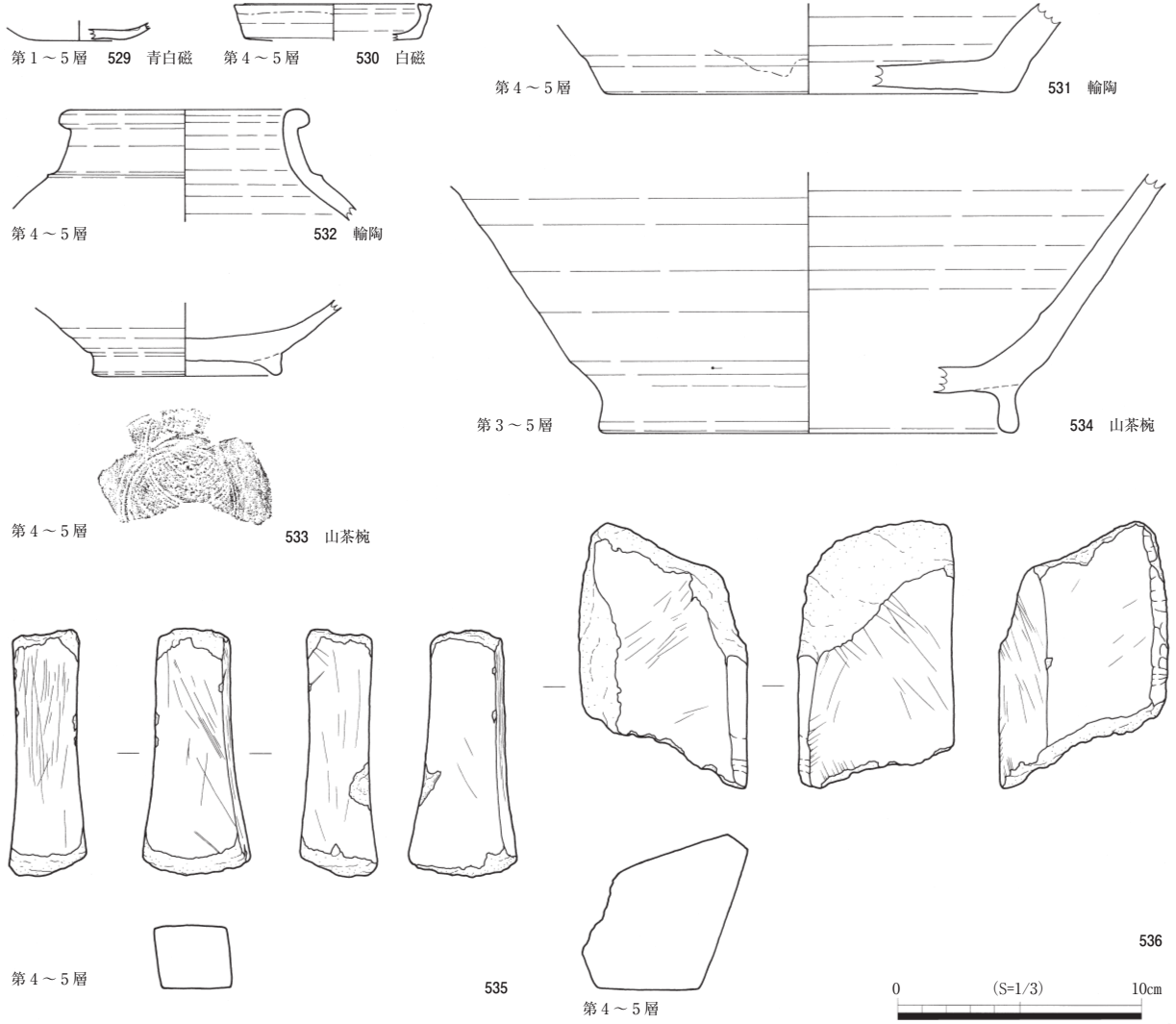


図95 側溝等 (第1～5層) 出土遺物

第4節 第7面（第7～9層） —11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉の集落面—

第1項 層序と地形

第6層を除去して検出した、第7層上面が第7面である。調査区東半で認められた、強く土壌化した灰色シルト層を第7層とした。ただし、東半でも地形の高い北西部分では、第7層土壌化層は遺存していなかった。東半の第7層上面、下面で遺構を多数検出した。

なお、第8層は、第7層ほど強く土壌化していないシルト層である。第9層は西部にのみ認められるシルト層で、これも第7層ほど強く土壌化していない。第11層が東側により厚く堆積し、東側が高い地形が形成された後、西側を中心にシルト層が堆積し、調査区全体がほぼ平坦な地形となったと考えられる。出土遺物から、第8層は、第7層と時期的に連続する層と考えられる。第9層からはほとんど遺物が出土していない。

第7面の高さは、T.P.4.6～4.7mである。

第2項 遺構と遺物（図96・97 図版14）

柱穴を多数検出し、掘立柱建物等を復元した。以下、建物、柱列、柱穴、溝、ピット、土坑、土器集積、落ち込みの順に記述する。

建物2〔613・620・625・629・633・636柱穴〕（図98・106 図版15）

調査区東半南東部に位置する。南側の調査区外に続くと考えられ、東西2間×南北1間以上、約5.0m×2.1m以上、面積10.5㎡以上である。方位は正方位で、柱間は東西方向で約2.5m、南北方向で約2.1mである。柱痕を残すものがある。

遺物は、613柱穴から須恵器椀（549）、620柱穴から土師器皿、625柱穴から古代の土師器杯、629柱穴から土師器、633柱穴から土師器皿・鍋、636柱穴から土師器皿、瓦器椀、須恵器椀（550）が出土している。すべて小片であるため、詳細な時期は不明であるが、12世紀を中心とする時期のものと思われる。

建物5～7と重複している。柱穴の切り合い関係がなく、先後関係は不明である。

建物3〔696・714・716・727・731・734・739・742・745柱穴〕（図99・100・106・122 図版15・68・69）

調査区東半西部に位置する。東西4間×南北2間、約8.4m×約5.4m、面積約45.4㎡であるが、西側の攪乱部分、南側の調査区外に続く可能性もある。方位はN-1°-Eで、柱間は東西方向で2.0～2.1m、南北方向で2.7～2.8mである。柱痕を残す柱穴はないが、727柱穴では根石と思われる石2個を、716柱穴では礎板と思われる角材を検出した。樹種同定の結果を第4章に掲載している。696・734柱穴でも埋土に石が含まれていたが、底面から浮いた状態である。

遺物は、696柱穴から土師器皿、灰釉陶器、714柱穴から土師器皿（538・539）・鍋、瓦器椀（547・548）・皿、716柱穴から土師器皿（540）・煮炊具、瓦器椀、白磁皿、727柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器椀、731柱穴から土師器皿（542～545）、瓦器椀（546）、739柱穴から土師器皿、瓦器椀、742柱穴から土師器皿（541）・煮炊具、745柱穴から土師器皿（664）・煮炊具、瓦器椀（665）、須恵器が出土している。瓦器椀（547・548）には、見込みに円形の痕跡がみられる。形状、大きさから別個体の高台が接した際にできたものと思われる。周囲と同様に炭素が吸着していることから、焼成の際に別個体と重ねられていたとは考えられない。明らかにミガキを施した後についたものであるため、ミガキ等最終の調整から焼成までの工程で重ねられたと考えられる。12世紀中葉を中心とする時期のものである。

第4節 第7面 (第7~9層)

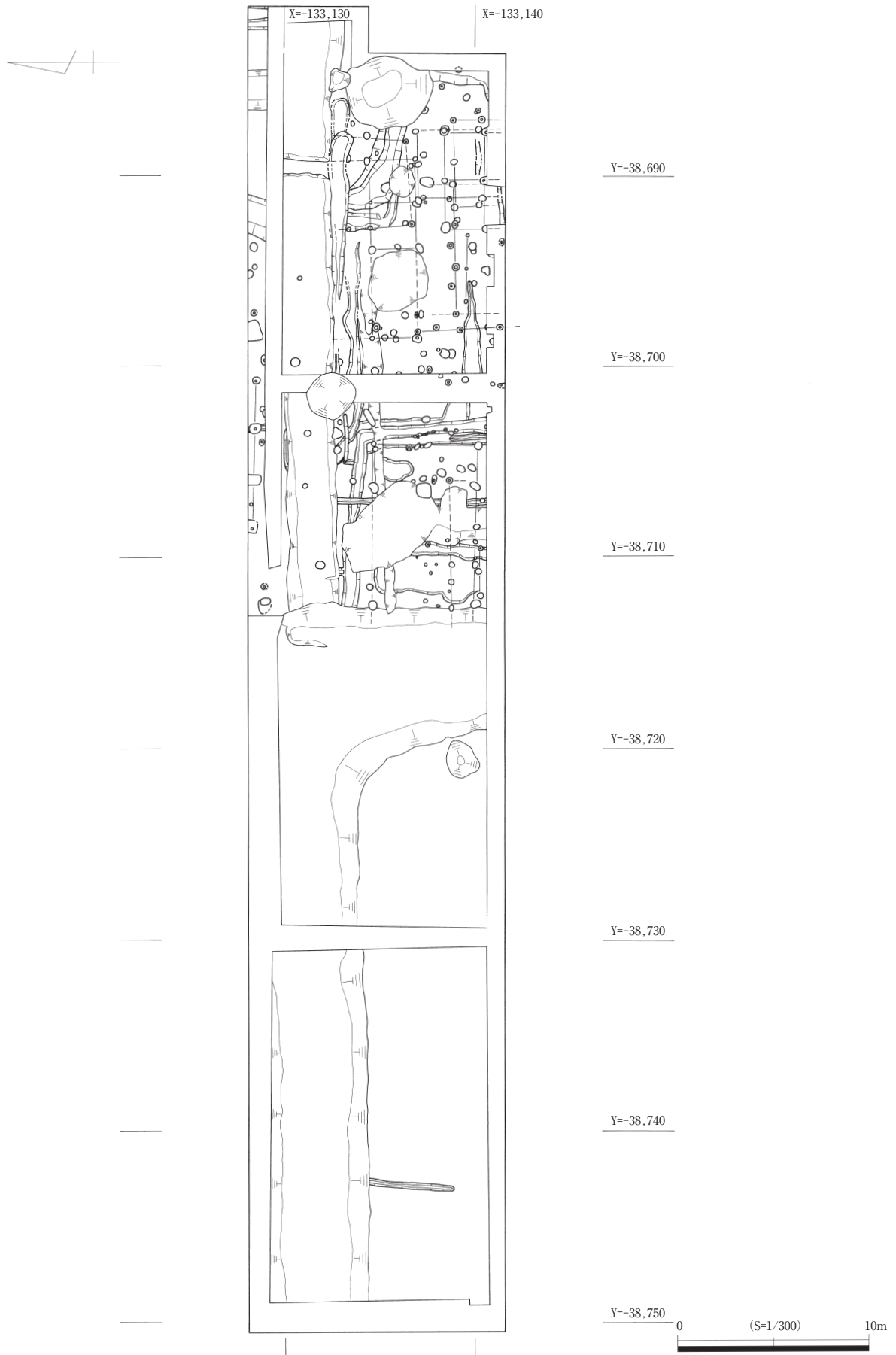


图96 第7面 平面图

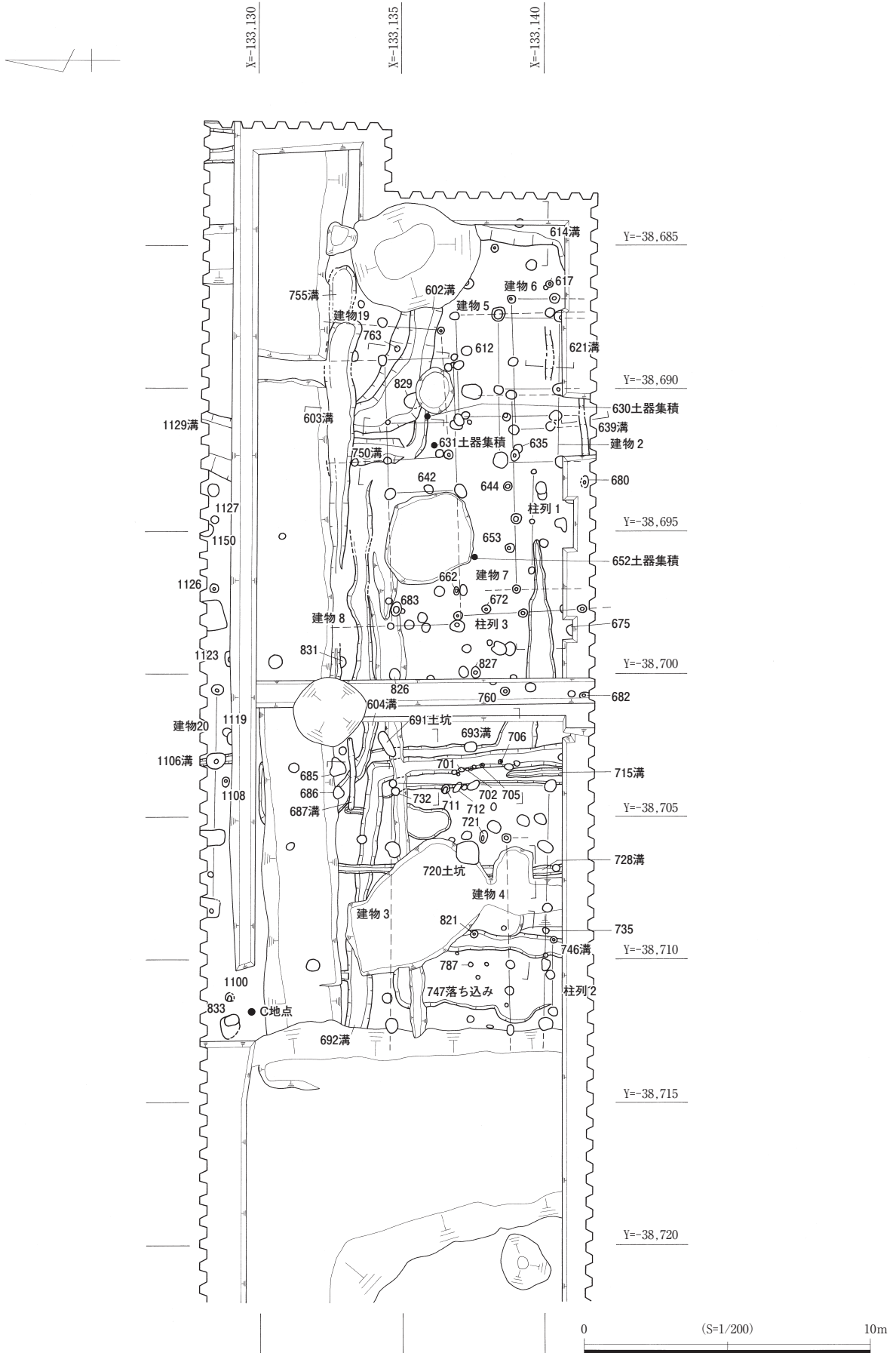


図97 第7面東半 平面図

第4節 第7面（第7～9層）

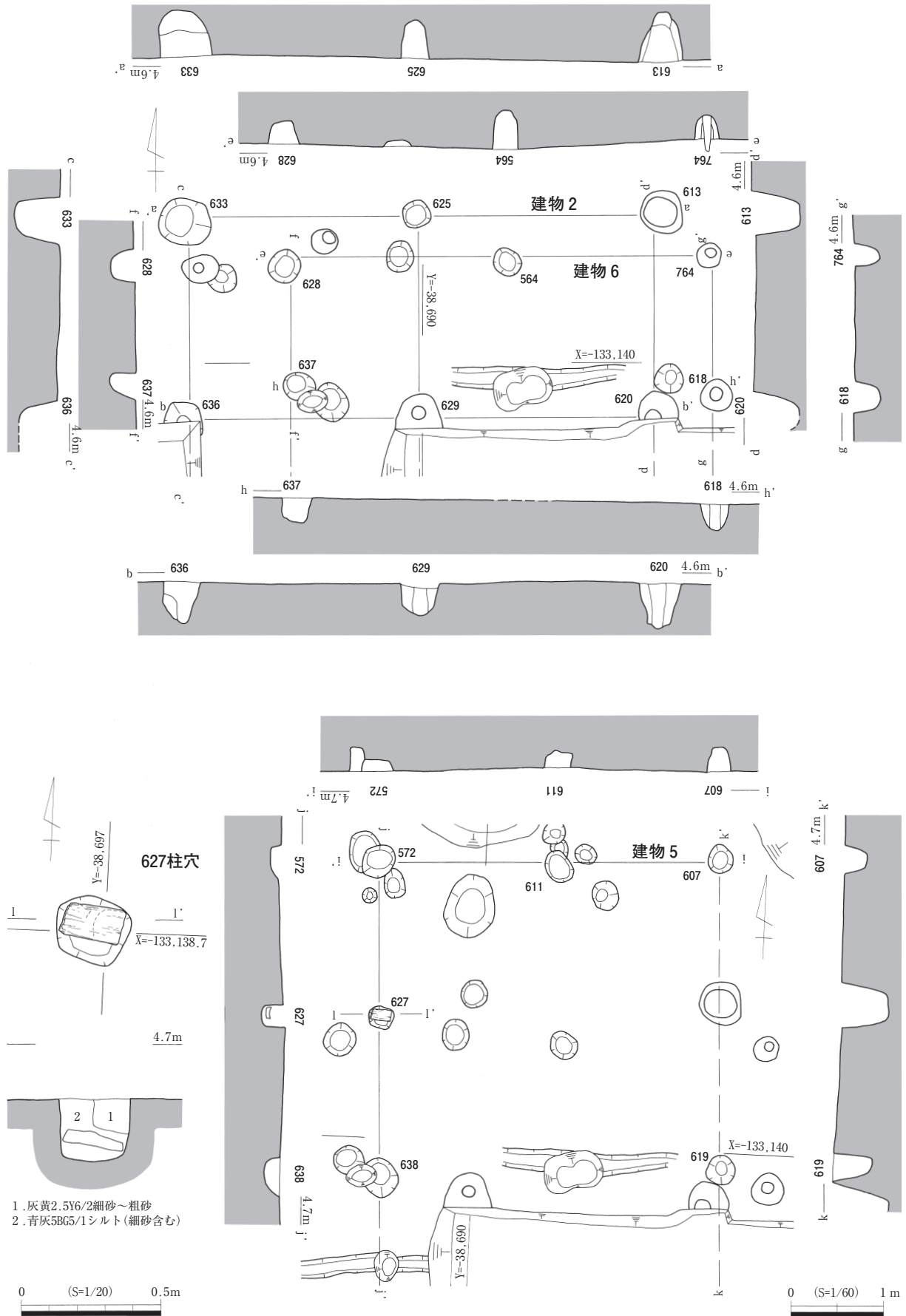


図98 建物2・5・6 平面・断面図

建物4、693・728・746溝、747落ち込みと重複し、柱列2と近接する。714・716・731柱穴が693溝を切っており、693溝より新しい。

建物4 [723・737・743柱穴] (図99 図版16)

調査区東半南西部に位置する。東西3間、約6.7mの柱列であるが、西側の攪乱部分、南側の調査区外に続くと想定し、建物とした。723柱穴と737柱穴の間の柱穴が攪乱により失われたと思われる。方位はN-1°-Wで、柱間は2.2~2.3mである。723柱穴に柱根を残す。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、737・743柱穴から土師器皿、瓦器椀、723柱穴から瓦器椀が出土している。すべて小片であ

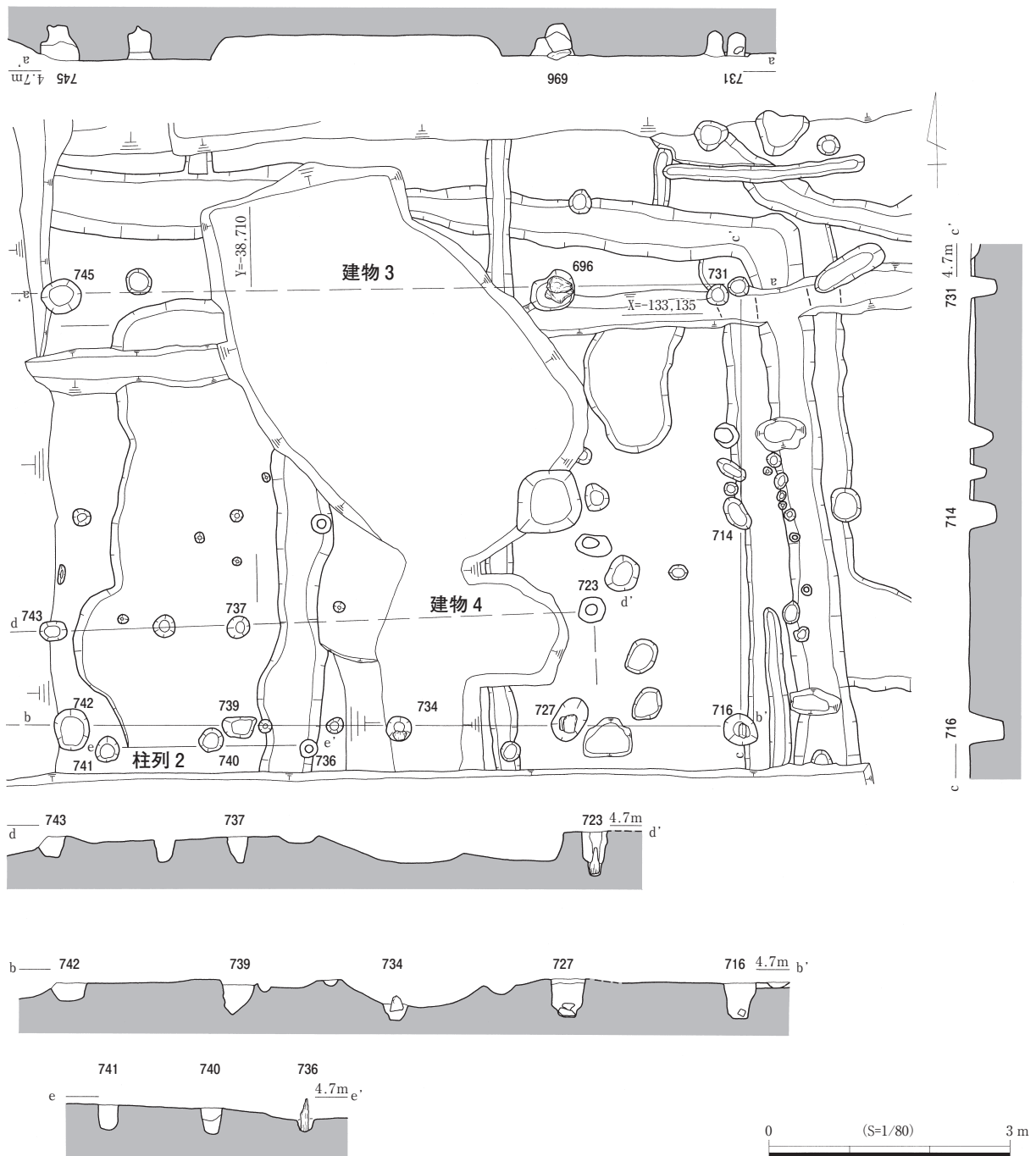


図99 建物3・4、柱列2 平面・断面図

るため、詳細な時期は不明であるが、瓦器椀片はいずれも内外面にミガキを有するもので、12世紀中～後葉を中心とする時期のものと思われる。

建物3、728・746溝、747落ち込みと重複しており、調査区外に続くとすれば柱列2とも重複する。737柱穴が747落ち込みを切っており、747落ち込みより新しい。

建物5〔572・607・611・619・627・638柱穴〕（図98・106 図版16）

調査区東半南東部に位置する。東西2間×南北2間、約3.6m×約3.3m、面積約11.9㎡であるが、南側の調査区外に続く可能性がある。方位はN-3°-Wで、柱間は1.7～1.9mである。627柱穴には礎板（556）があり、柱痕を確認した範囲に窪みが認められた。礎板の樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、572・607・611・638柱穴から土師器皿、瓦器椀が出土している。すべて小片であるため、詳細な時期は不明であるが、瓦器椀片のミガキの間隔や、高台の形状等から12世紀中～後葉を中心とする時期のものと思われる。

建物2・6～8と重複する。572柱穴が建物8の573柱穴を切っており、建物8より新しい。

建物6〔564・618・628・637・764柱穴〕（図98 図版17）

調査区東半南東部に位置する。南側の調査区外に続くと考えられ、東西2間×南北1間以上、約4.5m×1.5m以上、面積6.8㎡以上である。方位は正方位で、柱間は東西方向で2.2～2.4m、南北方向で1.3～1.5mである。764柱穴に柱根を残し、618柱穴に柱痕を残す。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、564・618柱穴から土師器皿、瓦器椀、628柱穴から土師器皿が出土している。すべて小片であるため、詳細な時期は不明であるが、瓦器椀片はミガキの間隔等から、12世紀中～後葉を中心とする時期のものと思われる。

建物2・5・7と重複する。柱穴の切り合い関係がないため、先後関係は不明である。

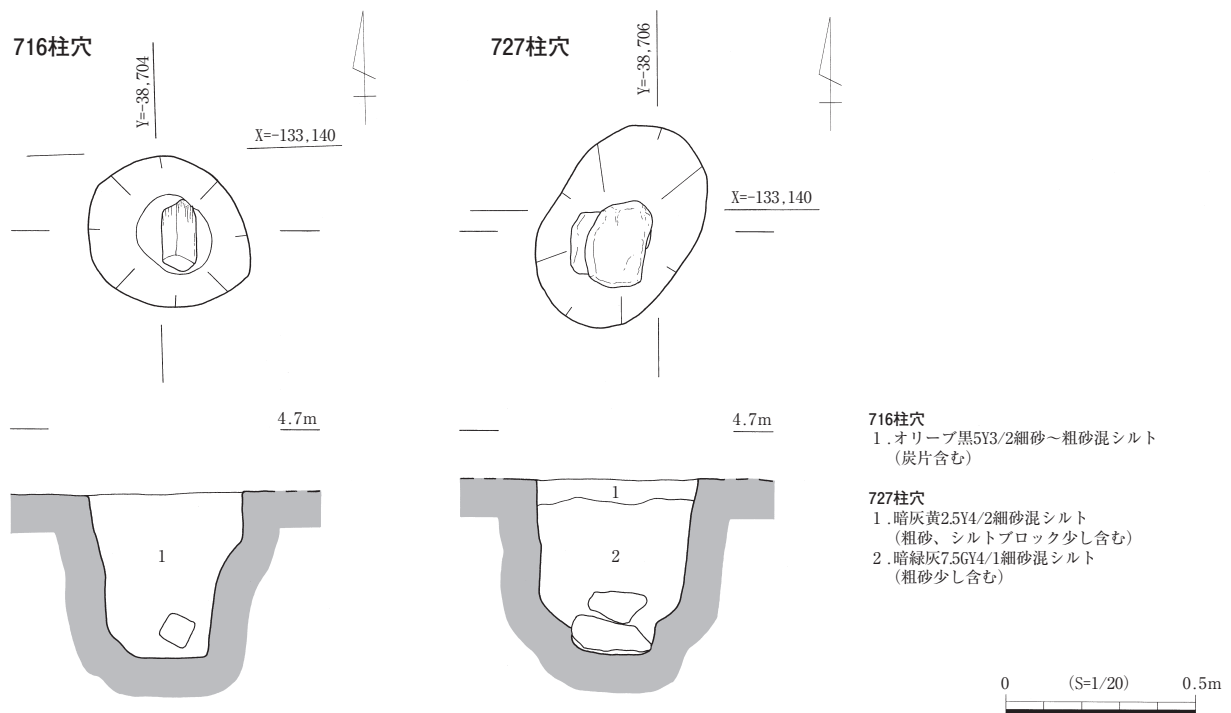


図100 建物3柱穴 平面・断面図

建物7 [626・634・648・673柱穴] (図101・102・106 図版17・68)

調査区東半東部に位置する。東西3間、約6.8mの柱列であるが、南側の調査区外または北側へ続くと想定し、建物とした。方位はN-1°-Wで、柱間は2.1~2.5mである。柱根、柱痕を残すものが多く、634柱穴では、柱根に接して常滑焼三筋壺片(555)が出土した。破片の一部は柱根の下の位置にあり、根石がわりに用いられたと考えられる。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、626柱穴から土師器皿、634柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器碗、常滑焼三筋壺(555)、648柱穴から土師器皿、黒色土器、673柱穴から土師器皿、瓦器碗が出土している。常滑焼三筋壺は、口頸部内面に回転ナデ、肩部内面に指オサエ、ナデ、胴部内面に指オサエ後ナデを施す。肩部外面にヘラケ

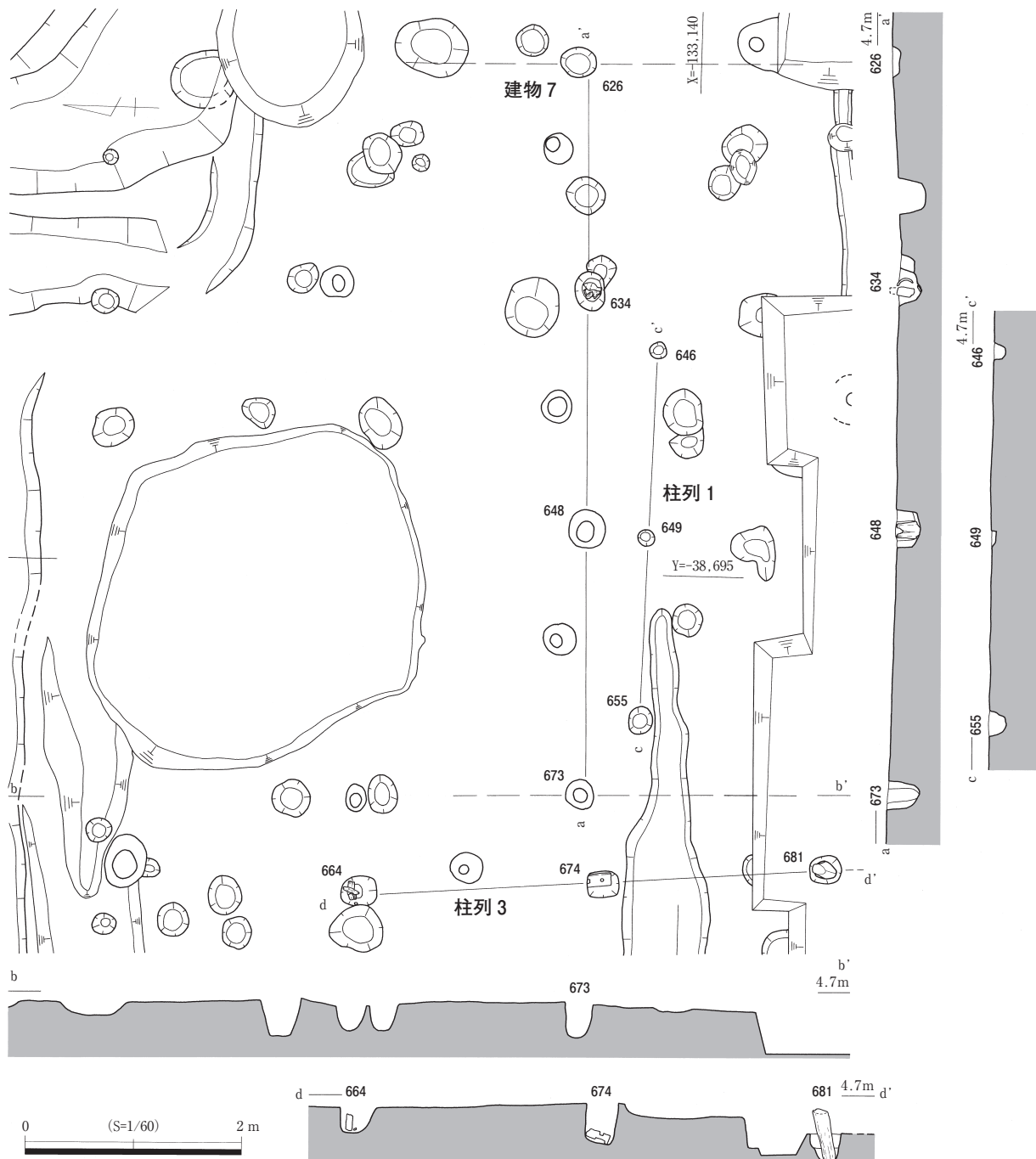


図101 建物7、柱列1・3 平面・断面図

第4節 第7面（第7～9層）

ズリ後回転ナデ、胴部外面に回転ナデ、下胴部には縦方向のナデ後回転ナデを施す。三筋紋は3本線櫛描で、12世紀第3四半期のものである。常滑焼以外は小片である。626・634柱穴出土の土師器皿片は、口縁部を2段ナデし、上段をつまみ上げている。673柱穴出土の瓦器椀片は、高台の断面形状が低い台形である。詳細な時期は不明であるが、12世紀中～後葉を中心とする時期のものと思われる。

建物2・5・6と重複し、建物8・19、柱列1と重複する可能性がある。柱穴の切り合い関係がないため、先後関係は不明である。

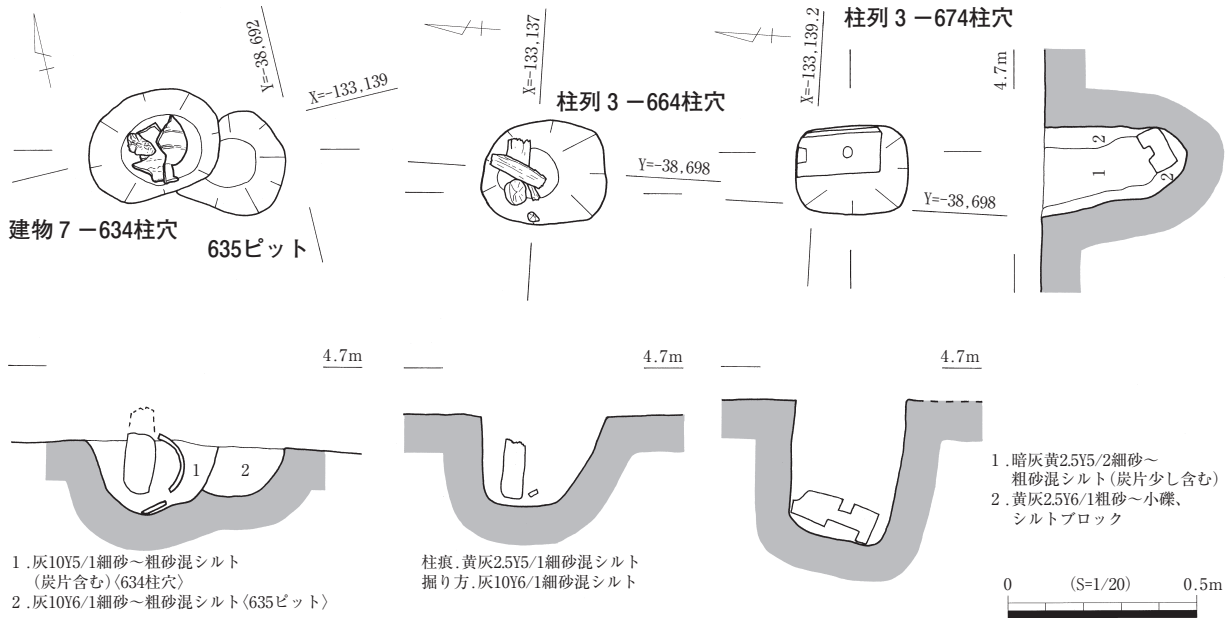


図102 建物7柱穴、柱列3柱穴、635ピット 平面・断面図

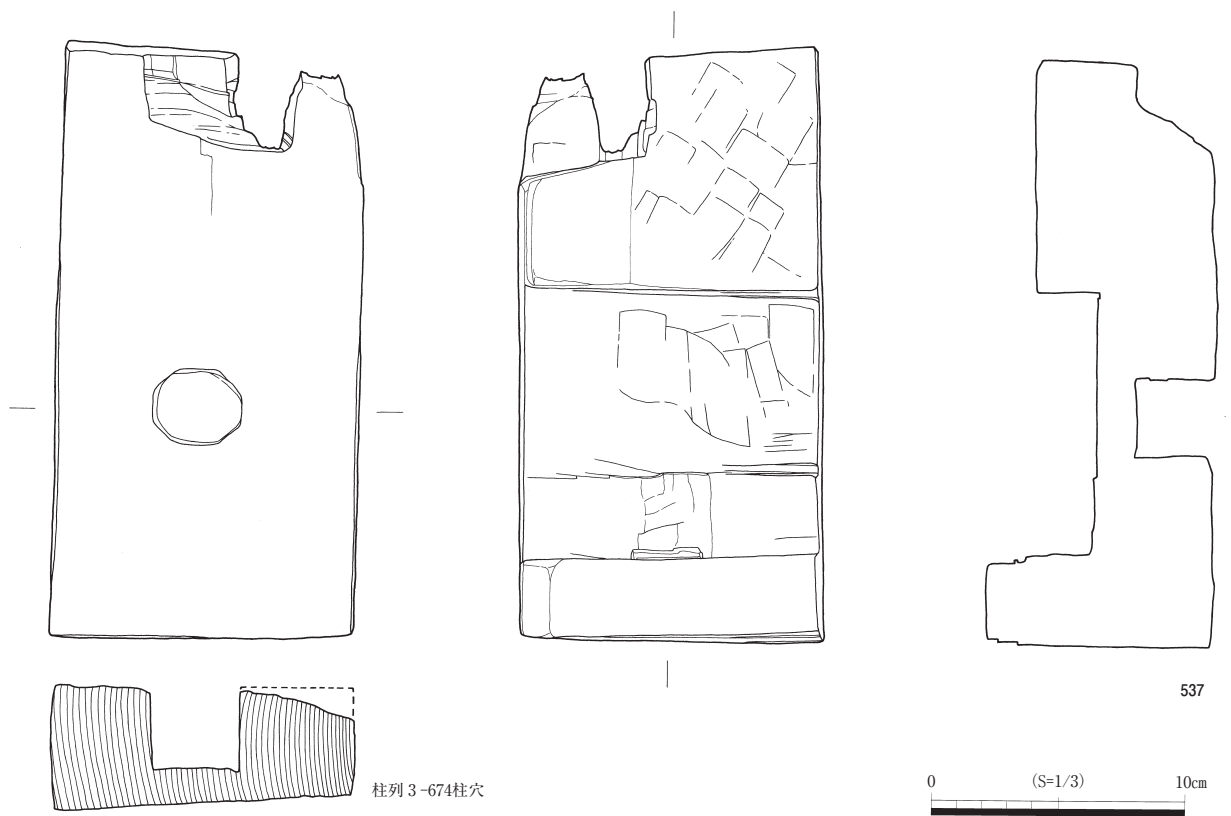


図103 柱列3 出土遺物

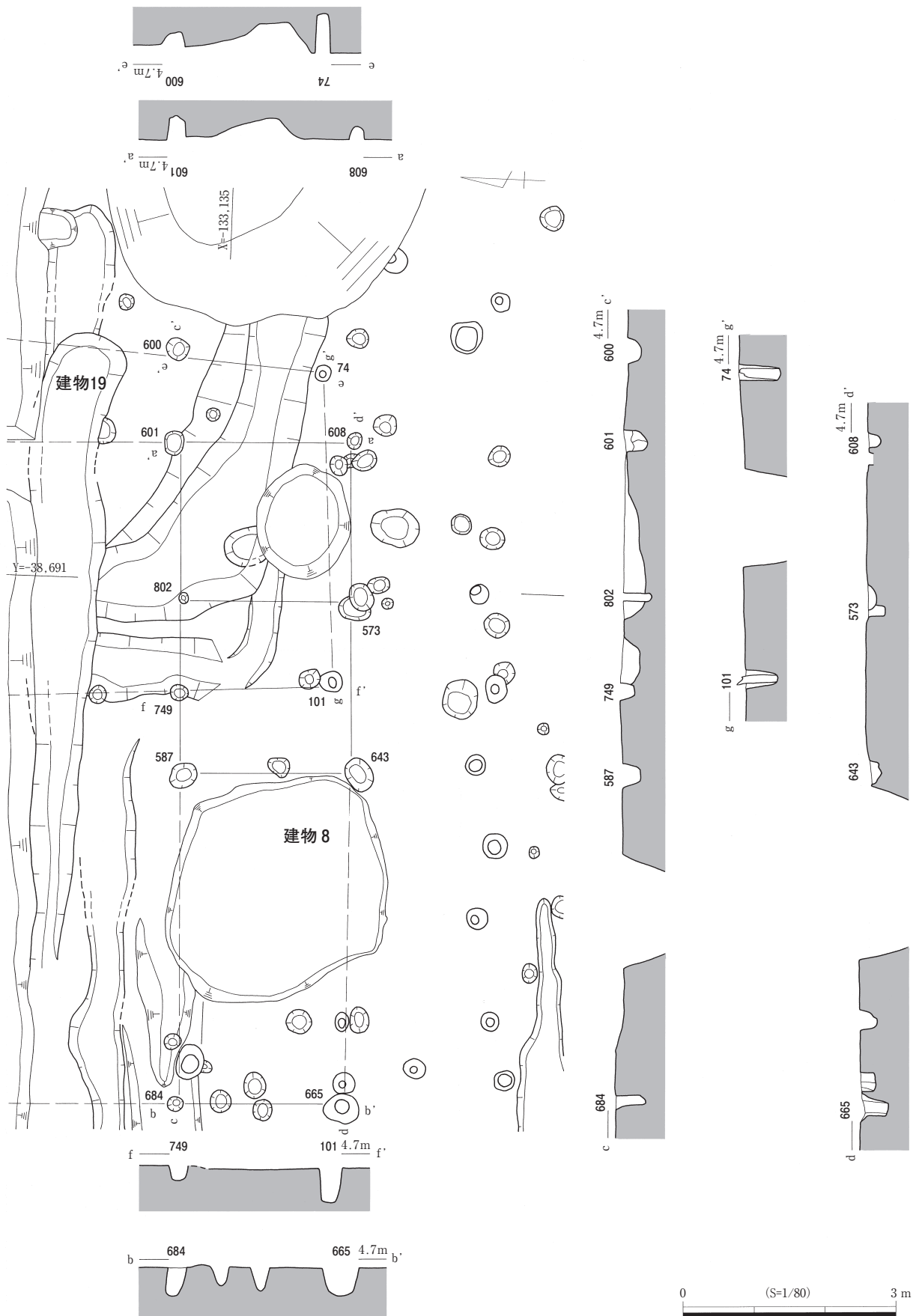


図104 建物8・19 平面・断面図

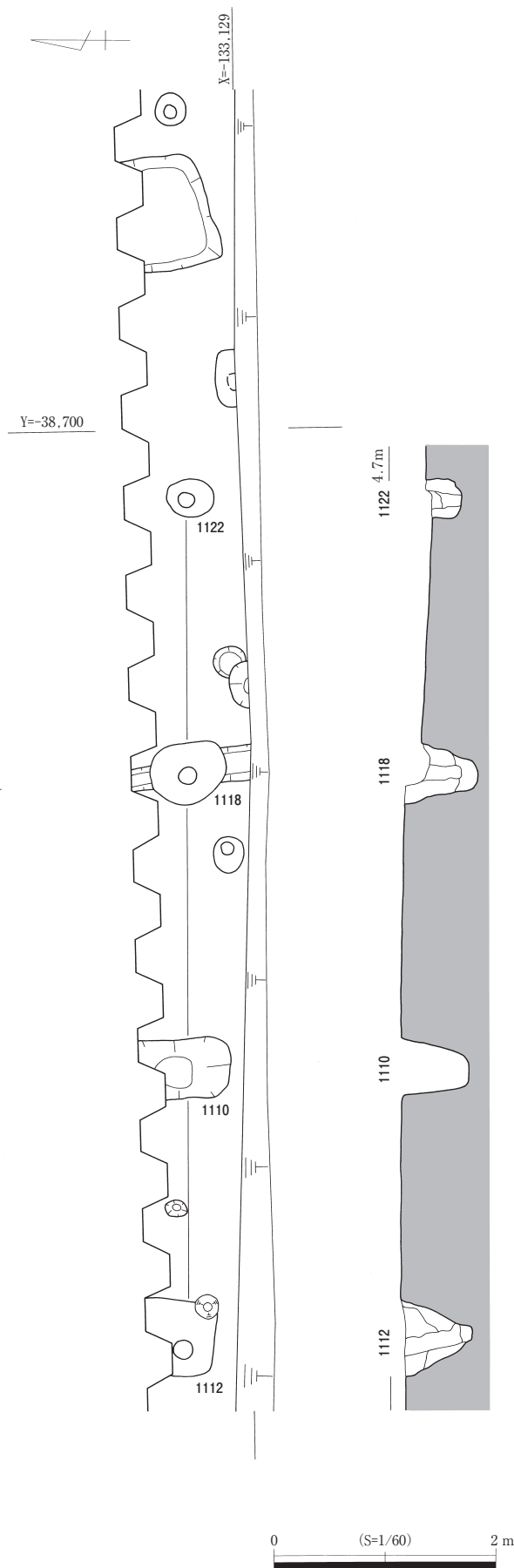


図105 建物20 平面・断面図

建物8〔573・587・601・608・643・665・684・802柱穴〕（図104・106 図版18）

調査区東半東部に位置する。東西4間×南北1間、約9.4m×約2.4m、面積約22.6㎡であるが、北側の攪乱部分に続く可能性がある。西から2列目の柱穴は攪乱で失われたと思われる。方位はN-2°-Wで、柱間は2.2～2.5mである。

遺物は、573・608・643柱穴から土師器皿、587柱穴から土師器皿、瓦器椀、665柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器椀、瓦質土器、802柱穴から土師器皿、須恵器椀（554）が出土している。すべて小片で詳細な時期は不明であるが、12世紀中葉～13世紀のものと思われる。

建物5・19、柱列3、602・750溝、630・631土器集積と重複する。573柱穴が建物5の572柱穴に切られており、建物5より古い。802柱穴が602溝を切っており、602溝より新しい。

建物19〔74・101・600・749柱穴〕（図104 図版18）

調査区東半北東部に位置する。北側の攪乱部分に続くと考えられ、東西2間×南北1間以上、約4.4m×2.1m以上、面積9.2㎡以上である。南辺中央の柱穴が攪乱により失われたと想定している。方位はN-4°-Wで、柱間は2.1～2.2mである。南辺の柱穴は柱根を残し、北側の柱穴に比べて深い。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、74・101・600柱穴から土師器皿、瓦器椀、749柱穴から土師器皿が出土している。すべて小片で詳細な時期は不明であるが、12世紀中～後葉を中心とする時期のものである。

建物8、602・750溝、630・631土器集積と重複し、603溝と重複する可能性がある。749柱穴が750溝を切っており、750溝より新しい。

建物20〔1110・1112・1118・1122柱穴〕（図105・106 図版18）

調査区東半北西部に位置する。東西3間、約7.7mで、北側の調査区外に続くと考えられる。方位はN-1°-Eで、柱間は2.5～2.7mである。1110柱穴以外、柱痕を残す。1110・1112柱穴では炭片、焼

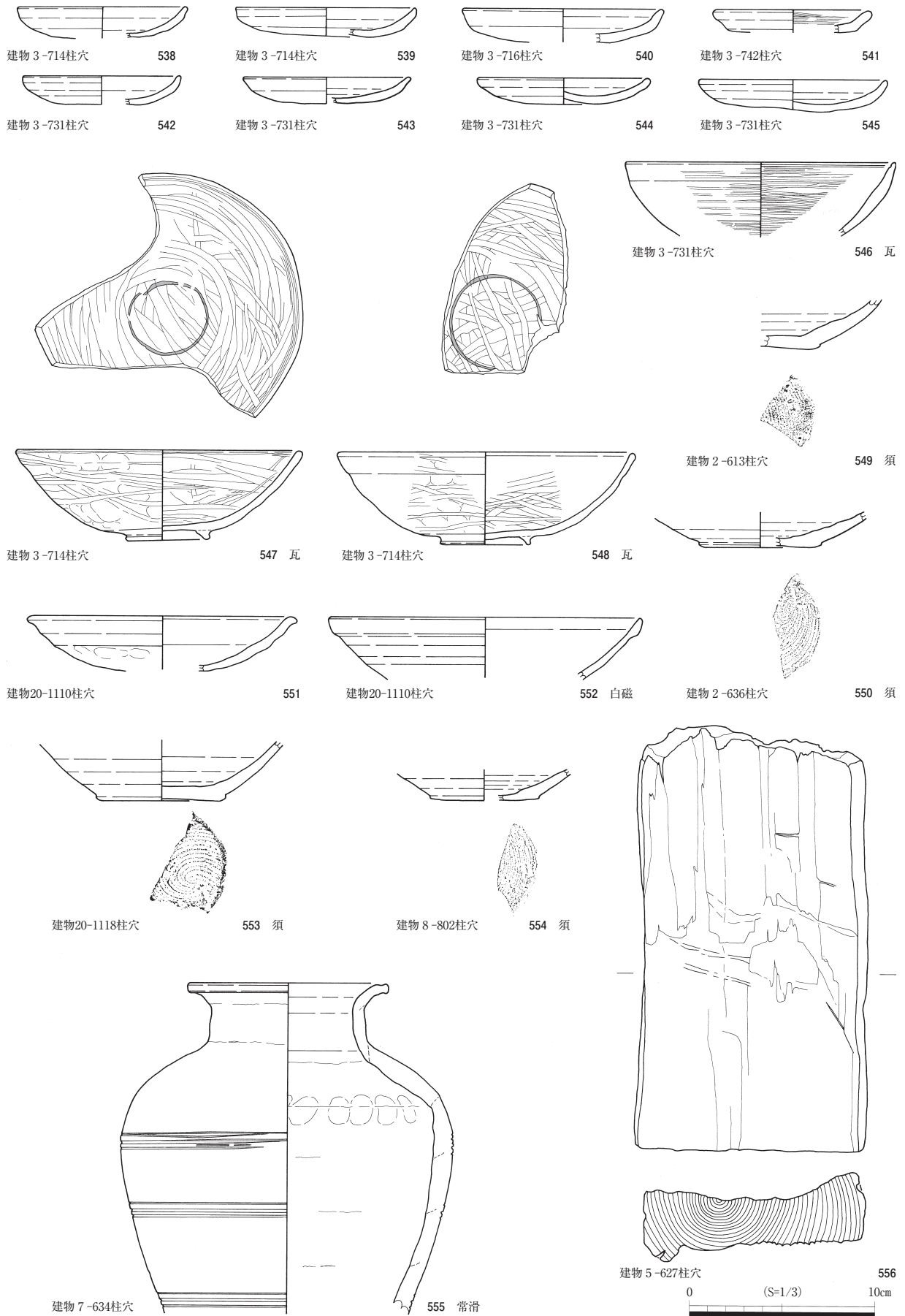


図106 建物2・3・5・7・8・20 出土遺物

土塊が少しみられた。

遺物は、1110柱穴から土師器皿（551）・鍋、瓦器椀、須恵器椀、白磁碗（552）、焼土塊、1112柱穴から焼土塊、1118柱穴から土師器皿、須恵器椀（553）、1122柱穴から瓦器椀が出土している。焼土塊は2cm大でスサを含む。土師器皿には、最終段階の「て」字状口縁のもの等があり、瓦器椀のミガキは細かい。11世紀後葉～12世紀前葉のものである。

柱列1〔646・649・655柱穴〕（図101 図版18）

調査区東半東部に位置する。東西2間、約3.5mである。柱間は約1.7mである。柱穴は径約0.2m、深さ0.2mまでと小規模で、柱痕はない。

遺物は、646柱穴から土師器皿、655柱穴から須恵器が出土している。小片で詳細な時期は不明である。

柱列2〔736・740・741柱穴〕（図99）

調査区東半西部に位置する。東西2間、約2.5mであるが、西側の攪乱部分に続く可能性がある。柱間は1.2～1.3mである。736柱穴は柱根を残す。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、740柱穴から土師器皿、741柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器椀が出土している。小片で詳細な時期は不明であるが、741柱穴出土の瓦器椀片は、高台の形状等から12世紀後葉～13世紀のものと思われる。

740柱穴が747落ち込みを、736柱穴が746溝を切っており、746溝、747落ち込みより新しい。

柱列3〔664・674・681柱穴〕（図101～103 図版19・68）

調査区東半東部に位置する。南北2間、約4.4mであるが、南側の調査区外に続く可能性がある。柱間は2.1～2.3mである。664柱穴は、柱根を残す。底面近くで検出した木片は、礎板の可能性はある。674柱穴は、柱痕を残す。礎板（537）は、第5面西半建物13の496柱穴の柱根（240）、第5面東半建物21の133柱穴出土の礎板（312）と同種の材と思われる。681柱穴は、柱根を残す。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、664柱穴から土師器皿、674柱穴から土師器皿、瓦器椀、須恵器が出土している。すべて小片で、詳細な時期は不明である。

建物8、693溝と重複する。切り合い関係がないため、先後関係は不明である。

617・644・653・662・672・675・680・682・683・711・721・760・821・826・827・833・1100・1108・1123・1126柱穴（図97・107～109 図版19・68）

建物に復元できなかったが、上記の柱穴は柱根、柱痕を残す。617・680・682・721・833柱穴は、柱根を残す。662柱穴では、底面で木片を検出した。柱根または礎板と思われる。675柱穴では、根石と礎板と思われる板材を検出した。680柱穴では、瓦器椀片（566）、瓦質土器羽釜片（脚含む）、青磁碗底部片（567）を敷き、その上に砂岩を、さらにその上に柱根を載せていた。砂岩は、割れ面と思われる平らな面を上にして置かれており、さらに3つに割れている。682柱穴では柱根に接して、長辺を東西方向に向けた角材を検出した。木材は、柱根の南側、底面から約0.4m上の位置にある。柱穴の東半分は側溝にかかっているが、側溝掘削の際に付近より同様な角材が出土している。柱根は南側に傾いている。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、644柱穴から土師器皿・煮炊具、瓦器椀、灰釉陶器、653柱穴から黒色土器A類、662柱穴から土師器皿（559）・鍋、瓦器椀が出土している。662柱穴出土の土師器皿片は12～13世紀のものである。672・711柱穴から土師器皿、瓦器椀が出土している。672柱穴出土の小片は11～12世紀、711柱穴出土の

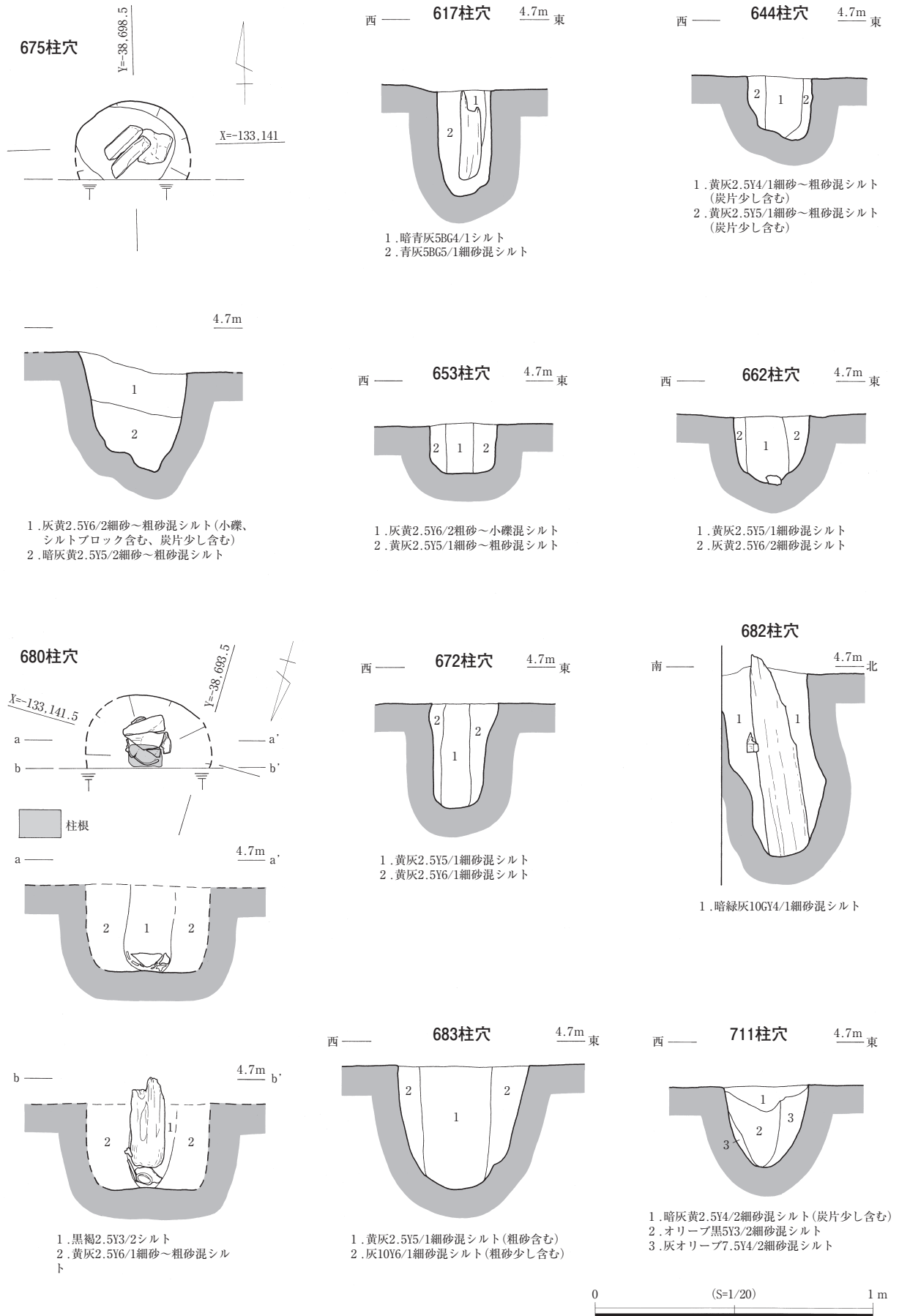


図107 第7面柱穴 平面・断面図 (1)

第4節 第7面（第7～9層）

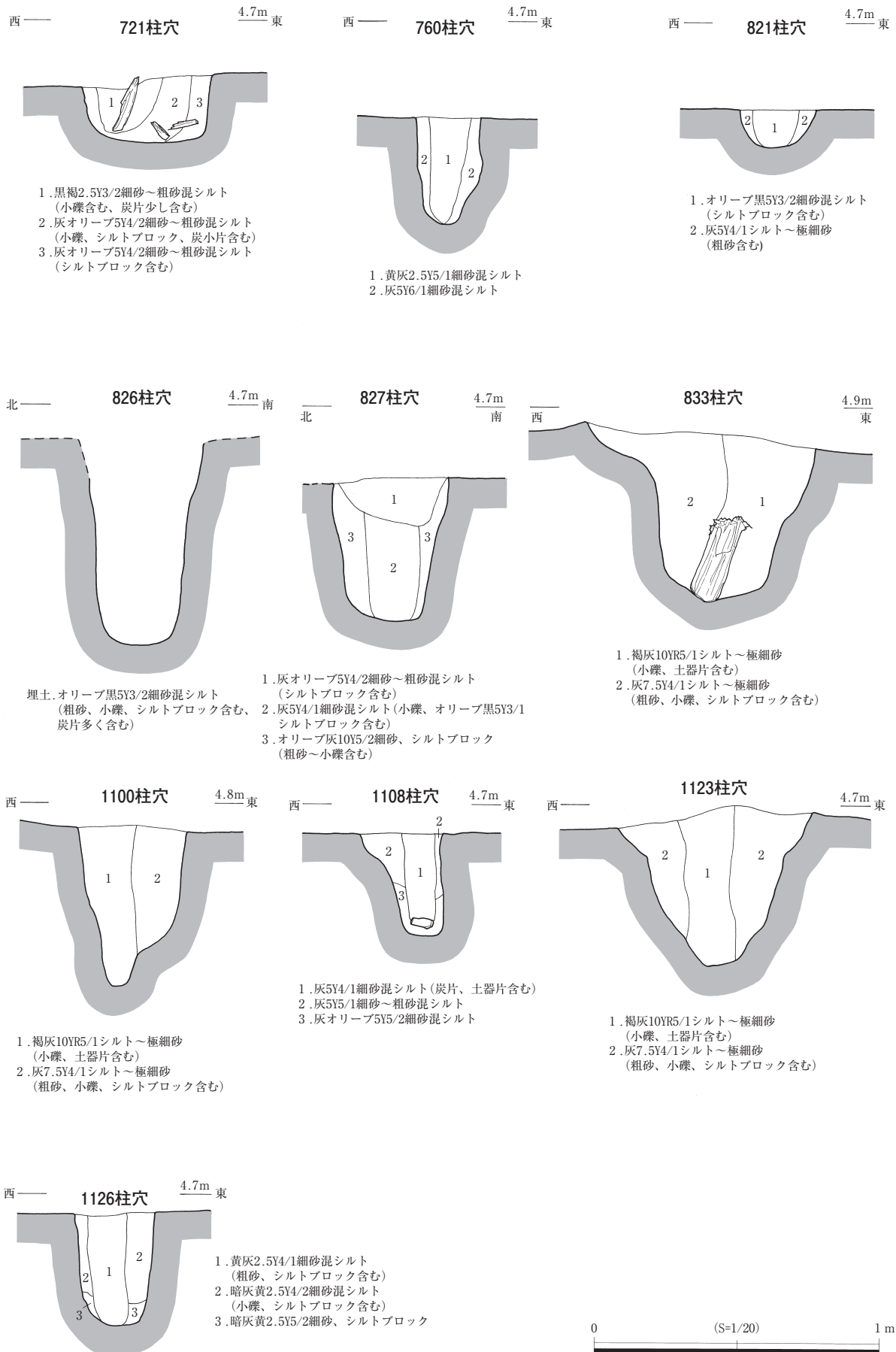


図108 第7面柱穴 断面図 (2)

小片は12世紀のものである。675柱穴から土師器皿（557）、瓦器椀が出土している。土師器皿片は11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。680柱穴から土師器皿、黒色土器椀、瓦器椀（566）、瓦質土器脚付羽釜、青磁碗（567）が出土している。瓦器椀片は13世紀のものと思われる。682柱穴から土師器皿、683柱穴から土師器皿、瓦器椀（565）が出土している。683柱穴出土の瓦器椀片は11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。721柱穴から土師器皿（563）、瓦器椀、木製品部材（564）が出土している。土師器皿片は11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。760柱穴から土師器皿、須恵器椀、821柱穴から土師器皿、826柱穴から「て」字状口縁土師器皿、瓦器椀、須恵器が出土している。826柱穴出土の土師器皿片、瓦器椀片は11世紀後葉のものと思われる。833柱穴から土師器皿（558）、瓦器椀が出土している。12世紀中葉を中心とする時期のものと思われる。1108柱穴から土師器皿（560～562）が出土している。12世紀前～中葉のものである。1126柱穴から土師器皿、瓦器椀、灰釉陶器椀が出土している。土師器皿片、瓦器椀片は12世紀のものと思われる。すべて小片である。

なお、680柱穴は、側溝掘削の際に検出したため、帰属面が不明である。調査区東半では、第5面で柱根を残す柱穴を検出していないことから、第7面の遺構として掲載した。ただし、出土遺物の時期からは、第5面の遺構である可能性も否定できない。

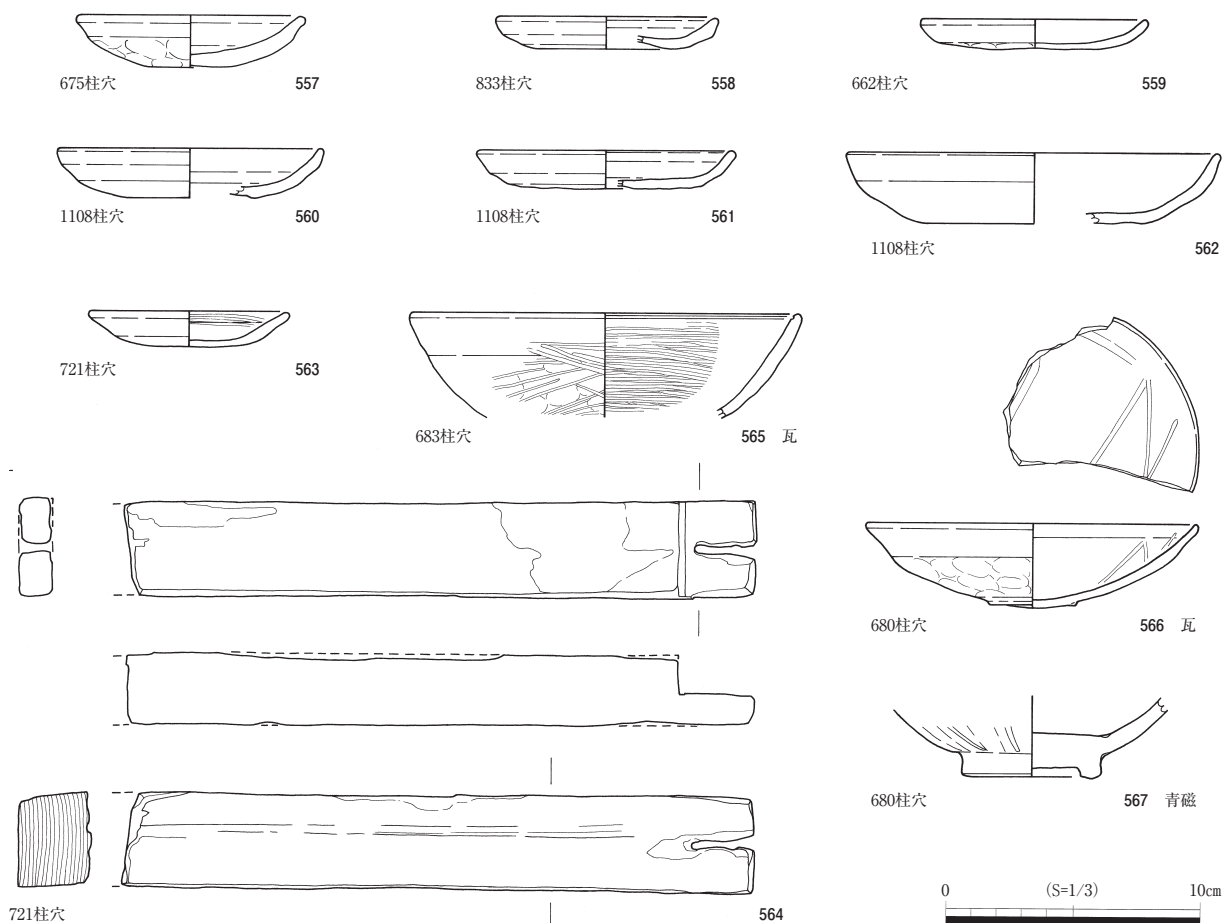


図109 662・675・680・683・721・833・1108柱穴 出土遺物

第4節 第7面 (第7～9層)

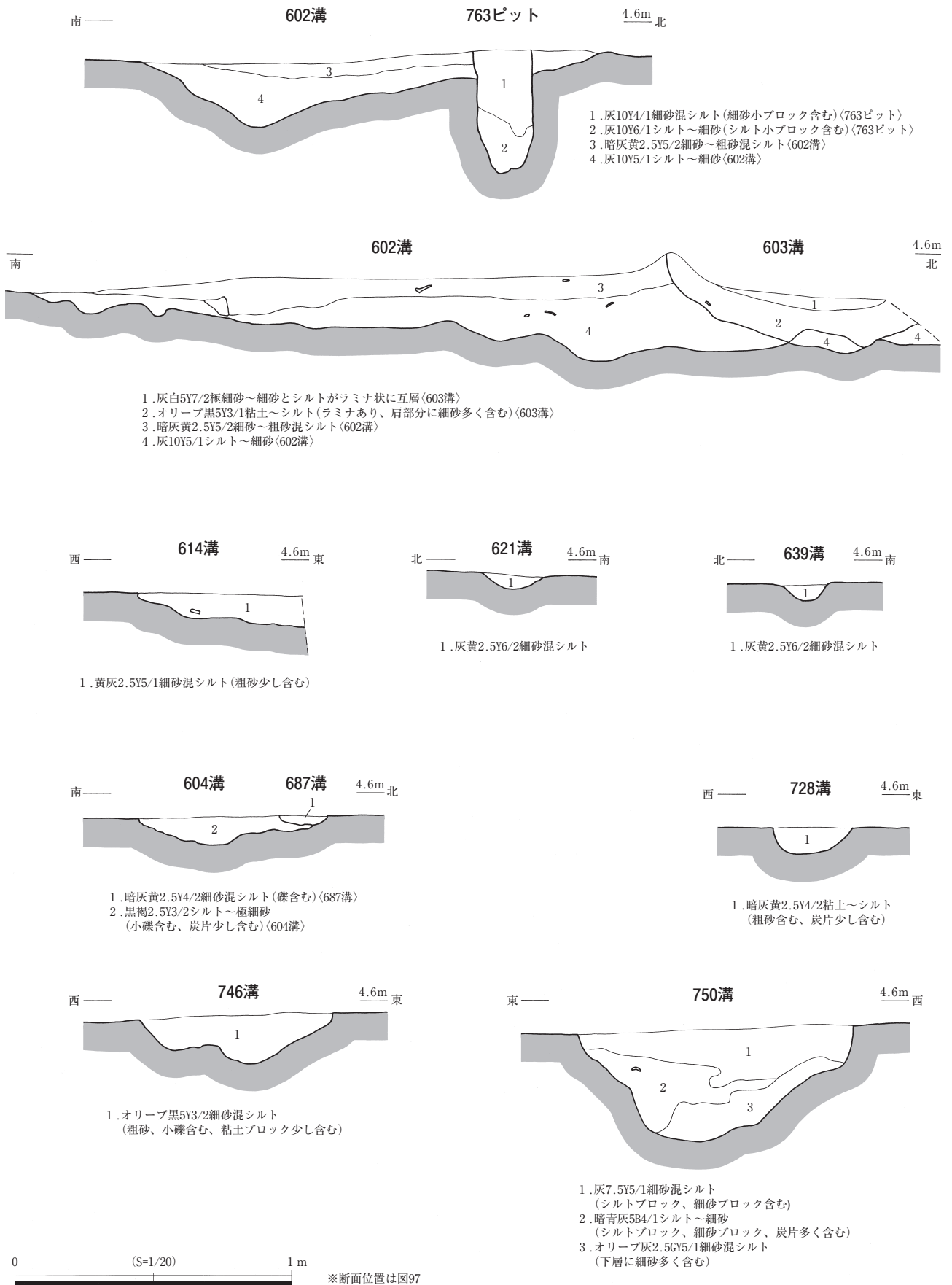


図110 602～604・614・621・639・687・728・746・750溝、763ピット 断面図

602溝 (図97・110・111 図版20・70)

調査区東半北東部に位置する。北西部分は南北方向、南東部分は北西-南東方向で、北側と東側に続くが、攪乱に切られている。幅1.0~1.6m、深さ約0.3mで、検出長は約5.0mである。検出長が短く、底面の傾斜は不明である。

遺物は、土師器皿 (568~572)・鍋、回転台土師器皿 (573)、瓦器椀 (574~577)、須恵器椀 (578~582)、轆羽口 (583) が出土している。土師器皿には大皿と小皿があり、小皿には口縁部が「て」字状のもの (568・569)、外反するもの (570) がみられる。回転台土師器皿 (573) は、底部外面糸切り離

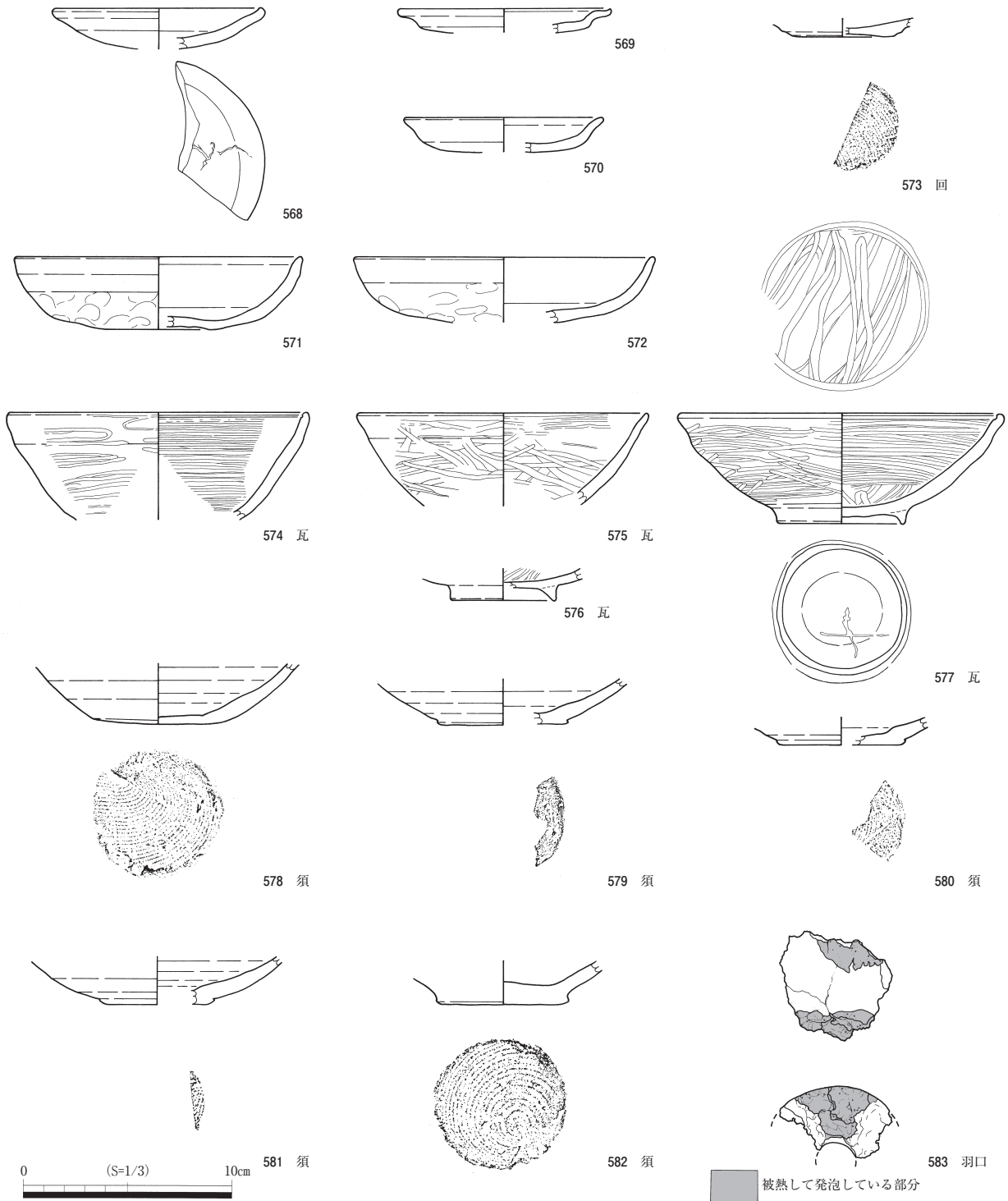


図111 602溝 出土遺物

第4節 第7面（第7～9層）

しの小片が1点出土している。瓦器椀には、楠葉型（574・577）と和泉型（575）があり、見込みの暗紋にジグザグ状、斜格子状がみられる。鞆羽口（583）は、比較的小さいことから、鍛冶用と思われる。先端部は割れているが、熱を受けて発泡しており、本来の先端をカットして再利用したと考えられる。11世紀末～12世紀前葉のものである。

建物8の802柱穴、603溝、763ピットに切られている。建物19と重複する。

603溝（図97・110 図版20）

調査区東半東部に位置する。東西方向で、西側の攪乱部分に続く可能性がある。幅約1.0m、深さ約0.3mで、検出長は約12.6mである。埋土にラミナがみられる。

遺物は、土師器皿、瓦器の小片が少量出土している。土師器皿は口縁部2段ナデ、上段をつまみ上げており、12世紀以降のものである。

602・750・755溝を切っている。

604溝（図97・110・112 図版20・22）

調査区東半東部に位置する。東西方向で、西部分が北西方向に屈曲し、北側の攪乱部分に続く。幅0.4～0.7m、深さ約0.1mで、検出長は約11.0mである。方位は、N-3°-W（90°振っている）である。

遺物は、土師器皿（587）、瓦器椀（588）、須恵器椀が出土している。すべて小片で詳細な時期は不明であるが、12世紀のものである。

687溝に切られている。

614溝（図97・110・112 図版21）

調査区東半南東部に位置する。北部は南北方向、南部は東西方向で、屈曲している。北側は攪乱部分、西側は側溝部分に続く。幅0.7m以上、深さ約0.1mで、検出長は約3.2mである。

遺物は、土師器皿（586）、瓦器椀が出土している。少量の小片で詳細な時期は不明であるが、12世紀中葉を中心とする時期のものと思われる。

621溝（図97・110）

調査区東半南東部に位置する。東西方向で、幅約0.2m、深さ約0.1m、検出長約1.9mである。遺物は、出土していない。

建物2・5・6と重複する。

639溝（図97・110）

調査区東半南東部に位置する。東西方向で、幅約0.2m、深さ約0.1m、検出長約1.9mである。西側と東側の側溝部分に続く。遺物は出土していない。

建物2・5・6と重複する。

687溝（図97・110）

調査区東半西部に位置する。東西方向で、幅約0.2m、深さ0.1m未満、長さ約2.5mである。

遺物は、土師器皿の小片が出土している。12世紀のものである。

604溝を切っている。

692溝（図97・113・114 図版22・23・71）

調査区東半西部に位置する。東部分は南北方向、北部分は東西方向で、西側の攪乱部分、南側の調査区外に続く。幅0.6～0.8m、深さ0.1～0.2mで、検出長は南北方向部分約6.9m、東西方向部分約9.3m

である。方位は、南北方向部分でN - 6° - W、東西方向部分でN - 5° - E (90° 振っている) である。

東西方向部分で、土師器皿 (603~617) がまとめて出土した。胎土に2種あり、(603~613) は浅黄橙色系、(614~617) は灰白色で、浅黄橙色系のは褐色粒を比較的多く含む。外面に粘土接合痕を残すものが多い。11世紀後葉~12世紀前葉のものである。

遺物は、上記の土師器皿のほか、土師器皿・煮炊具、瓦器碗、須恵器碗の小片が少量出土している。

南北方向部分が693溝南北方向部分と重なっており、これを切っている。南北方向部分の西肩を中心に、701等多くのピットと重複しているが、すべてのピットに切られている。東西方向部分は、728溝に切られている。

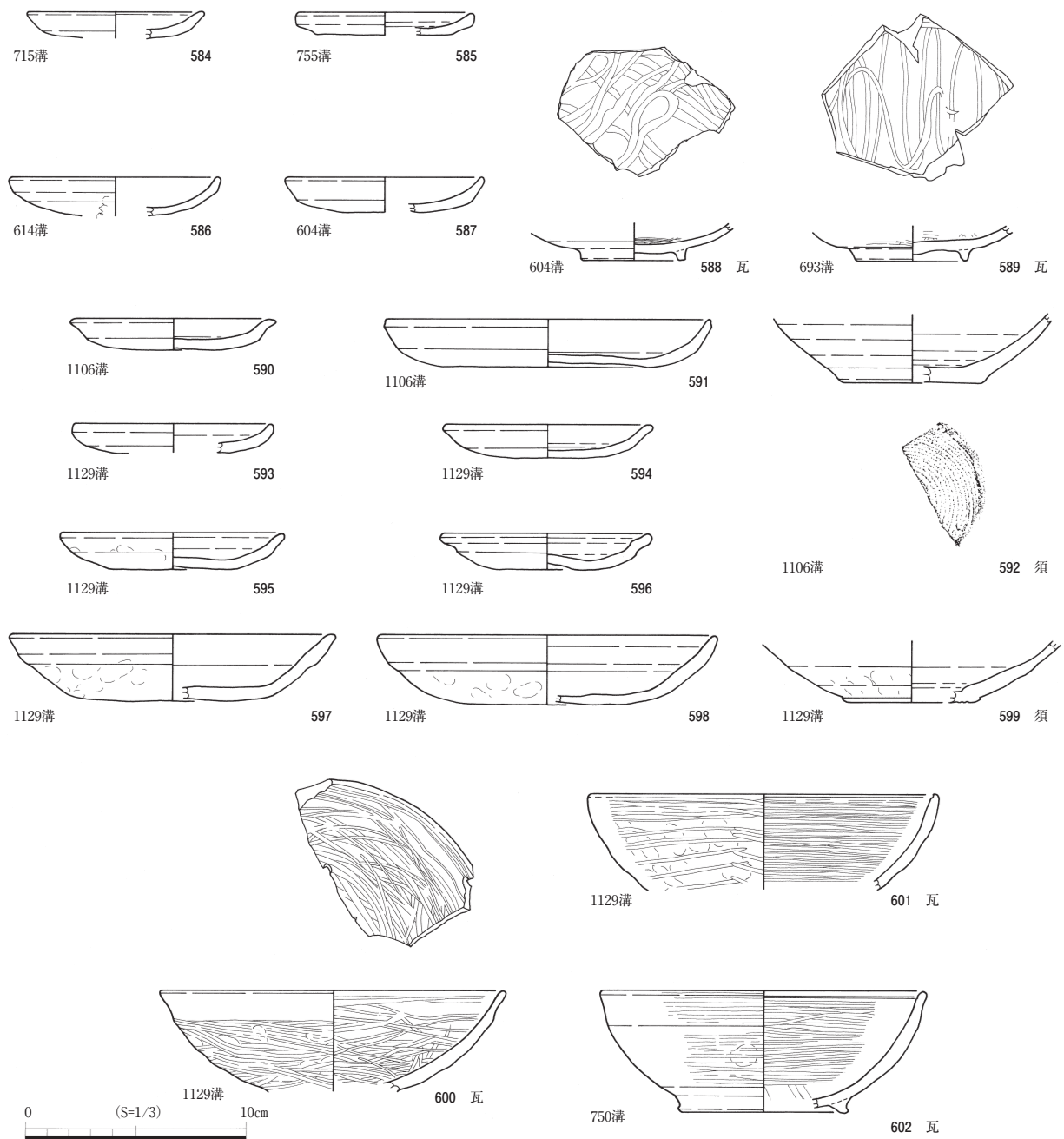


図112 604・614・693・715・750・1129・その他の溝 出土遺物

693溝（図97・112・113 図版21・22）

調査区東半西部から東部に位置する。西部分は南北方向、東部分は東西方向で、南側の調査区外に続く。幅は南北方向部分1.4～1.5m、東西方向部分0.2～1.4m、深さ約0.1mで、検出長は南北方向部分約6.7m、東西方向部分約7.3mである。方位は、南北方向でN-3°-Wである。

遺物は、土師器皿、瓦器椀（589）、須恵器が出土している。すべて小片で少量であるため、詳細な時期は不明であるが、11世紀後葉～12世紀前葉を中心とする時期のものである。

南北方向部分が692溝南北方向部分、715溝と重なっており、これらに切られている。建物3の714・716・731柱穴のほか、複数のピット、土坑と重複しているが、すべてに溝が切られている。東西方向部分は柱列3と重複しているが、切り合い関係がないため先後関係は不明である。

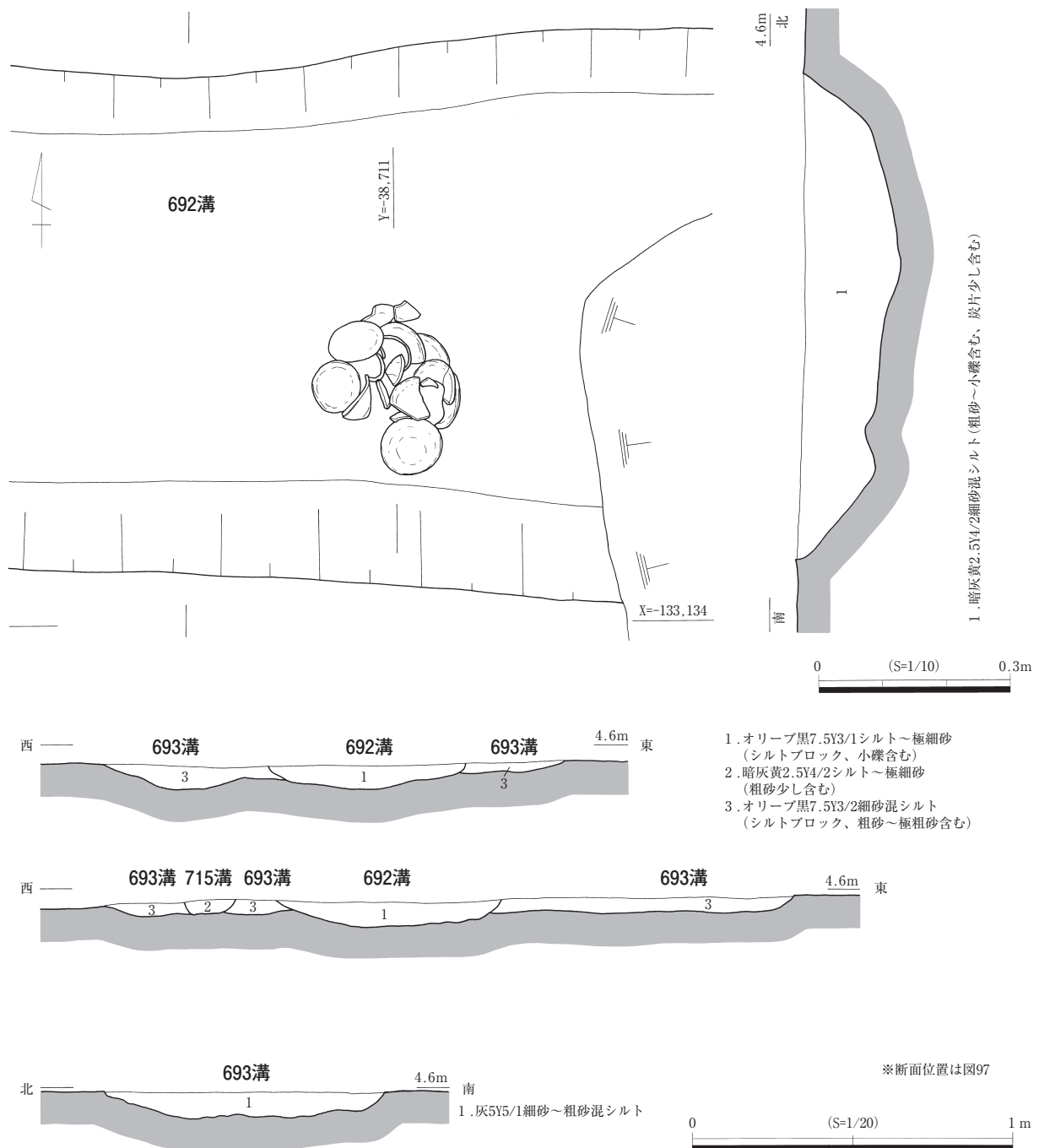


図113 692・693・715溝 平面・断面図

715溝 (図97・112・113 図版22)

調査区東半西部に位置する。南北方向で、南側の調査区外に続く。幅0.2~0.3m、深さ約0.1mで、検出長は約2.0mである。

遺物は、土師器皿 (584) の小片が出土している。12世紀のものと思われる。

693溝と重複しており、これを切っている。

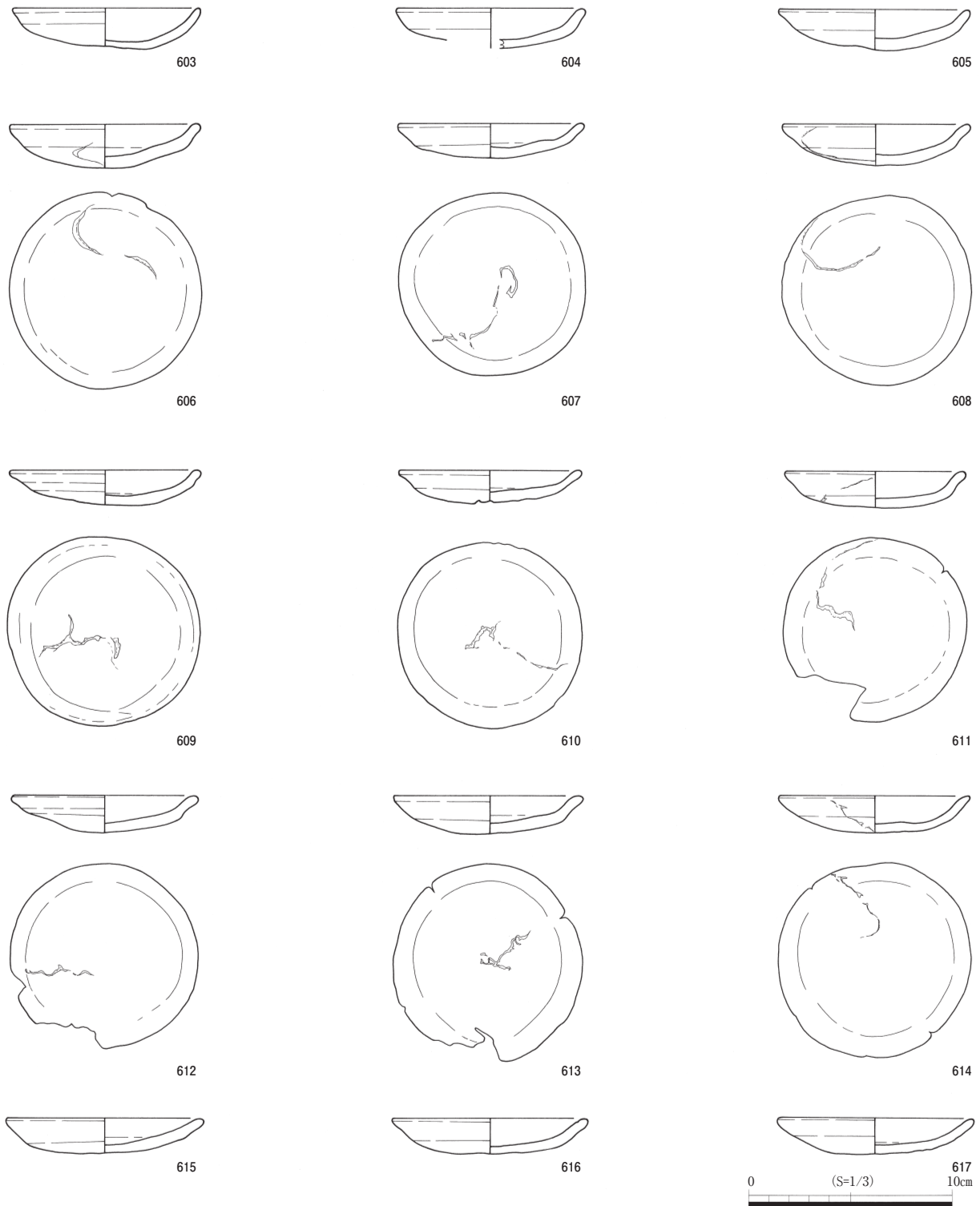


図114 692溝 出土遺物

728溝（図97・110 図版22）

調査区東半西部に位置する。南北方向で、北側の攪乱部分、南側の調査区外に続く。幅約0.3m、深さ約0.1mで、検出長は約7.8mである。方位は、N - 1° - Eである。遺物は、出土していない。

建物3・4と重複する。692溝を切っている。

746溝（図97・110 図版21）

調査区東半西部に位置する。南北方向で、北側の攪乱部分、南側の調査区外に続く。幅0.6～0.8m、深さ約0.2mで、検出長は約4.1mである。

遺物は、土師器皿・竈、瓦器椀、須恵器、鞆羽口が出土している。鞆羽口は、小片のため図化できなかったが、炉壁の中におさまっていたと考えられる還元状態の部分があり、鍛冶用のものと思われる。すべて小片で少量であるため、詳細な時期は不明であるが、12世紀のものと思われる。

建物3・4、柱列2、747落ち込みと重複する。柱列2の736柱穴に切られ、747落ち込みを切っている。

750溝（図97・110・112 図版20）

調査区東半北東部に位置する。南北方向で、北側を603溝に切られている。幅0.8～1.0m、深さ約0.4mで、検出長は約1.8mである。

遺物は、土師器皿・煮炊具、瓦器椀（602）の小片が少量出土している。12世紀前葉を中心とする時期のものである。建物19の749柱穴、603溝に切られている。

1129溝（図6・97・112 図版70）

調査区東半北東部に位置する。北側の調査区外、南側の攪乱部分に続いており、土坑の可能性もある。東西約2.0m、南北1.8m以上、深さ約0.4mである。埋土は、黒（5Y2/1）色シルト～細砂で、炭片を含む。

遺物は、土師器皿（593～598）、瓦器椀（600・601）、須恵器椀（599）、鍛冶用鞆羽口が出土している。12世紀前葉を中心とする時期のものである。

701ピット（図115・116 図版23・69）

調査区東半西部に位置する。径約0.2m、深さ約0.1mである。埋土に炭の小片を含む。

土師器皿（619・620・622・623）が重なった状態で出土した。上から（622）、（619）、（620）、（623）で、（623）以外は伏せた状態である。ほかに、土師器皿（618・621）、瓦器椀（624）、須恵器鉢の小片が出土している。土師器皿片（618）は北部で（622）の上位から、瓦器椀片（624）は南東部分で（619）と（620）の間に一部が挟まった状態で、須恵器鉢片は（620）と（623）の間から出土した。

土師器皿は、すべて灰白（2.5Y8/2）色で、器壁が比較的薄い。13世紀前葉のものである。

692・693溝を切っている。

831ピット（図119・120 図版23・69）

調査区東半東部に位置する。径約0.5m、深さ約0.3mである。瓦質土器盤（641）のほか、底面から木製品（642）が出土した。木製品の用途は不明といわざるを得ないが、第11層からも同種のもの（738）が出土している。

691土坑（図97・115）

調査区東半西部に位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.3mの楕円形で、深さ約0.5mである。

遺物は、土師器皿、瓦器椀が出土している。小片で少量であるため、詳細な時期は不明である。

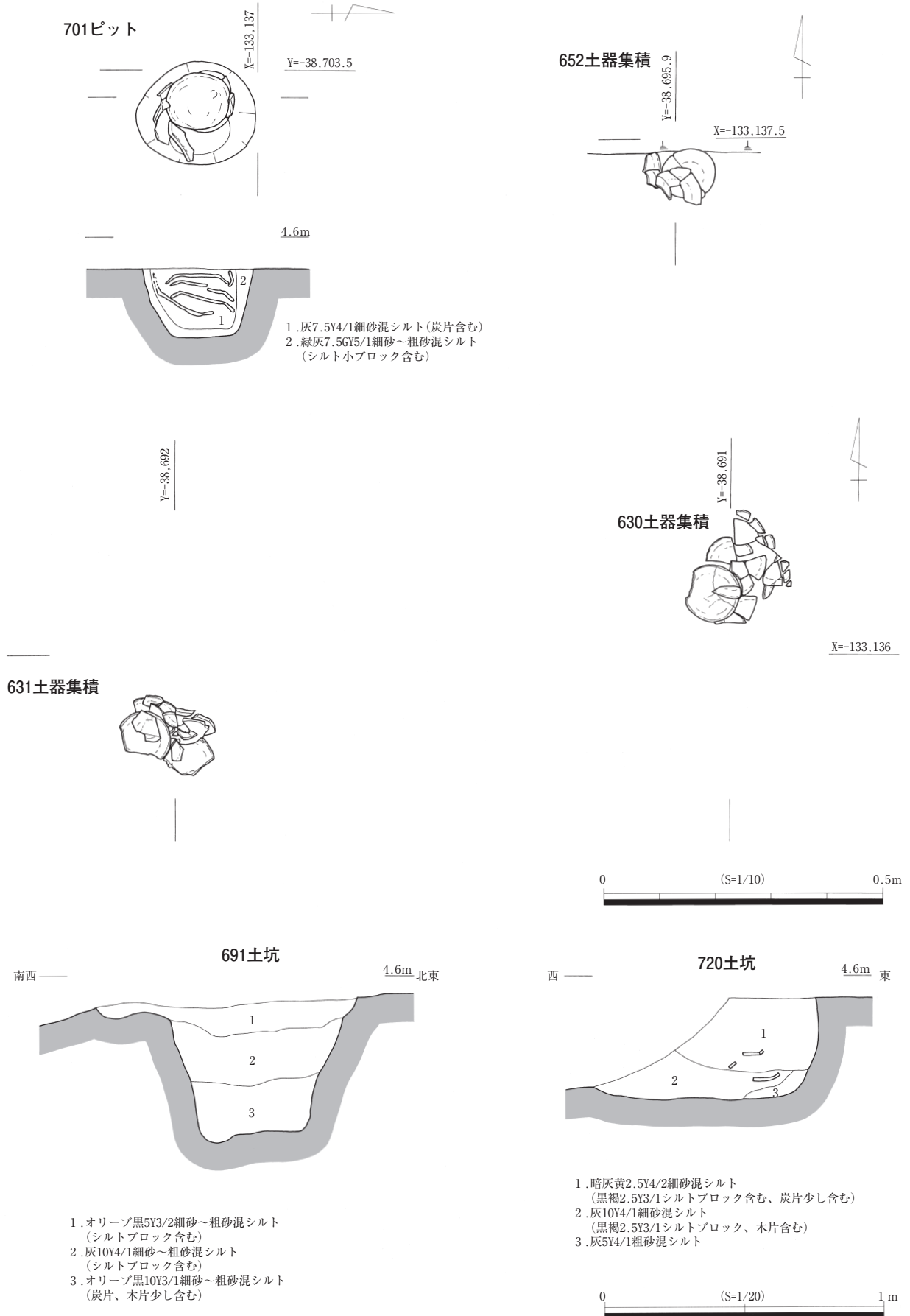


図115 701ピット、691・720土坑、630・631・652土器集積 平面・断面図

720土坑（図97・115・117 図版72）

調査区東半西部に位置する。北西部分が攪乱により失われており、東西、南北とも0.8m以上、深さ約0.4mである。

遺物は、土師器皿（625～628）、瓦器椀、瓦質土器脚付羽釜（629）が出土している。12世紀後葉のものである。

630土器集積（図115・118 図版23・72）

調査区東半東部に位置する。土師器皿（630～636）がまとめて出土した。第7層掘削中に検出し、その際に取り上げたものがあるため、図化できた以上の枚数が存在していたと思われる。正置のもの、伏せたものがランダムに重なっている状態である。12世紀後葉のものである。

631土器集積（図115・118）

調査区東半東部に位置する。土師器皿（637・638）がまとめて出土した。第7層掘削中に検出し、

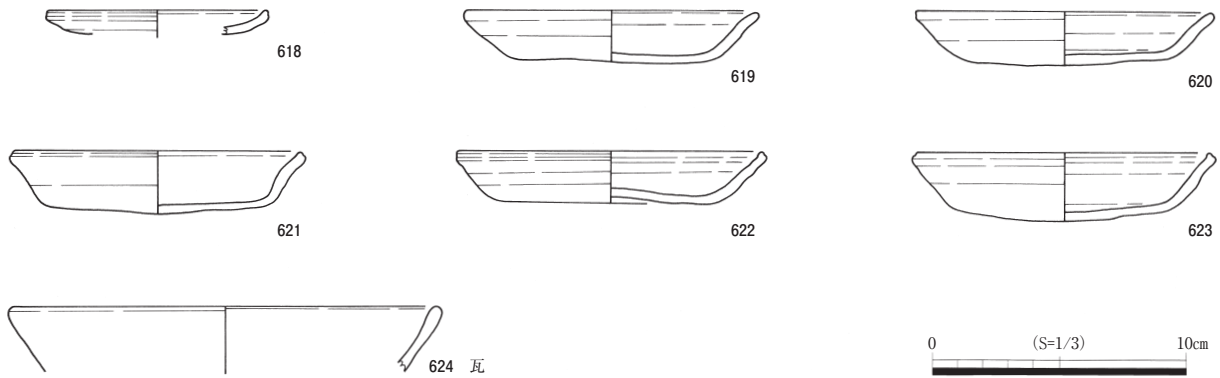


図116 701ピット 出土遺物

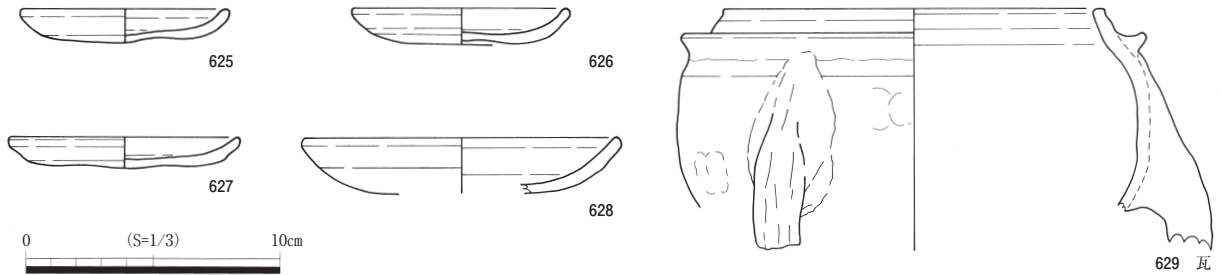


図117 720土坑 出土遺物

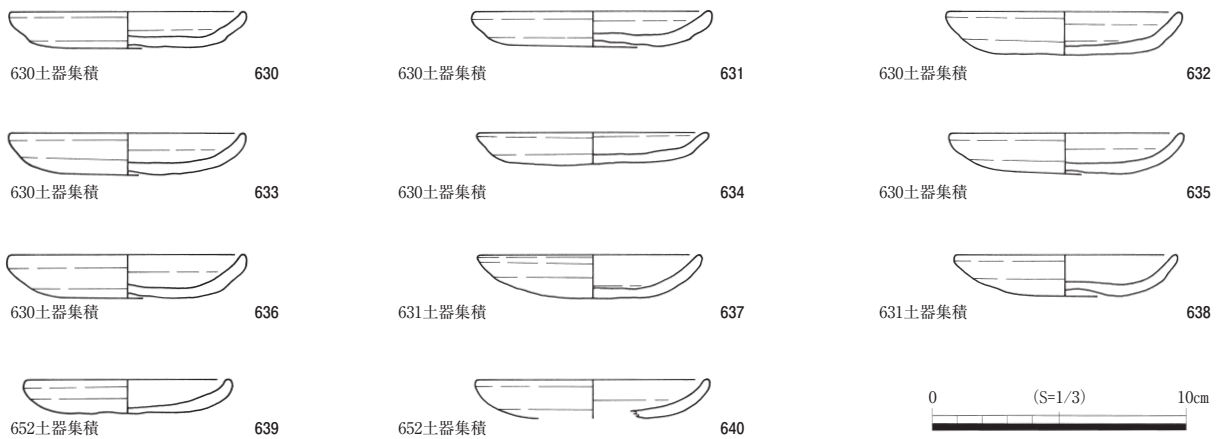


図118 630・631・652土器集積 出土遺物

その際に取り上げたものがあるため、図化できた以上の枚数が存在していたと思われる。12世紀後葉のものである。

652土器集積 (図115・118)

調査区東半東部に位置する。土師器皿(639・640)がまとめて出土した。北側が攪乱により失われている。また、第7層掘削中に検出したが、その際に取り上げたものもあり、図化できたもの以外にもさらに数枚が存在していたと思われる。12世紀後葉のものである。

747落ち込み (図97・121 図版72)

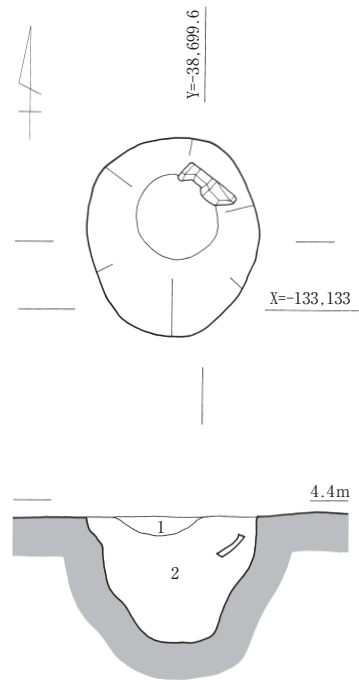
調査区東半西部に位置する。不定形で、南北5.9m以上、東西2.6m以上、深さ0.1m未満～0.2mである。土器片、炭片を多く含む部分として検出したが、輪郭がはっきりせず、整地土の可能性はある。

遺物は、土師器皿(643～646)・煮炊具、瓦器椀(648・649)、須恵器椀、山茶椀(647)、白磁碗が出土している。12世紀中～後葉のものである。

第7層出土遺物 (図124・125)

調査区東半北西部でまとめて出土した。C地点として報告する。土師器皿(679～691・693)・鍋、回転台土師器皿(692)、瓦器椀(696・697)・皿(694・695)、須恵器、白磁碗(698)が出土している。12世紀前～中葉のものである。

第7層からはほかに、土師器皿(699～709)・竈(716)、瓦器椀(711)・皿(710)、瓦質土器羽釜(714)、須恵器鉢(715)、白磁碗(712・713)、石鍋転用加工品(717)が出土している。11世



- 1. 黄褐2.5Y5/3細砂混シルト
- 2. オリーブ灰10Y5/2細砂混シルト
(オリーブ黒5Y3/1シルトブロック含む、炭片少し含む)

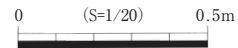


図119 831ピット 平面・断面図

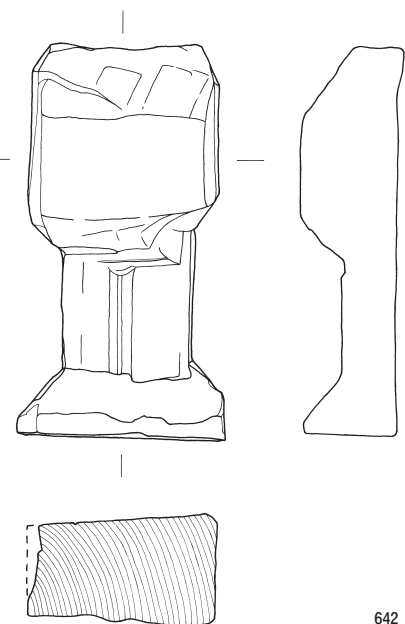
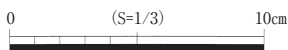
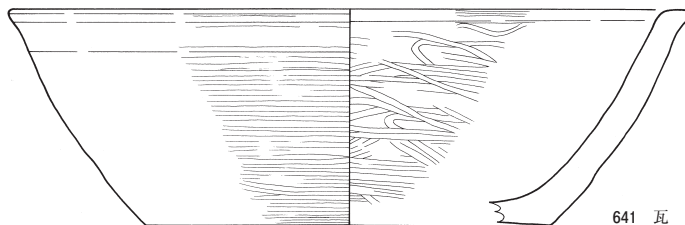


図120 831ピット 出土遺物

第4節 第7面（第7～9層）

紀後葉～13世紀前葉のものがみられる。

第8層出土遺物（図126）

土師器皿（718）・鍋・羽釜、黒色土器A類椀、瓦器椀、瓦質土器、須恵器鉢・椀、砥石（719）が少量出土している。

第9層出土遺物

摩滅した小片がごく少量出土している。土師器片、黒色土器A類片である。

攪乱出土遺物（図123）

軒丸瓦（678）が攪乱から出土している。平安時代のものであると思われるため、ここに掲載した。ただし、第7面の時期より古いものである可能性もある。

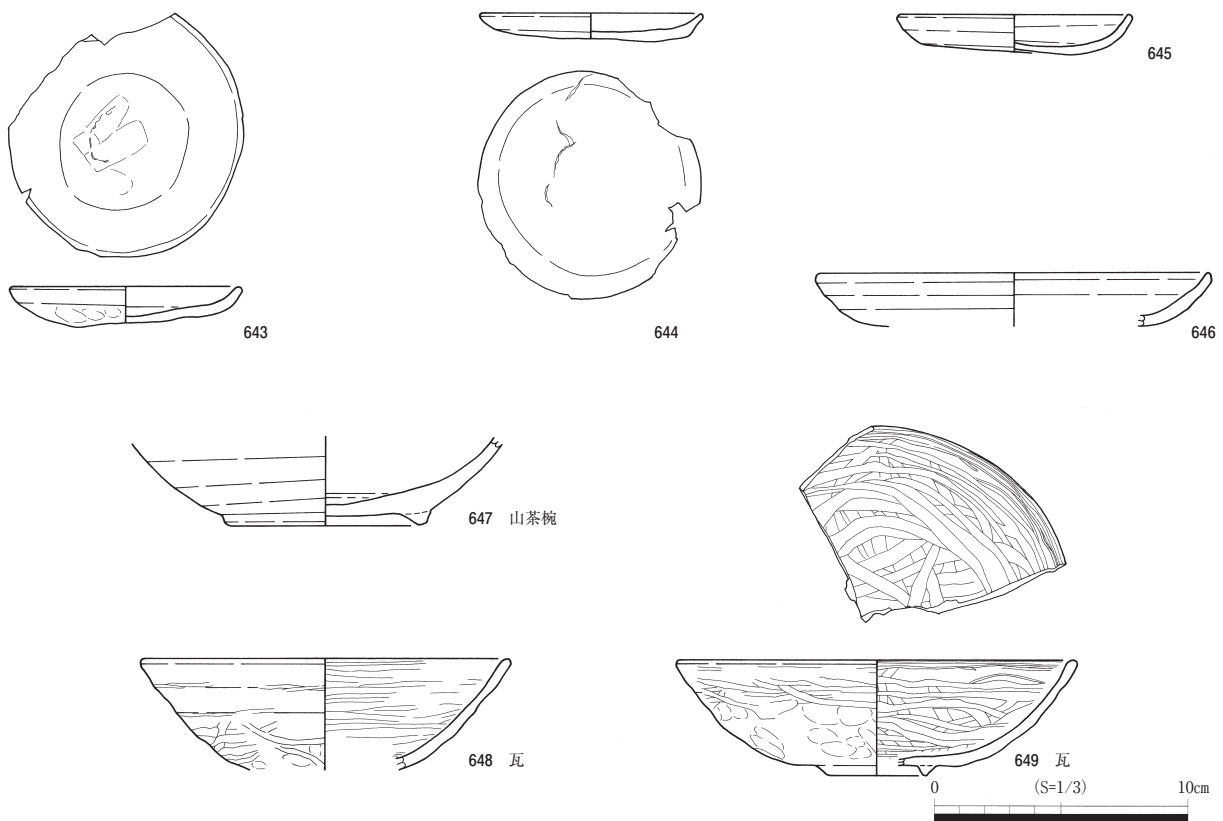


図121 747落ち込み 出土遺物

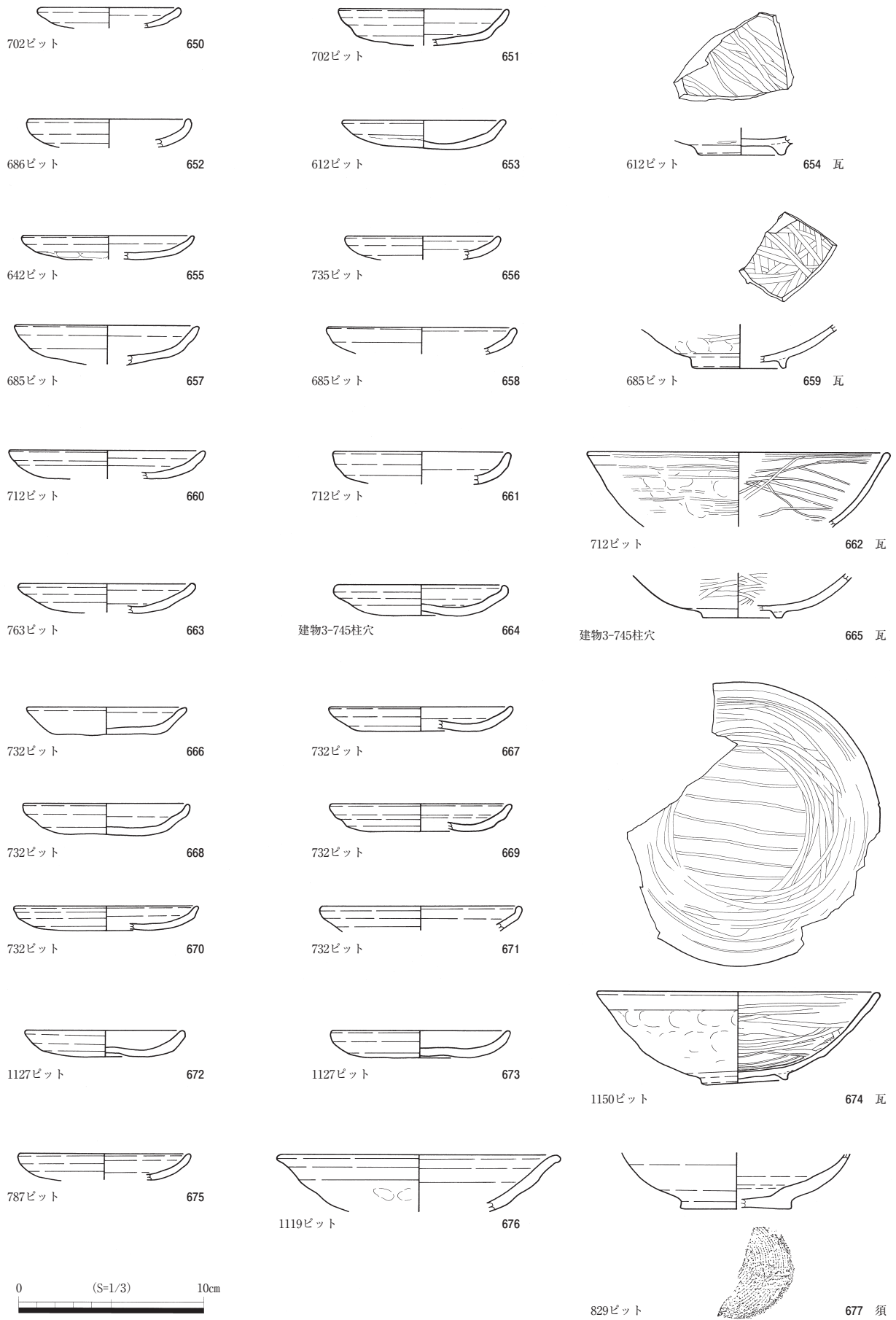


図122 建物3、その他のピット 出土遺物

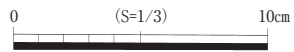
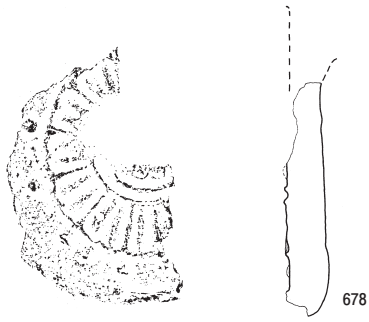


图123 攪乱 出土遺物

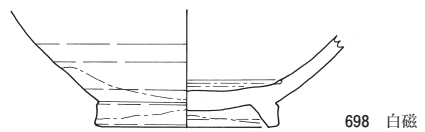
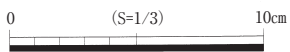
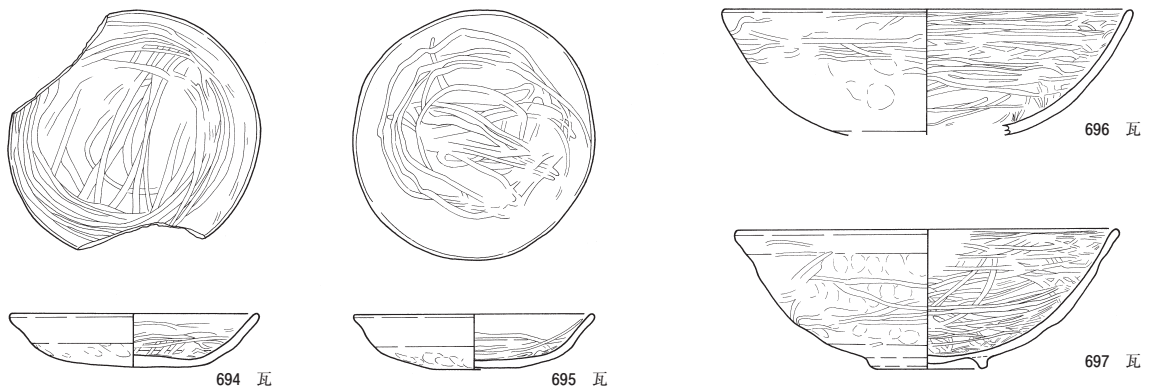
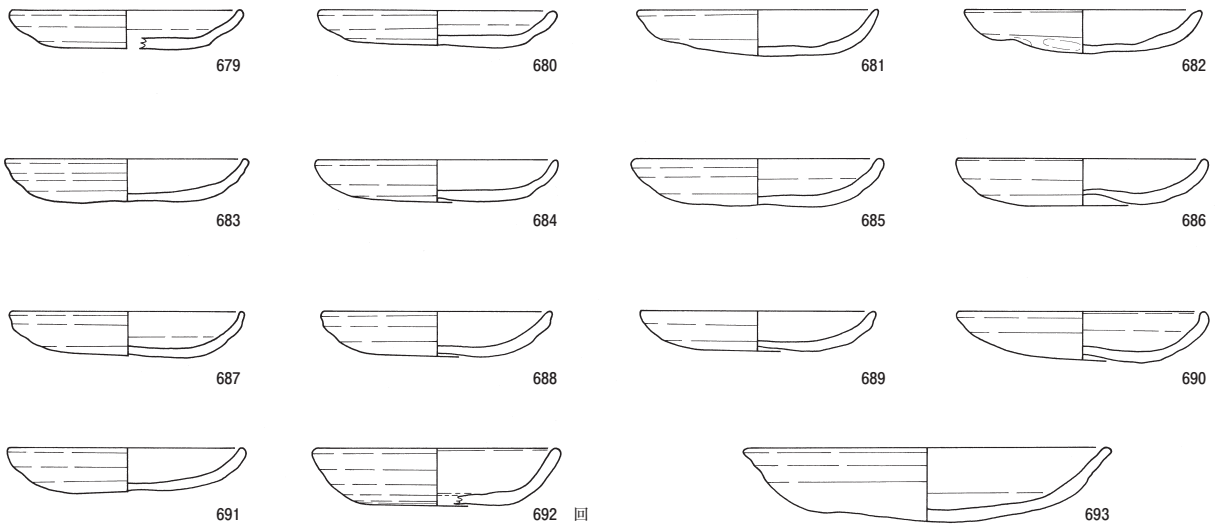


图124 第7層（C地点）出土遺物

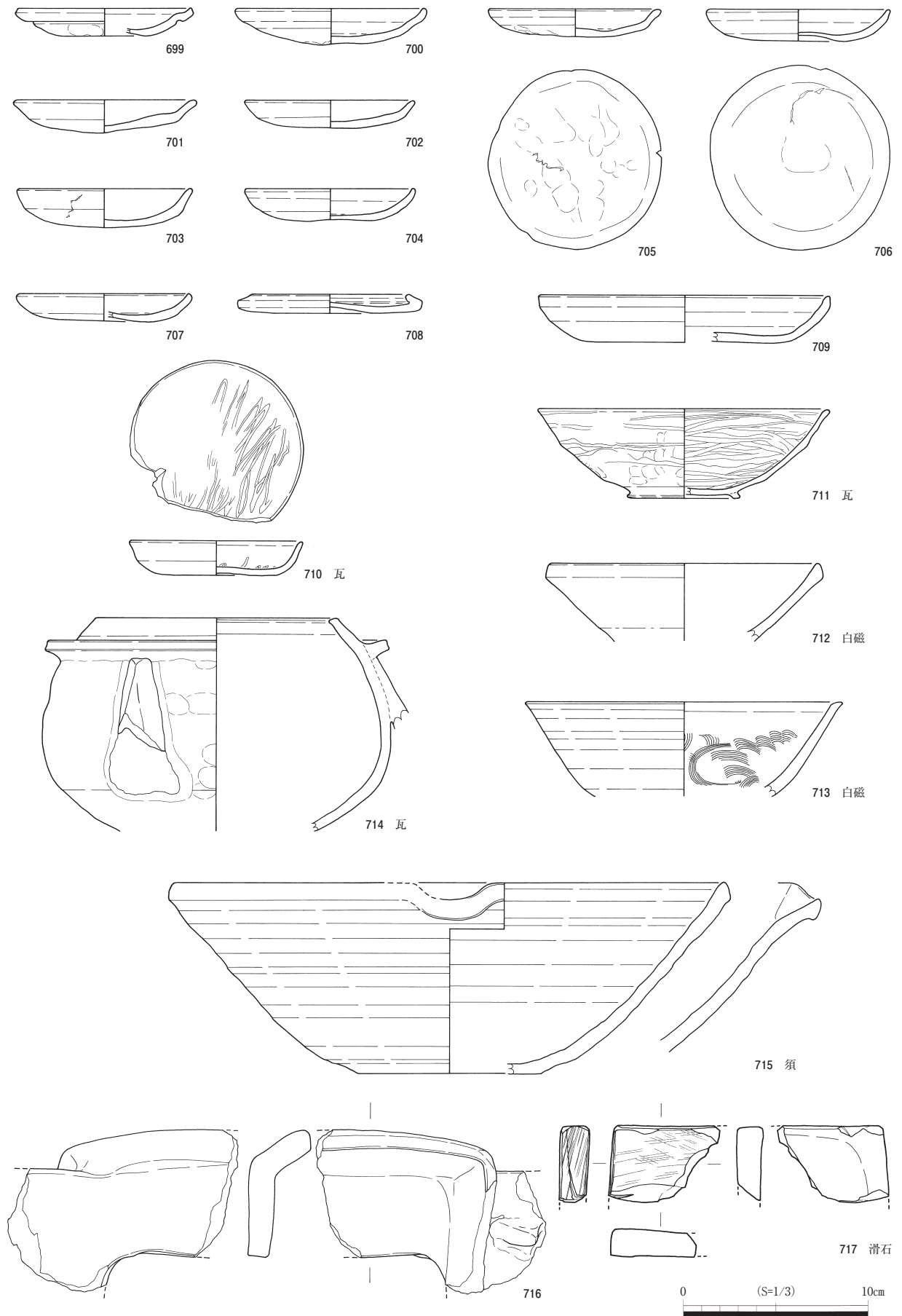


图125 第7層 出土遺物

第4節 第7面 (第7~9層)

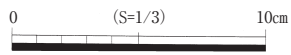
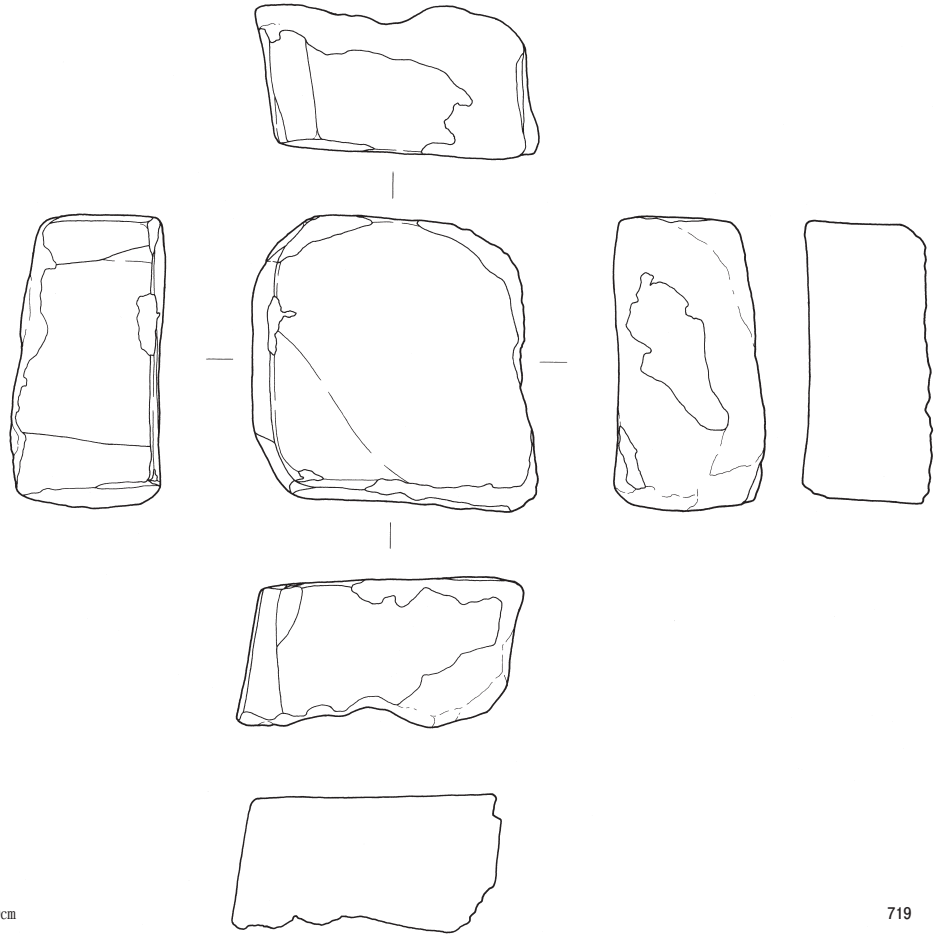
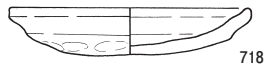


图126 第8層 出土遺物

第5節 第10面（第10層）

第1項 層序と地形

東半では第8層、西半では第9層を除去して検出した、第10層上面が第10面である。第10層は細砂～粗砂を主体とする、土壌化層である。第11層洪水堆積層の上部が土壌化したものである可能性もある。ただし、土壌化の度合いは弱く、遺構数も少ない。

第10面の高さは、T.P.4.1～4.4mである。

第2項 遺構と遺物（図130）

東半で、溝、ピットを検出した。

798ピット（図127・130）

調査区東半東部に位置する。径約0.3m、深さ約0.1mで、埋土は細砂である。径約6cmの木材が遺存しており、杭等の可能性がある。樹種同定の結果を第4章に掲載している。

遺物は、土師器皿・煮炊具、瓦器碗の小片が少量出土している。

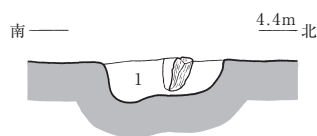
800溝（図128・130）

調査区東半東部に位置する、北西－南東方向の溝である。幅0.3～0.4m、深さ0.1m未満で、検出長は約1.8mである。埋土は細砂である。

遺物は、土師器皿（720）・煮炊具、瓦器碗が出土している。11世紀末～12世紀前葉のものである。

第10層出土遺物（図129 図版82）

土師器皿（721）、瓦器碗（722）、須恵器碗の小片が少量と、馬歯（図版82-7）が出土している。11世紀後葉～12世紀前葉のものである。



1. オリーブ黒5Y3/2細砂
(シルトブロック多く含む、小礫含む)

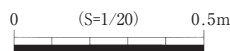


図127 798ピット 断面図

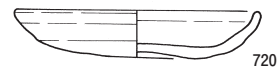


図128 800溝 出土遺物

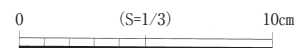
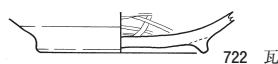
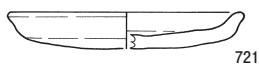


図129 第10層 出土遺物

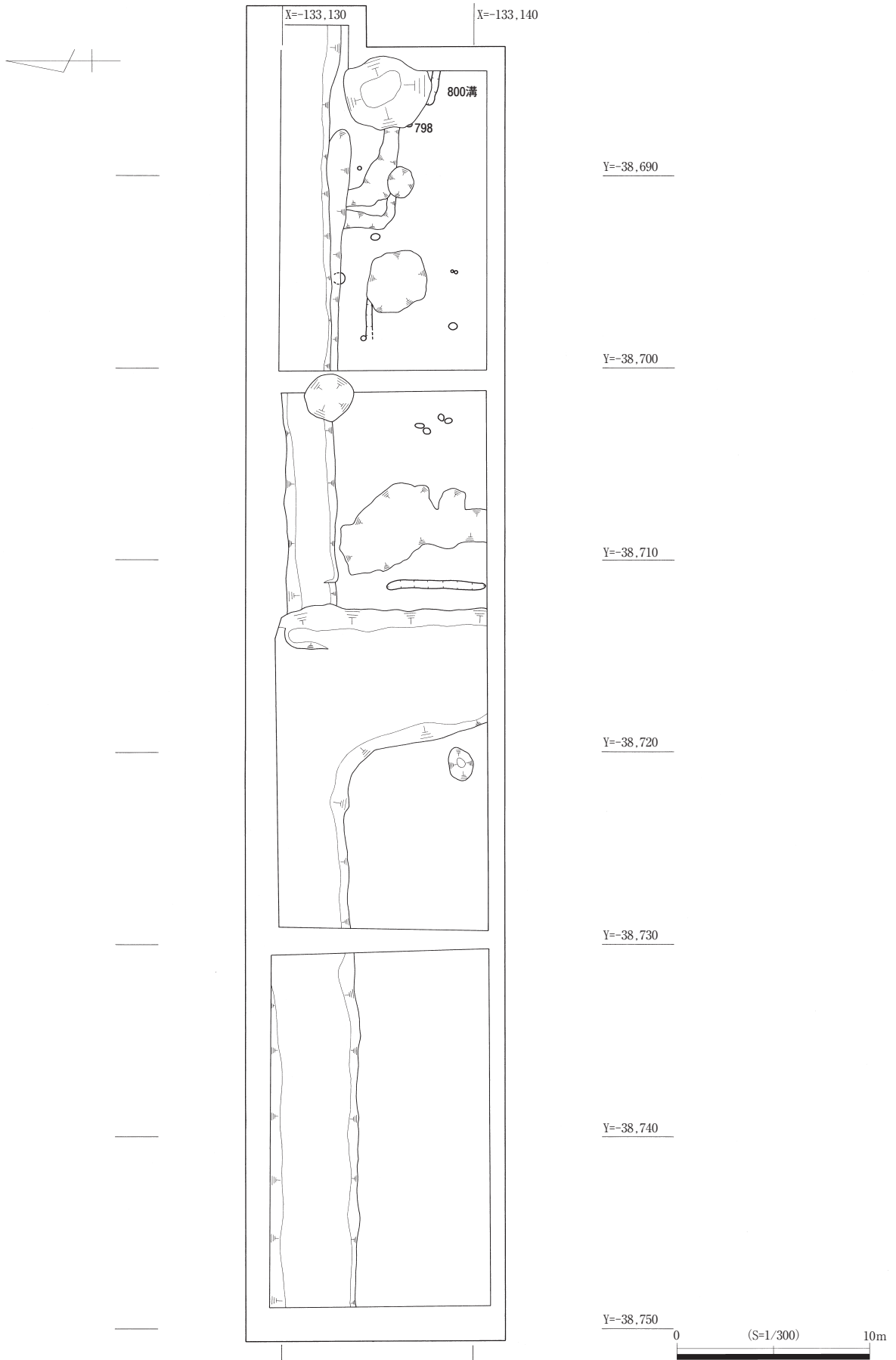


图130 第10面 平面图

第6節 第12面（第11・12層） —10世紀後葉の水田面—

第1項 層序と地形

第11層を除去して検出した、第12層上面が第12面である。第11層は、調査区東部で約1.2m、西部で約0.2mの厚みを持つ、洪水堆積層である。大部分が細砂～粗砂で、最下部は厚さ約0.2mのシルト層である。第12層はシルトであるが、直下の第15層が細砂～粗砂である箇所ではそのままを多く含む。

第11層最下のシルト層を少し掘り下げた段階で、第12面の畦畔を検出した。ただし、特に第11層が厚く堆積している調査区東部では、第11層が第12層を、さらに最も厚く堆積している箇所では第15層をも抉っている状況がみられる。周辺の第12層が遺存している部分においても、第11層中に第12層のまき上げが顕著に認められ、第11層堆積時に第12面は相当の侵食を受けていると思われる。調査区東部でのみ畦畔を検出していないのは、そのためである可能性が高い。また、調査区西部においても、東部ほどではないが第11層中に第12層のまき上げが認められ、本来の水田面のレベルは保たれていないと思われる。

以上のことから、図131に示した等高線、標高は、本来の水田面のものとは異なる。ただし、第12層の下面のレベル、つまり第15層の上面のレベルも、畦畔1以西でT.P.3.8m、以東でT.P.3.4～3.7mで、畦畔1以東が低い。東部に遺存している第12層も攪拌を受けた作土層とみられることから、作土層の厚さが西部と東部で極端に異ならないとすれば、東が低い第15面の地形を引継いだ、畦畔1以東が低い水田面であった可能性がある。

第2項 遺構と遺物（図131 図版24）

畦畔を3条検出した。

畦畔1～3（図131 図版25）

畦畔1は、調査区中央部に位置する。南北方向で、幅0.5～0.6m、高さ約0.1m、検出長約9.9mである。畦畔2は、畦畔1から西へ15.4～16.3mに位置する。南北方向で、幅0.7～0.8m、高さ約0.2m、検出長約8.1mである。調査区北寄りの部分で水口を検出した。畦畔3は、畦畔2から西へ12.1～13.0mに位置する。南北方向で、幅0.9～1.1m、高さ約0.1m、検出長約7.7mである。調査区南寄りの部分で水口を検出した。

第11層出土遺物（図132 図版72・82）

土師器皿（723～726）・甕（733・734）、黒色土器A類椀（729）、灰釉陶器椀（727）、緑釉陶器椀（728）、須恵器杯身または杯蓋（735）・杯（730・731）・壺（732）・甕、弥生土器（736・737）、木製品（738）、馬骨（図版82-3）が出土した。木製品は、第7面の831ピットからも同種のもの（642）が出土している。10世紀後葉を中心とする時期のものが多く、これが水田面の埋没した時期であると思われる。

第12層出土遺物（図154 図版73・81・82）

コンテナ20箱分が出土したが、ほとんどが直下の第15層からのまき上げと思われる古墳時代の遺物で、その一部を次節の図154に掲載している。それ以外では、古代の土師器杯、須恵器杯B蓋等の小片が少量出土しているほか、牛歯（図版82-9・10）、調査区東半で瓦片（905～910）コンテナ半箱分が出土した。軒瓦はないが、半截平瓦（908）がある。丸瓦、平瓦ともに側縁が比較的幅広く面取りされており、砂は付着していない。平安時代のものと思われる。

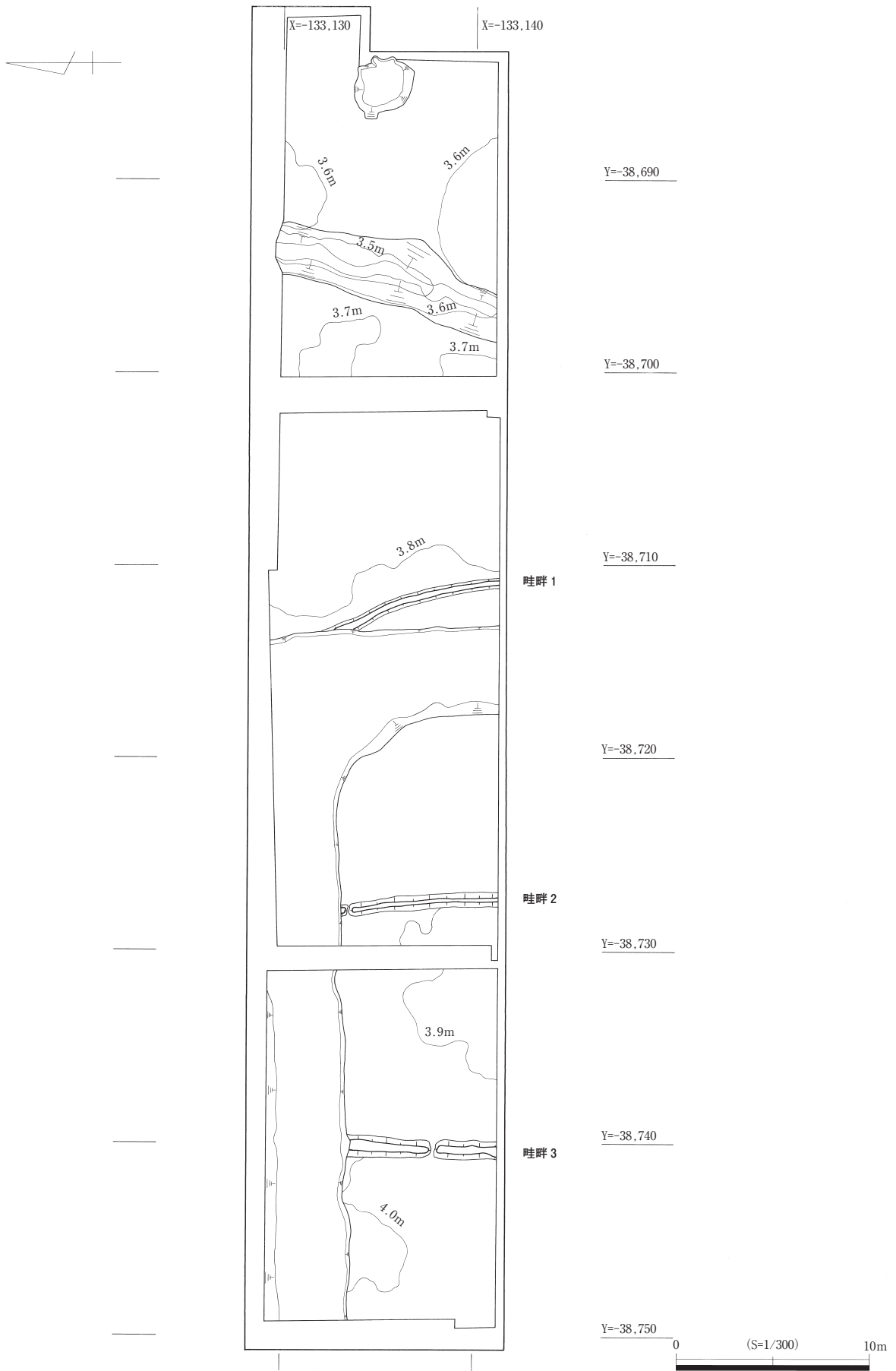


図131 第12面 平面図

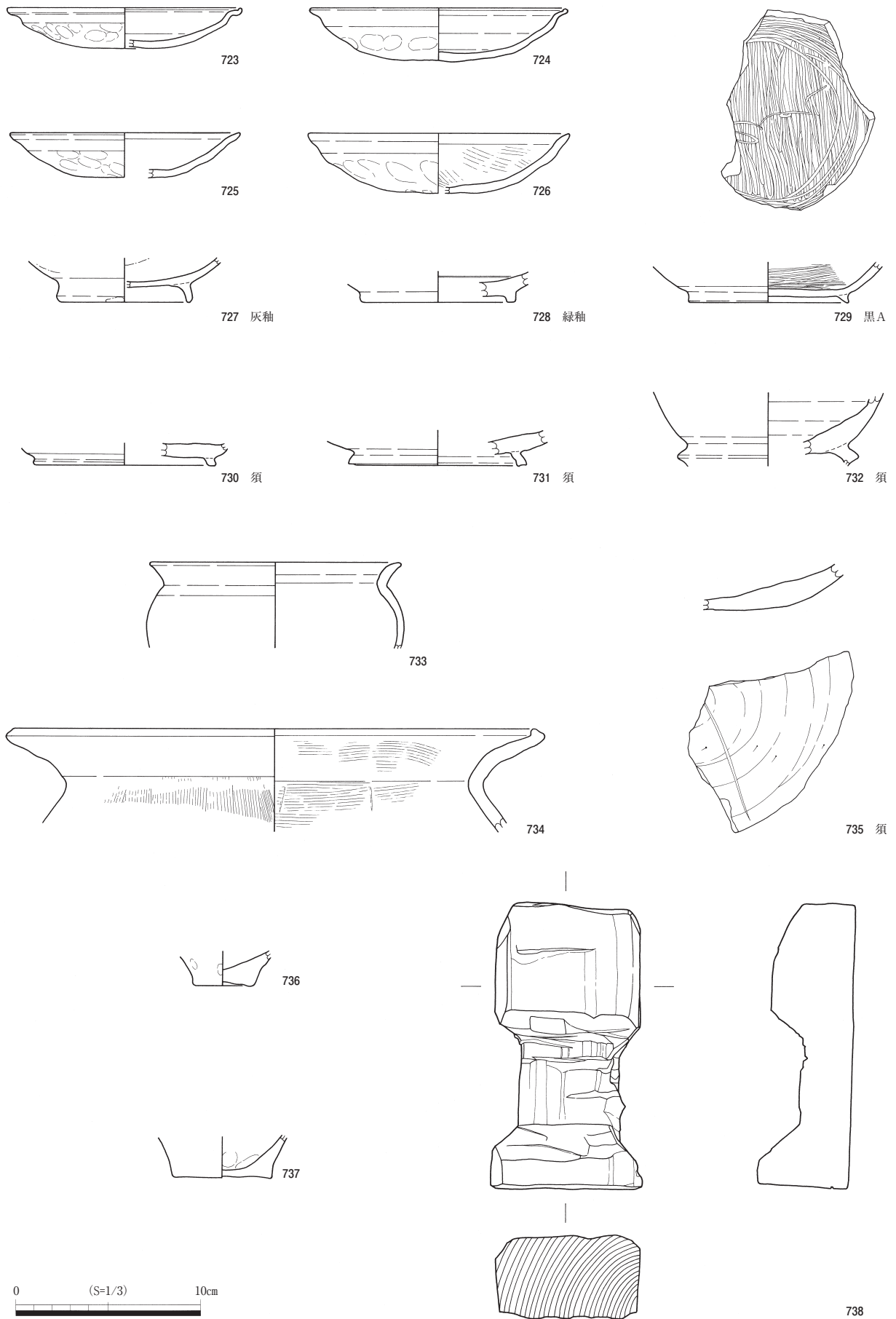


図132 第11層 出土遺物

第7節 第15面（第15層） —弥生時代前期～古代の遺構面—

第1項 層序と地形

第12層を除去して検出した、第15層上面が第15面である（第13・14層は欠番）。第15層は、基盤層が土壌化したもので、箇所によりシルト層または細砂～粗砂層である。遺構のほとんどを第15層土壌化層を除去した第15層下面で検出したが、第15層上面でも一部の遺構を検出した。西が高く、東が低い地形で、T.P.3.4～3.8mである。なお、図133に杭群を表現しているが、第12面時のものの可能性もある。

基盤層は、上部が第15層土壌化層の母材となるシルトまたは細砂～粗砂層、T.P.3.1m以下が粘土である。粘土層は、T.P.2.4mまで確認しており、有機物帯を縞状に含む。上層のシルト、細砂～粗砂層が堆積し、第15層の土壌が形成されるまでは、湿地状の環境であったと考えられる。

第2項 遺構と遺物

弥生時代～古代の遺構を検出した。以下、弥生時代と、古墳時代～古代にわけて報告する。

1. 弥生時代（図133 図版26）

調査区中央部で、溝1条、土坑2基を検出した。

946溝（図133～135 図版27・74）

調査区中央部に位置する、北西－南東方向の溝である。幅2.8～3.7m、深さ0.2～0.5mで、検出長は約13.4mである。底面のレベルは、北端でT.P.3.5m、南端でT.P.3.2mで、南に向かって低くなる。埋土は、シルトで、上層に炭の小片を含む。

遺物は、高杯（740）、広口壺（741）、甕（742）等が少量出土している。高杯（740）は生駒西麓系の胎土で、広口壺（741）は口縁端面に櫛描列点紋と円形浮紋、口頸部外面に櫛描直線紋を持つ。写真図版に掲載した（915）は、櫛描直線紋と櫛描波状紋を持つ、壺の頸部かと思われる破片で、（741）と同一個体である可能性がある。弥生時代中期後葉～末のものと思われる。

1013土坑（図134・135 図版27）

調査区中央部に位置する。不整な楕円形で、南北約1.1m、東西約0.7m、深さ0.1～0.2mである。埋土は、基盤層の粗砂を多く含むシルトである。

遺物は、壺（739）の破片が出土した。体部外面に段を持つ。内外面とも剥離が著しいが、外面にミガキが認められる。弥生時代前期のものである。

1015土坑（図134・135 図版27・74）

調査区中央部に位置する。不整な円形で、径約0.7m、深さ0.1～0.2mである。埋土は、基盤層の粗砂を多く含むシルトである。

北部分で高杯（744）が杯部のみ伏せた状態で、南部分で甕（745）が北に口縁部を向けた状態で出土した。土坑中央部分に、第5面の大溝に伴う杭が打ち込まれており、甕が粉碎している。

高杯（744）は、やや摩滅しているため不明瞭であるが、内外面にミガキ、脚柱部内面にシボリ痕がみられる。甕（745）は、内外面にハケ目を施し、外面に列点紋を有す。体部外面下部には、ケズリの痕跡が確認できる。弥生時代中期後葉のものである。

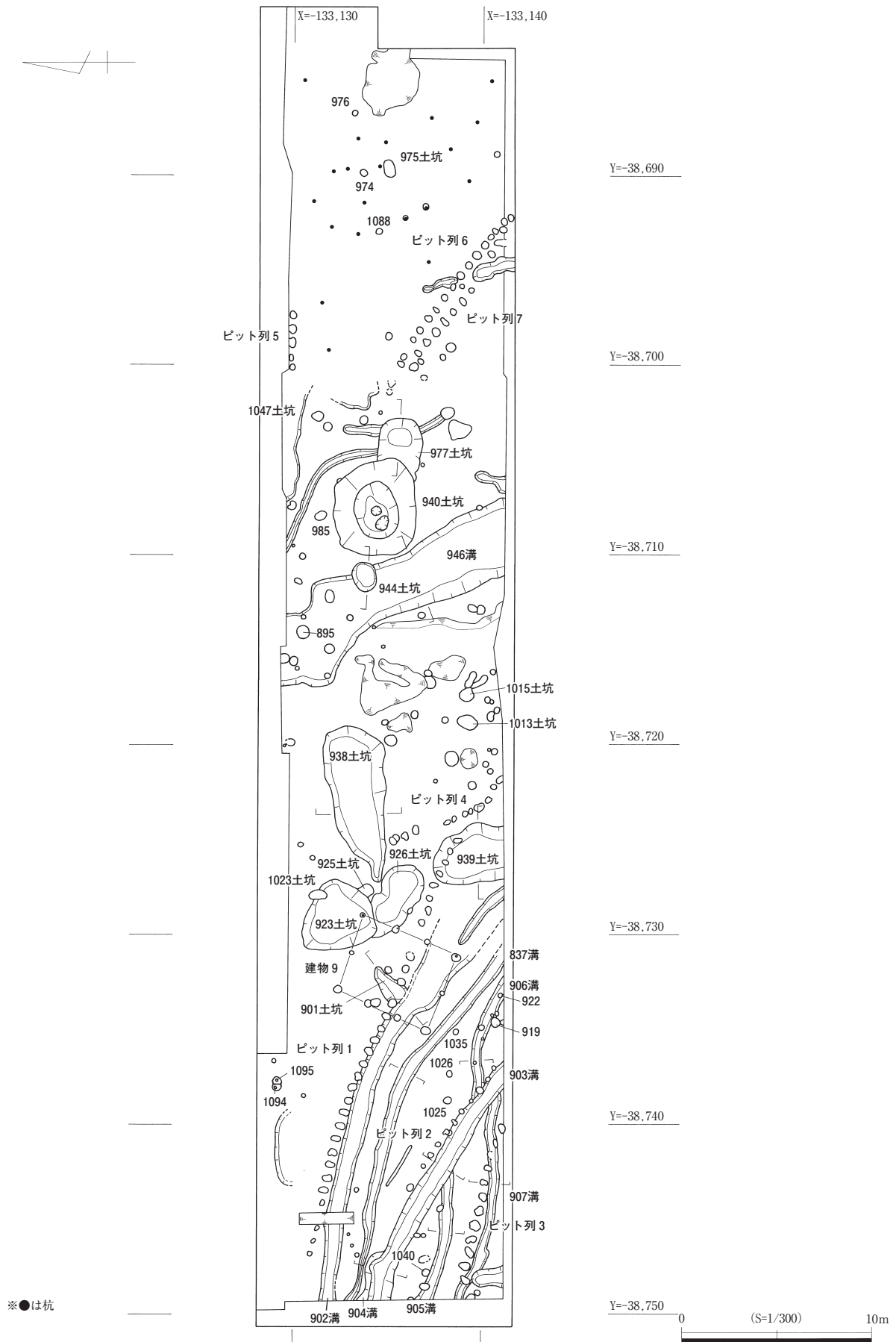


図133 第15面 平面図

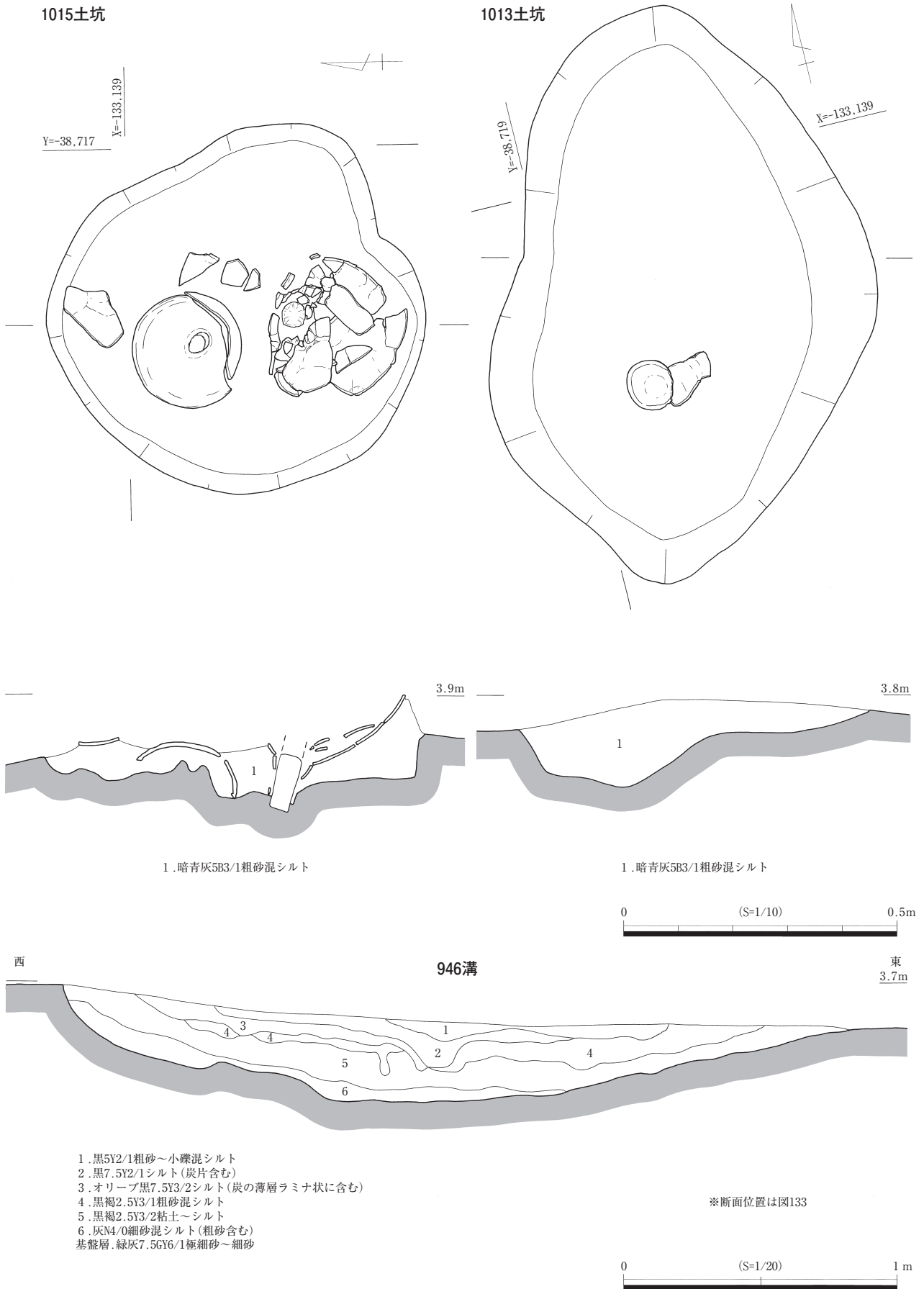


図134 946溝、1013・1015土坑 平面・断面図

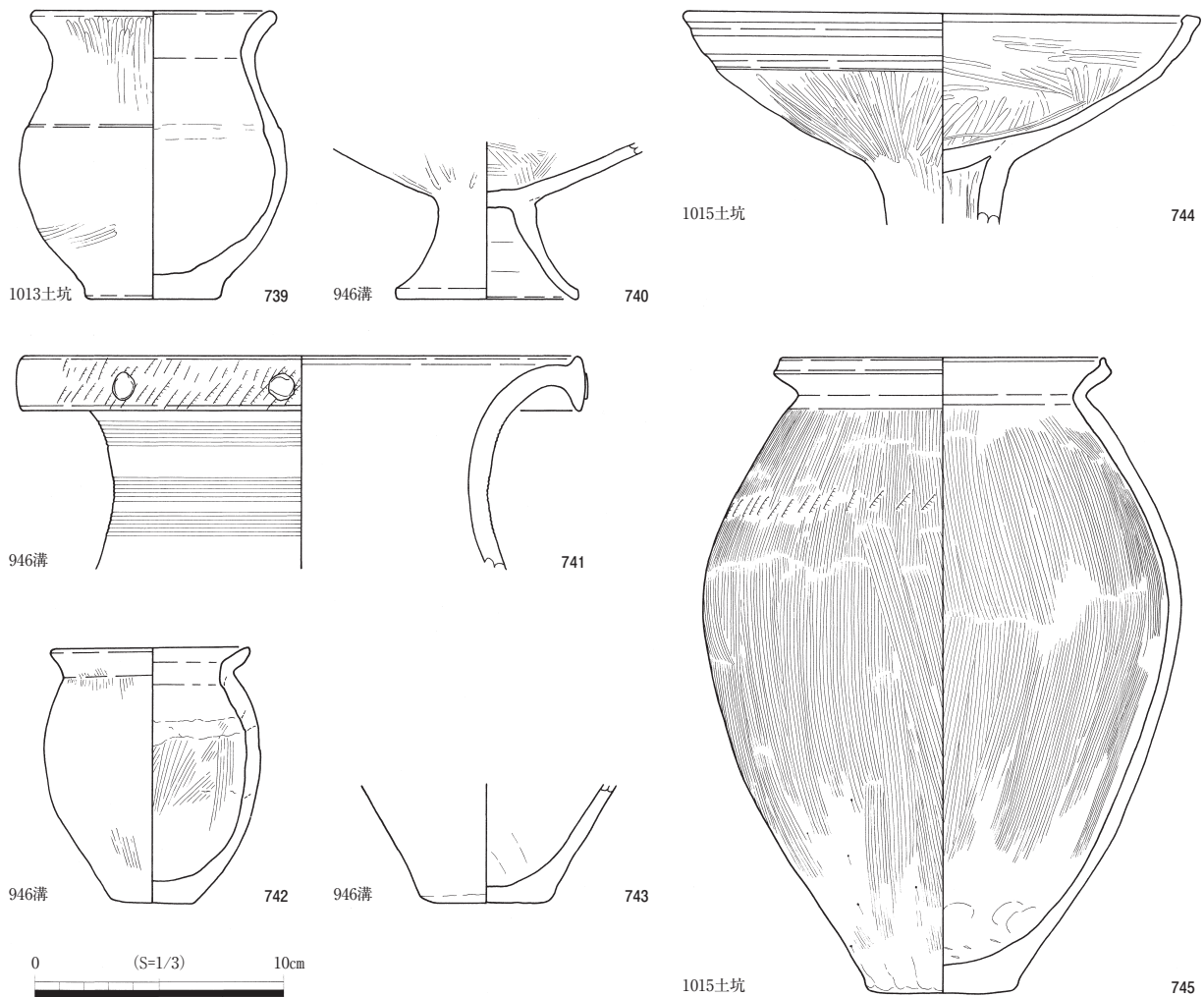


図135 946溝、1013・1015土坑 出土遺物

2. 古墳時代～古代 (図133 図版26)

古墳時代～古代の掘立柱建物、溝、ピット列、ピット、土坑を検出した。

建物9 [913・914・916～918・1024・1072・1073・1075・1084] (図136 図版28)

調査区西部に位置する。南北3間×東西2間、約5.3m×約4.2m、面積約22.3㎡である。方位はN-23°-Eで、柱間は南北方向で1.6～2.0m、東西方向で2.0～2.1mである。4隅の柱穴が比較的深く、特に東西方向中央の柱穴は浅い。918・1073・1084柱穴は柱根を残す。

遺物は、914柱穴から須恵器、1072柱穴から土師器の小片が出土している。

1084柱穴が923土坑を切っており、土坑より新しい。

837溝 (図133・137 図版29)

調査区西部に位置する。北西-南東方向で、調査区外に続く。幅0.3～0.9m、深さ約0.2mで、検出長は約20.0mである。第15層上面で検出した。底面のレベルは、西部T.P.3.7m、東部3.6mで、東が低い。埋土は、シルトである。遺物は、土師器、須恵器甕の小片が少量出土している。

902溝 (図133・137 図版29)

調査区西部に位置する。北西-南東方向で、調査区外に続く。幅0.8～1.8m、深さ約0.1mで、検出長は約20.0mである。底面のレベルは、概ねT.P.3.7mであるが、わずかに東が低い。埋土は、シルトである。遺物は、土師器、須恵器甕の小片が少量出土している。901土坑を切っている。

903溝（図133・137 図版29）

調査区西部に位置する。北西－南東方向で、調査区外に続く。幅0.8～1.2m、深さ約0.2mで、検出長は約15.0mである。底面のレベルは、西部T.P.3.5m、東部3.4mで、東が低い。埋土は、シルトである。遺物は、土師器把手、須恵器甕の小片が少量出土している。904溝と重複し、切っている。

904溝（図133・137 図版29）

調査区西部に位置する。北西－南東方向で、調査区外に続く。南側を903溝に切られているため幅は不明、深さ約0.3mで、検出長は約3.6mである。埋土は、シルトである。遺物は、出土していない。

903溝と重複しており、切られている。

905溝（図133・137 図版29）

調査区西部に位置する。北西－南東方向で、北西側は調査区外に続く。幅0.5～0.7m、深さ約0.1mで、検出長は約7.0mである。埋土は、シルトである。遺物は、土師器、須恵器小片が出土している。

906溝（図133・137）

調査区西部に位置する。北西－南東方向で、南東側は調査区外に続く。幅0.5～0.6m、深さ約0.1mで、検出長は約6.9mである。埋土は、シルトである。遺物は、出土していない。

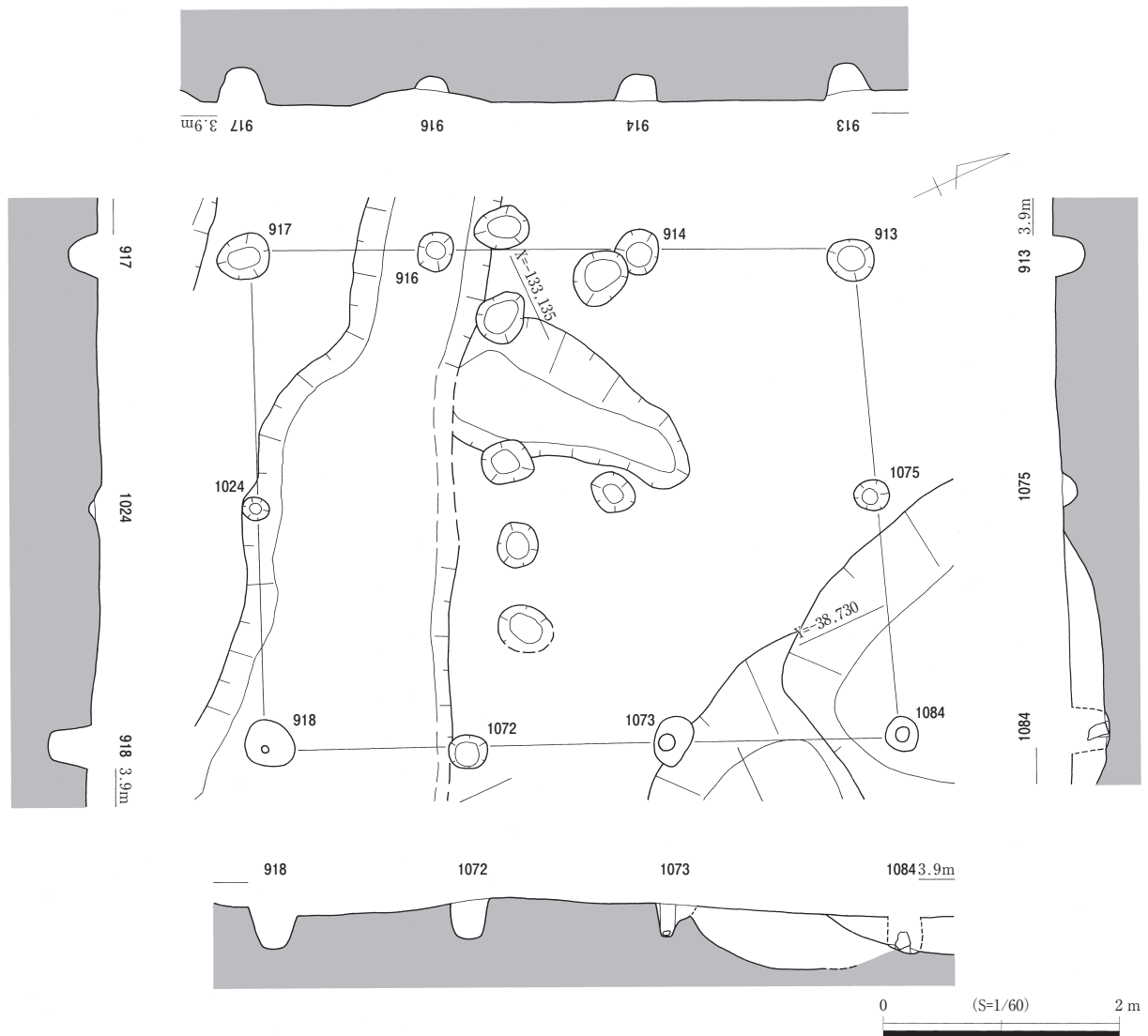


図136 建物9 平面・断面図

907溝 (図133・137 図版29)

調査区西部に位置する。北西-南東方向で、北西側は調査区外に続く。幅0.3~0.6m、深さ約0.1mで、検出長は約11.1mである。埋土は、粘土~シルトである。

遺物は、土師器小片が出土している。

ピット列1 [840~858・885~892・908・1027・1031・1032] (図138 図版29)

調査区西部に位置する。北西-南東方向にピットが並ぶ。31基検出したが、攪乱部分等にも存在した可能性がある。第15層上面で検出した。ピットは、概ね南北方向に長い不整な楕円形で、南北0.2~0.5m、東西0.2~0.3m、深さ0.1m未満である。埋土は、シルトである。

遺物は、各ピットから土師器、須恵器杯身・甕の小片が少量出土している。840ピット出土の須恵器杯身片は、6世紀後葉~7世紀前葉のものと思われる。

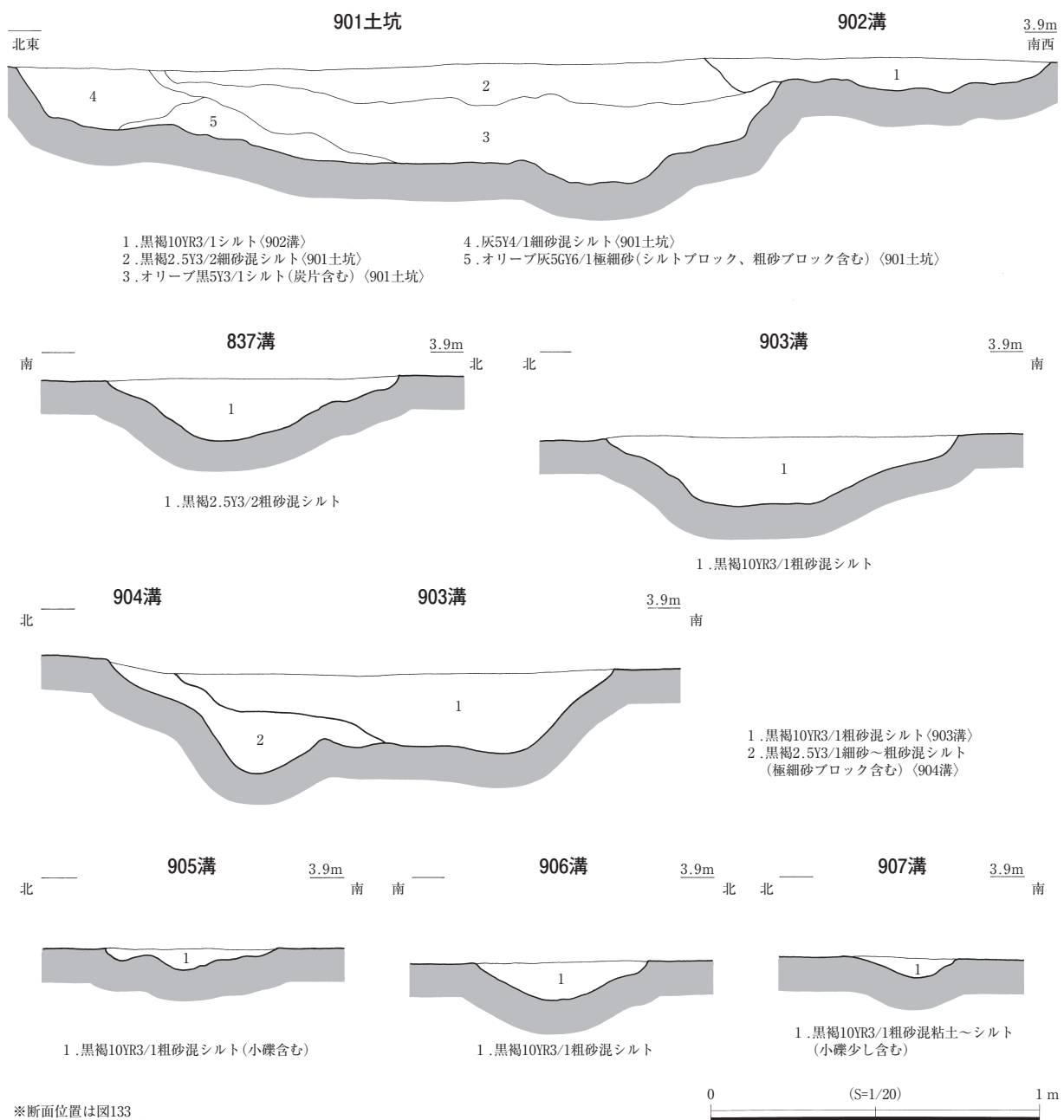


図137 837・902~907溝、901土坑 断面図

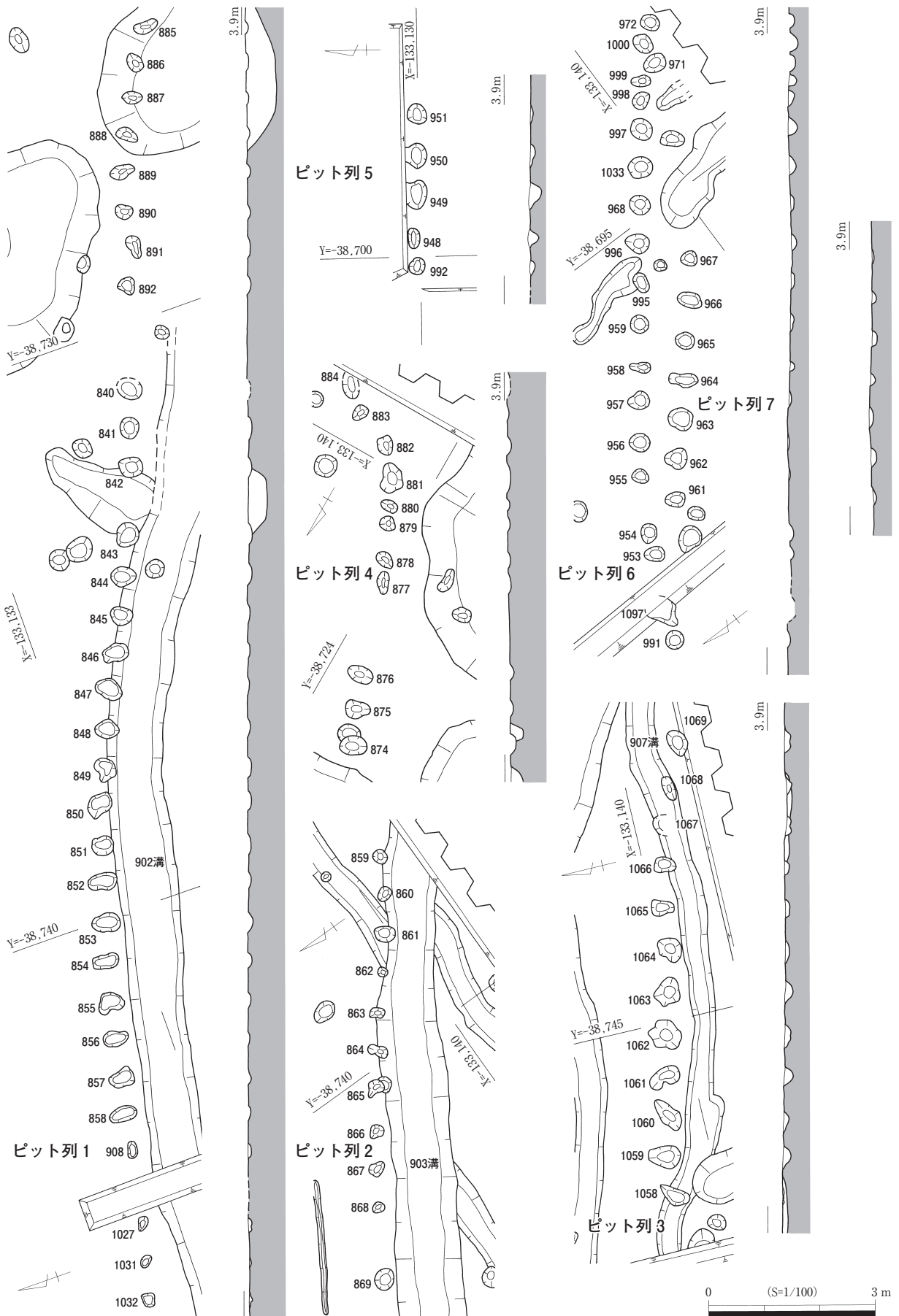


図138 ピット列1～7 平面・断面図

ピット列2〔859～869〕(図138・139)

調査区西部に位置する。北西－南東方向にピットが並ぶ。11基であるが、調査区外に続く可能性がある。第15層上面で検出した。ピットは0.2～0.4mの不定形で、埋土はシルトである。遺物は、土師器甕、須恵器杯身(746)・甕の小片が少量出土している。6世紀後葉～7世紀前葉のものである。

ピット列3〔1058～1069〕(図138 図版29)

調査区西部に位置する。北西－南東方向にピットが並ぶ。12基であるが、調査区外に続く可能性がある。ピットは、概ね南北方向に長い不整な楕円形で、南北0.4～0.6m、東西0.3～0.5m、深さ約0.1mである。埋土は、シルトである。遺物は、須恵器の小片が1点出土している。

ピット列4〔874～884〕(図138)

調査区西部に位置する。北西－南東方向にピットが並ぶ。11基であるが、調査区外に続く可能性がある。ピットは0.2～0.5mの不定形で、深さ0.1m未満である。埋土はシルトである。

遺物は、土師器、須恵器甕の小片が少量出土している。

ピット列5〔948～951・992〕(図138)

調査区東部に位置する。東西方向に5基のピットが並ぶ。ピットは、北端部を側溝に切られて全形が不明なものが多いが、径0.3～0.5mの、円形または不整な楕円形で、深さ0.1～0.2mである。埋土はシルトである。遺物は、出土していない。

ピット列6〔953～959・968・971・972・991・995～1000・1033・1097〕(図138 図版29)

調査区東部に位置する。北西－南東方向にピットが並ぶ。19基であるが、調査区外に続く可能性がある。径0.2～0.4mの、円形または北東－南西方向に長い不整な楕円形で、深さ約0.1mである。埋土はシルトである。遺物は、出土していない。

ピット列7〔961～967〕(図138 図版29)

調査区東部に位置する。北西－南東方向に7基のピットが並ぶ。径0.3～0.5mの、円形または北東－南西方向に長い不整な楕円形で、深さ約0.1mである。埋土はシルトである。遺物は出土していない。

895・919・922・974・976・1025・1026・1035・1040・1088・1094・1095ピット(図133・140)

調査区西部、東部を中心に、上述のピット列のものとは異なる、ある程度の深さを有するピットを検出している。895ピットは、調査区中央部、919・922・1025・1026・1035・1040・1094・1095ピットは西部、974・976・1088ピットは東部に位置する。径0.2～0.6mの円形または楕円形で、深さは0.1～0.4m、埋土はシルトのものが多い。遺物は、976ピットから土師器、須恵器甕の小片、1040ピットから土師器、須恵器杯の小片が出土している。1040ピット出土の須恵器杯は内面に同心円当て具痕を有す。

985ピット(図133・139 図版74)

調査区中央部東寄りに位置する。長径約0.7m、短径約0.5mの楕円形で、深さ約0.2mである。

遺物は、土師器杯A(747)片が出土している。口縁部から体部内面に1段斜放射状暗紋、底部内面に連弧状かと思われる暗紋を有す。7世紀末～8世紀初頭のものである。

901土坑(図133・137)

調査区西部に位置する。北東－南西方向約2.4m、北西－南東方向約1.2mの不定形で、深さ約0.4mである。埋土はシルトであ

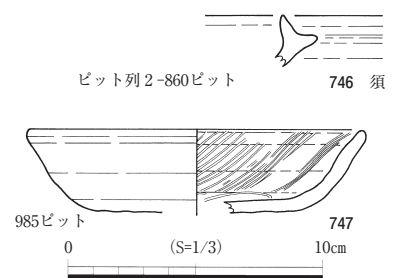


図139 ピット列2、985ピット
出土遺物

第7節 第15面（第15層）

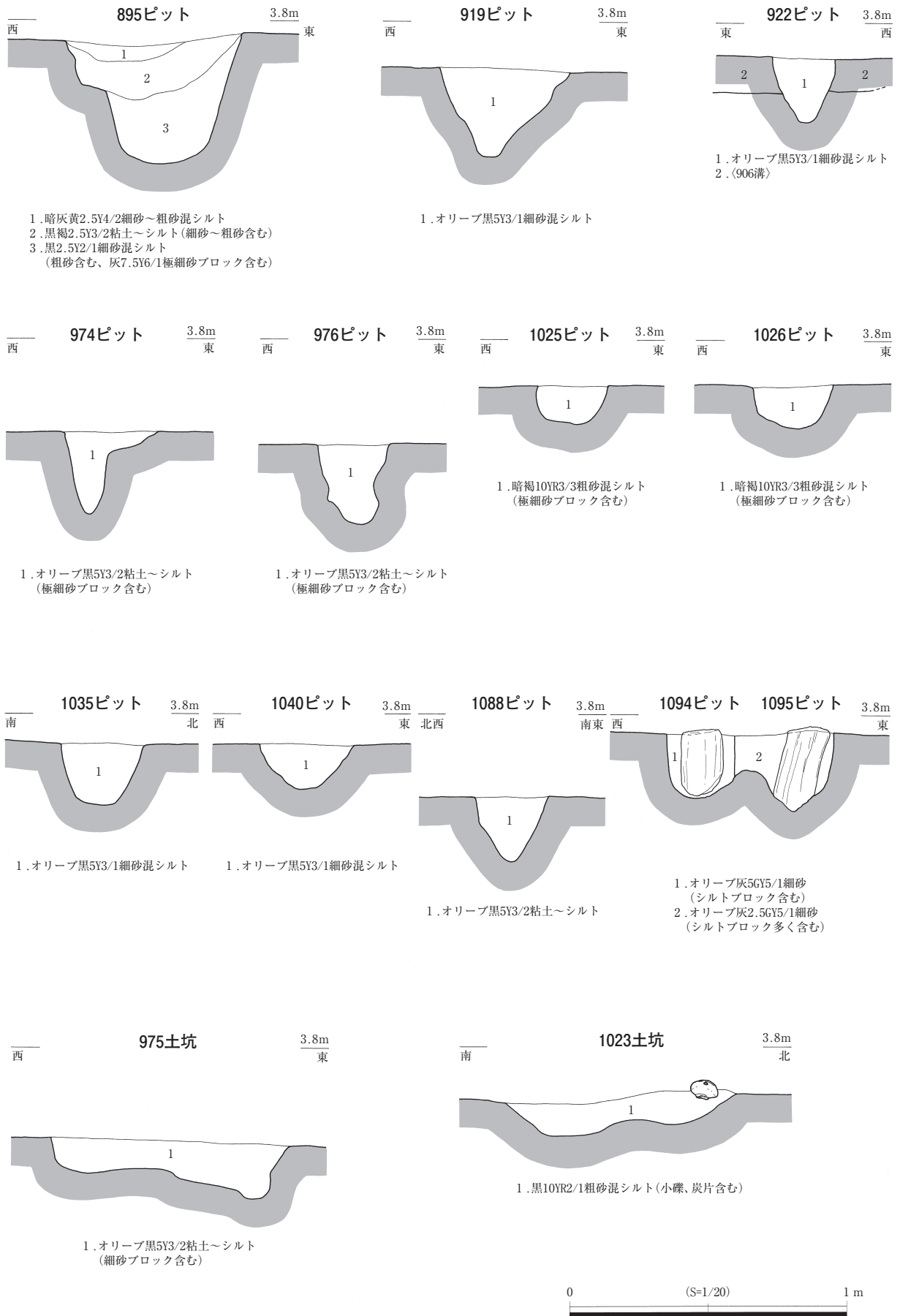


図140 895・919・922・974・976・1025・1026・1035・1040・1088・1094・1095ピット、975・1023土坑 断面図

る。遺物は、土師器小片が出土している。902溝に切られる。

923土坑 (図141～143 図版30・74～76)

調査区中央部西寄りに位置する。1辺約4.0mの隅丸三角形で、深さ約0.5mである。埋土はシルトで、中層部分に炭層(5層)、有機物層(7層)を挟む。

遺物は、上層(1～4層)から土師器壺(762)・甕(764・765)・竈(911)、須恵器杯身(752・753)・杯蓋(748)・高杯(754)・蓋(750)・壺(756)、製塩土器(770)、モモ核、中層(5～7層)から土師器甑(763)・甕(766・767)、須恵器杯蓋(749)・甕または壺(757)、木片が出土している。ほ

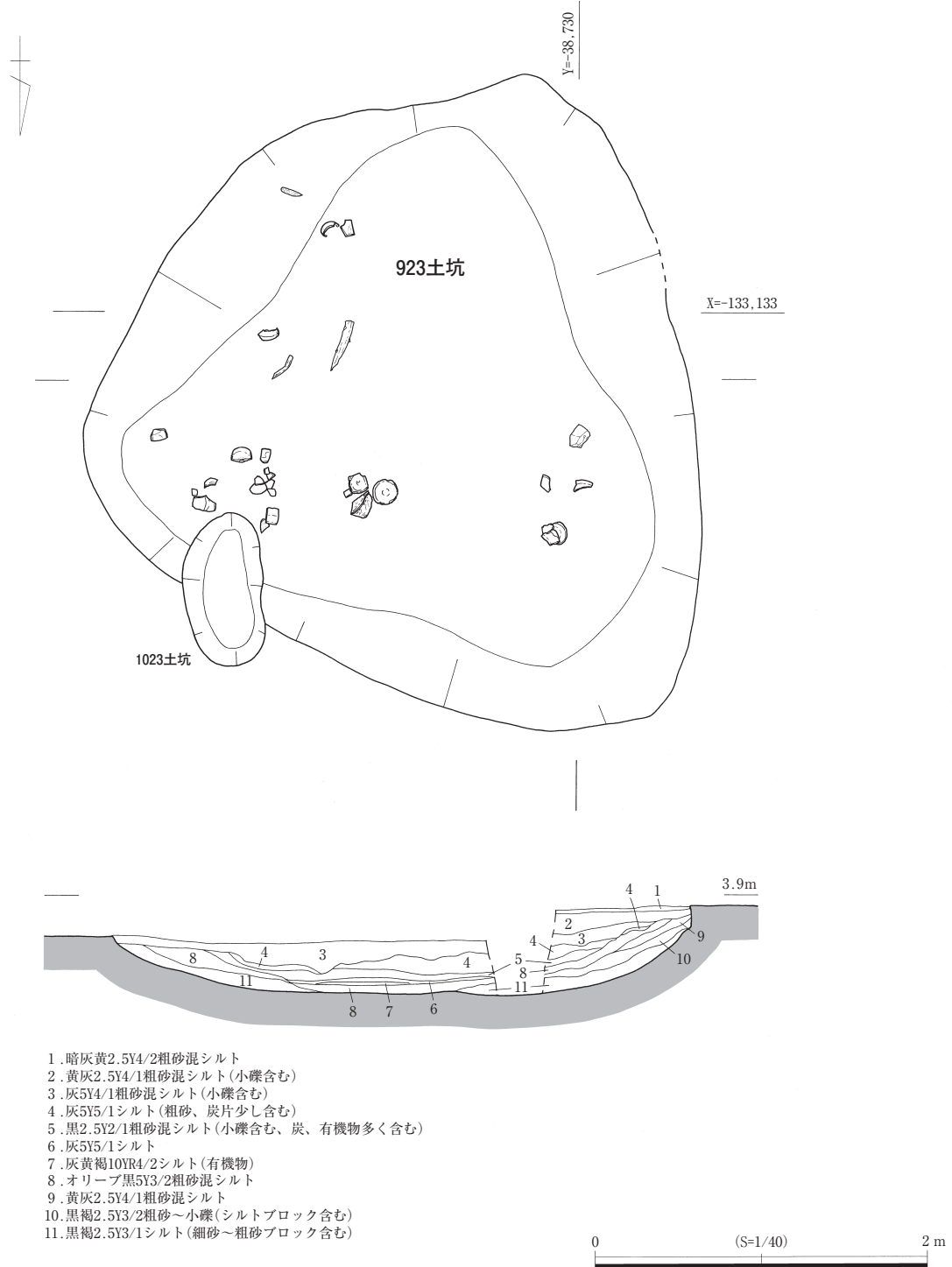


図141 923土坑 平面・断面図

第7節 第15面（第15層）

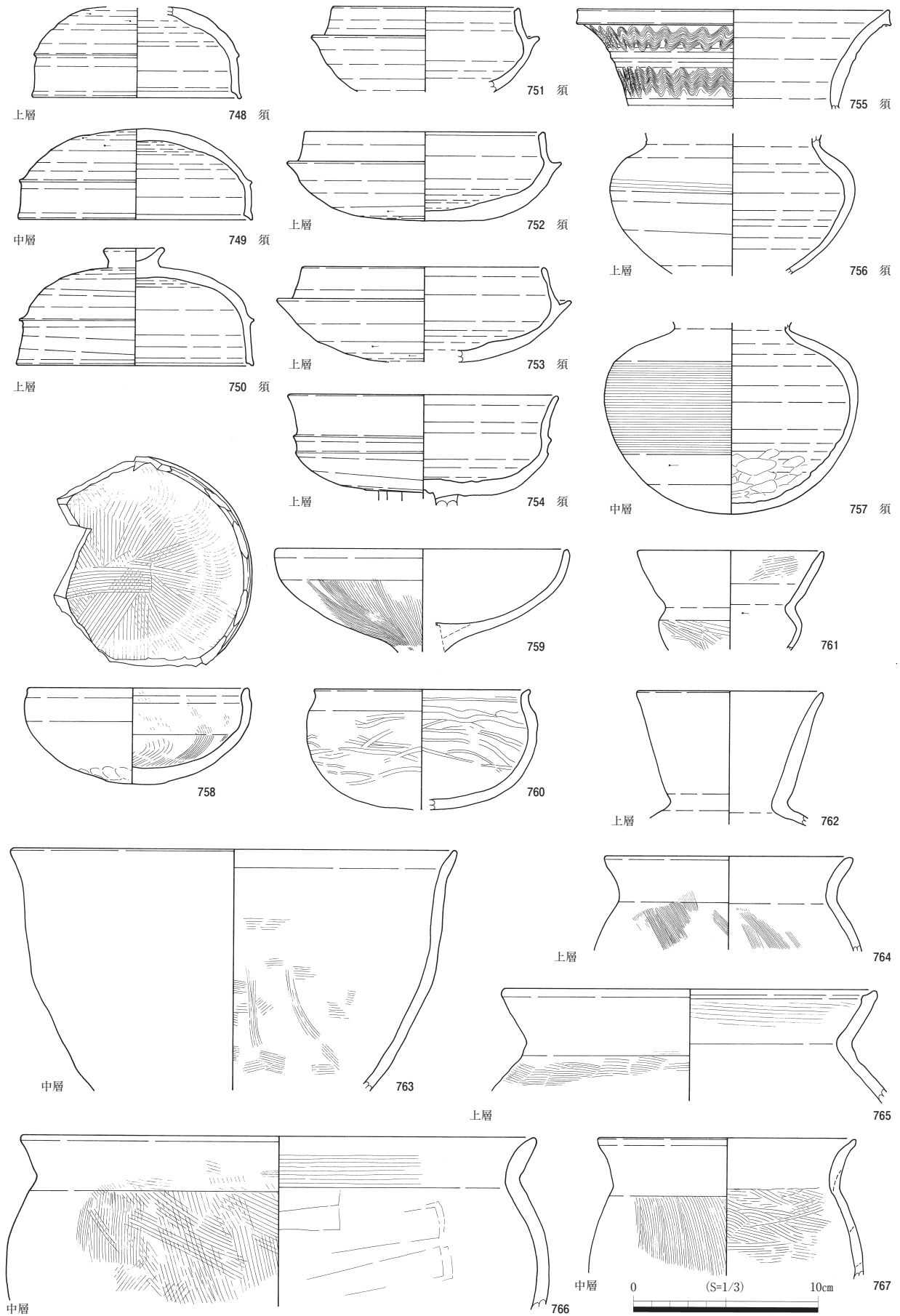


图142 923土坑 出土遺物（1）

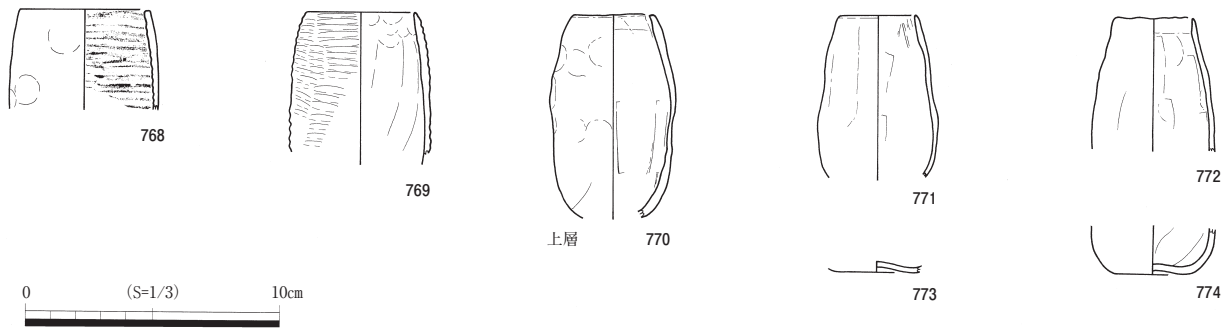
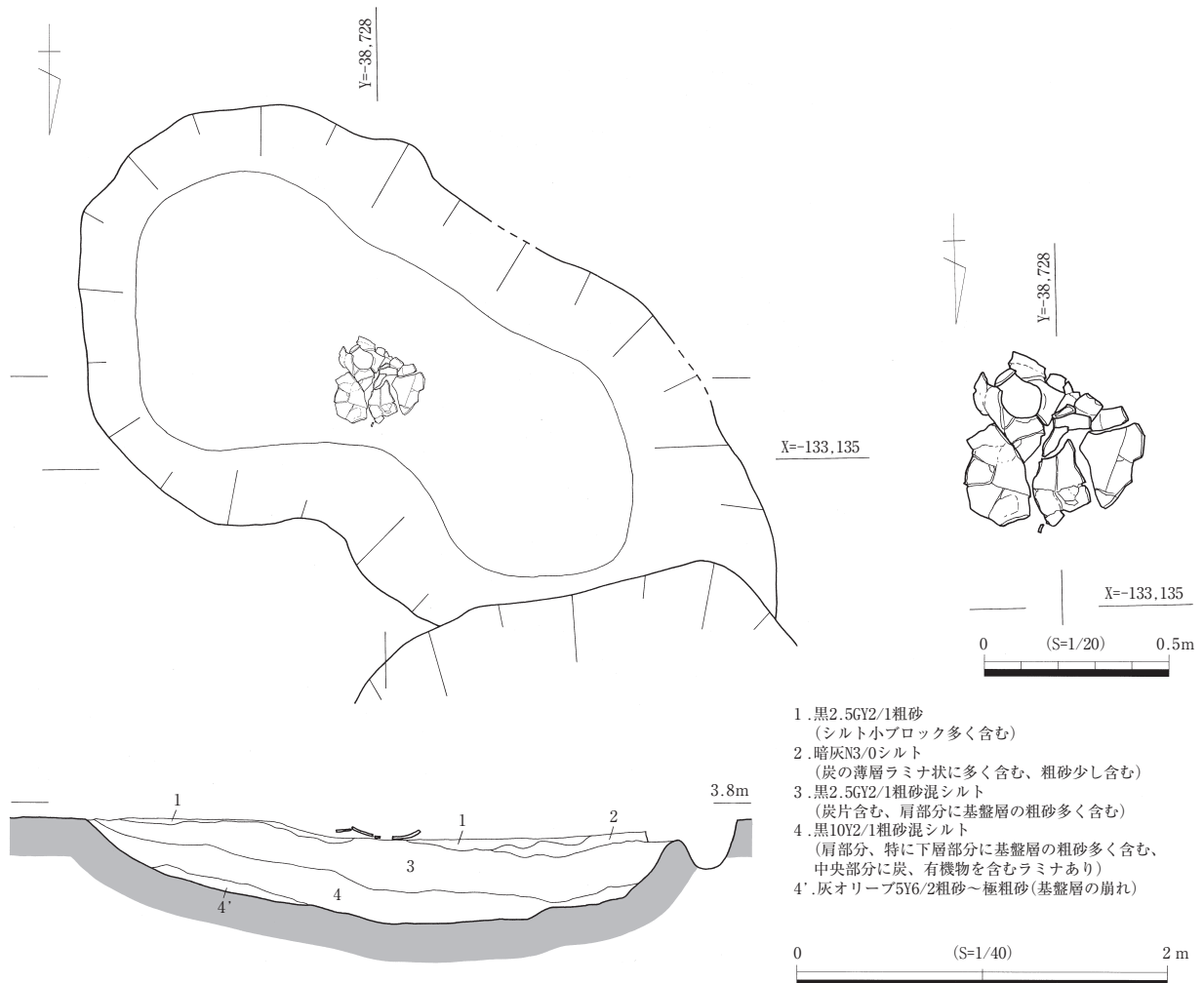


図143 923土坑 出土遺物(2)

かに、土師器杯(758)・高杯(759)・鉢(760)・壺(761)、須恵器杯身(751)・壺(755)、製塩土器(768・769・771~774・912)が出土している。土師器鉢(760)は、黒化処理されており、体部内外面に工具によるナデ後、ミガキを施す。製塩土器には、内面に貝殻条痕(768)、縦方向または斜め方向のナデ(769・774)、工具による横方向または斜め方向のナデ(770~772)等、外面にタタキ(769)、指オサエ等を施すものがみられる。5世紀後葉~6世紀前葉のものと思われる。建物9の1084柱穴、1023土坑に切られ、926土坑を切っている。

926土坑(図144・145 図版31・78)

調査区中央部西寄りに位置する。長径4.3m以上、短径約2.3mの不整な楕円形で、深さ約0.6mであ



1. 黒2.5GY2/1粗砂
(シルト小ブロック多く含む)
2. 暗灰N3/0シルト
(炭の薄層ラミナ状に多く含む、粗砂少し含む)
3. 黒2.5GY2/1粗砂混シルト
(炭片含む、肩部分に基盤層の粗砂多く含む)
4. 黒10Y2/1粗砂混シルト
(肩部分、特に下層部分に基盤層の粗砂多く含む、中央部分に炭、有機物を含むラミナあり)
- 4'. 灰オリーブ5Y6/2粗砂~極粗砂(基盤層の崩れ)

図144 926土坑 平面・断面図

る。埋土はシルトで、炭、有機物を含み、肩部に基盤層が崩れたものと思われる粗砂が認められる。

遺物は、最上層から破損した状態で土師器壺（782）が出土している。ほとんどの破片が接合し、口縁部が80%、体部は上半部が50%程度遺存していた。ほかに、土師器甕（781）片が出土している。5世紀のものと思われる。923土坑に切られている。

938土坑（図133・146 図版30）

調査区中央部西寄りに位置する。東西約8.3m、南北約3.3mの不定形で、深さ約0.3mである。埋土はシルトで、炭の薄層を含み、肩部に基盤層が崩れたものと思われる粗砂～小礫が認められる。

939土坑（図133・146・147 図版31・77）

調査区中央部西寄りに位置する。南側の調査区外に続いており、南北3.7m以上、東西約3.2m、深さ約0.6mである。埋土はシルトで、炭の薄層を含み、肩部に基盤層が崩れたものと思われる粗砂～小礫が認められる。

遺物は、弥生土器甕（798）、土師器鉢（791）・甌（797）・甕（792～794）、須恵器杯身（786・787）・

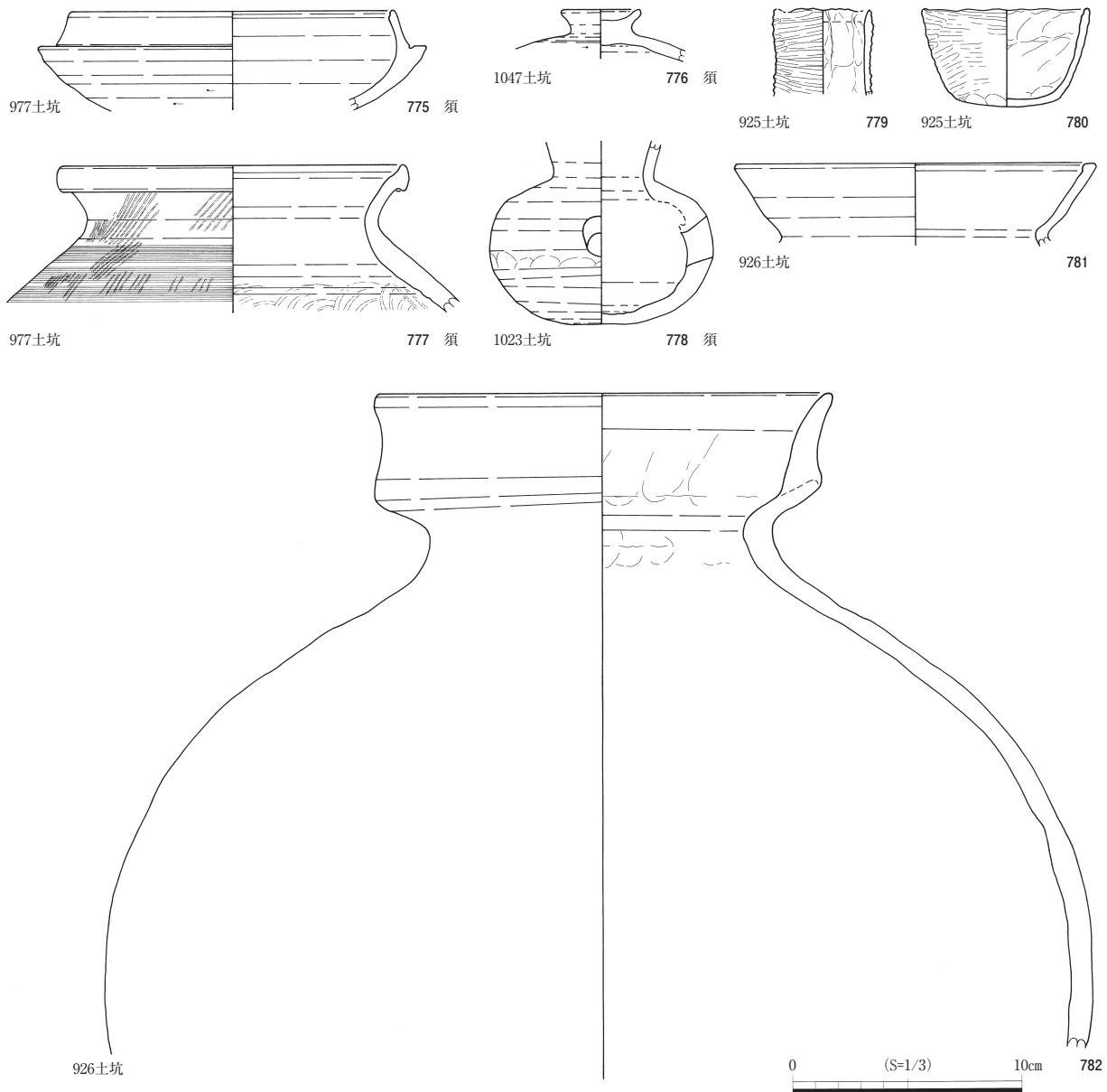


図145 926・977・1023・その他の土坑 出土遺物

杯蓋 (783・784)・高杯 (788)・蓋 (785)・甕 (789)・甕 (790)、製塩土器 (795・796) が出土している。土師器甕 (797) の把手は、体部を調整 (ハケ) した後、器壁に孔をあけて挿入し、内外面に粘土を貼り付けて接合されている。須恵器高杯は、図化できたもの以外に4方向の長方形透しを持つ短脚片が出土している。製塩土器は、図化できない小片が比較的多く出土している。外面にタタキを施すもの等がみられる。5世紀後葉のものと思われる。

ピット列1の885~888ピットに切られている。

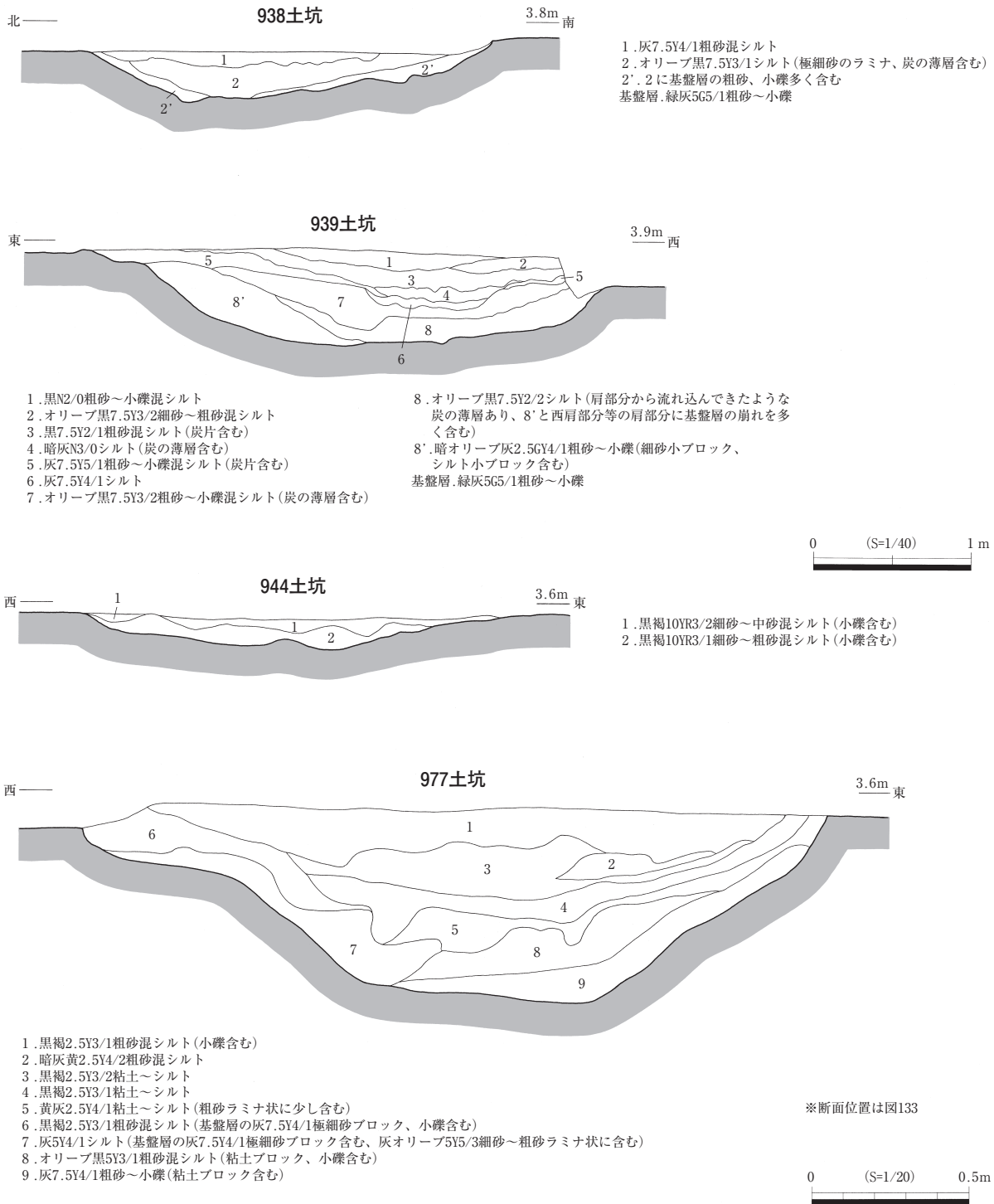


図146 938・939・944・977土坑 断面図

第7節 第15面（第15層）

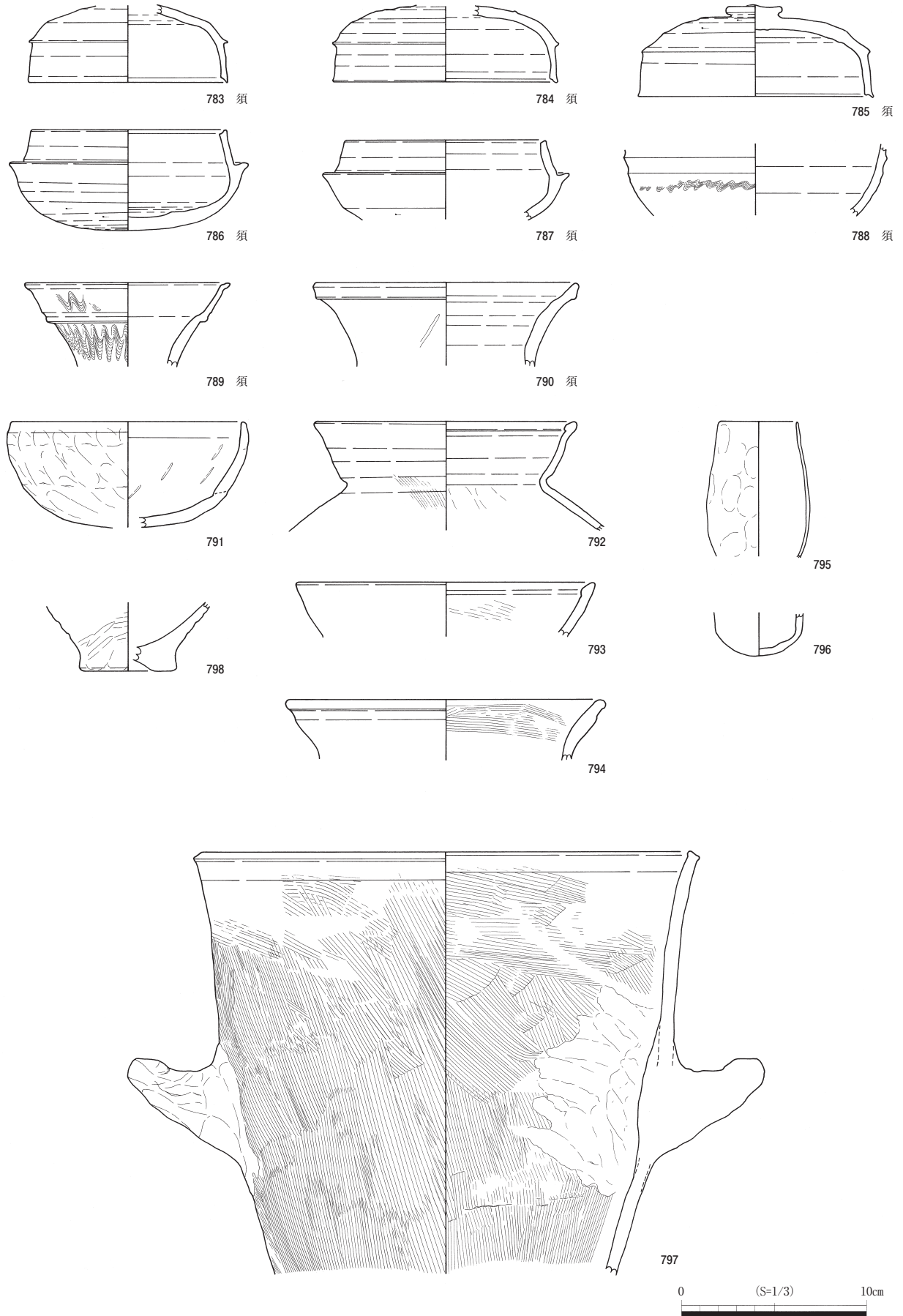


图147 939土坑 出土遺物

940土坑 (図148～153 カラー図版6 図版32・33・78～82)

調査区中央部東寄りに位置する。東西約5.0m、南北約4.3m、深さ約0.8mである。断面掘鉢状を呈し、中央南西寄りの部分が深くなる。最上層（1層）は土坑埋没後の窪みに堆積したものと思われる。中央南西寄り部分を中心に堆積している上層（2層）～下層（3層）は、有機物をラミナ状に含む粘土で、土坑の最終埋没層である。最下層（4～14層）は、粗砂を含むシルトである。

最上層からは須恵器杯蓋（809）、牛歯（図版82-11）等が出土している。図化できなかった小片に7世紀前葉のものがみられる。

上層からは土師器壺（834）・甕（839）、須恵器杯身（810・814・815・819）・杯蓋（804・808）・高杯（825）・甌（828）、牛または馬歯等が出土している。須恵器甌（828）は、上面に切り込みのある把手を持ち、把手より少し上位に沈線を巡らす。内面は当て具痕を、外面は格子風タタキ目をナデ消して仕上げる。下層からは土師器高杯（837）・羽釜（841）・把手（833）、須恵器杯身（813・816・820）・杯蓋（802・805）・高杯（822・823）、木製品（849・851）、自然木、イネ穎、モモ核、ヒョウタン類種子等が出土している。上～下層出土遺物は、6世紀末のものである。

最下層からは、土師器高杯（835・838）・羽釜（843）・把手（830～832）、須恵器杯身（811）・杯蓋（799・800・803・806）・高杯（821・824）・甕（826・827）、敲き石（844）、木製鞍（852）、木製品（848）、自然木、馬骨（図版82-4・5）等が出土している。6世紀中葉のものである。

出土層位不明のものには、上記以外に土師器甌、須恵器甌、製塩土器、サヌカイト剥片もある。須恵器甌（829）は、平底多孔式の底部で、内面は回転ナデを施すが、外面は不調整である。製塩土器は、小片で図化できなかったが、外面にタタキを施すもの、内面に貝殻条痕を持つもの等がみられる。

須恵器杯身の底部内面中央、杯蓋の天井部内面中央には、回転ナデの後、一定方向の静止ナデを施す。杯蓋（806）、杯身または杯蓋片（812）は、内面に当て具痕を有す。

木製鞍（852）は、馬挟が26.8cmと比較的狭く、前輪と考えられる。樹種はツバキ属で第4章に詳細を記載している。方形の孔が一方の面には左右1箇所ずつ2箇所に、もう一方の面には左右3箇所ずつ6箇所に穿たれている。左右一対の方形孔は鞍を通すためのものと思われ、その面が前面と考えられる。

外縁は玉縁状である。面から立ち上がる部分にごく僅かなV字状の窪みが、その周囲には複数の極めて細い筋からなる擦過痕が認められる。縁を作り出した際の加工痕と思われる。爪先は欠損しており、本来の形状は後面の向かって左側でのみ確認できる。平坦面を有す。後面に比べて前面の方が膨らみを有し、さらに縁から2.5cm程度の範囲が面的に削られ、中央部分の膨らみが強調されている。この僅かに膨らむ中央部分が磯、周囲が海にあたるかと思われる。

馬膚には溝状の挟り込みを持つ。挟り込み内部は、粗い工具痕が残り、粗雑である。馬膚は、溝を挟んで前面側、後面側ともに平滑であるが、後面側の方が幅広く、平坦面を有す。前面側は向かって右半分と左端部分を、後面側は向かって右端部を欠損する。洲浜形は、溝状の挟り込みを挟んで前面、後面にあり、後面の左右両端には三角形の突起を持つ。外縁から馬膚、洲浜形までの長さが前面側の方が後面側よりも若干短く、後面側の馬膚の平坦面はごく僅かに傾斜し、前面側が低くなっている。

前面の方形孔は、洲浜形の左右にある。1辺1.3cmで、馬膚の溝状の挟り込みに貫通し、挟り込み内に粗い工具痕を残す。下辺の角が他辺に比べて鈍くなっており、紐等が擦れた痕跡の可能性はある。

後面の方形孔は、馬膚に沿って、洲浜形の突起の外側から爪先との角までに3箇所、左右合計6箇所にある。1辺1.3～1.5cmで、馬膚の溝状の挟り込みに貫通し、挟り込み内に粗い工具痕を残す。前面の

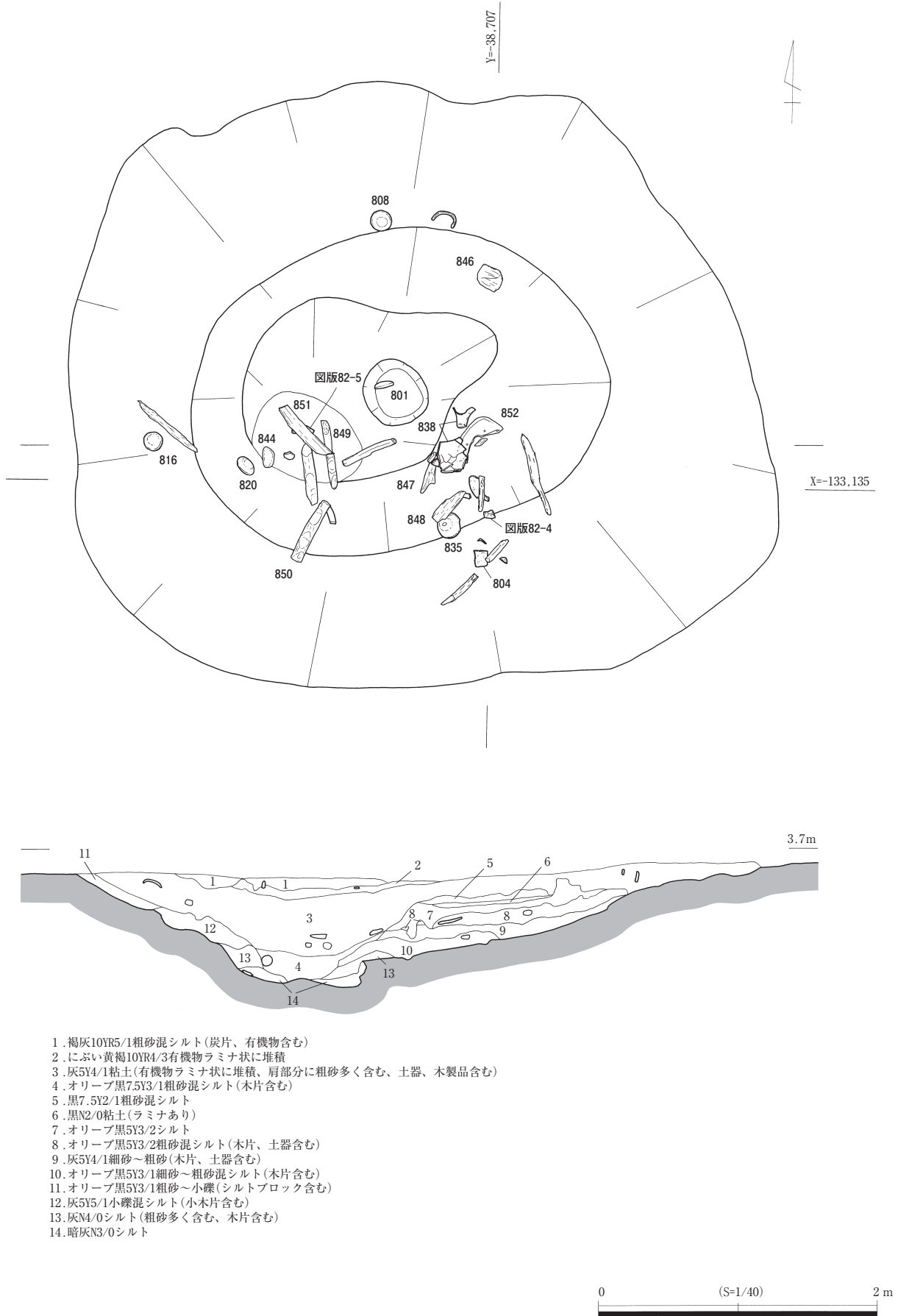


図148 940土坑 平面・断面図

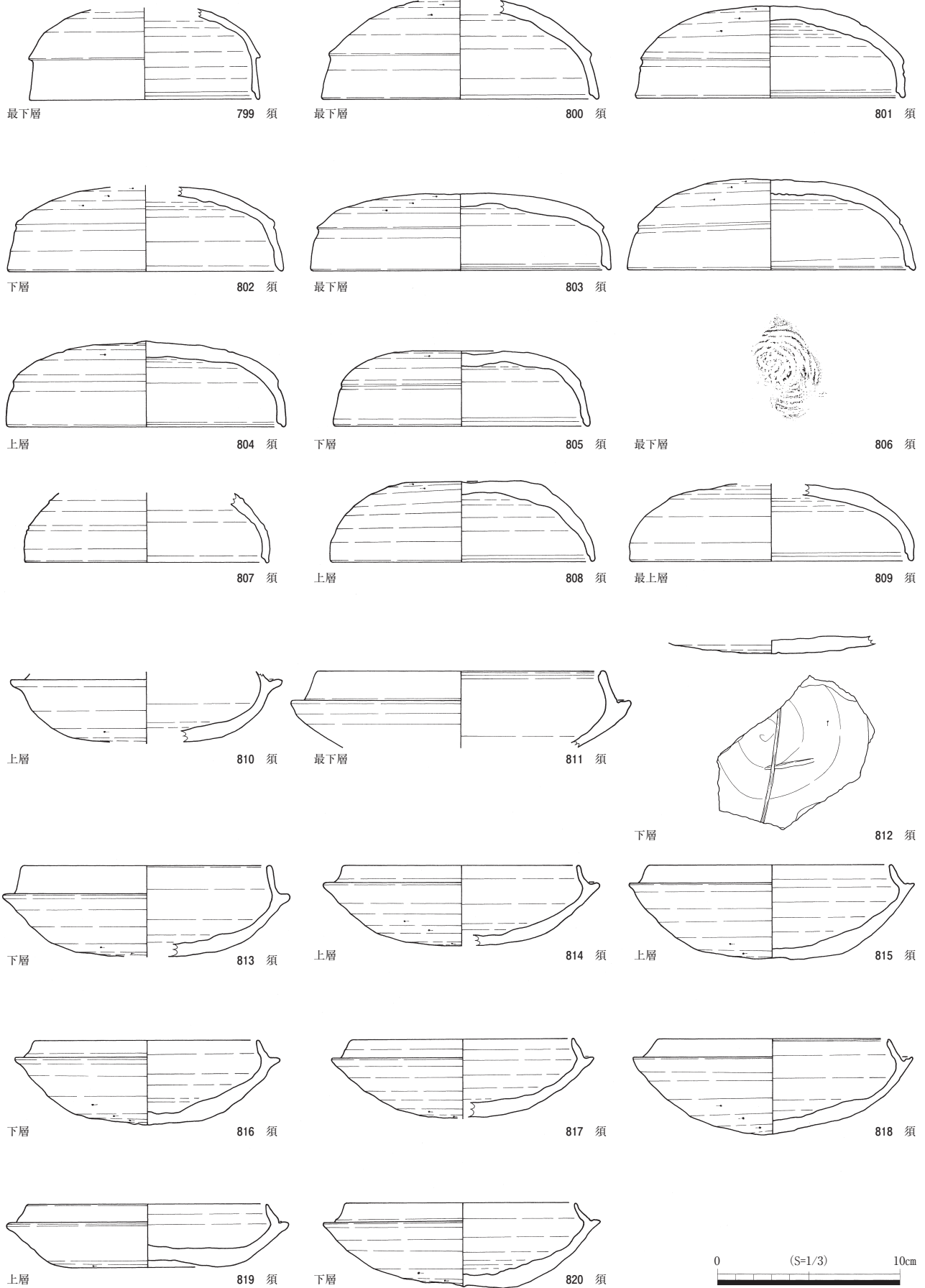


图149 940土坑 出土遺物 (1)

第7節 第15面（第15層）

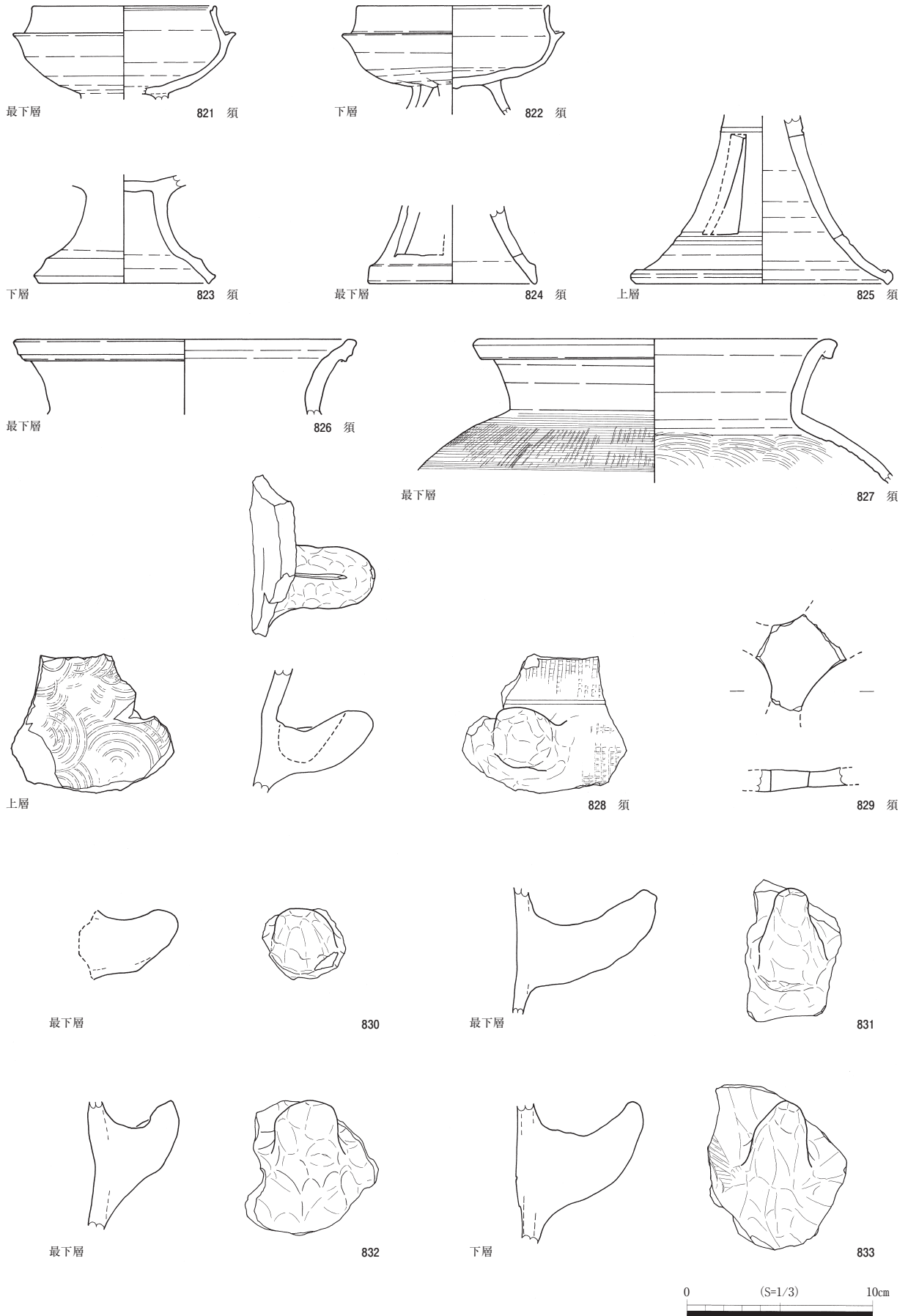


图150 940土坑 出土遺物（2）

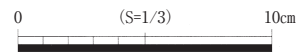
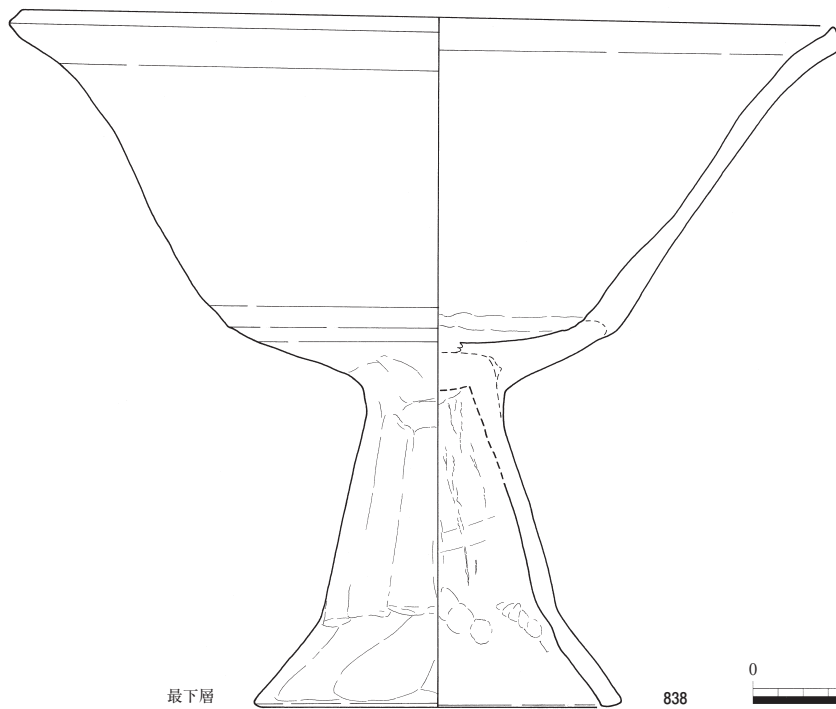
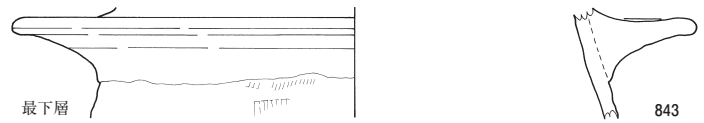
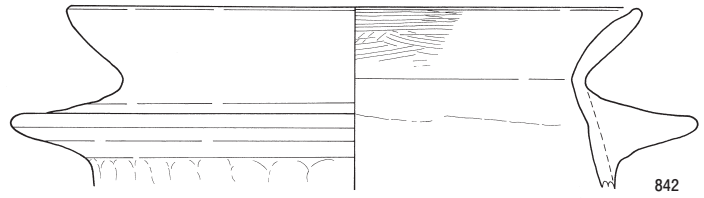
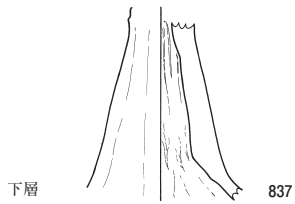
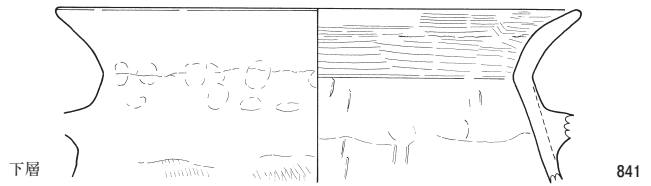
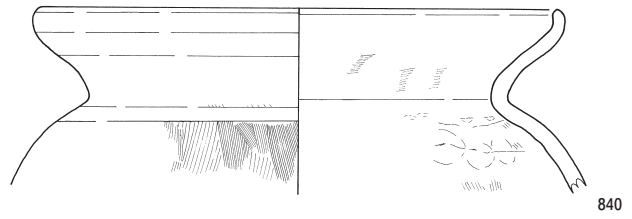
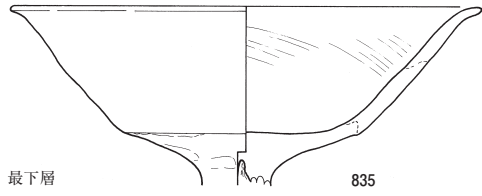
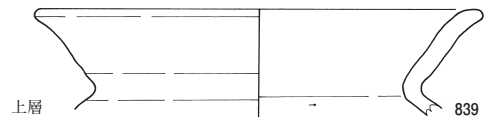
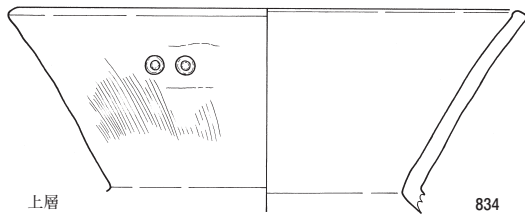


图151 940土坑 出土遺物 (3)

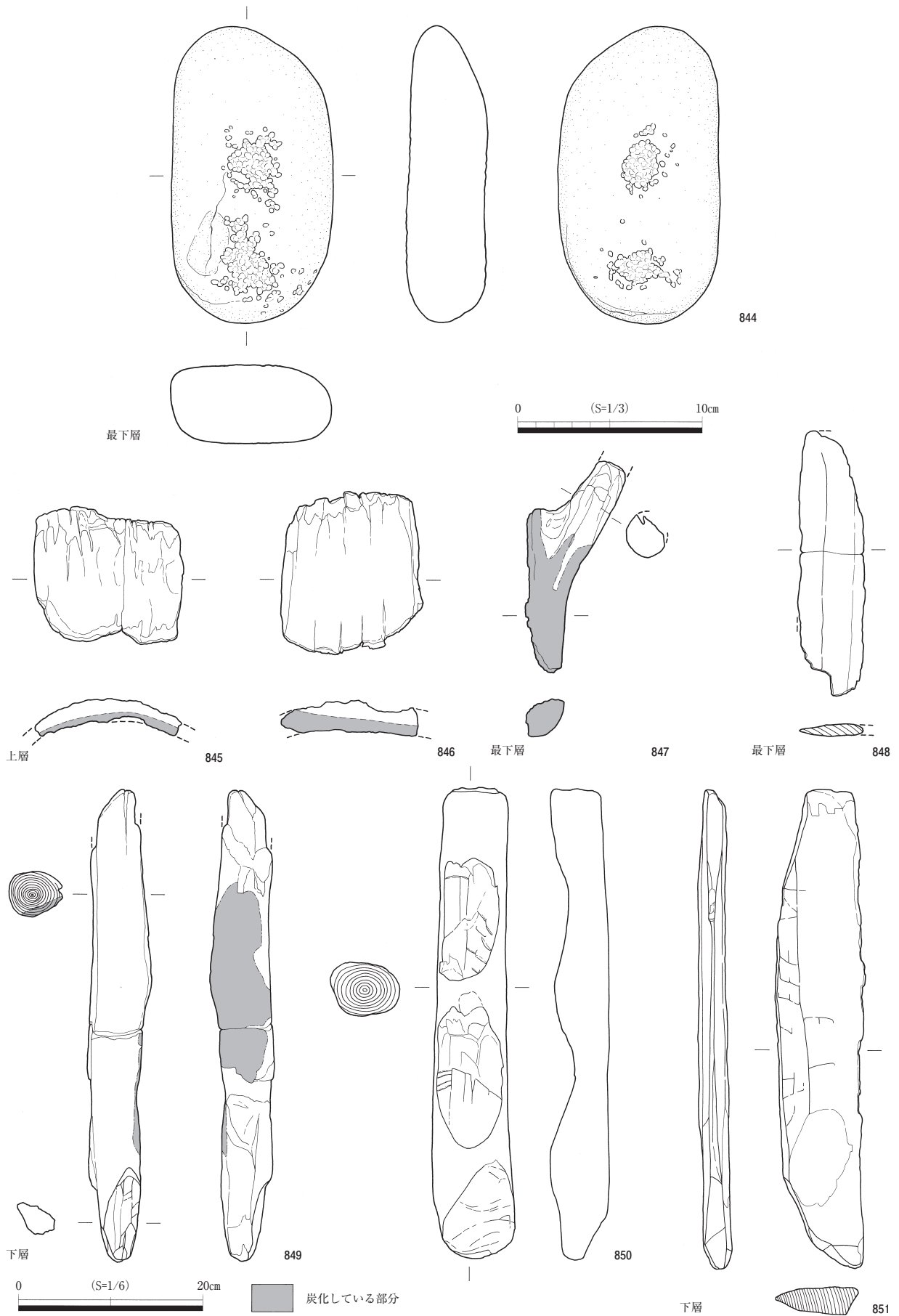


図152 940土坑 出土遺物（4）(1/6=845~851)

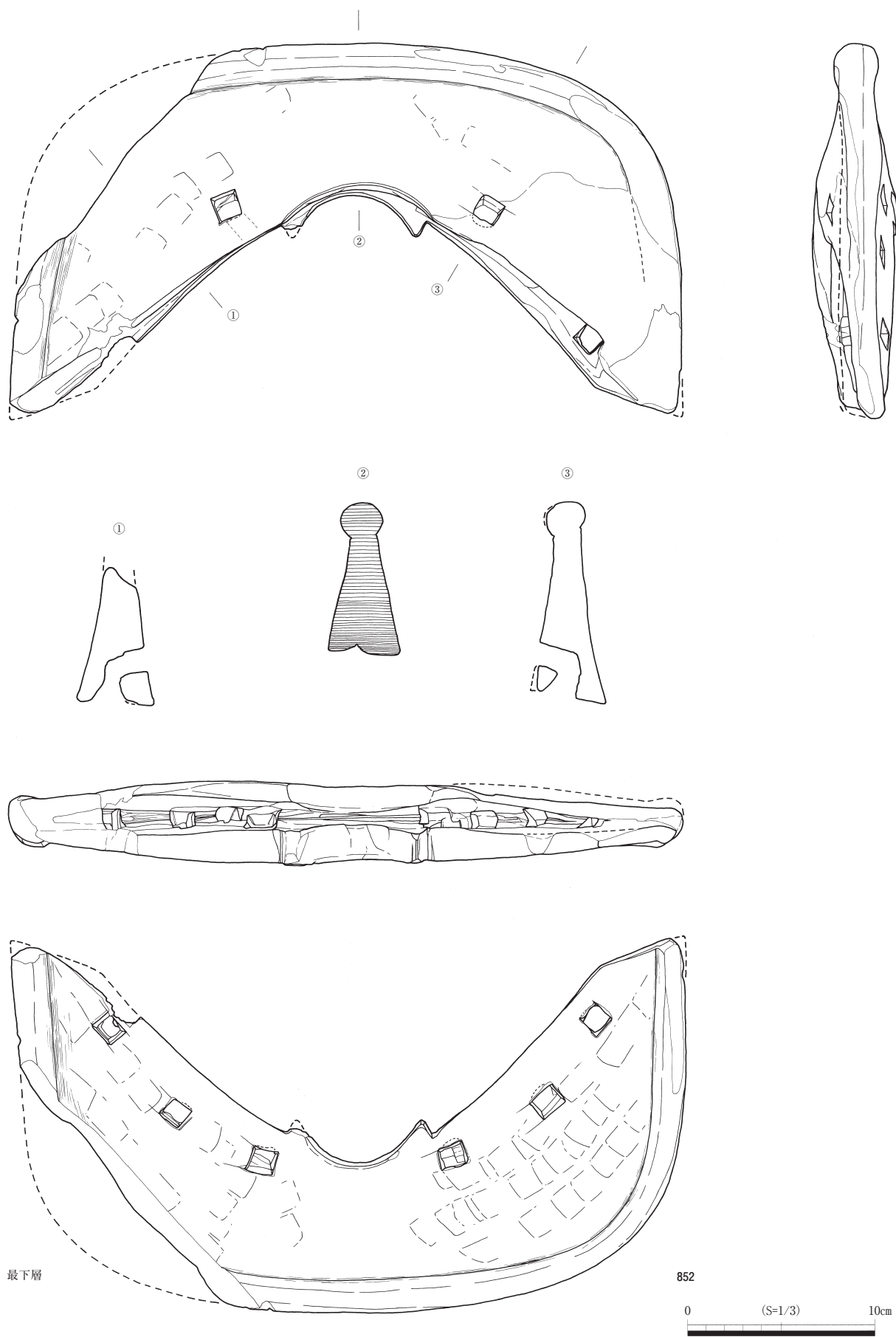


图153 940土坑 出土遺物 (5)

方形孔も含め、上下辺の延長に刃物によるものかと思われる細い筋が認められる。下辺の角が他辺に比べて鈍くなっており、紐等が擦れた痕跡の可能性はある。3箇所孔の馬膚からの距離は、内側1.1～1.3cm、中央1.8～2.0cm、外側1.0～1.1cmで、左右でほぼ同じである。また、内側と中央の孔のみ上下辺の位置を互いの延長上に揃えていることも、左右で共通している。ただし、孔の間隔は、内側－中央間は右側で4.0cm、左側で4.4cm、中央－外側間は右側で4.3cm、左側で3.5cmであり、左右で異なっている。

後面側の洲浜形左右に突起があり、馬膚が平坦に仕上げられていることから、ここに居木を組み合わせていたと考えられる。後面の方形孔はこれを固定するためのものと思われ、孔下辺の角の観察から、紐等を用いていたと推測する。1枚板の居木を組み合わせていたとすれば、3箇所孔の馬膚からの距離が一定でないこと、強度が求められる箇所であること等から、居木に段を設けて垂直面を前輪後面にあてていたことも考えられる。居木の具体的な形状は不明であるが、3箇所孔の位置関係は、前輪と組み合う部分の居木の形状を考える上で重要である。

977土坑を切っている。

944土坑（図133・146）

調査区中央部東寄りに位置する。東西約1.4m、南北約1.2mの楕円形で、深さ約0.1mである。埋土は、シルトである。遺物は、土師器、須恵器の小片が少量出土している。946溝を切っている。

975土坑（図133・140）

調査区東部に位置する。東西約0.9m、南北約0.6mの隅丸長方形で、深さ約0.2mである。埋土は、粘土～シルトである。遺物は、出土していない。

977土坑（図133・145・146 図版77）

調査区中央部東寄りに位置する。東西約2.4m、南北約2.3m、深さ約0.6mである。埋土は粘土～シルトで、肩部から底部にかけて基盤層が崩れたものと思われる極細砂が認められる。

遺物は、土師器、須恵器杯（775・913）・高杯・甕（777）の小片が少量出土している。須恵器高杯は、短脚で透しを有す。須恵器杯身（775）は、6世紀前葉のものである。940土坑に切られている。

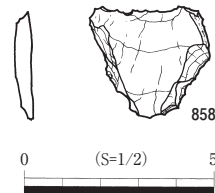
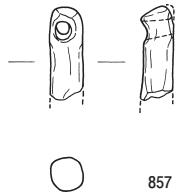
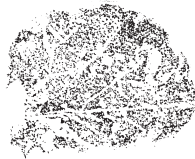
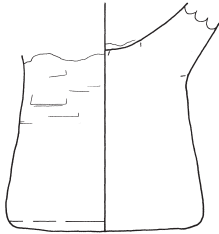
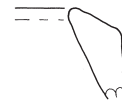
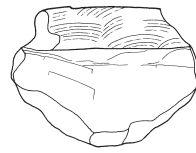
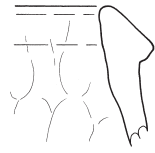
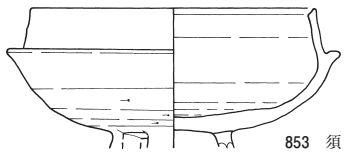
1023土坑（図140・141・145 図版77）

調査区中央部西寄りに位置する。南北約0.9m、東西約0.5mの楕円形で、深さ約0.1mである。埋土は、粗砂混じりシルトである。遺物は、須恵器杯蓋・甕（778）、製塩土器が出土している。製塩土器片は、外面にタタキを施す。須恵器杯蓋片は口径が比較的大きく、6世紀代のものと思われる。

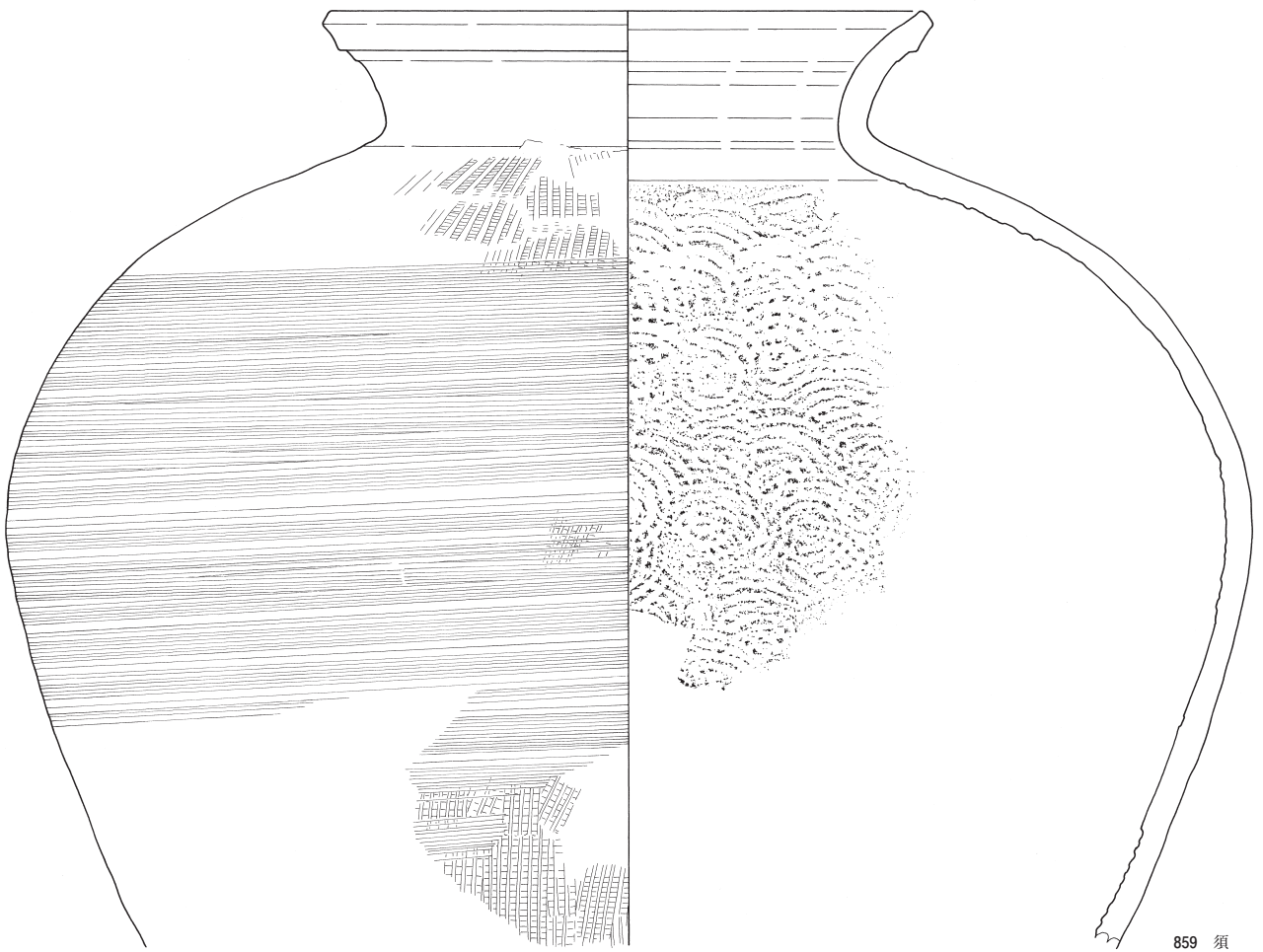
第12層出土遺物（図154 図版81） 第15層出土遺物（図155～157 図版81・82）

第15層直上の作土層である第12層からは、本来第15層に含まれていたと思われる遺物が多く出土している。土師器台付鉢形土器（856）は、扁平な底部外面に木の葉の圧痕が認められる。土師器竈（854・855）は、生駒西麓系胎土で、口縁部に同心円紋を有す。ほかに、弥生土器（915）、須恵器杯身または杯蓋（917～919・923～925）・高杯（853）・甕（859）、土師器（922）、土師質土錘（857）、サヌカイト剥片（858）等がある。

第15層からは、弥生土器、土師器壺（882）・甕（883）・竈（885～888）、須恵器杯身（862～868）・杯蓋（860・861）・高杯（872）・蓋（870・871）・提瓶（914）・甕（874）・器台（875）・甕（876～881）、敲き石（889）、サヌカイト剥片、馬歯（図版82-6）等が出土している。土師器竈片（885～887）は、生駒西麓系胎土で、口縁部に同心円紋を持つ。須恵器片（876～880）は、外面にきわめて浅いらせん状沈線を有す。弥生時代～7世紀代のものがみられる。



0 (S=1/2) 5 cm



0 (S=1/3) 10cm

図154 第12層 出土遺物 (1/2=858)

第7節 第15面（第15層）

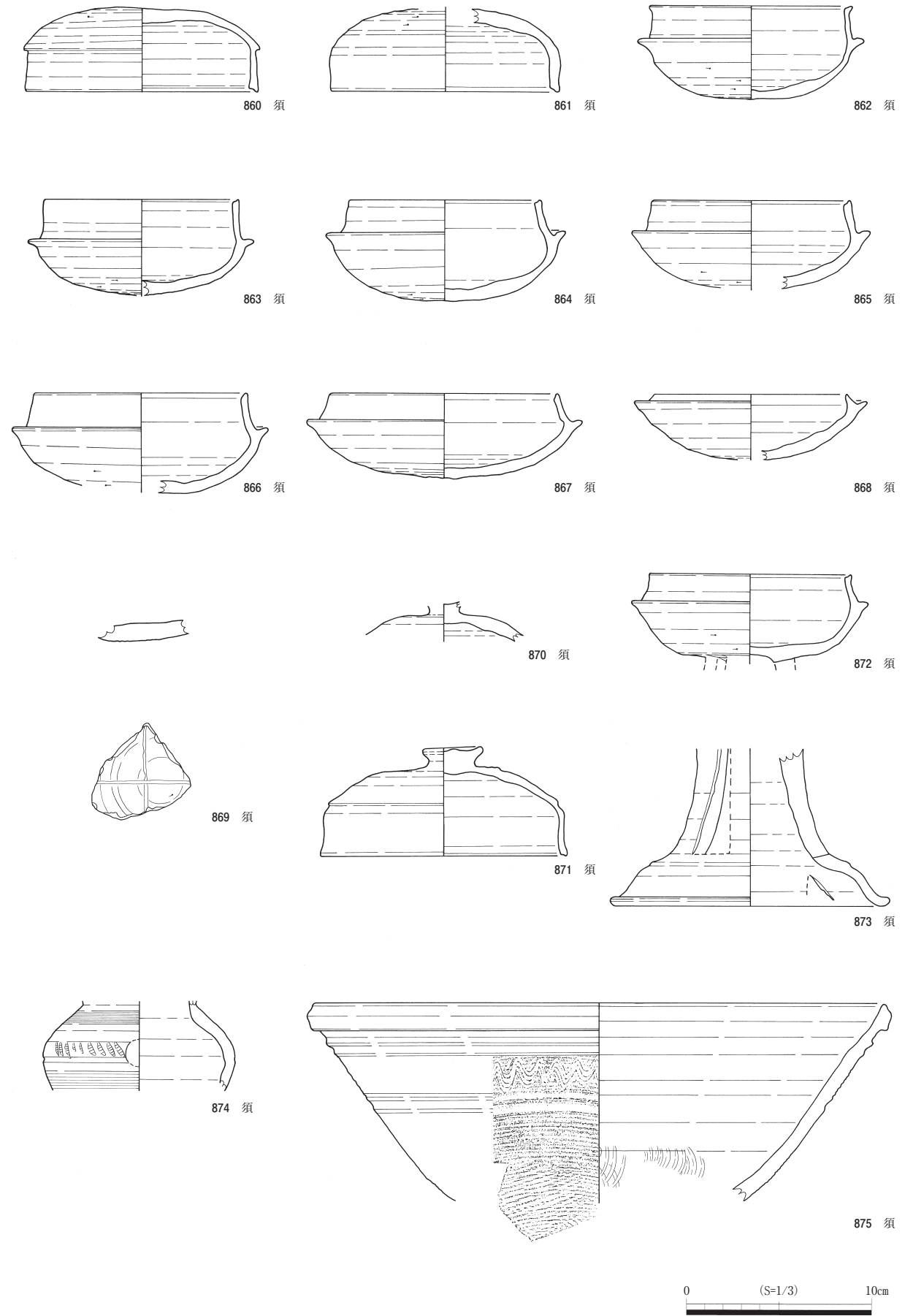


图155 第15層 出土遺物（1）

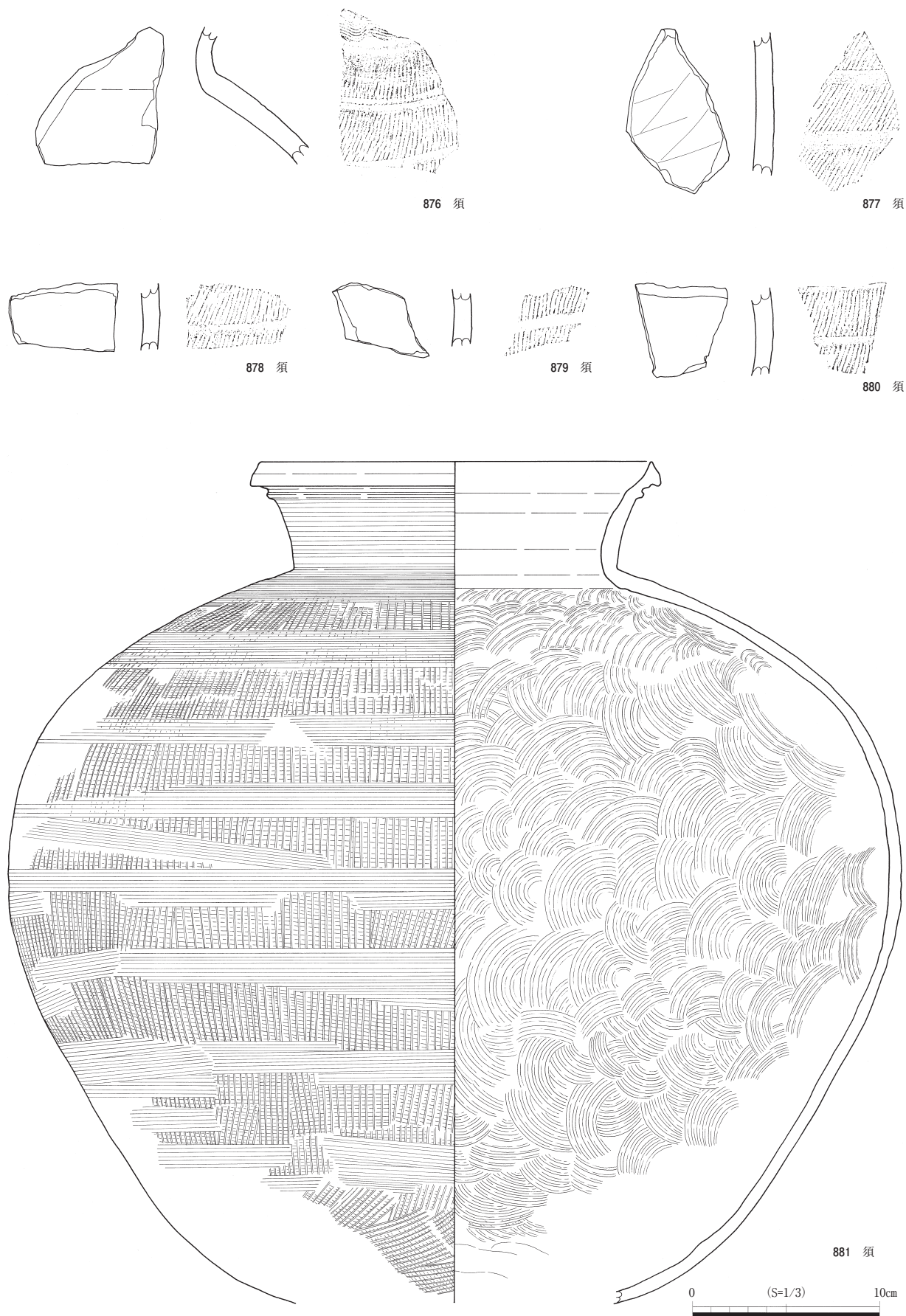


図156 第15層 出土遺物（2）

第7節 第15面（第15層）



图157 第15層 出土遺物（3）

第4章 自然科学による同定

第1節 木製品の樹種同定および種実同定

1 建築部材・木製品の樹種

1-1. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

1-2. 結果

建築部材の同定結果を表1、木製品の同定結果を表2に示す。なお、建築部材の柱27は、道管が認められ、広葉樹であることは明らかであるが、遺存状態が悪く道管配列などが観察できないため、種類は不明である。また、柱11は樹皮（師部）のみで、木部細胞が認められず、種類の同定はできなかった。

1-3. 考察

（1）建築部材の木材利用

今回樹種同定を行った試料の遺構面、種類別の構成を表3に示す。各遺構面を通じて、13種類の樹種が同定された。同定された種類は、針葉樹がマツ属複維管束亜属、モミ属、スギ、ヒノキ、コウヤマキの5種類、広葉樹がヤナギ属、ハンノキ亜属、クリ、ツブラジイ、エノキ属、サカキ、ウメ、センダン8種類である。総数49点のうち、針葉樹が13点、広葉樹35点、不明（樹皮）1点であり、種類、量ともに広葉樹材が多用されている傾向が特徴として認識される。

遺構面別にみると、第5面の柱材では、28試料から8種類の樹種が確認された。ハンノキ亜属、クリ、複維管束亜属が比較的多く、21点と約2/3を占める。他にヒノキ、ヤナギ属、エノキ属、ウメ、センダンが認められるが、いずれも各1点であった。また、礎板1点は針葉樹のスギに同定された。建物別にみると、柱材6点について同定を実施した建物10では、ハンノキ亜属（4点）と複維管束亜属（2点）の2種類が利用される。一方、建物18では4点中3点がクリ、1点がウメである。建物13は4点中2点が複維管束亜属で、他にクリと樹皮（種類不明）が各1点となる。また、柱材3点について同定を実施した建物12では、ハンノキ亜属、クリ、センダンが各1点、建物14ではヒノキ、ヤナギ属、ハンノキ亜属が各1点であり、建物によって種類構成が異なっている。強度、耐朽性が高いクリを多用していることから、強度や耐朽性を考慮した木材選択が窺えるが、クリほどの耐朽性が無いハンノキ亜属もクリと同様に多用されている。また、全体的に強度の高い樹種が多いが、針葉樹も混在し、中には強度、保存性の低いヤナギ属が混じるなど、特定の樹種を選択的に利用している状況ではない。

第7面試料については、19試料から8種類の樹種が確認され、点数が少ない割には種類構成が多彩である。確認された樹種をみると、柱材では複維管束亜属、モミ属、ヒノキ、クリ、ツブラジイが認めら

第1節 木製品の樹種同定および種実同定

れた。また、礎板は、コウヤマキとスギとサカキであった。遺構別にみると、柱材では、建物と柱列でクリの利用が多いのに対し、建物等に復元されていない柱穴から出土した試料は複雑管束亜属、モミ属、ヒノキ、クリで、樹種が雑多になり、針葉樹が多いという特徴がある。柱材に認められた樹種は、第5面で確認された樹種と共通点が多いが、第5面で多かったハンノキ亜属が第7面の柱材では認められないなど、多少異なっている傾向も認められる。また、礎板に利用されていた樹種は第5面、第7面とも

表1 柱、杭、礎板の樹種同定結果

	遺構面	地区	建物・柱列	遺構番号	樹種	備考
柱1	第5面 西半	L8-d5	建物10	434柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱2	第5面 西半	L8-d4	建物10	485柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱3	第5面 西半	L8-d5	建物10	488柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱4	第5面 西半	L8-d5	建物10	489柱穴	マツ属複雑管束亜属	
柱5	第5面 西半	L8-d4	建物10	520柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱6	第5面 西半	L8-d4	建物10	521柱穴	マツ属複雑管束亜属	
柱7	第5面 西半	L8-d4	建物11	380柱穴	クリ	
柱8	第5面 西半	L8-d4	建物12	390柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱9	第5面 西半	L8-d4	建物12	459柱穴	センダン	
柱10	第5面 西半	L8-d3	建物12	548柱穴	クリ	
柱11	第5面 西半	L8-d3	建物13	375柱穴	樹皮	
柱12	第5面 西半	L8-d4	建物13	496柱穴	マツ属複雑管束亜属	図44・図版53-240
柱13	第5面 西半	L8-d3	建物13	512柱穴	マツ属複雑管束亜属	
柱14	第5面 西半	L8-d3・4	建物13	771柱穴	クリ	
柱15	第5面 西半	L8-d4	建物14	316柱穴	ヒノキ	
柱16	第5面 西半	L8-d3	建物14	505柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱17	第5面 西半	L8-d3・4	建物14	769柱穴	ヤナギ属	
柱18	第5面 西半	L8-d3	建物15	344柱穴	クリ	
柱19	第5面 西半	L8-d4	建物18	469柱穴	クリ	
柱20	第5面 西半	L8-d4	建物18	470柱穴	クリ	
柱21	第5面 西半	L8-d4	建物18	478柱穴	ウメ	
柱22	第5面 西半	L8-d4	建物18	479柱穴	クリ	
柱23	第5面 西半	L8-d5	柱列5	519柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱24	第5面 西半	L8-d3	柱列7	328柱穴	エノキ属	
柱25	第5面 西半	L8-e3		280柱穴	ハンノキ属ハンノキ亜属	
柱26	第5面 西半	L8-d4		476柱穴	クリ	
柱27	第5面 西半	L8-d3		514柱穴	広葉樹	
杭1	第5面 西半	L8-d3		336ピット	クリ	
礎板1	第5面 東半	L8-e1	建物21	133柱穴	スギ	図65-312
柱28	第7面	L8-d1	建物4	723柱穴	ツブラジイ	
柱29	第7面	L7-d9	建物6	764柱穴	クリ	
柱30	第7面	L7-d10	建物7	634柱穴	クリ	
柱31	第7面	L7-d10	建物7	648柱穴	クリ	
柱32	第7面	L7-d9	建物19	74柱穴	クリ	
柱33	第7面	L7-d10	建物19	101柱穴	クリ	
柱34	第7面	L8-e1	柱列2	736柱穴	クリ	
柱35	第7面	L7-d10	柱列3	664柱穴	クリ	
柱36	第7面	L7-e10	柱列3	681柱穴	クリ	
柱37	第7面	L7-e9		617柱穴	マツ属複雑管束亜属	
柱38	第7面	L7-e10		680柱穴	ヒノキ	
柱39	第7面	L8-e1		682柱穴	クリ	
柱40	第7面	L8-c2		833柱穴	モミ属	
礎板2	第7面	L8-e1	建物3	716柱穴	コウヤマキ	
礎板3	第7面	L7-d10	建物5	627柱穴	コウヤマキ	図106-556
礎板4	第7面	L7-d10	柱列3	674柱穴	スギ	図103・図版68-537
礎板5	第7面	L7-e10		675柱穴	サカキ	
杭2	第7面	L8-d1		705ピット	クリ	
杭3	第7面	L8-d1		706ピット	クリ	径約10cm
杭4	第10面	L7-d9		798ピット	マツ属複雑管束亜属	

表2 木製品の樹種同定結果

番号	図	図版	遺構面	遺構番号	種類	木取り	樹種
56	17		第5面	70溝 下層	用途不明	板目	ヒノキ
67	19	41	第5面	107溝 上層	折敷底板	柁目	ヒノキ
68	19	41	第5面	107溝 上層	指物か	板目	スギ
900		カラー4	第5面	107溝 上層	漆器椀か	横木地	オニグルミ
86	22	41	第5面	107溝 下層	円形底板	柁目	スギ
87	22	41・カラー4	第5面	107溝 下層	漆器椀	横木地板目取	ミズキ
88	22	41・カラー4	第5面	107溝 下層	漆器椀	横木地柁目取	ブナ属
120	28	45	第5面	450溝 上層	短刀柄	板目?	モクレン属
121	29	カラー5	第5面	450溝 上層	漆器椀	横木地柁目取	コナラ属コナラ亜属コナラ節
122	29	カラー5	第5面	450溝 上層	漆器椀	横木地柁目取	ケンボナシ属
123	29	46	第5面	450溝 上層 107溝 下層	折敷底板	柁目	スギ
124	29		第5面	450溝 上層	折敷底板か	柁目	スギ
125	29	46	第5面	450溝 上層	篋	板目	スギ
126	29	46	第5面	450溝 上層	底板か	板目	スギ
127	29	46	第5面	450溝 上層	釘付部材	四方柁	ヒノキ科
128	29	46	第5面	450溝 上層	用途不明	柁目	スギ
177	34		第5面	450溝 下層	漆器皿か	横木地板目取	クリ
178	34	カラー5	第5面	450溝 下層	漆器皿	横木地板目取	クリ
179	34	51	第5面	450溝 下層	呪符木簡	柁目	スギ
180	34		第5面	450溝 下層	折敷底板か	柁目	スギ
181	34		第5面	450溝 下層	折敷底板か	柁目	スギ
182	34		第5面	450溝 下層	折敷底板	柁目	ヒノキ科
183	34		第5面	450溝 下層	桶側板	板目	スギ
184	34	51	第5面	450溝 下層	円形底板	柁目	スギ
185	34		第5面	450溝 下層	用途不明	板目	スギ
186	35	カラー5	第5面	450溝 最下層	漆器椀	横木地板目取	ブナ属
189	35	51	第5面	450溝 最下層	折敷底板	柁目	ヒノキ
239	40	52	第5面	465溝 最下層	つちのこ	芯持丸木	バラ科ナシ亜科
244	52	54	第5面 西半	464井戸	折敷底板	柁目	ヒノキ
245	52	54	第5面 西半	464井戸	曲物側板	柁目	マツ属複雑管束亜属
245	52	54	第5面 西半	464井戸	曲物底板	板目	マツ属複雑管束亜属
246-1	52		第5面 西半	464井戸	桶側板(井戸枠)	板目	スギ
246-2	52	54	第5面 西半	464井戸	桶側板(井戸枠)	板目	スギ
311	65		第5面 東半	建物21 133柱穴	円形底板	柁目	スギ
318	67	カラー4	第5面 東半	103井戸	漆器椀	横木地板目取	トチノキ
319	67	59	第5面 東半	103井戸	曲物側板(井戸枠)	柁目	ヒノキ科
901		59	第5面 東半	103井戸	板材(井戸枠)	板目	スギ
902		59	第5面 東半	103井戸	板材(井戸枠)	板目	スギ
903		59	第5面 東半	103井戸	板材(井戸枠)	板目	スギ
904		59	第5面 東半	103井戸	板材(井戸枠)	板目	スギ
327-1	69		第5面 東半	568井戸	桶側板(井戸枠)	板目	スギ
327-2	69	60	第5面 東半	568井戸	桶側板(井戸枠)	板目	スギ
328-1	70	60	第5面 東半	568井戸	桶側板(井戸枠)	板目	スギ
328-2	70		第5面 東半	568井戸	桶側板(井戸枠)	板目	スギ
337	72		第5面 東半	584井戸	円形底板	柁目	ヒノキ科
564	109		第7面	721柱穴	部材	板目	スギ
642	120	69	第7面	831ピット	用途不明	柁目	スギ
845	152		第15面	940土坑	用途不明	板目	クスノキ
846	152		第15面	940土坑	用途不明	板目	クスノキ
847	152		第15面	940土坑	用途不明	芯持材(二股材)	コナラ属コナラ亜属クスギ節
848	152		第15面	940土坑	用途不明	追柁	コナラ属アカガシ亜属
849	152		第15面	940土坑	用途不明	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属
850	152		第15面	940土坑	用途不明	芯持丸木	シャシャンボ
851	152		第15面	940土坑	用途不明	追柁	コナラ属アカガシ亜属
852	153	80・カラー6	第15面	940土坑	鞍前輪	柁目(枝幹)	ツバキ属
738	132	72	第11層		用途不明	柁目	ヒノキ科

表3 建築部材の種類構成

分類群\遺構面	第5面			第7面							合計	
	建物		その他	建物		柱列		その他				
	柱	礎板	柱	柱	礎板	柱	礎板	柱	礎板	杭		
複維管束亜属	4								1			5
モミ属									1			1
スギ		1						1				2
コウヤマキ					2							2
ヒノキ	1								1			2
ヤナギ属	1											1
ハンノキ亜属	6		2									8
クリ	7		2	5		3			1		2	20
ツブラジイ				1								1
エノキ属			1									1
サカキ										1		1
ウメ	1											1
センダン	1											1
広葉樹			1									1
樹皮	1											1
合計	22	1	6	6	2	3	1	4	1	2		48

針葉樹が多いが、これら針葉樹の木材は、割裂性が高く、板への加工が容易で耐水性もある。柱材に広葉樹材が多用されていることは対照的であり、礎板には加工性や耐水性を考慮した樹種の選択が行われている可能性がある。

第5面と第7面の柱材を中心とした樹種構成は、クリやハンノキ亜属など比較的多く利用される樹種もあるが、試料数の割に種類数が多く、特定の樹種を選択的に利用している状況ではなかった。柱材では入手し易い、強度の高い木材を入手、利用している可能性が考えられる。また、礎板は、分割しやすく耐水性も高い針葉樹のスギやコウヤマキを選択していたことが推定される。なお、第5面で認められたウメは栽培種であることから、遺跡周辺でウメが栽培されていたことが推定される。

(2) 木製品の木材利用

木製品は、第5面を中心に、第7面、第15面、第11層から出土した合計56点について同定を実施し、針葉樹4種類、広葉樹14種類が確認された。各遺構面、種類別の構成を表4に示す。

第5面では、つちのこ、篋、曲物、底板、桶、指物か、漆器類、折敷、呪符木簡、短刀の柄、井戸枠、用途不明品があり、板状の加工を施す製品が多い。45点中24点がスギであり、複維管束亜属、ヒノキ、ヒノキ科を含めると、34点が針葉樹材であり、スギを中心とした針葉樹が多用されていたことが推定される。

一方、漆器類は全て広葉樹であり、皿が2点ともクリ、椀が7点の資料にオニグルミ、ブナ属、コナラ節、トチノキ、ミズキ、ケンポナシ属の6種類が認められ、点数に対して種類数が多い。材質も重硬な樹種(コナラ節・クリ)から比較的加工が容易な樹種(トチノキ・ブナ属)まであり、利用樹種は多彩である。このうち、ブナ属とトチノキは漆器容器の本地としてよく利用される樹種で、大阪府内でも多くの出土例が知られており、大量に供給されていたことが推定される(林・島地,1987;東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会,1997,2000;パリノ・サーヴェイ株式会社,2007など)。また、クリやコナラ節も点数は少ないが、西ノ辻遺跡などで中世の漆器椀に確認された例が知られている(東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会,1995)。一方、オニグルミ、ミズキ、ケンポナシ属は、大阪府内で漆器椀に認められた例は知られておらず、ブナ属やトチノキのように大量に利用される樹種ではなかったと考えられる。なお、今回の漆器椀・皿は、木取の観察で横木地柁目取(椀・皿の底面が

表4 木製品の遺構面別種類構成

遺構面・種類\樹種		複 維 管 束 重 属	ス ギ	ヒ ノ キ	ヒ ノ キ 科	オ ニ グ ル ミ	ブ ナ 属	ク ヌ ギ 節	コ ナ ラ 節	ア カ ガ シ 重 属	ク リ	ク ス ノ キ	モ ク レ ン 属	ツ バ キ 属	ナ シ 重 科	ト チ ノ キ	ミ ズ キ	シ ヤ シ ヤ ン ボ	ケ ン ボ ナ シ 属	合 計	
第5面	つちのこ														1					1	
	篋		1																	1	
	曲物側板	1																		1	
	曲物底板	1																		1	
	円形底板		3		1															4	
	底板か		1																	1	
	桶側板		1																	1	
	指物か		1																	1	
	漆器皿										2									2	
	漆器椀					1	2		1								1	1		1	7
	折敷底板		1	3	1																5
	折敷底板か		3																		3
	呪符木筒		1																		1
	短刀柄												1								1
	曲物側板(井戸枠)				1																1
	板材(井戸枠)		4																		4
	釘付部材				1																1
桶側板(井戸枠)		6																		6	
用途不明		2	1																	3	
第7面	部材		1																	1	
	用途不明		1																	1	
第15面	鞍前輪												1							1	
	用途不明							1		3		2						1		7	
第11層	用途不明				1															1	
合 計		2	26	4	5	1	2	1	1	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1	56	

桁目になる木取)と横木地板目取(椀・皿の底面が板目になる木取)の2種類が認められた。器種、樹種を比較すると、クりに同定された皿および皿かの2点はいずれも横木地板目取である。椀は、トチノキとミズキが横木地板目取、ケンボナシ属が横木地桁目取、ブナ属は桁目取と板目取が各1点であった。横木地桁目取は、輪切りにした木材をミカン割状等に分割し、そこから荒型を製作する。一方、横木地板目取は丸太の表面に椀、皿を伏せた形で荒型を製作する。現時点では木取と樹種との関係については資料が少なく詳細は不明であり、今後資料を蓄積した上で検証する必要がある。

つちのこは、重硬で強度が高いナシ重科の芯持丸木が利用されている。大阪府内で中世の同製品について樹種を明らかにした資料では、西ノ辻遺跡でアカガシ重属、三日市遺跡でツバキ属が確認された例があり、樹種は異なるが同様に重硬な材質の木材が選択されていたことが推定される(山口,1988;東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会,1995)。

刀の柄は、軽く均質で加工が容易なモクレン属の木材が利用されている。中世の刀の鞘や柄に利用された木材を対象とした調査事例は大阪府内にほとんど無いため、木材利用の傾向は不明である。なお、刀の柄と鞘は同一材から分割して作るのが普通である。江戸時代の寛政13(1801)年に編纂された「万金産業袋」の中には、「刀脇差ともに、鞘の下地はみな厚朴(ホオノキ)なり」と記され、その理由として木材に油脂が少なく、磁石を隔てる効果があることを挙げた上で、古来より利用されてきたとの記述があり、今回の結果とも調和的である。

第7面では、部材、用途不明品がある。スギで、第5面と同様の木材利用が推定される。

第1節 木製品の樹種同定および種実同定

第15面では、鞍と用途不明品がある。鞍は、前輪部分であり、樹種は、重硬で強度の高いツバキ属であった。前輪は、内側の曲線に沿って繊維も湾曲しており、幹と枝分かれ部分や根株に近い部位を利用している可能性がある。一方、用途不明品は、芯持丸木や板状の製品が含まれるが、樹種は全て広葉樹で、針葉樹は1点も認められない。確認された樹種は、クヌギ節、アカガシ亜属、クスノキ、シャシャンボであり、暖温帯に生育し、重硬で強度の高い材質を有する種類が多い。用途が不明であるが、強度を有する部位、用途に利用された可能性がある。

2 種実遺体同定

2-1. 分析方法

種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数える。分析後は、試料を種類毎に容器に入れて返却する。水浸試料は70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

2-2. 結果

結果を表5に示す。木本4分類群（アカガシ亜属、ウメ、モモ、カキノキ属?）15個、草本5分類群（イネ、イネ科、ソバ、タデ属、ヒョウタン類）51個、計66個の種実が同定された。

表5 種実同定結果

登録番号	遺構面	地区	遺構番号	分類群	部位	状態	個数	備考	
1	339 第5面	L8-d2	107溝 下層	アカガシ亜属	殻斗	破片	1		
2	370 第5面	L8-d2	107溝 下層	カキノキ属?	種子?	完形	1		
3	2173 第5面	L8-d2	107溝 下層	モモ	核	完形	1	表面果皮付着	
					核	破片	1		
4	2196 第5面	L8-d2	450溝 最下層	アカガシ亜属	殻斗	破片	1	欠損部あり	
					ウメ	核	完形		3
						核	破片		2
					ヒョウタン類?	果実?	破片		1
5	1612 第5面 東半	L7-d9・10	568井戸 下段桶枠内	イネ	穎	完形	1		
					穎	破片	5		
					イネ科	果実	破片		1
					ソバ	果実	完形		1
					タデ属	果実	破片		2
6	1796 第15面	L8-d3	923土坑 上層	モモ	核	破片	3		
					核	破片	2		
7	2197 第15面	L8-d1	940土坑 下層	モモ	核	破片	2		
					ヒョウタン類	種子	完形		1
8	2034 第15面	L8-d1	940土坑 下層	イネ	穎	完形	13		
					穎	破片	26		果実序柄3個

2-3. 考察

ウメ、モモ、イネ、ソバ、ヒョウタン類は、古くより大陸より渡来した栽培種とされる（南木,1991）。栽培植物を除いた分類群は、木本のアカガシ亜属、カキノキ属?、草本のイネ科、タデ属が確認された。常緑高木のアカガシ亜属は、本遺跡周辺域の照葉樹林に生育していたものに由来すると考えられる。また、堅果が生食可能な種（イチイガシ）や、アク抜きすれば食用可能な種（イチイガシ以外）が含まれることから、利用の可能性がある。常緑または落葉小高木～高木のカキノキ属（?）は、栽培種（カキノキ、マメガキ）と本地域に分布する自生種（リュウキュウマメガキ、トキワガキ）のいずれかに由来すると思われ、果実が食用可能な種を含むことから、利用の可能性がある。草本のイネ科、タデ属は、明るく開けた場所などに生育する、いわゆる人里植物に属する分類群であることから、調査区周辺域の草本群落に生育していたものに由来すると考えられる。

第2節 動物遺存体

今回の調査によって、哺乳類ではウマ、ウシの2種、貝類ではアカニシが出土している（表6、図版82）。出土遺構は古墳時代の土坑、中世の大規模溝、そして古代～中世の遺物包含層である。

<概要>

古墳時代の第15面940土坑からウマの上腕骨・基節骨、ウマorウシの臼歯片、ウシの臼歯片が出土した。ウシの臼歯は最上層から出土したもので、土坑の機能停止後の窪みに、自然堆積したと考えられ、共伴した土器から7世紀前葉の資料である。ウマの上腕骨・基節骨は最下層から須恵器、土師器、石製品、木製鞍、用途不明木製品とともに出土した（図148、図版32）。最下層の時期は、共伴した土器から6世紀中葉と考えられる。上腕骨は左側のもので、遠位部幅は69.03mmで、体高推定法（林田・山内1957、西中川・松元1991）によれば体高は120～125cm程度になる。この大きさは古代から中世にかけての平均的な大きさである。

第5面450溝は14世紀前葉の大溝で、下層よりウシの左肩甲骨、右橈骨・尺骨が近接して出土した。性別・年齢については不明であるが、西中川・松元の方法（西中川・松元1991）で体高を推定すると、

表6 動物遺存体一覧表

登録番号	地区	遺構	種類	層名	時期	種名	左右	部位など	詳細	備考	図版
0593	L8-d2	450	溝	下層	14世紀前葉	ウシ	左	肩甲骨	肩甲骨周辺部のみ遺存。肩甲骨最小幅47.61mm。		図版82-2
1231	L8-d2	450	溝	下層	14世紀前葉	ウシ	右	橈骨・尺骨	橈骨は20.5cm遺存。橈骨近位端幅70.34mm。尺骨は13.8cm遺存で、遠位部肘頭部は破損。		図版82-1
0859	L8-d3	465	溝	下層	14世紀前葉	アカニシ					
1391	L8-d3	465	溝	最下層	14世紀前葉	ウマ	左	上顎臼歯	歯冠高残存57.63mm。		図版82-8
2195	L8-d1	940	土坑	最上層	7世紀前葉	ウシ	右	上顎第4前臼歯			図版82-11
1836	L8-d1	940	土坑	上層	6世紀末	ウシorウマ		臼歯	細片。		
1906	L8-d1	940	土坑	最下層	6世紀中葉	ウマ		基節骨	土圧により扁平。		図版82-4
2036	L8-d1	940	土坑	最下層	6世紀中葉	ウマ	左	左上腕骨遠位部	骨幹中央から遠位端まで約15cm遺存。近位部、外側上顎下端、内側上顎は破損。遠位部幅69.03mm、最小幅32.43mm。		図版82-5
2072	L8-c2	包含層		第10層	11～12世紀	ウマ	左?	上顎臼歯	歯冠高残存55.27mm。		図版82-7
1574	L7-d10	包含層		第11層	10世紀	ウマ	右	橈骨	骨幹のみ約15cm遺存。最小幅31.29mm。		図版82-3
1666	L8-c1	包含層		第12層以下	10世紀以前	ウシ	右	下顎第3後臼歯		1675に接合。	図版82-10
1675	L8-d2	包含層		第12層	10世紀	ウシ	右	下顎第3後臼歯		1666に接合。	図版82-10
1758	L8-d1	包含層		第12層	10世紀	ウシ	左	下顎第3後臼歯			図版82-9
2187	L8-d2	包含層		第15層	5～8世紀	ウマ		切歯			図版82-6

第2節 動物遺存体

橈骨（近位端幅70.34mm）から推定体高は109cm、肩甲骨（頸部最小幅47.61mm）から約111cmとなる。古代から近世にかけてのウシの大きさの平均値119cmより小振りである。

第5面465溝は14世紀前葉の大溝で、450溝に切られる。最下層からウマの左上顎臼歯、下層からアカニシが出土している。ウマの年齢は歯冠高による年齢推定法（西中川・松元1991）から4～6歳ころと推定される。

包含層中からはウマの上顎臼歯・切歯・橈骨、ウシの下顎臼歯2片が出土した。ウマの上顎臼歯・橈骨、ウシの下顎臼歯は平安時代、ウマの切歯は古墳時代～古代の層から出土したものである。

第1節 引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- 林 昭三・島地 謙 1987 「西ノ辻遺跡出土木製品の樹種」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・IV』 大阪府教育委員会 193-200p.
- 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1997 『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』 137p.
- 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 2000 『水走遺跡第4次発掘調査報告』 112p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2007 「6世紀の建築部材の利用状況」『上私部遺跡Ⅱ』 財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第165集 財団法人大阪府文化財センター 193-194p.
- 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1995 『西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告書』 154p.
- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.
- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ』 木材研究・資料31 京都大学木質科学研究所 81-181p.
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ』 木材研究・資料32 京都大学木質科学研究所 66-176p.
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ』 木材研究・資料33 京都大学木質科学研究所 83-201p.
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ』 木材研究・資料34 京都大学木質科学研究所 30-166p.
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ』 木材研究・資料35 京都大学木質科学研究所 47-216p.
- 南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究 4 生産と流通Ⅰ』 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 雄山閣 165-174p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 642p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.編 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修） 海青社 70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. 2004 IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.編 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修） 海青社 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. 1989 IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .
- 山口誠治 1988 「三門市遺跡出土木製遺物の樹種について」『三門市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 三門市遺跡調査会 229-232p.

第2節 引用・参考文献

- 安部みき子 2003 「玉櫛遺跡出土動物遺体について」『玉櫛遺跡Ⅱ』 財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第95集 財団法人大阪府文化財センター
- 西中川駿・松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書
- 林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第6号
- 久保和士・松井 章 1999 「家畜その2-ウマ・ウシ」『考古学と動物学』考古学と自然科学② 同成社

第5章 総括

第1節 今回の調査（06-1地区）

第1項 第1～4面 中世末以降の耕作面

第1～4面では、耕作に伴うものと思われる東西・南北方向の溝群等を検出した。地形は、調査区西半が高く、調査区中央部分（Y=-38,717）に段差が存在する。出土遺物から第1面は近世、第2～4面は中世末の耕作面と考えられる。

中世末以降、近世、現代にいたるまで、当調査区は耕作地であった。この間連綿と、調査区中央部分に土地の境界が存在していたことが想定できる。ただし、第4面では少数ではあるが耕作関連のものとして断定できない遺構群を検出しており、耕作地以外の土地利用がされていた可能性もある。

第2項 第5面 13世紀中葉～15世紀前葉の集落面

掘立柱建物をはじめとする集落関連遺構群と大規模な溝群を検出した。地形は、第5b層洪水堆積層が西側を中心に堆積した結果、調査区西半が高く、東半が低くなっている。

集落関連遺構群は、調査区東半、西半で様相が異なる。

調査区東半では、柱穴、井戸、溝、ピット、土坑等を検出した。柱穴は南部で検出し、建物1・21の2棟の掘立柱建物を復元した。出土遺物から13～14世紀のものと思われる。井戸は4基で、建物の北側に位置する。103井戸は上部が板組み、下部が曲物転用の杵を持ち、13世紀～14世紀前葉のものと思われる。568井戸は桶転用杵、584・1096井戸は素掘りで、いずれも13世紀代のものと思われる。560溝は、建物の北側に位置する東西方向の溝で、13世紀中～後葉の土器片が多く出土した。529溝は、西部に位置する比較的規模の大きい南北溝で、14世紀のものと思われる。593ピットからは、13世紀中葉のものと思われる完形の土師器皿10枚が出土した。また、整地土と思われる層中から、13世紀中・後葉～14世紀前葉の土器片がまとまって出土している。

東半の遺構群は、おおよそ13世紀中・後葉～14世紀前葉のものと思われる。ただし、529溝は、出土遺物から東半の遺構群のなかでも新しい時期のものと考えられる。

調査区西半では、柱穴、井戸、溝、ピット、土坑を検出した。柱穴は中央部で検出し、建物10～18の9棟の掘立柱建物を復元した。建物は重複しており、時期差がある。建物11～13、建物14・15は、それぞれ同じ構造と思われ、かつほぼ同位置で重複していることから、建て替えの関係にあると考えられる。方位は、建物10～12・18が正方位に近く、建物13・15が6～13°西に、建物14・16が23°西に、建物17が7°東に振れている。建て替えの関係と方位の一致で、先後関係を想定することもできるが、確証はない。建物10～15・18は、14世紀前葉を中心とする時期の遺物が出土している465溝の埋土上で検出していることから、14世紀前葉以降のものといえるが、出土遺物からもそれ以上詳細な時期は不明である。

井戸は2基で、東部に位置する。165井戸は素掘りで、出土遺物から西半の遺構のなかでも比較的古い時期のものである可能性がある。464井戸は桶を転用した杵を持ち、450溝埋土上から掘削されている。14世紀後葉を中心とする時期のものと思われる。453ピットからは、14世紀前葉のものと思われる完形の土師器皿7枚と瓦質土器羽釜片が出土した。221土坑からは14世紀前葉、348土坑からは14世紀後葉～

第1節 今回の調査（06-1地区）

15世紀前葉の遺物が出土している。

西半の遺構群は、ピット、土坑等の出土遺物から、14世紀前葉を中心とする時期と、14世紀後葉～15世紀前葉の2時期にわけられると考えられる。建物群の詳細な時期は不明であるが、この間におさまることが想定できる。

以上、集落関係遺構群の変遷は、調査区東半の13世紀中・後葉～14世紀前葉の遺構群→西半の14世紀前葉を中心とする時期の遺構群→西半の14世紀後葉～15世紀前葉の遺構群となる。

大規模な溝は、調査区北東部に東西方向の70溝、北西部に東西方向の465溝、中央部に南北方向の107・450溝がある。

東西方向の70溝は、深さが0.6～0.7mで最も浅い。底面のレベルは西から東へと低くなっており、底面からの高さ約0.2mの土橋状の高まりを検出している。埋土の上層は埋め戻し土と思われるが、下層は滞水堆積である可能性がある。遺物は比較的少なく、13世紀後葉～14世紀前葉のものが目立つ。1096井戸等を切っている。

東西方向の465溝は、深さが約1.6mで最も深い。底面のレベルはほぼ同じであるが、南北溝と重なる東端部分が深くなっている。埋土は上層から下層まで埋め戻し土と思われ、水流や滞水の有無は不明である。遺物は比較的少ない。14世紀前葉を中心とする時期のものと思われる。

南北方向の107・450溝は、ほぼ同じ位置で重複している。107溝は埋土と底面のレベルから、450溝は木杭と竹による構造物が設けられていることから、北から南への水流があったと考えられる。埋土から、両溝とも最終的に埋め戻されたと思われる。450溝からは土器、木製品、金属製品等、多種多様な遺物が出土した。出土遺物から450溝は14世紀前葉を中心とする時期、107溝は15世紀前葉を中心とする時期のものと思われる。

以上、大規模溝群は、切り合い関係から465溝→450溝→107溝の順に掘削されたことがわかる。70溝は、107溝に切られていることから、107溝より古い。

集落関係遺構群と大規模溝群の関係は、14世紀前葉の遺構群と70・450・465溝、14世紀後葉～15世紀前葉の遺構群と107溝がおおよそ同時期のものといえる。ただし、14世紀前葉の遺構群と溝群は、切り合い関係があるため、すべてが同時に存在し得ない。70溝は、584・1096井戸を切っており、埋土上面で遺構を検出していないため、調査区東半の遺構群より新しい、または東半遺構群のなかでも比較的新しいものと併存すると考えられる。465溝は、埋土上面で柱穴等の多くの遺構を検出しており、西半の遺構群より古い、または西半遺構群のなかでも比較的古い時期のものと思われ。450溝は、他の溝に比べて出土遺物が多く、集落が展開していた中心時期に機能、埋没したことが想定できる。

以上の事実関係から、第5面の遺構の変遷をまとめておく。

まず、調査区東半に、建物、井戸等からなる集落が営まれる。南側に建物、北側に井戸と東西方向の溝（560溝）を配置していたと考えられる。建物は調査区外の南側に続くと思われるが、調査区南端から約12m南の既往の調査区8D地区では、顕著な集落関係の遺構は検出されていない。井戸を掘り替え、13世紀中・後葉～14世紀前葉まで継続したと考えられる。ちなみに、柱穴の柱痕部分や第5層中に炭片、焼土塊を含むことから、柱等が焼けた可能性がある。

70溝は、上記の集落の比較的新しい時期、または集落が廃絶した後に掘削されたと考えられる。同じく東半に位置する、南北方向の529溝も、同時期のものであろうか。

また、465溝も、集落が調査区東半で廃絶する時期、または西半で成立する時期に掘削されたと考え

られる。

70溝、465溝の先後関係は不明である。両溝とも調査区中央部で107・450溝に切られているため、その部分で途切れていたのか、方向を変えていたのか、または別の溝に接続していたのかを知ることはできない。

次に、調査区西半に建物、井戸等からなる集落が展開する。14世紀前葉を中心とする時期、14世紀後葉～15世紀前葉の2時期である。建物の詳細な時期は不明であるが、限定された場所に何度も建て替えが行われている。建物は中央部に限られ、調査区西端部では顕著な集落関係遺構を検出していない。東側に井戸がある。

450溝は、調査区西半の14世紀前葉を中心とする時期の集落と併存していた可能性が高い。水路の機能を持ち、集落の東側を南流していたと考えられる。また、450溝内の木杭と竹からなる構造物の北側部分では水が滞留していた可能性があるが、70溝がまさにその位置から東にのびている。両溝が併存していたとすれば、70溝の底面が東に低くなっていることから、450溝で滞留させた水を70溝で東へ流していたとも考えられる。

107溝は、調査区西半の14世紀後葉～15世紀前葉の集落と併存していたと思われる。集落の東側を南流する、水路の機能を持つ溝である。

最後に、遺構面についてふれておく。第5面は、調査区西半中央部にのみ認められる洪水堆積層（第5b層）を母材とする土壌化層（第5層）の上面であり、遺構は、第5層上面および層中、下面で検出した。第5b層は、少量ではあるが13世紀代の遺物が出土していること、層上で14世紀前葉の遺構群を検出していること、第7面で13世紀前葉の遺構を検出していることから、13世紀中～後葉頃に堆積したと考えられる。

東半の13世紀中～後葉を中心時期とする集落関係遺構群は、そのほぼすべてを細砂～粗砂を多く含む第5層土壌化層を除去した段階で検出している。第6層シルト層は比較的土壌化が弱く、この上面で検出した遺構群を、第5層下面の遺構と考えた。しかし、上述した洪水の時期と遺構群の時期を考え合わせると、東半では第5b層が認められないため、これらが第5面の下面の遺構ではなく、もう1面下の別の遺構面（第6面）の遺構である可能性を否定しきれない。東半の中央部では、細砂～粗砂を多く含む第5層土壌化層と、第6層シルト層の間に、比較的土壌化の強いシルト層が認められた。部分的に存在する層であったため、第5層として調査を行ったが、これが第6層土壌化層であった可能性もある。

そうであれば、調査区東半に集落が展開していた13世紀後葉に洪水がおこり、洪水砂が堆積した結果、地形の高くなった西半に集落が移動したとも考えられる。もちろん、13世紀前～中葉に洪水がおこり、その後第5面東半に集落が営まれた可能性もある。いずれにしても、今回の調査区内では鍵層となる第5b層が部分的にしか存在せず、層位が溝群で分断されている状況であり、これ以上の検証は困難である。今後、周辺で調査を行う際に、留意する必要がある。

遺物は、多種多様なものが出土している。時期決定は主に土師器皿で行い、瓦器碗等で補完した。基準資料は、13世紀中葉が593ピット、13世紀中～後葉が560溝、14世紀前葉が453ピット、14世紀後葉～15世紀前葉が348土坑出土遺物である。

土師器は、皿、鍋等が出土している。皿では、主に14世紀以降のものに、内面にハケのち横ナデを施すものがみられるほか、少数ではあるが口縁部外面の半分を横ナデ、半分を指オサエで仕上げるもの（57・129・130等）も認められる。また、口径が20cm前後の大形のもの（96等）が僅かに存在する。

鍋は、主に13世紀代の遺構から出土する。内面と外面上部にハケを、体部外面にタタキを施す。

瓦器は、椀、皿が出土している。13世紀代の遺構からは豊富に出土しているが、14世紀になると激減する。椀は、和泉型が多くを占め、楠葉型は少数である。和泉型には、高台周縁にヘラ等の工具で破線状の沈線を施しているもの(380・381・383・384・478)や、見込みに別個体を重ねた際に付着したと思われる高台痕を有するもの(367)が認められる。皿は、椀に比べて出土数が少ない。

瓦質土器は、播鉢、鍋、羽釜、火鉢、風炉、甕が出土している。播鉢は、14世紀後葉～15世紀前葉の遺構から出土している。鍋は、14世紀以降の遺構から口縁部が受口状のもの(50・60・172等)が出土しているほか、13世紀と思われる口付のもの(493)が1点出土している。羽釜は、13世紀代では脚付が目立つ。14世紀になると形、法量ともバリエーションが豊富になり、(263)等の個性的な器形のものもみられるようになる。ただし、おおまかには口縁部が直立するものと、内傾する口縁部に段を有し、鏝以下にケズリを施すものの2種にわけられる。火鉢と風炉は、14世紀以降の遺構から出土している。甕は、14世紀以降の遺構から頸部が肥厚し短く外反する河内・和泉型(117等)が出土している。

須恵器は、鉢、甕等が出土している。鉢は、多くが東播系である。内面を斜め方向のナデで仕上げるものが多い。甕は、樹枝紋痕を有するもの、頸部外面に右上がりの平行タタキ、体部外面に平行タタキを施すものが少なからず認められる。東播系のものである可能性が高い。

常滑焼は、鉢、甕等が出土している。瀬戸焼は、平椀、天目椀、豆皿、折縁小・中皿、直縁大皿等が14世紀以降の遺構から出土している。備前焼は、播鉢、壺、甕が14世紀以降の遺構から出土している。

白磁は、碗、皿、杯が出土している。13世紀代は大宰府分類の皿Ⅸ類、いわゆる口禿を中心とした皿類が目立つ。墨書を持つ碗(102)、草花の印紋を有す皿(296)は14世紀以降、多角杯(63)は15世紀前葉頃のものかと思われる。青磁は、碗、皿、水注等把手(510)が出土している。13世紀代は鎬蓮弁紋碗が目立つ。14世紀以降は見込みに印紋を有す碗がみられる。青白磁は、合子等が出土している。

高麗象嵌青磁の細片(197)が14世紀前葉の遺構(465溝)から出土している。同種の小片(5)は第3層からも出土しており、梅瓶等の肩部かと思われる。象嵌紋様には、二重の円の中に花紋かと思われる紋様をおさめたものと、図式化された雲鶴紋の2種がみられる。

輸入陶器は、無釉の鉢片(211)、頸部と体部の屈曲部に段を持ち、浅黄色の釉を施す壺片(532)、波状沈線を持ち、浅黄色の釉を施す壺片(890)のほか、浅黄色、灰オリーブ色、黒褐色、黒色等の釉を施す破片が出土している。大宰府分類のB群の胎土を持つもの(100・893・894等)がある。

木製品は、漆器椀・皿、折敷、曲物、桶、篋、つちのこ、呪符木簡をはじめ、多種類が出土している。漆器は、すべて広葉樹である。内外面赤色のものが6点、14世紀前葉、15世紀前葉の遺構から出土しており、同種のものとしては比較的古い資料である。内外面黒色で赤色の手描紋を持つものも2点ある。折敷は、すべて底板部分で、2枚を重ねていたと思われるものがみられる。曲物には、帯が1段で補修痕を持つもの(319)がある。桶は、13世紀代と14世紀後葉の井戸枠に転用されていた。呪符木簡(179)は、いわゆる「蘇民将来」札で、14世紀前葉の遺構(450溝)から出土している。

石製品は、硯(519・528)、砥石、石鍋が出土している。硯(528)は、猪目形の海を有す。砥石は、畿内以外産変質流紋岩の中砥が多く、丹波山地産粘板岩の仕上砥等もみられる。金属製品は、鍋(85)、短刀(120)、鎌(243)、釘、銭貨等が出土している。短刀は、14世紀前葉の遺構(450溝)から出土した。刀身と木製柄の部分で、鏝には漆を塗布する。鎌は、共伴遺物から14世紀中～後葉頃のものと思われる。そのほか、平瓦、铸造用炉壁片(174)が出土している。

第3項 第7面 11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉の集落面

調査区東半で、柱穴、溝、ピット、土坑等の集落関係遺構群を検出した。

柱穴は東半全域で検出し、建物2～8・19・20の9棟の掘立柱建物を復元した。ただし、攪乱の範囲が広いため建物の復元が困難で、柱根、柱痕を有し、柱穴であることが明らかなもの（すべて図107・108に掲載）で、建物に復元できていないものが少なからずある。建物は重複しており、時期差がある。出土遺物から、建物20は11世紀後葉～12世紀前葉、建物2～8・19は12世紀中～後葉を中心とする時期のものと思われる。建物に復元し得なかった柱穴で、11世紀後葉～12世紀前葉の遺物が出土しているものがあることから、この時期の建物も複数棟存在した可能性がある。方位はすべて、正方位に近い範囲（N-4°-W～N-1°-E）におさまる。底面に根石、礎板、土器片を設置している柱穴が目立つが、第11層洪水砂上に立地しているためかと思われる。

第7面では、比較的浅い溝を多数検出した。やや振れはあるものの、ほとんどの溝が東西方向、南北方向を指向している。603溝の埋土にはラミナが認められるが、その他の溝には水流の痕跡はない。出土遺物と切り合い関係から、602・692・693・750・1129溝は11世紀後葉～12世紀前葉、603・604・614・687・715・746溝は12世紀以降のものと思われる。水流がなかったと思われることから、土地を区画する機能を持つことが想定できる。しかし、調査区内では、区画している土地の輪郭を明確に把握することができず、建物との併存関係も不明といわざるを得ない。

その他、701ピットは完形の土師器皿を埋納したと思われる遺構で、13世紀前葉のものである。

以上、第7面では、調査区東半に11世紀後葉～13世紀前葉にかけて、集落が展開した。東半は、第5面でも13世紀中葉～14世紀前葉に集落が営まれる。つまり、11世紀後葉・12世紀前葉から14世紀前葉にいたるまでの間、東半に集落が展開し、13世紀中葉が第7面の集落から第5面東半の集落への移行期と思われる。東半と西半の境界となる調査区中央部は、第5面で14世紀前葉に大規模な溝が掘削されて以降、府営住宅建設直前まで、土地の境界となっていたと思われるが、この土地区画は、11世紀後葉～12世紀前葉まで遡ると考えられる。

時期決定は主に土師器皿で行い、瓦器碗等で補完した。基準資料は、11世紀後葉～12世紀前葉が692溝、12世紀後葉が630土器集積、13世紀前葉が701ピット出土遺物である。

土師器は、皿、鍋、竈のほか、回転台土師器皿も出土している。692溝からまとめて出土した皿には、浅黄橙色系で褐色粒を比較的多く含むものと、灰白色のもの2種があり、外面に粘土接合痕を残すものが多い。701ピット出土の皿は、すべて灰白色で、器壁が比較的薄い。回転台土師器皿は、底部外面糸切り離しのものが少量出土している。

瓦器は、碗、皿が出土している。楠葉型と和泉型がある。一部の碗（547・548）の見込みに、調整から焼成までの工程で別個体と重ねられた際についた高台の痕跡がみられる。碗（577）は、焼成後に施された線刻を底部外面に有す。

瓦質土器は、盤（641）、脚付羽釜が出土している。須恵器は、碗、鉢が出土している。東播系のものと思われる。山茶碗は、碗（647等）が出土している。第5面の遺構出土の碗、鉢もこの時期のものかと思われる。常滑焼三筋壺（555）が、柱穴内で根石として使用された状態で出土した。三筋紋は3本線櫛描で、12世紀第3四半期のものである。白磁は、碗、皿が出土している。

木製品は、用途不明といわざるを得ない。石製品は、石鍋転用加工品（717）、砥石が出土している。ほかに、鍛冶用の鞆羽口（583等）が出土しており、集落内で鍛冶が行われていたことが想定できる。

また、攪乱から平安時代のものかと思われる軒丸瓦（678）が1点出土している。

第4項 第10面

調査区東半で、少数の溝、ピットを検出した。地形は、第11層洪水堆積層が調査区東部により厚く堆積した結果、東部が高く、西部が低くなっている。11世紀後葉～12世紀前葉の遺物が出土しているが、積極的な土地利用が行われた遺構面ではないと思われる。

第5項 第12面 10世紀後葉の水田面

調査区全域で、条里型水田面を検出した。地形は、調査区西部が高く、東部が低い。

水田面を覆う第11層洪水堆積層による浸食を受けており、特に東部で著しい。西部から中央部で、南北方向の畦畔を3条、おおよそ13～16mの間隔で検出し、うち2条で水口を確認した。第11層中に含まれる遺物の時期から、10世紀後葉を中心とする時期に埋没したと考えられる。

調査区東半の第12層から、平安時代のものと思われる瓦片がコンテナ半箱分出土している。

第6項 第15面 弥生時代～古代の遺構面

弥生時代～古代の遺構を検出した。地形は、西側が高く、東側が低い。

弥生時代の遺構は、調査区中央部に位置する。前期の土坑（1013土坑）1基、中期の溝（946溝）1条と土坑（1015土坑）1基である。弥生土器は第15層にも含まれているが、比較的少量である。

5世紀後葉～6世紀の遺構には、調査区中央部に位置する、比較的大形の土坑群がある。923・939・977土坑が5世紀後葉～6世紀前葉、940土坑が6世紀中葉のものである。いずれも埋土はシルトで、炭や有機物を含み、肩部に基盤層の崩れがみられる。人為的な埋め戻し土ではなく、土坑は自然に埋没した可能性が高い。第15層からもこの時期の遺物が比較的多く出土しており、調査区は集落内もしくは集落の縁辺部にあたると考えられる。

6世紀後葉以降の遺構には、調査区西部と東部に位置する、主に北西-南東方向のピット列群がある。1列に数基から30基以上のピットが並び、その間隔はピット1個分程度である。ピットは、列の方向に対して垂直方向に長い不整な楕円形、または不定形で、深さ0.1m以下である。規模、形状からみて柱穴ではなく、性格は不明といわざるを得ない。

ピット列と同方向の溝群を、西部で検出している。時期のわかる出土遺物はないが、上記のピット列と溝の北肩の位置が一致している例（ピット列1と902溝、ピット列2と903溝、ピット列3と907溝）があり、ピット列の時期と大きくはかけ離れないことが想定できる。溝は、深さ0.1～0.2mのものが多く、比較的浅い。

その他、調査区西部で柱穴を検出し、掘立柱建物1棟（建物9）を復元した。これ以外にも建物が存在した可能性を否定することはできないが、ほかに柱穴と断定できる遺構はなく、調査区内に複数の建物が建てられていた可能性は低いと思われる。出土遺物からは時期がわからないが、切り合い関係から6世紀前葉以降のものと思われる。また、上述のピット列、溝と重複しており、これらとも時期差がある。ちなみに、南側の既往の調査区8D地区でも、第15面と同一面と思われる第Ⅶ遺構面で建物を2棟検出しているが、1棟の柱穴からは7世紀初頭の遺物が出土している。

古代のものといえる遺構は、調査区中央部に位置する、ピット（985ピット）1基である。7世紀末

～8世紀初頭の土師器杯Aが出土している。

以上、第15面では、弥生時代～古代にかけての人々の営みが確認できた。下層の調査により、第15層の土壌が形成されるまでは、湿地状の環境であったことを確認しているが、第15面時には長期にわたって安定した土地であったといえる。弥生時代に開発の端緒が開かれ、5～7世紀には集落または集落の縁辺部として利用された。しかし、古代にいたってその営みは途絶え、第12面の条里型水田が開墾されるまで、積極的な土地利用は行われない。

遺物は、弥生時代前期～古代のものが出土している。

弥生土器は、高杯、壺、甕が出土している。壺（739）は前期のもので、体部外面に段を有す。それ以外は中～後期のもので、生駒西麓系の胎土のものを含む。

古墳時代のものは、土師器杯・高杯・鉢・台付鉢形土器・壺・甕・羽釜・甕・竈、須恵器杯身・杯蓋・高杯・蓋・提瓶・甕・壺・器台・甕・甕、製塩土器、土師質土錘、木製鞍、馬骨が出土している。

須恵器については、隣接する吹田市域の吹田窯跡群、豊中市域の桜井谷窯跡群からなる千里古窯跡群が当該期に操業している。6世紀中葉の遺構（940土坑）から甕（828・829）が出土しているが、これは当該期には千里古窯跡群（Ⅱ型式3～4段階）で生産し、陶邑古窯跡群では生産していないといわれている器種である（木下1983 杉井1994）。

製塩土器は、5～6世紀代の遺構から出土している。923土坑出土のもの（768～774）には、体部内面に貝殻条痕、縦方向または斜め方向のナデ、工具による横方向または斜め方向のナデ等、外面にタタキ、指オサエ等を施すものがみられる。共伴遺物から、5世紀後葉～6世紀前葉のものと思われる。

土師器鉢（760）は、内外面を黒化处理し、ミガキを施す。共伴遺物から5世紀後葉～6世紀前葉のものと思われる。畿内には類例があまりなく、東日本をはじめとする他地域でみられるものである。

土師器台付鉢形土器（856）は、難波宮下層遺跡で6世紀末～7世紀前半の類例が出土しており、「台付鉢形土器」または「土製支脚」とされているが、用途は確定されていない（中尾1995）。

その他、土師器甕片で、口縁部に同心円紋を持つもの（854・855・885～887）がある。すべて生駒西麓系の胎土で、類例は主に生駒西麓地域から出土している（江浦1991）。また、須恵器片で、外面に浅いらせん状沈線を持つもの（876～880）がある。ともに第12・15層出土で詳細な時期は不明である。掲載したもの以外には若干の破片があるのみで、遺物量全体からみれば多くは含まれていない。

木製品は、940土坑から出土した。6世紀中葉のものと思われる、鞍（852）以外は、用途不明である。鞍は前輪部分と思われ、6世紀代のものとしては大阪府内初例である。前面の左右一対の方形孔は鞍を通すためのもの、後面の6箇所方形孔は居木を固定するためのものと思われる。構造上の特徴は、馬膚に溝状の抉り込みを持ち、前・後面の方形孔がこれに貫通していることで、奈良県谷遺跡（後輪、5世紀後半）、同名柄遺跡（後輪、5世紀後半）、同十六面・薬王寺遺跡（破片、古墳時代中期）の出土品が類例である。また、後面洲浜形両端に、突起がある。これは居木を固定するためのものと思われ、6世紀以前のものには類例がみられない。7世紀以降のものは、馬膚に居木を組み合わせるための切り込みを有するが、6世紀代の出土例が少ないなか、これへの繋がりが注目される。

940土坑からは馬骨も出土しており、6世紀中葉の玉櫛遺跡で、馬が飼育されていたことが明らかとなった。馬の飼育には塩が欠かせないが、製塩土器の出土もそれを裏付けている。

第2節 玉櫛遺跡の調査

玉櫛遺跡では、1990年に発見されて以降、約12,400㎡の発掘調査が行われてきた。これまでの調査成果に今回の成果を加え、玉櫛遺跡発掘調査のまとめとしたい（既往の調査区名は図3参照）。

第1項 縄紋時代

玉櫛遺跡で最も古い出土遺物は、遺跡南部の3A地区出土の縄紋時代晩期の土器片2点である。ただし、遺構は確認されていない。

第2項 弥生時代

玉櫛遺跡で最も古い検出遺構は、遺跡北東部に位置する今回の調査区（06-1地区）第15面の1013土坑で、弥生時代前期のものである。弥生時代の遺構はほかに、06-1地区の946溝、1015土坑と、遺跡南部の3A地区の溝1928があり、中期のものである。

下層の調査により、遺跡周辺は粘土～シルトが堆積する低湿な環境であったことがわかっているが、06-1地区の遺構は、湿地状堆積の上に堆積し、第15層土壌化層の母材となるシルト、細砂～粗砂層の上で検出している。このことから、06-1地区周辺では遅くとも弥生時代前期には低湿な環境から脱し、土壌が形成されていた、またはされつつあったといえる。しかし、今のところ遺構は上記のもの以外には確認されておらず、層出土の弥生土器も比較的少量である。

この時代、西側に隣接する東奈良遺跡では、三島地域の拠点集落といわれる環濠集落が展開しており、玉櫛遺跡と対照的である。周辺の地形は、北の北摂山地、西の千里丘陵に向かって高く、南東の淀川に向かって低い。千里丘陵の裾野がせまり、より標高の高い東奈良遺跡では、玉櫛遺跡より早くから安定した土壌が形成されていたと考えられる。

第3項 古墳時代～古代

5世紀後葉～6世紀代は、北東部で遺構を検出しているほか、そのほかの地区（B・F地区等）でも遺物が出土している。

5世紀後葉～6世紀中葉には、北東部（4D・06-1地区）に土坑が掘削される。特に06-1地区は、当該期の遺物も多数出土しており、集落内もしくは集落の縁辺部にあたると思われる。940土坑から、6世紀中葉の土器、木製品とともに、馬骨、木製鞍（前輪）が出土しており、馬が飼育されていたと考えられる。

北東部（3D・4D・6D・8D・06-1地区）では、主に北西-南東方向のピット列群も検出している。規模、形状からみて柱穴ではなく、性格は不明といわざるを得ない。詳細な時期は不明であるが、06-1地区のものから6世紀後葉～7世紀前葉の遺物が出土している。ほぼ同範囲で検出している、同方向の溝群も同時期のものである可能性がある。

また、北東部（8D・06-1地区）では、掘立柱建物を3棟検出している。8D地区の建物のうち1棟は出土遺物から7世紀初頭またはそれ以降のもの、06-1地区の建物は切り合い関係から6世紀前葉以降のものと思われる。

そのほか、6世紀の遺物が出土しているF地区には、この時期のものと思われる杭列がある。3A地区

でも古墳時代のものである可能性を持つ遺構群が検出されているが、詳細な時期は不明である。

遺物では、層出土のため詳細な時期は不明であるが、らせん状沈線を有する須恵器、口縁部に同心円紋を持つ竈（生駒西麓系の胎土）等、渡来文化との関係を示唆するものや、主に生駒西麓地域で見られるものが少数ではあるが出土していることが特筆される。

古代のものといえる遺構は、06-1地区のピット1基である。7世紀末～8世紀初頭の土師器杯Aが出土している。

古墳時代には、遺跡北東部が集落内またはその縁辺として土地利用された。既刊報告書（『玉櫛遺跡Ⅱ』78頁）によれば、北東部、特に3～6D地区から06-1地区にかけては、微高地である可能性が高い。安定した土壌が形成されていくなかで、微高地を選んで集落が営まれたと考えられる。また、古墳時代以前の遺構、遺物もほぼ同範囲で確認されていることから、この微地形は、古墳時代以前に遡る可能性がある。

第4項 10世紀後葉

遺跡全域に、条里型水田が営まれる。水田面を覆う洪水堆積層の出土遺物から、10世紀後葉を中心とする時期に埋没したと考えられる。ただし、遺跡南部では古手の瓦器椀が洪水堆積層から出土しており、11世紀中・後葉まで水田面が存続した可能性もある。

北東部では、6D・9D地区の東西方向の畦畔が、それぞれの延長上に位置する。それらと8D地区の東西方向の畦畔との距離は52～53mで、おおよそ半町にあたる。06-1地区の3条の南北方向畦畔がその間に位置するが、半町を13～16m間隔で半折型に区切っている可能性がある。7D地区の約9mあけて並行する南北方向の畦畔2条も、同様の区画を構成するものであろうか。2D・4D・5D地区の南北方向畦畔も14～16mの間隔であり、同様である。ただ、1D・6D地区では、最初に記した6D・9D地区の東西方向の畦畔より北に約21mに東西方向の畦畔があり、ここでは東西方向の地割になっている可能性がある。そうであれば、6D地区東端から7D地区西側畦畔までの間で地割の方向が変わっていることが想定できる。ちなみに1948年の航空写真にみえる条里地割では、6D地区は南北方向、8D地区は東西方向の坪境周辺にあたっている（『玉櫛遺跡Ⅱ』190頁第153図参照）。

南西部では、これまでの成果で復元できる地割が北東部に比べて細かい（『玉櫛遺跡』259頁第199図参照）。洪水堆積層による侵食等のため北東部では検出できた畦畔が少ない可能性も否定できないが、南西部では長地型、半折型より細かい地割であった可能性がある。

A地区では、木製の栓をした篠窯産須恵器小壺が複数個入ったピットを2基検出している。出土状況から、意図的に埋められたと考えられる。水田と同時期の10世紀後葉のもので、この時期に土器を埋納している事例は大阪府下でいくつか認められている。篠窯産須恵器小壺の例としては、茨木市と隣接する箕面市の粟生間谷遺跡がある。ピットとは少し離れた位置ではあるが、同時期の大型建物を検出している。条里型水田としては、東大阪市と八尾市にまたがる池島・福万寺遺跡で、「日下宅」の墨書を持つ黒色土器A類椀が埋められていた例がある。「宅」は、「現実の居住生活、私的・個別的な所有と経営に密接に結合した概念を表現している」とされる（戸田1967）。遺跡周辺地域では、第1章 位置と環境で述べた通り、945年に「志多羅神」事件がおこっている。条里型水田が広範囲に展開する場所に小壺を埋納する意味を考えるうえで、示唆的な事象である。

第5項 11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉

遺跡中央部を南北方向に流路が流れ、数箇所集落が営まれる。

流路は、幅約20mで、7D地区西部から6D地区を北東から南西に、3D・G・F・E地区東部にかけて南流する。周囲の遺構との関係や、12世紀～14世紀前葉の遺物が出土していること等から、同期間存続して14世紀前葉の洪水により埋没したとされている。

集落は、流路東側では今回の06-1地区から7D・8D・9D・10D地区にかけてと1B地区の2箇所、西側ではA・B・C地区にかけてと1A・3A地区にかけての2箇所で検出されている。

流路東側の06-1・7～10D地区では、06-1地区の東部、東西30m以上の範囲に11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉の建物、区画溝、土師器皿埋納ピット等が展開する。北側の7D・9D・10D地区にも同時期の遺構が展開するが、調査区の幅が狭く、遺構配置等を復元するのは困難である。ただし、詳細な時期は不明なもの柱穴があること、遺物量が多いこと等から、建物が存在したことが想定できる。また、10D地区の溝100104からは、まじないの墨書を持つ12世紀中～後葉の土師器皿が出土している。南側の8D地区は、北側に比べて遺構の密度が薄く、集落の南端に近い可能性がある。

南西方向に少し距離をおいた1B地区にも、11世紀後葉～12世紀前葉の遺構がある。調査区南端部の狭い範囲での検出であるため遺構配置等の復元は困難だが、柱穴がみられることから、建物が存在した可能性がある。

流路西側では、B地区東部からC地区、A地区中央部にかけてに、11世紀後葉～12世紀前葉の複数枚の土師器小皿を埋めたピット3基、12～13世紀とされる建物のほか、時期は不明であるが井戸がある。また、B地区中央部西寄り、集落の西側縁辺部にあたる位置に、11世紀末～12世紀前葉の木棺墓がある。

1A地区東端から3A地区にかけての東西約40mの範囲には、70mを超える総柱の建物と、その北側に井戸群がある。11世紀後葉～13世紀前葉で、建物の建て替え等により、複数の時期にわけられるとされている。

11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉までの間、ほぼ同じ範囲に集落が営まれており、大きく捉えれば、同様な景観が存続していたといえる。しかし、各調査区の幅が狭いために、各集落の範囲、遺構配置等の詳細を把握し、景観を具体的に復元することは難しい。ほぼ同じ範囲のなかでも建物は建て替わり、区画溝も位置を変えている。今後、より細かい時期区分（例えば11世紀後葉～12世紀前葉、12世紀中葉～13世紀前葉）による同時期の集落の範囲、遺構配置を捉えることが課題といえる。また、調査区内で復元できた建物は少ないが、1A・3A地区では比較的大形の建物が検出されている。これは、集落の質を考えるうえで、看過できないものと思われる。

第6項 13世紀中～後葉

遺跡中央部を南北方向に流路が流れ、その東側1箇所、西側2箇所に集落が営まれる。

流路東側では、遺跡北東部の今回の06-1地区東部、東西30m以上の範囲に遺構が展開する。建物の北側に井戸を配置していた可能性がある。土器を多く含む整地土を伴う。北側の9D・10D地区も集落内にあたる可能性があるが、調査区の幅が狭く、詳細は不明である。南側の8D地区では顕著な集落関係遺構は検出されていない。

流路西側では、南部の1A地区東端部から3A地区に集落が展開する。この時期の土器が多量に出土しており、ここで検出されている建物、井戸に同時期のものがある可能性は高いと思われる。ここでも

土器を多く含む整地土を伴う。また、北部の4D地区には約40㎡の建物がある。

前時期には4箇所集落が営まれていたが、この時期には3箇所となる。4D地区には、この時期にのみ集落が現れる。対照的に、北東部と南部の2箇所では、前時期と同じ場所に集落が営まれる。そして、次時期以降、耕作関係以外の遺構が検出されるのは、この2箇所周辺に限られるのである。

おおまかに捉えれば、この時期の集落は、前時期の要素を残しつつも、次時期以降に継続する要素を備えているといえる。しかし、調査区の幅の狭さから、各時期ともに各集落の範囲、遺構の配置等を詳細に把握することが難しい。この時期を玉櫛遺跡の中世集落の画期として、集落の質的变化を明らかにすることは、今後の課題とせざるを得ない。

第7項 14世紀前～中葉

遺跡北東部、南部の2箇所に集落が営まれる。

遺跡北東部では、今回の06-1・7D・9D・10D地区に遺構が展開する。

06-1地区では東西方向2条(70・465溝)、南北方向1条(450溝)の大溝が掘削されるほか、西部の東西約20mの範囲に遺構が展開する。その南側の8D地区でも同時期の遺構と、南北方向の大溝の続きが検出されているが、遺構の様相、出土遺物の量などから、06-1地区が集落の中心であると思われる。

7D地区でも、この時期の大溝が検出されている。溝70001は、東西方向で、長さ19m以上、幅約2.2m、深さ約0.7mである。井戸も検出されており、集落が営まれていたと考えられる。

06-1地区と7D地区の間の9D・10D地区でも同時期の遺構、遺物が確認されており、集落内に含まれる可能性がある。ただし、調査範囲が限られていることから詳細が不明であり、7D地区と06-1地区の集落がひと続きのものであるかどうか、判断することはできない。

南部では、2A地区と4A地区に遺構が展開する。

2A地区では、東西方向、南北方向の大溝で区画された東西約30mの範囲に遺構が展開する。建物には約70㎡の大形のものがあり、北側に井戸を配置している。建物は建て替えられている。遺構群の東を限る南北方向の溝3178は、長さ12m以上、幅約3.2m、深さ約1.3mである。北を限る東西方向の溝3210は、長さ20m以上、幅約2.0mで、多量の遺物が出土している。溝3210の北側に並行する東西方向の溝3028は、長さ20m以上、幅約2.1mである。

4A地区でも、東西方向、南北方向の溝で区画された東西約20mの範囲に遺構が展開する。建物には90㎡を超える大形のものがあり、建て替えられている。遺構群の東側を限る南北方向の溝265・871は、長さ14m以上、幅約1.8m、深さ0.1～0.6mである。北側を限る東西溝、西側を限る南北溝は比較的浅い。

2A地区と4A地区の区画は、東西に約30m離れており、北端の位置がほぼ揃っている。区画間でも遺構は検出されており、ひと続きの集落の可能性もある。

この時期の特徴は、東西方向、南北方向の溝群が掘削されることである。溝はすべて、集落の側に位置する。

北東部06-1地区の450溝は、集落の東を限り、水路の機能を有すると思われる。465溝は、埋土上面に遺構群が展開することから、集落の成立時期に掘削され、短期間で埋め戻されたと考えられる。

南部では、遺物が多量に出土した溝3210が集落の北を限っていたと思われるほか、他の溝群も遺構群

第2節 玉櫛遺跡の調査

との位置関係から、集落を区画していたと考えられる。ただし、東側の4A地区の溝群は浅いものが多いが、西側の2A地区の溝群は単に区画を目的とする溝としては深い。

もうひとつのこの時期の特徴は、前時期の集落と隣接する場所に、集落が営まれることである。北東部06-1地区の集落は前時期の西側、南部の集落は南側にあたる。

遺跡中央部を南流していた流路は、この時期に埋没する。幅約20mの流路の埋没は、周辺環境に大きな変化をもたらしたと思われる。その際、洪水の被害があった可能性もある。低地に立地する遺跡で人々が生活を続けるには、それらに対応する必要があったと思われる。集落が隣接地に移ったこと、溝が掘削されたことは、まさにその結果であるとは考えられないだろうか。悪水抜きのために溝を掘削し、集落を移し、周囲に排水のための溝を設ける。同時に、水路も掘削する。つまり、新たな居住空間と用水及び排水網を構築したのではないかと推測する。大溝の掘削は、相当の労働力を必要とする。それらが一定の範囲で計画的に行われたとなれば、それを可能とする村落があったことになる。大形の建物が存在するが、その位置付けも含め、地域社会を復元していくことが今後の課題である。

第8項 14世紀後葉～15世紀前葉

遺跡北東部、南部の2箇所遺構が検出されている。

北東部では、今回の06-1・8D地区に、水路と思われる南北方向の大溝（107溝）が掘削される。前時期の大溝（450溝）と重なっており、掘りなおされたと考えられる。06-1地区では大溝の西側で井戸、土坑等を検出しており、建物が存在した可能性もある。

南部では、1A・3A地区等で南北方向の大溝を検出している。1A地区の大溝東側は墓地である。

第9項 15世紀以降

これまでのところ、耕作関連の遺構以外、検出されていない。現在、遺跡の北側に水尾集落があるが、1480年代の史料に「水尾村」がみえる（第1章参照）。15世紀中～後葉の間に地域を大きく変える画期があり、それ以降、近年までみられたような条里型水田と集村集落の景観が形成されていくのではないだろうか。

参考文献

- 奈良県立橿原考古学研究所 1985 「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報一九八四年度（第2分冊）』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2000 『大和木器資料Ⅰ』橿原考古学研究所研究成果 第3冊
- 神谷正弘 2005 「古墳時代集落出土木製鞍再論」『埴生の宿』 田代克己さん追悼録刊行会
- 木下 亘 1983 「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『豊中市文化財調査報告 第9集 桜井谷窯跡群2-17窯』 小路窯跡遺跡調査団
- 杉井 健 1994 「甗形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第28号 大阪大学文学部
- 江浦 洋 1991 「河内玉作り遺跡と甗形土器・羽釜・甗」『韓式系土器研究』Ⅲ 韓式系土器研究会
- 中尾芳治 1995 「難波宮下層遺跡出土の土器」『難波宮の研究』 吉川弘文館
- 財団法人大阪府文化財センター 2003 『粟生間谷遺跡 古代・中世編』 財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第85集
- 財団法人大阪府文化財センター 『池島・福万寺遺跡2』 財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第79集
- 戸田芳実 1967 『日本領主制成立史の研究』 岩波書店

付 表

表1 掲載遺物一覧表(1)

遺物番号	挿図	写真図版	種類 器種	出土 遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図 方法	色調	備考
第1～4面(第1～4層)											
1	8		唐津焼 皿	第1層 L8-d3	—	<3.1>	(5.8)	10以下 高台30	反転復元	外: 灰白7.5Y7/1(釉) にぶい橙7.5YR6/4(露胎) 内: 灰白7.5Y7/1(釉) 断: にぶい橙7.5YR6/4	体部外面回転ナデ、のち下半を回転ヘラケズリ 削り出し高台 内面、体部外面下部まで施釉 見込みに胎土目
2	8		唐津焼 碗	第1層 L8-d2	—	<4.5>	(4.5)	30 高台50	反転復元	外: 灰オリブ7.5Y5/3(釉) にぶい黄2.5Y6/3(露胎) 内: 灰オリブ7.5Y5/3(釉) 断: 灰白7.5Y7/1	体部外面回転ナデ、のち下半を回転ヘラケズリ 削り出し高台 内面、体部外面上半施釉
3	8		金属製品 銭貨	第1層 L8-e2	径 2.50	孔 0.60	厚 0.13	95			寛永通寶 2.2g
4	9		土師器 皿	第3層 L7-d9	6.6	1.1～1.4	—	90 口縁80		外: にぶい橙7.5YR6/4 内: にぶい橙5YR6/4 断: 橙5YR6/6	口縁部歪む
5	9	カラー 1	高麗青磁 梅瓶か	第3層 L8-d4	—	長 <5.5>	—	10以下	傾き不明	外: オリブ灰2.5GY6/1(釉) 明オリブ灰2.5GY7/1(白象 嵌) 暗青灰5BG4/1(黒象嵌) 内: オリブ灰2.5GY6/1(釉) にぶい黄褐10YR5/3(露胎) 断: 灰白5Y7/1	断面胎土に黒N2/0の粒を少量含む 外面に白黒の象嵌紋様 二重円(復元径6.9 cm)の中に花紋かと思われる紋様をおさめた ものと図式化された雲鶴紋 内面横ナデ 釉は流下した状態 象嵌部分にはひび割れがみられるが全体的 に貫入はなし 内面の釉の状態等から梅瓶等の肩部の可能 性が考えられる 遺存部分の復元径は20～25cm(梅瓶とすれば 大形)で、同様の象嵌紋様が複数配されてい たと思われる
6	9		金属製品 銭貨	第3層 L7-d10	径 2.40	孔 0.60	厚 0.10	100			政和通寶 2.8g
7	11		土師器 皿	第4層 L8-d3	(9.5)	1.9	—	40 口縁30	反転復元	外: にぶい橙7.5YR7/4 内: にぶい橙7.5YR7/3 断: 灰白10YR8/1	
8	11		瀬戸焼 折縁小皿	第4層 L8-d5	(8.5)	<1.7>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: オリブ黄5Y6/3(釉) にぶい黄褐10YR7/3(露胎) 内: オリブ黄5Y6/3(釉) 断: にぶい黄褐10YR7/2	内面、口縁部外面施釉(灰釉)
9	11		瓦器 碗	第4層 L7-d10	(13.2)	3.9	3.9	60	転用復元 (口縁部 ～体部)	外: 灰N6/0 内: 灰白N8/0 断: 灰白N8/0	
10	11		白磁 皿	第4層 L7-d9	(11.2)	<1.9>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰白5GY8/1(釉) 灰白5Y7/1(露胎) 内: 灰白5GY8/1(釉) 灰5Y6/1(露胎) 断: 灰白N8/0	内外面施釉 口縁端部の釉掻き取る
11	11		白磁 皿	第4層 L8-d4	—	<1.4>	(4.5)	20 高台50	反転復元	外: 灰白2.5Y8/2(釉) 灰白2.5Y8/1(露胎) 内: 灰白2.5Y8/2(釉) 断: 灰白2.5Y8/1	畳付に4箇所(の)の 内外面施釉、体部外面下部、底部外面露胎 見込みに目跡
12	11		青磁 盤	第4層 L8-d4	—	<3.3>	—	10以下 口縁10 以下	傾き復元	外: 灰白5Y7/1(釉) 内: 灰白5Y7/1(釉) 断: 褐灰10YR6/1	内外面施釉
13	11		青磁 碗	第4層 L8-d5	(16.4)	<2.2>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: オリブ灰10Y6/2(釉) 内: オリブ灰10Y6/2(釉) 断: 灰白7.5Y8/1	内外面施釉
14	11		青磁 碗	第4層 L8-d2	—	<1.9>	(5.2)	10以下 高台50	反転復元	外: オリブ灰2.5GY6/1(釉) 灰白N7/0(露胎) 内: オリブ灰2.5GY6/1(釉) 断: 灰白N8/0	見込みに草花の印紋 内外面施釉、底部外面(高台内側・畳付含む) 露胎 畳付平滑
15	11		青磁 碗	第4層 L8-d3	(16.0)	6.3	(5.6)	50 口縁10 以下	反転復元	外: 灰オリブ7.5Y6/2(釉) 赤灰2.5YR5/1(露胎) 内: 灰オリブ7.5Y6/2(釉) 断: 灰白5Y7/1	内外面施釉、底部外面(高台内側・畳付含む) 露胎 畳付平滑
16	11	カラー 2	輸入陶器 壺	第4層 L8-d2	—	<2.1>	(10.2)	10以下 底部20	反転復元	外: 灰オリブ7.5Y6/2(釉) 灰白5Y7/1(露胎) 内: 灰白N7/0(露胎) 断: 灰白5Y7/1	体部外面施釉、内面、底部外面露胎 胎土にオリブ黒5Y3/2の斑点
17	11		備前焼 甕	第4層 L8-d3	(34.4)	<8.6>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: 黄灰2.5Y4/1 内: 黄灰2.5Y4/1 断: 褐灰10YR5/1	
18	11		瓦質土器 風舟か	第4層 L8-d3	—	<5.8>	—	10以下	傾き復元	外: 黄灰2.5Y7/2 内: 灰白5Y8/1 断: 灰白2.5Y8/1	
19	11		石製品 鍋 (再加工)	第4層 L8-d2	長 <5.5>	幅 <6.1>	厚 1.2	—		外: 黒褐10YR3/1 内: 灰5Y6/1 断: 灰白5Y7/1	片面にスス付着、石鍋を再加工 石鍋時の外面(スス付着)に石鍋成形時のケ ズリ痕 内面、断面台形の線刻と図上の上部端から 右上部にかけての平坦面は再加工か 霽石
20	12		金属製品 小柄	第3～5層 L7-d9	長 (9.2)	柄幅 1.6	柄厚 0.5	—			
21	12		金属製品 馬鍔(歯)	第3～5層 L8-e1	長 (9.3)	最大幅 1.8	厚 1.3	—	歯1本		

表2 掲載遺物一覧表(2)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
22	12		金属製品 銭貨	第4～5層 L8-d1	径 2.45	孔 0.60	厚 0.12	90			天聖元寶 1.8g
第5面(第5・6層)											
23	14	34	土師器 皿	70溝 上層	(8.6)	1.3	—	60	転用復元	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:にぶい褐7.5YR6/3 断:灰白10YR8/2	
24	14		土師器 皿	70溝 上層	(9.2)	1.5	—	20 口縁30	反転復元	外:灰白10YR8/2 内:灰白10YR8/2 断:橙7.5YR6/6	
25	14		土師器 皿	70溝 上層	(11.2)	<2.0>	—	20 口縁30	反転復元	外:灰白10YR8/1 内:灰白10YR8/1 断:明褐灰7.5YR7/2	
26	14	34	土師器 皿	70溝	7.2	1.6	—	60 口縁80		外:灰白2.5Y8/1 内:灰白2.5Y8/1 断:灰白2.5Y8/1	口縁部歪む
27	14		土師器 皿	70溝 上層	(8.0)	<1.5>	—	20 口縁30	反転復元	外:浅黄橙10YR8/3 内:淡黄2.5Y8/3 断:淡黄2.5Y8/3	
28	14		白磁 碗	70溝	(14.6)	<2.7>	—	10以下 口縁20	反転復元	外:灰白10Y8/1(釉) 内:灰白10Y8/1(釉) 断:灰白N8/0	内外面施釉
29	14	34	青白磁 合子蓋	70溝	—	<0.6>	—	10以下	傾き復元	外:明緑灰10GY8/1(釉) 内:灰白7.5Y8/1(釉) 灰白N8/0(露胎) 断:灰白N8/0	内外面施釉 ただし内面は釉のかかっていない部分あり
30	14	34	青磁 碗	70溝 上層	—	<1.5>	(5.4)	10以下 高台50	反転復元	外:灰オリーブ5Y5/3(釉) 灰白7.5Y7/1(露胎) 内:灰オリーブ5Y5/3(釉) 断:灰白5Y7/1	見込みに草花の印紋 底部外面(高台内側・畳付含む)露胎 畳付にたれた釉付着、砂目
31	14		瓦器 碗	70溝 上層	(11.7)	3.6	3.2	50 高台100	反転復元 (口縁部 ～体部)	外:灰白N8/0 内:灰白N8/0 断:灰白N8/0	
32	14		須恵器 碗	70溝 上層	(14.8)	<4.4>	—	20 口縁40	反転復元	外:灰N5/0 内:灰N5/0 断:灰白N7/0	
33	14	35	須恵器 碗	70溝	—	<1.8>	(6.0)	10以下 底部50	反転復元	外:灰N5/0 内:暗青灰5PB4/1 断:灰N6/0	底部外面糸切り離し
34	14	35	須恵器 甕	70溝	—	長 <14.7>	—	10以下	天地傾き 不明	外:灰N5/0 内:灰白5Y7/1 断:灰白2.5Y7/1	内面剥離 外面樹枝紋痕
35	14	35	須恵器 鉢	70溝	(26.2)	<4.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外:黄灰2.5Y6/1 内:灰白N7/0 断:灰白5Y7/1	
36	14	36	瀬戸焼 直縁大皿	70溝 上層	—	<4.9>	(20.5)	10以下 高台30	反転復元	外:オリーブ灰10Y6/2(釉) 灰白7.5Y7/1(露胎) 内:灰白7.5Y7/2(釉) 断:灰白5Y7/1	内面、外面体部上部に施釉(灰釉)、一部釉 がたれているが下部は露胎か 畳付に砂目
37	14		常滑焼 鉢	70溝	—	<6.3>	(15.4)	10以下 底部20	反転復元	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:灰褐7.5YR6/2 断:褐灰10YR6/1	体部外面ヘラナデ
38	14	36	常滑焼 壺か	70溝	—	<5.3>	—	10以下	傾き復元	外:灰赤2.5YR4/2 内:黄灰2.5Y5/1 断:灰白2.5Y7/1	外面最下部回転ヘラケズリ
39	14		常滑焼 甕	70溝 上層	—	長 <5.8>	—	10以下	傾き不明	外:灰褐5YR4/2 内:にぶい褐7.5YR5/3 断:黄灰2.5Y6/1	押印紋
40	14		常滑焼 甕	70溝	—	長 <6.3>	—	10以下	傾き不明	外:黒褐10YR3/1 内:黒褐10YR3/1 断:褐灰7.5YR6/1	押印紋
41	14	34	瓦質土器 火鉢	70溝 上層	—	長 <6.8>	—	10以下	傾き不明	外:灰5Y6/1 内:灰白5Y7/1 断:灰白2.5Y8/1	平面輪花形 剥離著しく調整不明 体部外面に菊花紋スタンプ
42	14		石製品 鍋	70溝 上層	—	<3.8>	(12.0)	10以下 底部30	反転復元	外:黒N2/0 内:灰5Y4/1 断:暗灰N3/0	体部外面から底部外面スス付着 滑石
43	15	34	瓦質土器 羽釜	70溝	(19.4)	<12.3>	—	10以下 口縁30	反転復元	外:灰N4/0 内:灰N4/0 断:灰白5Y8/1	体部外面、脚にスス付着
44	15		瓦質土器 羽釜	70溝	(29.2)	<12.8>	—	20 口縁30	反転復元	外:暗灰N3/0 内:灰N4/0 断:灰白5Y8/1	内面工具によるナデ
45	17	36	土師器 皿	70溝 下層	7.6	1.2	—	80		外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白10YR8/2 断:にぶい黄橙10YR7/2	
46	17	36	土師器 皿	70溝 下層	8.3	1.6	—	100		外:橙5YR7/6 内:浅黄橙10YR8/3 断:—	
47	17		土師器 皿	70溝 下層	(11.2)	2.8	—	40 口縁30	反転復元 (口縁部 ～体部)	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/2 断:にぶい黄橙10YR7/2	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナ デ

表3 掲載遺物一覧表(3)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
48	17	36	土師器皿	70溝下層	11.4	2.3	—	80 口縁70		外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y6/2	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
49	17	35	瓦器碗	70溝下層	10.9	3.4	3.6	90		外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白N8/0	
50	17		瓦質土器鍋	70溝下層	(26.2)	(5.1)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 黒褐10YR3/2 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	体部内面工具によるナデ
51	17	36	須恵器皿	70溝下層	(8.4)	(2.2)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰白N8/0 内: 灰5Y5/1 断: 灰白5Y7/1	
52	17		須恵器鉢	70溝下層	(30.4)	(3.1)	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外: 灰5Y6/1 内: 灰5Y5/1 断: 灰白5Y7/1	
53	17		青磁碗	70溝下層	—	(6.0)	5.1	20 高台100	反転復元(体部)	外: 灰白10Y7/2(釉) 灰7.5Y6/1(露胎) 内: 明オリブ灰5GY7/1 断: 灰白N7//0	体部外面に鎬蓮弁紋 見込みに片彫の段 底部外面(高台内側・畳付含む)露胎(一部釉こぼれあり)
54	17		常滑焼鉢	70溝下層 107溝上層	(28.5)	(6.5)	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外: にぶい橙7.5YR6/4 内: 灰褐7.5YR5/2 断: 灰N5/0	体部外面ヘラナデ
55	17	36	土師器甕	70溝下層	—	長 (11.5)	—	10以下	天地傾き不明	外: にぶい黄橙10YR7/4 内: 褐灰10YR4/1 断: にぶい黄橙10YR7/4	
56	17		木製品用途不明	70溝下層	長 (59.2)	幅 (10.7)	厚 2.1	—			木取り: 板目 樹種: ヒノキ
57	19	37	土師器皿	107溝上層	6.7	1.6	—	100		外: 灰白10YR8/1 内: 灰白10YR8/2 断: —	内面は剥離しており不明だが、口縁部外面半分横ナデ、半分指オサエ
58	19	37	土師器皿	107溝上層	6.2	1.5	—	90 口縁40		外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: にぶい橙7.5YR7/4	内面ハケ、のち横ナデ
59	19	37	土師器皿	107溝上層	9.2	1.8	—	100		外: 明黄褐10YR7/6 内: 明黄褐10YR7/6 断: にぶい黄橙10YR7/4	
60	19	37	瓦質土器鍋	107溝上層	(20.2)	(5.4)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰白10YR7/1 内: 灰白2.5Y8/1 断: 灰白10YR8/1	内外面スス付着
61	19	38	須恵器甕	107溝上層	—	(4.1)	—	10以下	傾き復元	外: 灰白2.5Y7/1 内: 灰白N8/0 断: 灰白2.5Y8/1	
62	19	37	青磁碗	107溝上層	—	(2.6)	(6.1)	10以下 高台20	反転復元	外: オリブ灰10Y6/2(釉) 灰オリブ7.5Y6/2(露胎) 内: オリブ灰10Y6/2(釉) 断: 灰白5Y8/1	見込みに片彫の段 内面、外面体部から高台施釉、底部外面露胎
63	19	37	白磁多角杯	107溝	—	(2.1)	—	10以下 口縁10以下	傾き復元	外: 灰白7.5Y8/1(釉) 内: 灰白7.5Y8/1(釉) 断: 灰白5Y8/1	内外面施釉 細かい貫入あり 胎土に黒色微粒を含む
64	19	37	瀬戸焼(底部)	107溝上層	—	(2.1)	(9.5)	10以下 底部20	反転復元	外: 灰白7.5Y7/2(釉) 内: 灰白2.5Y7/1(露胎) 断: 灰白5Y8/1	外面施釉(灰釉) 底部外面に目跡
65	19		常滑焼甕	107溝上層	—	長 (12.9)	—	10以下	傾き不明	外: 灰褐5YR5/2 内: 褐灰7.5YR4/1 断: 灰白10YR7/1	押印紋
66	19	38	常滑焼鉢	107溝上層	(22.8)	9.4	(11.4)	10以下	反転復元	外: 褐灰10YR5/1 内: 褐灰7.5YR5/1 断: 灰白2.5Y7/1	体部外面ヘラナデ上げ 底部外面不調整
67	19	41	木製品折敷(底板)	107溝上層	長 (22.6)	幅 (4.3)	厚 0.4	—			木取り: 柾目 樹種: ヒノキ 粗い加工痕を残す面と平滑で刃物傷を有する面 2枚重ねの底板か 端部に沿って2孔一対の孔、一部に樹皮紐遺存
68	19	41	木製品(指物か)	107溝上層	長 (17.3)	幅 (2.2)	厚 0.6	—			木取り: 板目 樹種: スギ 側面に木釘孔2箇所
69	20	39	備前焼播鉢	107溝上層	—	(6.9)	(9.9)	30	反転復元	外: にぶい赤褐5YR5/4 内: にぶい赤褐5YR5/4 断: にぶい橙5YR7/4	播目1条6本 内面下部使用痕
70	20	38	備前焼播鉢	107溝上層	(26.0)	(7.3)	—	20	反転復元	外: 灰褐7.5YR5/2 内: 暗灰黄2.5Y5/2 断: 黄灰2.5Y6/1	播目1条6本以上 内面下部使用痕
71	20	38	備前焼播鉢	107溝上層	(26.0)	(7.2)	—	20	反転復元	外: 灰赤2.5YR4/2 内: にぶい赤褐2.5YR4/3 断: にぶい赤褐5YR5/4	播目1条6本か
72	20	39	備前焼播鉢	107溝上層	(26.2)	10.2	(12.4)	20	反転復元	外: にぶい赤褐2.5YR4/3 内: にぶい赤褐2.5YR4/3 断: 橙5YR6/6	播目1条9本 内面使用痕
73	20	39	備前焼播鉢	107溝上層	(25.0)	(8.0)	—	20	反転復元	外: 灰赤2.5YR4/2 内: 灰褐5YR4/2 断: 灰黄2.5Y7/2	播目1条8本 内面下部使用痕

表4 掲載遺物一覧表(4)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
74	20		備前焼 播鉢	107溝 上層 西肩杭列部	—	〈2.4〉	(15.0)	10以下 底部20	反転復元	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい褐7.5YR5/4 断：灰白2.5Y7/1	播目1条9本 内面使用痕
75	20		備前焼 播鉢	107溝 上層	—	〈8.3〉	(16.2)	20	反転復元	外：にぶい赤褐2.5YR5/4 内：灰白2.5Y7/1 断：灰白2.5Y8/1	播目1条8本 内面使用痕
76	21		土師器 皿	107溝 下層	(7.2)	〈1.6〉	—	20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/4 断：にぶい黄橙10YR6/3	
77	21		瓦器 椀	107溝 下層	(12.0)	4.2	3.3	30	反転転用 復元 (口縁部 ～体部)	外：灰白5Y7/1 内：灰N5/0 断：灰白N7/0	
78	21		青磁 碗	107溝 下層	—	〈2.8〉	(5.8)	10以下 高台20	反転復元	外：オリーブ灰10Y6/2(釉) 灰白5Y7/2(露胎) 内：オリーブ灰10Y6/2(釉) 断：灰N6/0	内外面施釉 底部外面(高台内側・畳付含む)露胎
79	21	40	備前焼 播鉢	107溝 下層	(27.8)	〈8.4〉	—	30	反転復元	外：橙2.5YR6/6 内：橙5YR6/6 断：にぶい黄褐10YR5/4	播目1条9本 内面下部使用痕
80	21	40	備前焼 播鉢	107溝 上層/下層	(28.8)	10.3	(16.0)	60	反転復元	外：にぶい橙5YR6/4 内：灰赤10R4/2 断：黄灰2.5Y6/1	播目1条7本 内面下部使用痕
81	21	40	常滑焼 甕	107溝 下層	—	長 (9.6)	—	10以下	傾き不明	外：褐灰10YR5/1 内：褐灰10YR5/1 断：灰白2.5Y7/1	押印紋
82	21		常滑焼 甕	107溝 上層/下層	—	〈11.8〉	—	10以下	傾き復元	外：黄灰2.5Y4/1 内：褐灰10YR4/1 断：灰白10YR7/1	押印紋
83	21	40	瓦質土器 羽釜	107溝 下層	(28.4)	〈7.5〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白5Y8/1 内：灰N5/0 断：灰白5Y8/1	内面ハケ、のち口縁部横ナデ、体部工具によるナデ
84	21	40	瓦質土器 羽釜	107溝 下層	(27.6)	〈9.2〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰5Y6/1 内：灰白5Y7/1 断：灰黄2.5Y7/2	内面ハケ、のち口縁部横ナデ、体部ナデ 外面鈔の下面以下ケズリ
85	21	41	金属製品 鍋	107溝 下層	—	〈3.5〉	—	10以下	反転復元		鉄 鑄造
86	22	41	木製品 (底板)	107溝 下層	径 13.5	—	厚 0.8	—			木取り：柾目 樹種：スギ 側面に加工痕跡に残る 蓋の可能性あり
87	22	41 カラー 4	漆器 椀	107溝 下層	(14.0)	(4.9)	(6.4)	50	反転復元	外：赤、底部(高台含む)黒 内：赤 口縁部剥落のため不明	木取り：横木地板目取 樹種：ミズキ
88	22	41 カラー 4	漆器 椀	107溝 下層	(15.4)	(6.3)	7.4	60 高台90	反転復元 (口縁部 ～体部)	外：赤、底部(高台外側除く、畳付 は剥落のため不明)黒 内：赤	木取り：横木地柾目取 樹種：ブナ属
89	22		石器 剥片	107溝 最下層	長 4.1	幅 (3.6)	最大厚 0.5	—			2次加工 珪質黒色片岩
90	25	42	土師器 皿	450溝 上層	6.7	1.6	—	80 口縁70		外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部2箇所スス付着
91	25		土師器 皿	450溝 上層	(7.6)	1.0	—	20 口縁30	反転復元	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
92	25		土師器 皿	450溝 上層	(6.9)	〈1.5〉	—	30 口縁40	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	全体的に歪む
93	25		土師器 皿	450溝 上層	(8.0)	〈1.4〉	—	20 口縁30	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部スス付着
94	25		土師器 皿	450溝 上層	(7.2)	1.5	—	20 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	
95	25	42	土師器 皿	450溝	6.8	2.1	—	100		外：浅黄2.5Y7/3 内：浅黄2.5Y7/3 断：灰黄2.5Y7/2	内面ハケ、のち横ナデ
96	25	42	土師器 皿	450溝 上層	(20.6)	〈3.5〉	—	20 口縁30	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y8/1 断：灰白5Y7/1	外面にスス付着
97	25		瓦器 椀	450溝 上層	(13.8)	3.3	(4.4)	20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白2.5Y7/1	
98	25		灰釉陶器 椀	450溝	—	〈2.0〉	(7.0)	10以下 高台30	反転復元	外：灰白5Y8/1(釉) 灰白5Y7/1(露胎) 内：灰白5Y8/1(釉) 灰白5Y7/1(露胎) 断：灰白5Y7/1	体部外面回転ヘラケズリ 貼り付け高台 体部内外面施釉(灰釉)つけがけ、底部内 外面露胎
99	25		瀬戸焼 平椀	450溝 上層	—	〈2.3〉	(5.3)	10以下 高台40	反転復元	外：灰白2.5Y7/1(露胎) 内：オリーブ黄5Y6/3(釉) 断：灰白2.5Y8/2	削り出し高台 内面施釉(灰釉)

表5 掲載遺物一覧表(5)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
100	25	カラー2	輸入陶器壺	450溝上層	—	〈8.7〉	—	10以下	傾き復元	外：灰オリーブ7.5Y5/2(釉) 灰白N7/0(露胎) 内：灰白5Y7/1 断：灰5Y6/1	外面回転ナデ、のち回転ケズリ 内面回転ナデ 外面の調整から体部中位から下位と思われる 外面に釉と思われる附着物、釉が剥落したか 内面の施釉の有無は不明 胎土に黒色(灰N4/0)斑点(大宰府分類のB群)
101	25	42	青磁碗	450溝上層	—	〈3.5〉	4.6	40 高台100	反転復元(一部)	外：明オリーブ灰2.5GY7/1(釉) 灰N5/0(露胎) 内：明オリーブ灰2.5GY7/1(釉) 断：灰白N7/0	見込みに双魚の印紋 底部外面(高台内側・畳付含む)露胎
102	25	42	白磁碗	450溝上層	—	〈2.5〉	4.2	40 高台70	反転転用復元(一部)	外：白(釉) 灰白2.5Y7/1(露胎) 灰N5/0(墨書) 内：白(釉) 断：白	内外面施釉、体部外面下部、底部外面露胎 底部外面に「上」墨書
103	25		山茶碗鉢	450溝上層	—	〈2.6〉	—	10以下 高台30	傾き復元 反転復元	外：灰7.5Y6/1 内：灰7.5Y6/1 断：灰オリーブ5Y6/2	
104	25		須恵器鉢	450溝上層	(28.5)	〈7.5〉	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	体部内面下半使用痕
105	25	43	瓦質土器羽釜	450溝上層	(20.0)	〈13.5〉	—	30 口縁20	反転復元	外：黒2.5Y2/1 内：黒褐2.5Y3/1 断：灰白2.5Y8/1	内面ナデ 体部外面指オサエ、のちナデ 内外面スス附着
106	25		瓦質土器羽釜	450溝上層	(22.4)	〈9.7〉	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外：黒5Y2/1 内：灰5Y5/1 断：灰黄2.5Y6/2	外面に著しくススが附着しており、外形凶化、調整観察できない部分あり 内面工具によるナデ
107	26	43	瓦質土器羽釜	450溝上層	(22.2)	〈4.5〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外：黒10YR2/1 内：黄灰2.5Y6/1 断：黄灰2.5Y6/1	外面スス附着、特に鏝下著しく、外形凶化不能
108	26	43	瓦質土器羽釜	450溝上層	(27.0)	〈5.2〉	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外：灰5Y6/1 内：灰5Y6/1 断：灰黄2.5Y7/2	体部外面鏝以下スス附着
109	26	43	瓦質土器羽釜	450溝上層	(32.5)	〈9.8〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N4/0 内：灰白5Y8/1 断：灰白5Y8/1	体部外面鏝以下スス附着
110	26	44	瓦質土器羽釜	450溝上層	(24.1)	〈9.8〉	—	20 口縁30	反転復元	外：灰7.5Y6/1 内：灰5Y6/1 断：灰白2.5Y8/1	内面ハケ、のち工具によるナデ 体部外面一部スス附着
111	26	43	瓦質土器羽釜	450溝上層	(26.3)	〈16.3〉	—	20 口縁40	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰白2.5Y7/1	体部内面ハケ、のち工具によるナデ スス附着
112	26	44	瓦質土器羽釜	450溝上層	(28.0)	〈8.8〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰5Y5/1 内：灰白2.5Y7/1 断：灰白2.5Y8/1	内外面スス附着、特に口縁部内面著しい
113	27	43	瓦質土器羽釜	450溝上層	(25.6)	〈11.2〉	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外：黒N2/0 内：黒N2/0 断：灰白7.5Y7/1	口縁部内面ハケ、のち横ナデ 体部内面ハケ、のち工具によるナデ 内外面スス附着
114	27	44	瓦質土器羽釜	450溝上層	(27.0)	〈18.8〉	—	30 口縁30	反転復元	外：灰7.5Y6/1 内：灰7.5Y6/1 断：灰白7.5Y7/1	体部内面工具によるナデ スス附着
115	27	44	瓦質土器羽釜	450溝上層	(28.2)	〈7.6〉	—	10以下 口縁30	反転復元	外：灰N4/0 内：暗灰N3/0 断：灰白5Y7/1	体部外面鏝以下スス附着
116	27	44	瓦質土器羽釜	450溝上層	(34.8)	〈8.3〉	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外：黄灰2.5Y6/1 内：褐灰10YR5/1 断：灰白5Y7/1	内面粗いハケ、のち工具によるナデ 内外面スス附着
117	27	44	瓦質土器甕	450溝上層	(36.7)	〈5.6〉	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
118	27		石製品鏝	450溝上層	—	〈2.5〉	—	10以下	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰5Y6/1	外面鏝下にスス附着 滑石
119	28		瓦平瓦	450溝上層	長31.7	幅〈11.7〉	最大厚2.0	50	傾き復元	凹：灰N5/0 凸：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	凹面側縁に平行に工具による調整 凸面斜め方向の緩弧線(糸切り痕)、離れ砂痕 凹面中心にスス附着
120	28	45	金属製品短刀	450溝上層	刀身長(29.4) 刃長(21.9) 茎長7.5	刀身最大幅2.3 柄最大幅2.9	刀身最大厚0.6 柄厚1.7	刀身95 柄一部 残存			柄木取り：板目か 樹種：モクレン属 平造 庵棟 柁目肌 茎生ぶ 茎尻は栗尻 目釘径0.5cm 鏝のみ漆塗布
121	29	カラー5	漆器碗	450溝上層	(17.4)	(5.2)	7.5	60	反転復元(口縁部～体部)	外：赤、底部(高台含む)黒 内：赤 口縁端部：黒	木取り：横木地柁目取 樹種：コナラ属コナラ亜属コナラ節
122	29	カラー5	漆器碗	450溝上層	13.6	4.5	6.4	90		外：赤、底部(高台含む)黒 内：赤 口縁端部：黒	木取り：横木地柁目取 樹種：ケンボナシ属 底部外面に「×」の線刻
123	29	46	木製品折敷(底板)	450溝上層 107溝下層	長(19.3)	幅(7.8)	厚0.5	—			木取り：柁目 樹種：スギ 刃物傷多数

表6 掲載遺物一覧表(6)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
124	29		木製品 折敷か (底板)	450溝 上層	長 (11.0)	幅 (3.8)	厚 0.25	—			木取り：柾目 樹種：スギ 2孔一対の孔に樹皮紐残存
125	29	46	木製品 篋	450溝 上層	長 25.0	最大幅 (2.8)	最大厚 0.5	—			木取り：板目 樹種：スギ 柄に凹状の加工 上部が欠損している ので紐通し孔の一部と考える
126	29	46	木製品 (底板か)	450溝 上層	長 (25.0)	幅 (5.3)	厚 1.3	—			木取り：板目 樹種：スギ 両側面に竹釘孔各2箇所
127	29	46	木製品 (釘付 部材)	450溝 上層	長 (14.6) 釘長 2.4	幅 2.4 釘頭部 最大幅 0.6	厚 2.2 釘身 最大厚 0.25	—			木取り：四方柾 樹種：ヒノキ科
128	29	46	木製品 用途不明	450溝 上層	長 (8.9)	幅 11.9	厚 1.0	—			木取り：柾目 樹種：スギ 径1.5cmの孔1箇所 径0.5cmの孔2箇所 径0.5cmの孔の内1箇所には竹釘と樹皮が残 存
129	30		土師器 皿	450溝 下層	(6.8)	(1.7)	—	30	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	残存率30%のため確認できないが、口縁部 外面に横ナデを施す部分と指オサエを施す 部分がある可能性
130	30		土師器 皿	450溝 下層	(7.7)	1.7	—	40		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部外面横ナデを施す部分と指オサエを 施す部分あり 内面にハケを施すが、外面に横ナデを施す 部分では内面にも横ナデが施されており消 えている
131	30		土師器 皿	450溝 下層	(9.9)	(3.0)	—	30 口縁20	反転復元 (一部)	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	
132	30	47	土師器 皿	450溝 下層	6.9	1.4	—	60		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	
133	30		土師器 皿	450溝 下層	(7.6)	1.1	—	50	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	内面横ナデ、のちハケのちナデ
134	30		土師器 皿	450溝 下層	8.0	1.5	—	50	反転復元	外：にぶい黄2.5Y6/3 内：にぶい黄2.5Y6/3 断：にぶい黄7.5YR7/4	
135	30	47	土師器 皿	450溝 下層	8.6	1.6	—	80		外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/4 断：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部にスス付着
136	30		土師器 皿	450溝 下層	8.5	1.9	—	80 口縁70		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	内面ハケ、のちナデ
137	30	47	土師器 皿	450溝 下層	10.4	2.4	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	内面ハケ、のち口縁部横ナデ
138	30		土師器 皿	450溝 下層	(7.8)	1.5	—	30	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	体部外面から底部外面指オサエ
139	30		土師器 皿	450溝 下層	(9.0)	(1.9)	—	20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
140	30		土師器 皿	450溝 下層	(10.0)	(1.7)	—	20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	横ナデ小刻みに止めながら施す
141	30		土師器 皿	450溝 下層	(11.8)	(1.4)	—	10以下	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	
142	30		土師器 皿	450溝 下層	(13.0)	2.2	—	20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰白2.5Y7/1	
143	30		瓦器 皿	450溝 下層	(8.2)	1.8	—	30 口縁30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰白N8/0 断：灰5Y5/1	
144	30		瓦器 碗	450溝 下層	(11.8)	3.2	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	
145	30	48	瀬戸焼 天目碗	450溝 下層	(12.0)	(6.4)	—	20 口縁10 以下	反転復元	外：黒5Y2/1(釉) 灰白2.5Y7/1(露胎) 内：黒5Y2/1(釉) 断：灰白5Y8/1	内外面施釉(鉄釉)、体部外面下部露胎
146	30	48	瀬戸焼 平碗	450溝 下層	—	(2.4)	4.8	20 高台100	反転復元 (体部)	外：灰白2.5Y7/1(露胎) 内：灰オリーブ5Y6/2(釉) 断：灰白2.5Y8/1	削り出し高台 内面施釉(灰釉)、外面露胎 内面に胎土目
147	30	48	瀬戸焼 折縁中皿	450溝 下層	(17.9)	(3.1)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：灰オリーブ7.5Y6/2(釉) 内：灰白5Y7/2(釉) 断：灰白2.5Y7/1	内外面施釉 内外面と断面の一部に炭化物付着
148	30	47	青磁 碗	450溝 下層	—	(2.5)	5.0	30 高台100	反転復元 (体部)	外：オリーブ灰10Y5/2(釉) 黄灰2.5Y5/1(露胎) 内：オリーブ灰10Y6/2(釉) 断：灰N6/0	見込みに草花の印紋 底部外面(高台内側・畳付含む)露胎
149	30		青磁 碗	450溝 下層	(14.9)	(5.2)	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：オリーブ灰2.5GY6/1(釉) 内：オリーブ灰10Y6/2(釉) 断：灰白N8/0	見込みに沈線または段 内外面施釉

表7 掲載遺物一覧表(7)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
150	30	47	青磁皿	450溝下層	(13.2)	3.1	(8.9)	10以下	反転復元	外: 灰白10Y7/2(釉) 灰褐7.5YR5/2(露胎) 内: 灰白7.5Y7/2(釉) 灰褐7.5YR5/2(露胎) 断: 灰白5Y7/1	見込みに段 内外面施釉 見込み、底部外面の釉を環状に掻き取る
151	30		白磁碗	450溝下層	(15.9)	(5.3)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰白7.5Y8/1(釉) 灰黄2.5Y7/2(露胎) 内: 灰白7.5Y8/1(釉) 断: 灰白N8/0	見込みに沈線 内外面施釉、体部外面下部露胎
152	30	47	白磁皿	450溝下層	—	(2.5)	(4.4)	20 底部40	反転復元	外: 灰白5Y7/2(釉) 灰白7.5Y8/1(露胎) 内: 灰白7.5Y8/2(釉) 断: 灰白5Y8/1	見込みに段 内外面施釉、底部外面露胎
153	31		常滑焼甕	450溝下層	—	長 (5.1)	—	10以下	天地傾き不明	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰5Y6/1	押印紋 胎土に灰N5/0の粒含む
154	31		常滑焼甕	450溝下層	—	長 (7.2)	—	10以下	傾き不明	外: 褐灰7.5YR4/1 内: 褐灰10YR4/1 断: 黄灰2.5Y6/1	押印紋
155	31		須恵器鉢	450溝下層	(28.4)	(3.8)	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰N6/0	
156	31		備前焼播鉢	450溝下層	—	(5.2)	(17.4)	10以下 底部10以下	反転復元	外: 灰N4/0 内: 黄灰2.5Y4/1 断: 灰N5/0	描目1条8本 内面使用痕
157	31		備前焼壺	450溝下層	—	(10.4)	(15.5)	10以下 底部10以下	反転復元	外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰N6/0	底部内面から体部たちあがりにかけてナデと指オサエ、体部内面縦方向のナデ 体部外面縦方向の板ナデ、底部外面不調整
158	31	49	瓦質土器羽釜	450溝下層	(16.1)	(4.5)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 黒褐2.5Y3/1 内: 黒褐2.5Y3/1 断: 灰白2.5Y7/1	内面工具によるナデ 外面スス付着しており調整不明
159	31	49	瓦質土器羽釜	450溝下層	(16.8)	(6.0)	—	10以下 口縁10	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	スス付着
160	31	49	瓦質土器羽釜	450溝下層	(21.6)	(9.0)	—	20 口縁20	反転復元	外: 黒10YR2/1 内: 黒褐10YR3/1 断: 灰白5Y8/1	内面工具によるナデ 体部外面指オサエ 焼成後穿孔(割れ目にスス付着せず) 内外面スス付着
161	31		瓦質土器羽釜	450溝下層	(30.0)	(11.8)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰白2.5Y7/1 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y7/2	内外面剥離著しい
162	31	50	瓦質土器羽釜	450溝下層	(30.6)	(8.9)	—	10以下 口縁10以下	傾き復元 反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	内外面スス付着
163	32	49	瓦質土器羽釜	450溝下層	(28.8)	(7.8)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 黒褐2.5Y3/1 断: 灰黄2.5Y7/2	内面工具によるナデ スス付着
164	32	50	瓦質土器羽釜	450溝上層/下層	(30.8)	(6.8)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 灰白7.5Y7/1 断: 灰白7.5Y8/1	内面工具によるナデ 体部外面スス付着
165	32	50	瓦質土器羽釜	450溝下層	(25.8)	(9.5)	—	10以下 口縁30	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰5Y6/1 断: 灰白5Y7/1	内面工具によるナデ 体部外面スス付着
166	32	49	瓦質土器羽釜	450溝下層	(28.0)	(14.0)	—	10以下 口縁10	反転復元	外: 黒N2/0 内: 灰白5Y7/1 断: 灰白5Y7/1	内面工具による横方向のナデ スス付着
167	32	50	瓦質土器羽釜	450溝下層	(33.3)	(15.0)	—	20 口縁20	反転復元	外: オリーブ黒5Y3/1 内: 黒N2/0 断: 灰白5Y8/1	内外面にススが著しく付着しており、 ハケメ観察困難
168	33	49	瓦質土器羽釜	450溝下層	(14.2)	(4.4)	—	10以下 口縁10	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 暗灰N3/0 断: 灰白5Y7/1	内面工具によるナデを施すか 体部外面鏝下にスス付着
169	33	49	瓦質土器羽釜	450溝下層	(20.2)	(7.4)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰白2.5Y7/1 内: 黄灰2.5Y6/1 断: 灰白2.5Y7/1	特に体部外面鏝下にスス付着
170	33	50	瓦質土器羽釜	450溝下層	(13.4)	(5.5)	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰5Y6/1	体部外面鏝下にケズリが認められるが、 以下はススが付着しており調整不明
171	33	50	瓦質土器羽釜	450溝上層/下層	(24.8)	(9.7)	—	20 口縁50	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 灰N5/0 断: 灰7.5Y6/1	内面、口縁部横ナデ、のち体部にハケ、さらに工具による粗いナデ
172	33		瓦質土器鍋	450溝下層	(26.6)	(3.8)	—	10以下 口縁10	反転復元	外: 黄灰2.5Y5/1 内: 灰白2.5Y8/1 断: 灰黄2.5Y7/2	
173	33	48	瓦質土器風炉	450溝下層	—	(10.5)	—	10以下	傾き復元	外: 灰5Y6/1 内: 灰5Y6/1 断: 灰白5Y7/1	内面工具によるナデ 外面ミガキか
174	33	48	炉壁	450溝下層	幅 (10.3)	高 (12.6)	厚 (4.2)	10以下	傾き復元	内: 暗紫灰5RP4/1 灰N6/0(木炭痕) 断: 黒N2/0(黒色ガラス質滓) 橙5YR6/6(被熱痕跡) に、黄橙10YR7/2(1次焼成痕跡)	铸造用 円筒形の炉の底部付近 内面に木炭痕 断面にスサ・モミ痕 痕跡)

表8 掲載遺物一覧表(8)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
175	33		瓦平瓦	450溝下層	長(6.8)	幅(6.4)	最大厚1.4	10以下	傾き復元	凹:灰N5/0 凸:灰N5/0 断:灰白5Y7/1	凹面布目痕、側縁長軸方向のナデ 側面長軸方向のナデ 凸面側縁長軸方向のナデ
176	33	48	瓦平瓦	450溝下層	長(9.2)	幅(10.0)	最大厚2.8	10以下	傾き復元	凹:灰7.5Y4/1 凸:灰N5/0 断:灰白2.5Y8/1	凹面斜め方向の緩弧線(糸切り痕)、側縁にそって布目痕、粗いナデを施すか 凸面側面工具によるナデ
177	34		漆器皿か	450溝下層	—	(0.7)	(9.0)	10以下		外:赤、底部黒 内:赤	木取り:横木地板目取 樹種:クリ 底部外面に赤の紋様等あり
178	34	カラー5	漆器皿	450溝下層	13.7	2.1	8.9	70	反転復元(口縁部)	外:赤、底部(高台含む)黒 内:赤 口縁部:黒	木取り:横木地板目取 樹種:クリ
179	34	51	木製品呪符木筒	450溝下層	長15.6	幅2.7	厚0.3	100			木取り:柾目 樹種:スギ 表「蘇民将来之子孫住宅門也」 裏「九、八十一 八九七十二(逆字)」 上端と側面はケズリ、下端は切断
180	34		木製品折敷か(底板)	450溝下層	長(9.6)	幅(3.3)	厚0.4	—			木取り:柾目 樹種:スギ
181	34		木製品折敷か(底板)	450溝下層	長29.0	幅(5.1)	厚0.5	—			木取り:柾目 樹種:スギ 端部に孔、木釘(もしくは樹皮紐か)が残存 中央部分に孔2箇所、内1箇所は欠損の可能性もあり 表面に刃物傷、裏面にはなし
182	34		木製品折敷か(底板)	450溝下層	長(18.9)	幅(5.0)	厚0.2	—			木取り:柾目 樹種:ヒノキ科 粗い加工痕を残す面と平滑で刃物傷を有する面 2枚重ねの底板か
183	34		木製品桶(側板)	450溝下層	長(18.3)	最大幅(6.5) 最小幅6.0	厚1.7	—			木取り:板目 樹種:スギ 内面に底板の痕跡 外面に籬の痕跡 籬の痕跡と加工痕の位置関係から、籬をしめた後に削った可能性
184	34	51	木製品(底板)	450溝下層	径(29.0)	—	厚0.9	—			木取り:柾目 樹種:スギ 側面に木釘痕2箇所 曲物の底板か
185	34		木製品用途不明	450溝下層	長(10.6)	幅(3.8)	厚0.8	—			木取り:板目 樹種:スギ
186	35	カラー5	漆器椀	450溝最下層	—	(4.2)	—	20	反転復元	外:黒 内:黒 紋様:赤	木取り:横木地板目取 樹種:ブナ属 内外面に手描紋、ただし外面はほとんど剥落 高台削り取られたか
187	35		土師器皿	450溝最下層	(14.2)	2.1	—	30 口縁30	反転復元	外:灰白10YR8/2 内:灰白2.5Y8/1 断:灰白2.5Y8/1	
188	35		瓦質土器火鉢か風炉	450溝最下層	—	(3.9)	—	10以下		外:暗灰N3/0 内:灰N5/0 断:灰白2.5Y7/1	
189	35	51	木製品折敷(底板)	450溝最下層	長29.3	幅(8.5)	厚0.3	—			木取り:柾目 樹種:ヒノキ 粗い加工痕を残す面と平滑で刃物傷を有する面 2枚重ねの底板か 端部に沿って2孔一対の孔、一部に樹皮紐遺存
190	35	50	瓦質土器羽釜	450溝最下層	(25.2)	(6.3)	—	10以下 口縁30	反転復元	外:灰5Y5/1 内:黒褐10YR3/1 断:灰白5Y7/1	内面ハケ、のち口縁部横ナデ、体部ナデまたは工具によるナデ 体部外面ヘラケズリ スス付着
191	37		土師器皿	465溝上層	(7.5)	1.1	—	30	反転復元	外:灰白2.5Y8/2 内:浅黄2.5Y7/3 断:灰黄2.5Y7/2	
192	37		瓦器椀	465溝	(12.8)	(2.9)	—	20	反転復元	外:灰N5/0 内:灰N4/0 断:灰白5Y7/1	
193	37		瀬戸焼折縁小皿	465溝	(8.1)	(1.6)	—	10以下 口縁20	反転復元	外:浅黄5Y7/3(釉) 浅黄2.5Y8/3(露胎) 内:浅黄5Y7/3(釉) 断:灰白2.5Y8/2	内面、口縁部外面施釉(灰釉)
194	37	52	瀬戸焼天目椀	465溝上層	(12.0)	(6.1)	—	20	反転復元	外:灰黄褐10YR5/2に 黒7.5YR7/1が点々(釉) 灰白5Y7/1(露胎) 内:灰黄褐10YR5/2に 黒7.5YR7/1が点々(釉) 断:灰白N8/0	内外面施釉(鉄釉)、体部外面下部露胎
195	37	52	瀬戸焼折縁深皿か	465溝上層	—	(1.3)	(12.6)	10以下 底部30	反転復元	外:灰黄2.5Y7/2(露胎) 内:灰白5YR7/2(釉) 断:灰白5Y7/1	底部内面に紋様と思われるヘラ状工具による沈線、内面施釉(灰釉) 体部外面回転ヘラケズリ、底部外面不調整、砂痕か、一部釉付着
196	37		須恵器鉢	465溝上層	(26.5)	(4.7)	—	10以下 口縁10	反転復元	外:褐灰10YR5/1 内:黄灰2.5Y5/1 断:黄灰2.5Y5/1	
197	37	カラー1	高麗青磁梅瓶か	465溝上層	—	長(2.8)	—	10以下	傾き不明	外:オリープ灰2.5GY6/1(釉) 灰白10Y7/2(白象嵌) 暗緑灰10GY3/1(黒象嵌) 内:ふい、黄橙10YR6/3(露胎) オリープ灰2.5GY6/1(釉) 断:灰白5Y7/1	外面施釉、内面露胎(一部釉付着) 外面に白色、黒色の象嵌紋様 5と同一個体か

表9 掲載遺物一覧表(9)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
198	37	カラー2	輸入陶器壺か	465溝上層	—	〈6.1〉	(15.5)	10以下 底部10 以下	反転復元	外: 灰白7.5Y7/1(釉) 灰白N7/0(露胎) 内: 灰褐7.5YR4/2(露胎) 断: 灰白N7/0	内面回転ケズリ、のち回転ナデ 外面回転ナデ、のち回転ケズリ 外面に釉遺存するがほとんど剥落
199	38		土師器皿	465溝下層	7.0	1.4	—	60 口縁50	反転復元	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y7/2	
200	38		土師器皿	465溝下層	(7.6)	〈1.2〉	—	30 口縁40	反転復元	外: 灰白2.5Y8/2 内: 灰白2.5Y8/2 断: 灰白2.5Y8/2	内面ハケ、のち横ナデ 底部内面中央一定方向のナデ
201	38	52	土師器皿	465溝下層	7.2	1.2	—	100		外: にぶい黄橙10YR7/2 内: にぶい黄橙10YR7/2 断: —	底部内面中央一定方向のナデ
202	38	52	土師器皿	465溝下層	9.8	2.1	—	90 口縁90		外: にぶい黄橙10YR7/2 内: にぶい黄橙10YR7/2 断: にぶい黄橙10YR7/2	底部内面中央一定方向のナデ 底部内面に最終段階で不定方向の強いナデを2箇所へ施す
203	38	52	土師器皿	465溝下層	9.5	1.8	—	80 口縁60		外: 灰黄2.5Y7/2 内: 浅黄2.5Y8/3 断: 灰黄2.5Y7/2	底部内面中央不定方向のナデ
204	38	52	土師器皿	465溝下層	10.6	2.2	—	100		外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y7/2	底部内面中央一定方向のナデ、のち直交する方向に強いナデを1箇所へ施す
205	38		土師器皿	465溝下層	(9.6)	1.8	—	50 口縁30	反転復元	外: 灰白5Y7/1 内: 灰白5Y7/1 断: 灰白5Y7/1	内面ハケ、のち横ナデ
206	38		土師器皿	465溝下層	(10.7)	〈2.7〉	—	20 口縁20	反転復元	外: 灰白2.5Y8/2 内: 灰白2.5Y8/2 断: 灰白2.5Y8/2	
207	38		土師器皿	465溝下層	(11.0)	1.9	—	30 口縁30	反転復元	外: 灰黄褐10YR6/2 内: 灰黄褐10YR6/2 断: にぶい黄橙10YR7/2	
208	38		土師器皿	465溝下層	(10.8)	2.4	—	40 口縁40	反転復元	外: にぶい黄橙10YR7/2 内: 灰白10YR7/1 断: 灰白10YR7/1	
209	38		土師器皿	465溝下層	(10.4)	〈2.6〉	—	30 口縁40	反転復元	外: 淡黄2.5Y8/3 内: 淡黄2.5Y8/3 断: 淡黄2.5Y8/3	
210	38		瓦器碗	465溝下層	(11.6)	2.9	—	30 口縁30	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y8/1	
211	38	カラー2	輸入陶器鉢	465溝下層	(17.0)	〈3.3〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 黄灰2.5Y5/1 内: 灰5Y5/1 断: 灰N6/0	内外面施釉せず
212	38		山茶碗	465溝下層	—	〈2.0〉	7.2	10以下 高台60		外: 灰5Y6/1 内: 黄灰2.5Y6/1 断: 灰白2.5Y7/1	見込みに焼成前の刺突痕 見込み非常に平滑 底部外面糸切り離し
213	38		須恵器鉢	465溝下層	—	〈4.7〉	—	10以下		外: 灰5Y5/1 内: 灰5Y5/1 断: 灰5Y6/1	体部内面に使用痕
214	38		須恵器鉢	465溝上層/下層	(26.7)	〈7.1〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 黄灰2.5Y6/1 内: 灰7.5Y6/1 断: 灰白7.5Y7/1	口縁部内面から体部外面上部回転ナデ 体部内面横または斜め方向の静止ナデ 体部外面下部縦方向のナデ
215	38		瓦質土器羽釜	465溝下層	(16.8)	〈3.2〉	—	10以下 口縁30	反転復元	外: 灰白2.5Y8/1 内: 灰白2.5Y7/1 断: 灰白2.5Y7/1	内面ハケ、のちナデ 口縁部外面工具による横ナデ 内外面スス付着
216	38		瓦質土器羽釜	465溝上層/下層	(15.6)	〈7.4〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 灰N4/0 断: 灰白7.5Y8/1	体部内面工具によるナデ 体部外面スス付着
217	38		瓦質土器羽釜	465溝下層	—	長 〈22.0〉	—	10以下 脚1本	傾き不明	外: 暗灰N3/0 断: 灰白5Y8/1	
218	39		瓦質土器火鉢か風炉	465溝下層	—	〈7.3〉	—	10以下	傾き復元	外: 灰N4/0 内: 灰N5/0 断: 灰白N8/0	円形 内面横方向のナデ 外面剥離著しいが縦方向のミガキを施すか
219	39	52	須恵器甕	465溝下層	—	〈6.3〉	—	10以下	傾き復元	外: 灰N4/0 内: 灰白5Y7/1 断: 灰白5Y7/1	外面、頸部に右上がりの平行タタキ、のち肩部に樹枝紋タタキ 頸部の平行タタキは横ナデによってすり消されている
220	39		常滑焼甕	465溝下層	—	長 〈6.2〉	—	10以下	天地傾き不明	外: 褐灰5YR5/1 内: 褐灰10YR4/1 断: 灰5Y6/1	押印紋
221	39		常滑焼甕	465溝下層 70溝 107溝下層	—	長 〈21.3〉	—	10以下	傾き不明	外: 赤灰2.5YR4/1 内: 灰N5/0 断: 灰白N7/0	内面ナデ 外面縦方向の工具によるナデ 押印紋
222	39		備前焼甕	465溝下層 107溝 上層/下層 450溝 上層	—	〈31.6〉	(43.0)	10以下 底部20	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰5Y5/1 断: にぶい褐7.5YR5/3	内面ハケ、のち斜めから横方向の工具によるナデ 体部外面縦方向のハケ、のちケズリ、底部外面ハケ 胎土に0.5~2.0mmの青黒5PB2/1の粒を含む
223	40	52	土師器皿	465溝最下層	7.3	1.4	—	100		外: 浅黄橙10YR8/3 内: 浅黄橙10YR8/3 断: にぶい橙7.5YR7/4	
224	40		土師器皿	465溝最下層	(9.2)	1.8	—	50 口縁30	反転復元 (口縁部 ~体部)	外: にぶい黄橙10YR7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y7/2	

表10 掲載遺物一覧表 (10)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
225	40	52	土師器皿	465溝最下層	(10.3)	2.5	—	90 口縁50		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	底部内面一定方向のナデ
226	40		土師器皿	465溝最下層	(10.0)	2.0	—	40 口縁40	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
227	40	52	土師器皿	465溝最下層	9.0	1.9	—	100		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	内面ハケ、のち横ナデ、底部中央はハケのみ
228	40	52	土師器皿	465溝最下層	10.4	2.7	—	100		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：にぶい橙5YR6/3	内面の横ナデ小刻みに止めながら施す 底部内面一定方向のナデ
229	40	52	土師器皿	465溝最下層	10.9	2.6	—	100		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰白5Y7/1	底部内面一定方向のナデ
230	40	52	土師器皿	465溝最下層	9.9	2.5	—	100		外：黄灰2.5Y6/1 内：灰黄2.5Y6/2 断：黄灰2.5Y6/1	底部外面に圧痕
231	40	52	土師器皿	465溝最下層	10.0	2.5	—	100		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
232	40	52	土師器皿	465溝最下層	10.7	2.4	—	80 口縁80		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	内面の横ナデ小刻みに止めながら施す 底部外面に圧痕
233	40		土師器皿	465溝最下層	(10.1)	2.4	—	30 口縁40	反転復元	外：黄灰2.5Y6/1 内：灰黄2.5Y6/2 断：灰白2.5Y7/1	
234	40		青磁碗	465溝最下層	(14.4)	(4.1)	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：オリープ灰2.5GY5/1(釉) 内：オリープ灰2.5GY5/1(釉) 断：黄灰2.5Y6/1	見込みに沈線 内外面施釉
235	40		須恵器鉢	465溝最下層	(24.0)	(7.8)	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰5Y4/1 内：黄灰2.5Y4/1 断：灰白5Y7/1	口縁部内面から体部外面回転ナデ 体部内面横から斜め方向の静止ナデで仕上げる 体部外面下部主に縦方向のナデ 内面下半に使用痕
236	40		瓦質土器火鉢	465溝最下層	—	長 (8.7)	—	10以下	傾き不明	外：灰白7.5YR8/2 内：灰N4/0 断：灰白7.5YR8/2	方形 内外面(口縁部含む)ミガキを施すが剥離著しい
237	40		瓦質土器羽釜	465溝下層/ 最下層	(16.8)	(4.9)	—	20 口縁50	反転復元	外：暗灰N3/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y7/1	内面工具によるナデ 体部外面スス付着
238	40		瓦質土器羽釜	465溝下層/ 最下層	(33.0)	(8.1)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：暗灰N3/0 内：黒2.5GY2/1 断：灰黄2.5Y7/2	内面工具によるナデ 体部外面スス付着
239	40	52	木製品つちのこ	465溝最下層	長 9.0	最大径 3.8	最小径 1.7	60			木取り：芯持丸木 樹種：バラ科ナシ亜科 左右非対称
240	44	53	木製品柱	建物13 496柱穴	長 (35.3)	幅 12.6	最大厚 9.5	—			木取り：芯持角材 樹種：マツ属複雑管束 亜属 上部は芯のみ残る 312・537と同種 の材で、凸部を粗く削ったか
241	51		瓦器碗	165井戸	(14.5)	(2.1)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	
242	51	54	土師器皿	464井戸 4層	6.5	1.6	—	90 口縁80		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰白2.5Y7/1	内面ハケ、のち横ナデ
243	51	54	金属製品鎌	464井戸 4層	刃長 (7.8) 柄長 6.2	刃最大幅 3.0	刃最大厚 0.2	—			
244	52	54	木製品折敷(底板)	464井戸 4層	長 17.8	幅 (8.2)	厚 0.15	—			木取り：柾目 樹種：ヒノキ 極めて薄い 2枚重ねの底板か
245	52	54	木製品曲物	464井戸 4層	底径 16.2 (底板)	高 (8.6) (側板)	底板厚 0.8 側板厚 0.5	—			側板木取り：柾目 底板木取り：板目 樹種：マツ属複雑管束亜属 側板にケビキ
246-1	52		木製品桶(井戸枠)(側板)	464井戸	長 30.6	最大幅 6.5 最小幅 5.5	厚 0.9	側板 1枚			井戸枠計測表番号10 木取り：板目 樹種：スギ 内面に底板の痕跡 外面に籐の痕跡 内面、下部にいくほど強く削っている が、厚みを減じるためか
246-2	52	54	木製品桶(井戸枠)(側板)	464井戸	長 30.5	最大幅 7.5 最小幅 6.1	厚 0.8	側板 1枚			井戸枠計測表番号11 木取り：板目 樹種：スギ 内面に底板の痕跡 外面に籐の痕跡 内外面、下部にいくほど強く削っている が、厚みを減じるためか 底板の痕跡より0.5cm下に木釘(側板19枚中 5枚にあり)
247	54		土師器皿	222ピット	(7.2)	1.3	—	30 口縁30	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙10YR7/3 断：灰白10YR8/2	
248	54	53	土師器皿	534ピット	(8.1)	1.7	—	50 口縁50	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	内面ハケ、のち横ナデ

表11 掲載遺物一覧表 (11)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
249	54		土師器皿	534ピット	(9.4)	1.5	—	10以下 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/4 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：浅黄橙10YR8/4	
250	54		白磁皿	379ピット	(12.2)	<2.8>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰白7.5Y7/1(釉) 灰黄2.5Y7/2(露胎) 内：灰白7.5Y7/1(釉) 灰黄2.5Y7/2(露胎) 断：灰白10Y8/1	内外面施釉 口縁端部の釉掻き取る
251	54	53	瀬戸焼平椀	389ピット	(17.4)	<3.3>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰白5Y7/2(釉) 内：灰白5Y7/2(釉) 断：灰白5Y7/1	内外面施釉(灰釉)
252	54	53	備前焼播鉢	160ピット	(27.6)	<10.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰N6/0	播目1条9本 体部内面に使用痕
253	54		瓦質土器羽釜	224土坑	(23.2)	<5.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白2.5Y8/1	体部内面ナデ 鏝下にスス付着
254	54	53	金属製品銭貨	191ピット	径2.35	孔0.55	厚0.15	100			洪武通寶 2.3g
255	54	55	石製品砥石	518溝	長5.0	幅3.2	最大厚0.7	—		灰白2.5Y8/2	3面使用 粘板岩(丹波山地) 仕上砥
256	56	57	土師器皿	453ピット	7.6	1.4	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
257	56	57	土師器皿	453ピット	9.0	1.8	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
258	56	57	土師器皿	453ピット	7.7	1.3	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
259	56	57	土師器皿	453ピット	7.6	1.4	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
260	56	57	土師器皿	453ピット	7.5	1.3	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
261	56	57	土師器皿	453ピット	8.9	1.7	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
262	56	57	土師器皿	453ピット	7.5	1.5	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
263	56	57	瓦質土器羽釜	453ピット 450溝下層	14.0	<10.8>	—	30 口縁80	反転復元	外：灰N6/0 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白2.5Y8/1	内面横方向のハケ、のち口縁部横ナデ 体部外面指オサエ、底部外面ナデ 鏝2箇所(180度の位置)に焼成前穿孔、スス つまる 口縁部にも2箇所(鏝の孔から約1cmずれた 位置)に焼成前穿孔、2箇所とも外面に粘土 を貼り付けた突起を有す(突起はどちらも破 損しているが、遺存状態の良い方では孔か ら横方向にのびる溝が確認できる 突起上 部が破損しているため不明であるが横方向 の孔であった可能性もある 遺存状態の悪 い方の突起では、原形をとどめない程破損 している上からスス付着 特に外面鏝以下にスス付着
264	57		土師器皿	221土坑	(7.7)	1.3	—	40 口縁40	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	
265	57	55	土師器皿	221土坑	7.8	1.5	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：—	一部にスス付着
266	57		土師器皿	221土坑	(7.4)	1.7	—	20 口縁30	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
267	57		土師器皿	221土坑	(13.4)	<2.4>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：褐灰10YR6/1 内：褐灰10YR6/1 断：褐灰10YR5/1	
268	57	55	瀬戸焼豆皿	221土坑	4.8	1.5	2.8	100		外：灰白2.5Y8/1(露胎) オリーブ灰10Y6/2(釉) 内：灰白7.5Y7/2(釉) 断：—	内面施釉(灰釉) 外面釉だれ少しあり
269	57	55	常滑焼鉢	221土坑	—	<5.5>	—	10以下	傾き復元	外：にぶい赤褐5YR5/3 内：にぶい赤褐5YR5/3 断：灰7.5Y5/1 にぶい橙7.5YR6/4	体部外面縦方向のヘラナデ
270	58	56	土師器皿	348土坑	7.2	1.5	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
271	58	56	土師器皿	348土坑	7.8	1.5	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	内面ハケ、のち横ナデ

表12 掲載遺物一覧表 (12)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
272	58	56	土師器Ⅲ	348土坑	7.3	1.5	—	90 口縁80		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
273	58	56	土師器Ⅲ	348土坑	7.5	1.3	—	80 口縁70		外：浅黄橙7.5YR8/4 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：浅黄橙7.5YR8/4	
274	58	56	土師器Ⅲ	348土坑	(9.0)	(1.9)	—	70 口縁40	反転復元 傾き復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
275	58	56	土師器Ⅲ	348土坑	8.0	1.6	—	60 口縁50		外：橙5YR6/6 内：橙5YR6/6 断：橙5YR6/6	
276	58		土師器Ⅲ	348土坑	(8.8)	(1.8)	—	20 口縁30	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：にぶい橙7.5YR7/4	
277	58		土師器Ⅲ	348土坑	(8.7)	1.5	—	10以下 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
278	58		土師器Ⅲ	348土坑	(9.2)	2.2	—	30 口縁30	反転復元	外：黄灰2.5Y6/1 内：黄灰2.5Y6/1 断：にぶい褐7.5YR6/3	
279	58		土師器Ⅲ	348土坑	(9.5)	(1.8)	—	30 口縁30	反転復元	外：橙5YR7/6 内：橙5YR7/6 断：橙5YR7/6	
280	58	56	土師器Ⅲ	348土坑	10.2	2.1	—	100		外：橙5YR6/6 内：橙5YR6/6 断：橙5YR7/6	
281	58	56	土師器Ⅲ	348土坑	10.7	2.4	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
282	58		土師器Ⅲ	348土坑	(12.0)	2.6	—	30 口縁20	反転復元 (口縁部 ～体部)	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
283	58		土師器Ⅲ	348土坑	(15.0)	2.8	—	30 口縁30	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部から 体部内面横ナデ
284	58	56	瀬戸焼 天目椀	348土坑	(12.0)	7.0	(4.4)	40	反転復元	外：黒褐10YR3/1(釉) にぶい黄橙10YR7/4(露胎) 内：黒10YR2/1(釉) 断：灰白5Y7/1	削り出し高台 内外面施釉(鉄釉)、体部外面下部、底部外 面露胎
285	58		常滑焼 甕	348土坑	—	長 (9.3)	—	10以下	傾き不明	外：黒7.5YR2/1 内：黒褐10YR3/1 断：褐灰10YR6/1	押印紋
286	58	55	瓦質土器 描鉢	348土坑	(35.9)	(8.4)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：オリーブ黒5Y3/1 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	口付、遺存部分少なく図化不能
287	58	55	瓦質土器 風子か	348土坑	—	(8.1)	(23.9)	10以下	反転復元	外：暗灰N3/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y7/1	脚が付く可能性
288	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d2	7.2	1.4	—	90		外：浅黄橙7.5YR8/4 内：淡橙5YR8/4 断：にぶい橙7.5YR7/4	
289	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d2	7.2	1.4	—	100		外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：にぶい橙7.5YR7/4	
290	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d2	7.4	1.6	—	100		外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：—	
291	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d2	7.4	1.4	—	60		外：にぶい橙5YR7/3 内：にぶい橙5YR7/3 断：にぶい橙5YR7/3	
292	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d5	7.2	1.4	—	100		外：にぶい橙5YR7/4 内：にぶい橙5YR7/4 断：—	
293	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d4	(5.8)	1.2	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄2.5Y7/3 内：黄灰2.5Y7/2 断：暗灰黄2.5Y4/2	
294	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d3	(9.4)	1.2	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
295	59		土師器Ⅲ	第5層 L8-d5	11.4	2.8	—	80		外：にぶい橙7.5YR7/4 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：にぶい橙7.5YR7/4	底部内面一定方向のナデ
296	59		白磁 Ⅲ	第5層 L8-d3	—	(1.8)	—	10以下	傾き復元	外：明緑灰7.5GY8/1(釉) 内：明緑灰7.5GY7/1(釉) 断：灰白N8/0	内面に草花の印紋 内外面施釉
297	59		瀬戸焼 Ⅲ	第5層 L8-d4	—	(0.8)	4.0	30		外：浅黄橙10YR8/4(露胎) 内：オリーブ灰10Y6/2(釉) 断：浅黄橙10YR8/4	底部外面糸切り離し 内面施釉(灰釉)
298	59		瀬戸焼 小Ⅲ	第5層 L8-d4	(9.5)	2.0	(4.6)	30 口縁20	反転復元	外：にぶい黄褐10YR4/3(釉) 黄灰2.5Y7/2(露胎) 内：にぶい黄褐10YR4/3(釉) 灰白2.5Y8/1(露胎) 断：灰白2.5Y8/1	内外面回転ナデ 底部内面中央に指ナデ痕 底部外面糸切り離し 口縁部内外面のみ施釉(鉄釉)

表13 掲載遺物一覧表 (13)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
299	59		石製品 砥石	第5層 L8-d2	長 5.6	幅 4.0	最大厚 1.1	—		灰白2.5Y8/1	2面は使用、側面は遺存状態悪く詳細不明 変質流紋岩(畿内以外産) 中砥
300	60		青磁 碗	第6層 L8-d4	—	<4.0>	(7.2)	20 高台30	反転復元	外：オリーブ灰10Y4/2(釉) にぶい橙2.5YR6/4(露胎) 内：オリーブ灰10Y4/2(釉) 断：明赤褐2.5YR5/6	高台畳付以外施釉
301	60		須恵器 壺	第6層 L8-d-e4	—	<3.7>	(11.2)	10以下 底部30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	外面摩滅著しい
302	65	58	白磁 皿	建物1 91柱穴 柱痕最下部	(11.1)	2.8	(6.1)	30 口縁30 底部30	反転復元	外：灰白2.5GY8/1(釉) 灰黄2.5Y6/2(露胎) 内：灰白2.5GY8/1(釉) 淡黄2.5Y8/3(露胎) 断：灰白N8/0	見込みに段 内外面施釉 底部外面一定方向に釉をのぼす 口縁端部の釉掻き取る
303	65		回転台 土師器 皿	76柱穴	—	<1.0>	(4.2)	20 底部50	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：にぶい黄橙10YR6/3	底部外面糸切り離し
304	65		土師器 皿	建物21 574柱穴	(8.0)	<1.5>	—	20 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白10YR8/1 断：灰白2.5Y8/1	
305	65		白磁 皿	建物21 574柱穴	(11.3)	<2.3>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白7.5Y8/1(釉) 灰白5Y8/1(露胎) 内：灰白2.5Y8/1(釉) 灰白5Y8/1(露胎) 断：灰白N8/0	内外面施釉 口縁端部の釉掻き取る
306	65	58	白磁 碗	建物21 574柱穴	—	<2.4>	(6.7)	10以下 高台10	反転復元	外：灰白2.5Y8/1(露胎) 内：灰黄2.5Y7/2(釉) 灰白5Y8/1(露胎) 断：灰白2.5Y8/1	内面施釉、見込みの釉を環状に掻き取る
307	65	58	青磁 碗	建物21 574柱穴	(16.0)	<5.8>	—	20 口縁20	反転復元	外：灰7.5Y6/1(釉) 内：灰7.5Y6/1(釉) 断：灰白N7/0	見込みに段または沈線 内外面施釉
308	65	58	常滑焼 三筋壺	建物21 574柱穴	—	<7.3>	—	10以下	傾き復元	外：暗赤灰2.5YR3/1 内：褐灰7.5YR4/1 断：灰白10YR7/1	外面自然釉 内面ナデ
309	65	58	須恵器 鉢	建物21 577柱穴	(30.7)	<6.9>	—	10以下 口縁10	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰5Y6/1	内面斜め方向のナデ
310	65	58	瓦器 碗	建物21 133柱穴	(13.3)	<2.9>	—	20 口縁30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
311	65		木製品 底板	建物21 133柱穴	径 (8.0)	—	厚 0.6	—			木取り：柾目 樹種：スギ 蓋の可能性あり
312	65		木製品 礎板	建物21 133柱穴	長 (23.2)	幅 12.1	最大厚 4.7	—			木取り：板目(分割材) 樹種：スギ 240・537と同種の材で凸部を粗く削ったか
313	67		土師器 皿	103井戸 1～6層	(9.6)	1.7	—	10以下 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
314	67		土師器 皿	103井戸 7層	(9.0)	1.4	—	20 口縁10 以下	反転復元	外：浅黄2.5Y7/3 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
315	67		土師器 皿	103井戸 7層	(12.6)	2.1	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰黄2.5Y7/2	
316	67		須恵器 碗	103井戸 掘り方	—	<0.9>	(5.4)	10以下 底部50	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	底部外面糸切り離し
317	67		常滑焼 甕	103井戸 1～6層	—	<10.8>	—	10以下	傾き復元	外：灰N4/0 内：灰N5/0 断：灰5Y6/1	押印紋
318	67	カラー 4	漆器 碗	103井戸	—	<4.8>	—	60		外：黒 内：黒 紋様：赤	木取り：横木地板目取 樹種：トチノキ 内外面に手描紋 底部外面、漆みられずズリ痕明瞭、2次 的に削られたか 意図的に彫られたかのよ うな筋状の工具痕あり
319	67	59	木製品 曲物 (井戸枠)	103井戸	41.1	15.7 (側板)	最大厚 0.9	側板90			木取り：柾目 樹種：ヒノキ科 内面にケビキ 帯1段 側板、帯の欠損箇所の周囲に木釘、修復さ れたと考えられる
320	69		土師器 皿	568井戸	(9.4)	1.1	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y7/1 内：灰白2.5Y7/1 断：灰黄2.5Y7/2	
321	69	60	土師器 皿	568井戸 掘り方	(8.9)	1.7	—	50 口縁50	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/1	
322	69	60	瓦器 碗	568井戸 掘り方	—	<1.9>	(6.8)	10以下 高台40	反転復元	外：灰N4/0 内：暗灰N3/0 断：灰白N8/0	底部外面に焼成後線刻
323	69	60	白磁 碗	568井戸 掘り方	(16.2)	<3.2>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白5Y7/2(釉) 内：灰白5Y7/1(釉) 断：灰白5Y8/1	内外面施釉

表14 掲載遺物一覧表 (14)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
324	69	60	須恵器鉢	568井戸	(27.9)	<6.2>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰N6/0	体部内面不定方向のナデ
325	69		常滑焼甕	568井戸	—	長 <5.0>	—	10以下	傾き不明	外: 灰N6/0 内: 灰N5/0 断: 灰N6/0	押印紋
326	69	60	金属製品 銭貨	568井戸 掘り方	径 2.55	孔 0.55	厚 0.10	60			祥符元寶 2.3 g
327-1	69		木製品 桶 (井戸枠) (側板)	568井戸 下段	長 36.6	最大幅 9.6 最小幅 8.4	厚 1.5	側板 1枚			井戸枠計測表番号10 木取り: 板目 樹種: スギ 内面に底板の痕跡 外面に籬の痕跡
327-2	69	60	木製品 桶 (井戸枠) (側板)	568井戸 下段	長 36.2	最大幅 9.7 最小幅 8.4	厚 1.5	側板 1枚			井戸枠計測表番号9 木取り: 板目 樹種: スギ 内面に底板の痕跡 外面に籬の痕跡 側面に加工痕跡
328-1	70	60	木製品 桶 (井戸枠) (側板)	568井戸 上段	長 43.8	最大幅 9.7 最小幅 8.4	厚 1.5	側板 1枚			井戸枠計測表番号14 木取り: 板目 樹種: スギ 内面の底板の痕跡は遺存状態不良のため側板全体から推定 外面に籬の痕跡
328-2	70		木製品 桶 (井戸枠) (側板)	568井戸 上段	長 44.0	最大幅 9.7 最小幅 8.2	厚 1.3	側板 1枚			井戸枠計測表番号13 木取り: 板目 樹種: スギ 内面の底板の痕跡は遺存状態不良のため側板全体から推定 外面に籬の痕跡
329	72	61	土師器 羽釜	584井戸 上層	—	<8.0>	—	10以下		外: 浅黄橙10YR8/4 内: にぶい橙7.5YR7/4 断: 灰N4/0	口縁部外面横ナデ、一部にハケメのような痕跡あり
330	72		土師器 皿	584井戸 下層	(8.2)	1.5	—	40 口縁40	反転復元	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 黄灰2.5Y6/1	
331	72	61	土師器 皿	584井戸 下層	8.1	1.8	—	90 口縁80		外: にぶい黄橙10YR7/2 内: にぶい黄橙10YR7/2 断: 灰黄褐10YR6/2	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
332	72		土師器 皿	584井戸 下層	(8.2)	1.2	—	20 口縁20	反転復元	外: 灰白5Y7/2 内: 灰白5Y7/2 断: 灰白5Y7/1	
333	72	61	須恵器 碗	584井戸 下層	—	<1.7>	(6.3)	10以下 底部20	反転復元	外: 灰白5Y7/1 内: 灰白5Y7/1 断: 灰白5Y7/1	底部外面糸切り離し
334	72	61	瓦器 碗	584井戸 下層	13.6	3.9	3.8	80 口縁70 高台100		外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白N8/0	
335	72		瓦器 碗	584井戸 下層	(13.9)	4.2	4.0	30 口縁20	反転復元 (口縁部 ~体部)	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y7/1	体部内面上半ハケ
336	72		瓦器 碗	584井戸	(13.0)	<3.0>	(4.4)	20 口縁30	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	
337	72		木製品 (底板)	584井戸	長径 13.4	短径 12.4	厚 0.8	—			木取り: 柾目 樹種: ヒノキ科 蓋の可能性あり
338	72		土師器 皿	1096井戸 下層	(9.1)	<1.4>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: 灰白5Y7/2 内: 灰白5Y7/2 断: 灰白5Y7/2	
339	72		瓦器 碗	1096井戸 下層	(11.6)	<3.4>	—	30	傾き復元 反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y7/1	口縁部歪む
340	72	61	石製品 砥石	1096井戸 2層	長 11.6	幅 8.0	最大厚 4.0	—		灰白5Y8/1	4面使用 粗い擦痕あり 変質流紋岩(畿内以外産) 中砥
341	75	62	瀬戸焼 平碗	529溝	(12.6)	<4.5>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 浅黄7.5Y7/3(釉) 内: 浅黄7.5Y7/3(釉) 断: 灰白7.5Y8/1	内外面施釉(灰釉) 見込みに胎土目
342	75	62	瀬戸焼 天目碗	529溝	—	<4.0>	—	10以下	反転復元	外: 黒褐10YR3/1(釉) 灰白2.5Y8/2(露胎) 内: 黒褐10YR3/1(釉) 断: 灰白5Y8/1	削り出し高台 内外面施釉(鉄釉)、体部外面下部露胎
343	75		瀬戸焼 瓶子か	529溝	—	<4.0>	—	10以下	傾き復元	外: オリーブ灰10Y5/2(釉) 内: 灰白2.5Y8/1(露胎) 断: 灰白5Y8/1	外面施釉(灰釉)
344	75		常滑焼 甕	529溝	—	<8.4>	—	10以下	傾き復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 褐灰10YR4/1 断: 灰白2.5Y7/1	
345	75		土師器 甕	529溝	—	<10.6>	—	10以下	傾き復元	外: にぶい黄橙10YR7/3 内: 褐灰10YR4/1 断: にぶい黄橙10YR7/2	
346	77		土師器 皿	560溝	(7.6)	1.4	—	30 口縁30	反転復元	外: にぶい黄橙10YR7/2 内: にぶい黄橙10YR7/3 断: にぶい黄橙10YR7/2	
347	77		土師器 皿	560溝	(7.8)	<1.5>	—	20 口縁30	反転復元	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: にぶい黄2.5Y6/3	

表15 掲載遺物一覧表 (15)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
348	77		土師器皿	560溝	(7.8)	<1.1>	—	30 口縁40	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
349	77		土師器皿	560溝	(8.0)	1.0	—	20 口縁30	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
350	77	64	土師器皿	560溝	8.0	1.8	—	80 口縁70		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
351	77	64	土師器皿	560溝	8.0	1.6	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
352	77	64	土師器皿	560溝	8.0	1.5	—	80 口縁70		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
353	77		土師器皿	560溝	8.1	1.3	—	60 口縁30		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
354	77		土師器皿	560溝	(8.2)	1.2	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/3 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：浅黄橙7.5YR8/3	
355	77	64	土師器皿	560溝	8.1	1.3	—	80 口縁70		外：淡赤橙2.5YR7/4 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	
356	77		土師器皿	560溝	(8.1)	1.3	—	30 口縁30	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
357	77		土師器皿	560溝	(8.3)	1.2	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄5Y7/3 内：灰黄2.5Y7/2 断：浅黄5Y7/3	
358	77		土師器皿	560溝	(8.4)	1.4	—	40 口縁40	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
359	77		土師器皿	560溝	(8.6)	1.2	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：にぶい黄橙10YR6/4	
360	77	64	土師器皿	560溝	7.8	1.3	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白5Y7/1	底部外面に粘土接合痕
361	77	64	土師器皿	560溝	8.2	1.8	—	100		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：—	
362	77		土師器皿	560溝	(7.0)	<1.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	
363	77		土師器皿	560溝	9.5	2.0	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：明褐灰7.5YR7/1	
364	77		瓦器皿	560溝	(9.0)	1.6	—	30	反転復元	外：灰N4/0 内：暗灰N3/0 断：灰白N8/0	
365	77	64	瓦器碗	560溝	—	—	—	10以下	天地傾き不明	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	体部外面に焼成後線刻
366	77		瓦器碗	560溝	(12.8)	3.4	3.4	80 口縁30	反転復元 (口縁部～体部)	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白5Y8/1	高台2箇所まで途切れている
367	77	64	瓦器碗	560溝	12.6	3.8	4.0	90 口縁80		外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白N7/0	見込みに別個体を重ねた際に付着したと思われる高台痕(胎土)あり
368	77		瓦器碗	560溝	(12.9)	3.6	—	40 口縁40	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
369	77	64	瓦器碗	560溝	14.3	3.8	4.1	80 口縁60		外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	
370	77		瓦器碗	560溝	(13.4)	3.5	(5.6)	50 口縁60	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
371	78		瓦器碗	560溝	(12.0)	4.1	(3.8)	30 口縁30 高台10 以下	反転復元	外：灰5Y6/1 内：灰N6/0 断：灰白N8/0	
372	78		瓦器碗	560溝	(12.7)	3.7	(3.8)	60 口縁50	転用復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
373	78		瓦器碗	560溝	(13.5)	3.3	(4.0)	30 口縁40 底部40	反転復元	外：暗灰N3/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
374	78		瓦器碗	560溝	(12.6)	3.7	(3.6)	30 口縁30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	

表16 掲載遺物一覧表 (16)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
375	78		瓦器 椀	560溝	(13.4)	3.6	(4.6)	30	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白N8/0	
376	78		瓦器 椀	560溝	(13.6)	<4.0>	(4.2)	30	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	
377	78		瓦器 椀	560溝	(14.4)	3.2	(4.9)	20 口縁30 高台30	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰5Y5/1 断: 灰白5Y7/1	
378	78		瓦器 椀	560溝	(14.2)	4.0	(3.9)	30 口縁20	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白N8/0	
379	78		瓦器 椀	560溝	(13.8)	<4.0>	(5.4)	30 口縁30 高台20	反転復元	外: 灰白5Y7/1 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y7/1	
380	78		瓦器 椀	560溝	(14.3)	4.0	(4.6)	30 口縁30	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰白N8/0 断: 灰白5Y8/1	高台周縁にヘラ等の工具による破線状の沈線
381	78		瓦器 椀	560溝	(14.4)	4.1	(3.8)	20 口縁20	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰白N8/0 断: 灰白5Y8/1	高台周縁にヘラ等の工具による破線状の沈線
382	78		瓦器 椀	560溝	(13.0)	<3.2>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y7/1	
383	78		瓦器 椀	560溝	(13.8)	3.5	(5.4)	20 口縁20 高台30	反転復元	外: 灰白5Y8/1 内: 灰白N8/0 断: 灰白5Y8/1	高台周縁にヘラ等の工具による破線状の沈線
384	78		瓦器 椀	560溝	—	<2.7>	(4.7)	30 高台60	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰5Y6/1 断: 灰白N8/0	高台周縁にヘラ等の工具による破線状の沈線
385	78	64	瓦器 椀	560溝	(12.9)	<4.3>	—	30 口縁30	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白N8/0	
386	78		瓦器 椀	560溝	(14.2)	<3.1>	—	10以下 口縁30	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白N8/0	
387	79	65	瓦質土器 羽釜	560溝	(17.0)	<7.8>	—	10以下 口縁40	反転復元	外: 灰白5Y7/1 内: 灰5Y5/1 断: 灰白N7/0	
388	79	65	瓦質土器 羽釜	560溝	21.6	<12.7>	—	90 口縁80		外: 黒褐2.5Y3/1 内: 黒褐2.5Y3/1 断: 灰黄2.5Y7/2	内面口縁部横ナデ、のち体部から底部ナデ
389	79	65	瓦質土器 羽釜	560溝	(21.0)	15.9	—	70 口縁70	反転転用 復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	内面全面工具によるナデ
390	79		瓦質土器 羽釜	560溝	(21.8)	<10.0>	—	20 口縁30	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰5Y6/1 断: 灰白5Y8/1	体部内面工具によるナデ
391	79		瓦質土器 羽釜	560溝	(26.6)	<6.0>	—	20 口縁50	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白2.5Y8/1	口縁部横ナデ、のち体部内面工具によるナデ
392	80	65	瓦質土器 羽釜	560溝	(13.8)	<14.4>	—	30 口縁40	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	体部内面工具によるナデ
393	80		瓦質土器 羽釜	560溝	(16.4)	<13.2>	—	30 口縁40	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白2.5Y7/1	
394	80		瓦質土器 羽釜	560溝	(18.2)	<11.8>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白N8/0	体部内面工具によるナデ
395	80		瓦質土器 羽釜	560溝	(14.8)	<15.9>	—	40 口縁10 以下	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 灰N4/0 断: 灰白N8/0	体部内面、底部内面工具によるナデ 体部外面指オサエとナデ 底部外面ナデ
396	80		瓦質土器 羽釜	560溝	(13.8)	<5.3>	—	10以下 口縁30	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白N8/0	
397	80		瓦質土器 羽釜	560溝	—	長 <19.8>	—	10以下 脚1本	傾き不明	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y8/1	体部内面横方向のハケ 脚部縦方向のナデ
398	80		瓦質土器 羽釜	560溝	—	長 <25.5>	—	10以下 脚1本	傾き不明	外: 黄灰2.5Y5/1 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y7/1	体部内面横方向のハケ 脚部縦方向のナデ
399	81		土師器 鍋	560溝	(35.2)	<5.2>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: 褐灰10YR4/1 内: 淡黄2.5Y8/3 断: 灰5Y4/1	
400	81		土師器 鍋	560溝	(37.2)	<4.9>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: にぶい黄橙10YR7/3 内: 灰白10YR8/1 断: 灰白10YR8/1	
401	81		土師器 鍋	560溝	(38.2)	<6.8>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: にぶい黄橙10YR7/3 内: 灰白2.5Y8/2 断: 黄灰2.5Y5/1	

表17 掲載遺物一覧表 (17)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
402	81	65	土師器鍋	560溝	(38.8)	<13.5>	—	40 口縁50	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
403	81		土師器鍋	560溝	(40.4)	<10.1>	—	10以下 口縁10	反転復元	外：灰黄褐10YR5/2 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
404	81		土師器鍋	560溝	(41.1)	<4.6>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰黄褐10YR4/2 内：灰白10YR8/1 断：黒褐2.5Y3/1	
405	82	65	須恵器鉢	560溝	(31.2)	<12.0>	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白10YR8/1 内：灰白10YR8/1 断：灰白10YR8/1	体内内面下部に使用痕と思われる磨耗
406	82	65	須恵器鉢	560溝	(30.2)	11.4	(9.7)	50 口縁50	反転復元	外：灰白5Y7/2 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	内面回転ナデ、のち体部に斜め方向のナデ 体部内面下部から底部に使用痕と思われる磨耗 外面回転ナデを施すが、最下部の底部外面 周囲のみ静止状態で横ナデを施す 底部外面糸切り痕の上に筋状の圧痕(異なる 方向のものに切り合いあり)
407	82	65	須恵器鉢	560溝	(32.0)	(8.1)	—	20 口縁30	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	内面、口縁部回転ナデ、のち体部斜め方向 の強いナデ
408	82		須恵器甕	560溝	(40.0)	<2.3>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰N6/0	外面、口縁部直下右上がりの平行タタキ、 のち横ナデ
409	82		須恵器甕	560溝	(32.4)	<22.8>	—	10以下 口縁50	反転転用 復元	外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	口縁部から頸部磨耗しているが横ナデを施 すか、頸部外面に右上がりの平行タタキを 残す 体部内面丁寧なナデ、体部外面平行タタキ
410	83	63	土師器皿	576溝	8.1	1.3	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
411	83		土師器皿	576溝	(8.6)	<1.4>	—	20 口縁30	反転復元	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：灰黄褐10YR6/2 断：灰白10YR8/1	
412	83		瓦器皿	576溝	(8.3)	1.7	—	30 口縁30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	
413	83		白磁皿	576溝	—	<1.1>	(3.8)	10以下 底部40	反転復元	外：灰白5Y8/2(釉) 灰白5Y8/1(露胎) 内：灰白7.5Y7/2(釉) 断：灰白7.5Y8/1	内外面施釉、底部外面露胎
414	83		瓦器碗	576溝	(12.7)	3.6	(4.4)	20 口縁20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰白5Y8/1	内面ナデ
415	83	63	瓦器碗	576溝	13.2	3.9	3.6	90		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
416	83		瓦器碗	576溝	(14.1)	4.1	(4.9)	30 口縁30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白5Y8/1	内面ナデ
417	83	63	瓦器碗	576溝	12.6	3.0	2.8	70 口縁70		外：灰N4/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	内面ナデ
418	83		瓦器碗	576溝	(14.4)	<3.2>	—	20 口縁40	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白2.5Y8/1	内面ナデ
419	83		須恵器鉢	576溝	(29.2)	<7.2>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰N6/0 断：灰白2.5Y7/1	内面斜め方向のナデ
420	83		瓦質土器 羽釜	576溝	—	長 <22.9>	—	10以下 脚1本	傾き不明	外：灰N4/0 内：— 断：灰白5Y8/1	
421	85	66	土師器皿	593ピット	8.1	1.5	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
422	85	66	土師器皿	593ピット	8.2	1.5	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
423	85	66	土師器皿	593ピット	8.3	1.4	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
424	85	66	土師器皿	593ピット	8.5	1.5	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
425	85	66	土師器皿	593ピット	8.2	1.5	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
426	85	66	土師器皿	593ピット	8.5	1.6	—	90		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	

表18 掲載遺物一覧表 (18)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
427	85	66	土師器皿	593ピット	8.4	1.5	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
428	85	66	土師器皿	593ピット	8.5	1.7	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
429	85	66	土師器皿	593ピット	8.5	1.7	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
430	85	66	土師器皿	593ピット	8.4	1.2	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	底部外面に工具痕か
431	86	66	瓦器皿	1164 土器集積	7.8	1.5	—	100		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白5Y8/1	
432	86		瓦器碗	1164 土器集積	13.1	3.6	3.6	80		外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
433	86	66	石製品 砥石	1164 土器集積	長 5.7	幅 5.4	最大厚 1.1	—		灰白10YR8/2	擦痕不明瞭だが4面使用か 変質流紋岩(畿内以外産) 中砥
434	87	63	土師器皿	1137溝	7.6	1.3	—	50 口縁60		外：灰白10YR8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白10YR8/1	
435	87	63	青磁碗	1137溝	—	〈2.7〉	4.9	10以下 高台100	反転復元 (体部)	外：オリープ灰10Y6/2(釉) 内：オリープ灰10Y6/2(釉) 断：灰白N8/0	見込みに段、「福」字の印紋 内外面施釉、底部外面(高台内側・畳付含む) 露胎
436	87	62	瓦器碗	1137溝	13.1	3.7	3.2	80		外：灰5Y5/1 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
437	87	62	瓦器碗	1137溝	12.8	3.6	3.2	90		外：灰5Y6/1 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	
438	88		土師器皿	583ピット	(8.1)	1.6	—	50 口縁30	反転復元 (口縁部)	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：にぶい黄橙10YR6/3	底部内面一定方向のナデ
439	88		瓦器碗	583ピット	(13.8)	〈3.1〉	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	高台を貼り付けた際のものと思われる横ナ デあり
440	88		土師器鍋	583ピット	(37.3)	〈7.0〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：灰N4/0	内面横方向のハケ 口縁部外面上部横方向のハケ、下部縦方向 の粗いハケのち横ナデ 体部外面縦方向の粗いハケ、のち指オサエ
441	89		須恵器鉢	第5層 A地点	(27.9)	〈9.0〉	—	30 口縁40	反転転用 復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰N6/0	体部内面回転ナデ、のち斜め方向のナデ
442	89		須恵器鉢	第5層 A地点	(27.5)	〈11.1〉	(9.0)	30 口縁30	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰N6/0	体部上部と下部に粘土接合痕 底部外面糸切り離し 体部内面下半に使用痕
443	89		須恵器鉢	第5層 A地点	—	〈8.8〉	(9.5)	20 底部60	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰オリープ7.5Y5/3 断：灰白N7/0	底部外面糸切り離し 内面全面に自然釉かかる 2.0cm大までの窯着物あり
444	89		土師器羽釜	第5層 A地点	(29.6)	〈6.9〉	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：浅黄橙10YR8/4 内：灰白10YR8/2 断：灰N4/0	
445	89		土師器鍋	第5層 A地点	(37.4)	〈14.6〉	—	20 口縁20	反転復元	外：橙7.5YR7/6 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：明褐色7.5YR7/1	口縁部外面上部に横、下部に縦方向のハケ のち横ナデ 体部外面上部に縦方向のハケ、のち下部に タタキ、一部タタキの上から横方向のハケ
446	89		石製品 鍋	第5層 A地点	—	〈5.3〉	—	10以下	反転復元	外：灰白2.5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰N6/0	体部外面上部横方向のケズリ、のち縦(やや 斜め)方向のケズリ 滑石
447	90		土師器皿	第5層 B地点	7.8	1.3	—	100		外：灰白2.5Y8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：—	
448	90		土師器皿	第5層 B地点	8.0	1.4	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：—	
449	90		土師器皿	第5層 B地点	8.1	1.5	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/4	
450	90		土師器皿	第5層 B地点	8.0	1.4	—	100		外：橙5YR7/6 内：橙5YR6/6 断：—	
451	90		土師器皿	第5層 B地点	8.0	1.7	—	60		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい黄橙10YR6/4	
452	90		土師器皿	第5層 B地点	8.0	1.5	—	100		外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：—	
453	90		土師器皿	第5層 B地点	8.4	1.4	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	

表19 掲載遺物一覧表 (19)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
454	90		土師器皿	第5層B地点	8.3	1.2	—	80		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：灰5Y6/1	
455	90		土師器皿	第5層B地点	8.0	1.4	—	100		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：浅黄橙10YR8/3	
456	90		土師器皿	第5層B地点	8.4	1.3	—	80		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：黄灰2.5Y6/1	
457	90		土師器皿	第5層B地点	8.2	1.4	—	60		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
458	90		土師器皿	第5層B地点	8.0	1.4	—	60		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	
459	90		土師器皿	第5層B地点	8.3	1.5	—	100		外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR6/3	
460	90		土師器皿	第5層B地点	8.2	1.4	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR6/3	
461	90		土師器皿	第5層B地点	7.8	1.6	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
462	90		土師器皿	第5層B地点	8.2	1.3	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい黄橙10YR6/3	
463	90		土師器皿	第5層B地点	8.4	1.3	—	60		外：浅黄橙10YR8/3 内：淡黄2.5Y8/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	
464	90		土師器皿	第5層B地点	8.2	1.3	—	60		外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/3 断：黄灰2.5Y6/1	
465	90		土師器皿	第5層B地点	8.3	1.3	—	60		外：淡黄2.5Y8/3 内：淡黄2.5Y8/3 断：にぶい黄橙10YR6/3	
466	90		土師器皿	第5層B地点	8.0	1.8	—	80		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい黄橙10YR6/4	
467	90		土師器皿	第5層B地点	8.1	1.2	—	80		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：にぶい橙7.5YR7/4	
468	90		土師器皿	第5層B地点	8.4	1.6	—	80		外：浅黄橙10YR8/3 内：淡黄2.5Y8/3 断：にぶい黄橙10YR6/4	
469	90		土師器皿	第5層B地点	8.6	1.5	—	100		外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：橙5YR6/6	
470	90		土師器皿	第5層B地点	(11.6)	2.0	—	20	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙5YR7/4 断：灰黄褐10YR6/2	
471	90		土師器皿	第5層B地点	(11.2)	(2.1)	—	20	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/3 断：にぶい橙7.5YR7/3	
472	90		瓦器皿	第5層B地点	8.1	1.5	—	100		外：灰N4/0 内：灰7.5Y5/1 断：—	底部外面、円形に段あり
473	90		瓦器皿	第5層B地点	8.2	1.5	—	100		外：灰白5Y8/1 内：黄灰2.5Y6/1 断：灰白5Y8/1	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
474	90		瓦器皿	第5層B地点	8.0	1.5	—	80 口縁80		外：灰N5/0 内：灰白N8/0 断：灰白5Y8/1	底部外面、円形に段あり
475	90		瓦器皿	第5層B地点	8.2	1.4	—	70 口縁60		外：灰7.5Y6/1 内：灰白2.5Y7/1 断：灰白2.5Y7/1	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
476	90		瓦器碗	第5層B地点	(12.8)	4.3	(4.5)	30 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白5Y8/1	
477	90		瓦器碗	第5層B地点	(12.4)	(4.1)	—	20 口縁30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白5Y7/1	
478	90		瓦器碗	第5層B地点	(13.0)	3.5	4.7	40 口縁30 高台100	反転復元 (口縁部～体部)	外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：灰白5Y8/1	高台周縁にヘラ等の工具による破綻線の沈線
479	90		瓦器碗	第5層B地点	14.1	4.2	4.1	100		外：灰5Y5/1 内：灰7.5Y4/1 断：灰白5Y8/1	
480	90		瓦器碗	第5層B地点	13.7	4.3	3.8	100		外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白2.5Y8/1	

表20 掲載遺物一覧表 (20)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
481	90		瓦器碗	第5層B地点	(13.7)	4.0	3.3	60 口縁50	反転復元 (口縁部)	外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰白2.5Y8/1	
482	90		瓦器碗	第5層B地点	14.0	3.2	3.8	50		外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白2.5Y8/1	
483	90		瓦器碗	第5層B地点	(14.1)	4.3	4.5	30 口縁40	反転復元	外: 灰白N8/0 内: 灰N6/0 断: 灰白N8/0	
484	90		白磁皿	第5層B地点	(10.4)	3.0	6.0	60 口縁50	反転復元 (口縁部 ~体部)	外: 灰白10Y7/1(釉) 灰白N7/0(露胎) 内: 灰白10Y7/1(釉) にぶい橙7.5YR6/4(露胎) 断: 灰白N7/0	内面、底部と体部の境に段 内外面施釉、 底部外面工具により釉をのぼす 口縁端部の釉掻き取る
485	90		白磁皿	第5層B地点	10.8	3.1	6.1	40 口縁20		外: 灰白10Y7/1(釉) 灰白N7/0(露胎) 内: 灰白10Y7/1(釉) 灰白N7/0(露胎) 断: 灰白N7/0	内面、底部と体部の境に段 内外面施釉、 底部外面工具により釉をのぼす 口縁端部の釉掻き取る
486	91		青磁皿	第5層B地点	(9.1)	<1.4>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰オリーブ7.5Y5/2(釉) 灰白7.5Y7/1(露胎) 内: 灰オリーブ7.5Y5/2(釉) 断: 灰白2.5Y7/1	内面、底部と体部の境に段または沈線 内外面施釉、体部外面下部露胎
487	91		青磁碗	第5層B地点	(16.3)	6.5	5.2	40 口縁10 以下	反転復元 (口縁部 ~体部)	外: 灰オリーブ7.5Y5/2(釉) 灰白2.5Y8/2(露胎) 内: 灰オリーブ7.5Y5/3(釉) 断: 灰白N7/0	見込みに段 内外面施釉、底部外面(高台内側・畳付含む) 露胎
488	91		青磁碗	第5層B地点	(15.1)	<4.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: オリーブ灰10Y6/2(釉) 内: オリーブ灰10Y6/2(釉) 断: 灰白N7/0	内外面施釉
489	91		青磁碗	第5層B地点	(14.6)	<5.9>	—	20 口縁20	反転復元	外: 灰オリーブ7.5Y5/3(釉) 内: 灰オリーブ7.5Y5/3(釉) 断: 灰白N8/0	見込みに段または沈線 内外面施釉
490	91		青磁碗	第5層B地点	(14.5)	<4.4>	—	10以下 口縁10	反転復元	外: 灰10Y6/1(釉) 内: 灰10Y6/1(釉) 断: 灰白N7/0	内外面施釉
491	91		青磁碗	第5層B地点	(15.4)	<5.7>	—	20 口縁30	反転復元	外: オリーブ灰10Y6/2(釉) 内: オリーブ灰10Y6/2(釉) 断: 灰白N8/0	見込みに段または沈線 内外面施釉 492と同一個体の可能性あり
492	91		青磁碗	第5層B地点	—	<1.8>	(4.5)	10以下 高台50	反転復元	外: オリーブ灰10Y6/2(釉) 灰白N7/0(露胎) 内: オリーブ灰10Y6/2(釉) 断: 灰白N7/0	内外面施釉、畳付のみ露胎 491と同一個体の可能性あり
493	91	66	瓦質土器 鍋	第5層B地点	(19.8)	6.0	—	20 口縁30	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y8/1	
494	91		須恵器鉢	第5層B地点	(27.6)	<7.6>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白5Y7/1	内面回転ナデ、のち体部に斜め方向のナデ 体部外面上半回転ナデ、のち下半から上半 にかけて斜め方向等のナデ
495	91		須恵器鉢	第5層B地点	(34.4)	<10.2>	—	20 口縁20	反転復元	外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰5Y6/1	内面回転ナデ、のち斜め方向のナデ 体部外面回転ナデ、のち粗い斜め方向のナデ 内面下半に使用痕
496	91		瓦質土器 羽釜	第5層B地点	(19.5)	<11.9>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰7.5Y5/1 内: 灰N5/0 断: 灰白N8/0	内面、口縁部横ナデ、のち体部ナデ
497	91		瓦質土器 羽釜	第5層B地点	(13.6)	<11.3>	—	30 口縁70	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白2.5Y8/1	内面ハケ、のち口縁部横ナデ、体部下半ナデ
498	91	67	石製品 砥石	第5層B地点	長 7.6	幅 6.9	最大厚 2.3	—		灰N5/0	3面は使用 ホルンフェルス 中砥
499	92		土師器皿	第5層L8-d1	(7.8)	<1.1>	—	20 口縁20	反転復元	外: 橙5YR6/6 内: にぶい黄橙10YR7/3 断: 橙5YR6/6	
500	92		土師器皿	第5層L8-d1	8.2	1.5	—	100		外: にぶい橙7.5YR7/4 内: 浅黄橙10YR8/3 断: 一	
501	92		土師器皿	第5層L8-d1	(8.0)	<1.2>	—	30 口縁30	反転復元	外: 淡黄2.5Y8/3 内: にぶい黄橙10YR7/2 断: 灰白2.5Y8/2	
502	92		土師器皿	第5層L8-d1	(8.0)	<1.4>	—	20	反転復元	外: 灰白2.5Y8/2 内: 灰白2.5Y8/1 断: 灰黄2.5Y7/2	
503	92		土師器皿	第5層L8-d2	(8.2)	1.5	—	40	反転復元	外: にぶい橙7.5YR6/4 内: にぶい橙7.5YR6/4 断: にぶい黄橙10YR7/3	
504	92		土師器皿	第5層L8-d1	(8.0)	<1.3>	—	20 口縁30	反転復元	外: にぶい橙7.5YR7/4 内: にぶい橙7.5YR7/3 断: にぶい橙7.5YR7/3	
505	92		土師器皿	第5層L8-d1	9.2	1.6	—	100		外: にぶい橙7.5YR6/4 内: にぶい橙7.5YR6/4 断: 一	

表21 掲載遺物一覧表 (21)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
506	92		土師器皿	第5層 L8-d1	(10.9)	<1.7>	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
507	92		瓦器碗	第5層 L8-d1	(13.6)	(4.6)	(4.0)	40 口縁30 高台80	傾き復元 反転転用 復元	外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y7/1	体部外面ミガキなし
508	92		瓦器碗	第5層 L8-d1	(13.8)	3.6	3.0	60	反転復元 (口縁部 ～体部)	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
509	92	67	青白磁合子蓋	第5層 L8-d1	(5.6)	1.3	—	30	反転復元	外：明緑灰10G7/1(釉) 内：明緑灰10G7/1(釉) 灰白5GY8/1(露胎) 断：白	外面、天井部内面施釉、口縁端部から口縁部内面露胎
510	92	67	青磁水注か(把手)	第5層 L7-d10	—	<6.3>	—	10以下	傾き復元	外：オリーブ灰10Y4/2(釉) 断：灰10Y6/1	施釉
511	92		須恵器皿	第5層 L7-d10	(9.4)	2.1	(4.8)	20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	底部外面糸切り離し
512	92		須恵器碗	第5層 L7-d10	(14.8)	<4.1>	—	30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	
513	92		須恵器碗	第5層 L7-d10	—	<3.2>	(5.8)	20 底部50	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	底部外面糸切り離し
514	92		須恵器碗	第5層 L7-d10	—	<3.5>	5.6	20 底部100		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	底部外面糸切り離し
515	92		須恵器鉢	第5層 L8-d1	(26.2)	<7.5>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰5Y6/1	体部内面斜め方向のナデ
516	92		瓦質土器羽釜	第5層 L8-d1	—	長 <22.2>	—	10以下 脚1本	傾き不明	外：暗灰N3/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	
517	93		須恵器甕	第5層 L8-d1	(34.8)	<9.0>	—	10以下 口縁30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	頸部外面右上がりの平行タタキのち横ナデ 肩部外面平行タタキ 体部内面斜め方向の工具によるナデ、のち口縁部から頸部内面横ナデ
518	93		須恵器甕	第5層 L8-d1	(34.4)	<8.2>	—	10以下 口縁30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：灰白N8/0	頸部外面右上がりの平行タタキ、のち横ナデ 肩部外面平行タタキ
519	93	67	石製品硯	第5層 L8-c2	長 <7.1>	幅 7.5	厚 1.2	—		黒N2/0	泥質ホルンフェルス(黒色頁岩起源)
520	93	67	石製品砥石	第5層 L8-d1	長 10.9	幅 5.6	最大厚 1.2	—		灰白7.5Y7/1	粘板岩(丹波山地) 仕上砥
521	94		土師器皿	第6層 L7-d10	7.7	1.1	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
522	94		須恵器皿	第6層 L8-d1	(8.4)	2.2	(4.4)	20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	底部外面糸切り離し
523	94		白磁皿	第6層 L7-d10	(8.6)	<2.3>	—	30	反転復元	外：灰白7.5Y7/2(釉) 灰白10Y7/1(露胎) 内：灰白7.5Y7/2(釉) 断：灰白10Y7/1	内外面施釉、体部外面下部露胎
524	94		白磁皿	第6層 L8-d1	—	<1.3>	(3.4)	20 底部40	反転復元	外：灰白7.5Y7/2(釉) 灰白5Y8/2(露胎) 内：灰白7.5Y7/2(釉) 断：灰白5Y8/2	見込みに段 内外面施釉、体部外面下部から底部外面露胎
525	94		白磁皿	第6層 L8-d1	(9.4)	<1.9>	—	20	反転復元	外：オリーブ黄7.5Y6/3(釉) 灰白7.5Y8/1(露胎) 内：オリーブ黄7.5Y6/3(釉) 断：灰白7.5Y8/1	内外面施釉、体部外面下部露胎
526	94		白磁皿	第6層 L7-d10	—	<1.0>	3.6	20 底部100		外：灰白7.5Y7/1(露胎) 内：灰白7.5Y8/2(釉) 断：灰白7.5Y7/1	内面施釉
527	94		須恵器鉢	第6層 L7-d10	(27.0)	<8.1>	—	20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	体部内面横方向、斜め方向の静止ナデで仕上げる
528	94	67	石製品硯	第6層 L8-d1	長 14.1	幅 7.9	厚 1.8	80		黒N2/0	猪目形の海 裏面剥離しているか 黒色頁岩(丹波帯)
529	95		青白磁皿	第1～5層 L8-c1	—	<0.7>	(3.6)	40 底部50	反転復元	外：明緑灰5G7/1(釉) 白(露胎) 内：明緑灰5G7/1(釉) 断：白	見込みにわずかに段を有す 内外面施釉 底部外面露胎(施釉後削り取る)
530	95		白磁合子	第4～5層 L7-d10	(7.0)	1.5	(7.1)	10以下 口縁20	反転復元	外：淡黄2.5Y8/3(釉) 灰白2.5Y8/2(露胎) 内：淡黄2.5Y8/3(釉) 断：灰白2.5Y8/2	内外面施釉、口縁部、体部外面下部、底部外面露胎
531	95	カラー3	輸入陶器(底部)	第4～5層 L8-d1	—	<3.7>	(17.0)	10以下 底部10	反転復元	外：灰褐7.5YR4/2(釉) 明褐灰5YR7/1(露胎) 内：黒褐7.5YR3/1(釉) 断：灰5Y6/1	内外面施釉、体部外面下部、底部外面露胎 胎土に1.5mm大までの暗赤褐2.5YR3/3の斑点

表22 掲載遺物一覧表 (22)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
532	95	カラー2	輸入陶器壺	第4～5層 L7-d10	(9.4)	<4.6>	—	10以下 口縁30	反転復元	外：浅黄5Y7/3(釉) 内：灰白2.5Y8/2(釉) 断：にぶい褐7.5YR6/3	内外面施釉
533	95		山茶碗	第4～5層 L7-e10	—	<3.1>	(7.6)	20 高台20	反転復元	外：灰白2.5Y7/1 内：灰赤2.5YR4/2 断：灰白5Y7/1	見込み非常に平滑、円形に自然釉がかかっていないのは重ね焼きの痕か 底部外面糸切り離し
534	95		山茶碗鉢	第3～5層 L8-d1	—	<10.6>	(16.7)	10以下 高台20	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	内面回転ナデ、下部に使用痕 外面回転ナデ、のち下部回転ヘラケズリ
535	95		石製品砥石	第4～5層 L7-d10	長 10.1	幅 4.4	最大厚 3.1	—		灰白5YR8/1	4面使用 変質流紋岩(畿内以外産) 中砥
536	95		石製品砥石	第4～5層 L7-d10	長 10.0	幅 6.8	最大厚 6.0	—		灰白10YR8/2	6面のうち4面使用(うち幅0.6～1.1cmの面は図上の下部に加工痕あり) 使用していない2面(断面図左側)のうち1面は割れ、もう1面には加工痕あり 変質流紋岩(畿内以外産) 中砥
第7面(第7～9層)											
537	103	68	木製品礎板	柱列3 674柱穴	長 23.4	幅 12.2	厚 9.0	—			木取り：柾目(分割材) 樹種：スギ 240・312と同種の材
538	106	68	土師器皿	建物3 714柱穴	(9.2)	1.7	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/1	
539	106		土師器皿	建物3 714柱穴	9.6	1.6	—	70 口縁80		外：にぶい橙7.5YR7/4 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：にぶい橙7.5YR7/4	
540	106		土師器皿	建物3 716柱穴	(10.6)	1.8	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
541	106		土師器皿	建物3 742柱穴	(8.3)	1.2	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：黄灰2.5Y6/1 断：灰黄2.5Y7/2	
542	106		土師器皿	建物3 731柱穴	(8.4)	1.6	—	20 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
543	106		土師器皿	建物3 731柱穴	(9.0)	1.4	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
544	106		土師器皿	建物3 731柱穴	(9.2)	1.4	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
545	106	69	土師器皿	建物3 731柱穴	10.0	1.7	—	60 口縁50		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
546	106		瓦器碗	建物3 731柱穴	(14.4)	<4.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：黒N2/0 内：暗灰N3/0 断：灰白N7/0	
547	106	68	瓦器碗	建物3 714柱穴	(15.3)	4.9	4.6	60 口縁40 高台100	反転復元 (口縁部)	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白5Y8/1	見込みに円形の痕跡、ミガキを施した後に ついたもので、周囲と同様に炭素が吸着している
548	106		瓦器碗	建物3 714柱穴	(15.9)	5.0	4.9	20 口縁10 以下 高台100	反転復元 (口縁部 ～体部)	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	見込みに円形の痕跡、ミガキを施した後に ついたもので、周囲と同様に炭素が吸着している
549	106		須恵器碗	建物2 613柱穴	—	<2.7>	—	10以下		外：灰白2.5Y8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白7.5Y7/1	底部外面糸切り離し
550	106		須恵器碗	建物2 636柱穴	—	<1.9>	(6.6)	20 底部30	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰5Y6/1 断：灰5Y6/1	底部外面糸切り離し
551	106		土師器皿	建物20 1110柱穴	(13.8)	<2.9>	—	30	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
552	106		白磁碗	建物20 1110柱穴	(16.8)	<3.3>	—	20	反転復元	外：灰白10Y8/1(釉) 内：灰白10Y8/1(釉) 断：灰白5Y8/1	内外面施釉
553	106		須恵器碗	建物20 1118柱穴	—	<3.3>	(7.0)	10以下 底部30	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白7.5Y7/1 断：灰白5Y7/1	底部外面糸切り離し
554	106		須恵器碗	建物8 802柱穴	—	<1.7>	(5.8)	10以下 底部30	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	底部外面糸切り離し
555	106	68	常滑焼三筋壺	建物7 634柱穴	(10.6)	<17.8>	—	30 口縁20	反転復元	外：赤黒2.5YR2/1 内：褐灰7.5YR4/1 断：灰白2.5Y7/1	口頸部内面回転ナデ 肩部内面指オサエ、ナデ 胴部内面指オサエ、のちナデ 肩部外面ヘラケズリ、のち回転ナデ 胴部外面回転ナデ(下胴部は縦方向のナデの ち回転ナデ) 三筋紋は3本線櫛描
556	106		木製品礎板	建物5 627柱穴	長 22.7	幅 12.4	最大厚 3.9	—			木取り：板目 樹種：コウヤマキ 粗い加工痕 検出時の上面中央部分窪んでいる

表23 掲載遺物一覧表 (23)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
557	109		土師器Ⅲ	675柱穴	(8.7)	2.0	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
558	109		土師器Ⅲ	833柱穴	(8.6)	1.2	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
559	109		土師器Ⅲ	662柱穴	(8.8)	1.2	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
560	109		土師器Ⅲ	1108柱穴	(10.4)	2.0	—	30	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰黄2.5Y7/2	
561	109		土師器Ⅲ	1108柱穴	(10.0)	1.5	—	30	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
562	109	68	土師器Ⅲ	1108柱穴	(14.6)	2.8	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白7.5YR8/2 断：灰白7.5YR8/1	
563	109	68	土師器Ⅲ	721柱穴	(7.8)	1.4	—	80 口縁50	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	外面に粘土接合痕 口縁部内面ハケ、のち横ナデ 底部内面一定方向のナデ(口縁部の横ナデより先)
564	109		木製品(部材)	721柱穴	長 (24.9)	幅 3.4	最大厚 2.9	—			木取り：板目 樹種：スギ
565	109		瓦器碗	683柱穴	(15.3)	(4.1)	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	
566	109		瓦器碗	680柱穴	(13.0)	3.3	(3.4)	30 口縁30 高台30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	
567	109		青磁碗	680柱穴	—	(3.2)	5.5	20 高台100	反転復元 (一部)	外：オリーブ灰2.5GY6/1(釉) 暗灰黄2.5Y5/2(露胎) 内：オリーブ灰2.5GY6/1(釉) 断：灰白5Y7/1	見込みに段 内外面施釉、底部外面(高台内側・畳付含む) 露胎、ただし畳付外側半分は施釉 体部外面鑄蓮弁紋
568	111		土師器Ⅲ	602溝	(9.9)	(1.9)	—	30	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/4	
569	111		土師器Ⅲ	602溝	(10.1)	(1.2)	—	10以下	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：淡赤橙2.5YR7/4	
570	111		土師器Ⅲ	602溝	(9.4)	1.7	—	30	反転復元	外：灰白7.5YR8/2 内：灰白7.5YR8/2 断：灰白7.5YR8/1	
571	111	70	土師器Ⅲ	602溝	(13.7)	3.5	—	30 口縁50	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：にぶい黄橙10YR7/2	底部内面工具を使用した不定方向のナデ
572	111		土師器Ⅲ	602溝	(14.4)	(3.1)	—	20	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白7.5Y7/1	底部内面不定方向のナデ
573	111		回転台土師器Ⅲ	602溝	—	(0.9)	(4.9)	10以下 底部50	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	底部外面糸切り離し
574	111		瓦器碗	602溝	(14.3)	(5.1)	—	10以下	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
575	111		瓦器碗	602溝	(13.9)	(4.4)	—	10以下	反転復元	外：暗灰N3/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
576	111		瓦器碗	602溝	—	(1.6)	(4.9)	10以下 高台40	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
577	111	70	瓦器碗	602溝	(15.5)	5.3	5.9	60 口縁50 高台100	反転復元 (口縁部 ～体部)	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	底部外面に焼成後線刻
578	111		須恵器碗	602溝	—	(2.9)	6.2	40 底部100	転用復元 (一部)	外：灰白2.5Y8/1 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	底部外面糸切り離し
579	111		須恵器碗	602溝	—	(2.2)	(6.1)	10以下 底部20	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰N6/0	底部外面糸切り離し
580	111		須恵器碗	602溝	—	(1.3)	(5.9)	10以下 底部30	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N7/0	底部外面糸切り離し
581	111		須恵器碗	602溝	—	(2.3)	(4.7)	10以下 底部10 以下	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	底部外面糸切り離し
582	111		須恵器碗	602溝	—	(2.1)	6.2	10以下 底部100	転用復元 (体部)	外：灰白N8/0 内：黄灰2.5Y5/1 断：灰白5Y8/1	底部外面糸切り離し
583	111	70	羽口	602溝	長 (5.2)	径 (7.0)	孔径 (1.8)	10以下		外：灰N6/0(先端部) 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：灰黄2.5Y7/2	先端部は割れているが熱を受けて発泡しており、先端をカットして再利用したと考えられる 大ききから鍛冶用と思われる

表24 掲載遺物一覧表 (24)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
584	112		土師器皿	715溝	(7.8)	<1.2>	—	30 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
585	112		土師器皿	755溝	(7.9)	1.0	—	20 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
586	112		土師器皿	614溝	(9.3)	<1.8>	—	40 口縁50	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	外面に接合痕
587	112		土師器皿	604溝	(8.8)	1.6	—	20 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：にぶい橙7.5YR7/4	
588	112		瓦器碗	604溝	—	<1.7>	4.7	10以下 高台100	反転復元 (体部)	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
589	112		瓦器碗	693溝	—	<1.6>	5.1	20 高台100	反転復元 (体部)	外：灰N6/0 内：暗灰N3/0 断：灰白5Y8/1	
590	112	70	土師器皿	1106溝	(8.8)	1.4	—	50	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：浅黄橙10YR8/3	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
591	112	70	土師器皿	1106溝	(14.7)	2.2	—	50	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
592	112		須恵器碗	1106溝	—	<3.2>	(6.7)	10以下 底部30	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	底部外面糸切り離し
593	112		土師器皿	1129溝	(8.9)	1.3	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白2.5Y8/1	
594	112		土師器皿	1129溝	(9.3)	1.5	—	30 口縁30	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：灰白10YR8/2 断：淡赤橙2.5YR7/3	
595	112		土師器皿	1129溝	(10.0)	1.7	—	30 口縁30	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：浅黄橙7.5YR8/4	
596	112	70	土師器皿	1129溝	9.4	1.6	—	60 口縁60	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：淡黄2.5Y8/3 断：灰白10YR7/1	
597	112		土師器皿	1129溝	(14.7)	3.0	—	30 口縁30	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：淡赤橙2.5YR7/3	
598	112		土師器皿	1129溝	(15.2)	3.1	—	40 口縁40	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/1	
599	112		須恵器碗	1129溝	—	<2.8>	(6.2)	20 底部30	反転復元	外：灰白2.5Y8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白2.5Y8/1	底部外面糸切り離し
600	112		瓦器碗	1129溝	(15.6)	<4.6>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：暗灰N3/0 内：灰N4/0 断：灰白7.5Y8/1	
601	112		瓦器碗	1129溝	(15.7)	<4.3>	—	10以下 口縁30	反転復元	外：暗灰N3/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
602	112		瓦器碗	750溝	(14.6)	5.5	(7.7)	20 口縁20 高台10 以下	反転復元	外：灰白5Y8/1 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	
603	114	71	土師器皿	692溝	9.1	2.0	—	100		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：—	
604	114	71	土師器皿	692溝	(9.1)	2.0	—	70		外：灰白10YR8/2 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	
605	114	71	土師器皿	692溝	9.4	2.0	—	90		外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
606	114	71	土師器皿	692溝	9.4	2.1	—	100		外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
607	114	71	土師器皿	692溝	9.0	1.7	—	100		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：灰白7.5YR8/2 断：—	
608	114	71	土師器皿	692溝	9.1	2.1	—	100		外：灰白10YR8/2 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：—	
609	114	71	土師器皿	692溝	9.2	1.7	—	100		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：—	
610	114	71	土師器皿	692溝	8.9	1.6	—	100		外：灰白10YR8/2 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	

表25 掲載遺物一覧表 (25)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
611	114	71	土師器皿	692溝	8.7	1.8	—	90		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：灰白10YR8/2	
612	114	71	土師器皿	692溝	9.0	1.8	—	90		外：灰白10YR8/2 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/4	
613	114	71	土師器皿	692溝	9.1	1.9	—	90		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白10YR8/2 断：浅黄橙7.5YR8/4	
614	114	71	土師器皿	692溝	9.4	1.9	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：—	
615	114	71	土師器皿	692溝	9.7	1.7	—	100		外：灰白2.5Y8/1 内：灰白5Y8/1 断：—	
616	114	71	土師器皿	692溝	9.5	1.8	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：—	
617	114	71	土師器皿	692溝	9.6	1.8	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：—	
618	116		土師器皿	701ピット	(8.6)	0.9	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
619	116	69	土師器皿	701ピット	11.5	2.1	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：淡黄2.5Y8/3 断：—	
620	116	69	土師器皿	701ピット	11.6	2.1	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：—	
621	116		土師器皿	701ピット	(11.3)	2.5	—	40 口縁30	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	
622	116	69	土師器皿	701ピット	12.0	2.1	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
623	116	69	土師器皿	701ピット	11.6	2.7	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：淡黄2.5Y8/3 断：灰白2.5Y7/1	
624	116		瓦器 椀	701ピット	(16.5)	(2.6)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	
625	117	72	土師器皿	720土坑	8.0	1.3	—	70 口縁70		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
626	117	72	土師器皿	720土坑	8.5	1.4	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
627	117		土師器皿	720土坑	(9.0)	1.3	—	40 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	底部内面一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
628	117		土師器皿	720土坑	(12.3)	2.2	—	20 口縁30	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
629	117	72	瓦質土器 羽釜	720土坑	14.4	(9.5)	—	40 口縁50		外：黒2.5Y2/1 内：黒褐2.5Y3/1 断：灰黄褐10YR4/2	体部内面工具によるナデ 外面スス付着
630	118		土師器皿	630 土器集積	(9.2)	1.4	—	50 口縁40	反転復元	外：灰白2.5Y8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白2.5Y8/1	
631	118	72	土師器皿	630 土器集積	(9.2)	1.4	—	90 口縁80	反転復元 (口縁部)	外：浅黄橙10YR8/3 内：淡黄2.5Y8/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	
632	118	72	土師器皿	630 土器集積	9.2	1.7	—	100		外：淡黄2.5Y8/3 内：淡黄2.5Y8/3 断：灰黄2.5Y7/2	
633	118	72	土師器皿	630 土器集積	9.2	1.6	—	90 口縁80		外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
634	118	72	土師器皿	630 土器集積	8.9	1.3	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：—	
635	118		土師器皿	630 土器集積	9.1	1.6	—	60 口縁40		外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
636	118		土師器皿	630 土器集積	9.2	1.7	—	40 口縁40	反転復元	外：淡黄2.5Y8/3 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：灰白10YR8/2	
637	118		土師器皿	631 土器集積	8.7	1.7	—	80 口縁50		外：浅黄橙7.5YR8/4 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：浅黄橙7.5YR8/3	
638	118		土師器皿	631 土器集積	8.7	1.6	—	80 口縁60		外：浅黄橙7.5YR8/4 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：灰白10YR8/2	

表26 掲載遺物一覧表 (26)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
639	118		土師器皿	652 土器集積	(7.9)	1.3	—	80 口縁80	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
640	118		土師器皿	652 土器集積	(9.1)	<1.6>	—	20 口縁30	反転復元	外：淡黄2.5Y8/3 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
641	120	69	瓦質土器盤	831ピット	(26.4)	8.5	(16.0)	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
642	120	69	木製品用途不明	831ピット	長 15.5	最大幅 8.2	最大厚 4.3	—			木取り：柾目 樹種：スギ 全体的に加工痕粗い 738と同種
643	121	72	土師器皿	747 落ち込み	9.0	1.6	—	90 口縁70		外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：灰黄2.5Y7/2	著しく歪む 底部内面に粘土接合痕、強いナデで消そう としているが完全に消えていない
644	121	72	土師器皿	747 落ち込み	8.7	1.1	—	90 口縁80		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/4	底部外面に粘土接合痕
645	121	72	土師器皿	747 落ち込み	9.0	1.6	—	60 口縁50		外：橙5YR7/6 内：灰白10YR8/2 断：灰白2.5Y8/2	
646	121		土師器皿	747 落ち込み	(15.3)	<2.1>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：橙5YR7/6 内：橙5YR7/6 断：橙5YR7/6	
647	121	72	山茶碗	747 落ち込み	—	<3.5>	8.0	30 高台100		外：灰白5Y7/1 内：灰白N7/0 断：灰白5Y7/1	内外面回転ナデ 見込みは円弧状のナデ(静止か)により非常に平滑に仕上げたのち、中央部分を粗いナデで窪ませる 底部外面糸切り離し 高台に粉殺痕
648	121		瓦器碗	747 落ち込み	(14.3)	<4.4>	—	20 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰白7.5Y7/1	
649	121		瓦器碗	747 落ち込み	(15.5)	4.6	(4.0)	30 口縁20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰7.5Y5/1 断：灰白N7/0	内面ミガキはまず見込みに、次に体部に下部から上部へ向けて施す
650	122		土師器皿	702ピット	(7.6)	<1.1>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y7/1	
651	122		土師器皿	702ピット	(9.1)	2.0	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
652	122		土師器皿	686ピット	(8.6)	<1.5>	—	20 口縁30	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：灰白10YR8/2	
653	122	69	土師器皿	612ピット	(8.6)	1.6	—	70 口縁50	転用復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	外面に粘土接合痕
654	122		瓦器碗	612ピット	—	<1.0>	4.4	10以下 高台60		外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
655	122		土師器皿	642ピット	(9.2)	1.3	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/1 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/1	
656	122		土師器皿	735ピット	(8.0)	<1.3>	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
657	122		土師器皿	685ピット	(9.8)	<2.1>	—	30 口縁40	反転復元	外：灰白2.5Y8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白2.5Y8/1	
658	122		土師器皿	685ピット	(10.1)	<1.4>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/1 内：灰白10YR8/1 断：灰白10YR8/1	
659	122		瓦器碗	685ピット	—	<2.4>	(5.1)	10以下 高台30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	
660	122		土師器皿	712ピット	(10.5)	1.5	—	20 口縁20	反転復元	外：黄灰2.5Y5/1 内：黄灰2.5Y5/1 断：黄灰2.5Y5/1	
661	122		土師器皿	712ピット	(9.4)	<1.7>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：灰白10YR8/2	
662	122		瓦器碗	712ピット	(16.3)	<4.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：灰白7.5Y8/1	
663	122		土師器皿	763ピット	(9.2)	1.6	—	30 口縁30	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
664	122		土師器皿	建物3 745柱穴	(9.0)	1.7	—	30 口縁20	反転復元	外：黄灰2.5Y6/1 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	
665	122		瓦器碗	建物3 745柱穴	—	<2.4>	(4.3)	20 高台30	反転復元	外：暗灰N3/0 内：灰N4/0 断：灰白N8/0	

表27 掲載遺物一覧表 (27)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
666	122		土師器皿	732ピット	(8.5)	1.5	—	40 口縁30	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：浅黄橙7.5YR8/3	
667	122		土師器皿	732ピット	(9.7)	1.3	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
668	122	69	土師器皿	732ピット	(8.9)	1.7	—	50 口縁30	反転復元 (口縁部～体部)	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
669	122		土師器皿	732ピット	(9.6)	1.5	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
670	122		土師器皿	732ピット	(9.8)	1.3	—	30 口縁30	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
671	122		土師器皿	732ピット	(10.7)	<1.3>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
672	122	69	土師器皿	1127ピット	8.5	1.5	—	50		外：浅黄橙7.5YR8/4 内：灰白10YR8/2 断：灰白2.5Y8/1	底部外面に粘土接合痕
673	122	69	土師器皿	1127ピット	(9.6)	1.5	—	40	反転復元	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
674	122	69	瓦器椀	1150ピット	15.2	5.0	4.7	60 口縁50 底部100		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：灰白10YR8/2 断：灰白5Y7/1	
675	122		土師器皿	787ピット	(9.1)	<1.4>	—	20 口縁30	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	
676	122		土師器皿	1119ピット	(15.0)	<3.1>	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰白10YR8/2 断：灰黄褐10YR6/2	
677	122		須恵器椀	829ピット	—	<3.0>	(6.0)	10以下 底部30	反転復元	外：灰5Y5/1 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	底部外面糸切り離し
678	123		瓦軒丸瓦	撞乱L8-d1	—	瓦当径 (外縁含めず) (11.3)	瓦当厚 (外縁含めず) 1.6	瓦当40		凸：灰白2.5Y7/1 凹：灰N6/0 断：灰白2.5Y8/1	瓦当裏面ナデ
679	124		土師器皿	第7層C地点	9.0	1.6	—	60		外：橙5YR7/6 内：橙5YR7/6 断：にぶい橙7.5YR6/4	
680	124		土師器皿	第7層C地点	9.2	1.5	—	60		外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：浅黄橙10YR8/3	
681	124		土師器皿	第7層C地点	9.4	1.9	—	100		外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：にぶい橙7.5YR7/4	
682	124		土師器皿	第7層C地点	9.2	1.8	—	100		外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
683	124		土師器皿	第7層C地点	9.4	1.8	—	100		外：橙5YR7/6 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：—	
684	124		土師器皿	第7層C地点	9.4	1.7	—	100		外：橙7.5YR7/6 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい褐7.5YR6/3	
685	124		土師器皿	第7層C地点	(9.6)	1.9	—	40	反転復元	外：橙5YR6/6 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい橙5YR6/4	
686	124		土師器皿	第7層C地点	9.8	1.9	—	70		外：にぶい黄橙10YR7/4 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい橙7.5YR6/4	
687	124		土師器皿	第7層C地点	9.0	1.9	—	70		外：橙7.5YR7/6 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい黄橙10YR6/4	
688	124		土師器皿	第7層C地点	9.0	1.8	—	100		外：橙7.5YR7/6 内：浅黄橙10YR8/3 断：にぶい橙7.5YR6/4	
689	124		土師器皿	第7層C地点	9.2	1.6	—	90 口縁50		外：にぶい橙7.5YR7/4 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
690	124		土師器皿	第7層C地点	9.6	2.0	—	80		外：浅黄橙7.5YR8/4 内：橙7.5YR7/6 断：にぶい橙7.5YR7/4	
691	124		土師器皿	第7層C地点	9.2	1.8	—	100		外：橙5YR7/6 内：橙5YR7/8 断：—	
692	124		回転台土師器皿	第7層C地点	(9.4)	2.3	(5.6)	40 口縁40	反転復元	外：灰白2.5Y7/1 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/4	底部外面糸切り離し
693	124		土師器皿	第7層C地点	(14.0)	3.0	—	60 口縁50	反転復元 (口縁部)	外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：にぶい黄橙10YR7/3	

表28 掲載遺物一覧表 (28)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
694	124		瓦器皿	第7層C地点	9.8	2.1	—	90 口縁70		外: 灰N5/0 内: 灰N4/0 断: 灰白5Y8/1	
695	124		瓦器皿	第7層C地点	9.4	2.2	—	100		外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: —	
696	124		瓦器碗	第7層C地点	(16.1)	(5.0)	—	30 口縁30	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰白N8/0	
697	124		瓦器碗	第7層C地点	(15.0)	5.5	4.6	20 口縁20 高台100	反転復元 (口縁部 ~体部)	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白N8/0	
698	124		白磁碗	第7層C地点	—	(4.6)	7.2	20 高台70	転用復元 (体部)	外: 灰白10Y8/1(釉) 灰白5Y7/1(露胎) 内: 灰白7.5Y8/1(釉) 灰白5Y8/1(露胎) 断: 灰白N8/0	内外面施釉、体部外面下部、底部外面露胎 見込みの釉を環状に掻き取る、この部分に 目跡あり 畳付を中心とする高台下部に内面の目跡と 同様の付着物(灰白5Y8/1)あり
699	125		土師器皿	第7層L7-d10	(9.3)	1.5	—	30 口縁30	反転復元	外: 灰白2.5Y8/2 内: 灰白2.5Y8/2 断: 灰N6/0	
700	125		土師器皿	第7層L7-d10	(10.2)	2.0	—	80	反転復元 (口縁部)	外: 浅黄橙10YR8/4 内: 浅黄橙10YR8/4 断: にぶい褐7.5YR6/3	
701	125		土師器皿	第7層L8-c2	9.5	1.8	—	70 口縁70		外: にぶい橙7.5YR7/4 内: にぶい橙7.5YR7/4 断: にぶい橙7.5YR6/4	
702	125		土師器皿	第7層L8-c2	9.0	1.5	—	90 口縁80		外: 灰白10YR8/2 内: 灰白10YR8/2 断: にぶい黄橙10YR7/2	
703	125		土師器皿	第7層L8-c2	9.4	2.1	—	100		外: にぶい橙7.5YR7/4 内: にぶい橙7.5YR7/4 断: —	
704	125		土師器皿	第7層L8-c2	9.1	1.8	—	100		外: 浅黄橙7.5YR8/4 内: 浅黄橙7.5YR8/4 断: —	
705	125		土師器皿	第7層L8-c2	9.2	1.6	—	100		外: にぶい黄橙10YR7/4 内: 浅黄橙10YR8/4 断: にぶい黄橙10YR7/2	
706	125		土師器皿	第7層L8-c2	9.7	1.7	—	100		外: にぶい黄橙10YR7/4 内: 灰白2.5Y8/2 断: —	
707	125		土師器皿	第7層L8-d2	9.2	1.5	—	80		外: 浅黄橙7.5YR8/3 内: 浅黄橙7.5YR8/3 断: 橙5YR7/6	内面底部一定方向のナデ、のち口縁部横ナデ
708	125		土師器皿	第7層L8-d2	(8.4)	1.0	—	50	反転復元	外: 橙5YR7/6 内: 橙5YR7/6 断: 橙5YR7/6	
709	125		土師器皿	第7層L7-d10	(15.6)	2.5	—	30	反転復元	外: 浅黄橙7.5YR8/4 内: 浅黄橙7.5YR8/4 断: 浅黄橙7.5YR8/4	
710	125		瓦器皿	第7層L8-c2	9.2	1.9	—	80 口縁60		外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰白5Y7/1	
711	125		瓦器碗	第7層L8-c2	(15.6)	4.9	(6.0)	40 口縁40 高台30	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 灰白N7/0	
712	125		白磁碗	第7層L7-d10	(14.4)	(4.2)	—	20	反転復元	外: 灰7.5Y6/1(釉) 灰7.5Y6/1(露胎) 内: 灰7.5Y6/1(釉) 断: 灰白N8/0	内外面施釉、体部外面下部露胎
713	125		白磁碗	第7層L8-d3	(17.2)	(5.1)	—	20	反転復元	外: オリーブ黄7.5Y6/3(釉) 内: オリーブ黄7.5Y6/3(釉) 断: 灰白N7/0	内外面施釉
714	125		瓦質土器羽釜	第7層L7-d9	(12.0)	(11.5)	—	30	反転復元	外: 灰白N7/0 黒N2/0 内: 黒N2/0 断: 灰白N7/0	
715	125		須恵器鉢	第7層L7-d9	(29.8)	10.3	(10.0)	40	反転復元	外: 灰白N7/0 内: 灰白N7/0 断: 灰白N7/0	体部内面回転ナデ、のち斜め方向のナデ 体部外面回転ナデ、のち下半に縦方向の粗いナデ 底部外面糸切り離し 内面下半に使用痕
716	125		土師器竈	第7層L8-c2	—	長 (8.8)	—	10以下	傾き不明	外: 灰白10YR8/2 内: にぶい黄橙10YR7/2 断: 灰白N7/0	内外面工具によるナデ
717	125		石製品鍋(再加工)	第7層L8-d1	長 (4.1)	幅 (5.7)	厚 1.5	—		外: 黒N2/0 内: 黒N2/0 断: 黒N2/0	横方向の加工痕残す面にスス付着、石鍋の 外面と思われる。石鍋内面と考えられる面 は縁を高くして内側を低くする再加工を施 されたか。縦方向の加工痕残す側面にはス ス付着していないため、再加工面と思われ る、切れ込みあり 図面上で天の側面は平 滑、石鍋の口縁が 滑石

表29 掲載遺物一覧表 (29)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
718	126		土師器皿	第8層 L7-d10	9.4	2.0	—	100		外：灰白2.5Y8/2 内：灰白2.5Y8/2 断：灰白2.5Y8/2	
719	126		石製品砥石	第8層 L8-d1	長 11.2	幅 11.0	最大厚 5.4	—		灰白2.5Y8/1	5面は使用凝灰質(畿内以外産)中砥
第10面(第10層)											
720	128		土師器皿	800溝	9.5	1.9	—	90 口縁60		外：淡黄2.5Y8/3 内：淡黄2.5Y8/3 断：淡黄2.5Y8/3	
721	129		土師器皿	第10層 L7-d9・10	(9.0)	1.5	—	30 口縁30	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	
722	129		瓦器碗	第10層 L7-d9・10	—	(1.6)	(6.8)	10以下 高台40	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N5/0 断：灰白N8/0	
第12面(第11・12層)											
723	132		土師器皿	第11層 L7-d9	(12.6)	2.2	—	40	反転復元	外：にぶい橙5YR7/4 内：橙5YR7/6 断：にぶい黄橙10YR6/3	
724	132		土師器皿	第11層 L7-d10	(13.9)	2.9	—	30	反転復元(口縁部～体部)	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄褐10YR5/3 断：灰黄2.5Y6/2	
725	132		土師器皿	第11層 L7-d10	(12.4)	2.4	—	20	反転復元	外：浅黄2.5Y7/3 内：浅黄2.5Y7/3 断：浅黄2.5Y7/3	
726	132		土師器皿	第11層 L7-d10	(14.0)	3.2	—	30 口縁20	反転復元	外：灰黄2.5Y7/2 内：浅黄2.5Y7/3 断：灰5Y5/1	内面ハケ、のちナデ
727	132		灰釉陶器碗	第11層 L7-d10	—	(2.4)	(7.1)	20 高台50	反転復元	外：灰白5Y8/1(釉) 灰5Y6/1(露胎) 内：灰白5Y8/1(釉) 灰黄2.5Y6/2(露胎) 断：灰白5Y7/1	体部外面回転ヘラケズリ 貼り付け高台 施釉(灰釉)
728	132		緑釉陶器碗	第11層 L7-d10	—	(1.7)	(8.4)	10以下 高台20	反転復元	外：黄褐2.5Y5/4(釉) 内：黄褐2.5Y5/4(釉) 断：にぶい橙7.5YR7/4	内外面施釉 見込みに沈線
729	132		黒色土器A類碗	第11層(砂層) L8-c1	—	(2.2)	8.6	20 高台50	反転復元(体部)	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：暗灰N3/0 断：浅黄2.5Y7/3	
730	132		須恵器杯	第11層 L7-d10	—	(1.2)	(9.8)	10以下 高台10	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	
731	132		須恵器杯	第11層 L7-d9	—	(1.9)	(9.6)	10以下 高台20	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白N8/0 断：灰白2.5Y8/1	
732	132		須恵器壺	第11層 L7-c10	—	(4.0)	(9.8)	10以下 高台20	反転復元	外：青灰5PB6/1 内：青灰5PB6/1 断：灰赤2.5YR5/2	
733	132		土師器甕	第11層 L8-d・e1	(13.4)	(4.6)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：灰黄2.5Y7/2 断：にぶい赤褐5YR4/4	
734	132		土師器甕	第11層 L7-d10	(28.2)	(5.6)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：灰黄2.5Y6/2	
735	132		須恵器杯身か杯蓋	第11層 L7-d10	—	(2.5)	—	20	天地不明傾き復元	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：灰5Y6/1 断：灰5Y6/1	内面回転ナデ、のち中央静止ナデ
736	132		弥生土器(底部)	第11層 L7-d10	—	(1.9)	3.0	10以下 底部100		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	
737	132		弥生土器(底部)	第11層 L7-d10	—	(2.4)	5.3	10以下 底部100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	
738	132	72	木製品用途不明	第11層 L7-d10	長 15.5	最大幅 8.2	最大厚 5.0	—			木取り：柾目 樹種：ヒノキ科 全体的に加工痕粗い 642と同種
第15面(第15層)											
739	135		弥生土器壺	1013土坑	(9.5)	11.5	(5.4)	60 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR6/3 断：にぶい橙5YR6/4	体部外面に段 内外面とも剥離著しい
740	135		弥生土器高杯	946溝	—	(6.3)	(7.2)	20	反転復元(脚部)	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄褐10YR4/3 断：褐灰10YR4/1	胎土に角閃石含む、生駒西麓系
741	135	74	弥生土器広口壺	946溝	(22.4)	(8.5)	—	10以下 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y8/1 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	内外面とも剥離しており調整等不明瞭 口縁端面に櫛描列点紋と円形浮紋 口頸部外面、櫛描直線紋(1条7本)
742	135	74	弥生土器甕	946溝	7.8	10.3	3.3	100		外：灰黄2.5Y6/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：灰黄2.5Y7/2	外面、底部内面剥離

表30 掲載遺物一覧表 (30)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
743	135		弥生土器(底部)	946溝	—	<4.8>	5.4	10以下 底部100	反転復元(一部)	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y6/2	内外面とも著しく剥離 胎土に5mm大の石粒含む
744	135	74	弥生土器高杯	1015土坑	20.1	<8.6>	—	40 口縁100		外: におい黄橙10YR7/2 内: 灰黄褐10YR6/2 断: 灰黄2.5Y6/2	脚柱部内面にシボリ痕 杯部内面に2箇所黒斑あり
745	135	74	弥生土器甕	1015土坑	(13.0)	25.5	5.8	80 口縁50	反転復元	外: 浅黄2.5Y7/4 内: におい黄橙10YR6/3 断: 灰黄2.5Y7/2	底部内面指オサエ、ナデ 体部外面ヘラケズリ、のちハケ 体部外面下端、底部外面ナデ 体部下半から底部に1箇所黒斑あり
746	139		須惠器杯身	ビット列2 860ビット	—	<2.0>	—	10以下	傾き復元	外: 灰N5/0 内: 灰7.5Y6/1 断: 灰7.5Y6/1	
747	139	74	土師器杯	985ビット	(13.1)	3.3	—	30 口縁40	反転復元	外: 橙5YR7/6 内: におい黄橙10YR7/2 断: 橙5YR6/6	底部外面磨耗のため調整等不明
748	142		須惠器杯蓋	923土坑上層	(11.2)	4.9	—	50 口縁20	反転復元	外: 灰N5/0 内: 灰N5/0 断: 灰5Y5/1	
749	142	74	須惠器杯蓋	923土坑中層	12.6	4.9	—	80 口縁80		外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰N6/0	
750	142	74	須惠器蓋	923土坑上層	12.8	6.3	—	70		外: 灰N4/0 内: 灰N6/0 断: 灰7.5Y4/1	
751	142		須惠器杯身	923土坑	(10.0)	<4.6>	—	20	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N4/0 断: 褐灰10YR5/1	
752	142	75	須惠器杯身	923土坑上層	(12.9)	4.8	—	60	反転復元(口縁部)	外: 灰5Y6/1 内: 灰白2.5Y8/1 断: 灰白5Y7/1	
753	142		須惠器杯身	923土坑上層	(13.1)	5.1	—	40	反転復元	外: 灰黄2.5Y5/1 内: におい黄2.5Y6/3 断: におい黄橙10YR6/3	
754	142	75	須惠器高杯	923土坑上層	14.5	<6.0>	—	60 杯部90	反転復元(脚部)	外: 灰N5/0 内: 灰5Y6/1 断: 灰5Y6/1	脚部3方向透し
755	142	75	須惠器壺	923土坑	(16.8)	<5.3>	—	10以下 口縁40	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N5/0 断: 灰N5/0	
756	142		須惠器短頸壺	923土坑上層	—	<7.6>	—	40 体部60		外: 灰N4/0 内: 灰7.5Y4/1 断: 灰N4/0	外面、頸部から肩部回転ナデ、体部上部カキメ、のち体部回転ヘラケズリ
757	142	75	須惠器越か壺	923土坑中層	—	<10.4>	—	30 体部50	反転復元	外: 灰N4/0 内: 灰N5/0 断: 褐灰5YR5/1	内面回転ナデ、体部下から底部工具による圧痕の上からナデ、底部指オサエ 外面、頸部から肩部回転ナデ、体部カキメ、体部下回転ヘラケズリ、底部ナデ
758	142	75	土師器杯	923土坑	(11.8)	5.2	—	80 口縁40	反転復元(口縁部~体部)	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: におい黄橙10YR6/4	内面ハケ、のち口縁部横ナデ 体部外面ナデ 体部から底部外面に筋状及び粒状の圧痕
759	142		土師器高杯	923土坑	(15.7)	<5.6>	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外: 浅黄橙7.5YR8/4 内: におい橙7.5YR7/4 断: 灰褐7.5YR4/2	
760	142	75	土師器鉢	923土坑	(11.6)	6.4	—	50 口縁30	反転復元	外: 暗灰N3/0 内: 暗灰N3/0 断: 灰黄2.5Y6/2	口縁部横ナデ 体部内外面工具によるナデ、のちミガキ 黒化処理
761	142		土師器壺	923土坑	(10.0)	<5.4>	—	10以下 口縁10以下	反転復元 傾き復元	外: 浅黄橙10YR8/3 内: 灰白10YR8/1 断: 灰白10YR8/1	
762	142		土師器壺	923土坑上層	(10.0)	<7.2>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 灰白10YR8/1 内: 暗褐灰7.5YR7/2 断: におい橙7.5YR7/4	
763	142		土師器甗	923土坑上層/中層	(23.8)	<13.1>	—	20 口縁20	反転復元	外: 灰白10YR8/2 内: 灰白10YR8/2 断: 灰白10YR8/1	摩擦著しい
764	142		土師器甕	923土坑上層	(13.3)	<5.1>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: におい黄橙10YR7/3 内: 灰黄2.5Y7/2 断: におい黄橙10YR7/2	
765	142	75	土師器甕	923土坑上層	(20.1)	<6.0>	—	10以下 口縁30	反転復元	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 浅黄2.5Y7/3 断: 灰白2.5Y7/1	口縁部内面ハケ、のち横ナデ 体部外面ハケ
766	142		土師器甕	923土坑中層	(27.7)	<9.2>	—	10以下 口縁10以下	反転復元	外: 灰白2.5Y8/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰白2.5Y8/1	
767	142		土師器甕	923土坑中層	(13.9)	<7.5>	—	20 口縁30	反転復元	外: におい黄橙10YR7/2 内: 灰黄褐10YR6/2 断: 灰黄褐10YR6/2	
768	143	76	製塩土器	923土坑	(5.1)	<4.0>	—	10以下 口縁20	反転復元	外: におい橙7.5YR7/4 内: 橙7.5YR7/6 断: におい橙7.5YR7/4	内面貝殻条痕
769	143	76	製塩土器	923土坑	(4.3)	<6.0>	—	10以下	反転復元	外: 橙5YR6/8 内: 明赤褐5YR5/6 断: 橙2.5YR6/6	内面縦方向のナデ 外面タタキ

表31 掲載遺物一覧表 (31)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
770	143	76	製塩土器	923土坑上層	(3.0)	(8.0)	—	30 口縁30	反転復元	外：黄灰2.5Y5/1 内：暗灰N3/0 断：にぶい黄橙10YR7/3	内面工具による斜め方向のナデ
771	143	76	製塩土器	923土坑	(2.9)	(6.4)	—	20 口縁10 以下	反転復元	外：灰白2.5Y8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白N7/0	内面工具による横方向のナデ
772	143	76	製塩土器	923土坑	(3.1)	(5.2)	—	20 口縁50	反転復元	外：灰白10YR8/1 内：灰白2.5Y8/1 断：灰白10YR8/1	内面工具による横方向のナデ
773	143	76	製塩土器	923土坑	—	(0.4)	—	10以下		外：橙2.5YR6/6 内：にぶい橙5YR7/4 断：にぶい黄橙10YR7/2	
774	143		製塩土器	923土坑	—	(1.9)	—	10以下	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	体部内面斜め方向のナデ
775	145		須恵器杯身	977土坑	(14.0)	(4.3)	—	20 口縁10 以下	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	
776	145		須恵器杯蓋	1047土坑	—	(2.2)	—	10以下		外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：褐灰10YR4/1	
777	145		須恵器甕	977土坑	(15.0)	(6.4)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白N8/0 断：灰白5Y7/1	体部内面タタキ、のち横ナデ 頸部外面から肩部外面タタキ、のちカキメ
778	145	77	須恵器甕	1023土坑	—	(8.0)	—	50 体部100	反転復元 (体部)	外：灰5Y5/1 内：灰5Y6/1 断：灰5Y6/1	外面、頸部から肩部、体部上半回転ナデ、 体部下部回転ヘラケズリ
779	145		製塩土器	925土坑	(4.0)	(3.7)	—	20 口縁10 以下	反転復元	外：褐灰10YR4/1 内：褐灰10YR5/1 断：黄灰2.5Y6/1	内面指オサエ 外面タタキ
780	145		製塩土器	925土坑	(7.2)	(4.3)	—	40 口縁30	反転復元	外：淡橙5YR8/4 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：暗灰N3/0	内面指オサエ 外面タタキ
781	145		土師器甕	926土坑	(15.6)	(3.6)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：黄灰2.5Y5/1 内：灰黄2.5Y6/2 断：灰N5/0	
782	145	78	土師器壺	926土坑	19.7	(28.5)	—	30 口縁80	反転復元 (体部)	外：にぶい褐7.5YR5/3 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：黄灰2.5Y5/1	剥離著しい
783	147		須恵器杯蓋	939土坑	(10.6)	(4.2)	—	20 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：褐灰10YR4/1	
784	147		須恵器杯蓋	939土坑	(12.0)	(4.1)	—	20 口縁10 以下	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	天井部外面に他個体の胎土が窯着
785	147	77	須恵器蓋	939土坑	12.6	4.9	—	100		外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	内面回転ナデ、のち天井部不定方向の静止ナデ
786	147	77	須恵器杯身	939土坑	10.5	5.4	—	80		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰7.5Y5/1	
787	147		須恵器杯身	939土坑	(10.7)	(4.2)	—	20 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	
788	147		須恵器高杯	939土坑	—	(3.9)	—	10以下	反転復元 傾き復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 断：黄灰2.5Y5/1	
789	147		須恵器甕	939土坑	(11.0)	(4.5)	—	10以下	反転復元 傾き復元	外：黄灰2.5Y6/1 内：灰5Y5/1 断：灰5Y5/1	
790	147		須恵器甕	939土坑	(14.0)	(4.4)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	口頸部外面にヘラ描
791	147	77	土師器鉢	939土坑	12.4	5.7	—	90 口縁100		外：灰白7.5YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白7.5YR8/2	体部内面工具による横方向のナデ
792	147	77	土師器甕	939土坑	14.0	(5.7)	—	10以下 口縁100	反転復元 (体部)	外：灰白5Y8/1 内：灰白5Y8/1 断：灰白5Y7/1	
793	147		土師器甕	939土坑	(16.0)	(2.9)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y8/1 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰白2.5Y8/1	口頸部内面ハケ、のち横ナデ
794	147		土師器甕	939土坑	(16.7)	(3.3)	—	10以下 口縁30	反転復元	外：橙5YR6/8 内：明赤褐5YR5/6 断：明赤褐5YR5/6	内面磨耗のため調整不明瞭
795	147		製塩土器	939土坑	(4.2)	(7.3)	—	20 口縁20	反転復元	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：浅黄橙7.5YR8/4	内面横方向のナデ、のち縦方向のナデ(工具によるか) 外面指オサエ
796	147		製塩土器	939土坑	—	(2.4)	—	20	反転復元	外：灰白10YR7/1 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰黄2.5Y7/2	内面ナデ
797	147	77	土師器甕	939土坑	(26.2)	(22.8)	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：にぶい橙7.5YR7/3	把手は体部を調整(ハケ)したのち器壁に孔をあけて挿入し、内外面に粘土を貼りつけて接合されている

表32 掲載遺物一覧表 (32)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
798	147		弥生土器 甕	939土坑	—	〈3.7〉	(5.0)	10以下 底部50	反転復元	外：にぶい褐7.5YR6/3 内：にぶい黄橙10YR6/3 断：にぶい黄橙10YR7/2	
799	149	78	須恵器 杯蓋	940土坑 最下層	(12.5)	〈5.0〉	—	30 口縁30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	
800	149		須恵器 杯蓋	940土坑 最下層	(15.0)	〈5.4〉	—	30 口縁30	反転復元	外：灰N6/0 内：灰7.5Y6/1 断：灰7.5Y6/1	天井部内面一定方向の静止ナデを施すか
801	149	78	須恵器 杯蓋	940土坑	14.6	5.0	—	100		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：—	内面回転ナデ、のち天井部中央一定方向の静止ナデ
802	149		須恵器 杯蓋	940土坑 下層	(15.0)	〈4.6〉	—	40 口縁40	反転復元	外：褐灰10YR5/1 内：灰黄褐10YR4/2 断：灰黄褐10YR5/2	天井部内面中央一定方向の静止ナデを施すか
803	149		須恵器 杯蓋	940土坑 最下層	(16.3)	4.2	—	30 口縁20	反転復元	外：灰5Y5/1 内：灰5Y5/1 断：灰5Y6/1	天井部内面中央一定方向の静止ナデ
804	149		須恵器 杯蓋	940土坑 上層	(15.1)	4.7	—	70 口縁20 (口縁部)	反転復元	外：褐灰10YR5/1 内：灰褐5YR5/2 断：灰褐5YR5/2	内面回転ナデ、のち天井部中央一定方向の静止ナデ
805	149		須恵器 杯蓋	940土坑 下層	(14.0)	4.1	—	50 口縁50	反転復元	外：褐灰10YR5/1 内：灰N5/0 断：灰N5/0	内面回転ナデ、のち天井部中央一定方向の静止ナデ
806	149	78	須恵器 杯蓋	940土坑 最下層	15.7	5.0	—	80 口縁70		外：灰白5Y7/1 内：灰黄2.5Y7/2 断：灰白5Y7/1	内面回転ナデ、のち天井部中央一定方向の静止ナデ 天井部内面中央に当て具痕(ナデで一部消されている)
807	149		須恵器 杯蓋	940土坑	(13.3)	〈3.8〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N4/0 内：黄灰2.5Y4/1 断：黄灰2.5Y4/1	
808	149	78	須恵器 杯蓋	940土坑 上層	14.4	4.4	—	100		外：灰N6/0 内：褐灰10YR5/1 断：—	天井部外面の回転ヘラケズリ、中央から周囲へ反時計まわりに施す 内面回転ナデ、のち天井部中央一定方向の静止ナデ
809	149		須恵器 杯蓋	940土坑 最上層	(15.4)	〈4.2〉	—	20 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	
810	149		須恵器 杯身	940土坑 上層 (西層)	—	〈3.9〉	—	20	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白2.5Y7/1 断：灰白N8/0	
811	149		須恵器 杯身	940土坑 最下層	(15.6)	〈4.2〉	—	20 口縁10 以下	反転復元	外：灰N4/0 内：灰5Y5/1 断：灰N6/0	
812	149		須恵器 杯身か 杯蓋	940土坑 下層	—	〈1.0〉	—	20	天地不明 傾き復元 反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	内面回転ナデ、のち中央部一定方向の静止ナデ 当て具痕をナデ消す 外面にヘラ描
813	149		須恵器 杯身	940土坑 下層	(13.5)	〈5.0〉	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	内面回転ナデ、のち底部中央一定方向の静止ナデ
814	149		須恵器 杯身	940土坑 上層	(12.9)	4.4	—	40 口縁10 以下	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	底部内面中央静止ナデ
815	149	79	須恵器 杯身	940土坑 上層	13.2	5.1	—	90		外：灰白5Y7/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	内面回転ナデ、のち底部中央一定方向の静止ナデ
816	149	79	須恵器 杯身	940土坑 下層	12.2	4.7	—	90		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：—	内面回転ナデ、のち底部中央一定方向の静止ナデ
817	149		須恵器 杯身	940土坑	(12.1)	4.3	—	50 口縁50	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	底部外面の回転ヘラケズリは中央から周囲へ反時計まわりに施す
818	149	79	須恵器 杯身	940土坑	12.6	5.3	—	60 口縁60		外：灰N4/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	内面回転ナデ、のち底部中央一定方向の静止ナデ
819	149		須恵器 杯身	940土坑 最上層/ 上層 第15層 L8-d1	(13.2)	3.5	—	50 口縁20	反転復元 (口縁部)	外：灰白N7/0 内：灰N6/0 断：灰白N7/0	内面回転ナデ、のち底部中央一定方向の静止ナデ
820	149	79	須恵器 杯身	940土坑 下層	12.6	4.7	—	90		外：灰5Y5/1 内：褐灰10YR5/1 断：褐灰10YR6/1	内面回転ナデ、のち底部中央一定方向の静止ナデ、さらにその周囲に静止ナデ
821	150		須恵器 高杯	940土坑 上層/ 最下層	(9.7)	〈5.0〉	—	20 口縁30	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	脚部透しの有無不明
822	150	79	須恵器 高杯	940土坑 下層	(10.3)	〈5.9〉	—	30 口縁40	転用復元	外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：灰N5/0	脚部3方向透し
823	150		須恵器 高杯	940土坑 下層	—	〈5.9〉	9.2	50 脚部100		外：灰5Y5/1 内：灰5Y5/1 断：灰7.5Y5/1	脚部透しなし 杯部底部内面一定方向の静止ナデ

表33 掲載遺物一覧表 (33)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
824	150		須恵器高杯	940土坑最下層	—	〈4.3〉	(9.0)	10以下 底部30	反転復元	外: 灰N6/0 内: 灰N6/0 断: 灰N6/0	脚部3方向透し
825	150		須恵器高杯	940土坑上層	—	〈9.1〉	(13.8)	10以下 底部20	反転復元	外: 灰5Y5/1 内: 灰5Y5/1 断: 灰白N8/0	脚部3方向透し
826	150		須恵器甕	940土坑最下層	(17.6)	〈4.0〉	—	10以下 口縁20	反転復元	外: 黄灰2.5Y5/1 内: 灰5Y6/1 断: 灰白5Y7/1	
827	150	79	須恵器甕	940土坑上層/最下層	18.8	〈7.8〉	—	10以下 口縁100		外: 灰N4/0 内: 灰N5/0 断: 灰N4/0	体部内面に当て具痕 体部外面タタキ、のちカキメ
828	150	79	須恵器甕	940土坑上層	—	長 〈7.5〉	—	10以下	傾き不明	外: 灰N6/0 内: 灰5Y6/1 断: 灰N6/0	把手より少し上位に沈線 内面当て具痕をナデ消し 外面格子風タタキ目をナデ消し
829	150	79	須恵器甕	940土坑上層	—	〈1.2〉	—	10以下		外: 灰N5/0 内: 黄灰2.5Y5/1 断: 黄灰2.5Y5/1	平底多孔式 内面回転ナデ 外面不調整
830	150		土師器(把手)	940土坑最下層	—	長 〈3.8〉	—	10以下	傾き不明	外: 灰白2.5Y8/2 内: 灰白2.5Y8/2 断: 灰白2.5Y8/2	
831	150		土師器(把手)	940土坑最下層	—	長 〈7.6〉	—	10以下	傾き不明	外: にぶい黄橙10YR6/3 内: にぶい黄橙10YR6/3 断: にぶい黄橙10YR7/3	内面ナデ
832	150		土師器(把手)	940土坑最下層	—	長 〈7.2〉	—	10以下	傾き不明	外: 灰黄2.5Y7/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y7/2	内面縦方向のハケ、のち把手接合部分指オサエ
833	150		土師器(把手)	940土坑下層	—	長 〈8.9〉	—	10以下	傾き不明	外: にぶい黄褐10YR5/3 内: 灰黄褐10YR4/2 断: 灰黄褐10YR5/2	内面、把手接合部に粘土貼り付け
834	151	79	土師器壺	940土坑上層	(19.8)	〈8.0〉	—	10以下 口縁50	反転復元	外: 灰黄2.5Y6/2 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y6/1	口頸部外面縦方向のハケ、のち横ナデ、竹管紋
835	151	81	土師器高杯	940土坑最下層	18.4	〈7.1〉	—	50 杯部100		外: にぶい黄橙10YR7/2 内: にぶい黄褐10YR5/3 断: 褐灰10YR6/1	杯部外面口縁部から体部にかけて横ナデ、底部ナデ 杯部内面ハケ、のち底部内面中央以外横ナデ 脚柱部内面シボリ痕
836	151		土師器高杯	940土坑上層	—	〈2.6〉	—	10以下 口縁10 以下	転用復元(一部)	外: にぶい黄橙10YR7/3 内: にぶい黄橙10YR7/3 断: にぶい黄橙10YR7/3	
837	151		土師器高杯	940土坑下層	—	〈7.6〉	—	10以下 脚柱部 100		外: 灰黄2.5Y6/2 内: 灰黄2.5Y6/2 断: 灰白7.5Y7/1	
838	151	81	土師器高杯	940土坑上層/最下層	(32.1)	27.4	14.5	80 口縁60 脚部100	転用復元(口縁部)	外: (杯部)にぶい橙7.5YR6/4 (脚部)にぶい褐7.5YR6/3 内: にぶい黄褐10YR5/3 断: にぶい黄橙10YR6/3	杯部内面磨耗しており調整不明 杯部外面斜め方向等のナデ 脚部内面シボリ痕、粗い横ナデ、裾部内面ナデ 脚部外面工具痕あるが磨耗しており詳細不明
839	151		土師器甕	940土坑上層	(17.3)	〈4.2〉	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: にぶい橙2.5YR6/4 内: 灰黄2.5Y7/2 断: 灰黄2.5Y7/2	
840	151		土師器甕	940土坑上層	(20.3)	〈7.3〉	—	10以下	反転復元	外: 灰白2.5Y8/2 内: 灰白2.5Y8/2 断: 灰白2.5Y7/1	口縁部内面横方向のハケ、のち横ナデ
841	151		土師器羽釜	940土坑上層/下層	(20.4)	〈6.8〉	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外: 灰黄褐10YR6/2 内: 灰黄褐10YR6/2 断: にぶい黄褐10YR5/3	体部内面工具による横方向のナデ 体部外面縦方向のハケ、のち鏝を貼り付け
842	151		土師器羽釜	940土坑第15層L8-d1	(22.4)	〈7.1〉	—	10以下 口縁10	反転復元	外: にぶい黄褐10YR5/3 内: にぶい黄褐10YR5/3 断: にぶい黄褐10YR5/3	体部外面、縦方向から斜め方向のハケ、のち鏝を貼り付け
843	151		土師器羽釜	940土坑最下層	—	〈4.4〉	—	10以下	反転復元	外: にぶい橙7.5YR6/4 内: にぶい黄褐10YR5/3 断: にぶい黄橙10YR6/4	内面ナデ 体部外面縦方向のハケ、のち鏝を貼り付け
844	152		石器敲き石	940土坑最下層	長 16.1	幅 8.8	厚 4.2	100		灰5Y6/1	砂岩ホルンフェルス(丹波山地起源)
845	152		木製品か用途不明	940土坑上層	長 〈14.7〉	幅 〈16.4〉	厚 〈2.5〉	—			木取り: 板目 樹種: クスノキ 遺存状態不良のため加工痕の有無等不明 片面炭化
846	152		木製品か用途不明	940土坑上層	長 〈17.3〉	幅 〈15.4〉	厚 〈3.4〉	—			木取り: 板目 樹種: クスノキ 遺存状態不良のため加工痕の有無等不明 片面炭化
847	152		木製品か用途不明	940土坑最下層	長 〈22.7〉	—	—	—			木取り: 芯持材(二股材) 樹種: コナラ属 コナラ亜属クスギ節 遺存状態不良のため加工痕の有無等不明 炭化
848	152		木製品用途不明	940土坑最下層	長 〈28.7〉	幅 〈7.2〉	厚 1.2	—			木取り: 追紐 樹種: コナラ属アカガシ亜属 加工痕
849	152		木製品用途不明	940土坑下層	長 〈51.7〉	径 6.5	—	—			木取り: 芯持丸木 樹種: コナラ属アカガシ亜属 先端部分に加工痕 炭化
850	152		木製品用途不明	940土坑上層	長 〈50.7〉	—	挟り部厚 3.5・4.0	—			木取り: 芯持丸木 樹種: シヤンパンボ 粗い加工痕

表34 掲載遺物一覧表 (34)

遺物番号	挿図	写真図版	種類 器種	出土 遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図 方法	色調	備考
851	152		木製品 用途不明	940土坑 下層	長 (51.6)	幅 (9.7)	最大厚 3.0	—			木取り：追衿 樹種：コナラ属アカガシ亜属 加工痕
852	153	80 カラー 6	木製品 鞍	940土坑 最下層	高 20.0	幅 36.0 馬扶 (26.8)	最大厚 4.4	前輪 80			木取り：柁目(枝幹) 樹種：ツバキ属 前輪 左右一対の方形孔を有する面が前面で、孔は鞍を通すためのもの、後面の6箇所の方形孔は居木を固定するためのものと思われる 馬膺に溝状の挟り込みを有し、方形孔はすべてこれに貫通している 後面洲浜形両端に突起、居木を固定するためのものと思われる
853	154		須恵器 高杯	第12層 L8-e1	(11.2)	(5.5)	—	20 口縁10 以下	反転復元 (口縁部)	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N4/0	杯部内面回転ナデ、のち底部中央一定方向の静止ナデ 脚部3方向透し
854	154		土師器 甕	第12~15層 L8-c-e1	—	(5.5)	—	10以下	傾き復元	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：灰黄褐10YR4/2 断：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部同心円紋 内面指オサエ、ナデ 外面工具によるナデか 生駒西麓系胎土
855	154		土師器 甕	第12層 L7-c-d10	—	(3.8)	—	10以下	傾き復元	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：黄褐2.5Y5/3 断：灰黄2.5Y6/2	口縁部同心円紋 外面ハケ 生駒西麓系胎土
856	154		土師器 台付鉢形 土器	第12層 L7-d10	—	(9.0)	(7.8)	台部90	反転復元 (一部)	外：灰黄2.5Y7/2 内：浅黄2.5Y7/3 断：灰黄2.5Y7/2	台部上部に工具痕 底部外面に木の葉の圧痕
857	154		土師質 土錘	第12層 L8-d4	長 (3.7)	幅 1.3	厚 1.3	—		外：灰白2.5Y8/2 内：— 断：にぶい黄橙10YR6/4	
858	154		石器 剥片	第12層 L8-d2	長 2.8	幅 3.0	厚 0.4	100			二次加工 サマカイト
859	154		須恵器 甕	第12層 L7-c-d10	(23.5)	(37.5)	—	30 口縁30	反転復元	外：黄灰2.5Y6/1 内：褐灰10YR6/1 断：黄灰2.5Y6/1	体部内面当て具痕 体部外面タタキ、のちカキメ
860	155		須恵器 杯蓋	第15層 L8-d1	(12.5)	4.6	—	70 口縁40	反転復元 (口縁部)	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	
861	155		須恵器 杯蓋	第15層 L8-d4	(12.3)	4.5	—	30 口縁20	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰N6/0 断：灰N6/0	
862	155		須恵器 杯身	第15層 L8-d2	(11.0)	5.1	—	50	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰赤2.5YR5/2	
863	155		須恵器 杯身	第15層 L8-e3	(10.4)	5.2	—	50	反転復元	外：灰N4/0 内：青灰5PB5/1 断：灰赤10R5/2	
864	155		須恵器 杯身	第15層 L8-d4	10.3	5.5	—	90 口縁60		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：赤灰2.5YR4/1	
865	155		須恵器 杯身	第15層 L8-e2	(10.6)	(4.8)	—	40	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰5Y5/1	底部内面静止ナデ
866	155		須恵器 杯身	第15層 L8-c2	11.4	5.4	—	70		外：灰白N7/0 内：黄灰2.5Y6/1 断：灰白N7/0	底部内面静止ナデを施すか
867	155		須恵器 杯身	第15層 L8-d4	(12.2)	4.7	—	60 口縁50	反転復元 (口縁部 ~体部)	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N5/0	底部内面中央静止ナデ
868	155		須恵器 杯身	第15層 L8-d1	(10.4)	3.5	—	20 口縁20	反転復元	外：灰5Y5/1 内：灰N5/0 断：灰N4/0	内面回転ナデ、のち底部一定方向の静止ナデ 底部外面粗い静止ナデを施すか
869	155		須恵器 杯身か 杯蓋	第15層 L8-d3・4	—	(1.1)	—	10以下	天地不明 傾き復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N5/0	外面にヘラ描
870	155		須恵器 蓋	第15層 L8-d1	—	(2.1)	—	10以下	反転復元 (つまみ 以外)	外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	
871	155		須恵器 蓋	第15層 L8-d3・4	(13.3)	5.9	—	50 口縁30	反転復元 (つまみ 以外)	外：灰5Y6/1 内：灰白N7/0 断：赤灰10R5/1	内面回転ナデ、のち天井部中央不定方向の静止ナデ 外面自然袖付着のため調整不明
872	155		須恵器 高杯	第15層 L8-d-e2	(10.8)	(4.8)	—	30	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：灰N6/0	杯部底部内面静止ナデ 脚部3方向透し
873	155		須恵器 脚	第15層 L8-d1	—	(8.5)	(15.1)	10以下 底部10 以下	反転転用 復元	外：赤灰2.5YR5/1 内：灰赤2.5YR5/2 断：にぶい赤褐5YR4/3	脚部3方向方形(台形か)透し 脚裾部に三角形透し(3方向か)
874	155		須恵器 甕	第15層 L8-d3・4	—	(4.8)	—	10以下	傾き復元 反転復元	外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：褐灰7.5YR5/1	体部外面孔の位置に、櫛描列点紋、沈線1条
875	155		須恵器 器台	第15層 L8-d1	(30.8)	(10.7)	—	10以下 口縁10 以下	反転復元	外：灰N4/0 内：灰5Y4/1 断：褐灰5YR5/1	台部内面下部に当て具痕(回転ナデにより消されている) 台部外面波状紋1条(櫛目4本) 台部外面波状紋帯以下、工具による回転ナデか、下部に平行タタキ残る(回転ナデにより消されている)

表35 掲載遺物一覧表 (35)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
876	156		須恵器 甕か	第15層 L8-d-e1	—	〈7.2〉	—	10以下	傾き復元	外：灰5Y6/1 内：灰N6/0 断：黄灰2.5Y5/1	内面ナデ 外面波状紋、タタキのち非常に浅い螺旋状沈線
877	156		須恵器 甕か	第15層 L8-d4	—	長 〈8.8〉	—	10以下	天地傾き不明	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰5Y6/1	内面不定方向のナデ 外面タタキのち非常に浅い螺旋状沈線
878	156		須恵器 甕か	第15層 L8-d1	—	長 〈3.6〉	—	10以下	天地傾き不明	外：灰5Y6/1 内：灰N6/0 断：灰5Y5/1	内面ナデ 外面タタキのち非常に浅い螺旋状沈線
879	156		須恵器 甕か	第15層 L8-d1	—	長 〈4.0〉	—	10以下	天地傾き不明	外：褐灰10YR5/1 内：灰N6/0 断：灰5Y6/1	内面ナデ 外面タタキのち非常に浅い螺旋状沈線
880	156		須恵器 甕か	第15層 L8-d1	—	長 〈5.1〉	—	10以下	天地不明傾き復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰5Y6/1	内面ナデ 外面タタキのち非常に浅い螺旋状沈線
881	156		須恵器 甕	第15層 L8-d1・2	(20.8)	〈45.0〉	—	40 口縁40	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：暗赤灰7.5R4/1	底部内面ナデ
882	157		土師器 壺	第15層 L8-d2	—	〈12.2〉	—	70	反転復元 (頭部)	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4 断：灰白2.5Y7/1	口縁部内面工具によるナデ、のち横ナデ 底部内面工具によるナデ 体部外面工具によるナデ
883	157		土師器 甕	第15層 L8-e2	(11.6)	〈8.9〉	—	20 口縁50	反転復元 (口縁部) 転用復元 (一部)	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：灰白10YR8/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部内面ハケ、のち横ナデ 体部内面工具によるナデ 体部外面ハケ
884	157		土師器 (把手)	第15層 L8-d2	—	長 〈4.2〉	—	10以下	傾き不明	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y7/2 断：暗灰黄2.5Y5/2	
885	157		土師器 甕	第15層 L8-d1	—	〈5.3〉	—	10以下	傾き復元	外：灰黄褐10YR6/2 内：灰黄褐10YR4/2 断：にぶい黄褐10YR5/4	口縁部同心円紋 内面ナデ 外面工具痕 生駒西麓系胎土
886	157		土師器 甕	第15層 L8-d1	—	〈4.6〉	—	10以下	傾き復元	外：灰黄2.5Y6/2 内：褐灰10YR4/1 断：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部同心円紋 内面ナデ 外面ハケ 生駒西麓系胎土
887	157		土師器 甕	第15層 L8-d-e1	—	〈5.7〉	—	10以下	傾き復元	外：暗灰黄2.5Y5/2 内：黒褐2.5Y3/1 断：暗灰黄2.5Y5/2	内面指オサエ、ナデ 外面工具痕 生駒西麓系胎土
888	157		土師器 甕	第15層 L8-d3	—	長 〈12.5〉	—	10以下	傾き不明	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：灰黄2.5Y7/2	
889	157		石器 敲き石	第15層 L8-d2	長 10.4	幅 8.6	厚 5.9	100		灰5Y5/1	砂岩
図版のみ掲載分											
890		カラー2	輸入陶器 壺	第5面 70溝	—	長 〈3.3〉	厚 0.4 ~0.5	10以下		外：浅黄5Y7/3(釉) 内：浅黄5Y7/3(釉) 断：にぶい褐7.5YR6/3	内外面施釉 外面に波状沈線
891		カラー2	輸入陶器 壺か	第4層 L8-d1	—	長 〈4.5〉	厚 0.4	10以下		外：浅黄5Y7/3(釉) 内：浅黄5Y7/3(釉) 断：明オリブ灰2.5GY7/1	内外面施釉か 胎土に黒色斑点
892		カラー2	輸入陶器 壺か	第4層 L8-d2	—	長 〈3.8〉	厚 0.4 ~0.5	10以下		外：灰オリブ7.5Y4/2(釉) 内：灰白5Y7/1(露胎) 断：灰白5Y7/1	外面施釉 胎土に黒色斑点 大宰府分類B群
893		カラー2	輸入陶器 壺か	第5面 1164 土器集積	—	長 〈4.4〉	厚 0.3 ~0.4	10以下		外：灰オリブ7.5Y4/2(釉) 内：灰白5Y7/1(露胎) 断：灰白5Y7/1	内面に粘土接合痕 外面施釉 胎土に黒色斑点 大宰府分類B群
894		カラー2	輸入陶器 壺か	第6層 L8-d1	—	長 〈6.6〉	厚 0.3 ~0.4	10以下		外：灰オリブ5Y5/3(釉) 内：灰白5Y7/1(露胎) 断：灰白5Y7/1	外面施釉 胎土に黒色斑点 大宰府分類B群
895		カラー3	輸入陶器	第5面 70溝	—	長 〈5.5〉	厚 0.7	10以下		外：黒褐5YR2/1(釉) 内：にぶい黄橙10YR7/3(露胎) 断：にぶい黄橙10YR7/2	外面施釉 胎土に暗赤褐色(2.5YR3/3)斑点
896		カラー3	輸入陶器	第5面 70溝	—	長 〈6.1〉	厚 0.8 ~0.9	10以下		外：黒10YR2/1(釉) 内：にぶい黄橙10YR7/2(露胎) 断：灰5Y6/1	外面施釉
897		カラー3	輸入陶器	第5面 450溝 下層	—	長 〈9.1〉	厚 0.8	10以下		外：黒10YR2/1(釉) 内：にぶい黄橙10YR7/2(露胎) 断：灰5Y6/1	外面施釉 胎土に赤褐色斑点
898		カラー3	輸入陶器	第5面 107溝 上層 450溝 下層	—	長 〈10.2〉	厚 0.6 ~1.0	10以下		外：黒10YR2/1(釉) 内：黒10YR2/1(釉) にぶい褐7.5YR6/3(釉) 断：にぶい黄橙10YR7/3	内外面施釉 内面は縞模様に施釉、一部に幅0.2~0.3 cmの帯状の露胎部分あり 胎土に暗赤褐色2.5YR3/3斑点
899		カラー3	輸入陶器	第5面 70溝 上層 450溝 上層 465溝	—	長 〈12.1〉	厚 0.6 ~1.1	10以下		外：黒10YR2/1(釉) 内：黒10YR2/1(釉) にぶい褐7.5YR6/3(釉) 断：にぶい黄橙10YR7/3	内外面施釉 内面は縞模様に施釉、一部に幅0.3~0.9 cmの帯状の露胎部分あり 胎土に暗赤褐色2.5YR3/3斑点
900		カラー4	漆器 椀か	第5面 107溝 上層	—	長 〈4.0〉	—	10以下		外：黒 内：黒 紋様：赤	木取り：横木地 樹種：オニグルミ 内面に手描紋
901		59	木製品 板材 (井戸枠)	第5面 103井戸	長 〈67.5〉	最大幅 8.3	厚 3.5	—			井戸枠計測表番号3 木取り：板目 樹種：スギ 孔部最大長8.2cm、最大幅5.0cm 孔貫通部長4.4cm、幅3.9cm

表36 掲載遺物一覧表 (36)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	備考
902		59	木製品 板材 (井戸枠)	第5面 103井戸	長 (58.3)	最大幅 7.7	厚 2.7	—			井戸枠計測表番号6 木取り：板目 樹種：スギ
903		59	木製品 板材 (井戸枠)	第5面 103井戸	長 (60.8)	最大幅 11.5	厚 2.4	—			井戸枠計測表番号10 木取り：板目 樹種：スギ
904		59	木製品 板材 (井戸枠)	第5面 103井戸	長 (60.5)	最大幅 8.5	厚 3.3	—			井戸枠計測表番号17 木取り：板目 樹種：スギ 孔部最大長6.2cm、最大幅4.5cm 孔貫通部長4.0cm、孔幅3.5cm
905		73	瓦 丸瓦	第12層 L8-c ~ e1	長 (7.2)	幅 (12.0)	最大厚 2.0	10以下		凹：灰白2.5Y7/1 凸：灰白2.5Y7/1 断：灰白2.5Y7/1	凹面狭端部連結部に布目痕 凹凸面ナデ 玉縁凹面側縁等を面取り
906		73	瓦 丸瓦	第12層 L8-c4	長 (13.0)	幅 (9.0)	最大厚 1.8	10以下		凹：灰5Y6/1 凸：灰N6/0 断：灰5Y6/1	凹面に布目痕 凹面側縁を1.1~1.3cm面取り
907		73	瓦 丸瓦	第12層 L8-d-e5	長 (9.7)	幅 (8.3)	最大厚 2.0	10以下		凹：灰白5Y7/1 凸：灰5Y6/1 断：灰白N8/0	凹面に布目痕 凹面側縁を0.7~0.8cm面取り
908		73	瓦 半截平瓦	第12層 L8-d1	長 (10.8)	幅 (6.5)	最大厚 1.5	10以下		凹：灰白2.5Y8/1 凸：灰白2.5Y7/1 断：灰白2.5Y8/1	凹面に布目痕
909		73	瓦 平瓦	第12層 L8-c1	長 (10.0)	幅 (6.3)	最大厚 1.5	10以下		凹：灰N5/0 凸：灰N6/0 断：灰白5YR8/1	凹面に布目痕
910		73	瓦 平瓦	第11層以下 L8-d-e1	長 (7.2)	幅 (9.0)	最大厚 1.6	10以下		凹：灰N5/0 凸：灰N6/0 断：灰白N7/0	凹面に布目痕
911		75	土師器 甕	第15面 923土坑 土層	—	長 (16.0)	厚 0.7 ~1.0	10以下		外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	内外面ハケ
912		76	製塩土器	第15面 923土坑	—	長 (4.1)	厚 0.3 ~0.6	10以下		外：灰黄2.5Y7/2 内：灰白2.5Y7/1 断：灰白2.5Y7/1	外面タタキ
913		77	須恵器 杯身か 杯蓋	第15面 977土坑	—	(1.9)	厚 0.3 ~0.7	10以下		外：暗青灰5B4/1 内：暗青灰5B4/1 断：青灰5PB6/1	内面回転ナデ、中央部静止ナデ 外面回転ヘラケズリ
914		81	須恵器 提瓶	第15層 L8-d4	—	(5.3)	厚 0.7 ~0.9	10以下		外：灰N5/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	
915		81	弥生土器	第12層 L8-d2	—	長 (8.6)	厚 0.8	10以下		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	外面櫛描直線紋(1条7本か)、櫛描波状紋 (1条7本) 外面に黒斑
916		81	須恵器 甕か	第12層 L8-d1	—	(4.6)	厚 0.5 ~0.9	10以下		外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	外面カキメ 外面にヘラ描
917		81	須恵器 杯身	第12層 L8-d1	—	(3.6)	厚 0.4 ~0.6	10以下		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	外面にヘラ描
918		81	須恵器 杯身か 杯蓋	第12層 L8-d2	—	(2.0)	厚 0.5 ~0.7	10以下		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	外面回転ナデ、回転ヘラケズリ 外面にヘラ描
919		81	須恵器 杯身か 杯蓋	第12層 L8-d-e5	—	(1.5)	厚 0.4 ~0.9	10以下		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	内面中央部当て具痕、のち回転ナデ 外面中央部以外回転ヘラケズリ 外面にヘラ描
920		81	須恵器 甕か	第12層 L8-d1	—	(4.0)	厚 0.6 ~0.7	10以下		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰白N7/0	外面にヘラ描
921		81	須恵器 杯身か 杯蓋	第12層以下 L8-e1	—	(0.7)	厚 0.4 ~0.7	10以下		外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	内面中央部に当て具痕を残すか、回転ナデ 外面回転ヘラケズリ 外面にヘラ描
922		81	土師器	第12層 L8-d2	—	(1.4)	厚 0.5 ~0.6	10以下		外：灰黄2.5Y6/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：灰黄2.5Y6/2	外面ナデ 外面にヘラ描
923		81	須恵器 杯身か 杯蓋	第12層 L8-d-e1	—	(2.0)	厚 0.4 ~0.9	20		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	内面回転ナデ、のち中央部一定方向の静止 ナデ 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ 外面にヘラ描
924		81	須恵器 杯身か 杯蓋	第12層 L8-d4	—	(1.7)	厚 1.0	10以下		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰褐7.5YR4/2	内面回転ナデ、のち中央部一定方向の静止 ナデ 外面にヘラ描
925		81	須恵器 杯身か 杯蓋	第12層 L8-c1	—	(1.8)	厚 0.4 ~0.6	20		外：灰N6/0 内：灰白2.5Y7/1 断：灰白N8/0	内面回転ナデ、のち中央部一定方向の静止 ナデ 外面中央部以外回転ナデ、回転ヘラケズリ 外面にヘラ描

表37 井戸枠計測表（1）

番号	種類	遺構面	出土 遺構・層	長	最大幅	最小幅	厚	木取り	樹種	備考
464井戸										
1	桶側板	第5面	464井戸	30.6	7.0	6.2	0.9	板目		木釘
2	桶側板	第5面	464井戸	30.3	7.5	6.6	0.8	板目		
3	桶側板	第5面	464井戸	30.3	5.9	5.2	0.9	板目		
4	桶側板	第5面	464井戸	30.8	6.7	5.9	1.0	板目		
5	桶側板	第5面	464井戸	31.0	7.0	5.8	0.9	板目		
6	桶側板	第5面	464井戸	31.0	7.1	6.1	0.9	板目		木釘
7	桶側板	第5面	464井戸	30.9	6.5	5.6	0.9	板目		
8	桶側板	第5面	464井戸	30.7	6.5	5.6	0.9	板目		木釘
9	桶側板	第5面	464井戸	30.8	7.2	6.1	0.8	板目		
10	桶側板	第5面	464井戸	30.6	6.5	5.5	0.9	板目	スギ	図52 246-1
11	桶側板	第5面	464井戸	30.5	7.5	6.1	0.8	板目	スギ	図52 図版54 246-2 木釘
12	桶側板	第5面	464井戸	30.1	6.5	5.4	0.9	板目		
13	桶側板	第5面	464井戸	30.2	6.5	5.5	0.9	板目		
14	桶側板	第5面	464井戸	30.2	7.2	6.3	1.0	板目		
15	桶側板	第5面	464井戸	30.4	6.2	5.7	1.0	板目		木釘
16	桶側板	第5面	464井戸	30.2	6.5	5.8	0.9	板目		
17	桶側板	第5面	464井戸	30.4	5.8	5.0	0.9	板目		
18	桶側板	第5面	464井戸	30.5	6.7	6.0	0.9	板目		
19	桶側板	第5面	464井戸	30.2	7.2	6.2	0.8	板目		
103井戸 未記入は無孔 []内は貫通部の最大値										
1	板材	第5面	103井戸	<56.0>	10.0	—	2.4	板目		孔長：7.0 [4.8] 孔幅：4.4 [4.0]
2	板材	第5面	103井戸	<56.0>	9.3	—	3.0	板目		孔長：6.8 [4.0] 孔幅：4.6 [3.5]
3	板材	第5面	103井戸	<67.5>	8.3	—	3.5	板目	スギ	孔長：8.2 [4.4] 孔幅：5.0 [3.9] 図版59 901
4	板材	第5面	103井戸	<52.1>	9.8	—	3.0	板目		孔長：6.5 [4.3] 孔幅：5.2 [3.6]
5	板材	第5面	103井戸	<62.3>	10.0	—	3.0	板目		孔長：8.0 [3.5] 孔幅：5.7 [4.0]
6	板材	第5面	103井戸	<58.3>	7.7	—	2.7	板目	スギ	図版59 902
7	板材	第5面	103井戸	<55.8>	10.0	—	2.5	板目		
8	板材	第5面	103井戸	<43.0>	9.5	—	3.2	板目		
9	板材	第5面	103井戸	<49.0>	10.5	—	3.4	板目		孔長：8.5 [6.0] 孔幅：5.5 [4.5]
10	板材	第5面	103井戸	<60.8>	11.5	—	2.4	板目	スギ	図版59 903
11	板材	第5面	103井戸	<71.3>	9.2	—	3.0	板目		孔長：7.0 [4.0] 孔幅：4.5 [3.7]
12	板材	第5面	103井戸	<60.5>	10.8	—	3.2	板目		孔長：7.0 [4.0] 孔幅：5.3 [4.7]
13	板材	第5面	103井戸	<58.5>	10.4	—	3.6	板目		
14	板材	第5面	103井戸	<61.0>	9.4	—	3.0	板目		孔長：6.0 [4.0] 孔幅：5.0 [4.0]
15	板材	第5面	103井戸	<57.8>	10.5	—	3.0	板目		
16	板材	第5面	103井戸	<60.0>	9.0	—	2.6	板目		孔長：6.0 [4.0] 孔幅：5.0 [3.7]
17	板材	第5面	103井戸	<60.5>	8.5	—	3.3	板目	スギ	孔長：6.2 [4.0] 孔幅：4.5 [3.5] 図版59 904
18	板材	第5面	103井戸	<54.8>	10.7	—	3.2	板目		孔長：8.5 [4.0] 孔幅：5.5 [4.2]
19	板材	第5面	103井戸	<63.8>	9.5	—	3.3	板目		孔長：8.0 [4.4] 孔幅：5.0 [4.5]
20	板材	第5面	103井戸	<49.7>	10.7	—	3.0	板目		
21	板材	第5面	103井戸	<55.2>	9.0	—	3.5	板目		

表38 井戸枠計測表（2）

番号	種類	遺構面	出土 遺構・層	長	最大幅	最小幅	厚	木取り	樹種	備考
568井戸 上段										
1	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.8	8.9	7.9	1.3	板目		
2	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.7	7.6	6.3	1.6	板目		
3	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.2	9.1	8.2	1.4	板目		
4	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.4	9.1	7.2	1.5	板目		
5	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.9	10.6	9.3	1.4	板目		
6	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.8	8.8	7.7	1.7	板目		
7	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.9	9.1	7.7	1.5	板目		
8	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.4	10.4	9.2	1.7	板目		
9	桶側板	第5面	568井戸 上段	42.8	9.3	8.3	1.3	板目		
10	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.7	11.7	10.0	1.5	板目		
11	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.4	5.3	4.5	1.7	板目		
12	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.3	10.1	9.0	1.7	板目		
13	桶側板	第5面	568井戸 上段	44.0	9.7	8.2	1.3	板目	スギ	図70 328-2
14	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.8	9.7	8.4	1.5	板目	スギ	図70 図版60 328-1
15	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.8	9.1	7.4	1.8	板目		
16	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.6	10.5	9.5	1.6	板目		
17	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.5	10.3	9.3	1.5	板目		
18	桶側板	第5面	568井戸 上段	43.7	9.0	8.0	1.7	板目		
568井戸 下段										
1	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.4	8.7	7.2	1.3	板目		
2	桶側板	第5面	568井戸 下段	35.1	8.4	6.0	1.2	板目		
3	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.2	8.7	7.3	1.4	板目		
4	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.3	9.6	8.4	1.3	板目		
5	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.6	9.7	8.1	1.2	板目		
6	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.6	8.9	7.5	1.2	板目		
7	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.2	9.5	8.0	1.2	板目		
8	桶側板	第5面	568井戸 下段	35.6	8.2	7.3	1.3	板目		
9	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.2	9.7	8.4	1.5	板目	スギ	図69 図版60 327-2
10	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.6	9.6	8.4	1.5	板目	スギ	図69 327-1
11	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.4	9.4	8.0	1.2	板目		
12	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.4	8.3	6.9	1.3	板目		
13	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.4	9.2	7.7	1.2	板目		
14	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.3	10.0	8.9	1.4	板目		
15	桶側板	第5面	568井戸 下段	36.3	9.2	8.0	1.2	板目		

圖 版



(外面)



465溝(197)、第3層(5)

(内面)

カラー図版2 輸入陶器 (1)

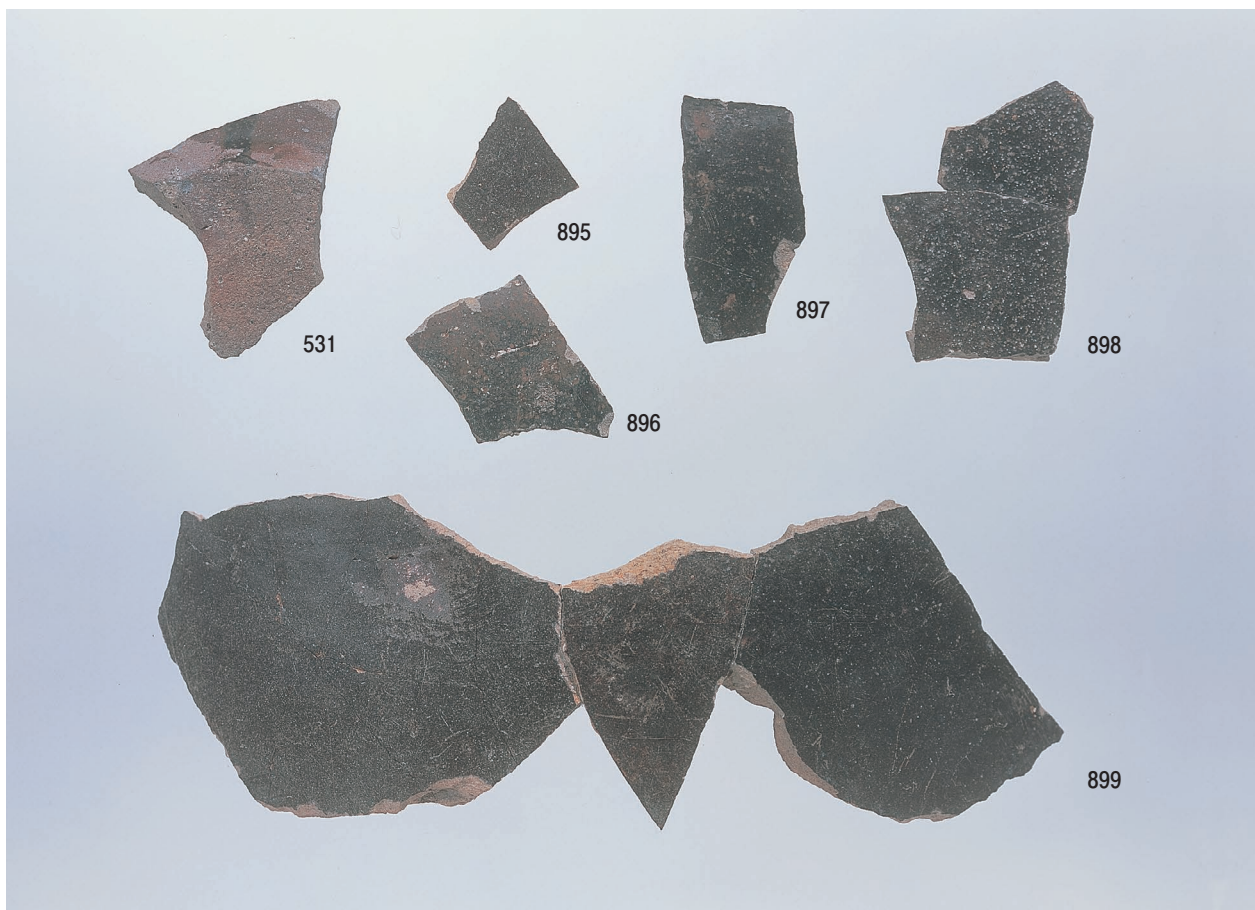


(外面)

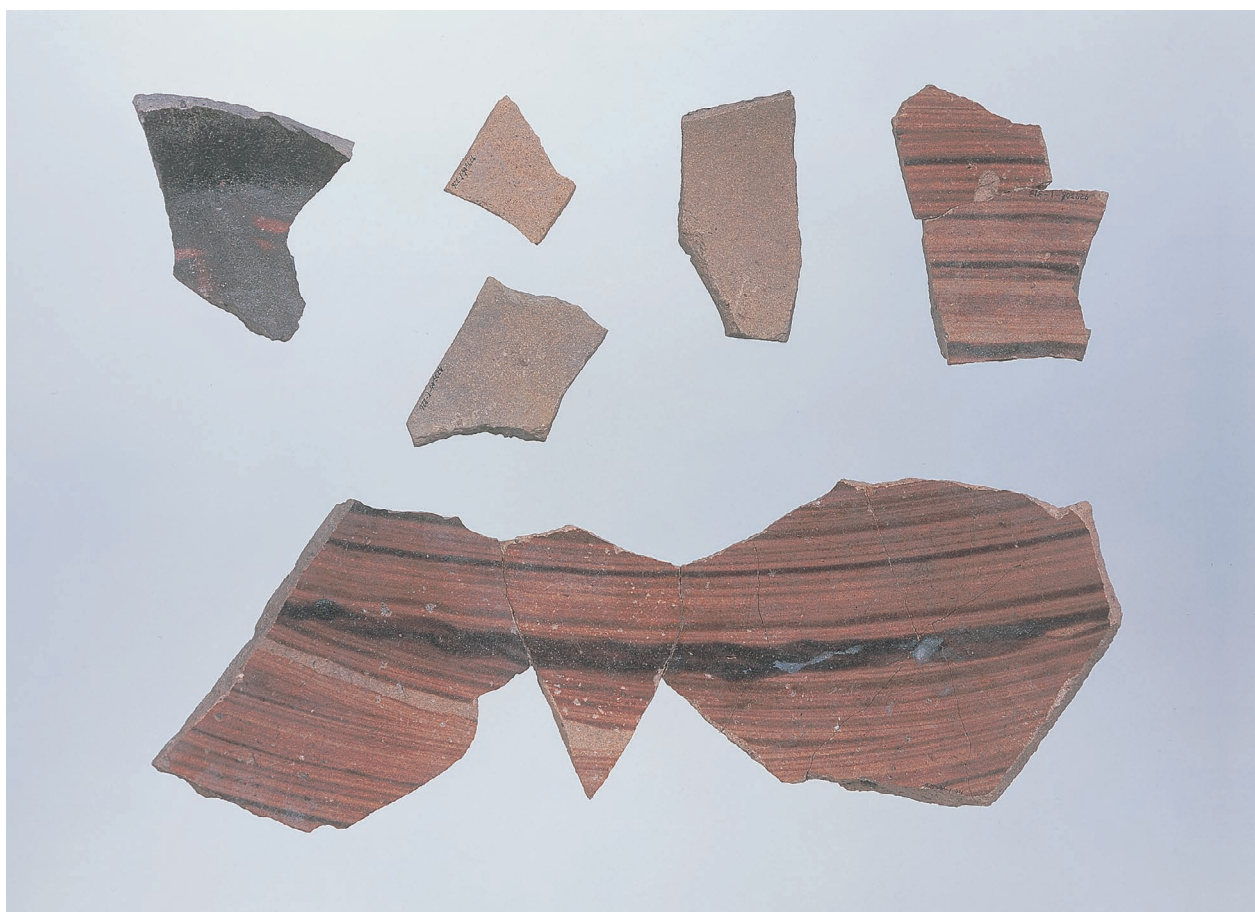


(内面)

70溝 (890)、450溝 (100)、465溝 (198・211)、第4～6層 (16・532・891・892・894)、1164土器集積 (893)



(外面)



70溝 (895・896)、450溝 (897・898)、70・450・465溝 (899)、第4～5層 (531) (内面)

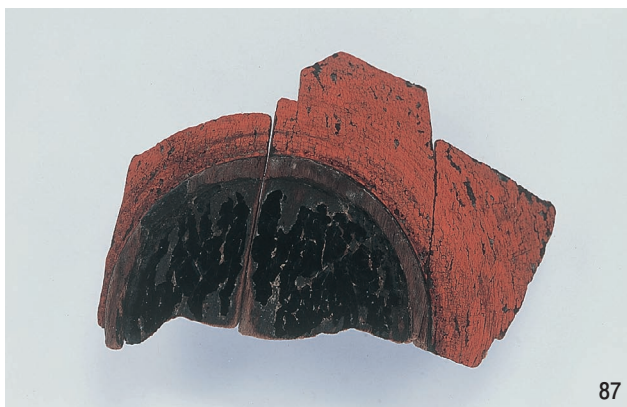
カラー図版4 漆器(1)



103井戸



318



87



88



900

107溝



121



122



178



186



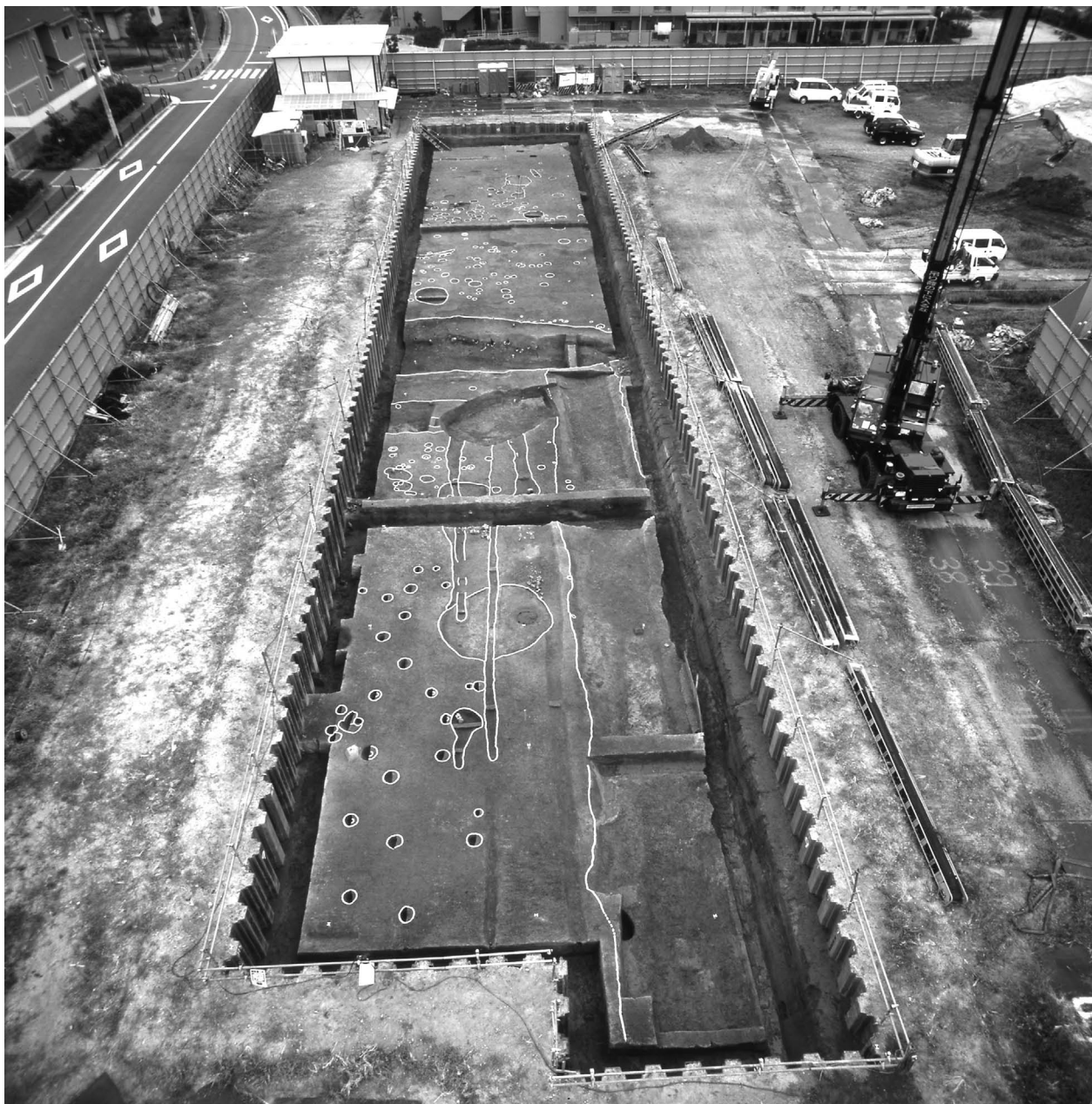
図版1 玉櫛遺跡周辺航空写真



1948年3月撮影

※国土地理院所有 (M33-5-315) (上が北)

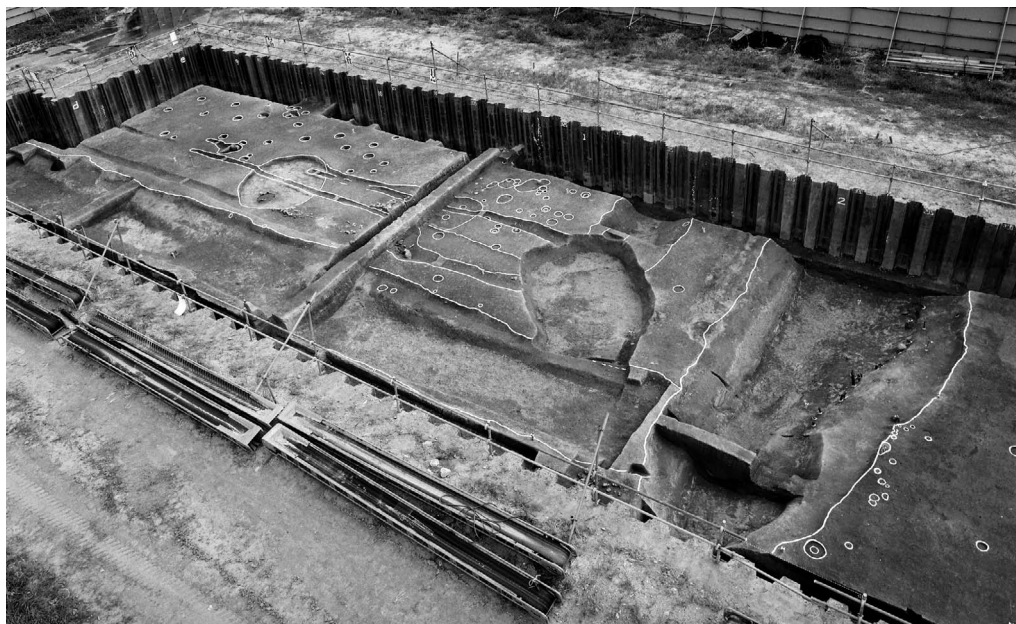
図版2 第5面 全景



全景 東から



東半（第5層下面）
北西から



70・107溝
北西から



70溝
土橋状の高まり
北東から



465溝
北東から

図版4 第5面 大規模溝群 (2)



70・107溝
北から



107溝
南東から



107溝 杭列
南から



450溝
北西から



450溝
北東から



450溝 漆器椀(122)出土状況 北東から



450溝 漆器皿(178)出土状況 西から



450溝 折敷(189)出土状況 北東から



450溝 漆器椀(186)出土状況 南東から

図版6 第5面西半 建物(1)



建物10 434柱穴 南から



建物10 480柱穴 西から



建物10 485柱穴 東から



建物10 488柱穴 南から



建物10 489柱穴 西から



建物11 286柱穴 南から



建物11 380柱穴 南から



建物11 451柱穴 南から

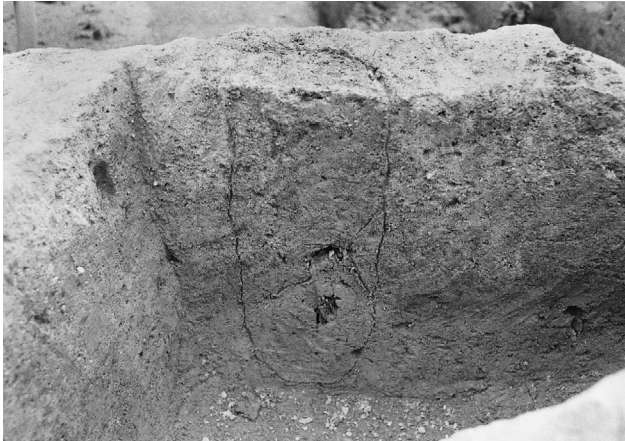
図版7 第5面西半 建物(2)



建物12 338柱穴 西から



建物13 254柱穴 南から



建物14 316柱穴 南から



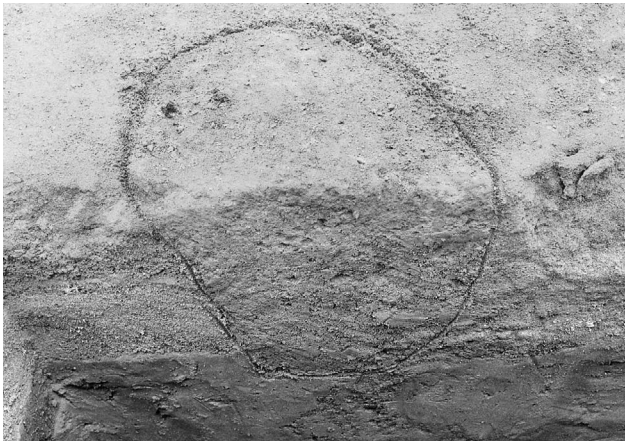
建物13 375柱穴 東から



建物14 505柱穴 南から



建物15 491柱穴 南から



建物16 466柱穴 西から



建物16 538柱穴 南から

図版8 第5面西半 建物(3)、柱列



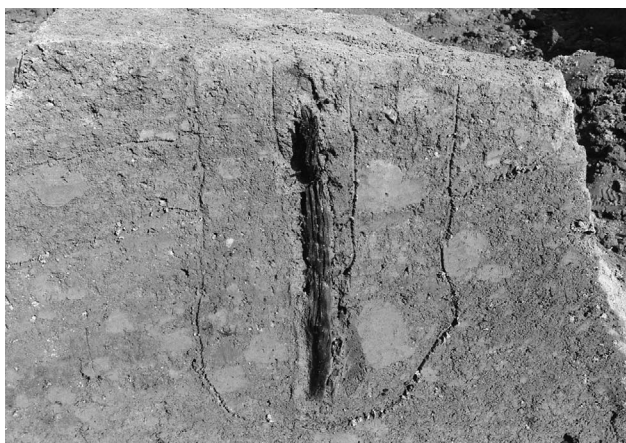
建物17 263柱穴 南から



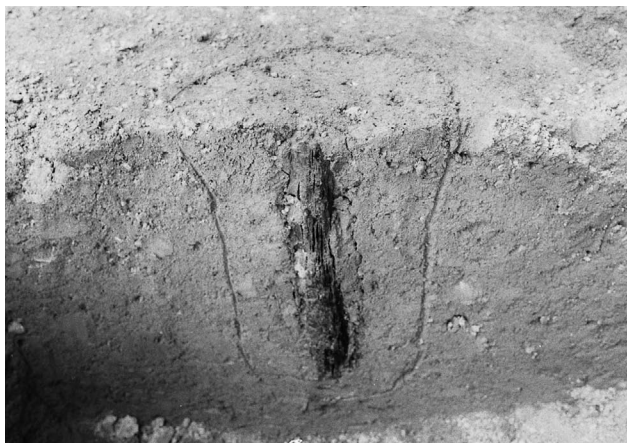
建物17 376柱穴 東から



建物18 478柱穴 西から



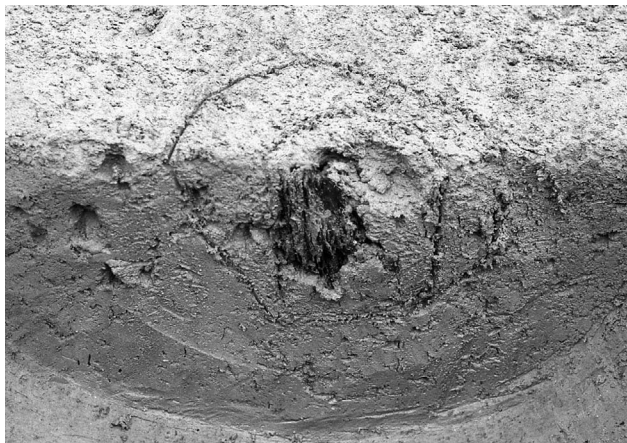
建物18 479柱穴 西から



建物18 469柱穴 南から



柱列5 426柱穴 南から



柱列5 519柱穴 南から



柱列6 337柱穴 南から



165井戸
西から



464井戸 桶転用枠
北から



464井戸 掘り方内石敷き 北から



464井戸 下層部 断面 北から

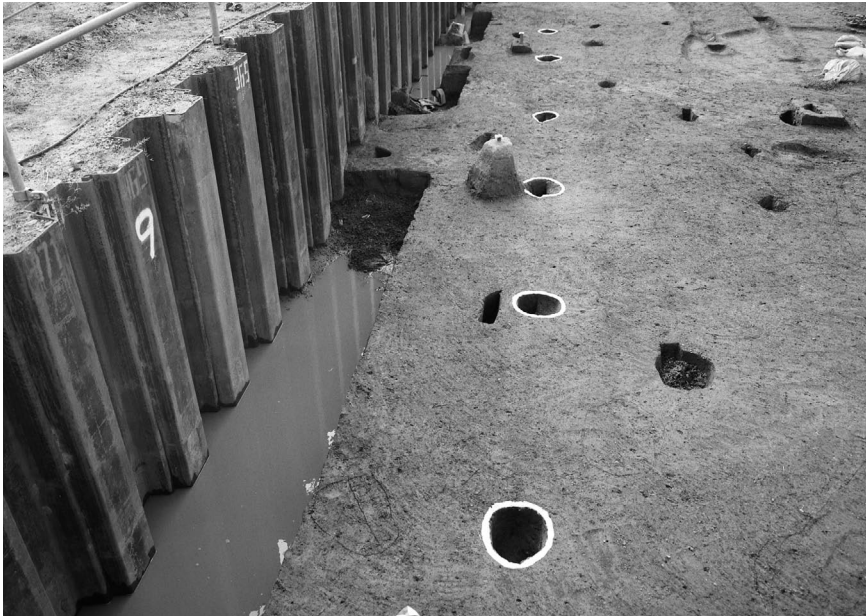


453ピット 北から



453ピット 北から

図版10 第5面東半 建物、柱穴



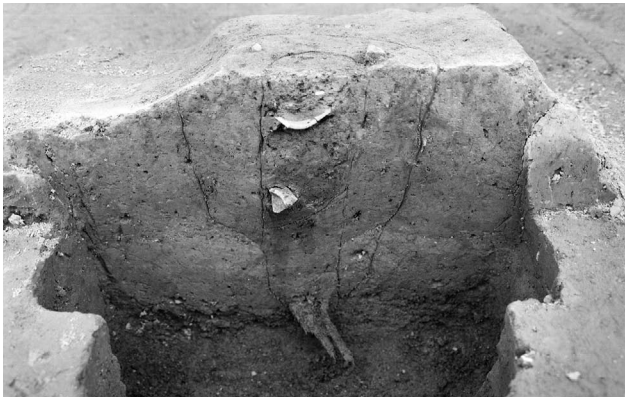
建物1
東から



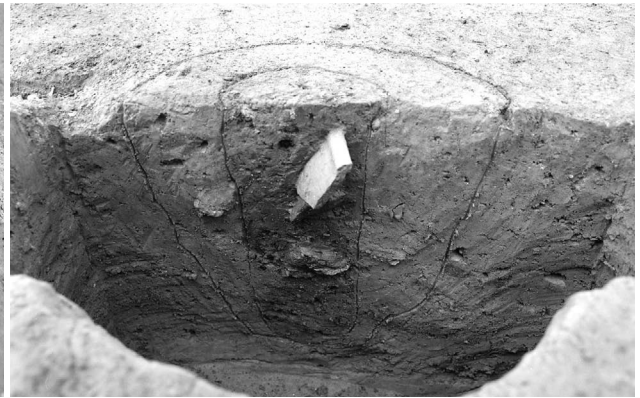
建物1 98柱穴 南から



建物1 81柱穴 南から



建物21 574柱穴 南から



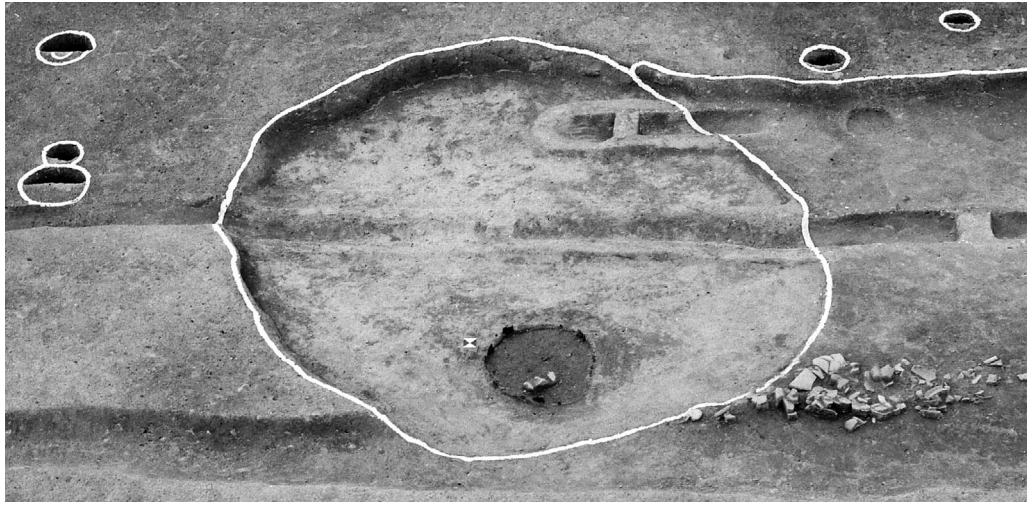
建物21 577柱穴 南から



建物21 592柱穴 西から



73柱穴 南から



103井戸 検出状況
北から



103井戸 板組み枠
掘り方上層部断面
西から



103井戸 板組み枠 西から



103井戸 板組み枠内断面 西から



103井戸 曲物転用枠 南から



103井戸 曲物転用枠 竹籠 西から

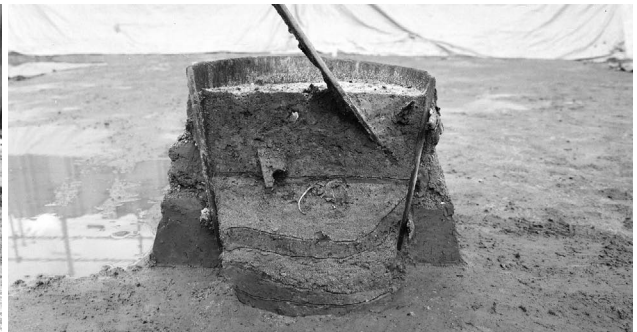
図版12 第5面東半 井戸（2）



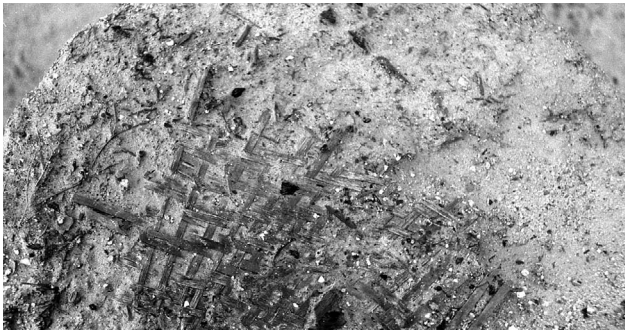
568井戸
桶転用杵（上段）
掘り方上層部断面
南から



568井戸 桶転用杵（下段） 北から



568井戸 桶転用杵（下段）内断面 南から



568井戸 編物出土状況 南から



1096井戸 下層部断面 東から



584井戸
南から

図版13 第5面東半 溝、ピット



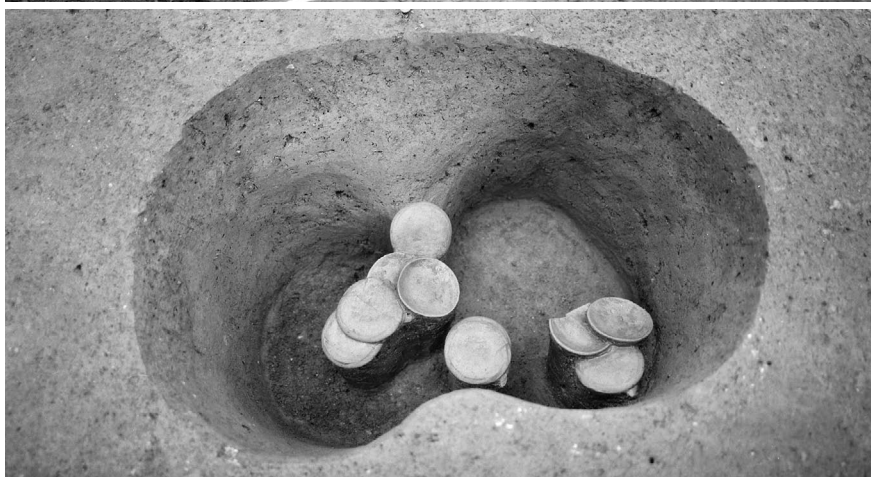
560溝
西から



560溝 (東部)
北西から



529溝
南東から



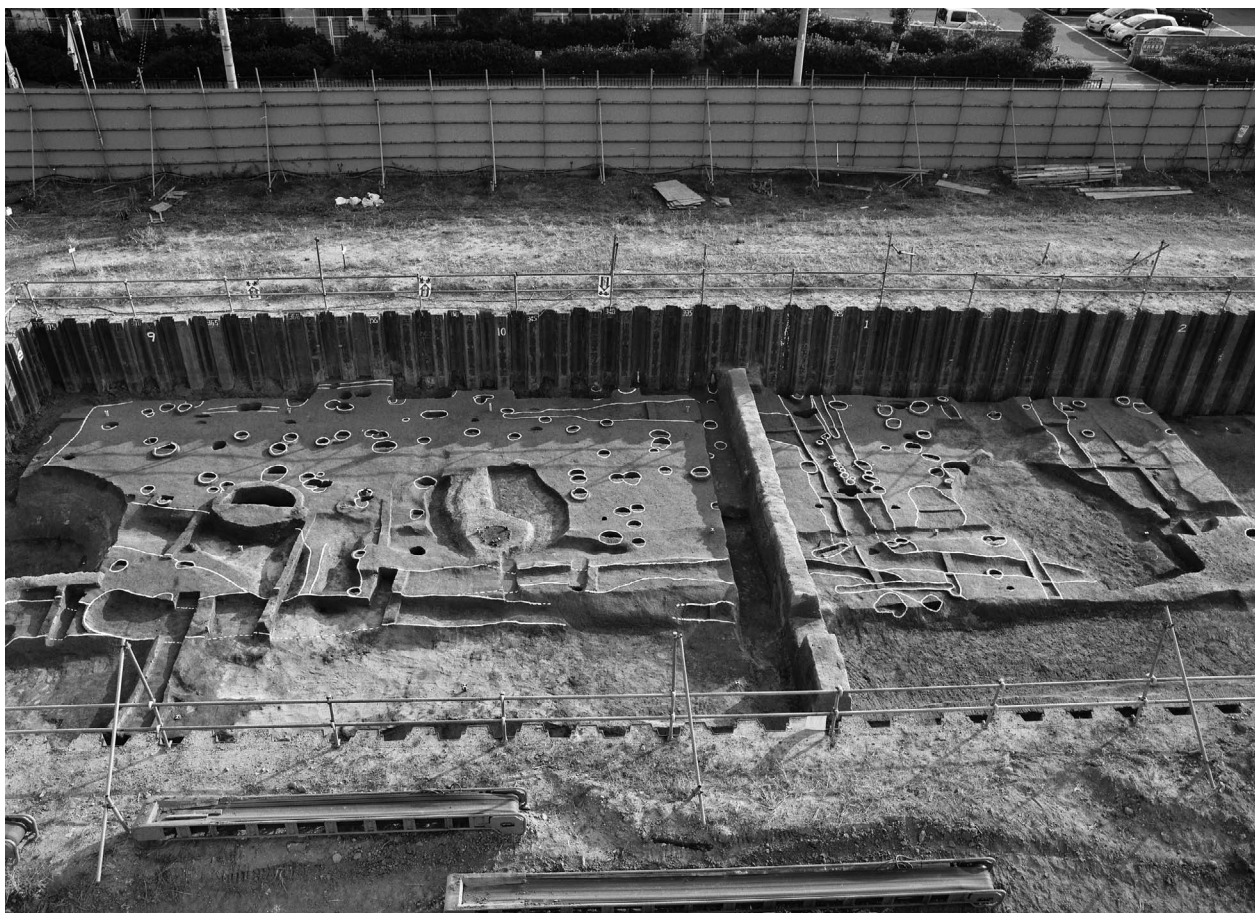
593ピット
南から

図版14 第7面 全景



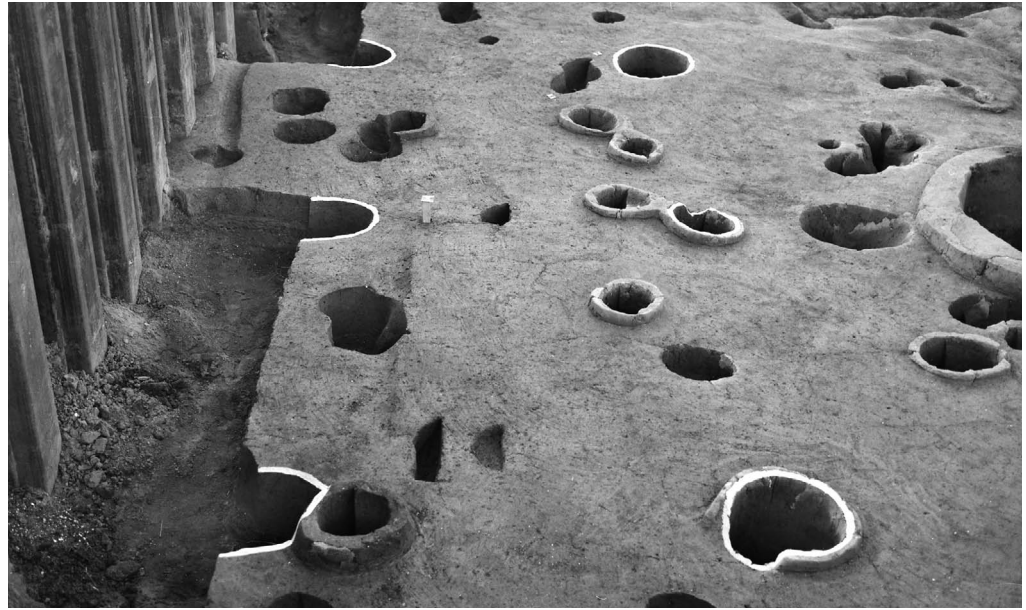
全景

東から



東半

北から



建物2
東から



建物2 613柱穴

南から



建物2 620柱穴

南から

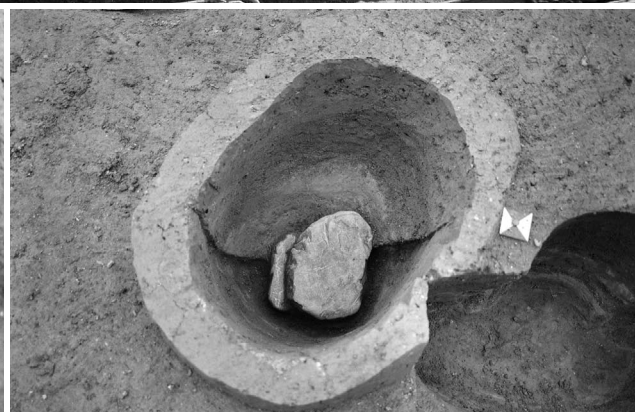


建物3
北から



建物3 716柱穴

南から



建物3 727柱穴

南から

図版16 第7面 建物（2）



建物4
東から



建物4 737柱穴

南から



建物4 743柱穴

南から



建物5
東から



建物5 611柱穴

南から

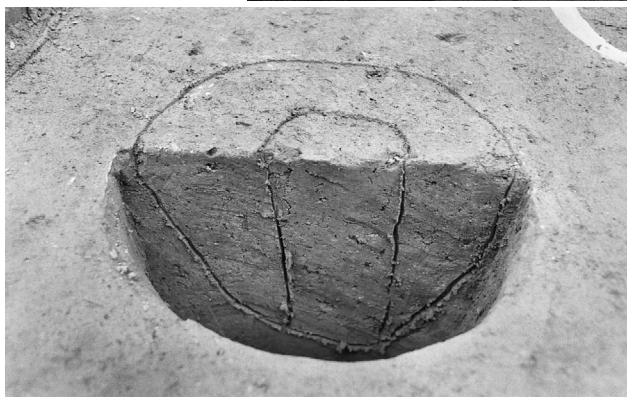


建物5 627柱穴

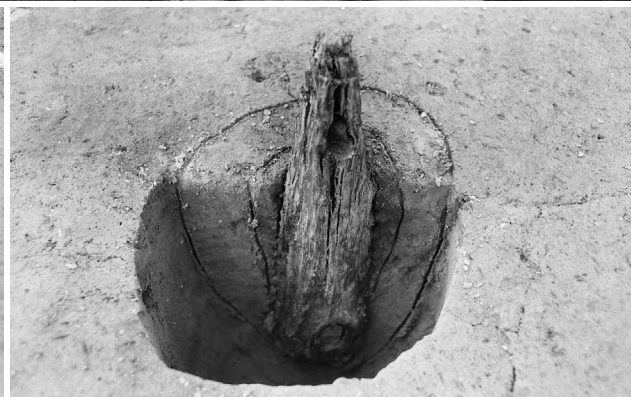
南から



建物6
東から



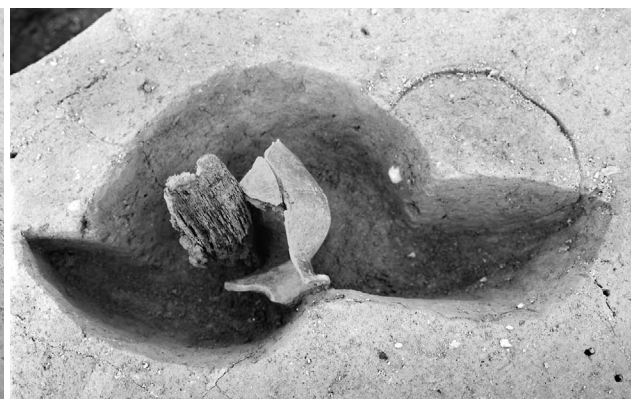
建物6 618柱穴 南から



建物6 764柱穴 南から



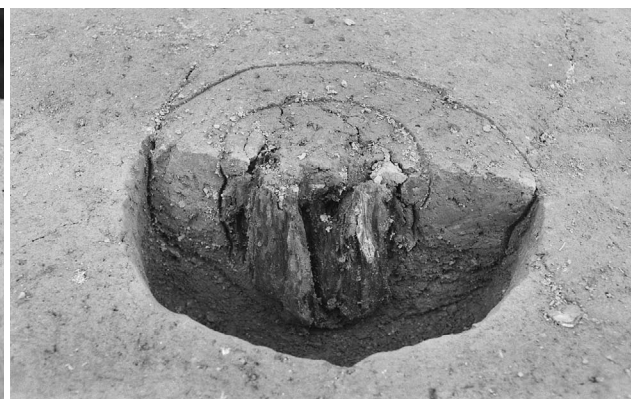
建物7 634柱穴 南から



建物7 634柱穴 南から



建物7 634柱穴 東から



建物7 648柱穴 南から

図版18 第7面 建物(4)、柱列(1)



建物8
東から



建物8 601柱穴 南から



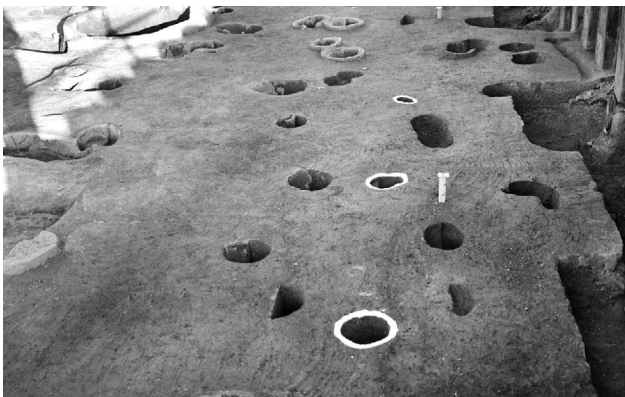
建物8 665柱穴 南から



建物19 74柱穴 南から



建物20 1112柱穴 南から



柱列1 西から



柱列1 655柱穴 南から

図版19 第7面 柱列(2)、柱穴



柱列3 東から



柱列3 664柱穴 南から



柱列3 674柱穴 南から



675柱穴 南から



680柱穴 北から



682柱穴 東から



1108柱穴 南から



1126柱穴 南から

図版20 第7面 溝 (1)



602~604・
750・755溝
東から



602・603・750溝
西から



602溝 断面

東から



750溝 断面

北から



693溝
南西から



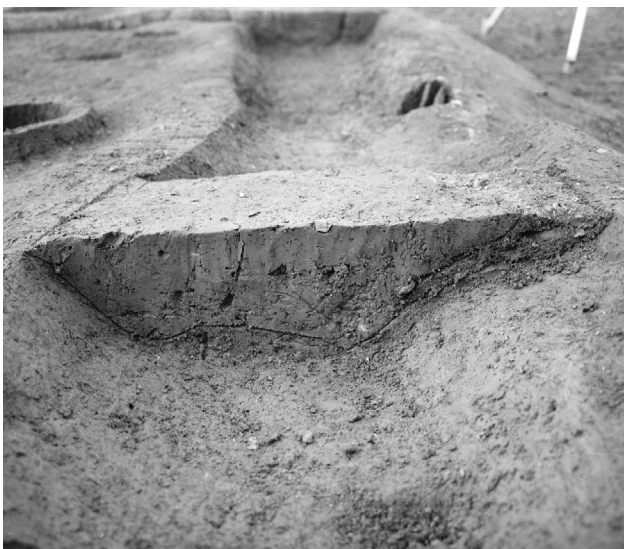
693溝 断面 西から



614溝 南西から



746溝 北東から



746溝 断面 南から

図版22 第7面 溝 (3)



604・692溝
北西から

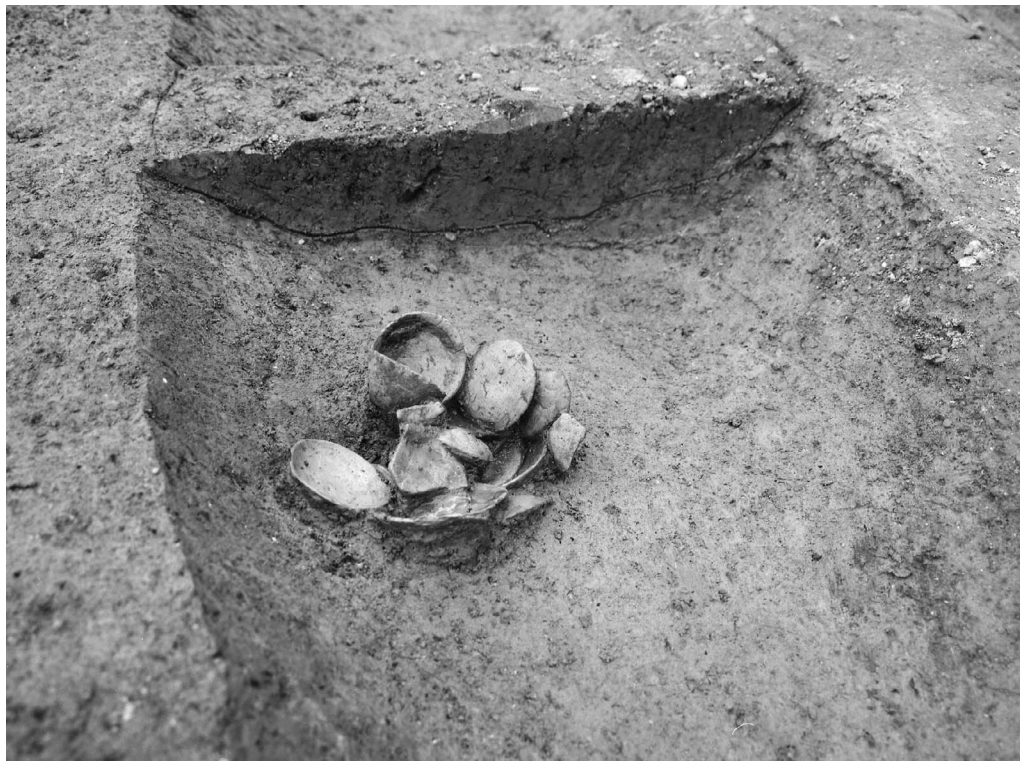


692・693・715溝
南から



692・728溝
北西から

図版23 第7面 溝(4)、ピット、土器集積



692溝
土師器皿出土状況
東から



701ピット 東から



701ピット 東から



831ピット 南から



630土器集積 東から

図版24 第12面 全景



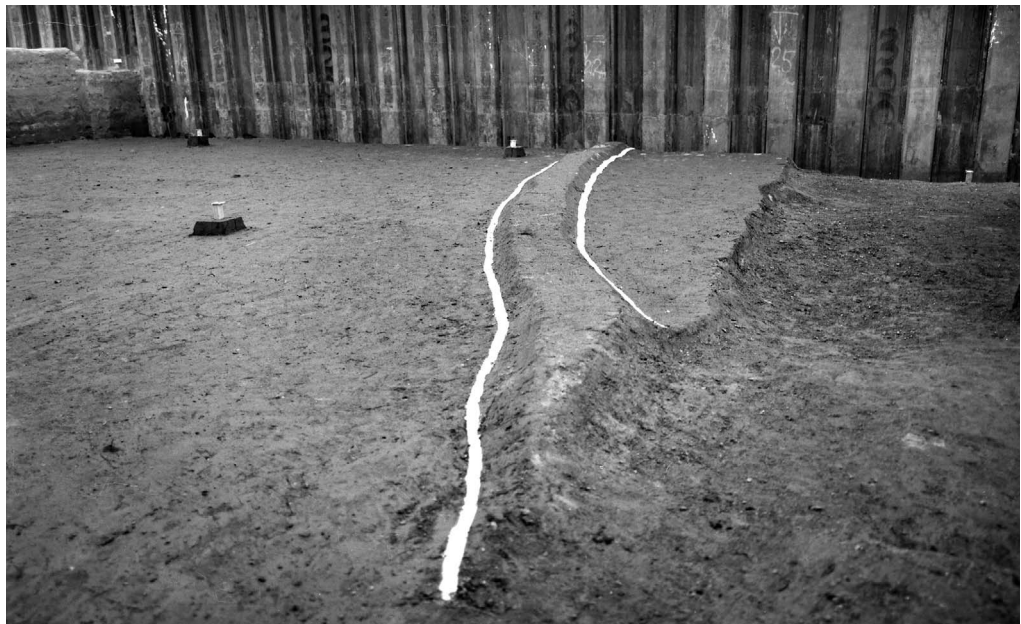
全景

西から



全景

東から



畦畔 1
北西から



畦畔 2
北西から



畦畔 3 検出状況
南から



全景

西から



中央部

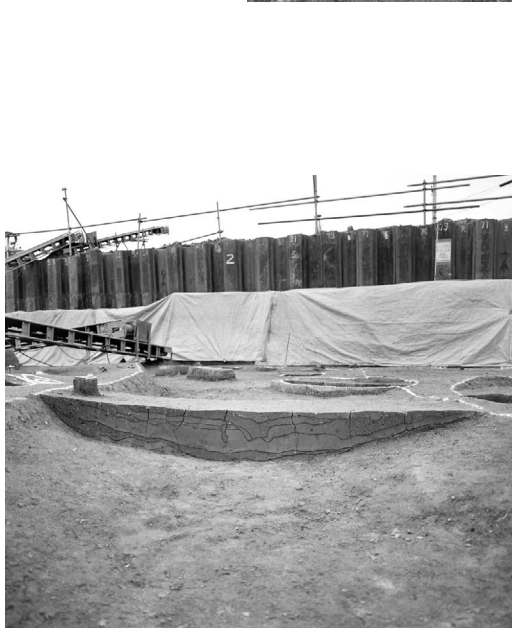
北西から



1013土坑
北から



1015土坑
西から



946溝 断面 南東から



946溝 南東から

図版28 第15面 建物



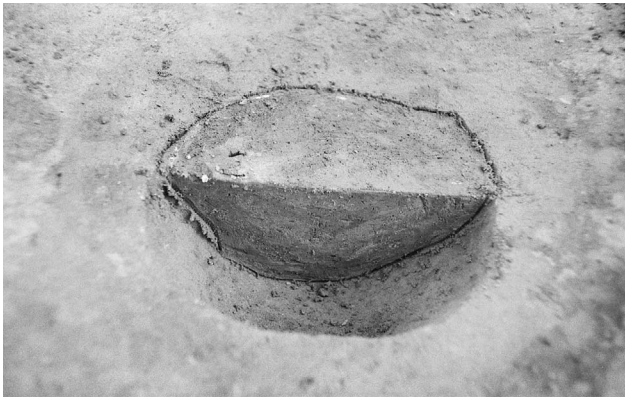
建物9
北東から



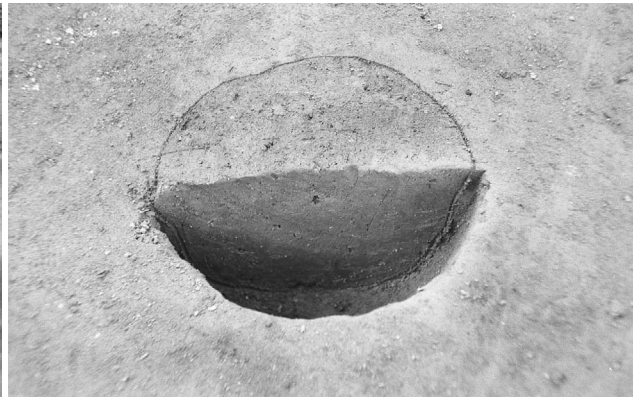
建物9 913柱穴 北西から



建物9 914柱穴 北西から



建物9 916柱穴 北西から



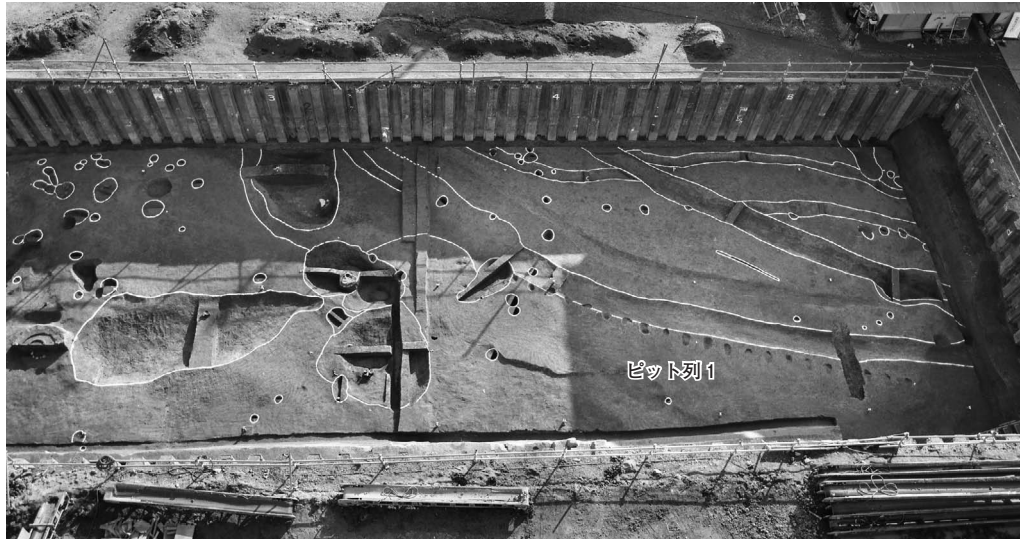
建物9 1072柱穴 南東から



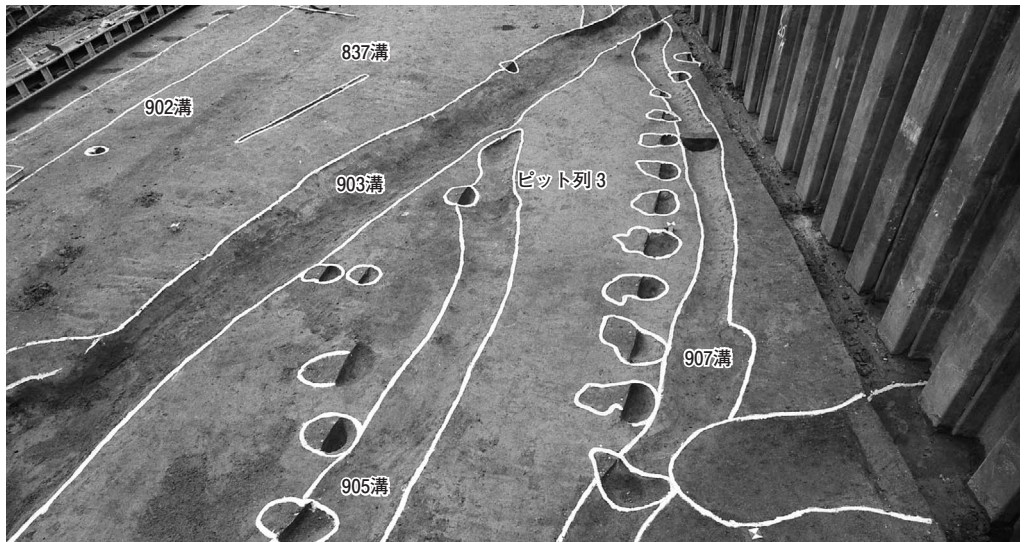
建物9 1073柱穴 南東から



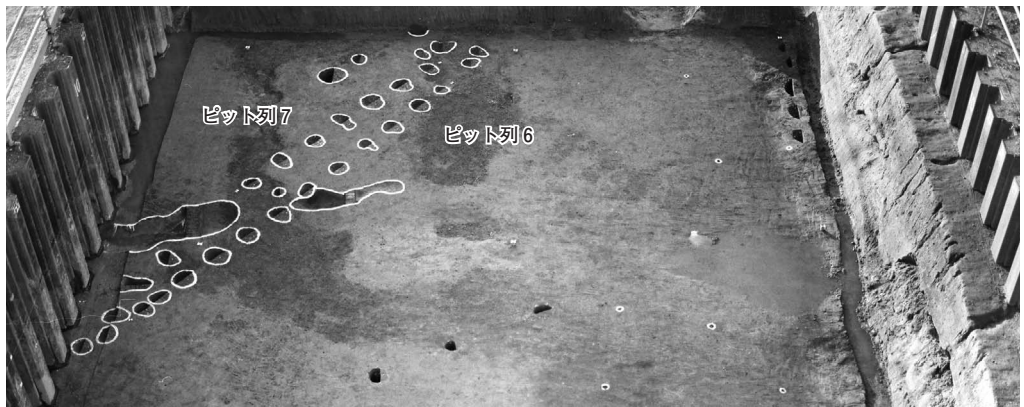
建物9 1075柱穴 北東から



ピット列、溝
(西部)
北から



ピット列3、
837・902・
903・905・907溝
北西から



ピット列(東部)
東から



903溝 断面
北西から



903・904溝 断面
北西から

図版30 第15面 土坑（1）



923土坑
東から



923土坑 断面
北西から



938土坑
西から



926土坑
土師器壺 (782)
出土状況
北東から



926土坑 断面
北西から



939土坑 断面
北から

図版32 第15面 土坑（3）



940土坑 断面
南西から



940土坑
遺物出土状況
南から



940土坑 完掘
南から



940土坑
木製鞍出土状況
南東から

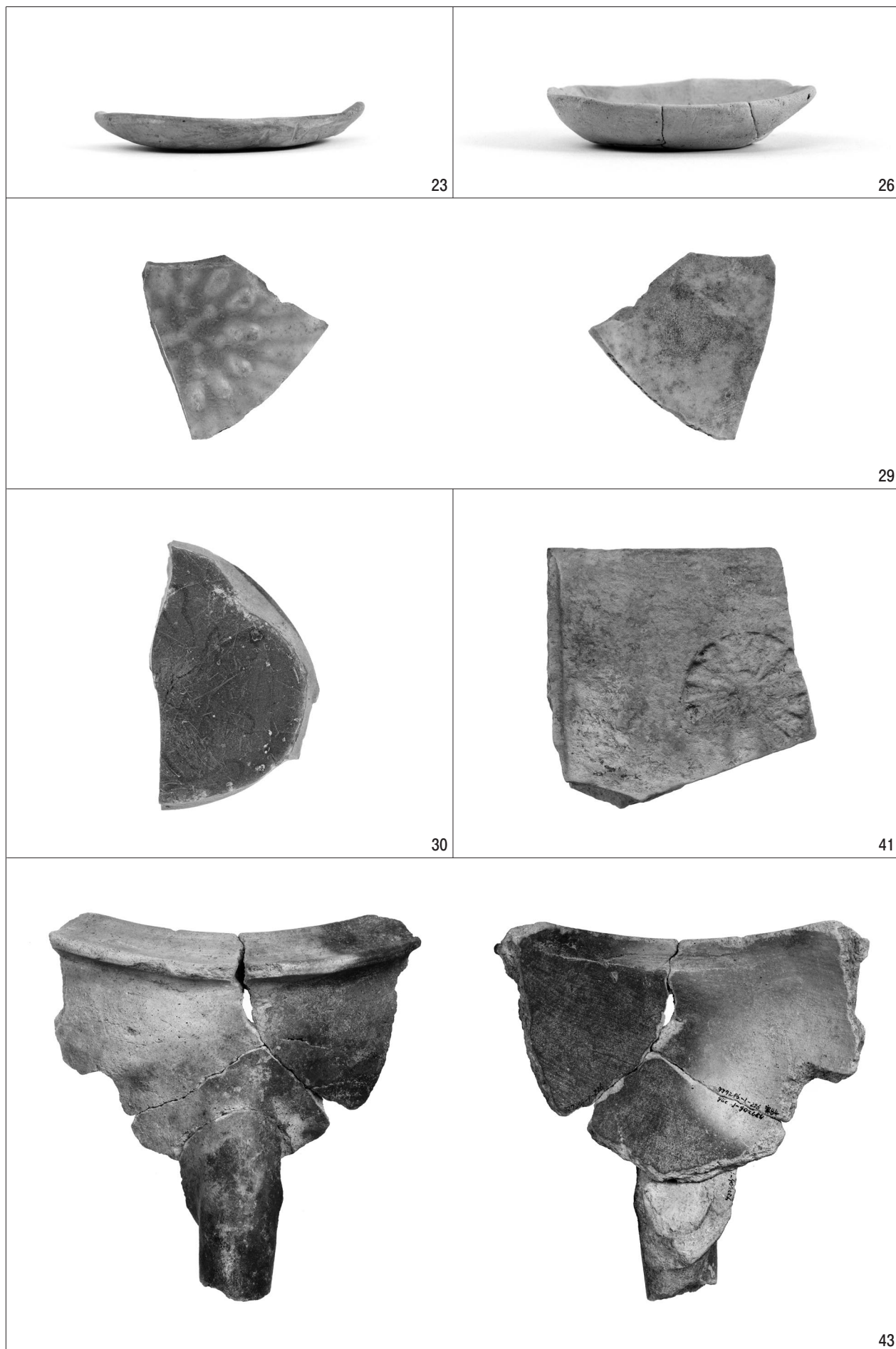


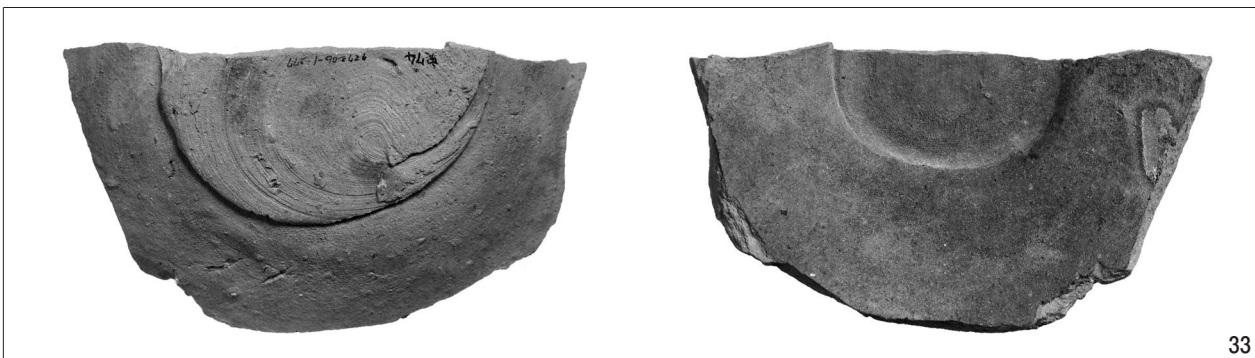
940土坑
木製鞍出土状況
南東から



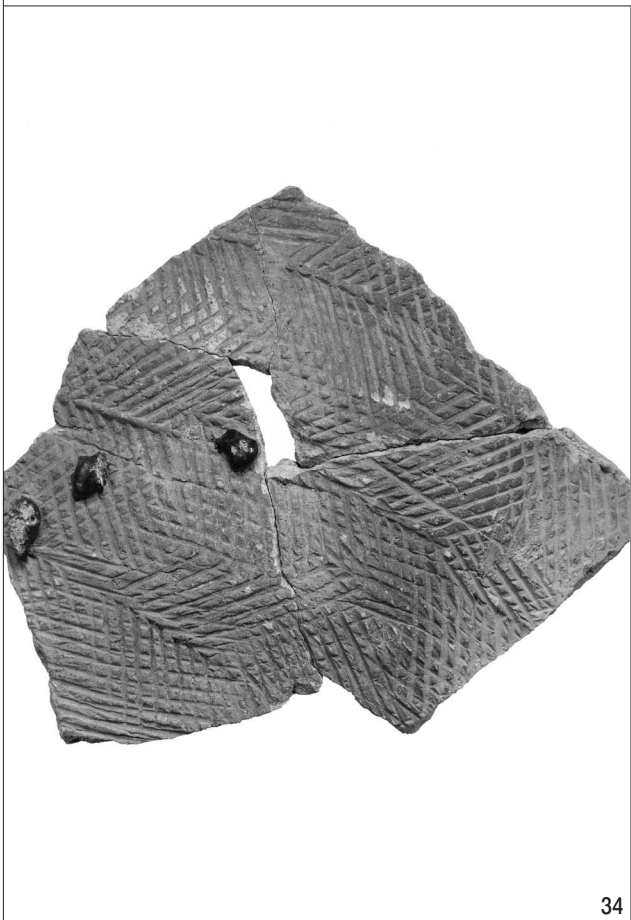
940土坑
木製鞍出土状況
南東から

図版34 第5面大規模溝群 出土遺物 (1)





33



34

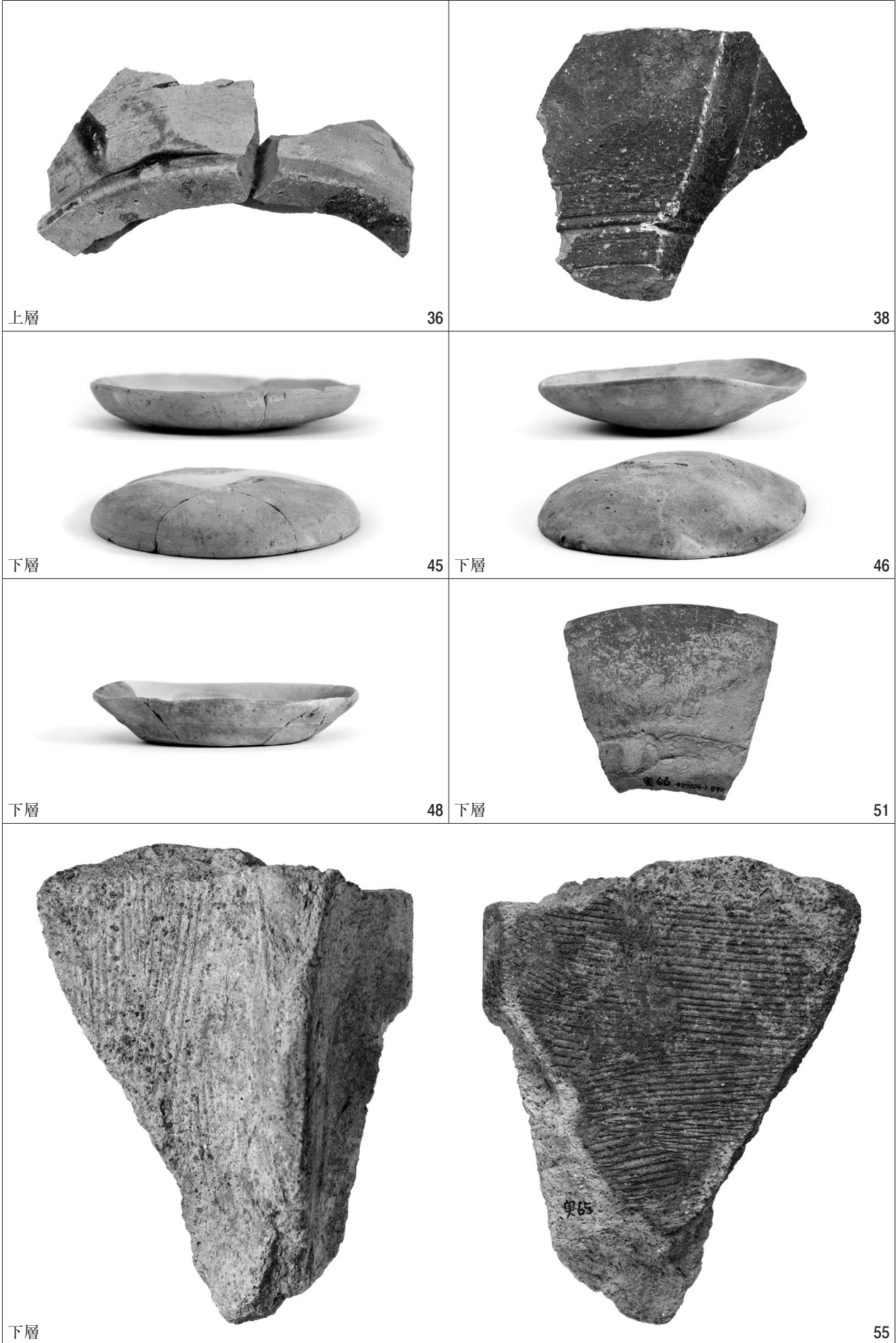


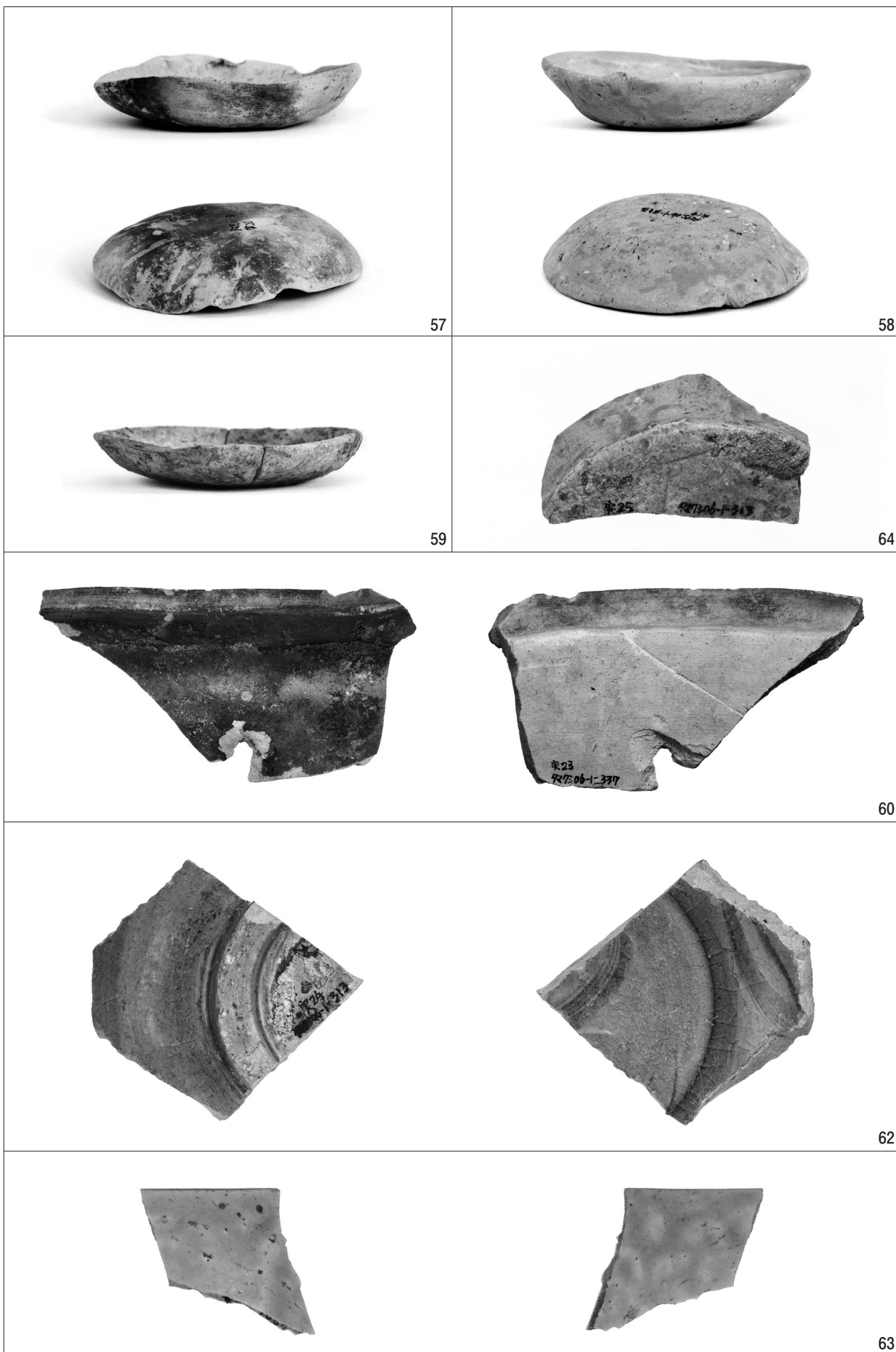
35 下層



49

図版36 第5面大規模溝群 出土遺物 (3)







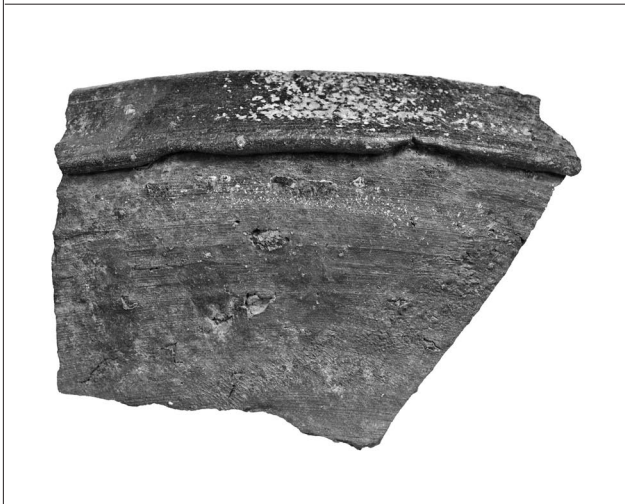
61



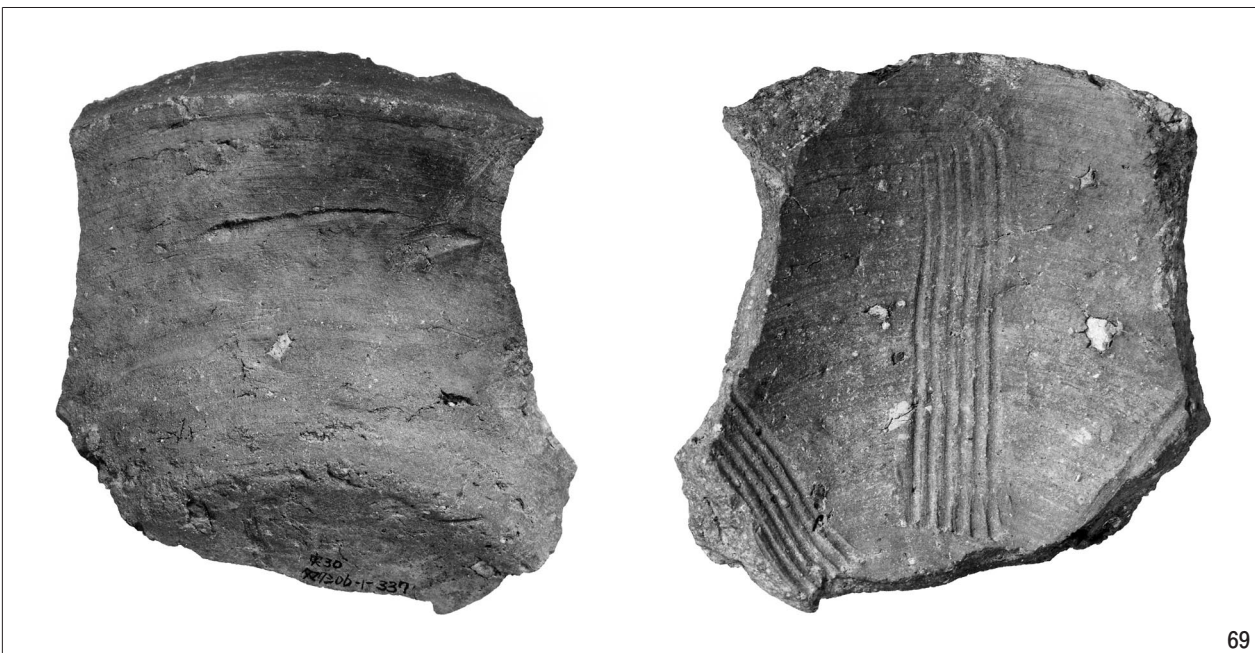
66



70



71



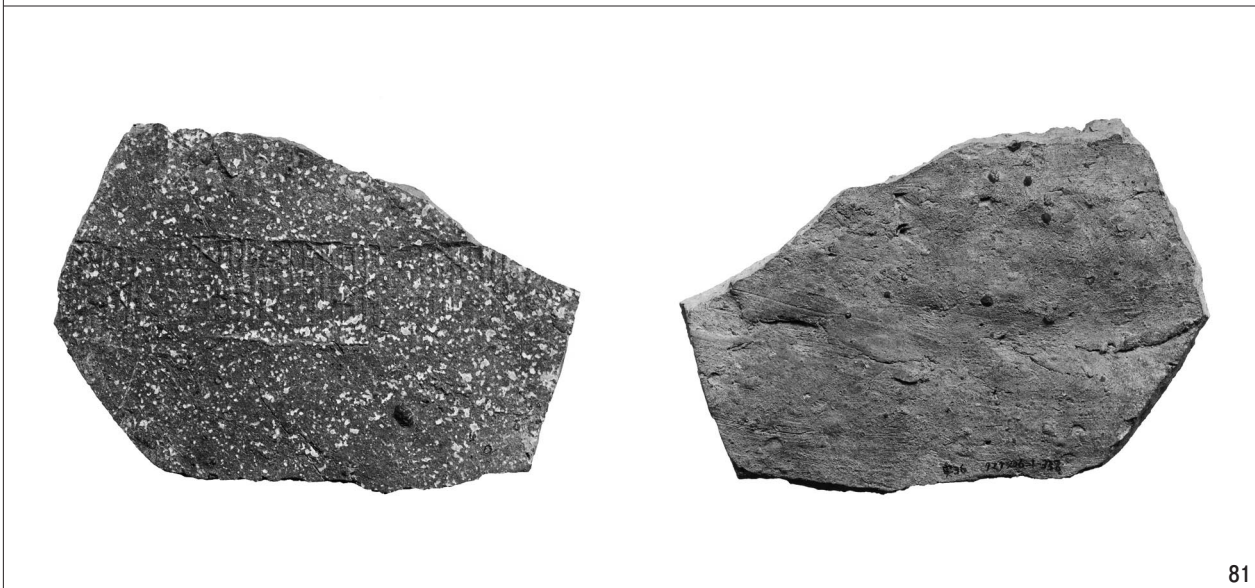
69



72



73





上層

67 上層

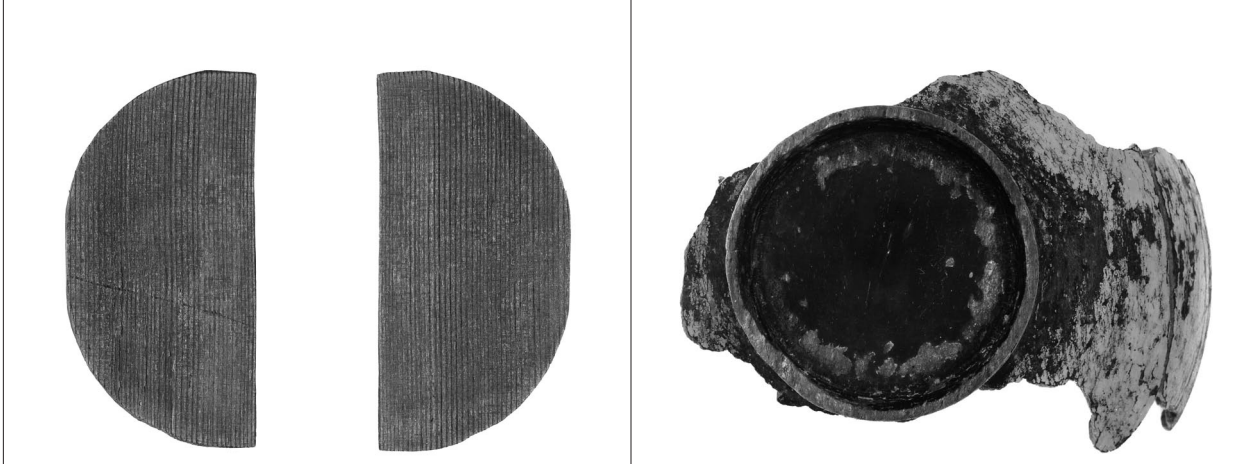
68



下層

85 下層

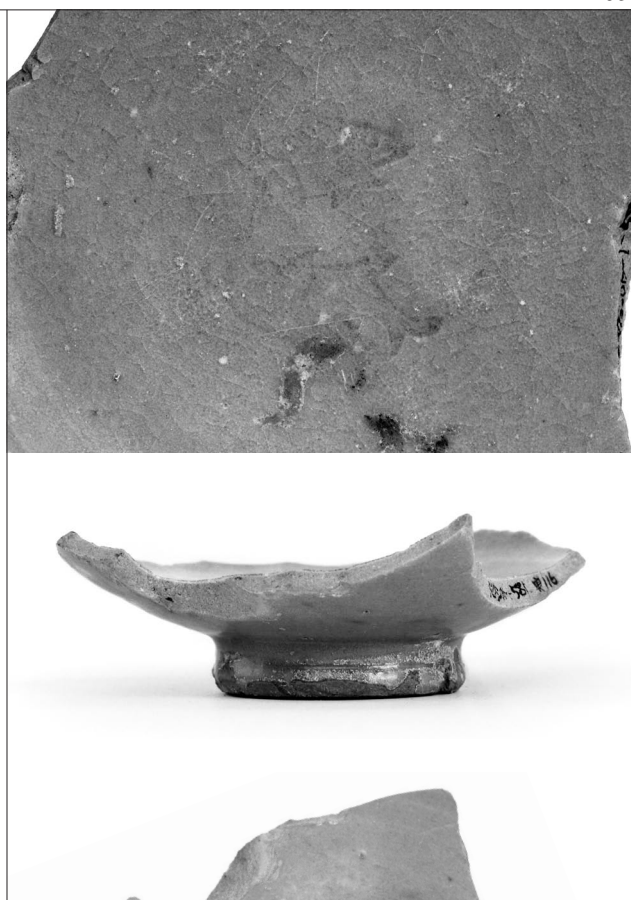
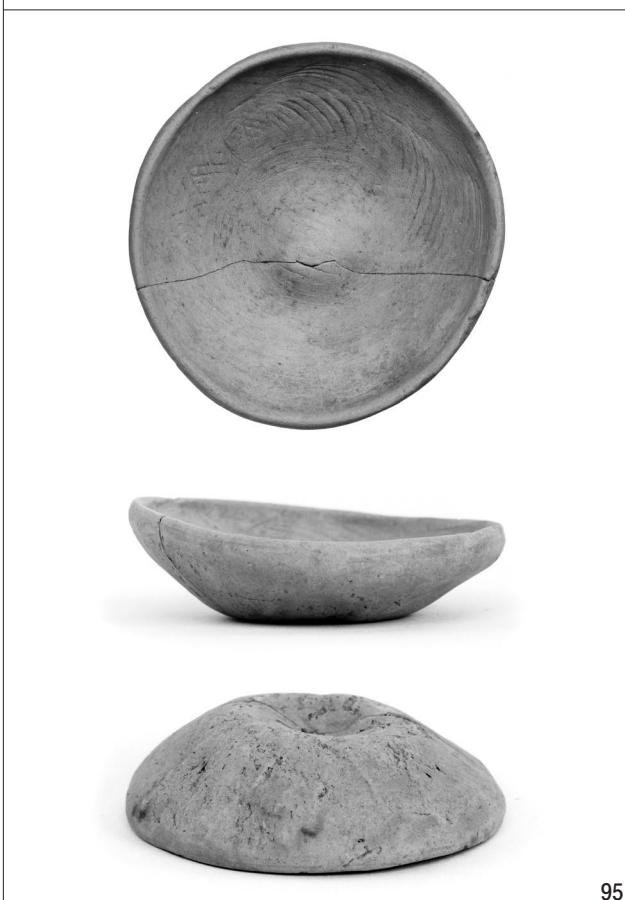
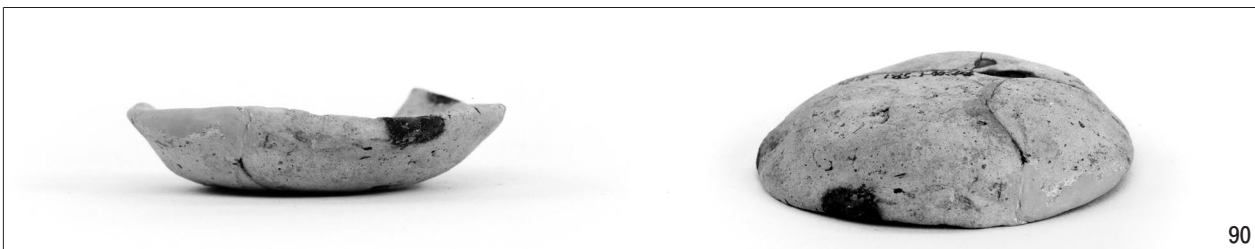
87



下層

86 下層

88





105



109



107



108



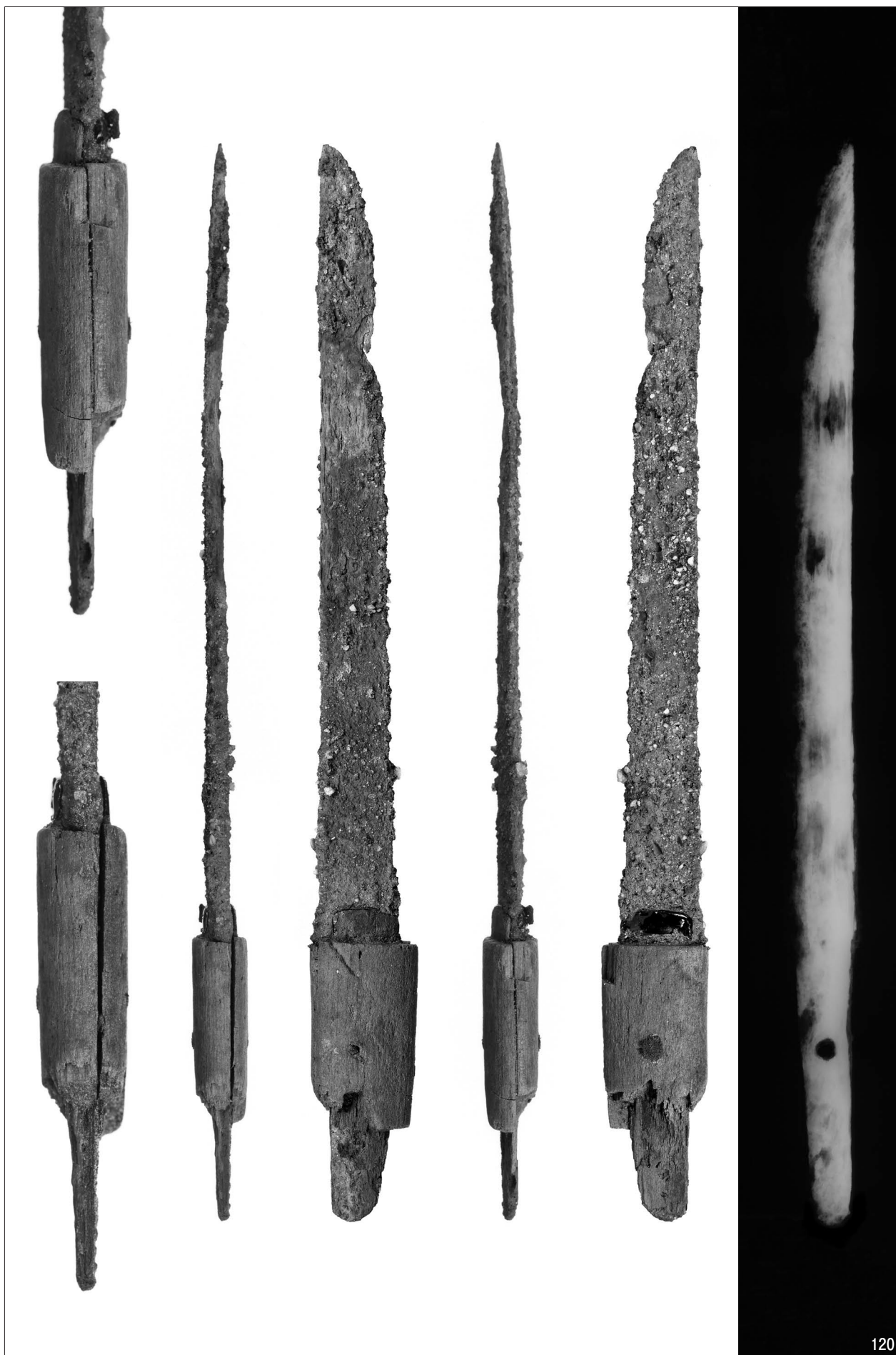
111



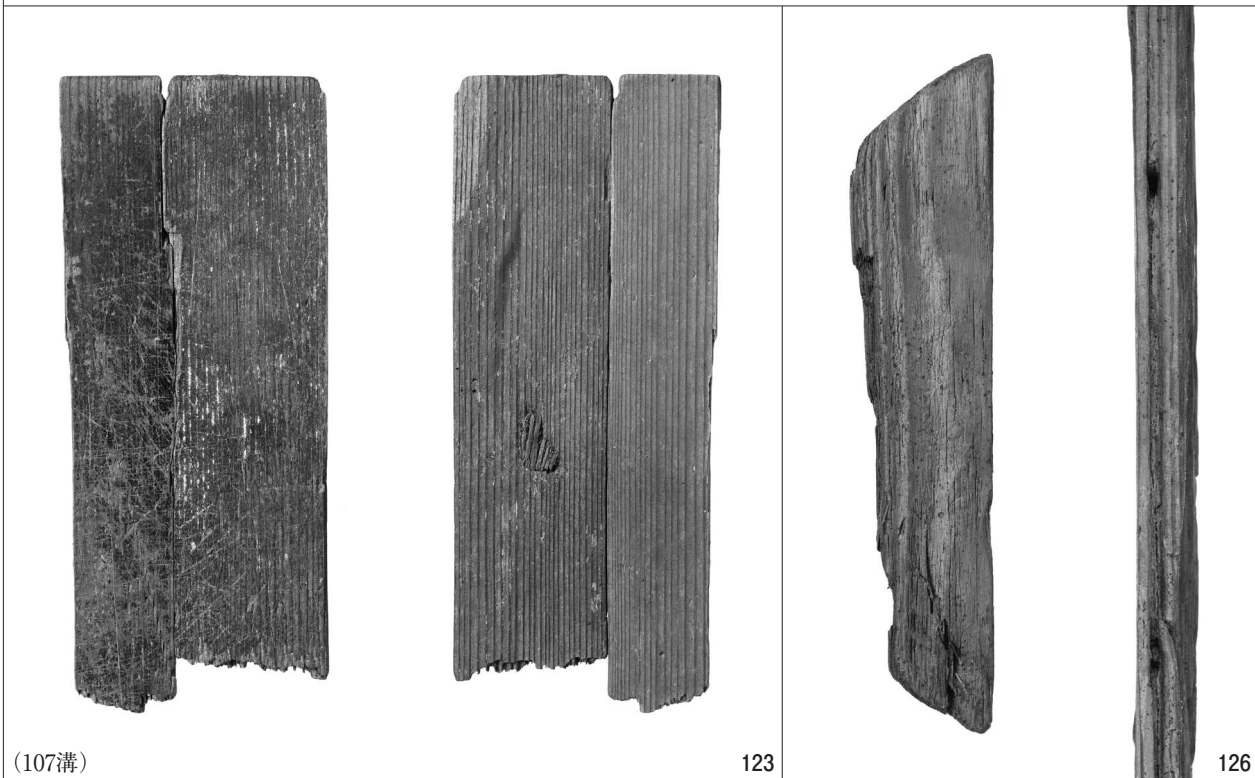
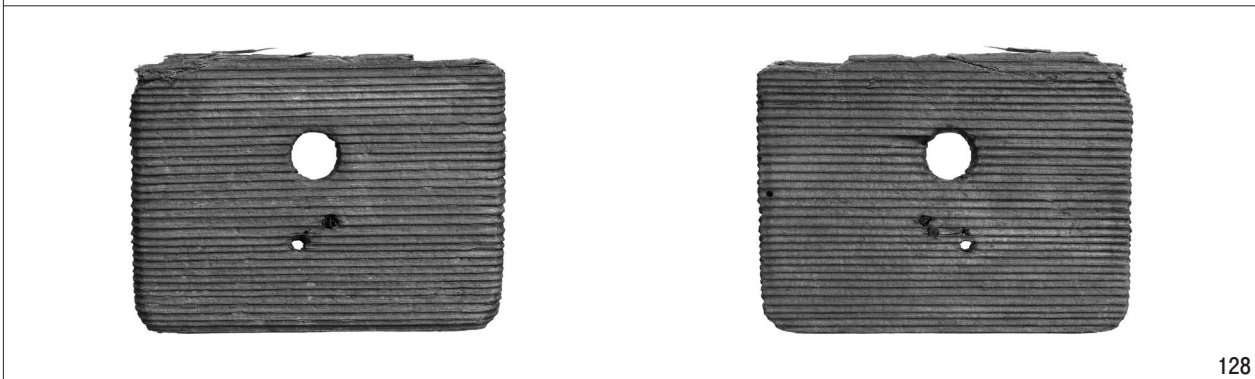
113

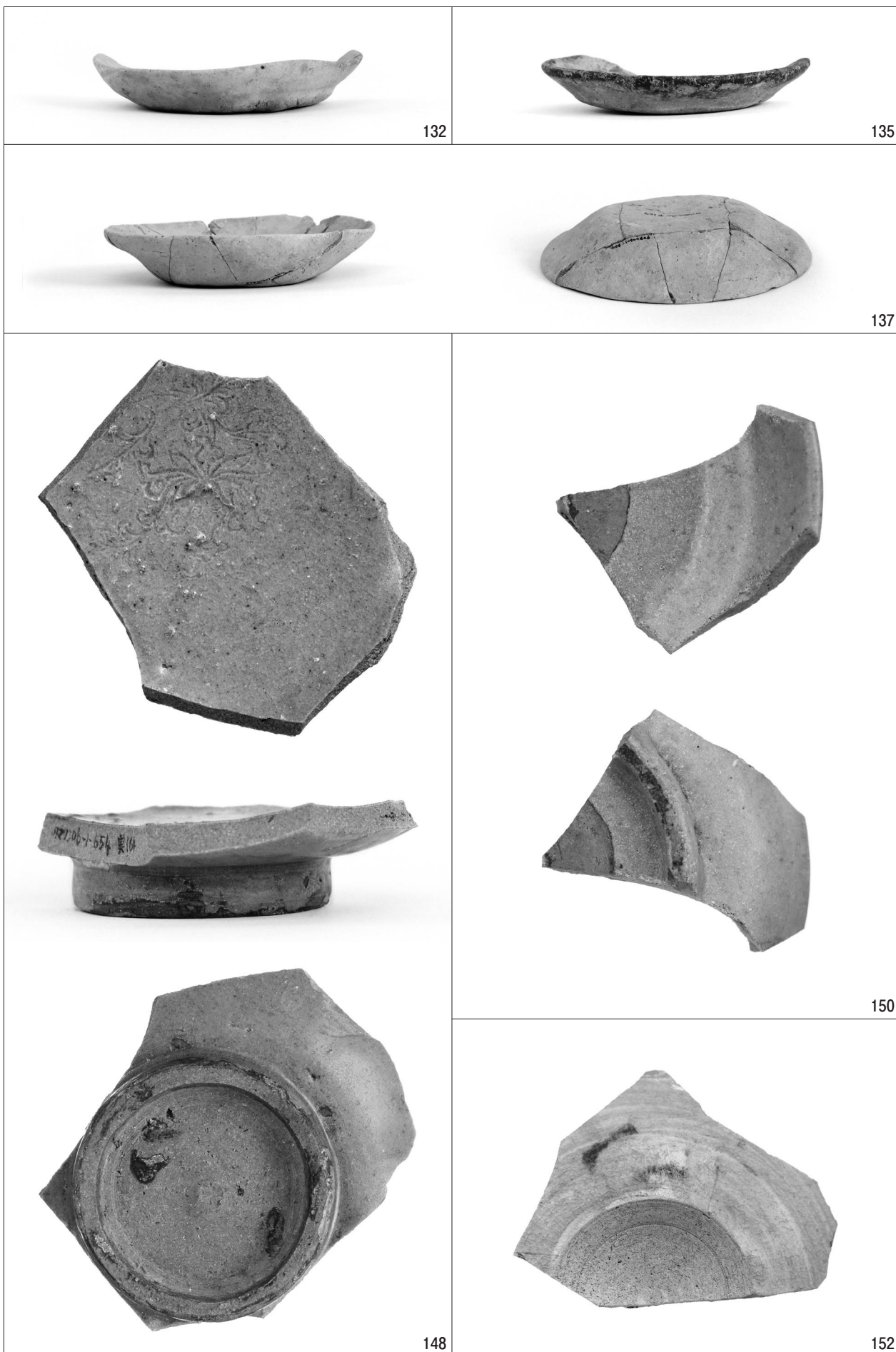
図版44 第5面大規模溝群 出土遺物 (11)

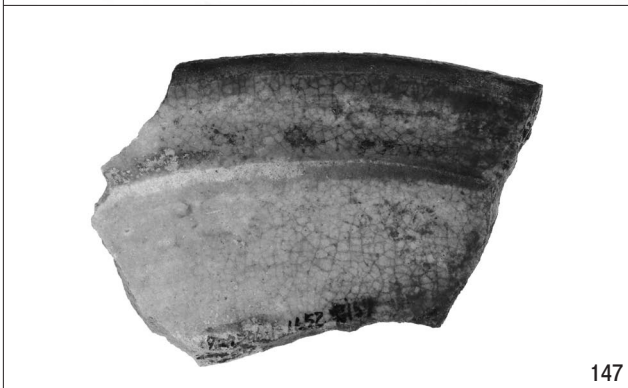
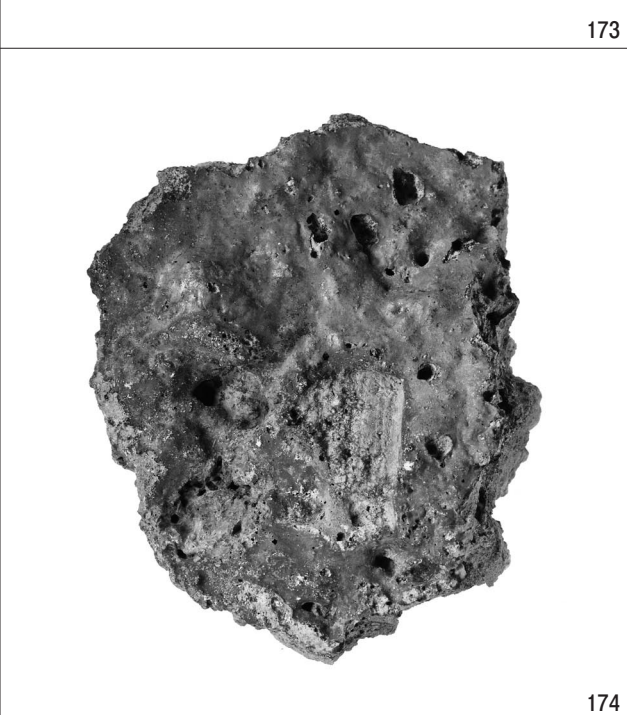
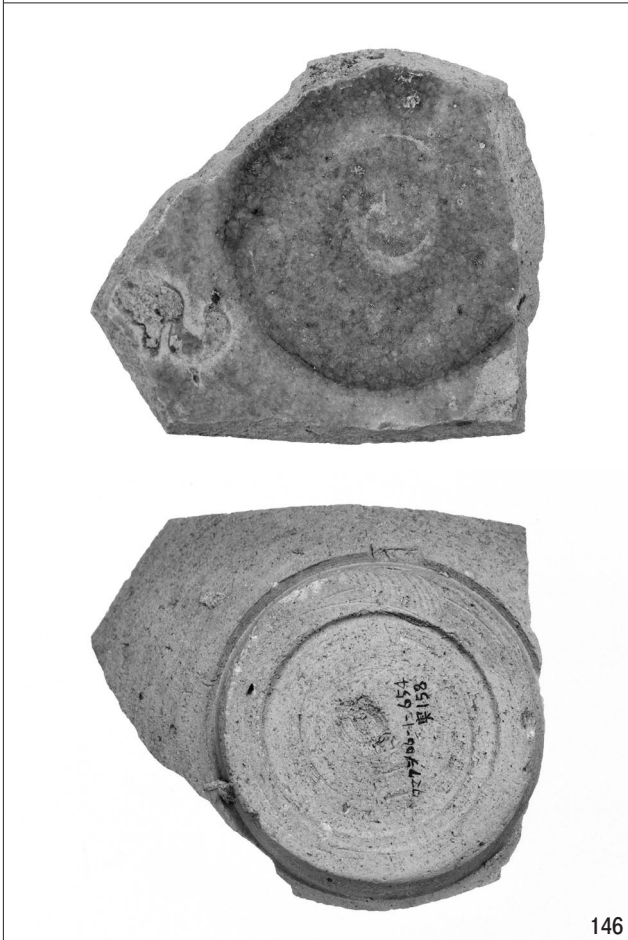


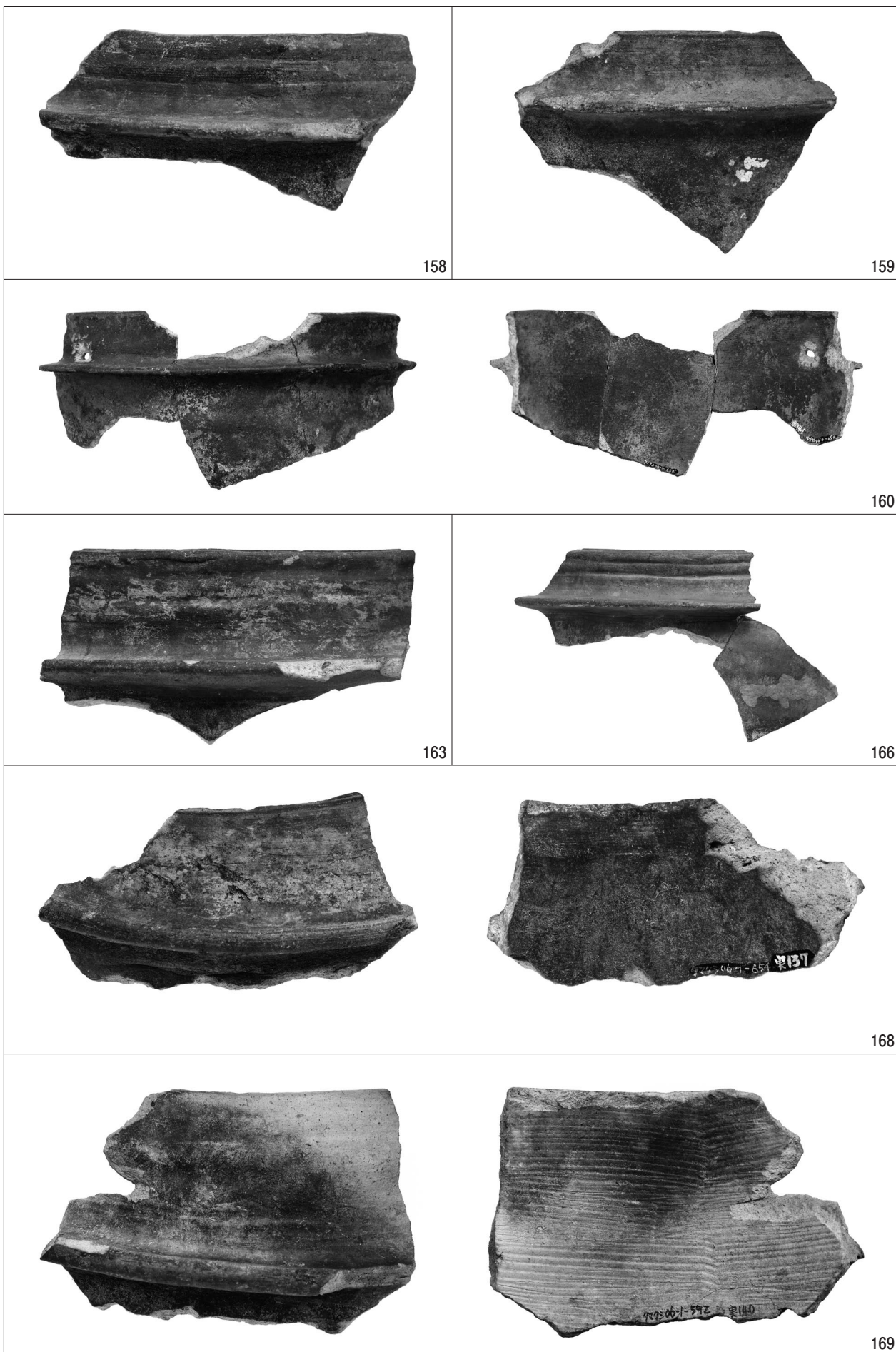


450溝上層 (4)

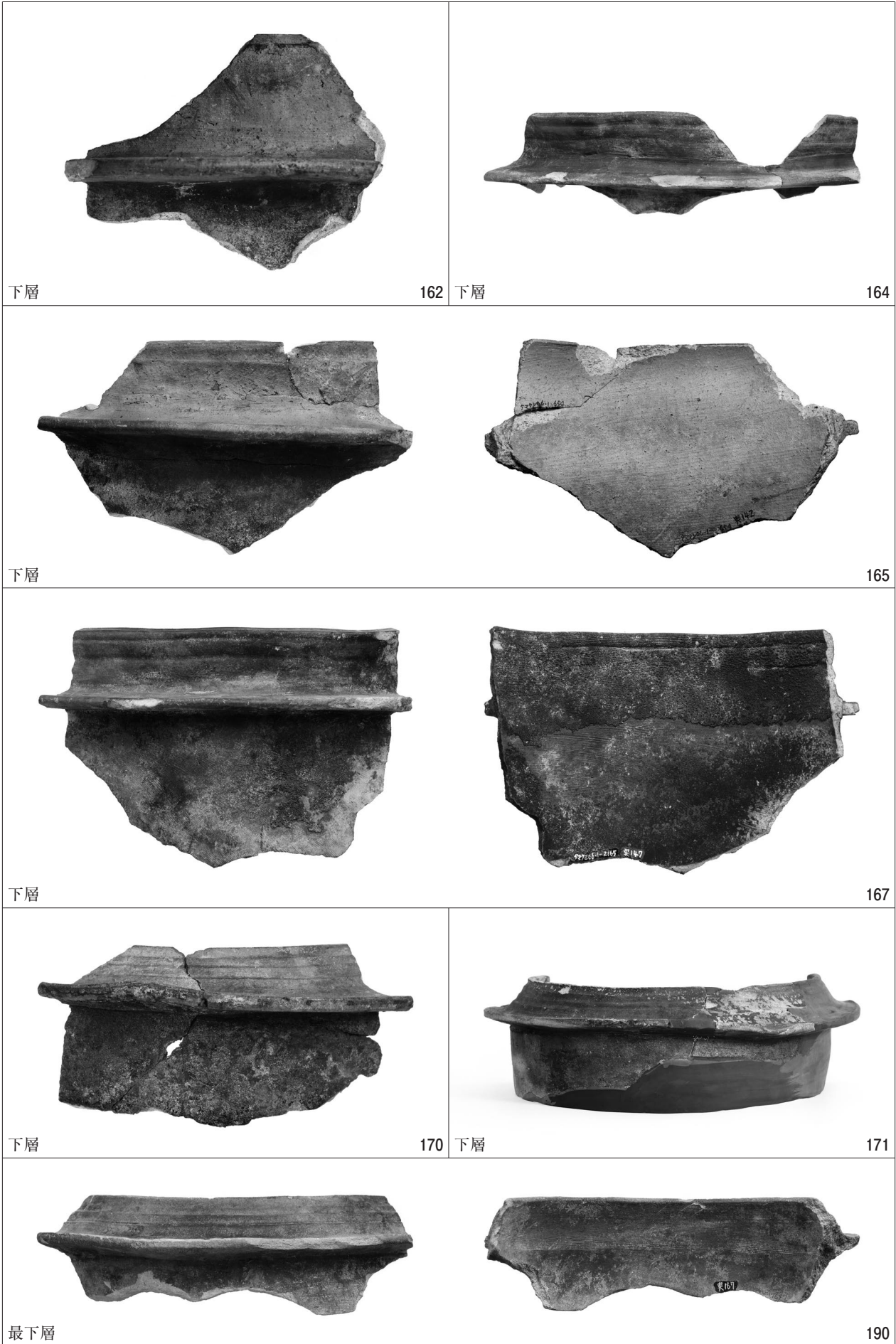




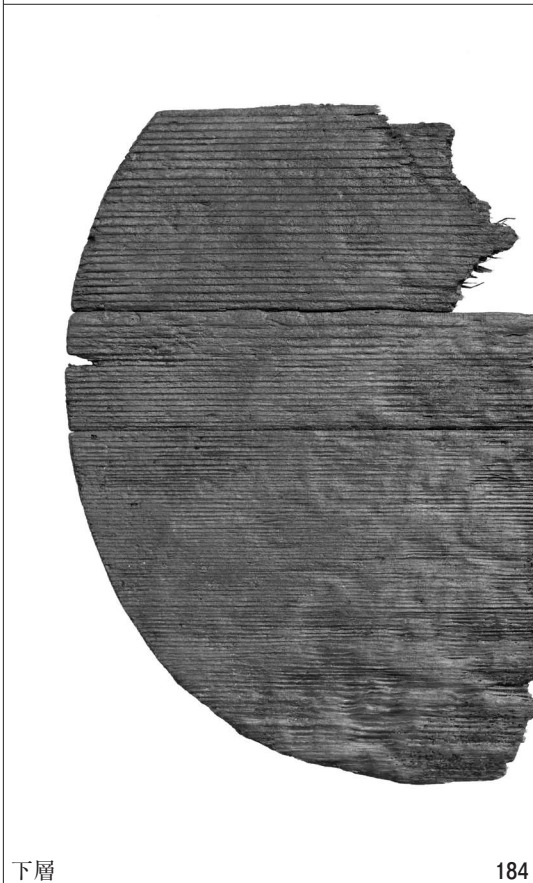
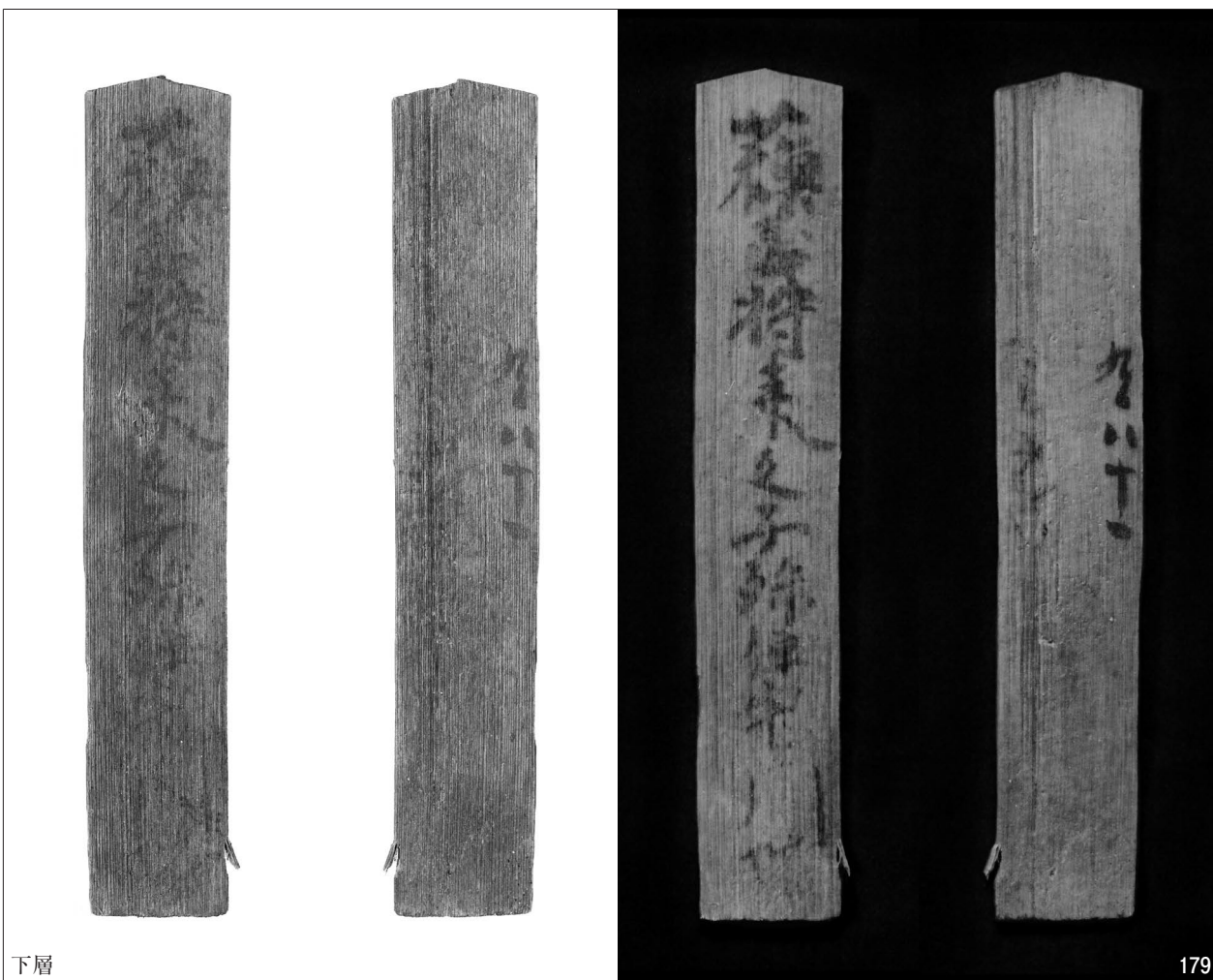




図版50 第5面大規模溝群 出土遺物 (17)

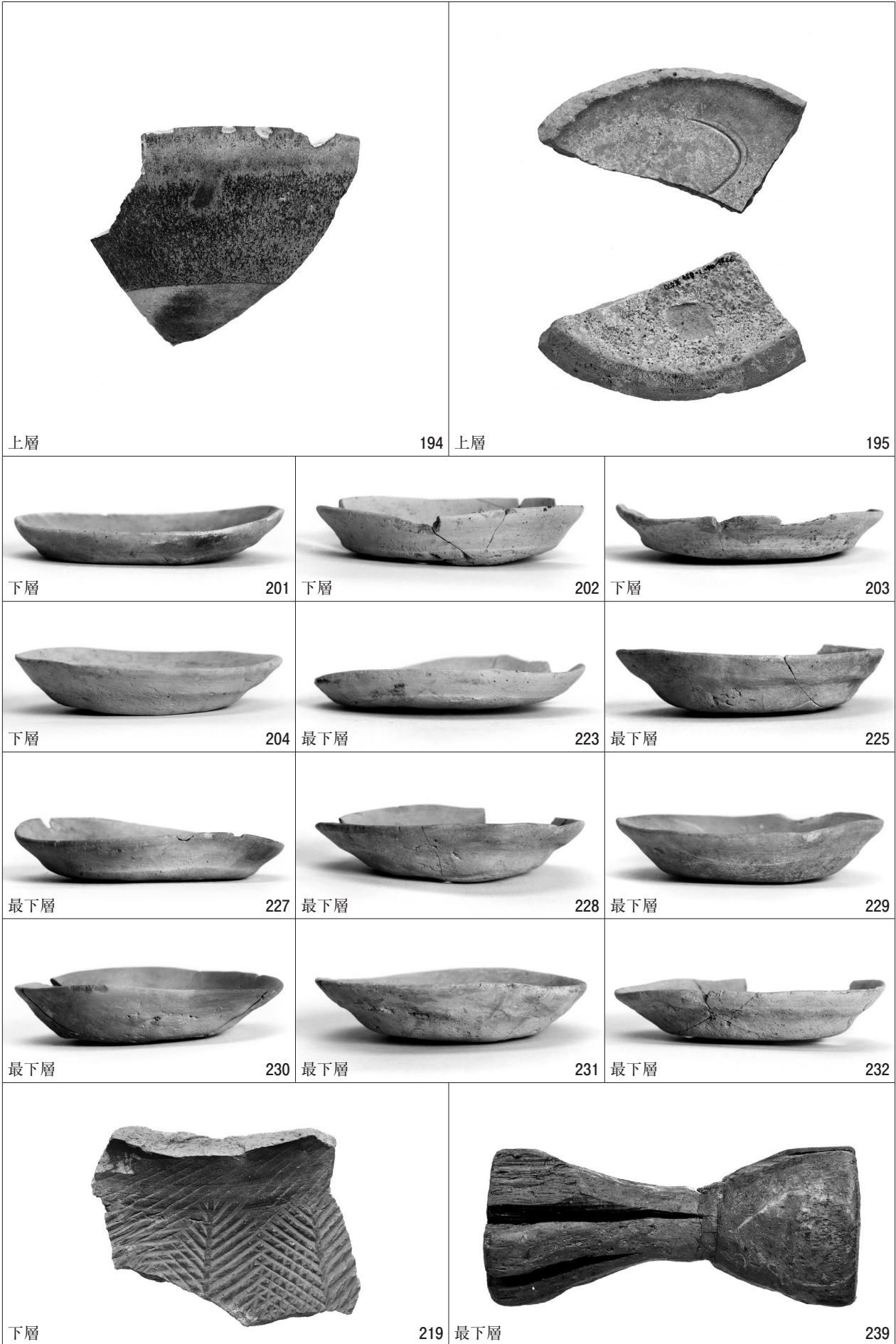


450溝下層 (4)・最下層 (1)



450溝下層 (5)・最下層 (2)

図版52 第5面大規模溝群 出土遺物 (19)





建物13 - 496柱穴

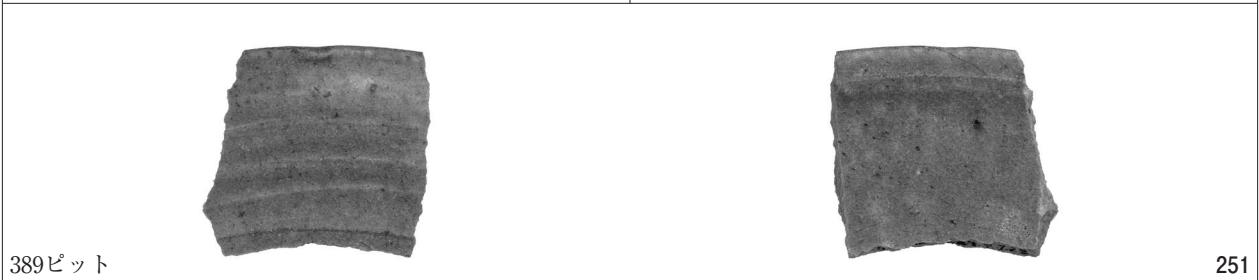
240



534ピット

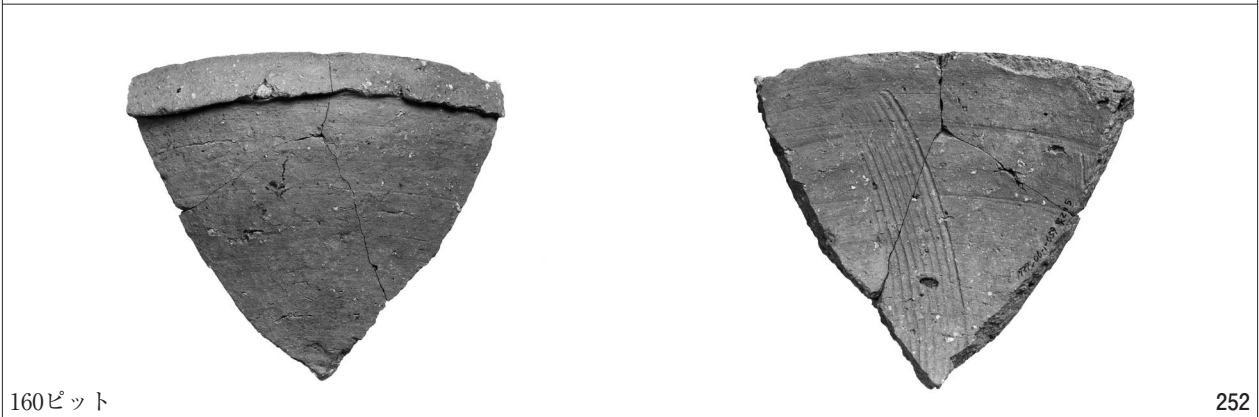
248 191ピット

254



389ピット

251



160ピット

252

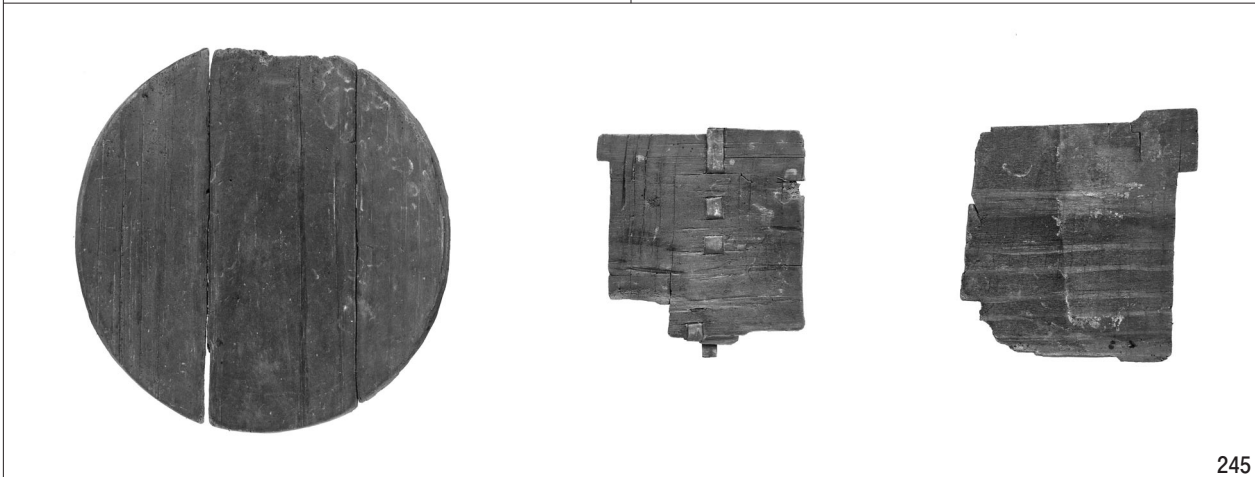
图版54 第5面西半 出土遺物 (2)



242



243



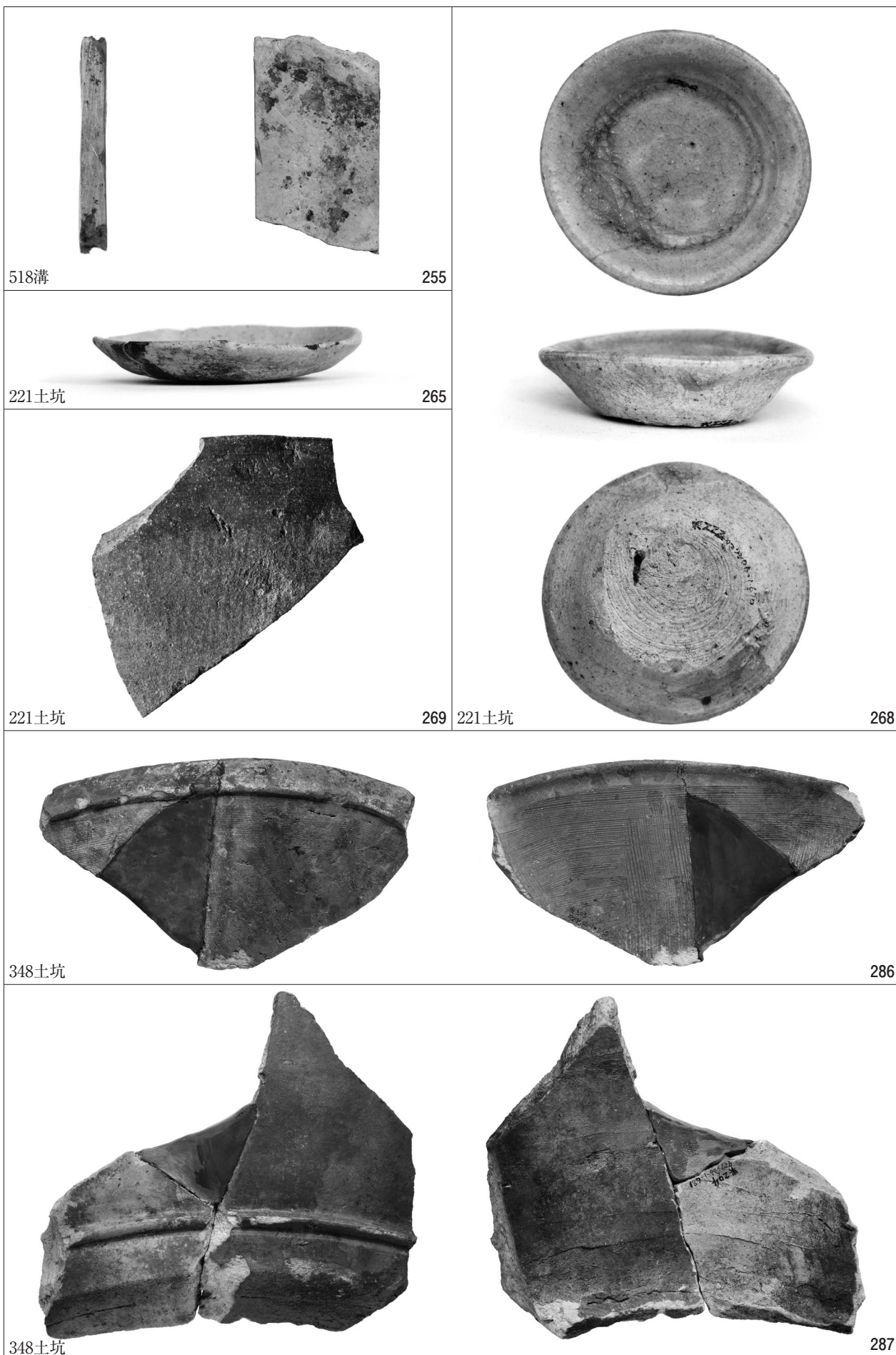
245



244

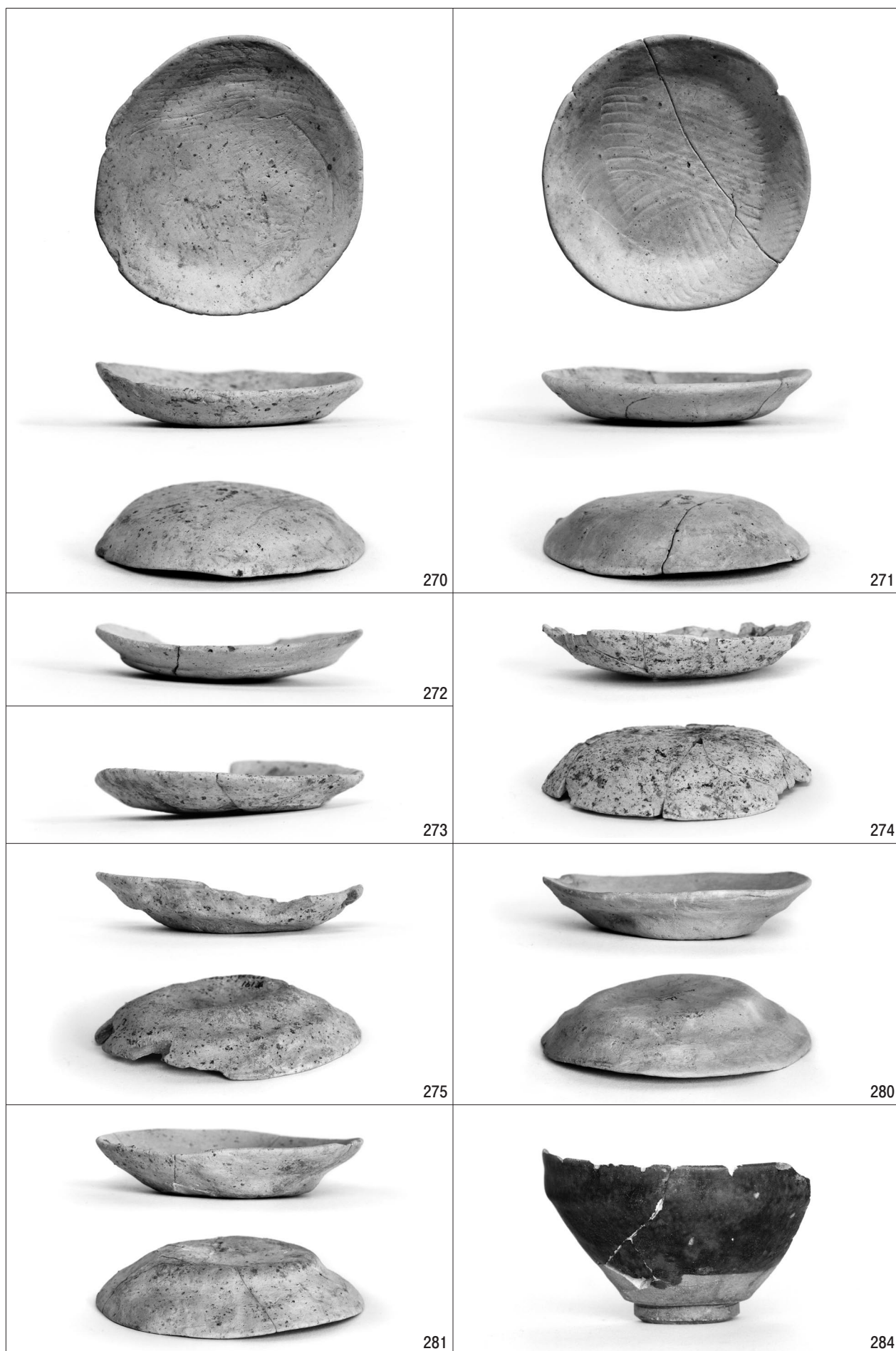


246 - 2



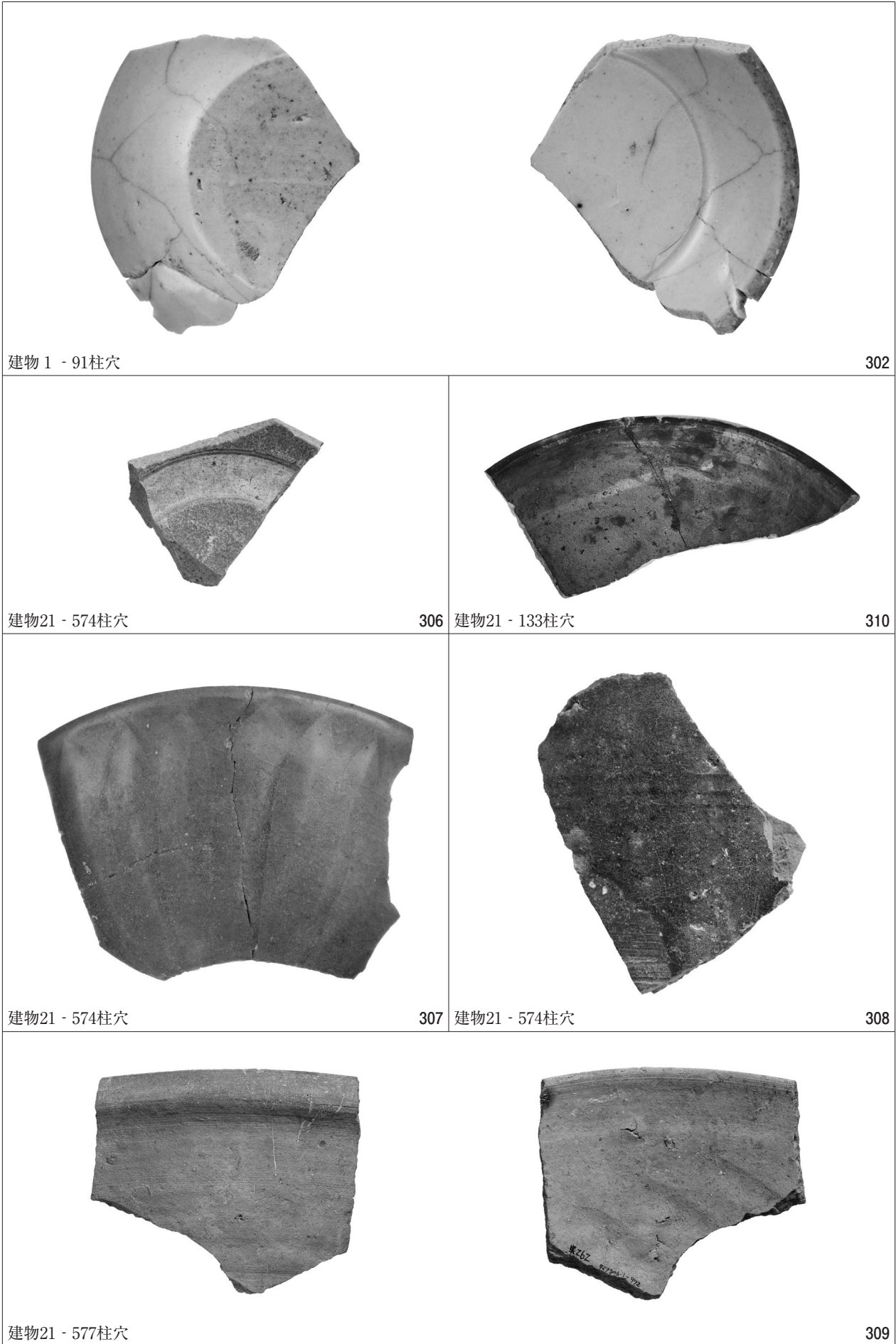
518溝、221土坑、348土坑 (1)

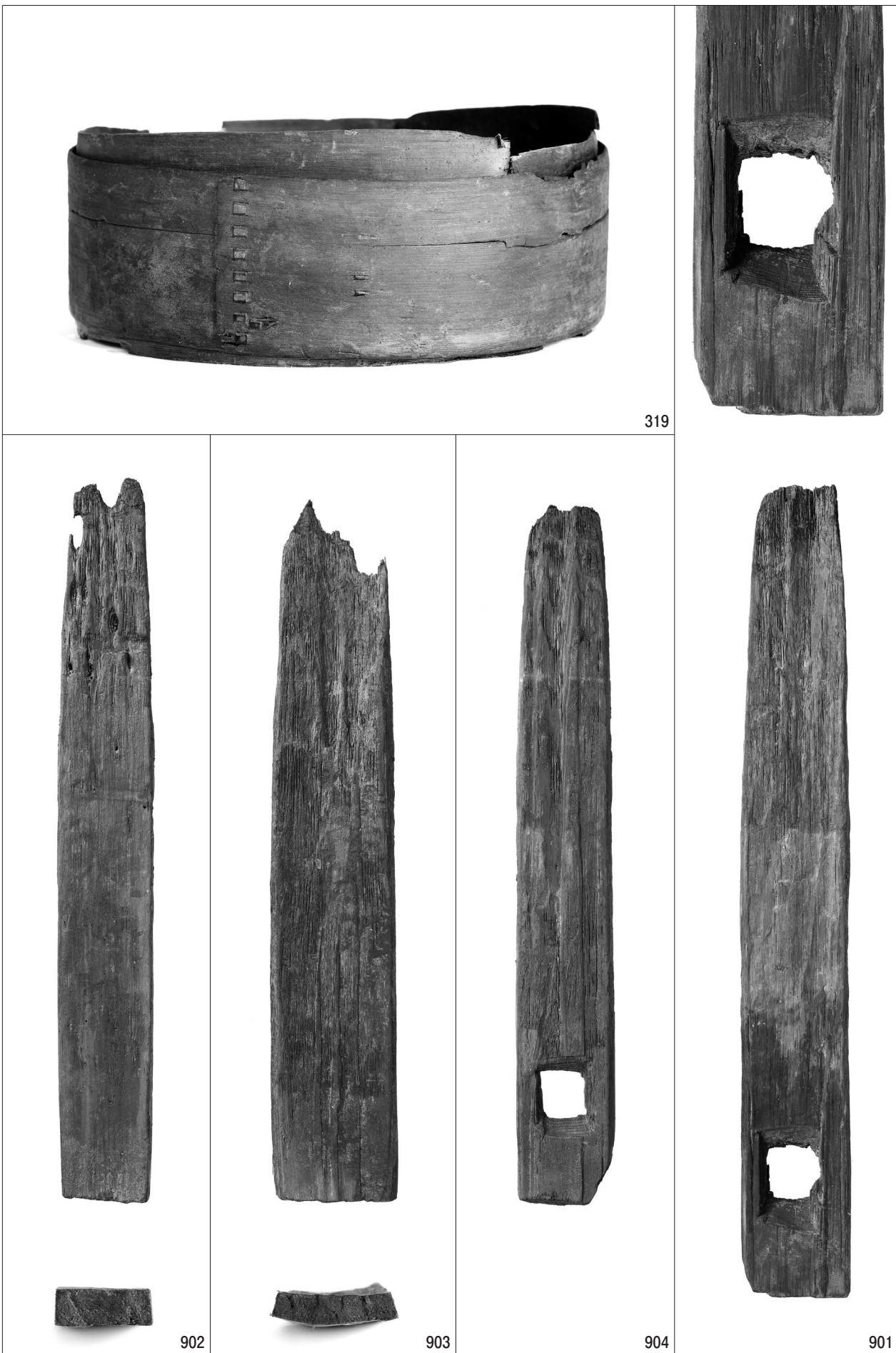
图版56 第5面西半 出土遺物（4）



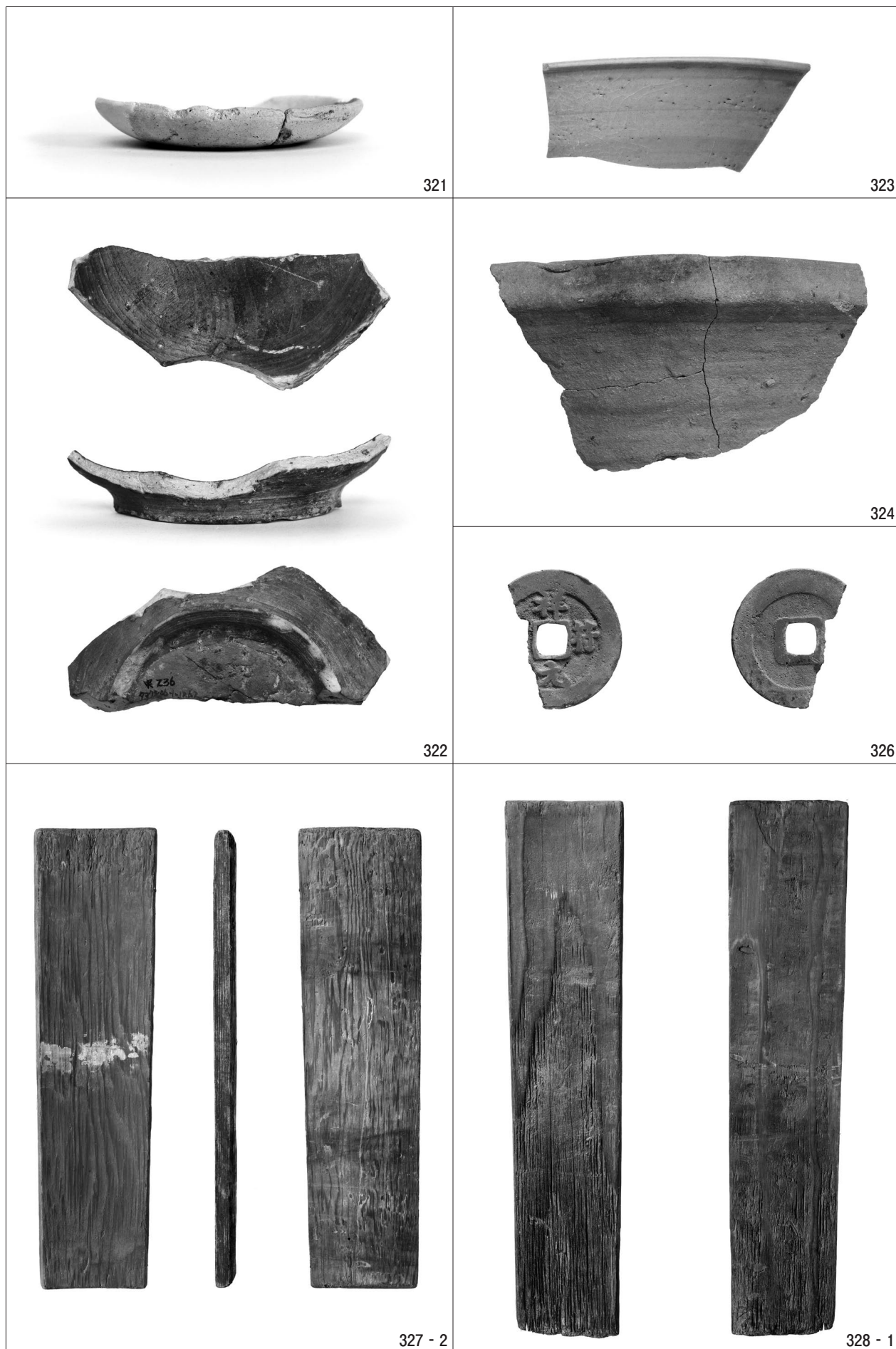


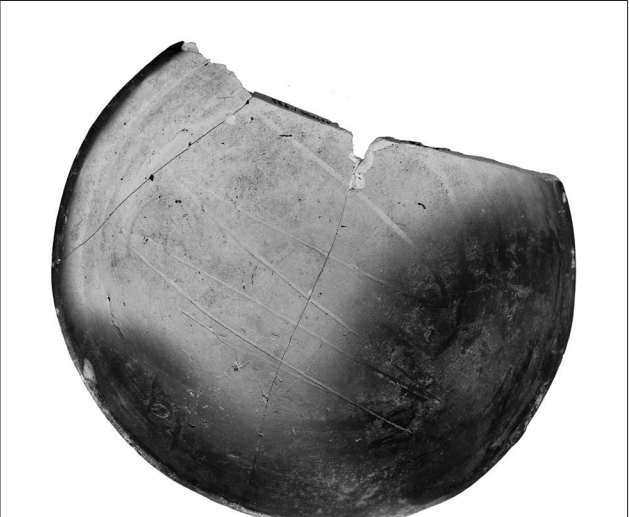
図版58 第5面東半 出土遺物（1）



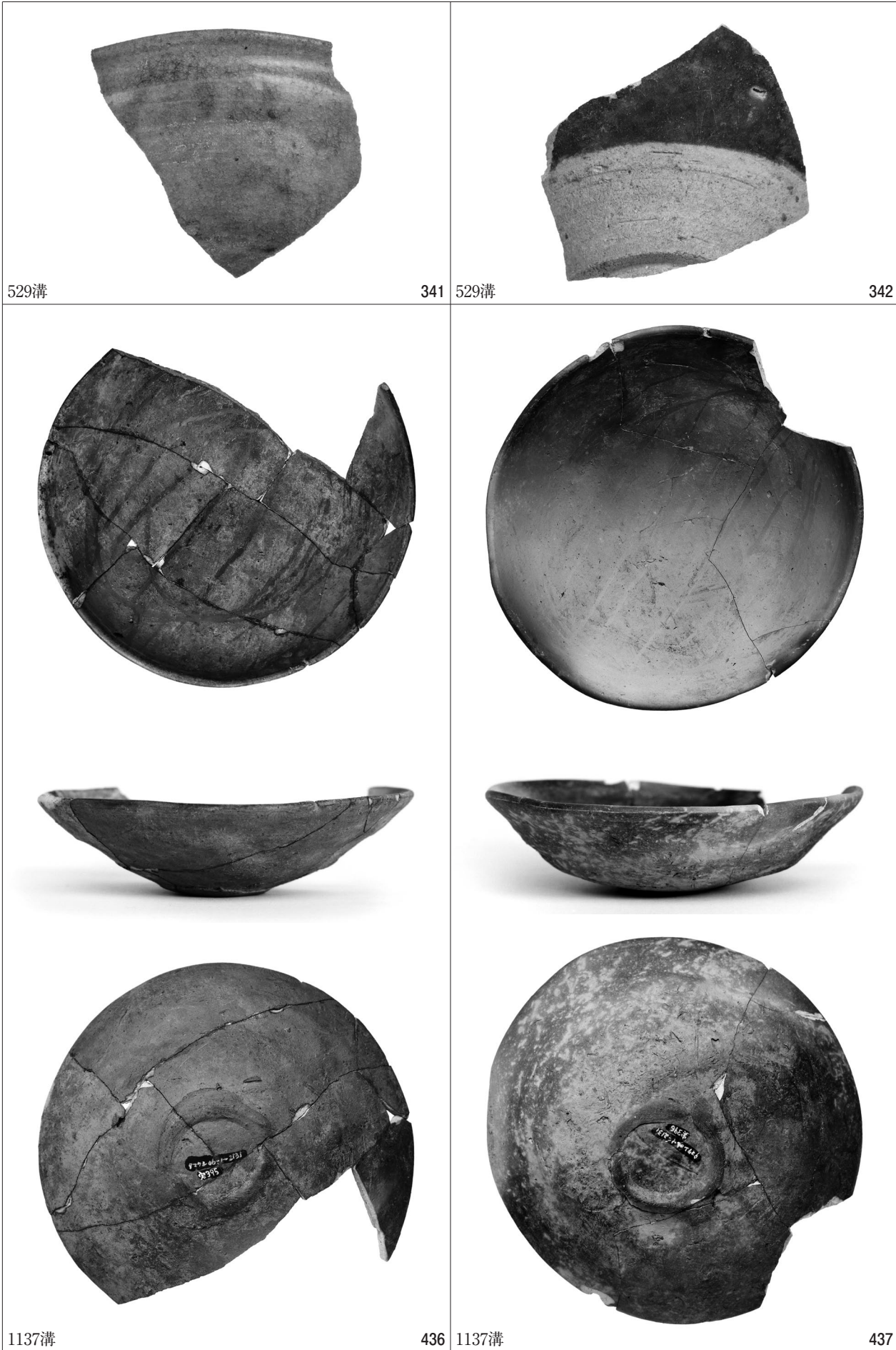


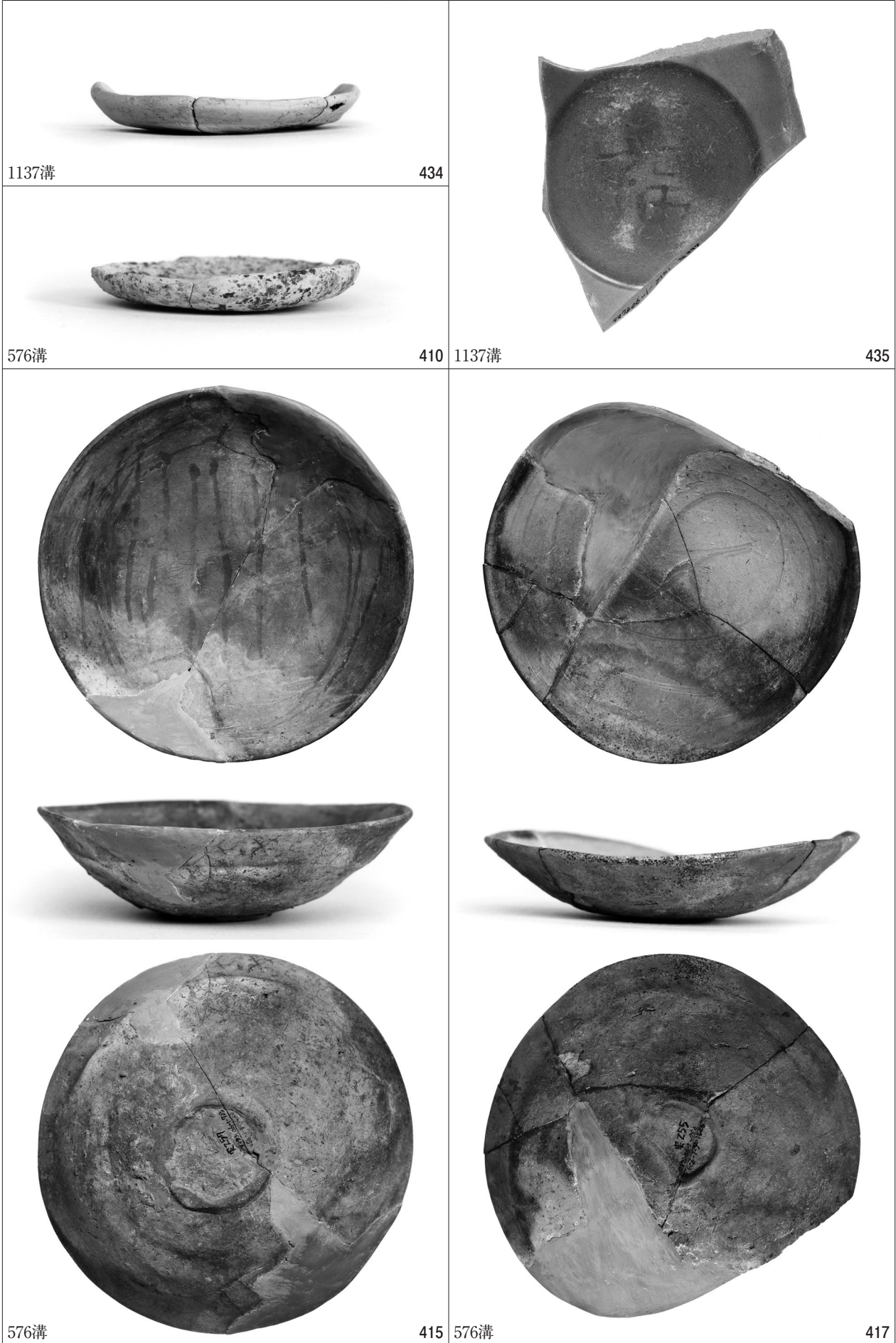
図版60 第5面東半 出土遺物（3）



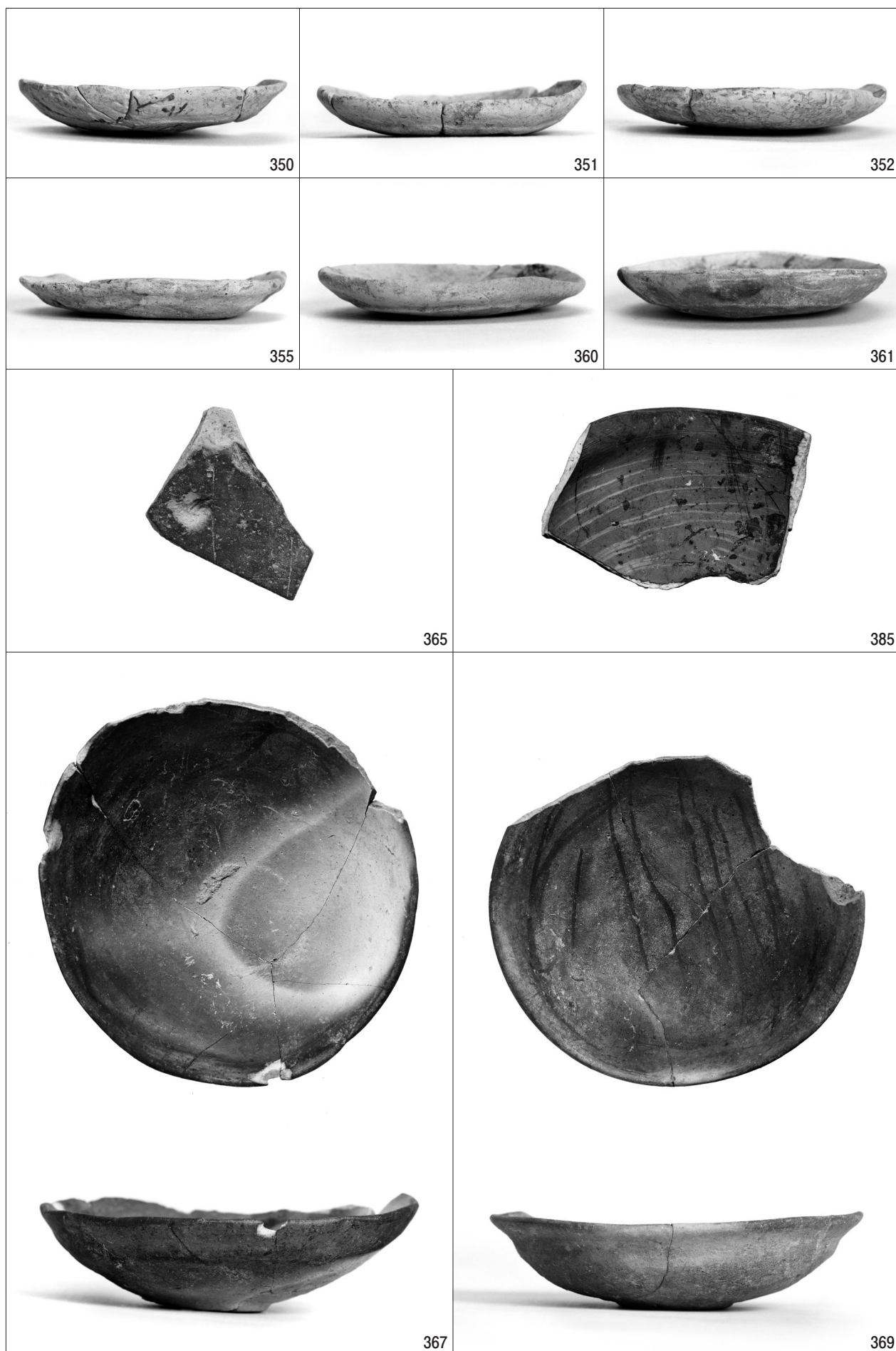


图版62 第5面東半 出土遺物 (5)



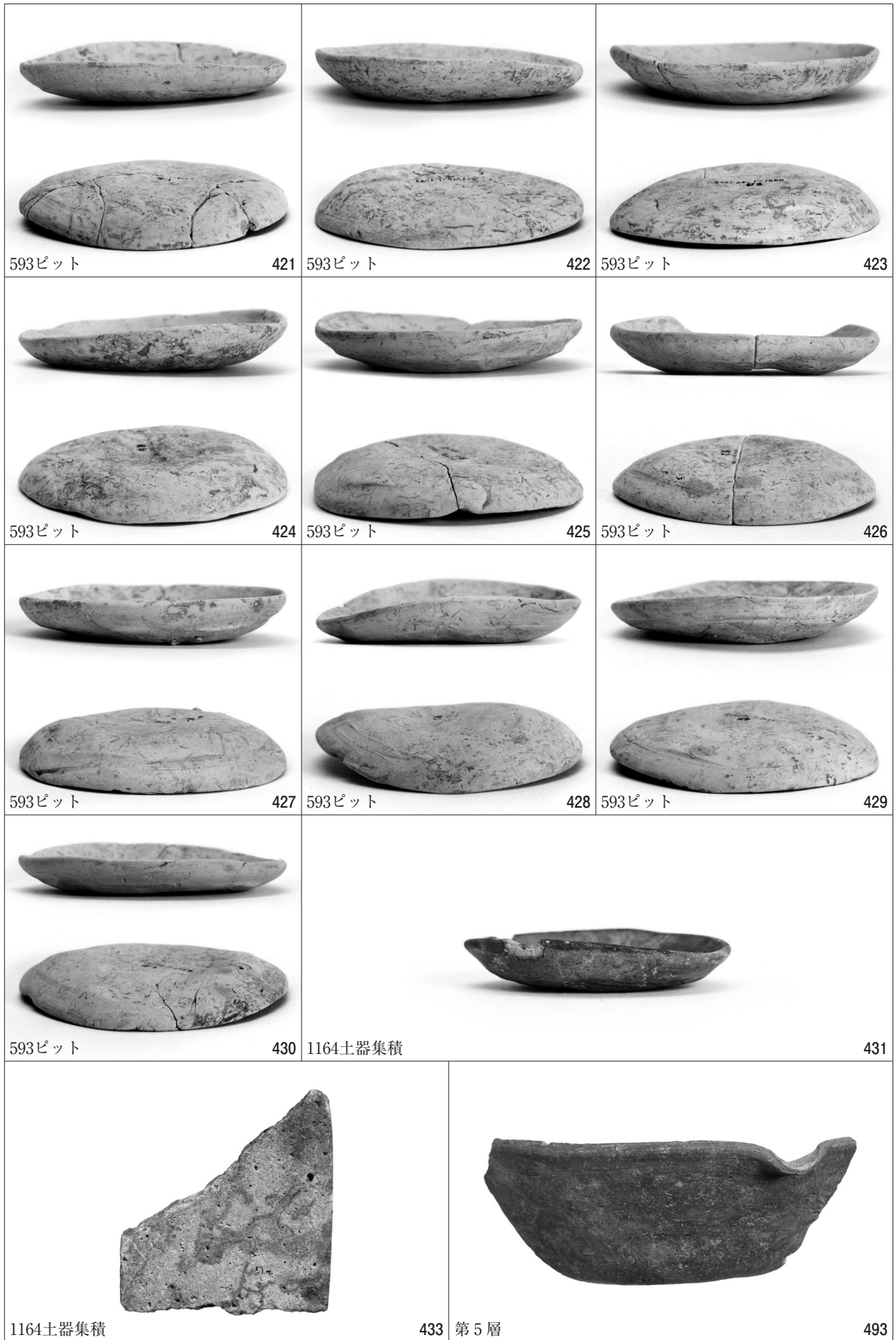


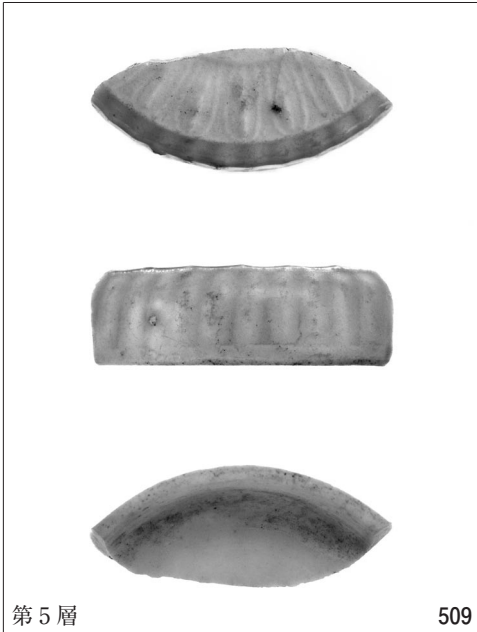
图版64 第5面東半 出土遺物（7）





図版66 第5面東半 出土遺物（9）





第5層

509



第5層

510



第5層

498



第5層

519



第5層

520












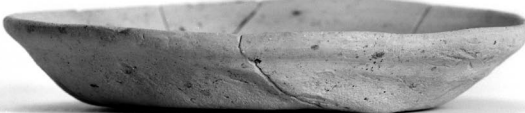



第6層

528

图版68 第7面 出土遺物 (1)

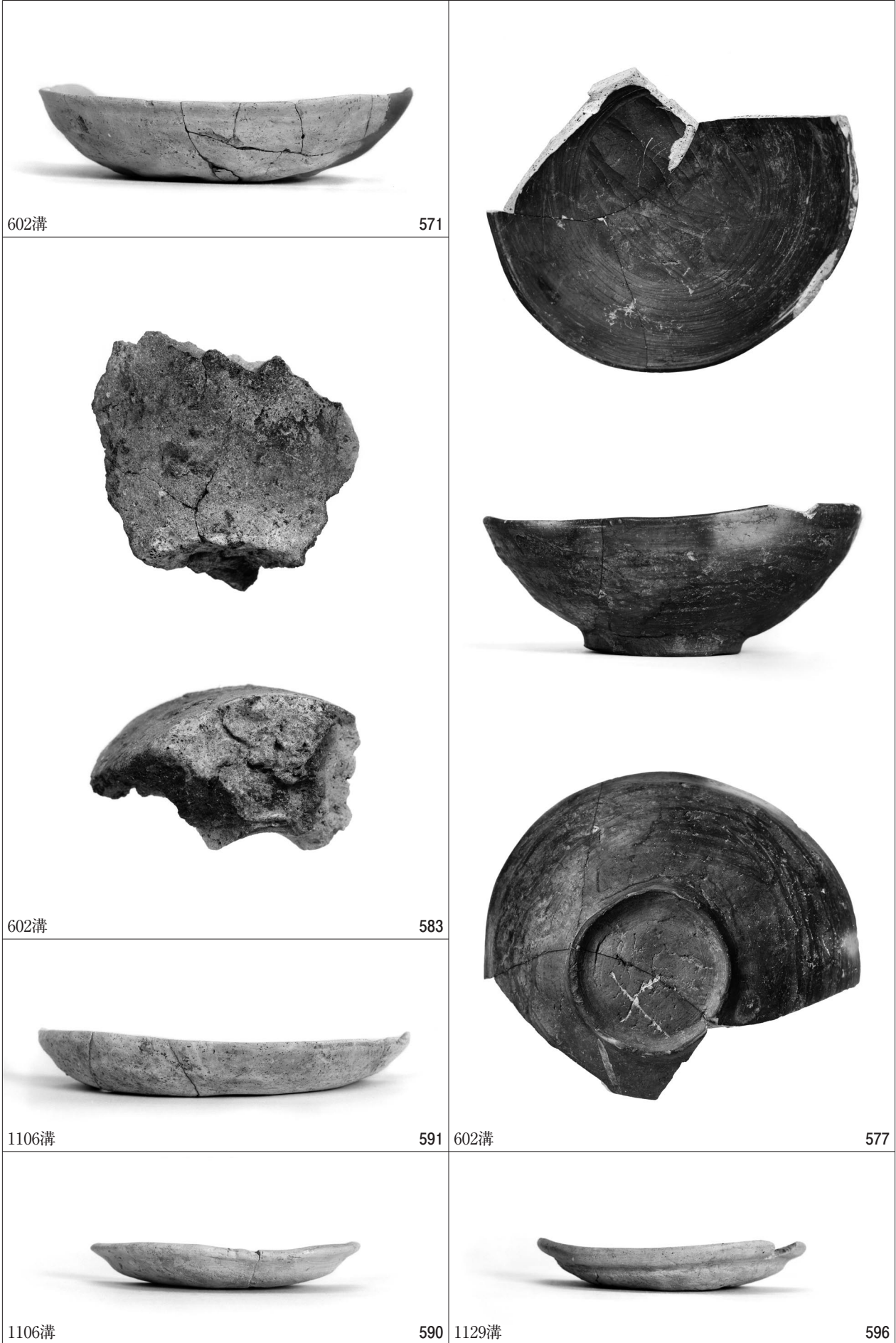


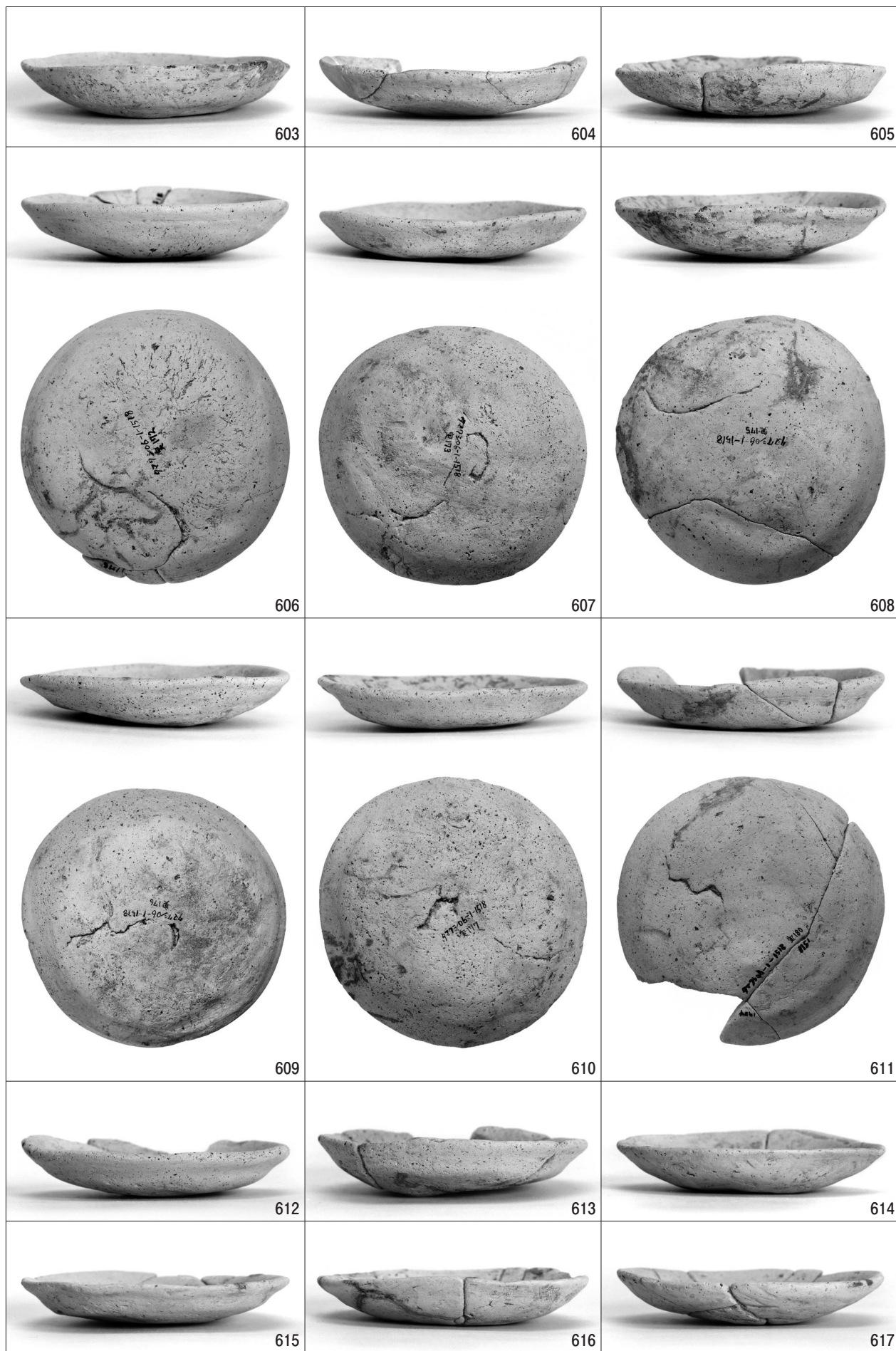
建物 3・7、柱列 3、721・1108柱穴

 建物3 - 731柱穴 545	 831ピット 641
 612ピット 653	
 732ピット 668	
 1127ピット 672	
 1127ピット 673	
 1150ピット 674	 642  623
 701ピット 619	
 701ピット 620	
 701ピット 622	
 701ピット 623	









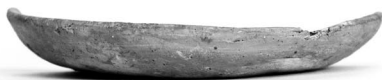

建物3、612・701・732・831・1127・1150ピット

图版70 第7面 出土遺物 (3)

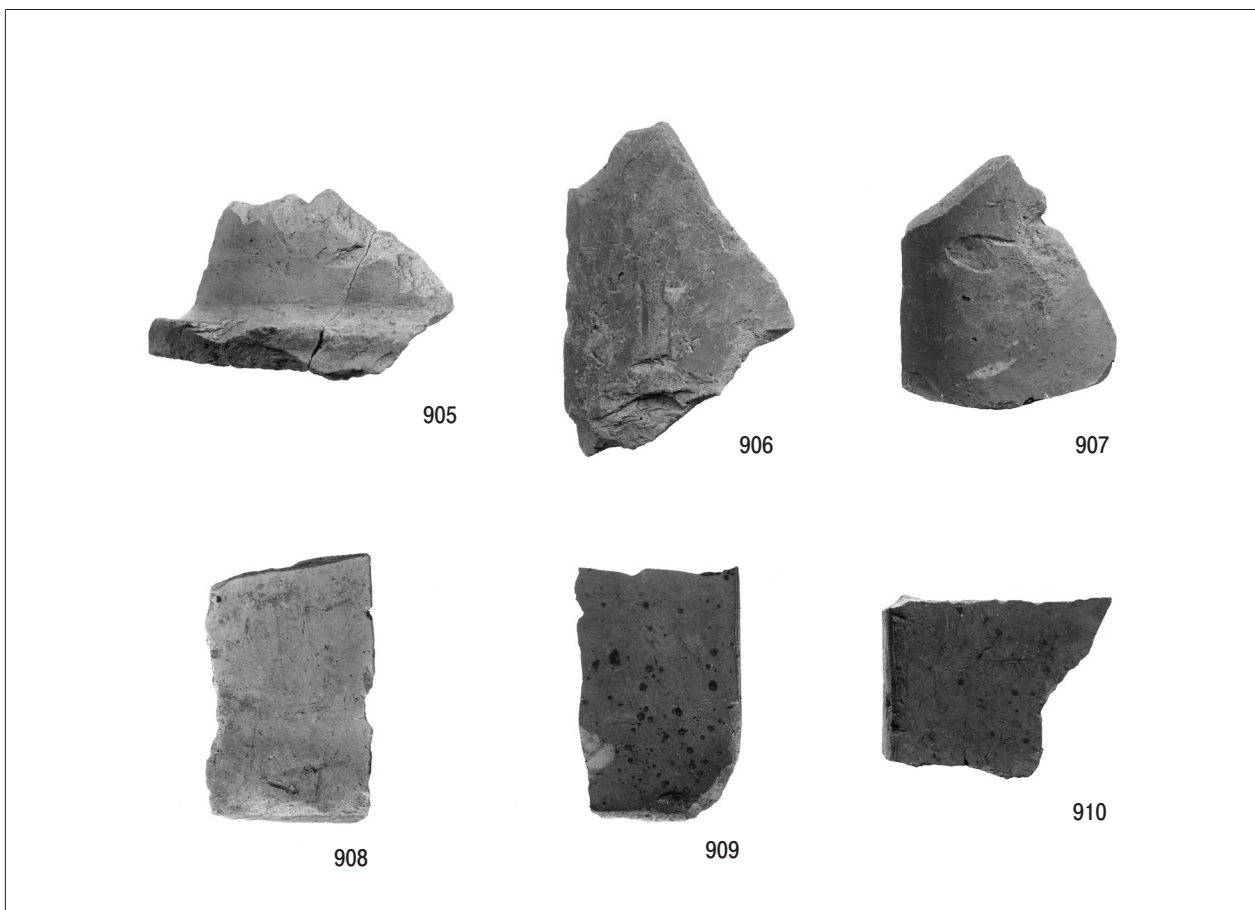




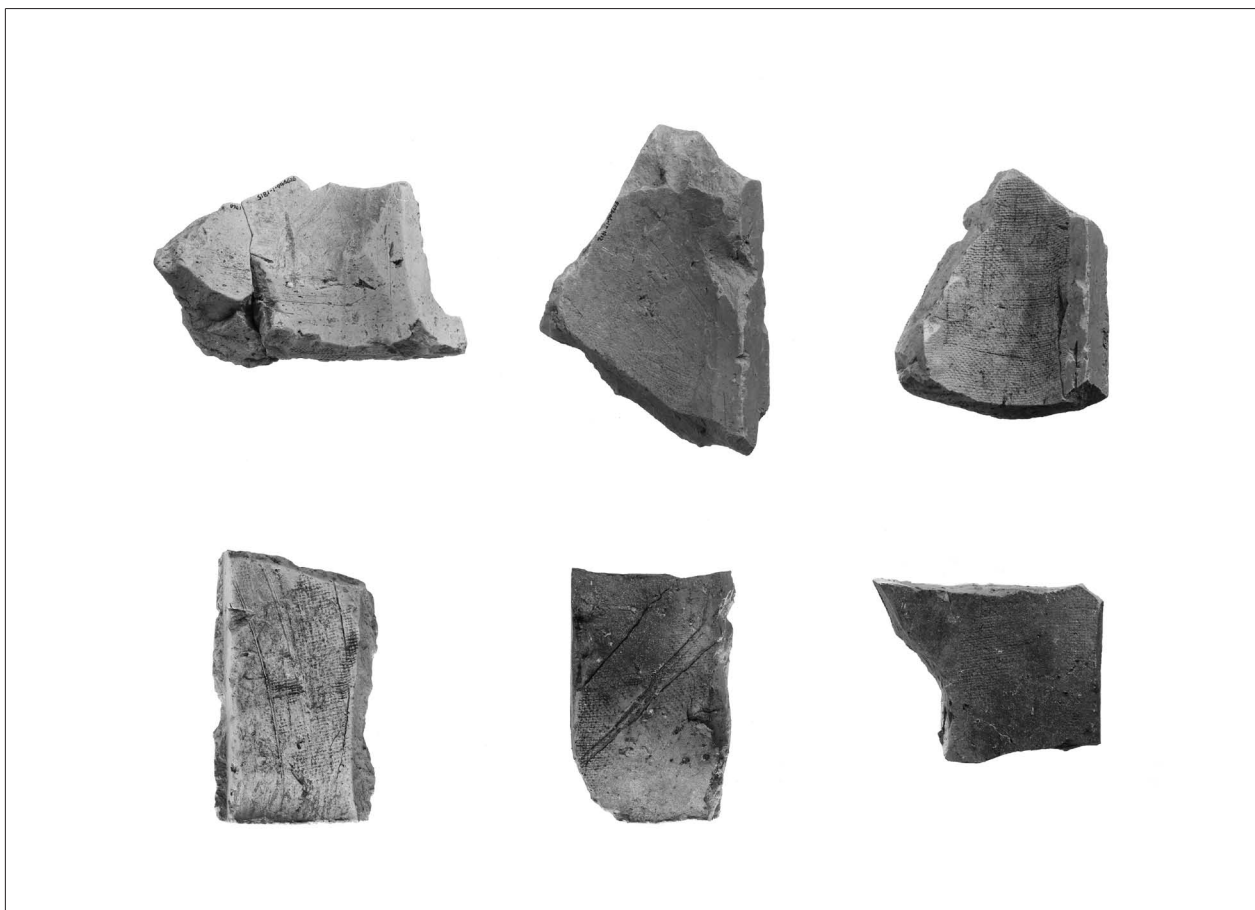
図版72 第7面 出土遺物（5）、第11層 出土遺物

 <p>720土坑 625</p>	 <p>720土坑 629</p>
 <p>720土坑 626</p>	 <p>630土器集積 632</p>
 <p>630土器集積 631</p>	 <p>630土器集積 634</p>
 <p>630土器集積 633</p>	 <p>747落ち込み 644</p>
 <p>747落ち込み 643</p>	 <p>738</p>
 <p>747落ち込み 645</p>	 <p>647 第11層</p>

720土坑、630土器集積、747落ち込み、第11層



(凸面)

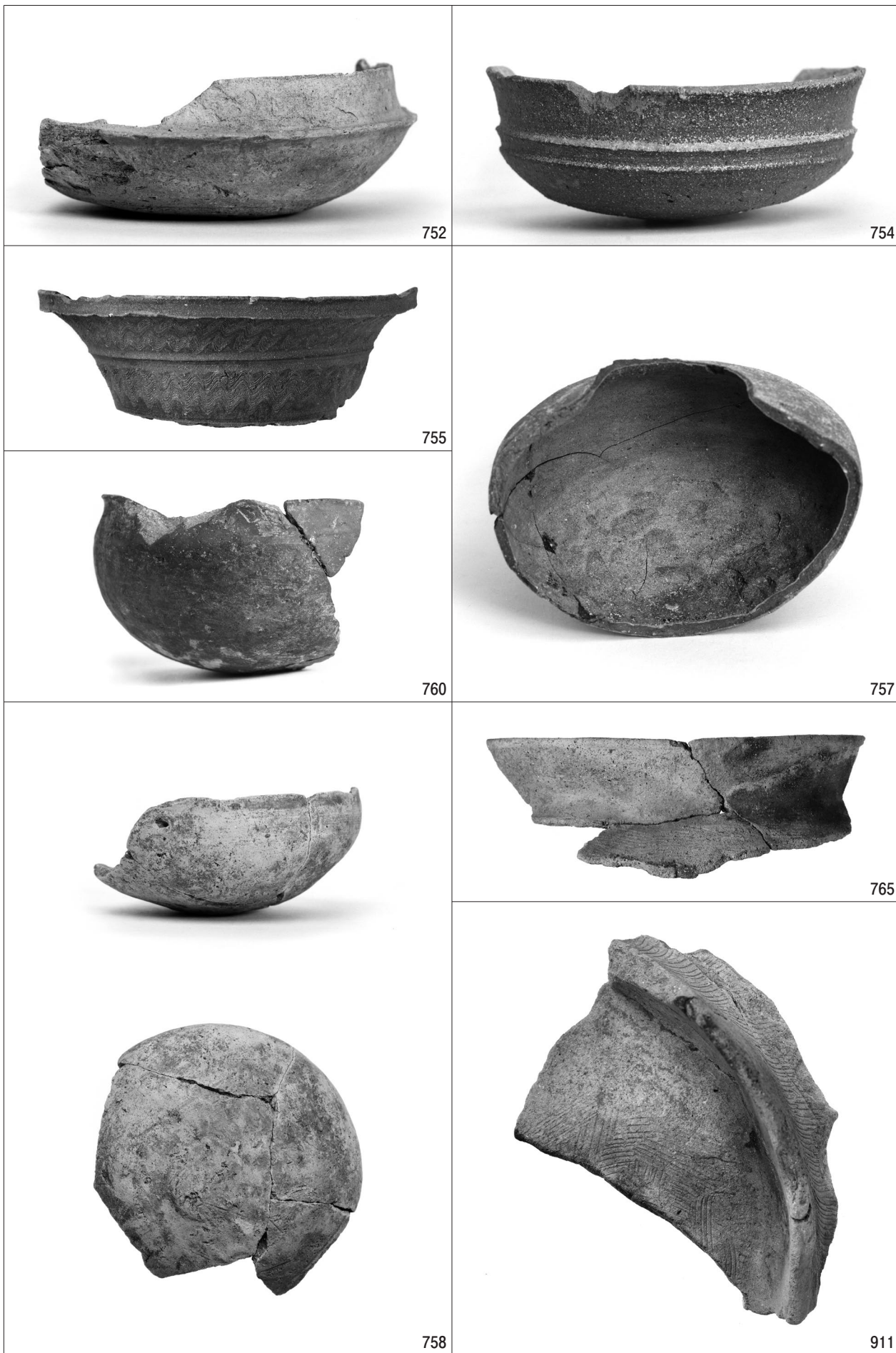


(凹面)

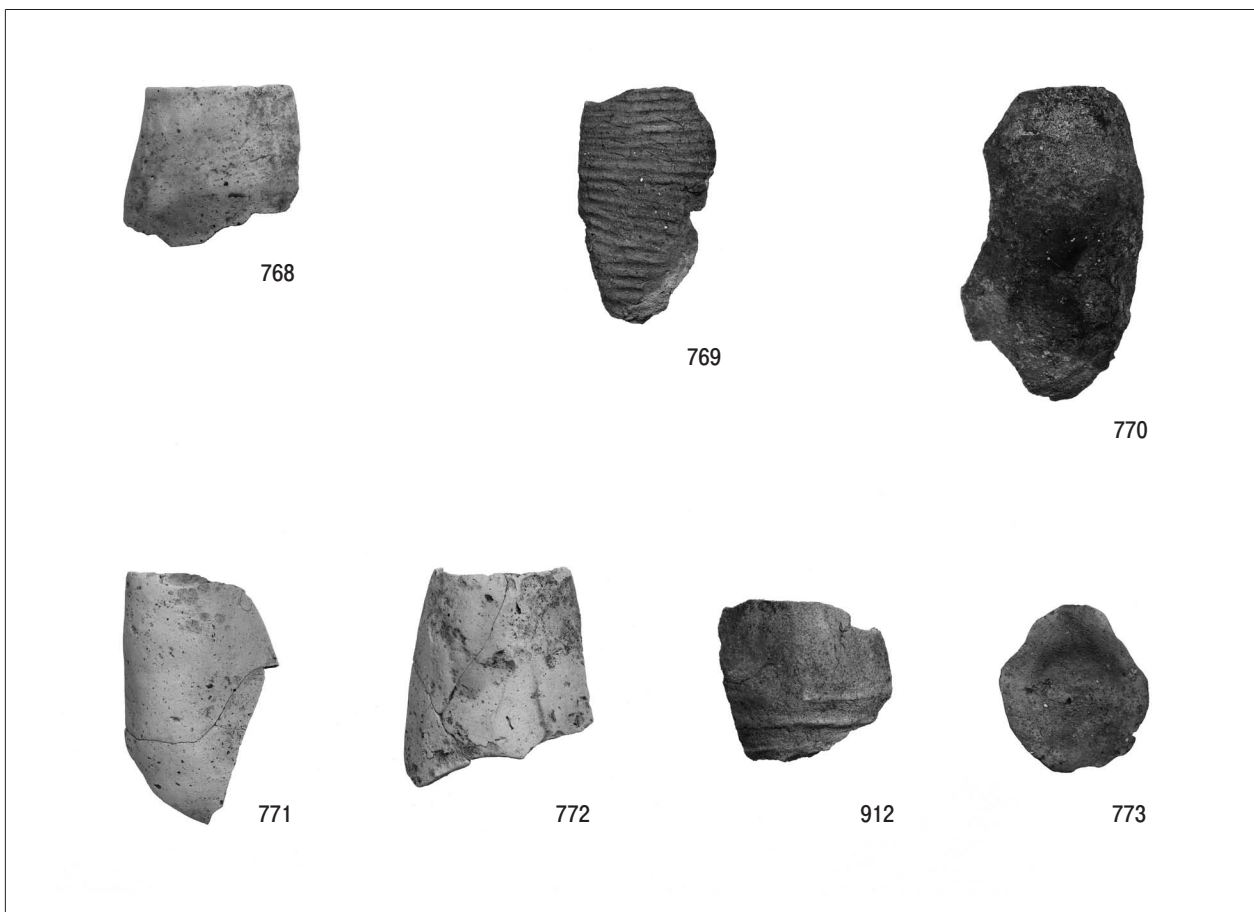
図版74 第15面 出土遺物 (1)



946溝、985ピット、923土坑 (1)、1015土坑



图版76 第15面 出土遺物 (3)

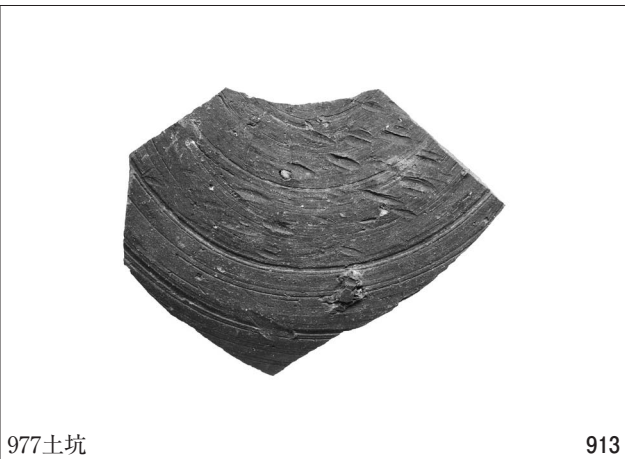


(外面)



923土坑 (3)

(内面)





926土坑

782



940土坑

799



940土坑

801



940土坑

808



940土坑

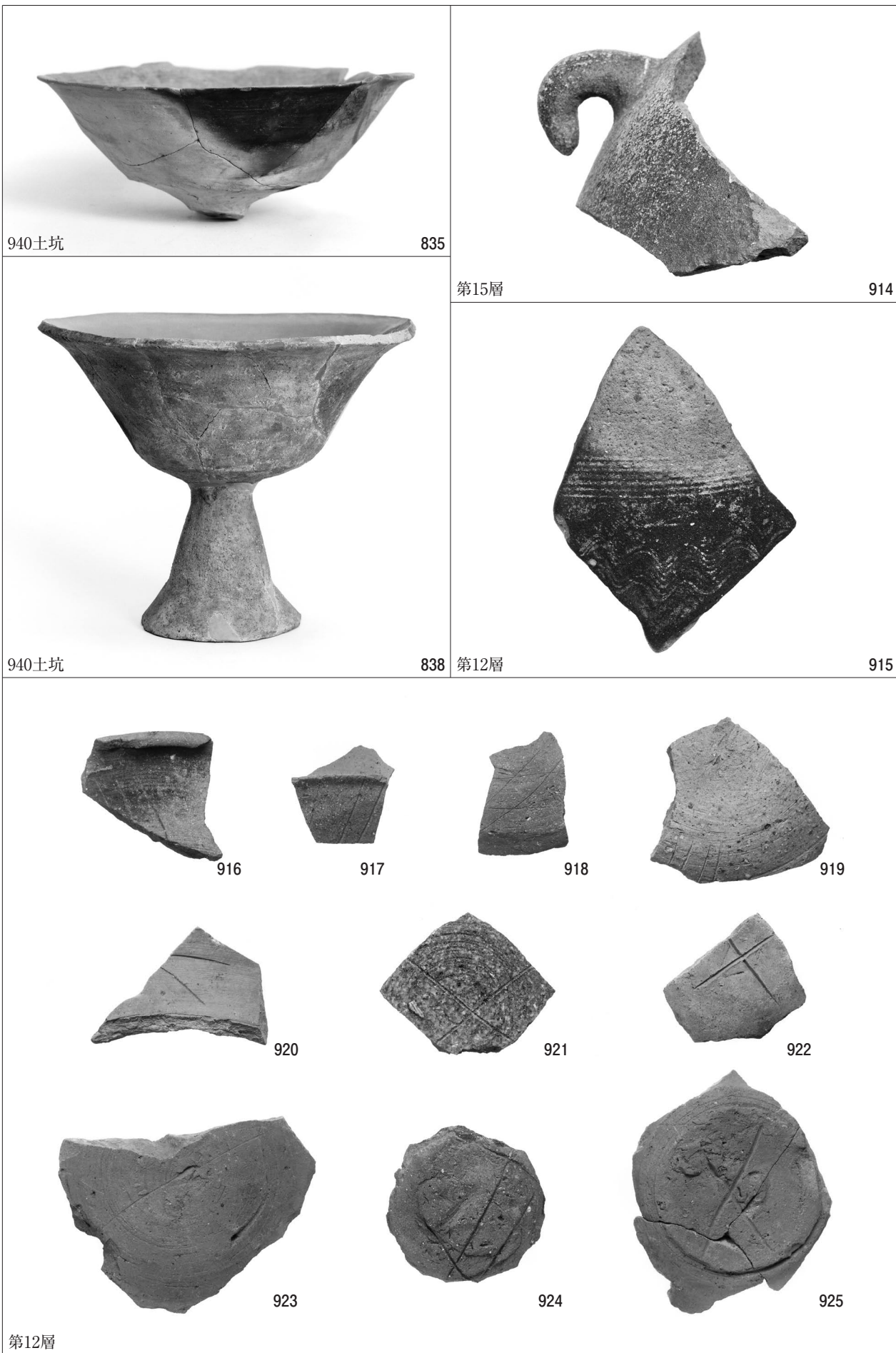
806





940土坑 (3)

図版81 第15面 出土遺物 (8)、第12・15層 出土遺物

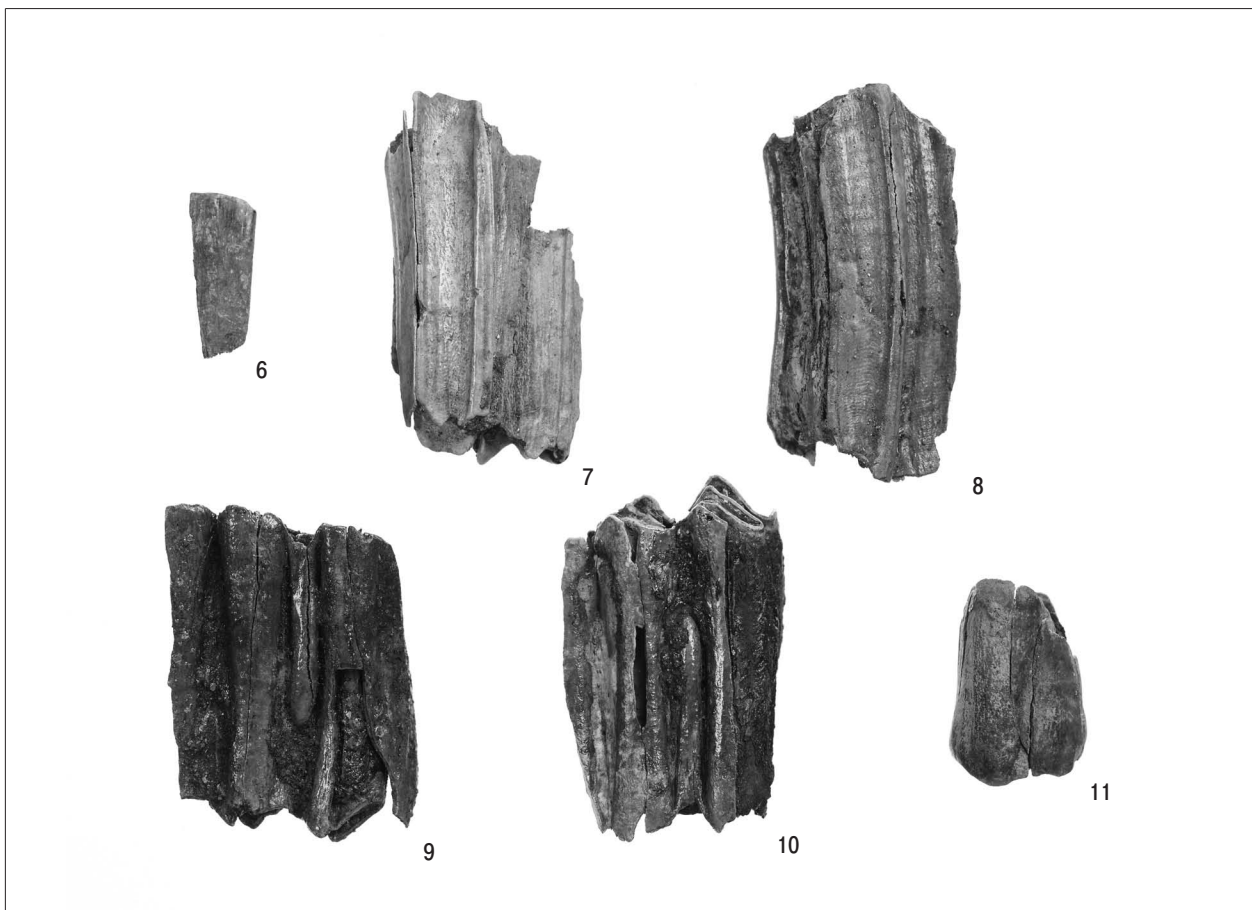


940土坑 (4)、第12・15層

図版82 動物遺存体



450溝 (1・2)、第11層 (3)、940土坑 (4・5) ウシ (1・2)、ウマ (3~5)



第15層 (6)、第10層 (7)、465溝 (8)、第12層 (9・10)、940土坑 (11) ウマ (6~8)、ウシ (9~11)

報告書抄録

ふりがな	たまくしいせき3						
書名	玉櫛遺跡Ⅲ						
副書名	大阪府菅茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第184集						
編著者名	信田真美世・赤松佳奈／宮崎泰史ほか						
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 電話072-299-8791						
発行年月日	2008年12月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
たまくしいせき 玉櫛遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 たまくしにちょうめ 玉櫛2丁目	27211	103	北緯 34° 48' 8" 東経 135° 34' 26"	2006.4.14 ～ 2007.2.28	929	大阪府菅茨木玉櫛 住宅（建て替え） 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
玉櫛遺跡		弥生時代	溝・土坑	弥生土器			
	集落	古墳時代～古代	掘立柱建物・ピット列・ 溝・ピット・土坑	土師器・須恵器・ 製塩土器・木製品 ・馬骨	木製鞍（前輪）、馬骨が土坑 から出土		
	田畑	10世紀後葉	畦畔		条里型水田		
	集落	11世紀後葉・12 世紀前葉～15世 紀前葉	掘立柱建物・井戸・溝・ ピット・土坑	土師器・瓦器・瓦 質土器・須恵器・ 山茶碗・常滑焼・ 瀬戸焼・備前焼・ 白磁・青磁・青白 磁・輸入陶器・瓦 ・漆器・木製品・ 石製品・金属製品 ・銭貨・炉壁片・ 鞆羽口	常滑焼三筋壺が柱穴から出 土 大規模溝群を検出、高麗象 嵌青磁片、輸入陶器片、漆 器碗・皿、呪符木簡（蘇民 将来）、短刀等が出土		
田畑	中世末以降	畦畔・溝・土坑・井戸	陶磁器・金属製品				
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・ 弥生時代～古代の遺構面で、弥生時代前期から古代の遺構を検出した。木製鞍（前輪）、馬骨が、土坑（940土坑）から出土したことが特筆される。共伴する須恵器杯等から6世紀中葉のものと思われる。 ・ 10世紀後葉の条里型水田面を検出した。 ・ 11世紀後葉・12世紀前葉～13世紀前葉の遺構面で、掘立柱建物、溝等を検出した。 ・ 13世紀中葉～15世紀前葉の遺構面で、大規模溝群、掘立柱建物、井戸、溝等を検出した。大規模溝群は、東西方向2条、南北方向1条が14世紀前葉、南北方向1条が15世紀前葉のものである。特に、14世紀前葉の南北方向溝（450溝）から、多種多様な遺物が出土した。 						

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第184集

玉 櫛 遺 跡 Ⅲ

大阪府営茨木玉櫛住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2008年12月26日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／三星商事印刷株式会社
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300